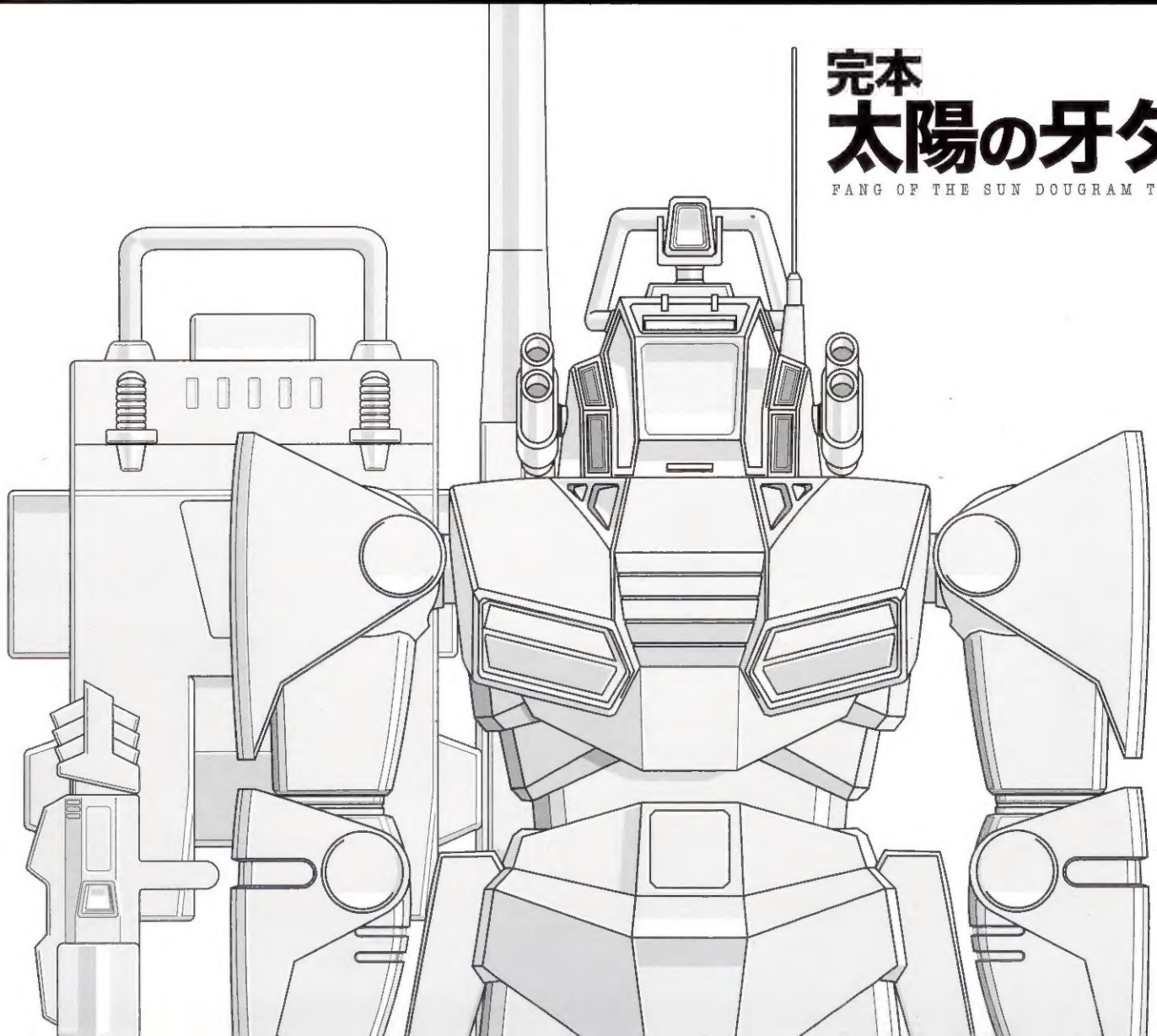
完本
太陽の牙ダグラム

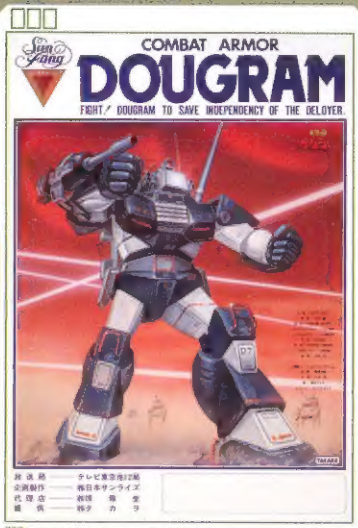
FANG OF THE SUN DOUGRAM THE COMPREHENSIVE

©サンライズ



Art Collection of DOUGRAM

ようこそ『ダグラム』の作品世界へ。まずは放映・公開当時のボックスアートやポスター用に描かれたイラストレーションなどを誌面の許す限り紹介し、その導入への手助けとしたい。



▶番組宣伝ポスター(タカラ)

▶番組宣伝ポスター／原画:大河原邦男

▶キングレコード　サウンドトラック「ドキュメントダグラム」ジャケット／原画:大河原邦男

▶「ドキュメントダグラム」宣伝ポスター／原画:大河原邦男

▶「ドキュメントダグラム」ポスター画／原画:塩山紀生

▶講談社　ストーリーブック第1巻表紙／原画:大河原邦男

▶講談社　ポケット百科表紙／原画:大河原邦男

▶講談社　ストーリーブック第2巻表紙／原画:大河原邦男

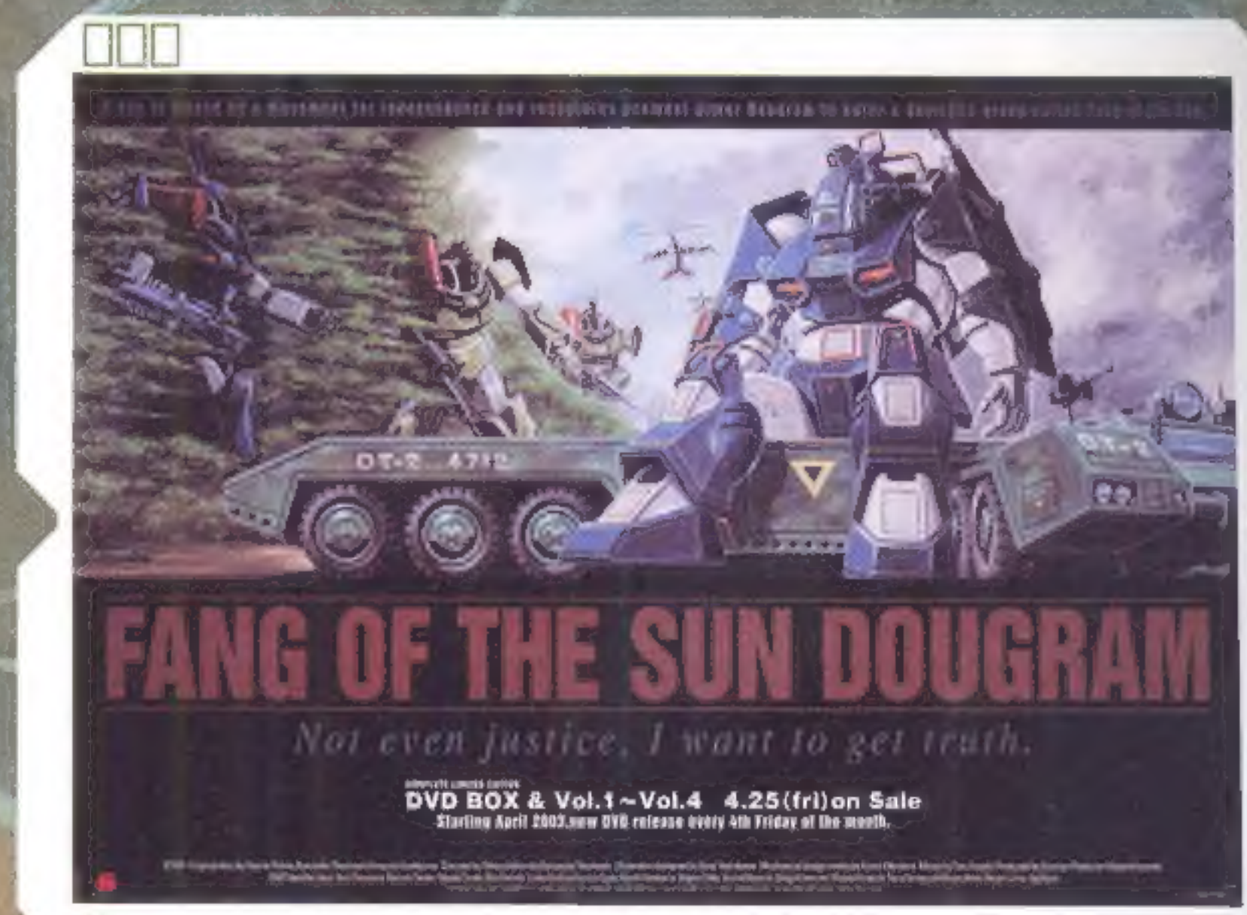
▶みのり書房　月刊OUT1981年12月号表紙／原画:大河原邦男

▶講談社　ストーリーブック第3巻表紙／原画:大河原邦男

▶キングレコード　BGM集レコードジャケット／原画：中村光毅

▶タカラ　ポスター／原画：塩山紀生・中村光毅

▶キングレコード　LP用プレゼントポスター／原画：大河原邦男



▶DVD-BOX宣伝ポスター／原画：大河原邦男

▶LDボックス　PART3ジャケット／原画：塩山紀生

▶タキコーポレーション　LD-BOX販売告知ポスター／原画：大河原邦男

▶商品用画稿／原画：大河原邦男

▶原画：大河原邦男

▶商品用画稿／原画：大河原邦男

▶商品用画稿／原画：大河原邦男

▶タカラ　プラモデル販促ポスター

▶童友社　プラモデル告知ポスター

▶商品用画稿／原画：渡辺正美

▶商品用画稿／原画：渡辺正美

▶商品用画稿／原画：渡辺正美

▶商品用画稿／原画：渡辺秀人

▶商品用画稿／原画：渡辺秀人

▶商品用画稿／原画：大村光正

▶商品用画稿／原画：大村光正

▶商品用画稿／原画：大村光正

▶商品用画稿／原画：大村光正

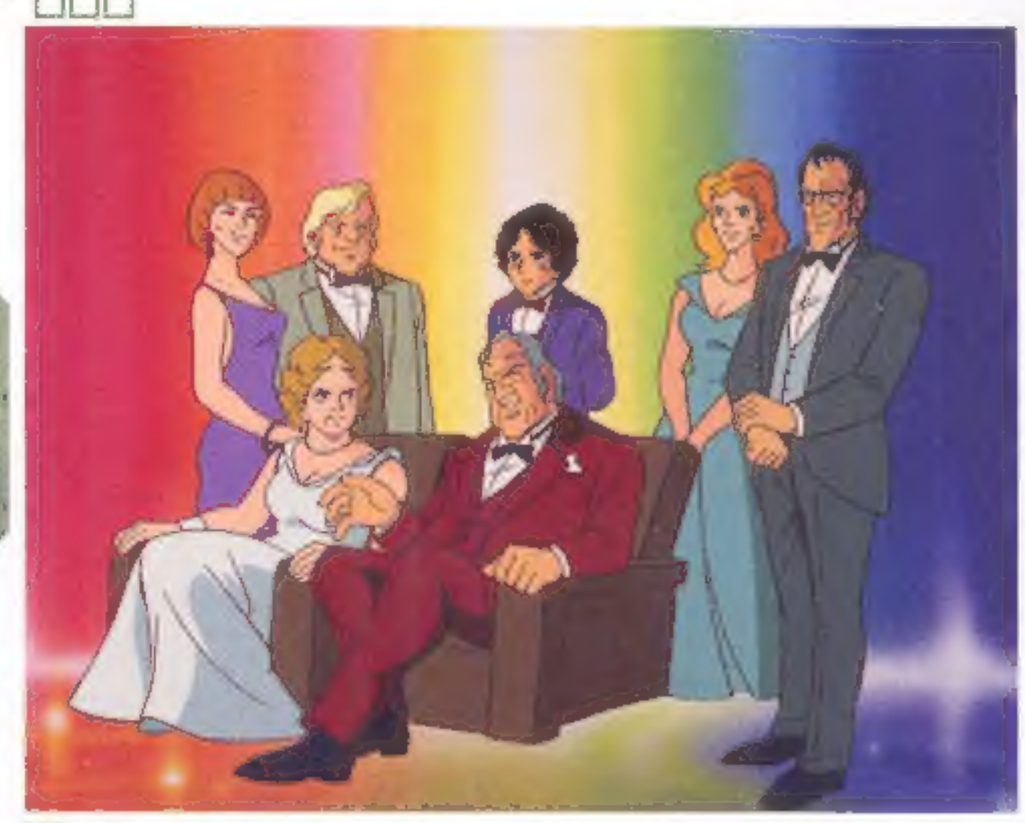
▶商品用画稿／原画：大村光正

▶キービジュアル

▶マーチャンバンフ掲載画

▶キービジュアル

▶キービジュアル



▶キービジュアル

Color Chart Collection ComBat Armor

CB（コンバット）アーマーは『ダグラム』世界での主力兵器である。ここでは本編画像及び現存する色指定画を完全収録し、彼らの活躍を紹介していく。

ダグラム

サマリン派ゲリラが完成させたXネブラ対応型CBアーマー。物語の初期においてはこの機体を巡る争奪戦が展開され、太陽の牙が手にした後はその活躍と共にデロイア解放運動のシンボル的存在になっていく。クリン・カシムがパイロットを務める。

ダグラム　前

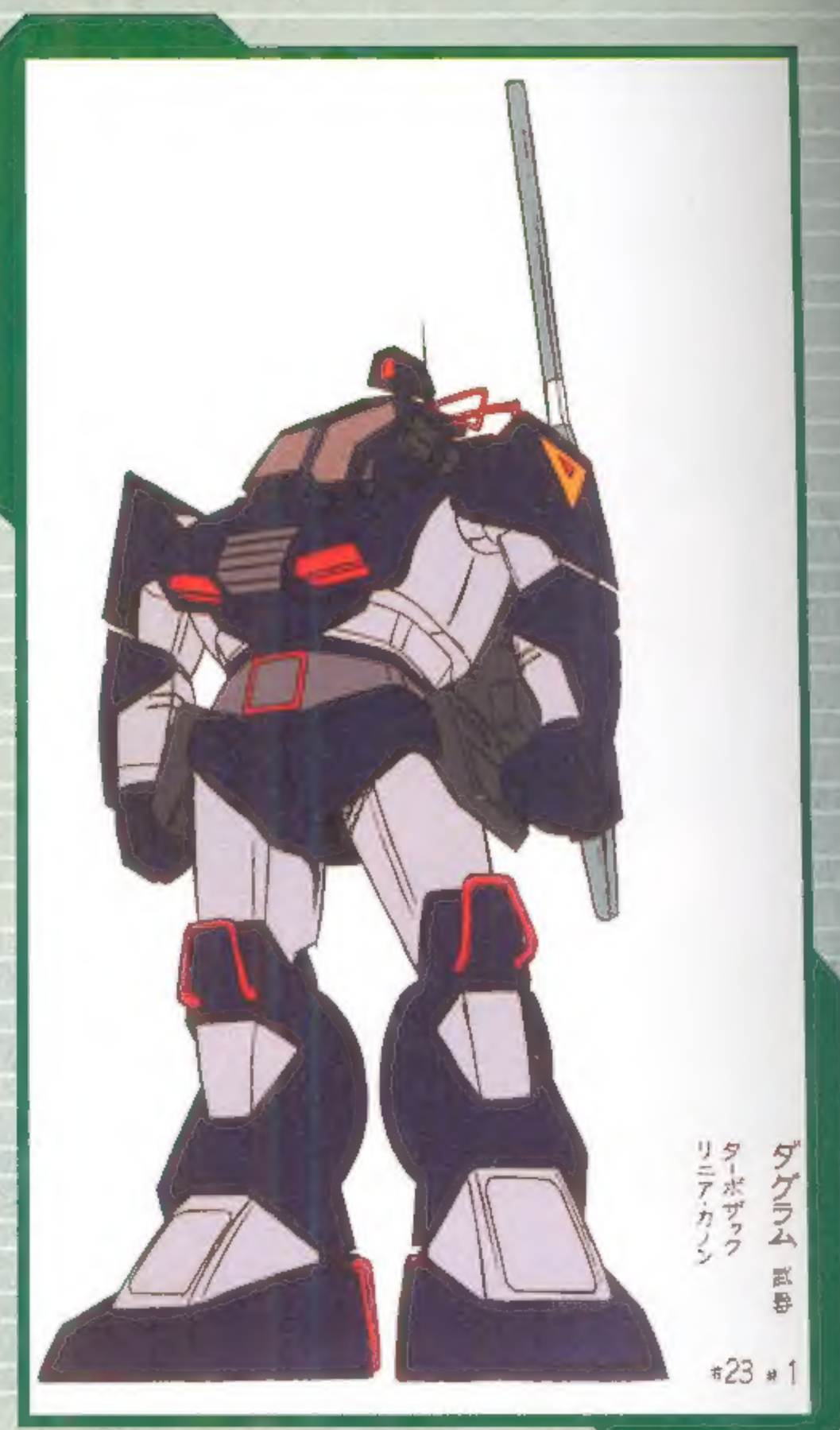
アームリニアガン

多目的発射筒

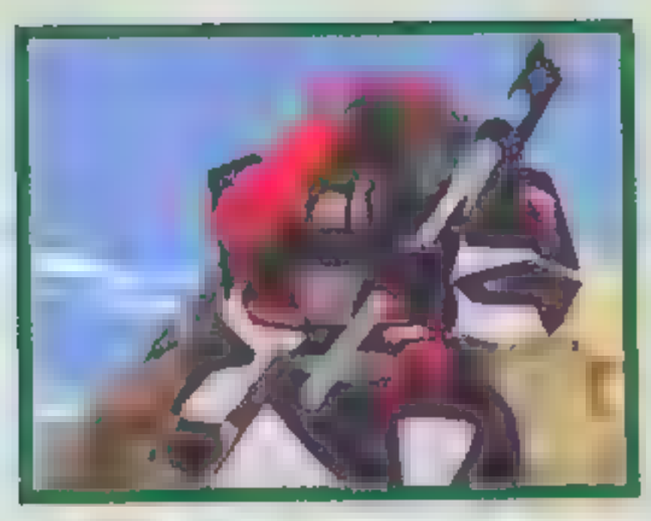
頭部コクピット

背部ハードポイント

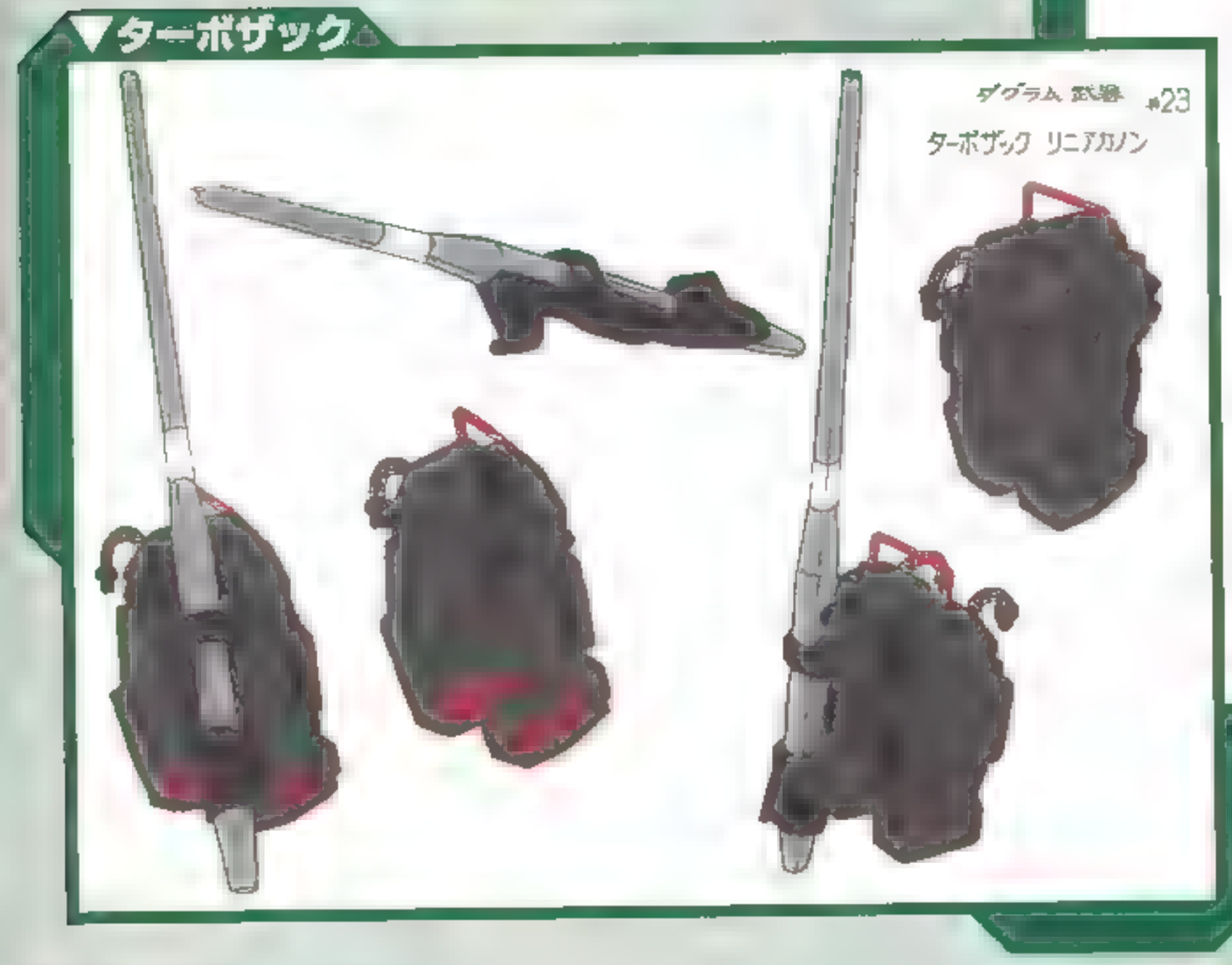
ダグラム(ターボザック装備)



ゲリラ「デロイアの星」が開発したダグラムの追加装備がターボザックだ。デロイア独立派ゲリラ組織「太陽の牙」の新たなる力である。連邦軍に比べ補給・運搬能力に劣るゲリラたちにとって、ダグラムの運用は悩みの種ともなっていただけに稼働時間を延長させるターボザックの完成は願ってもないことだった。

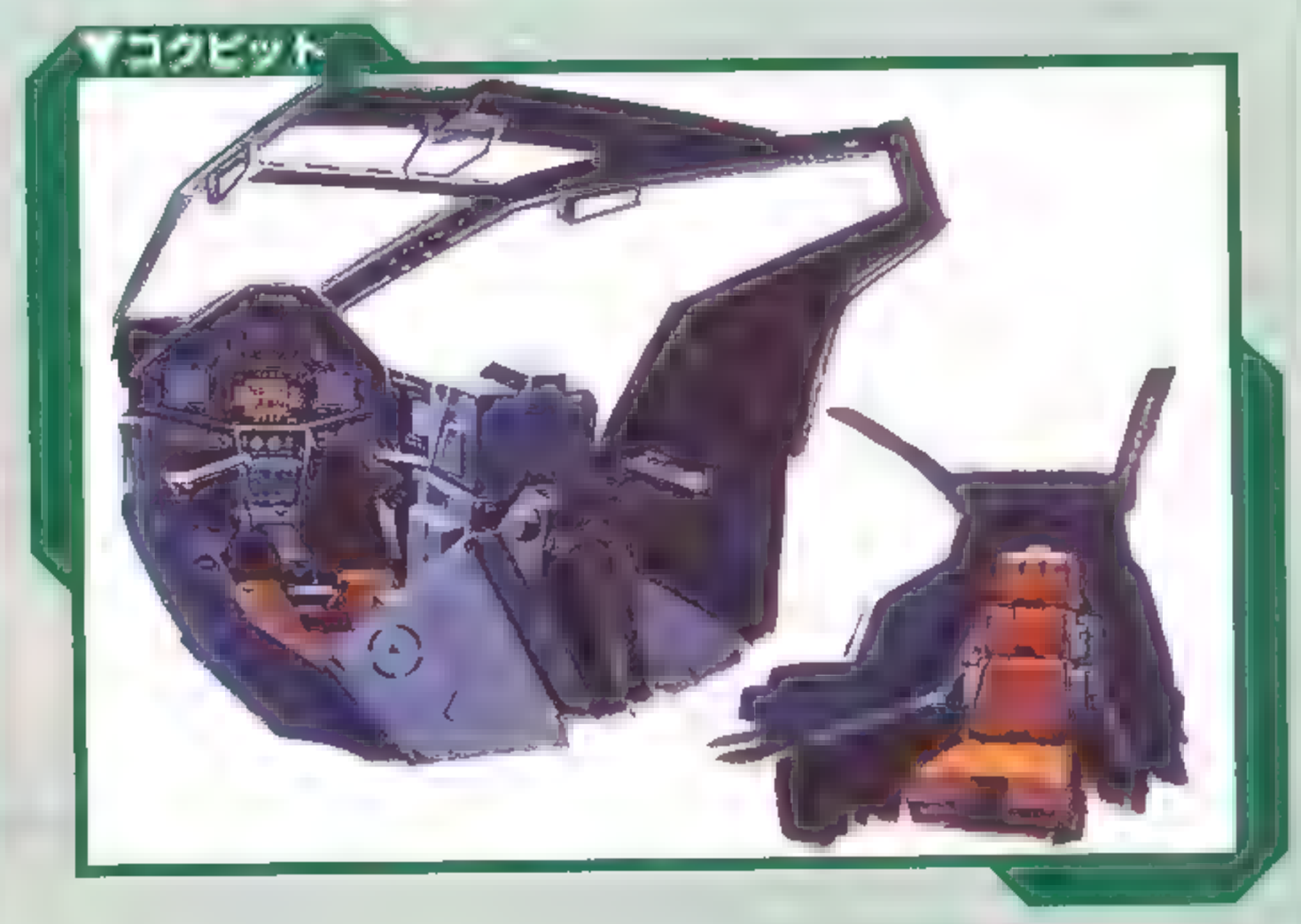


▼ターボザック



▼リニアガン

▼コクピット



クリンたち「太陽の牙」にとって、ダグラムは人々のいう「革命運動の象徴」などではなく、自分たちが共に駆け抜けてきた記憶そのものであった。武装解除にもとづいてダグラムの引き渡しを求める治安軍に対し、クリンは己の手でダグラムを爆破し、自ら別れを告げた。

アイアンフットF4Xヘイスティ

▶コクピット

第51話より登場。劇中では製造した会社名である『アイアンフット』の名で呼ばれた。連邦軍に順次配備予定されていたCBアーマーであったが、ウルナ基地反乱事件によって解放軍の主力部隊を構成する機体になる。スタンレー高原、カルナック山脈において連邦軍との激戦を繰り広げた。

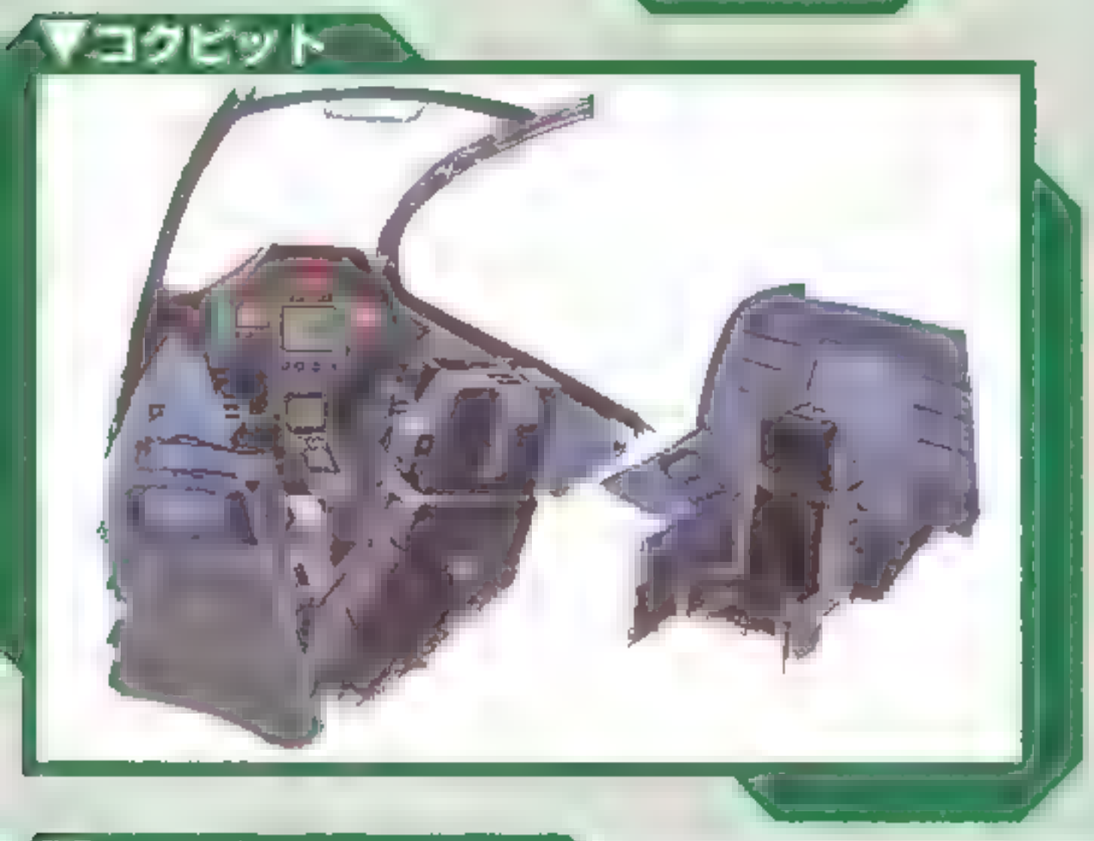
ソルティックHT128ビッグフット

第65話より登場した寒冷地用CBアーマー。解放軍を迎え撃つ第8軍がカルナック山脈で多数投入している。劇中では保温スーツを装備した状態で登場したものが多い。外観上、特徴でもある複座型の巨大な頭部は、Eガンなどによる射撃の的になりやすかった。

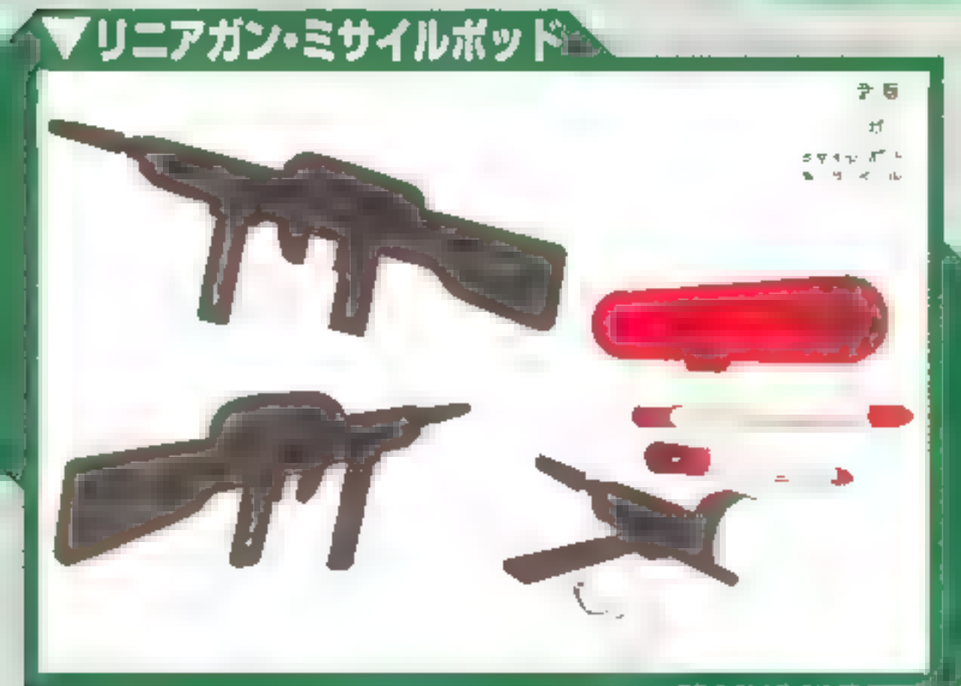
ソルティックH8ラウンドフェイサー

機体名は「ラウンドフェイサー」であるが、劇中では開発した企業名である「ソルティック」と呼ばれる。Xネブラ非対応のため、次々と投入される新型CBアーマーによってその出番は徐々に奪われていくものの、物語の最後まで全編にわたって登場した機体である。

▼コクピット



▼リニアガン・ミサイルポッド



ソルティックH8RFコーチマSpl

第54話より登場。ドカに向かう解放軍の前に現れた24部隊の操る機体である。劇中では4機が登場し、息の合ったコンビネーション戦法によってクリンたちを何度も危機に陥れる。スタンレー湖での決戦において全機撃破されるが、解放軍にも大きな損害を与えた。

ソルティックH8ラウンドフェイサー軽量型

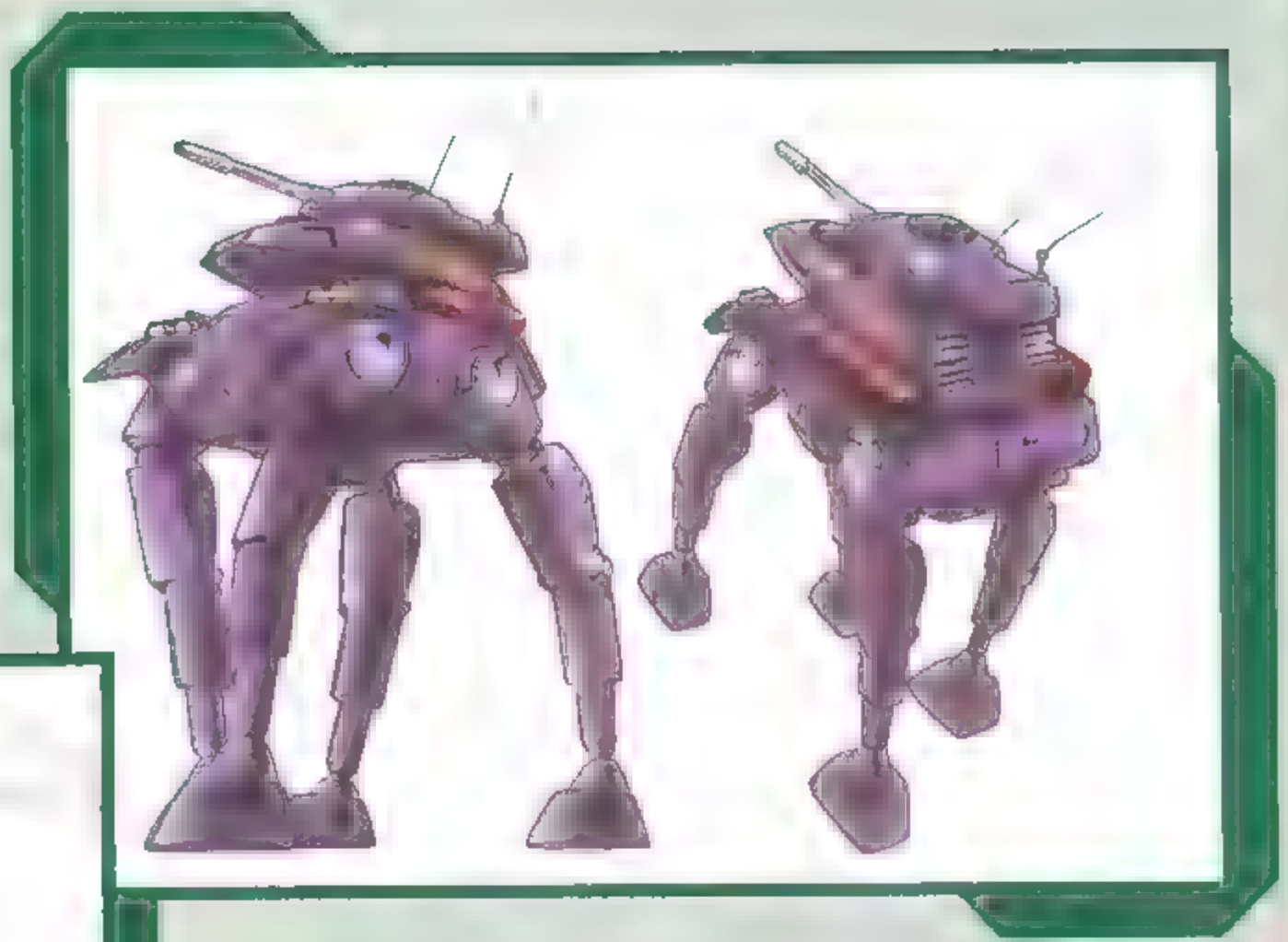
第21話に登場。ツルツェフの発案により、[illegible]としての機能を排除し徹底した軽量化を行った機体である。スピードとフォーメーションを駆使した一撃離脱戦法でダグラムに襲いかかるが、[illegible]の弱点を突かれビッグEガンによる射撃を受け、敗退した。

ソルティックH102ブッシュマン

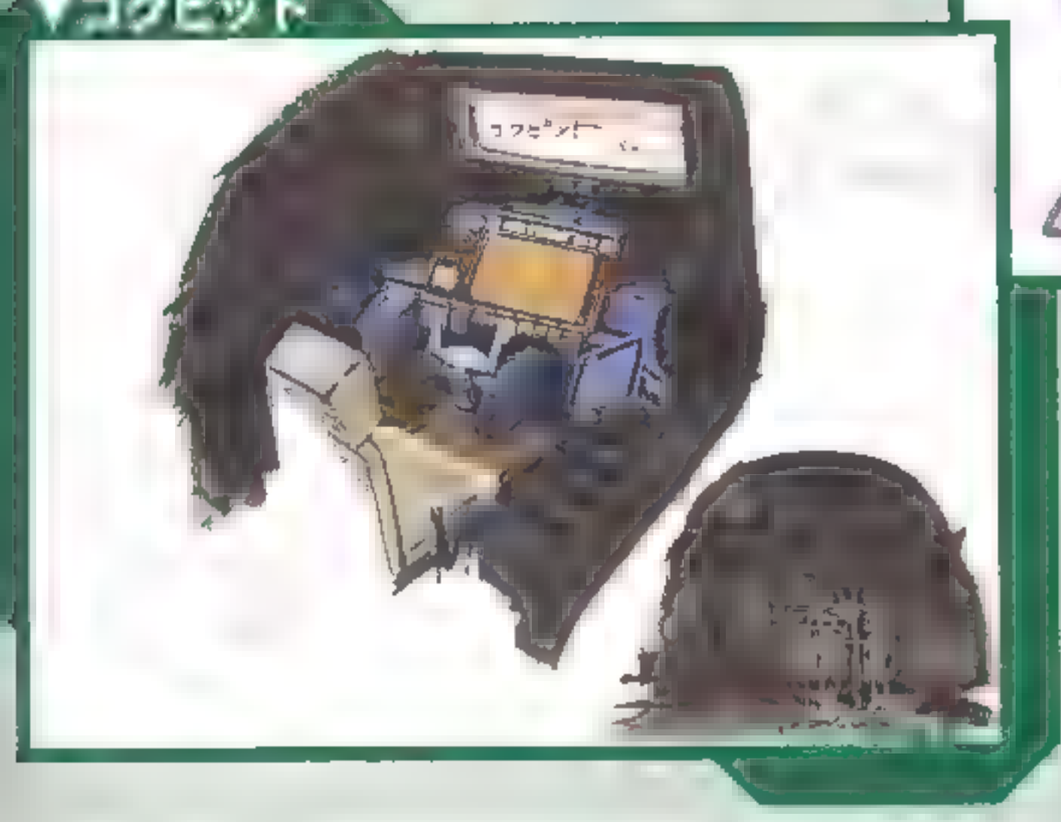
▼マクランチャー

第27話より登場。この機体もラウンドフェイサー同様「ソルティック」と呼称される。山岳地帯でのダグラムとの結戦では、ターボザックによる重量増加を見越した作戦を展開した。その後ザルツェフの部隊などでよく使用されたが、バルミナ以降はほぼ登場しない。

アビテートF44Aクラブガンナー

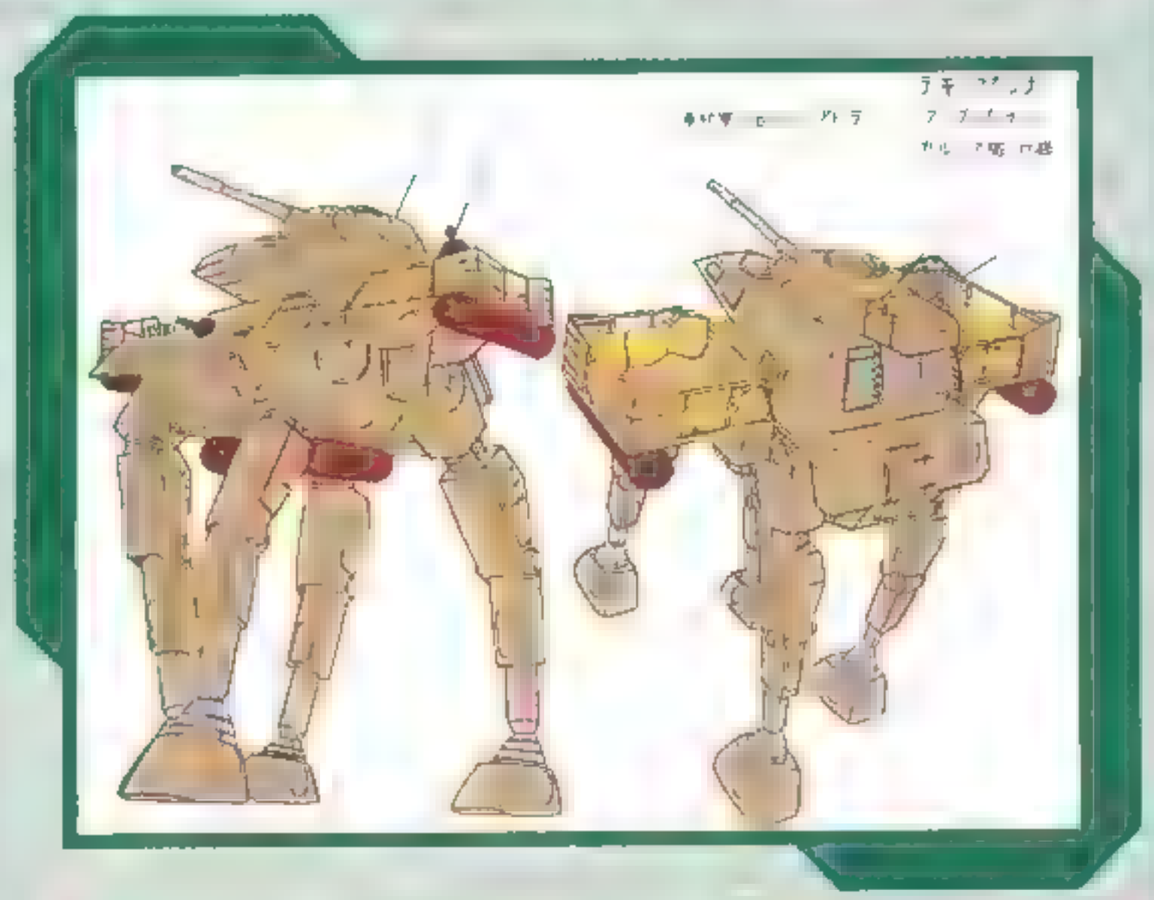


▼コクピット



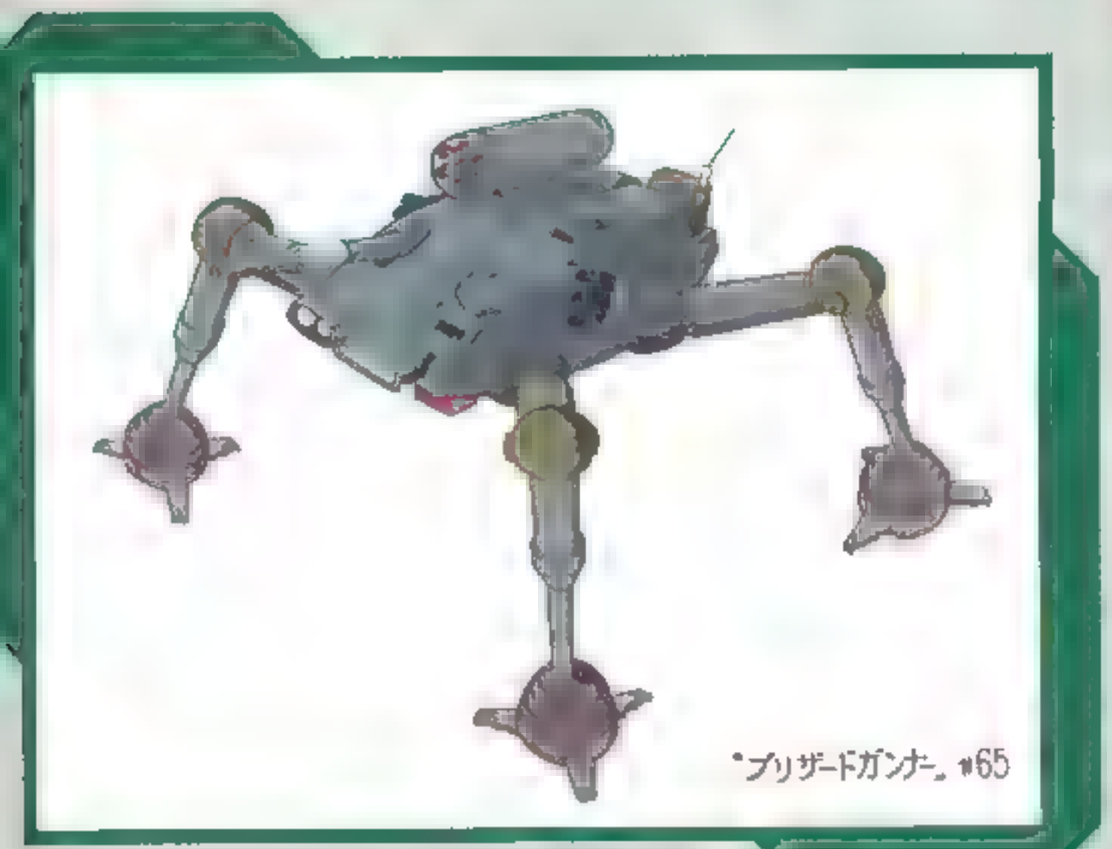
物語の開始時においてすでに旧式となっていた機体であるが、ラウンドフェイサーほどではないものの全編を通して登場している。主に連邦軍が使用したほか、一部は解放軍の戦力ともなっていた。キャナリーの兄ディオルが非業の死を遂げた機体として印象深い。

アビテートF44Bテキーラガンナー



第10話より登場。クラブガンナーのカスタマイズ機で、ポナールへ向かうクリンたちを追撃するガルシア隊が使用した。5機が配備され、戦闘時は主に2機単位で行動する。増加されたミサイルポッドからの連続攻撃がゲリラたちに恐怖を与えた。

アビテートF35Cブリザードガンナー

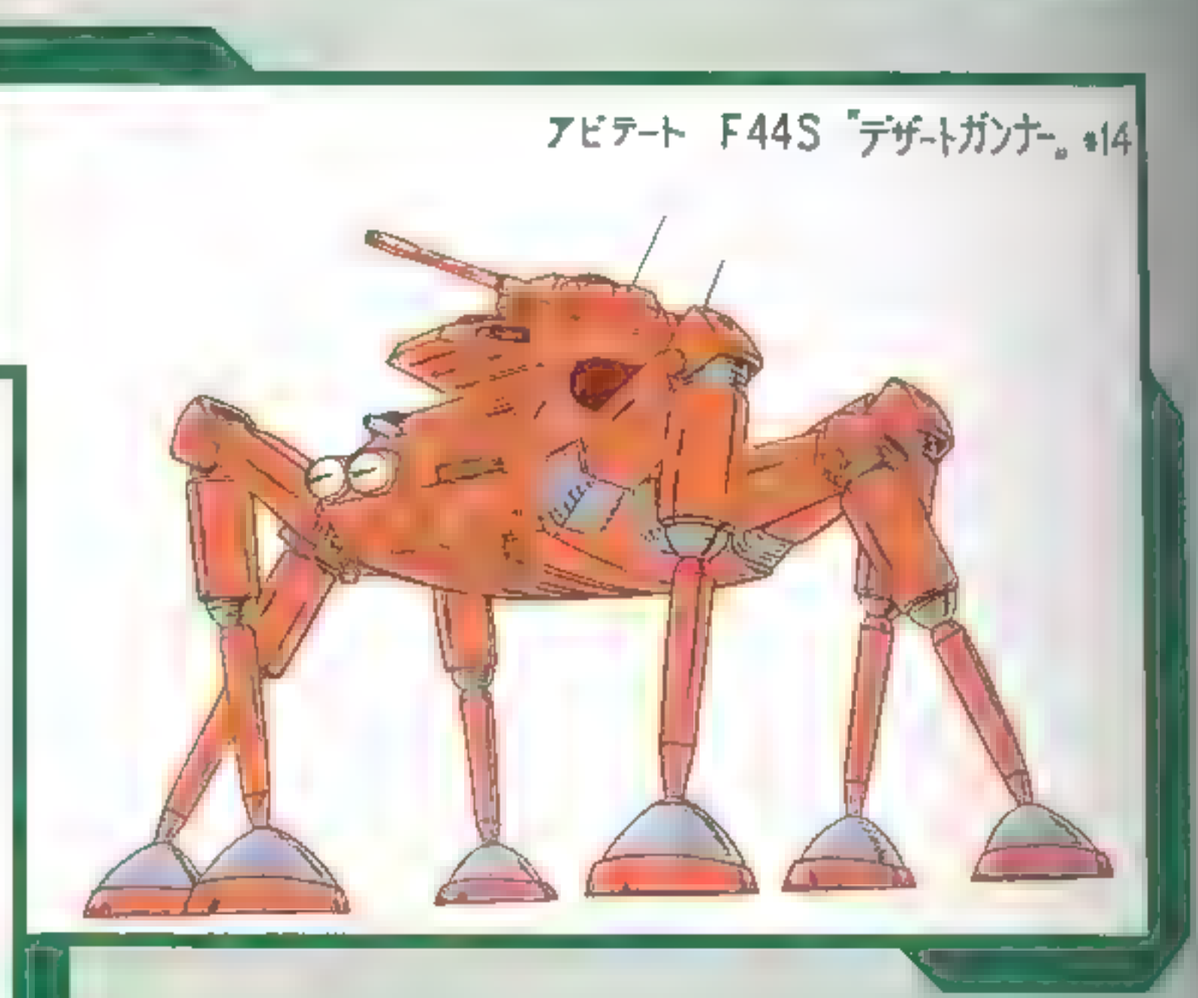


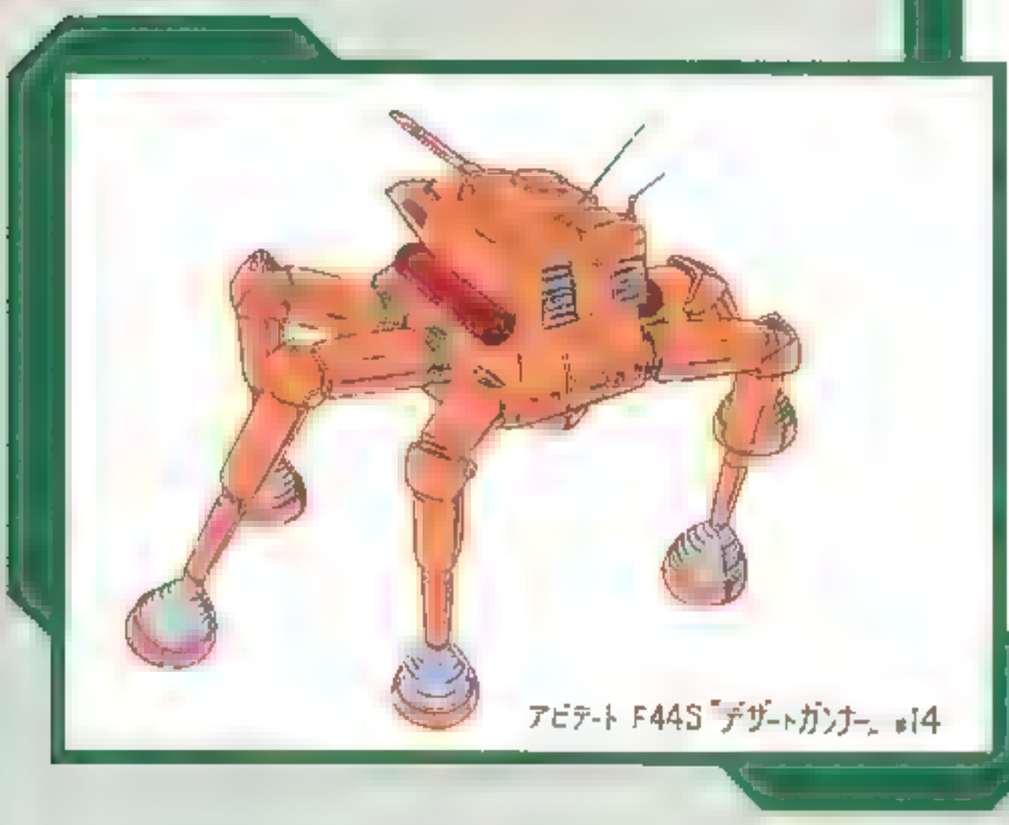
"ブリザードガンナー" #65

第65話に登場（終戦は第67話）。第8軍のカルナック山脈防衛線に配備されていた機体だが、実際に登場したのは本隊壊滅後の残存勢力としてのものであった。主力を打ち破り油断した解放軍の前に現れ、素早い動きで林の中に身を隠しながらダグラムを翻弄した。

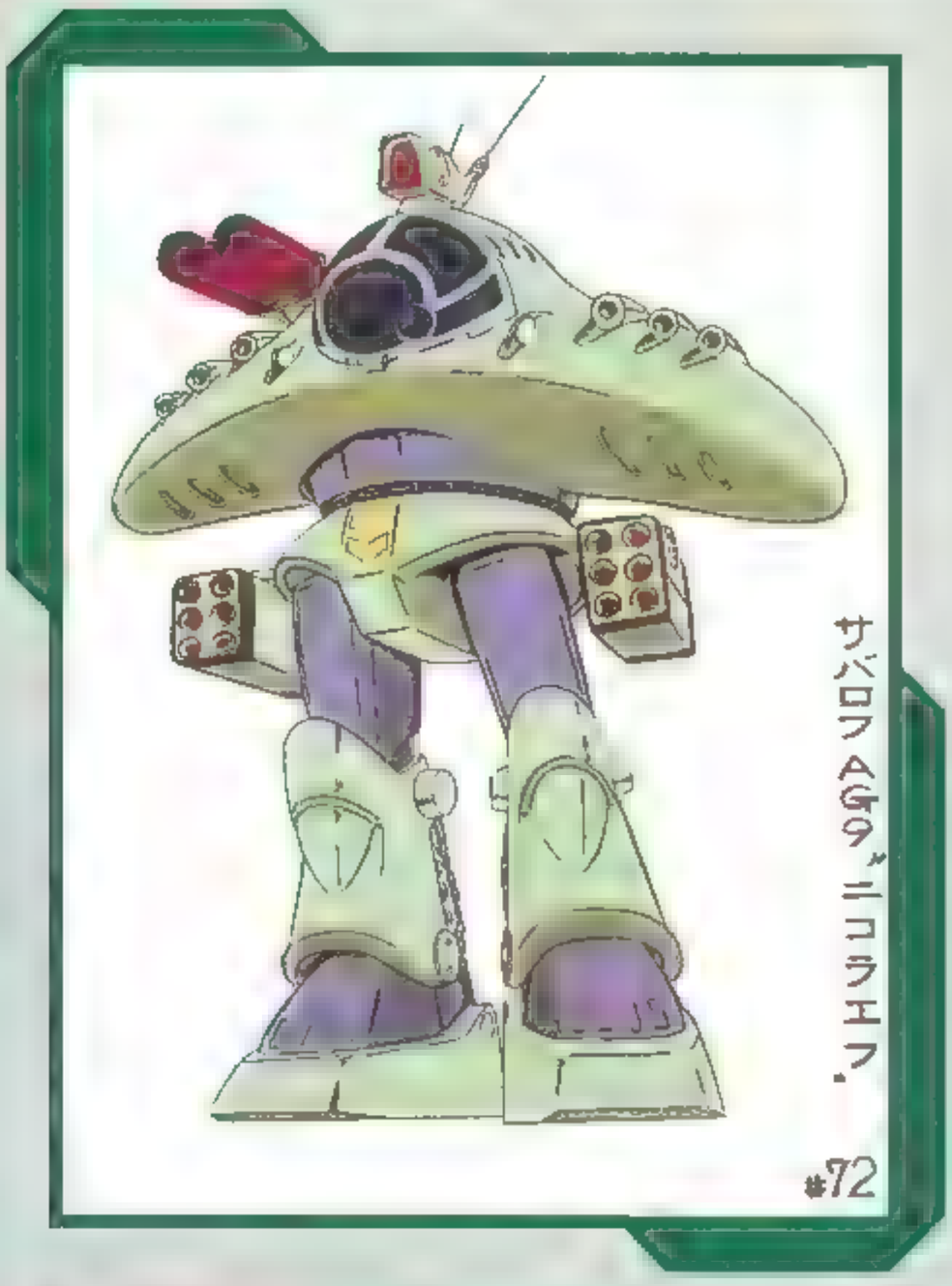
アビテートF44Sデザートガンナー

第14話より登場。ガルシア隊が使用した砂漠地帯用CBアーマーである。砂に足をとられ動きの取れないダグラムを翻弄し圧倒的優位に立つものの、チコのビッグEガンによってコクピット直下からの射撃を受け敗退する。





サバロフAG9ニコラエフ



第72話に登場。サマリンが軟禁された地である政府要人の別荘周辺に配備されていた。J・ロック曰く「装甲は弱いが大きな機動性を持っている」。外見もさることながら、その戦い方も「連続で跳躍しながらミサイル弾発射を行う」という非常にトリッキーなものだった。

ソルティックH404Sマッケレル

第58話に登場。ドカ市奪回のため連邦軍が斥候隊として送り込ませた水陸両用CBアーマーである。3機編成で海中から上陸し、海岸部の防衛に当たる太陽の牙たちを襲った。ダグラムを海中に引きずり込むことに成功するものの、うち2機は海中での戦いに敗れる結果となった。

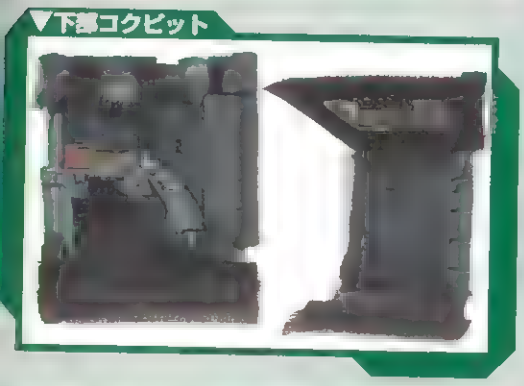
アビテートT10Bブロックヘッド

アビテート T10B "ブロックヘッド"

アビテート T10B "ブロックヘッド"

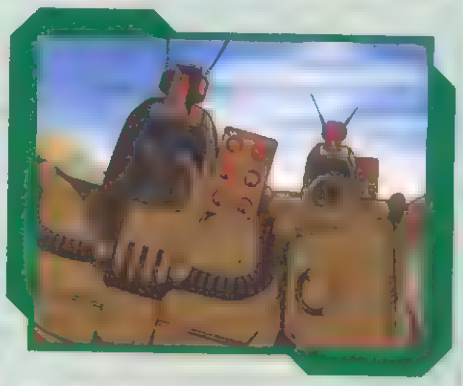
第23話より登場。ラクシャスシリーズに替わる新作機の主力CBアーマーとして投入された。後に改良型のT10Cが完成し、以降は登場の機会は減っていくのだが完全に降板したわけではなく、物語終盤の舞台ともなった北極ゲート基地などにもこの機体は配備されている。

▼下部コクピット

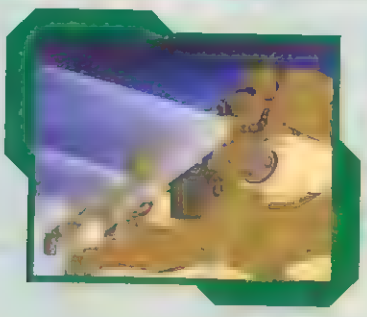


▼上部コクピット

アビテートT10Cブロックヘッド Xネブラ対応型



第38話より登場。外見的にはカラーリング以外T10Bとの差異が見られないが、性能はT10Bより僅かに向上している。アンディ島山での戦闘ではダグラムの左腕を斬き飛ばし、その強さを印象付けた。後継車やデロイア軍安東に配備され、多くの戦闘で活躍した機体である。



FANG OF THE SUN DOUGRAM

Not even justice, I want to get truth.

CONTENTS

◆Art Collection of DOUGRAM …… 001
◆Color Chart Collection　ComBat Armor …… 008

メカ編 …… 019

ダグラム …… 020
ラウンドフェイサー …… 026
クラブガンナー …… 029
テキーラガンナー …… 029
デザートガンナー …… 030
ブロックヘッド …… 031
ブッシュマン …… 032
マッケレル …… 033
ヘイスティ …… 034
ビッグフット …… 034
ブリザードガンナー …… 035
ニコラエフ …… 035
ＣＢアーマー運用 …… 036
その他メカニクス …… 038
■研究講座　ＣＢアーマー開発史 …… 072
◆Color Chart Collection　Character …… 081

人物編 …… 089

クリン・カシム …… 090
デロイア７ …… 092
ロッキー・アンドル …… 093
キャナリー・ドネット …… 094
チコ・ビエンテ …… 095
ビリー・ボール …… 095
ナナシ …… 096
フェスタ・ブロンコ …… 096
ジョルジュ・ジュールダン …… 097
ハックル・G・トンプソン …… 097
ドナン・カシム …… 098
ヘルムート・J・ラコック …… 099
フォン・シュタイン …… 099
デイジー・オーセル …… 100
デビッド・サマリン …… 101
レーク・ボイド …… 102
フィナ・カシム …… 103
その他キャラクター …… 104
■研究講座　植民惑星に上がる革命の狼煙～デロイア独立前史～ …… 111
■ダグラム用語集 …… 117
◆デロイアへの道 …… 121
◆Color Chart Collection　Other Mechanics …… 125

物語編 …… 129

■研究講座　解放への苦闘と若者たちの挫折～デロイア独立戦争史～ …… 203

探査編 …… 209

■劇場版『ドキュメント太陽の牙ダグラム』 …… 210
■劇場版『チョロＱダグラム』 …… 212
■インタビュー　ダグラムの時代　高橋良輔 VS 井上幸一 …… 220
■データ　キャスト&スタッフ …… 234
■データ　主題歌・挿入歌・劇中歌 …… 238

メカ編

MECHANICS

全体像 前

前方下方から見たダグラムの立ち姿。スマートさと力強さ、そして安定感が一体となったプロポーションの特徴がよく分かる。味方にとっては強い戦力となる。この視覚イメージも、ダグラムの重要な性能である。

ダグラム DOUGRAM

基本設定

デロイア独立派ゲリラ組織が、極秘裡に完成させたCBアーマー。コンピュータをはじめとする電子機器の性能を限界まで CBアーマーなどの戦闘力を低下させてしまう。デロイア星独特のXネブラから放出される電波の影響下においても、潜在能力を保持することが可能な設計がされている。高い運動性能や強力な装甲と武装で、地球連邦軍の最新CBアーマー、HBラウンドフェイサーを凌駕する戦闘力を発揮した。整備性にも優れ、ゲリラ戦という過酷な環境での運用にも適している。動力発生器（ジェネレーター）を2機搭載し、どちらか1機が破損しても活動可能という生存性の高さも他のCBアーマーにない特徴である。エネルギー消費が多く稼働可能時間が短いのが欠点であったが、後に増設のパワーユニット、ターボザックの実装によって補われ、加えてリニアガンも連続発射が可能となった。加えてさらに強力なリニアカノンも搭載され、飛躍的に戦闘力が高められた。当初は量産の予定もあったが、ボナール市の量産工場が連邦軍の手に落ち、またダム工場陥落時に設計図も焼却されたため、試作機1機のみの実戦に臨まった。

名称	ダグラム（正式番号なし）
乗員	1名
全高	9.63m
空虚重量	30120Kg
作戦空虚重量	23403～29855Kg
作戦全備重量	23983～30436Kg
設計最大重量	30676Kg
ジェネレーター	ヤール M7bg × 2
基本出力	32 ホ[illegible] × 2
最大走行速度	未確認（推定 55Km/h）
最大跳躍加速度	0.98G（推定）
燃料搭載量	NM44 タイプ × 5
標準作戦行動時間	225分（3時間45分）
標準武装	アーム・リニアガン × 1（右腕装着式） 20mm[illegible] × 2（左手内装） 可動式多目的発射筒 × 4（頭部外装）

全体像 真横 足底

人体の比率と比べ、足部の大きさが際立つのは二脚歩行CBアーマーの特徴的なところ。

全体像 後

背部は平面的でシンプルな造形。関節ふくらはぎの曲面もダグラムの外見的特徴だ。

デロイア独立派ゲリラにより秘密裡に開発されたダグラム。

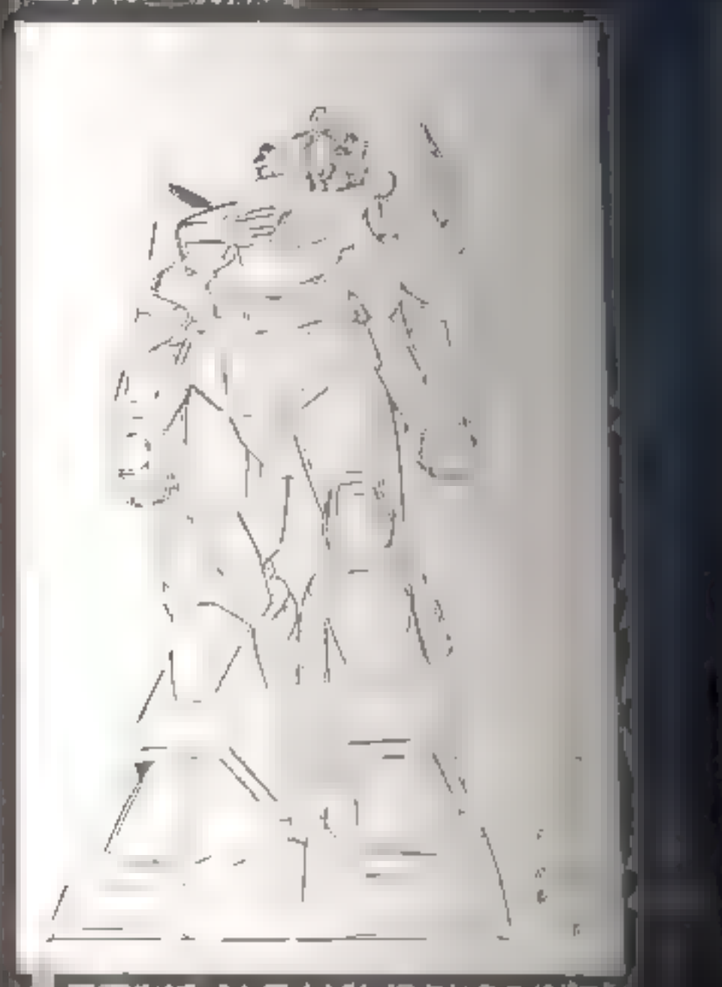
歩行ポーズ　前俯瞰

正面上方より歩行中のダグラムを見下ろす。

全体像　後俯瞰

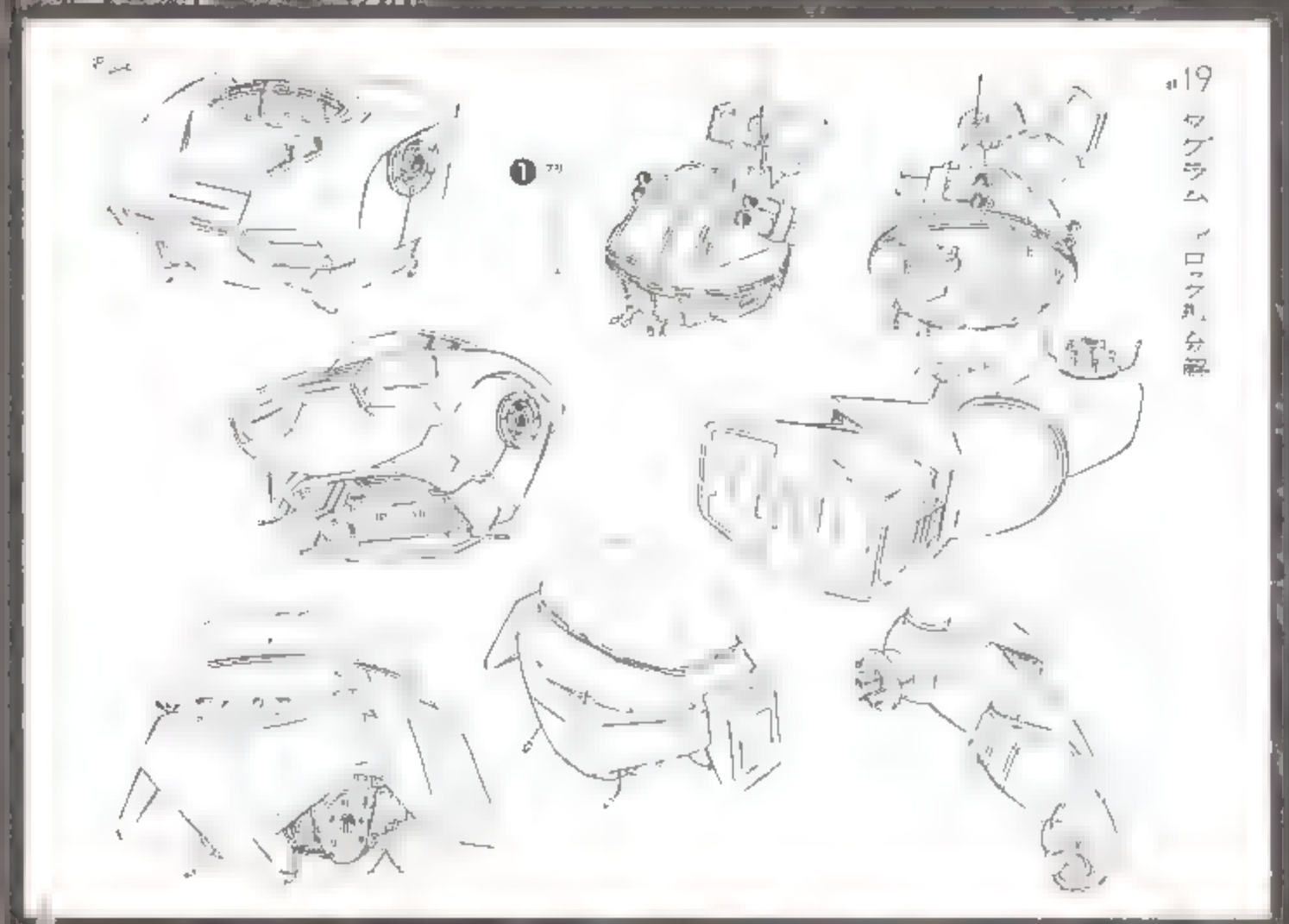
同右　背後上方から見下ろす。

全体像　前仰角



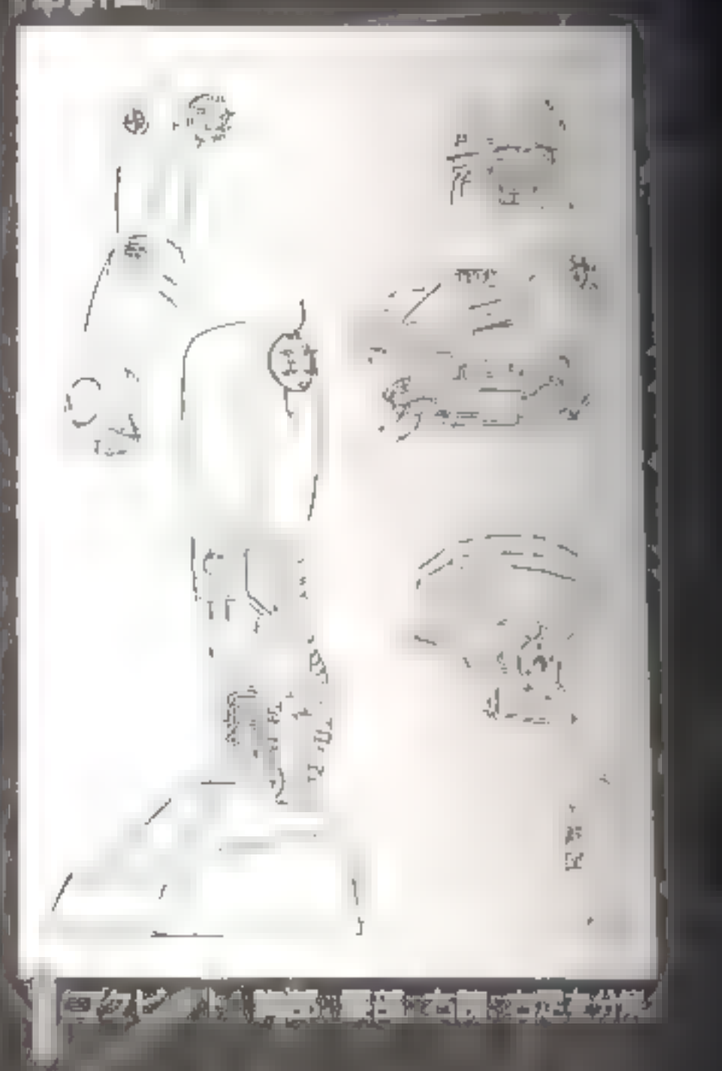
間近で仰見する構図。迫力のあるダグラム。

ブロック別　パーツ分解

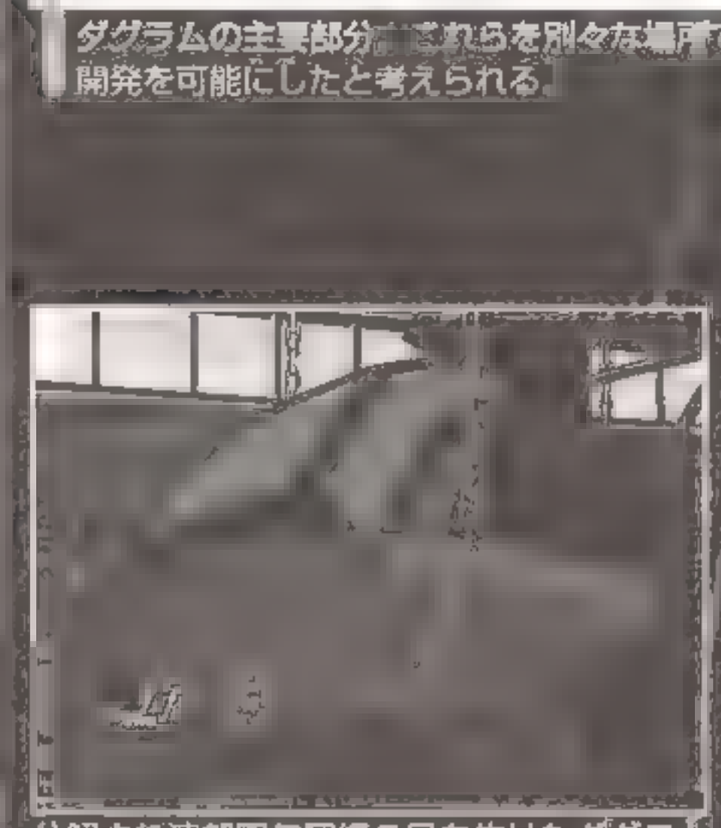


ダグラムの主要部分。これらを別々な場所で製作し、最後に全体を組み立てる方法で、量産開発を可能にしたと考えられる。

分解図



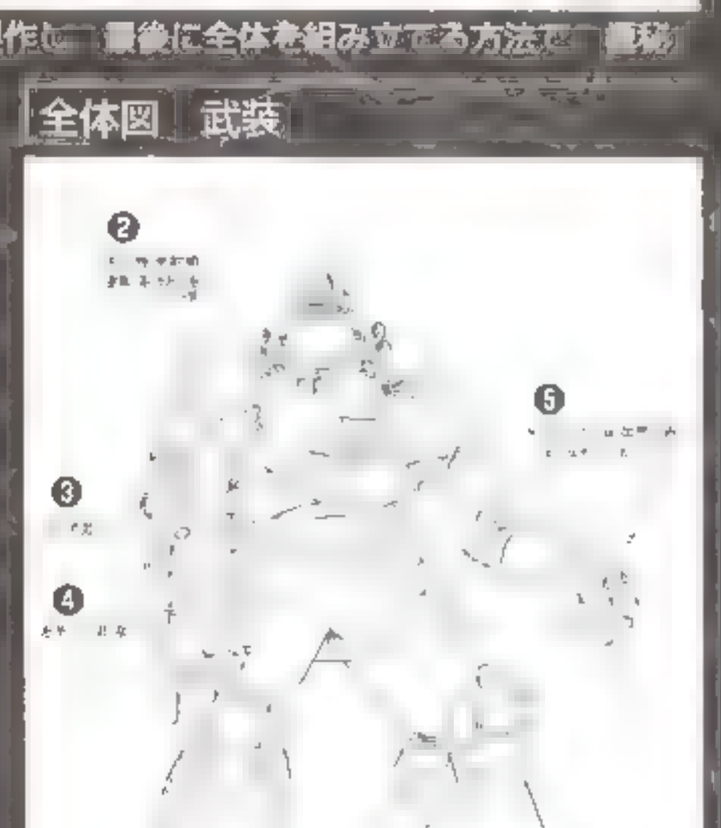
ロケット噴射口を中心とした分解



分解され連邦軍包囲網の目を抜けたダグラムは、クリンたちにより再度組み立てられた。

◀装備解説▶
❶クリン　❷スモーク弾発射筒／2連装1基　左右2基／4筒　❸リニアガン　❹右手マシンガンなし　❺※マシンガンは左手のみ（正しくはチェーンガン）

全体図　武装



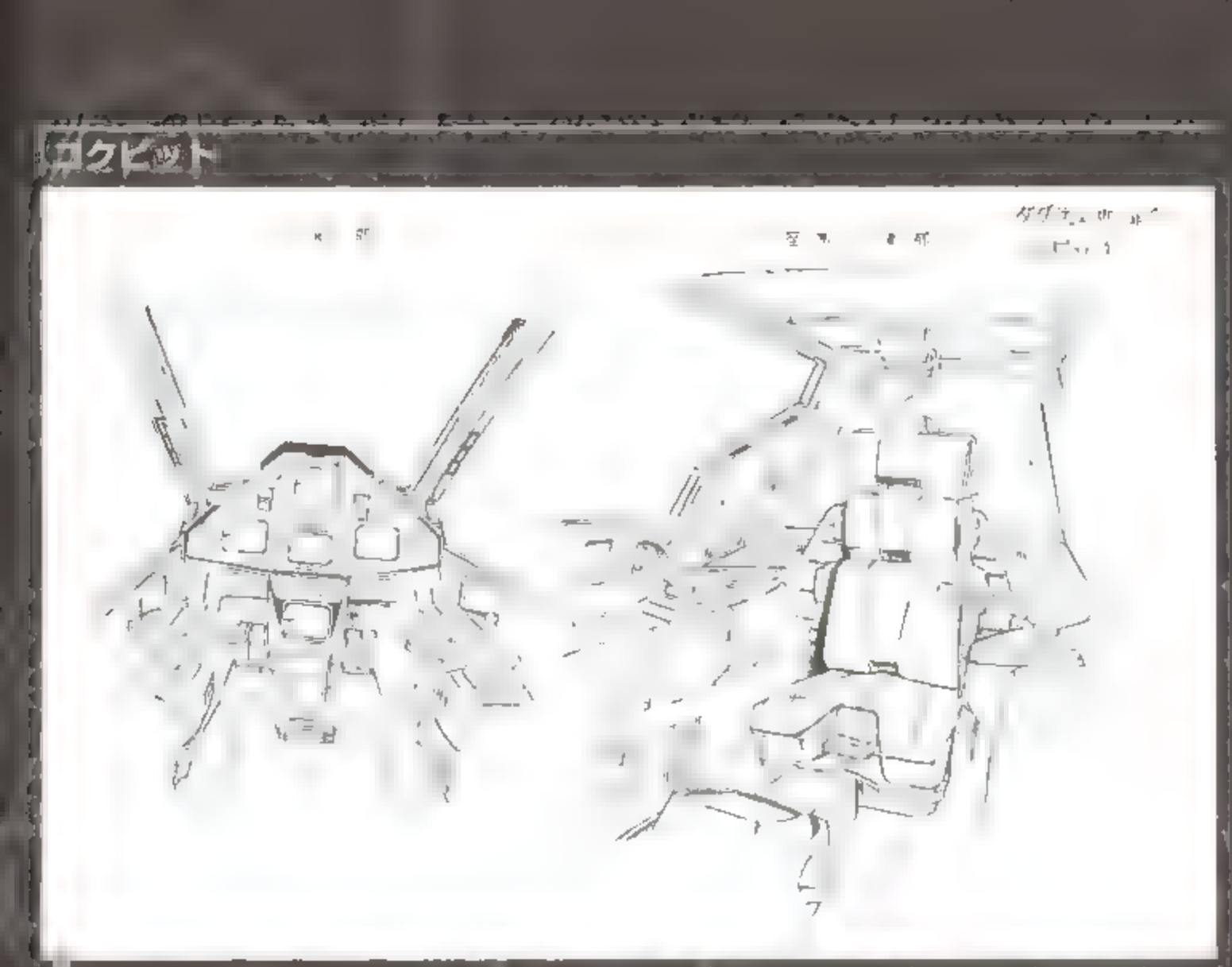
右腕にリニアガンを装着した、初期の基本戦闘装備のダグラム。

歩行ポーズ　前仰角

歩行するダグラムを手前から見る。足裏の形状がよく分かる。

ダグラム DOUGRAM コクピット周辺

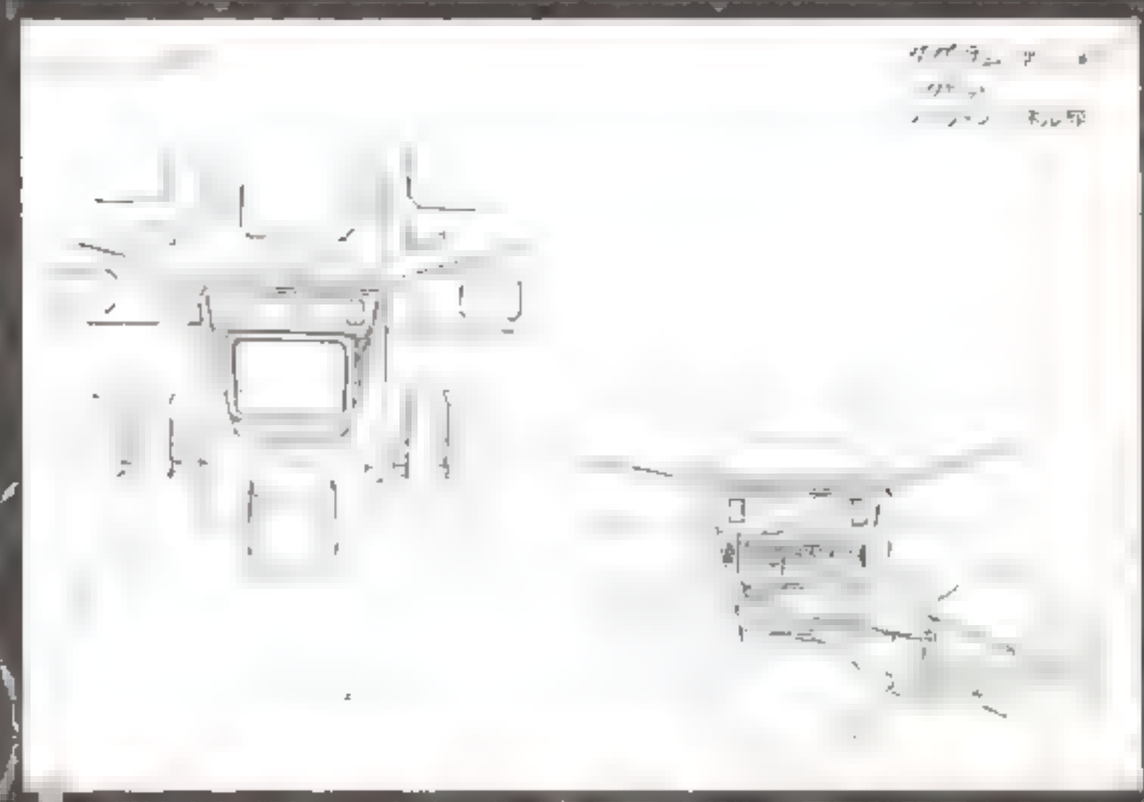
コクピット



コクピット正面およびパイロットシートの配置。機種は異なるが、計器や操縦装置は連邦軍のラウンドフェイサーなどと基本的には共通仕様である。

コクピット・操作パネル

戦闘上兵器女がら、コクピットは戦闘ヘリコプターのような構成でまとめられている。

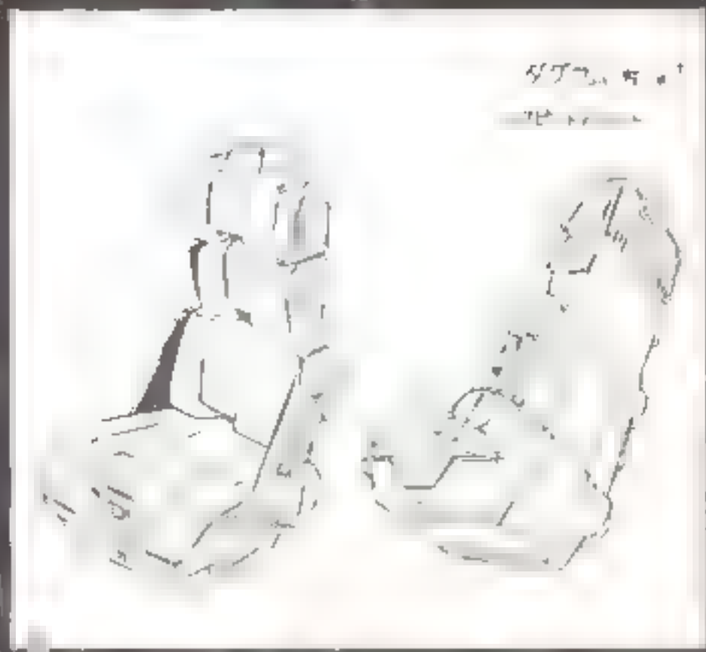


走行速度などをコントロールする足下パネルと周囲確認用のスクリーンパネル。

コクピット外観

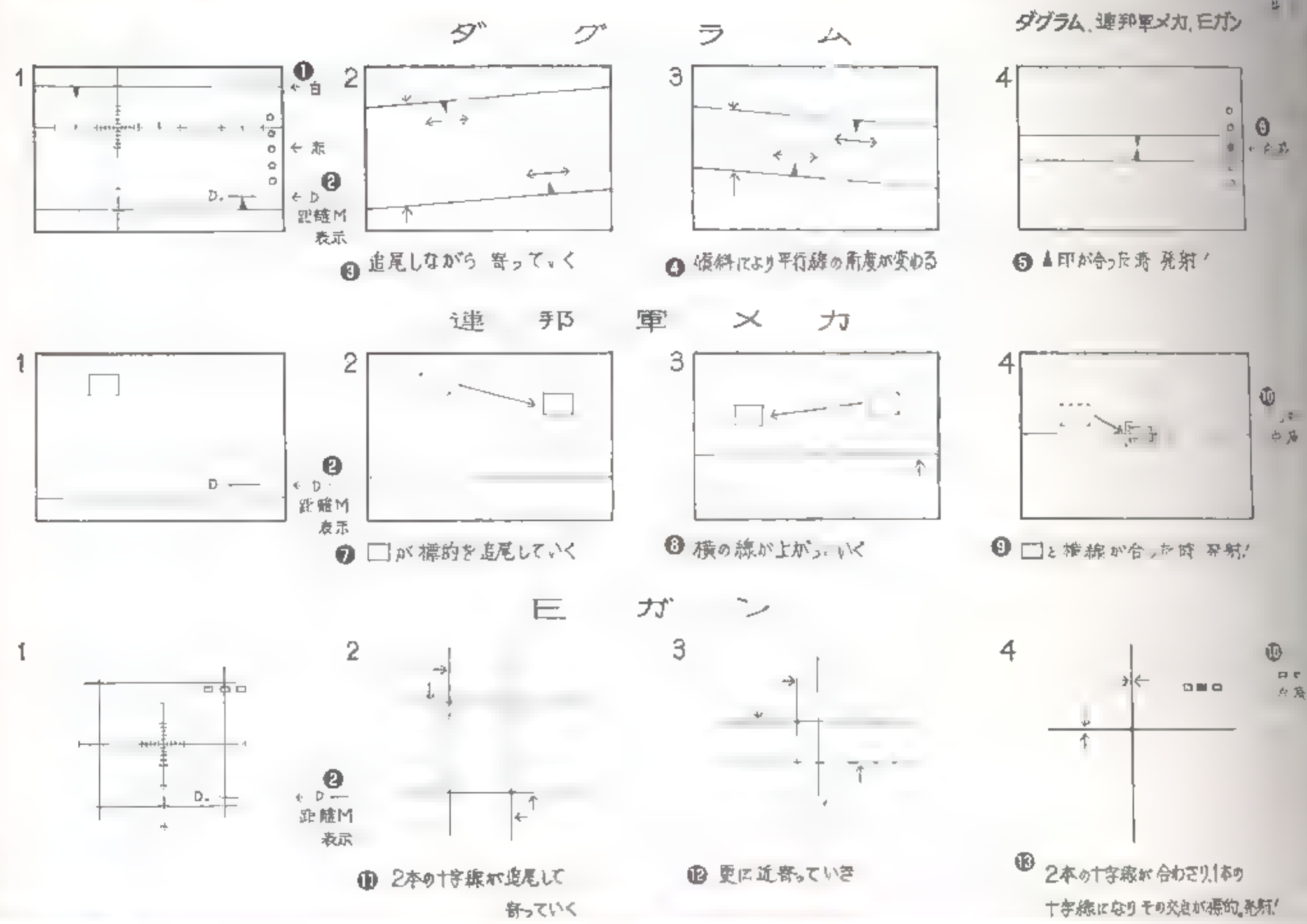
内部構造。戦闘ヘリコプターの手法を小型化した、まるでコクピット機能。前方に風防がスライドする設定は、本編で使用されなかった。

コクピットのシート



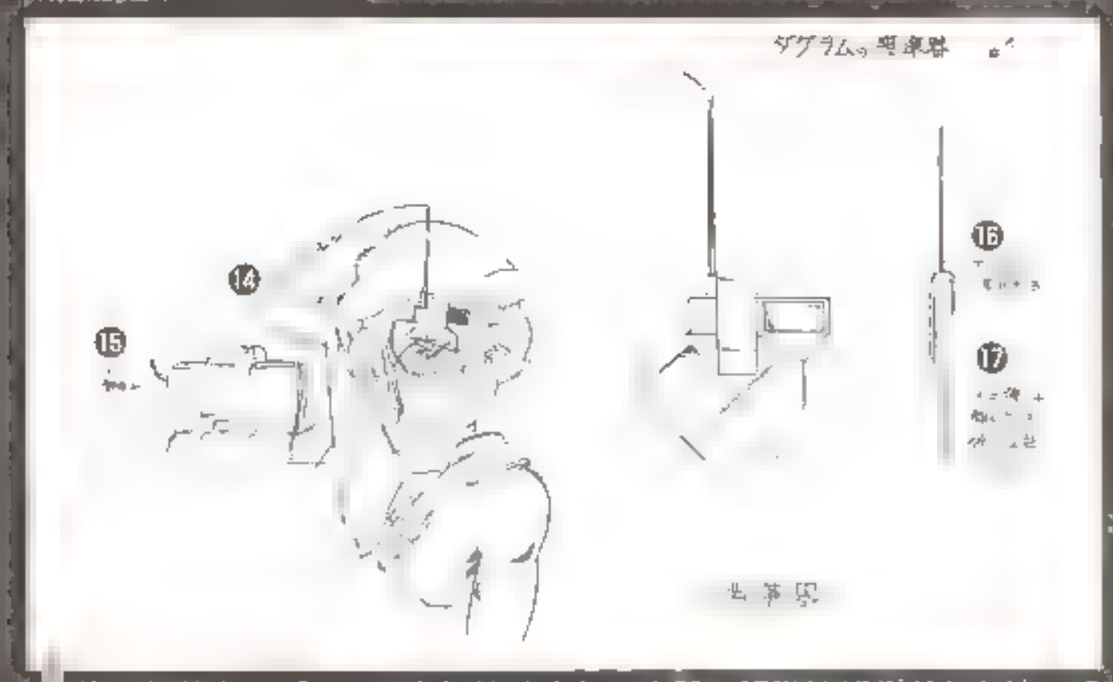
緊急脱出用イジェクション機能付きのパイロットシート。

照準パターン図



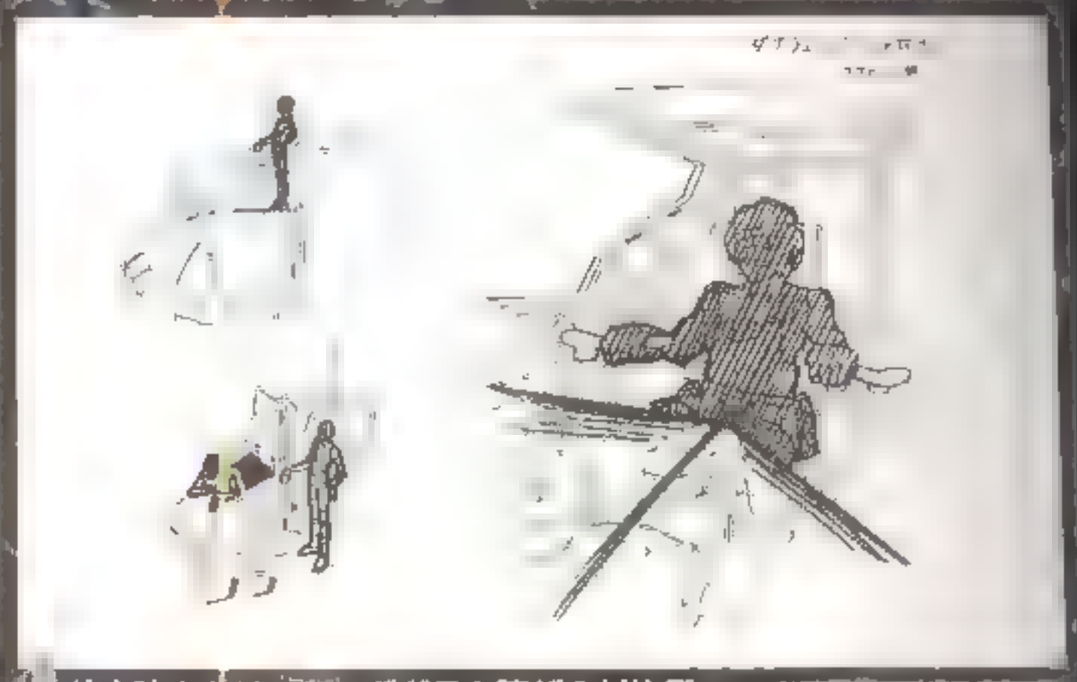
ダグラム／連邦軍のメカ類およびEガンの射撃照準器の表示パターン

ダグラムの照準器



片眼装着タイプ。シートに接続され、火器の照準情報などを有線で受け取り投影する。

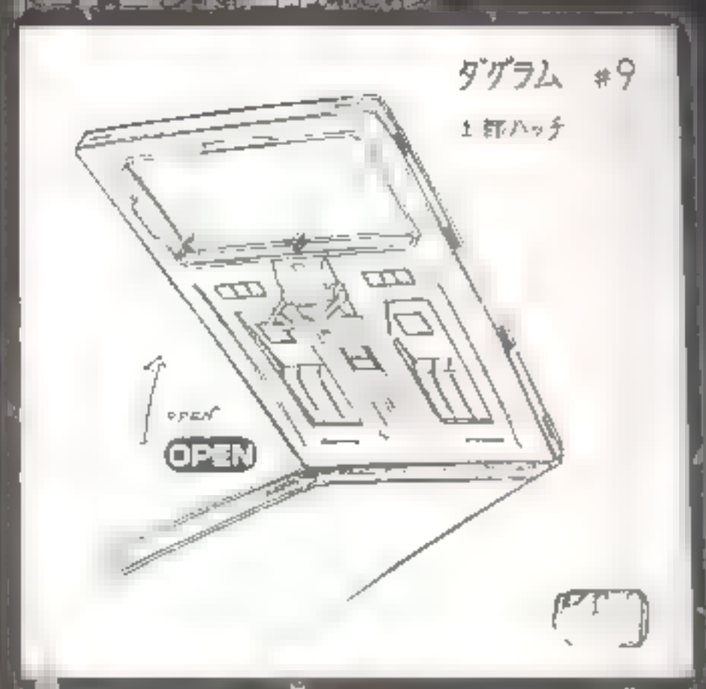
コクピットとクリンの対比



搭乗者のクリン（ダグラム周囲の対比図）

ダグラムの実際の照準パターン

コクピット上部ハッチ



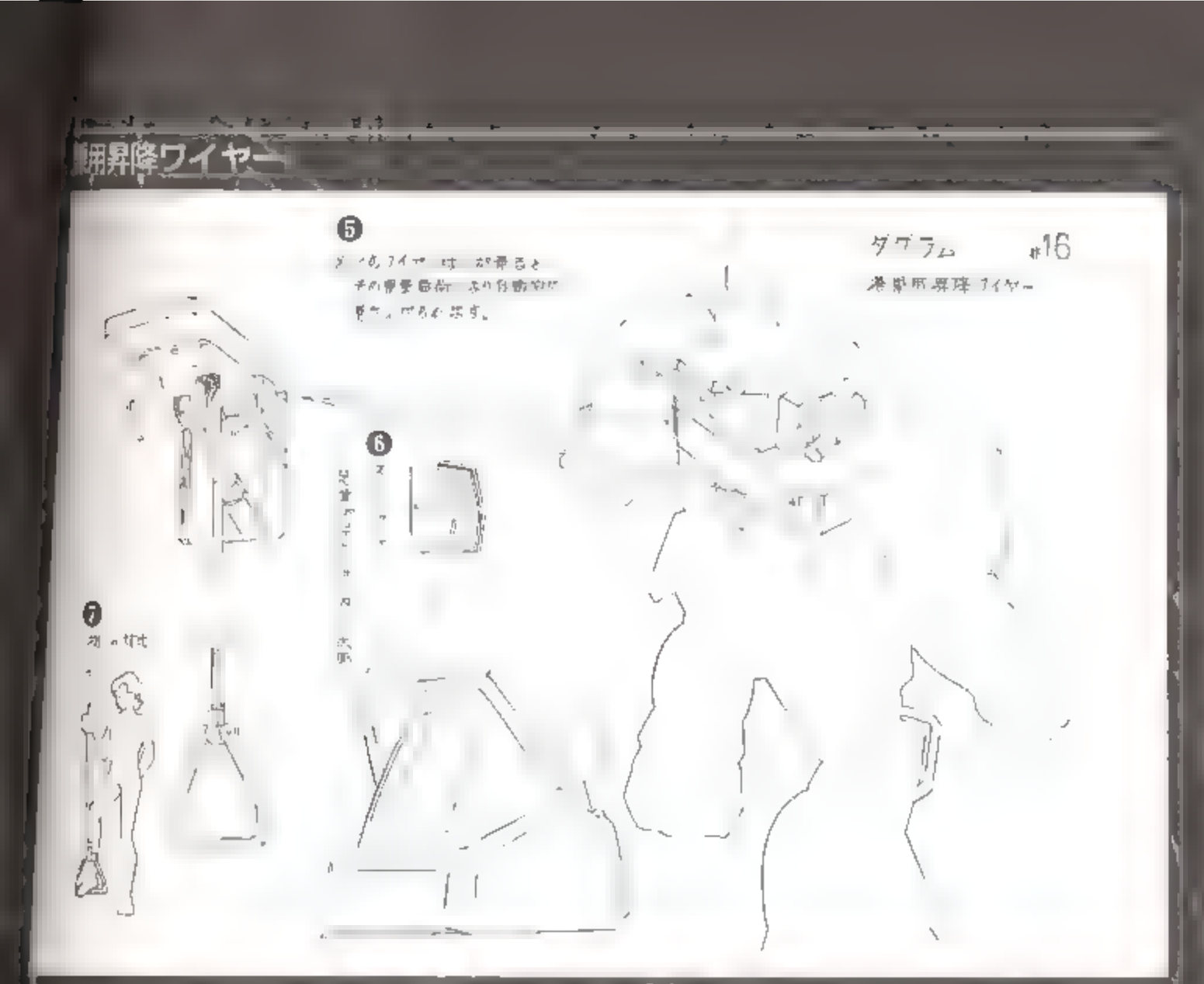
風防上部のハッチ。ここから身を乗り出し周囲の警戒などに使用。

◀解説▶

❶←白 ←赤 ❷←D. 距離M表示 ❸追尾しながら、寄っていく ❹傾斜により平行線の角度が変わる ❺▲印が合った時 発射！ ❻←点滅 ❼□が標的を追尾していく ❽横の線が上がっていく ❾□と横線が合った時 発射！ ❿←が点滅 ⓫2本の十字線が追尾して寄っていく ⓬更に近寄っていき ⓭2本の十字線が合わさり、1本の十字線になり、その交点が標的。発射！ ⓮イスと直結 ⓯→この部分より ⓰ヘアバンドに取りつける ⓱※正確には顔に合うよう多少わん曲している

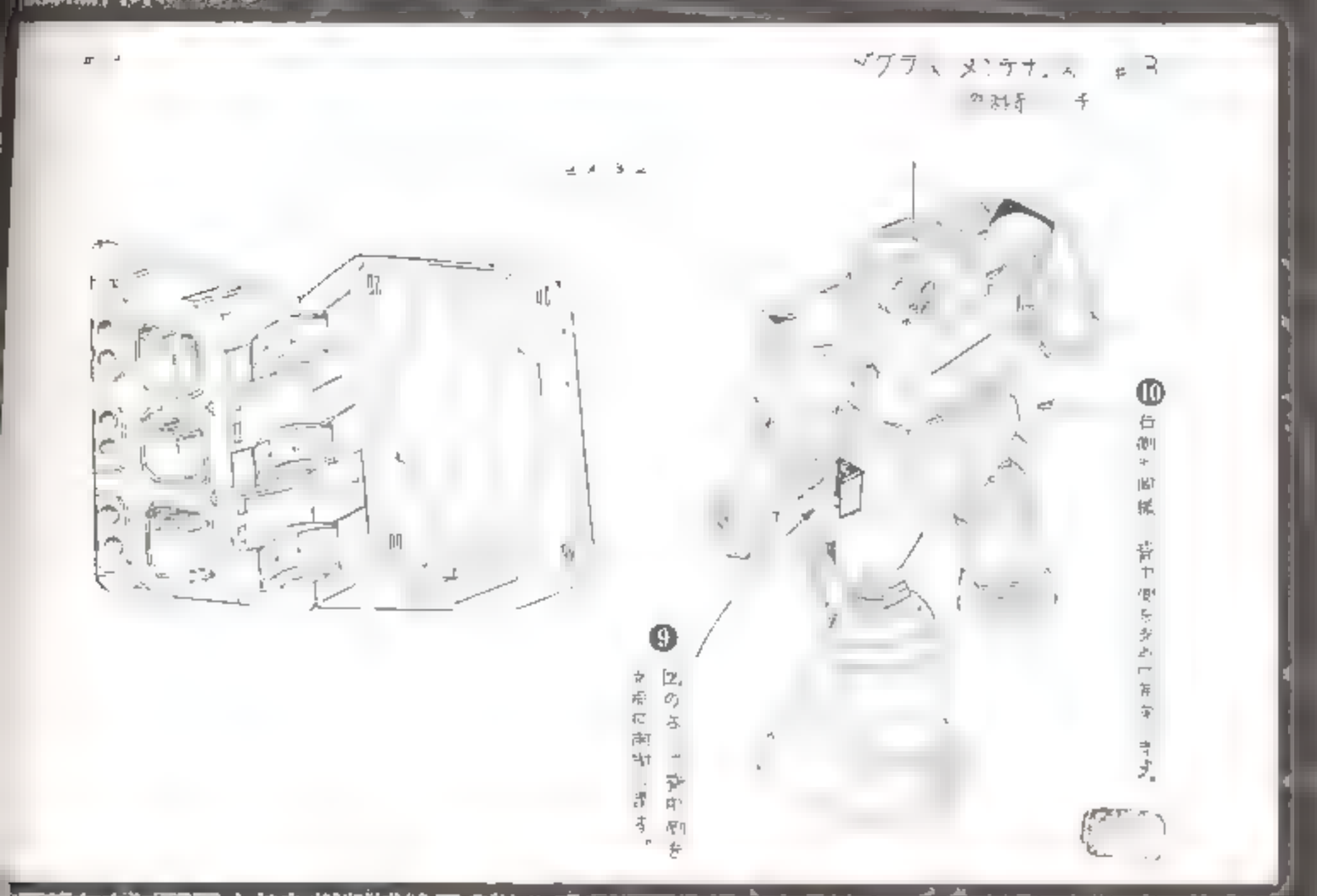
ダグラム DOUGRAM 追加兵器・運用

用昇降ワイヤー



用機体に装備されたワイヤー巻取機。ダグラムが立っている状態でコクピット位置までの昇降に使用する。

部燃料系パッチ

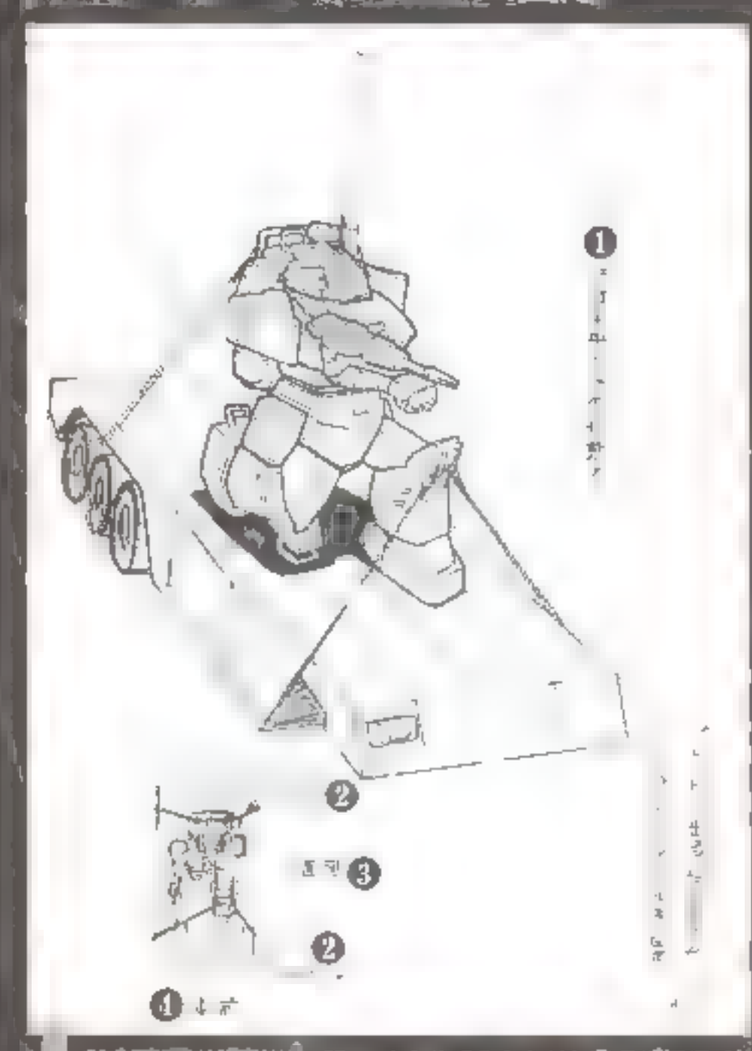


腰左右に配置された燃料補給用のパッチ

ロケット弾ポッド装着姿勢

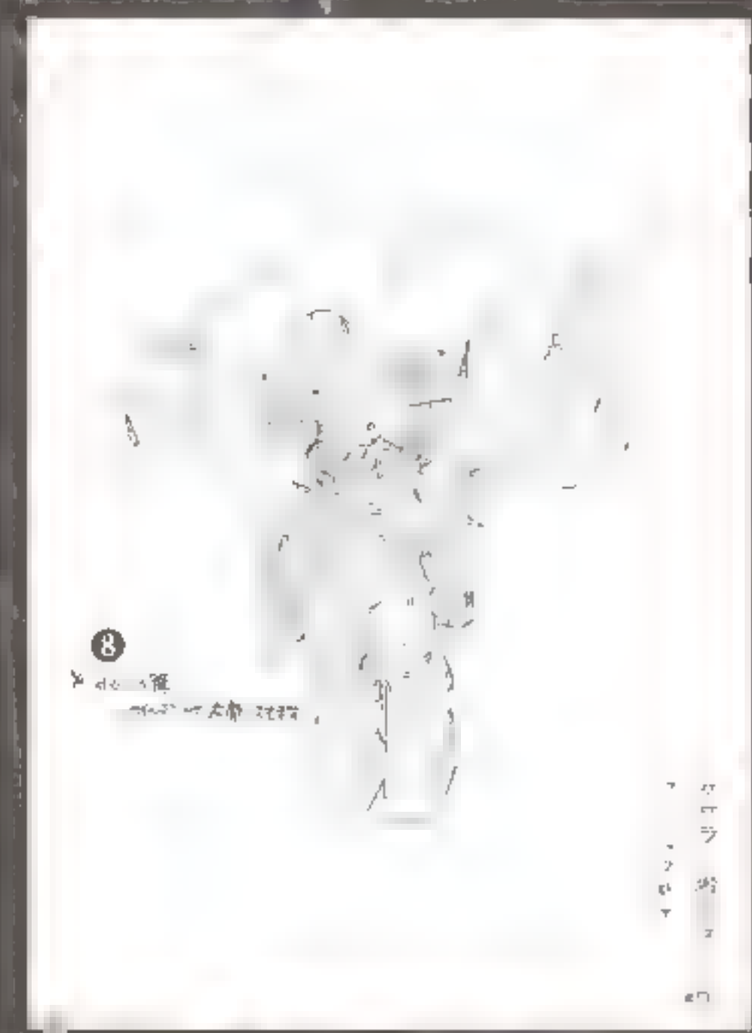
北極ポート侵攻を前に[illegible]ドが基地でチョコが間違い装着されたロケット弾ポッド

トレーラーへのダグラム固定



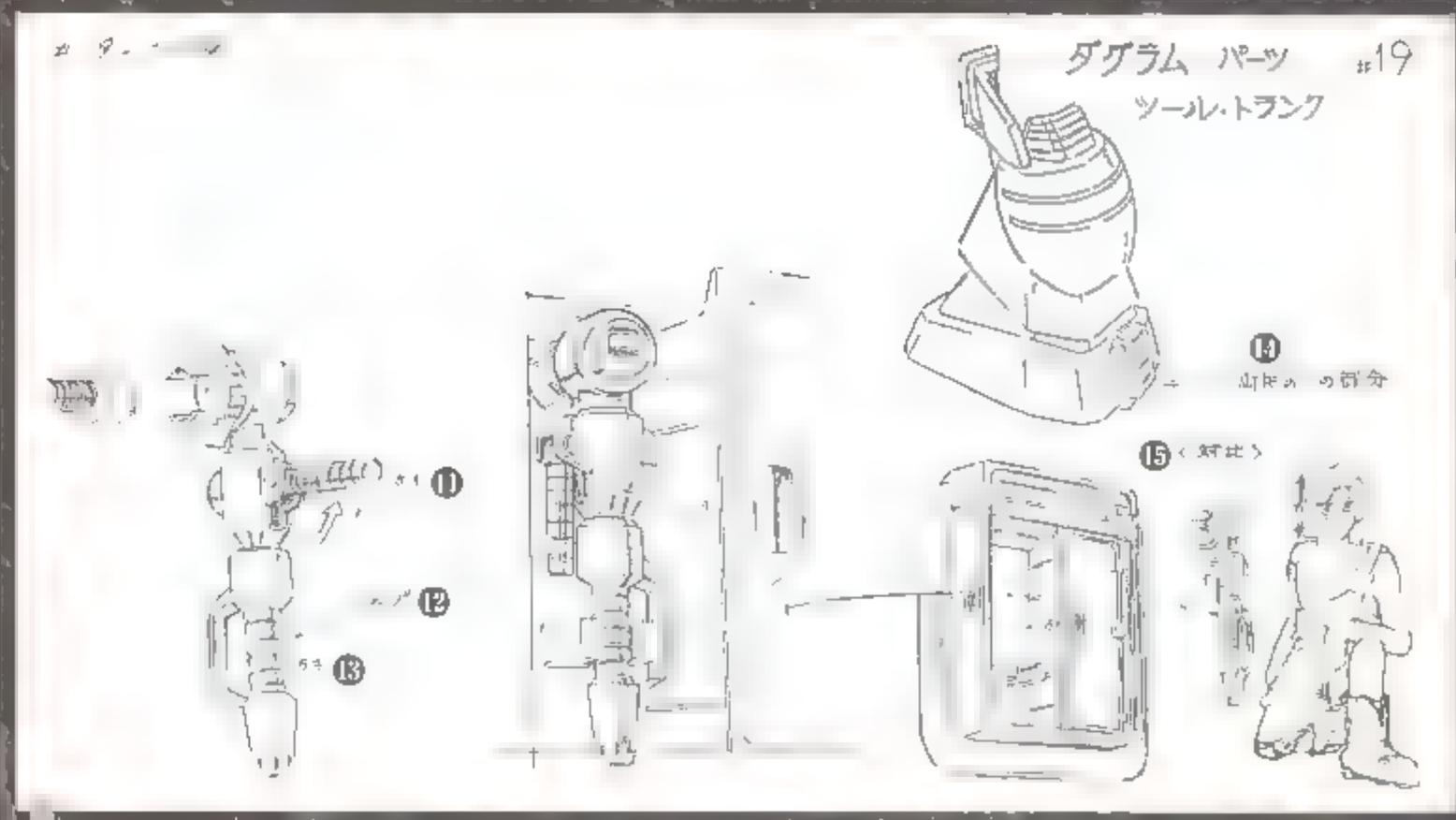
トレーラー上で戦闘姿勢を維持するための固定方法。第71話のパレードで使用された。

マベリックによる懸下搬送



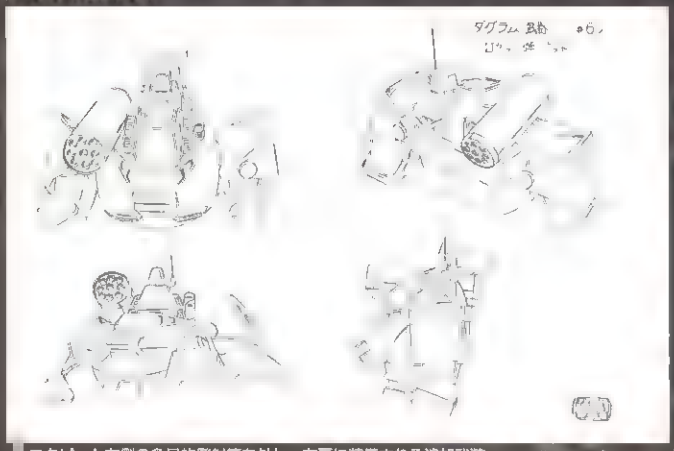
輸送ヘリ「マベリック」による懸架輸送されるダグラム。第61話で登場。

典部ツール・トランク



左右のかかと部分装備のメンテナンスで[illegible]が装備されている

ロケット弾ポッド



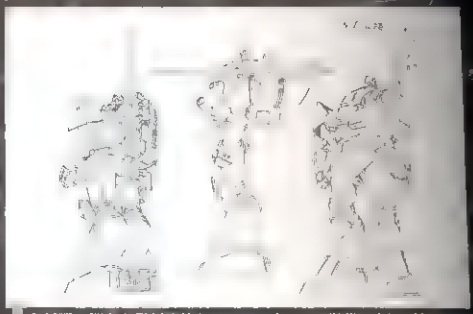
コクピット右側の多目的発射筒を外し、右肩に装備される追加武装。

ロケット弾ポッドの搭載により、ダグラムの火力はさらに向上した。

ターボザック　リニア・カノン

スパ市でJ・ロックから渡されたダグラムの強化装備。予備燃料を搭載し、稼働時間が短いというダグラム最大の弱点はかなり補われることとなった。

リニア・カノン装着姿勢



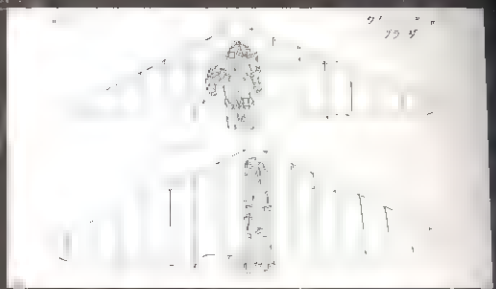
多種類の弾丸を発射可能なリニア・カノンの装備により、対CBアーマー戦闘だけでなく、さまざまな作戦でダグラムの優位性は[illegible]

リニア・カノンの砲身を左手で支え、発射体勢を取るダグラム。

名称	ターボザック
本体スペック	
全高	4.68m
全幅	2.52m 3.22m(リニア・カノン装備時)
胴太厚	2.12m
総重量	4185Kg 5071Kg (リニア・カノン装備時)
内蔵装備	アンチ・ドッペルゲンガー 形式・ゲリーM02 × 1 ジェネレーターの出力を最大時で3296増幅 クイックFLコンデンサー 形式・ゲリーCFL102 × 1 CFL104 × 1 リニアガンの連射を可能とするシステム
予備燃料	12本の格納スペースとトランクスペースがある

名称	ダグラムハング・グライダー装着タイプ
翼端長	未確認
最大滑空速度	160Km/h(計算算出値)
失速速度	35Km/h(計算算出値)

ハングライダー

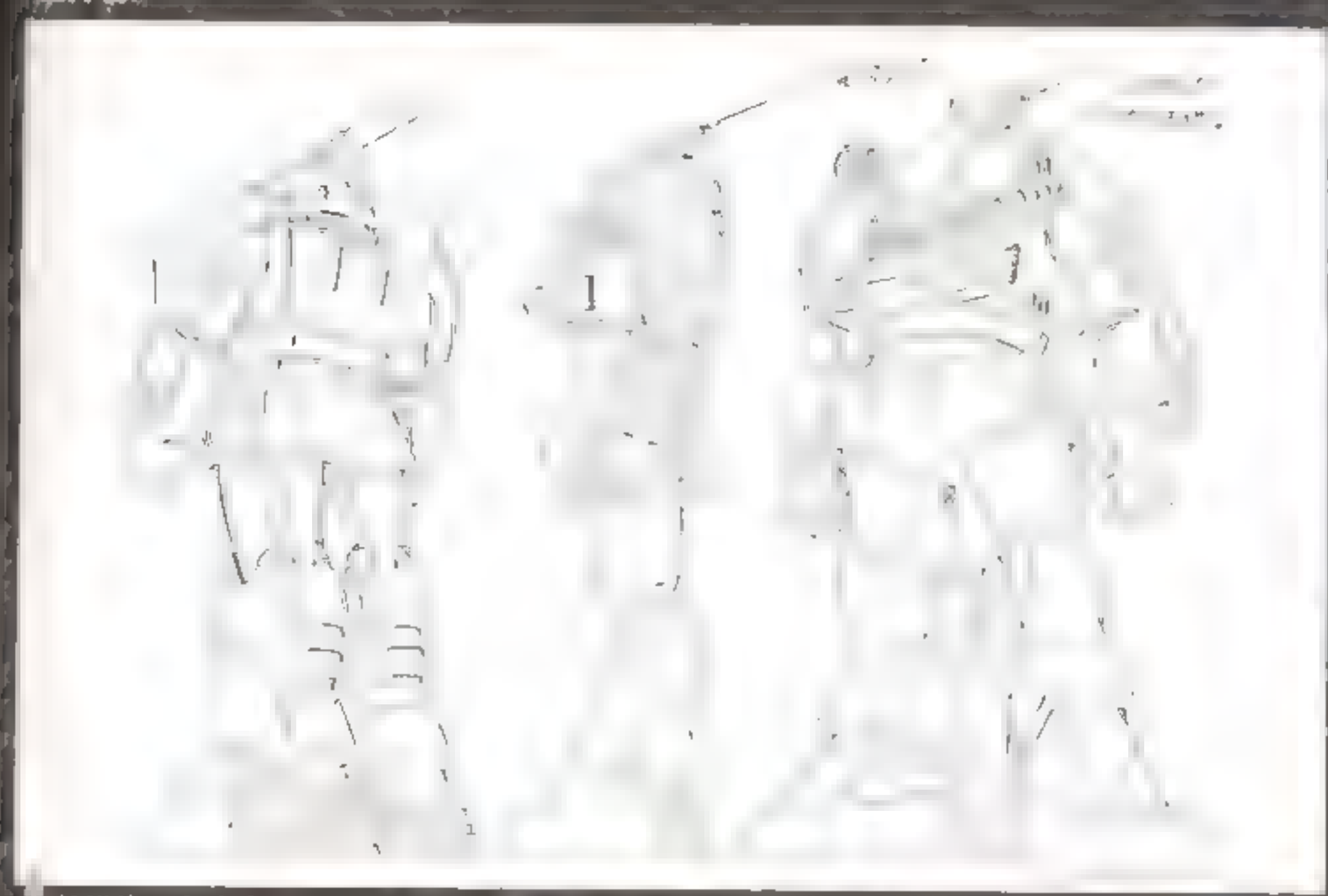


軟禁されたサマリン博士救出時に使用されたハンググライダー。翼長はやや大きくなっているが、基本形態はHB ラウンドドラゴンサー用のものと同じであり、性能も同様と思われる。

◀設定補足▶

●ほぼ中央にこの状態で　●ライター　●上部側　●↓側　●※このクッパーは人が乗るとその重量負荷により自動的に巻き上げられます。●スイッチ　（装置プロテクション・カバー内側）　●人物との対比　●※※BOX内ミサイルポッドが右肩に付きます。　●[illegible]のように背中側を支点に開閉します。　●右側も同様に背中側を支点に開閉します。　●左手　●グリップ　●右手　●両足のこの部分　●〈対比〉

全体像



前横後の各方向から見たラウンドフェイサー。頭部コクピットの球形キャノピーが特徴的で機体の名称「ラウンドフェイサー」の由来となった。

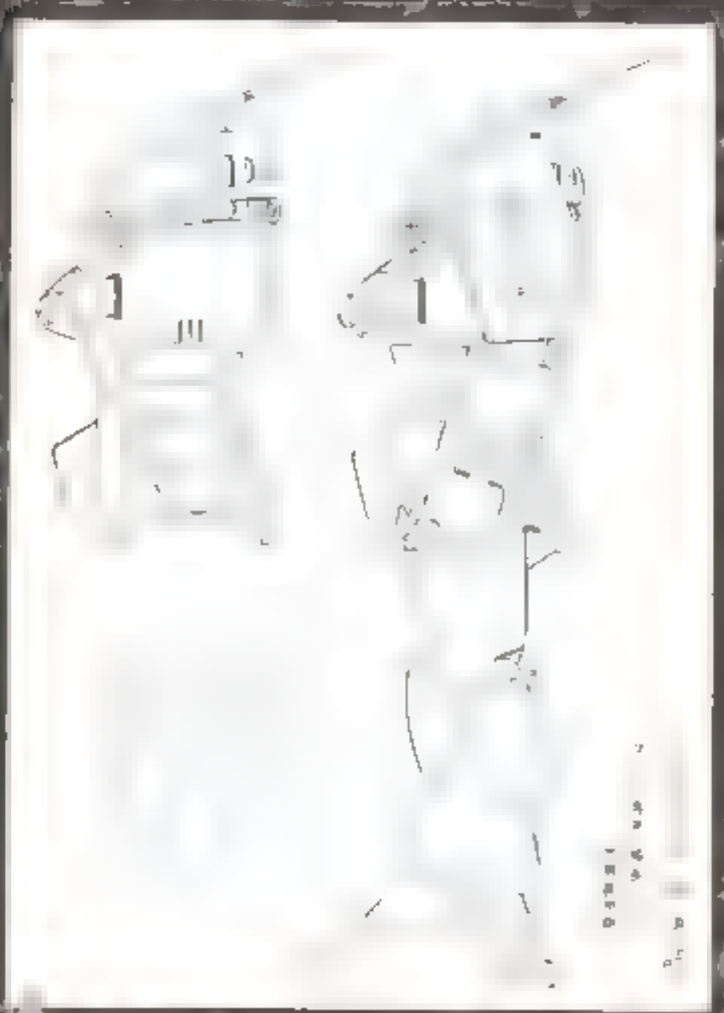
ラウンドフェイサー ROUND-FACER

基本設定

地球連邦軍の二脚歩行型CBアーマー。デロイア独立戦争開始時、連邦軍の主力機として配備開始直後であった。以前の多脚型と比べ、運動性が高く使用可能な兵器も多彩で、より多様な任務に対応する汎用性を持つ。また、パーツ分解可能で輸送効率も向上。走行速度、運動性なども優れるなど、兵器として完成度の高い機体である。しかしデロイア特有のXネブラの影響下では、その潜在性能が著しく低下。さらに対CBアーマー戦を想定して開発されたダグラムと比較すると火力も装甲強度も劣り、苦戦を強いられることとなった。

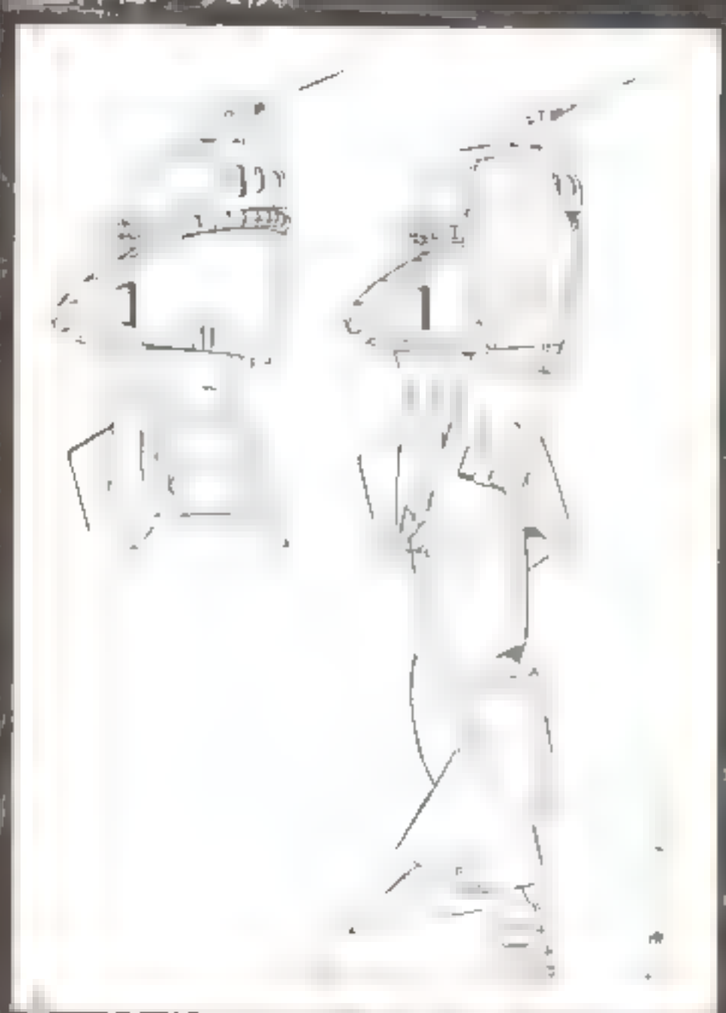
名称	ソルティック H8 ラウンドフェイサー SOLTIC-H8-ROUND-FACER
乗員	1名
全高	10.02m
空虚重量	20965kg
作戦空虚重量	24205～30100kg
作戦全備重量	24774～30669kg
設計最大重量	30720kg
ジェネレーター	ロールスロイス N8E 1×1
基本出力	54ポイント/S
設計最大巡航速度	45km/h(作戦全備重量時)
最大許容加速度	0.86G
燃料搭載量	NM44タイプ×4
標準作戦行動時間	324分(5時間24分)
搭載武装	ハンドリニアガン ×1(携帯) 25ミリチェーンガン ×4(左右各2) ミサイル[illegible] ×1(左右外装)

ダーク専用機 マーキング



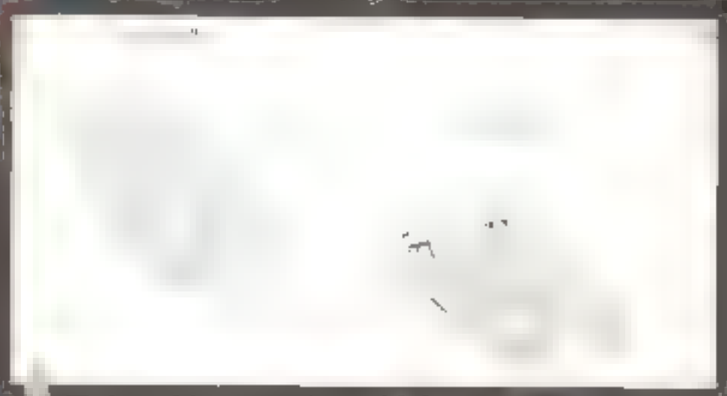
ドナン・カシム救出作戦時にラウンドフェイサー小隊を率いたダーク隊長の機体。

全体像 真横



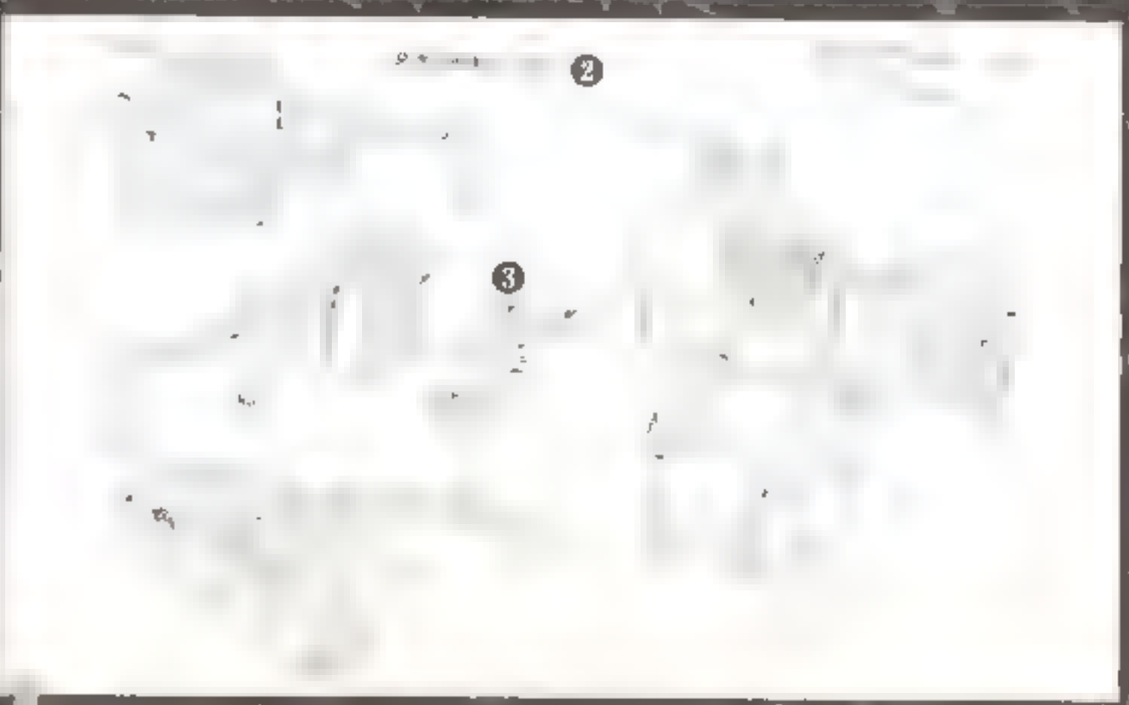
コクピットもカバーするよう、左右肩装甲は上方に張り出している。

CBアーマーの足底



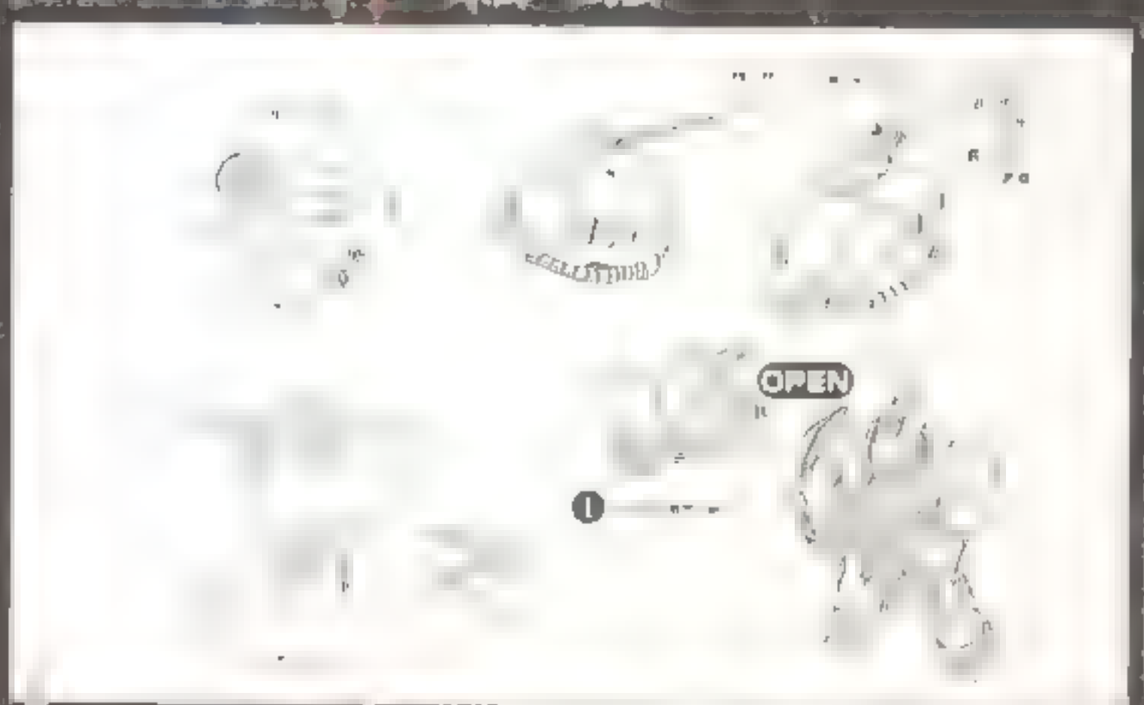
ラウンドフェイサー(左)とクラブガンナー(右)の足底の比較。

ラウンドフェイサー マグランチャー



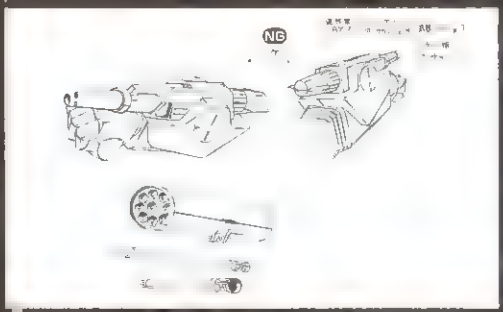
携帯武装のバルカンランチャーの一つ。対装甲弾を発射するマグランチャー。

ラウンドフェイサー 頭部武装



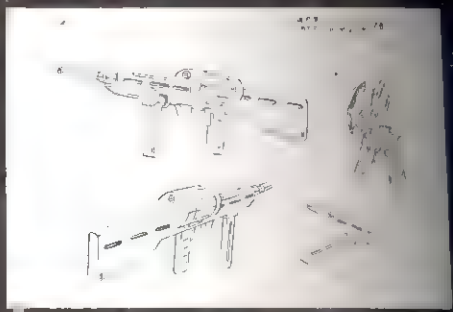
頭部コクピットキャノピーは前方へ開閉。標準装備のリニアガンとミサイル[illegible]

ロケット弾ランチャー　ロケット弾ポッド



腕に装備するロケット弾ランチャー（上）と右肩に装備するロケット弾ポッド（下）。

リニアガン

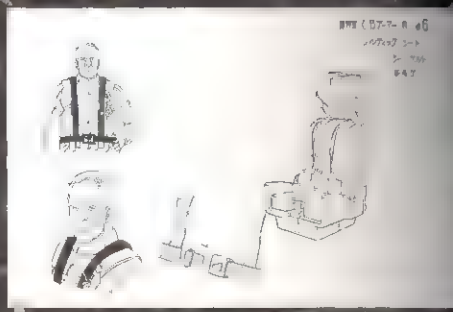


ラウンドフェイサーの標準装備のリニアガン。電磁力の応用で[illegible]弾体を射出する。

操縦席脱出シート

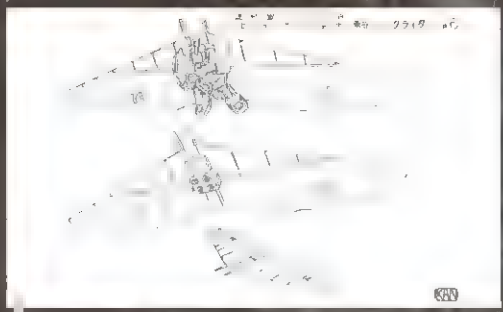
操縦席に装備された、緊急脱出用の射出装置とパラシュート。

シート　シートベルト



パイロットシートとシートベルト。モデルはダーク曹長。

ハングライダー

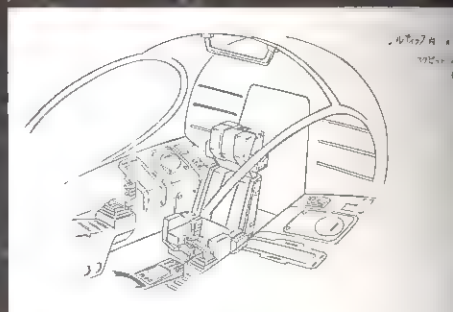


ドナン・カシムら評議員救出のための奇襲作戦時に使用されたハングライダー。高い塔に出入りし、仮しの滑走なら飛行を継続できる[illegible]有している。

夕陽に映え、空中から市街を偵察するラウンドフェイサー部隊。

◀設定補足▶
❶キャノピー前方へ開く　❷発射時排気しま[illegible]す。❸※弾は12発ぐらい入っています。❹[illegible]シートが前方に倒れ、前方に射出する。

コクピット

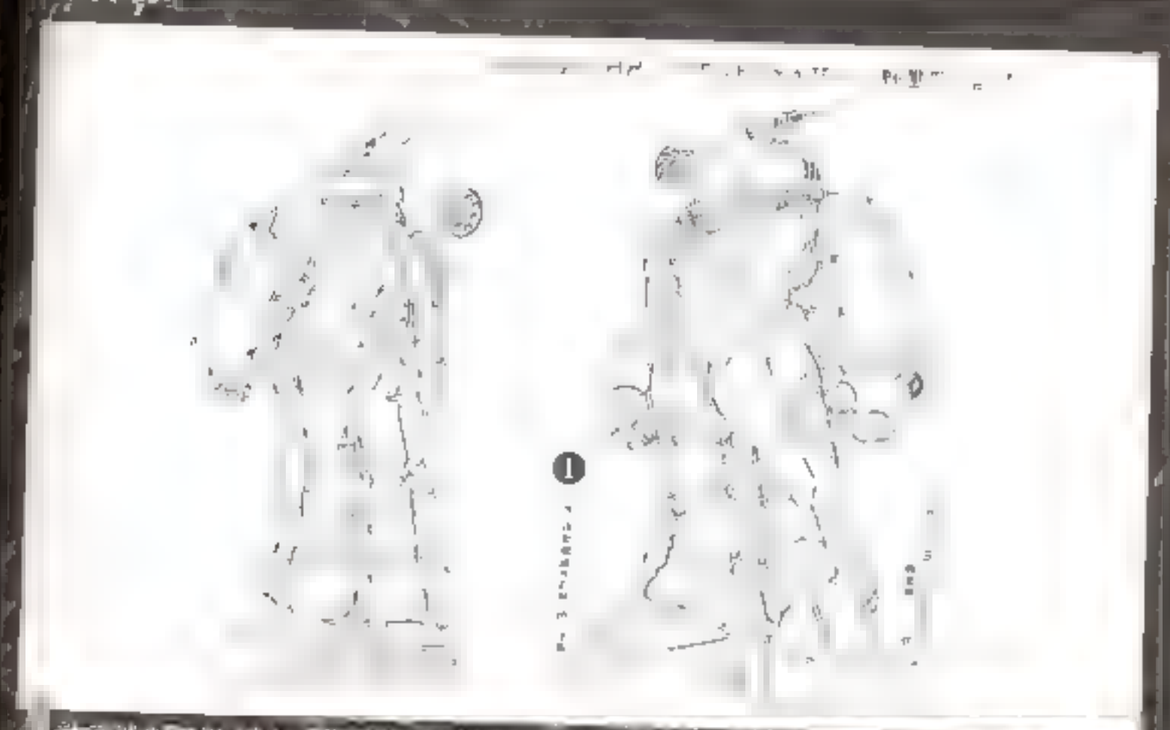


球形キャノピーがパイロットに広い視野を確保している。計器の配置[illegible]ように工夫されている。

ラウンドフェイサー ROUND-FACER 軽量型

デロイアに展開する連邦軍第8軍のスキ[illegible]ザルツェフ少佐の提案により誕生した機体。Xネブラの影響下でダグラムに対抗可能な戦闘力を得ることを狙い、全ての装甲を取り外し軽量化することで運動性能を確保している。この改造されたラウンドフェイサー3機と、指揮管制ヘリコプターを一つのチームとした連携フォーメーションで、それまで苦戦を強いられてきたダグラムを翻弄した。

全体像



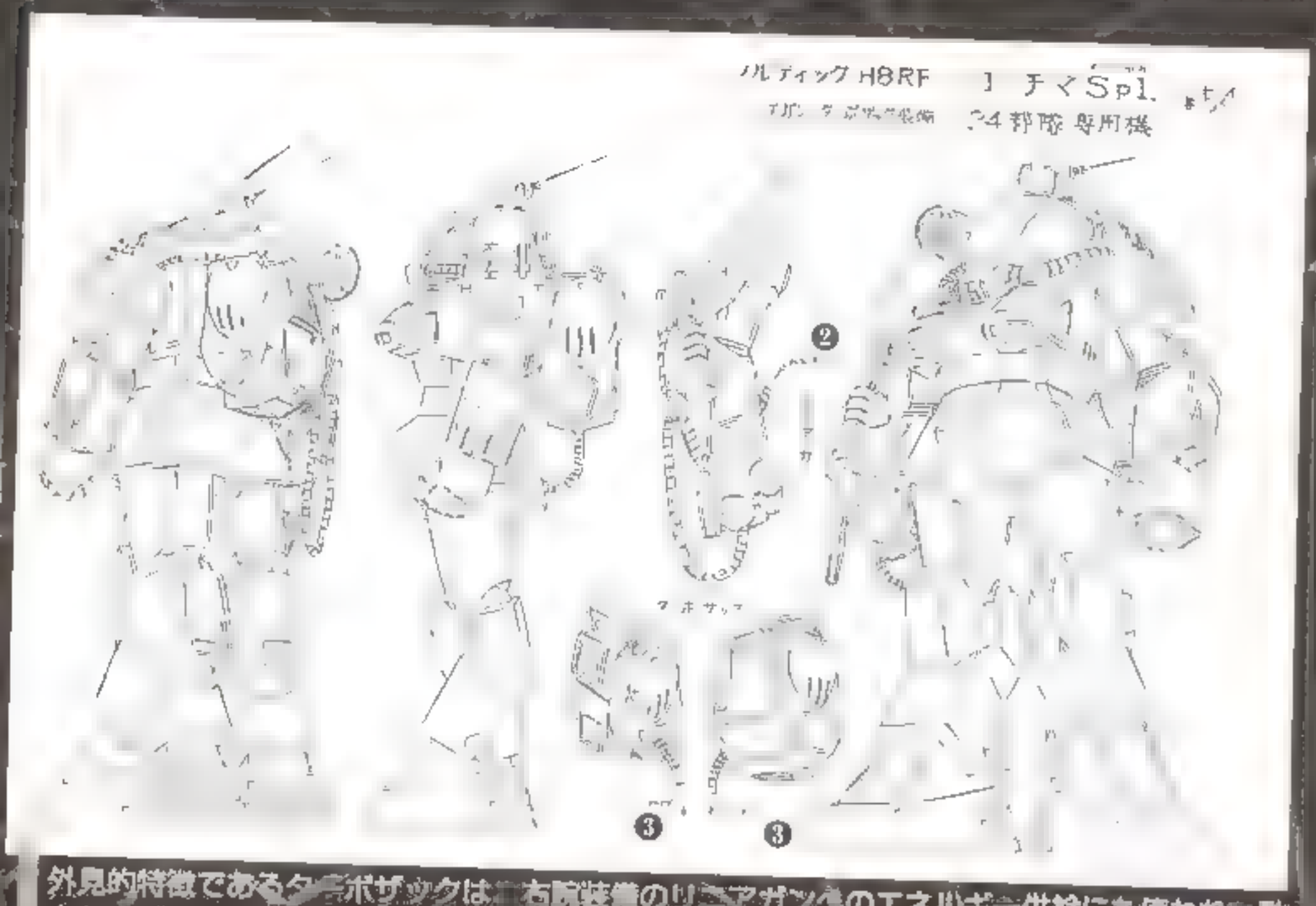
本来は取り外し不可能の胸板、腰部などの装甲板まで取り外し。三角は連絡された防水布で覆い、やや大きめの防盾を左肩部に取り付けてある。

ラウンドフェイサー ROUND-FACER コーチマSpl 24部隊専用機

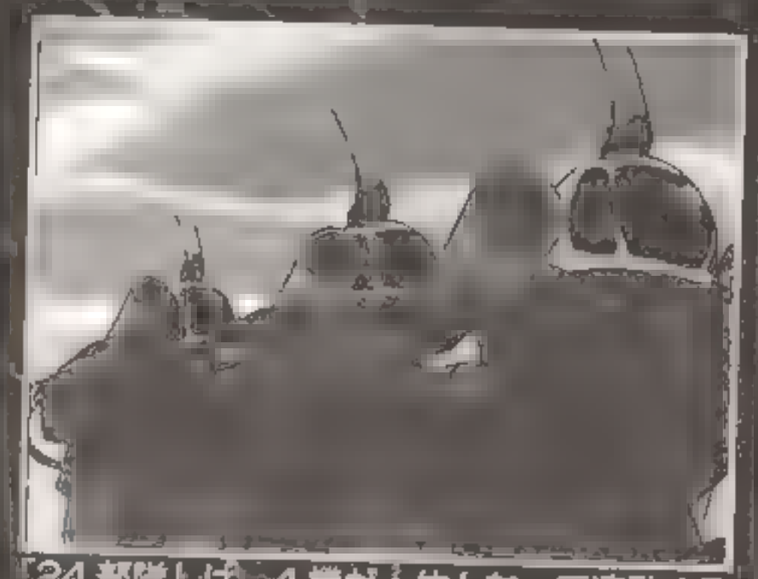
デロイア星の首都カーティナル市防衛部隊に所属する、CBアーマー隊「24部隊」に配備されたラウンドフェイサーの改良機。ソルティック社のコーチマ技術らによって開発され、Xネブラに対応するとともに、運動性などの基本性能も向上した。一方、それと引き替えに短縮してしまった稼働時間は、ターボザックを装備することで補っている。エリート・パイロット搭乗の4機編成で構成された24部隊は、フェーブ台地攻略戦においてダグラムに損傷を与え追い詰めるなど、この機体の高性能をいかんなく発揮したが、4機という少数では戦況全体を変えるには至らなかった。スタンレー高原を巡る戦いでは、CBアーマー部隊の指揮を執るなどしたが、得意の4機編隊によるコンビネーション戦法も使えず、個別に撃破されてしまった。

名称	ソルティック H8RF コーチマSpl SOLTIC-H8RF-KORCHIMA-Spl
乗員	1名
全高	10.05m
空機質量	21004kg
作戦全備重量	34381kg
設計最大重量	34432kg
ジェネレーター	ロールスロイス N8G ×1
基本出力	54ポイント/5（ターボザック使用時7%アップ）
設計最大歩行速度	53km/h（全備重量時）
最大跳躍加速度	1.66G
燃料搭載量	NM44タイプ ×4
標準作戦行動時間	286分（4時間46分）
標準武装	リニアガン ×1（携帯） 25ミリチェーンガン ×4（左右各2） ロケット弾ポッド ×1（左右外装）

全体像



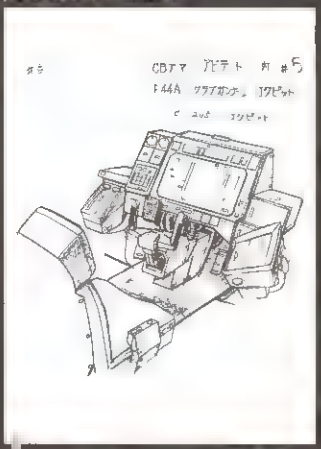
外見的特徴であるターボザックは、右肩装備のリニアガンへのエネルギー供給にも使われ、動力ケーブルでつながれている。



「24部隊」は、4機が一体となって連動する戦法でダグラムを苦しめた。

◀設定補足▶
❶（注）迷彩模様は別紙の図で作画 ❷ターボザックへ ❸リニアガンへ ❹△印の所マーク入る ❺操縦席別紙 ❻ベンチレーター ❼車内壁 ❽ドライバー ❾左に同じ ❿対人比この位置でこのくらいです。 ⓫ランチャー 胴下に二基 両翼に二基 ⓬対比

コクピット・操縦席



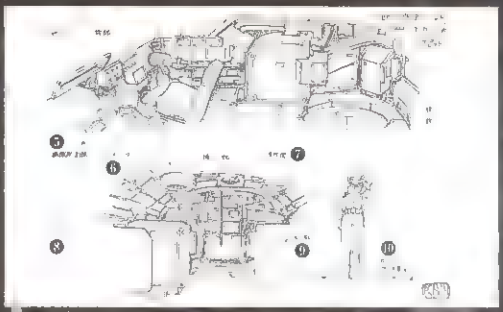
中央の操縦桿（ハンドル）並びに計器パネル。

名称	アビテート F44A クラブガンナー ABITATE-F44A-CRAB-GUNNER
乗員	3名
全高	12.23m
空虚重量	34521kg
作戦全備重量	35398kg
設計最大重量	36024kg
ジェネレーター	シンメーワ・ゼロKC ×
基本出力	59ポイント/S
設計最大歩行速度	39km/h(全備重量時)
最大跳躍加速度	0.88G
装甲材質	NM44タイプ NM55タイプ
標準作戦行動時間	411分(6時間15分)
標準武装	主砲リニアカノン × 1 30ミリ機関砲 10.7ミリ機関銃 × 1(内部外装式) ミサイル・ポッド

クラブガンナー
CRAB-GUNNER
4脚歩行CBアーマー

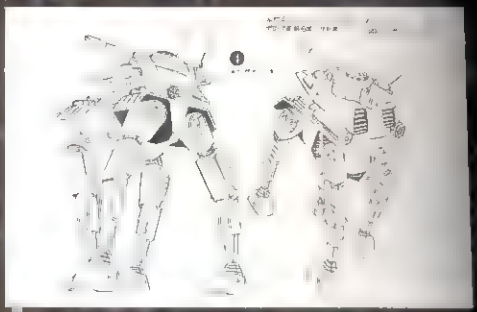
機動に実用性[illegible]本脚を[illegible]ため、機体上部は本体に[illegible]状をしている。大きな違い[illegible]この歩行形態[illegible]12m[illegible]いう高さもそ[illegible]を変えたものを使う。[illegible]用効率により、戦略戦術両面で[illegible]創出し、陸上戦の主力兵器と[illegible]より高性[illegible]歩行型CBアーマー[illegible]導したことでデロイア戦争当時[illegible]式機となっていたが、未だ多くの機体[illegible]であり、[illegible]でなくゲリラ側でも使用された。

コクピット



クラブガンナーのコクピット内部。3名の乗員によって運用される。

全体像



戦車に足を付けたような外見で、その脚は二脚歩行型に比べてかなり長い。

クラブガンナーの改造機でガルシア隊が主力機として使用した。機体左右側部にバルコニーを新[illegible]して[illegible]装置にするとともに、その下面にミ[illegible]ポッドを[illegible]つ追加装備している。[illegible]は3名で[illegible]最大で計6名の兵士を乗せることができる[illegible]があるわけでもなく、[illegible]単なものであり、[illegible]など[illegible]を[illegible]。[illegible]アーマー[illegible]。ここに搭乗した兵士は[illegible]と考えられる。[illegible]出力など[illegible]ンサーより強化されているが、さすがにダグラムの敵ではなくなる。[illegible]

全体像

外観は、増設された左右バルコニー以外クラブガンナーと大きな変化はない。

テキーラガンナー
TEQUILA-GUNNER
4脚歩行CBアーマー

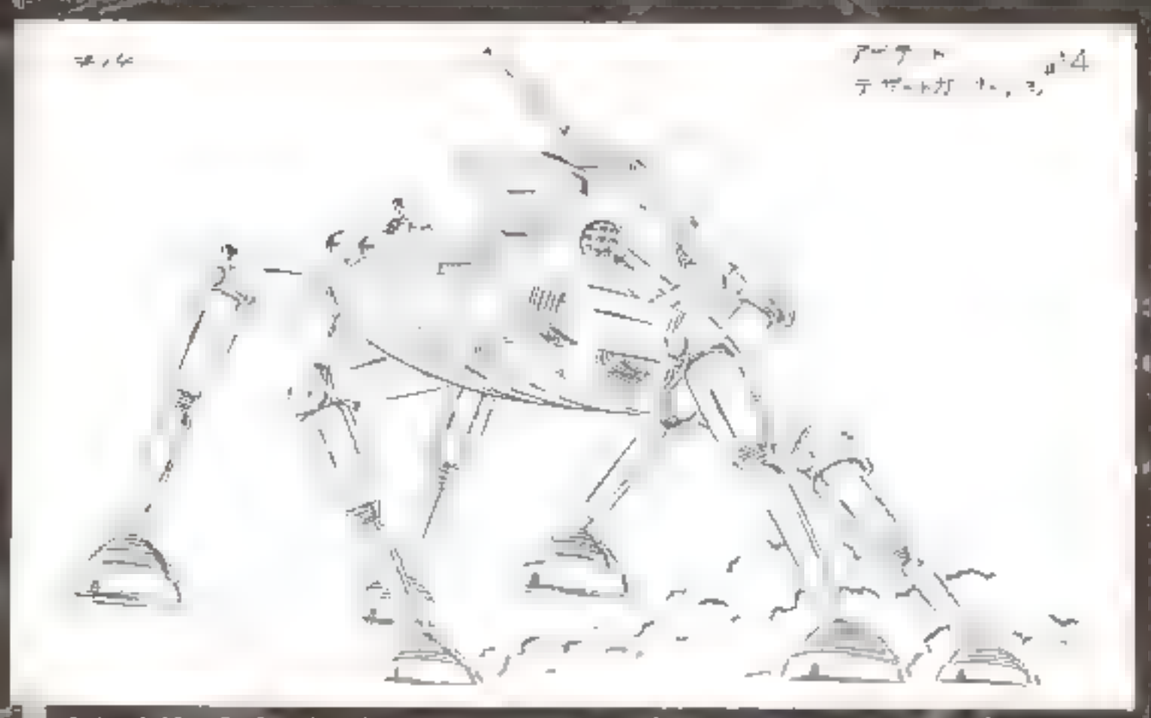
名称	アビテート F44B テキーラガンナー ABITATE-F44B-TEQUILA-GUNNER
乗員	3名
兵員	9名
全高	12.13m
空虚重量	35001kg
作戦全備重量	36402kg
設計最大重量	36913kg
ジェネレーター	シンメーワ・ゼロKC ×
基本出力	63ポイント/S
設計最大歩行速度	38km/h(全備重量時)
最大跳躍加速度	0.85G
装甲材質	NM44タイプ NM55タイプ × 5
標準作戦行動時間	389分(6時間29分)
標準武装	主砲リニアカノン × 1 30ミリ機関砲 × 1 12.7ミリ機関銃 × 1(内部格納式) ミサイル・ポッド × 4(外装)

名称	アビテート F44S デザートガンナー BITATE-F44S-DESERT・GUNNER
搭乗員	3名
最大地上高	15.87m
最小地上高	5.39m
空荷重量	35914kg
作戦全備重量	36691kg
最大重量	38066kg
ジェネレーター	シンメーター・ゼロ KG メ
基本出力	70.5 ポイント/S
設計最大移動速度	42km/h(砂地上全備重量時)
最大瞬間加速度	0.87G
燃料搭載量	NM44 タイプ ×6 または NM55 タイプ ×4
標準作戦行動時間	366分(6時間06分)
武装	リニアカノン ×1 30ミリ機関砲 ×1 ロケット弾ポッド ×2(外装)

デザートガンナー
DESERT-GUNNER
砂漠戦用6脚CBアーマー

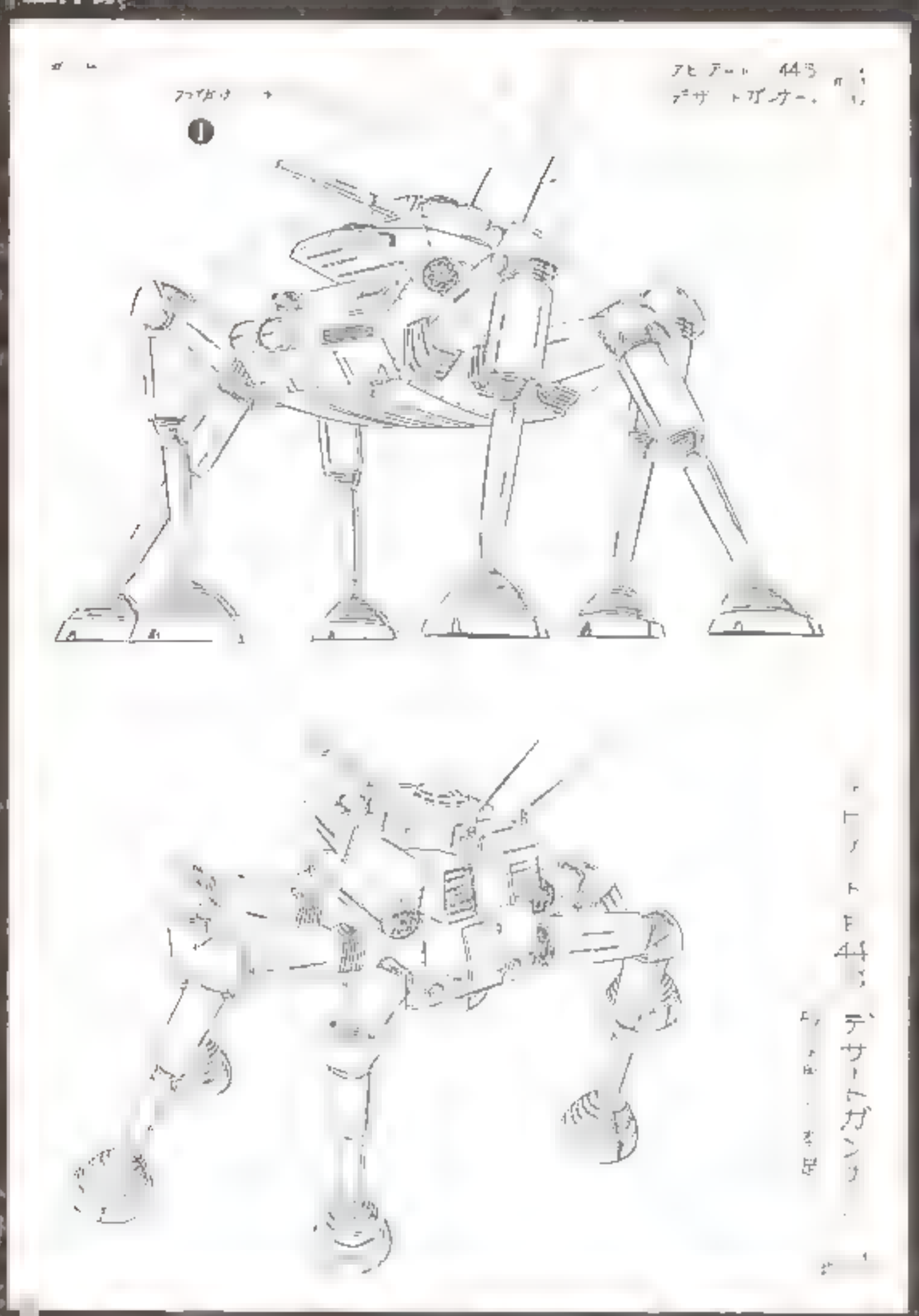
可動範囲を大きくした六脚式を採用することで、機体の安定性と運動性を向上させ、接地圧の問題にも対応したクラブガンナー系CBアーマーの最終進化型。不整地でも戦闘力を維持することができ、開発段階では活躍が期待されたが、最新型の二脚歩行型CBアーマーが登場したことで、わずかな数が製造されたに留まった。しかしテロイア独立戦争において、2機を配備されたガルンア隊は、この機体の特性を最大に生かせる砂漠での戦闘に投入。ラウンドフェイサーなど他のCBアーマーが苦戦したダメラムを相手に、2機が連携して一撃離脱攻撃を加え、一度は退却させる戦果を上げている。

ポーズ



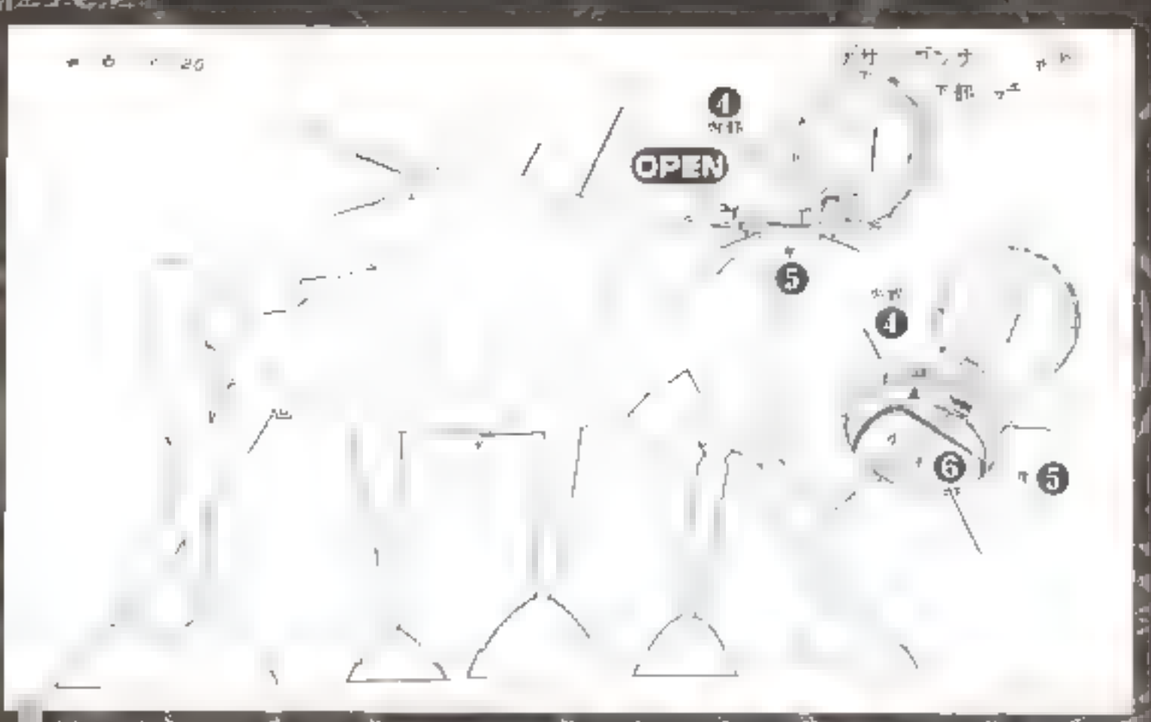
走行中のデザートガンナーの6脚はそれぞれ別個に動かすことが可能で、機体の地上高や角度を自由に変えることができる。

全体像



屈曲した6脚を広げ、見るからに安定感のある外観。機体上部はクラブガンナー系に共通する構造だ。

ハッチ

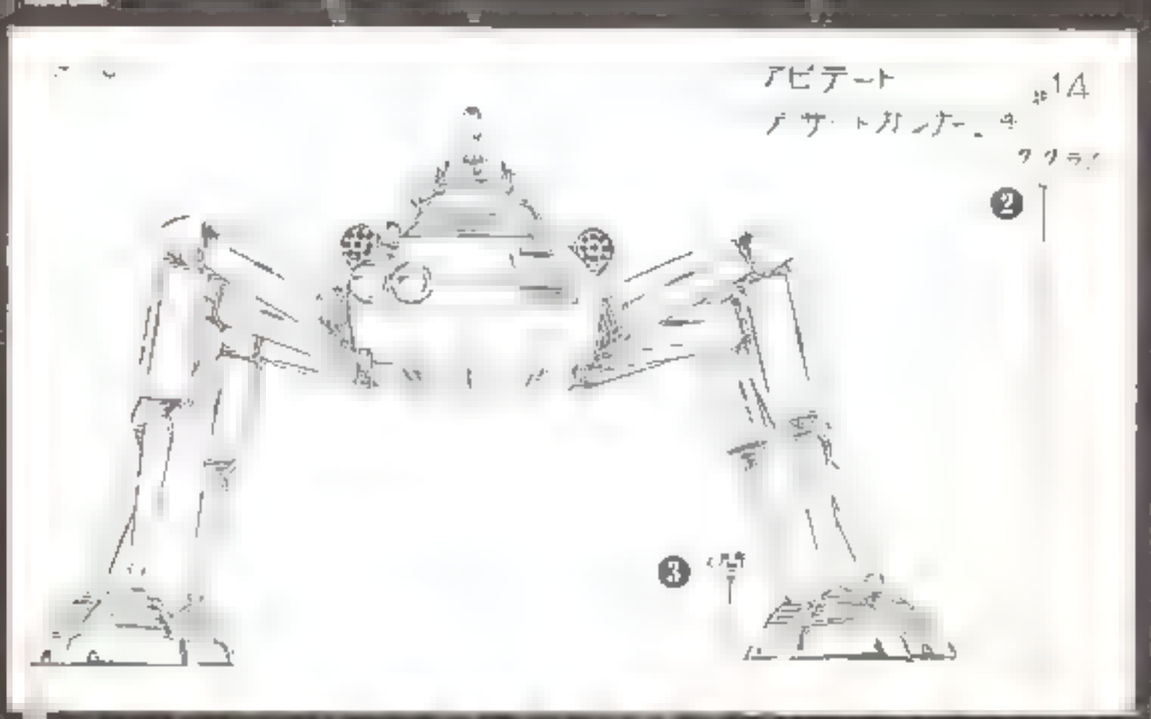


機体底面にある下部ハッチ。ここからコクピットへ乗り込むことができる。

コクピット

コクピットは基本的にクラブガンナーと共通だが、下部ハッチへつながる通路用ハッチが床面に設置されている。

正面



屈曲したクラブガンナーの脚とは異なり、屈曲させた6脚の特徴がよく分かる。

名称	アビテート T10B ブロックヘッド ABITATE-T10B-BLOCK-HEAD
乗員	2名
全高	11.78m
全長	3.102m
作戦全備重量	31739kg
設計最大重量	32295kg
ジェネレーター	ロールスロイス・N9-PW750 ×1
基本出力	61ポイント/S
設計最大歩行速度	51km/h(全備重量時)
最大跳躍加速度	2.5G
燃料搭載量	NM44タイプ ×4
標準作戦行動時間	190分(3時間10分)(公称)
搭載武装	マグランチャー ×1 ロケット弾ポッド ×1 20ミリ機関砲2連装 ×1

ブロックヘッド
BLOCK-HEAD
複座型CBアーマー

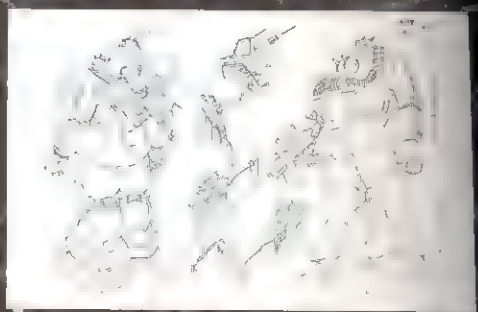
アビテート社が開発した初の二脚歩行CBアーマー。胸部に20mm機関砲を装備し、操縦パイロットの高度な腕前が搭乗する。また、機関砲座にサーチライトを搭載し偵察任務に使用された機体も存在した。重装甲でありながら高い運動性を確保しており、基本戦闘力は優秀な機体。後にCXネブラ対応型（T10C）が開発され、ダグラムに匹敵する戦闘力を持つ機体として、ラウンドフェイサーに続くデロイアでは連邦軍の主力機となっていった。

◀設定補足▶
●クラブガンナー→ ●ダグラム ●人間 ●内部 ●床 ●外です ●上部砲塔入口 ●操縦席はクラブガンナーと同じ ●下部ハッチ 設定参照のこと ●座席位置 ●足の底 ●シートの型は上部と同じ ●通常はこの位置まで下っている ●トリガー（右のみ） ●左操縦装置 ●トリガー ●下部コクピットへの入口

側面

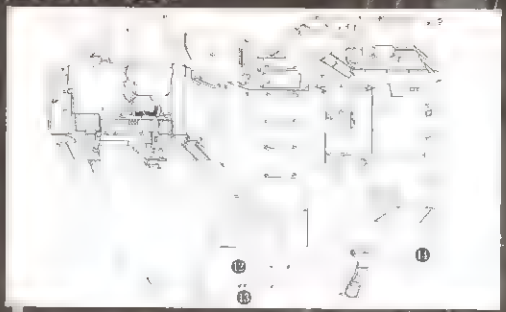
標準装備のマグランチャーは背部に設定が可能。

全体像



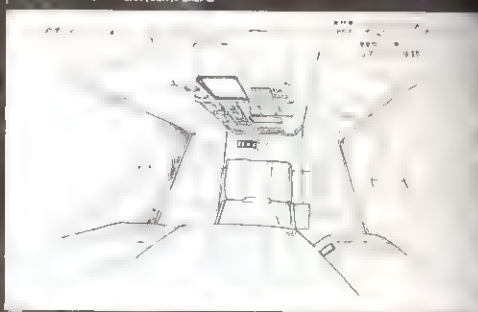
装甲を厚くし機関砲座と乗員2名を乗せるため全体にごつい大きく、それに合わせて全体も重厚なイメージになっている。

コクピット　砲手席



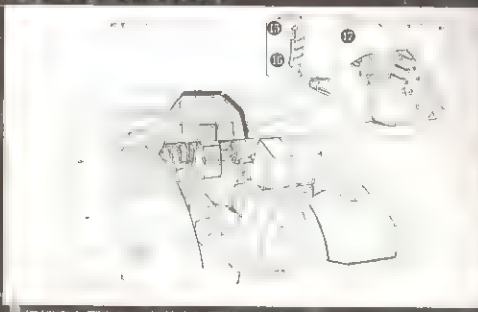
操縦席の前方下側に機関砲座があり砲手が乗り込んでいる。中央には機関砲用の照準器が設置してある。

コクピット　操縦席後方



天井にも計器などがあり、ラウンドフェイサーなどと比べて簡略化されている。

コクピット　操縦席前方



操縦席右側とシート前方に下部コクピットへのハッチがあり、砲手が乗り込む。

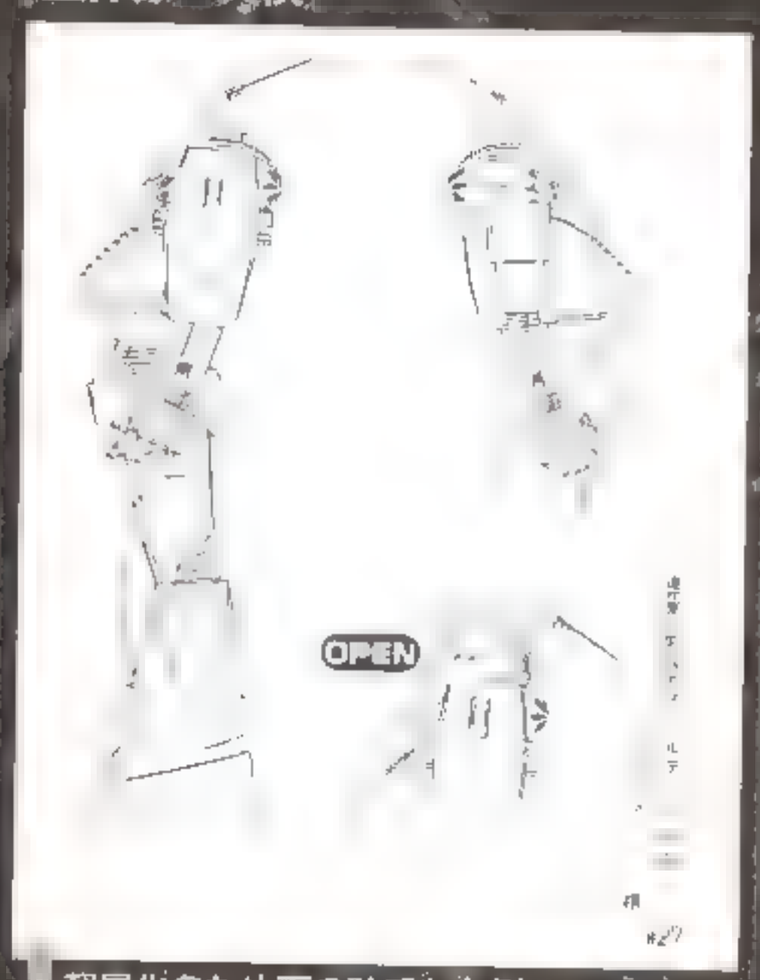
サーチライトを使用するブロックヘッド

ブッシュマン
BUSH-MAN
山岳戦用CBアーマー

装甲と武装を軽減しジェネレーターも小型の物を採用。搭載燃料も少なくするなど、設計段階から機体重量を削り、運動性の向上を目指し開発された。登坂性能、跳躍力に優れ、高地山岳地域などでの作戦に適した機体である。Xネブラには対応していないが、基本的に高機動であったため影響が少なく、デロイア独立戦争初期には多数が配備された。しかし重装甲ながら運動性能も高いXネブラ対応型ブロックヘッドが開発されたことにより、戦場からは急速に姿を消していった。

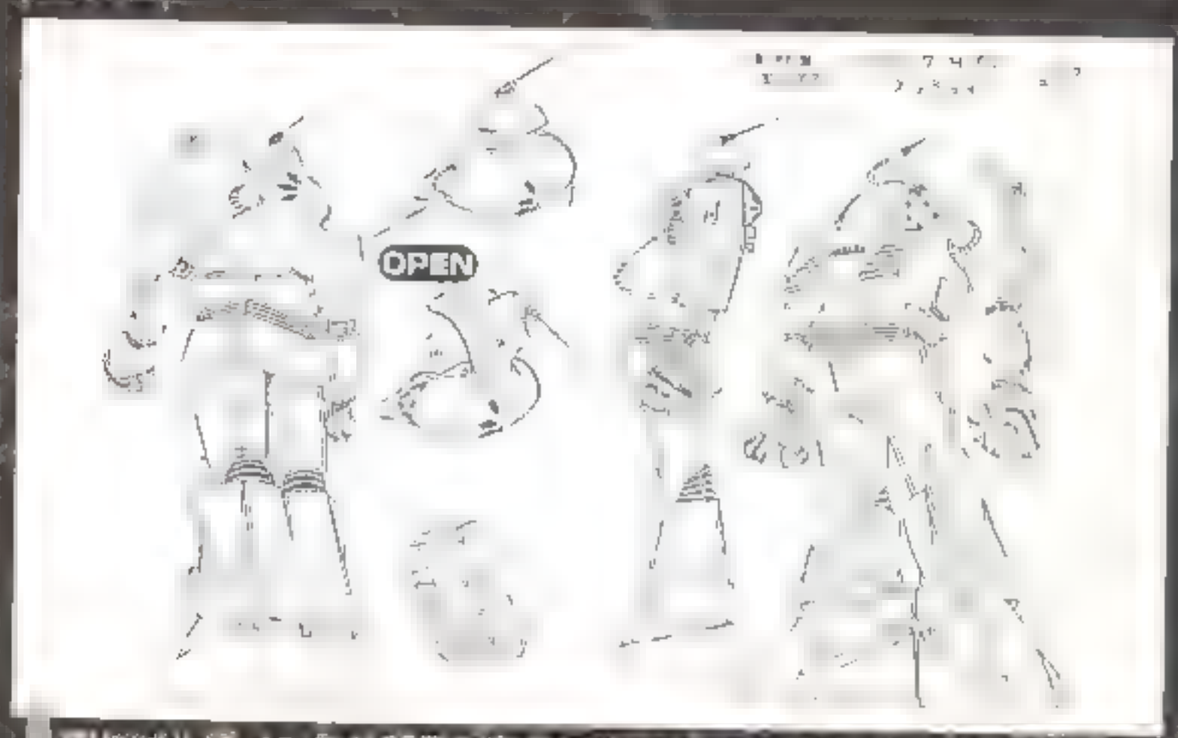
機体	ソルティック H102 ブッシュマン SOLTIC-H102-BUSH-MAN
乗員	1名
全高	9.38m
空虚重量	18951kg
作戦空虚重量	24992kg
作戦全備重量	25504kg
総搭載可能重量	25311kg
ジェネレーター	ヘルタイプ03サードタイプ
基本出力	5[illegible]/S
設計最大歩行速度	46km/h(作戦全備重量時)
最大跳躍加速度	9.9G
燃料搭載量	NM44タイプ ×4
標準作戦行動時間	280分(4時間40分)
搭載武装	ロケット弾ポッド ×2 マグランチャー ×1 アーマーナイフル ×2(内装)

全体像/真横



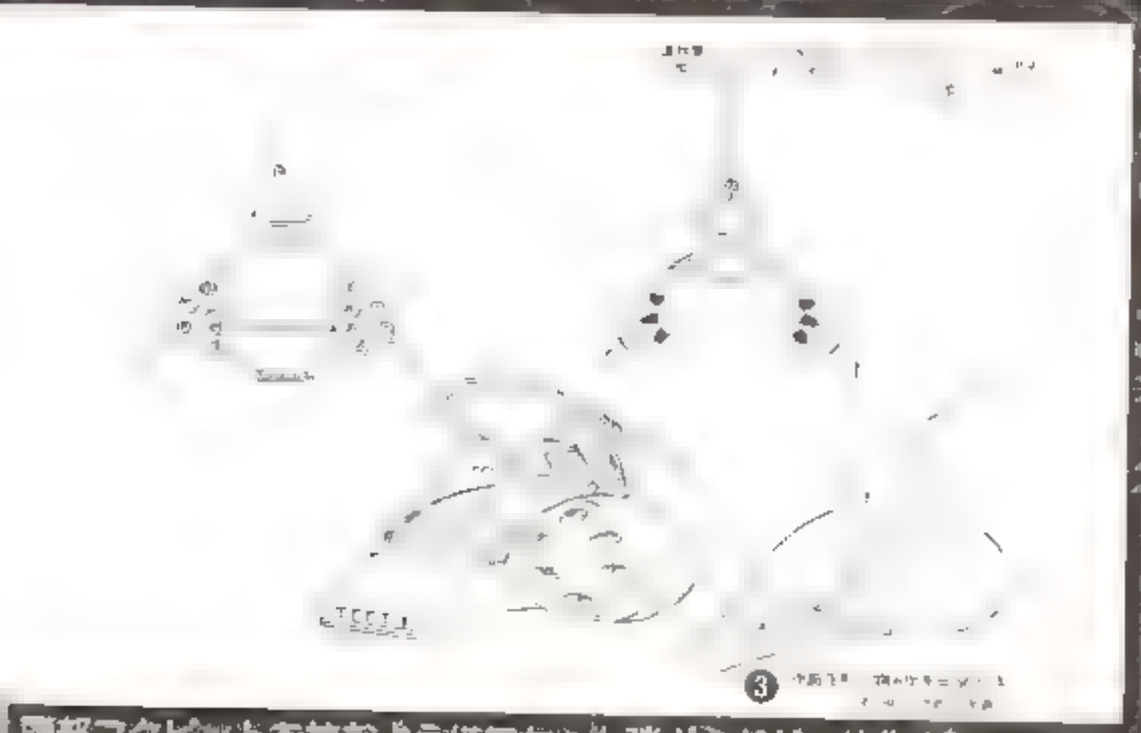
軽量化のため肩の防盾も左側のみ。

全体像



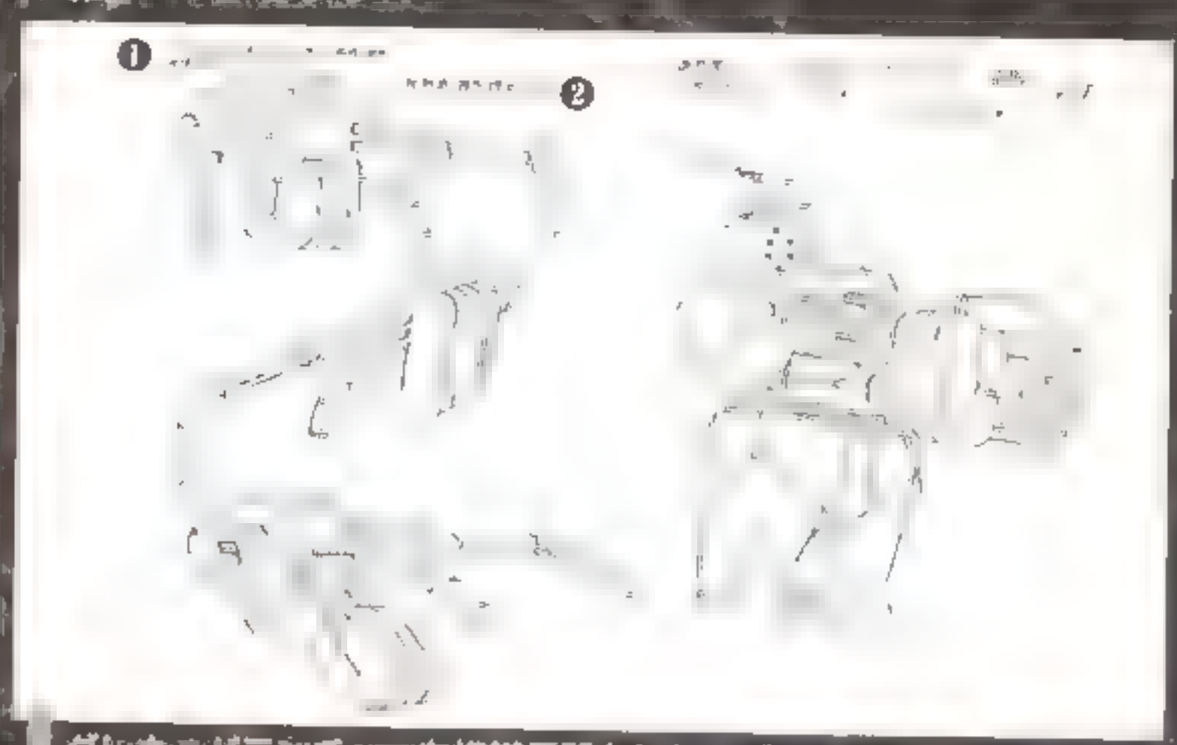
同じソルティック社開発であるラウンドフェイザーに通じる外観である。

コクピット



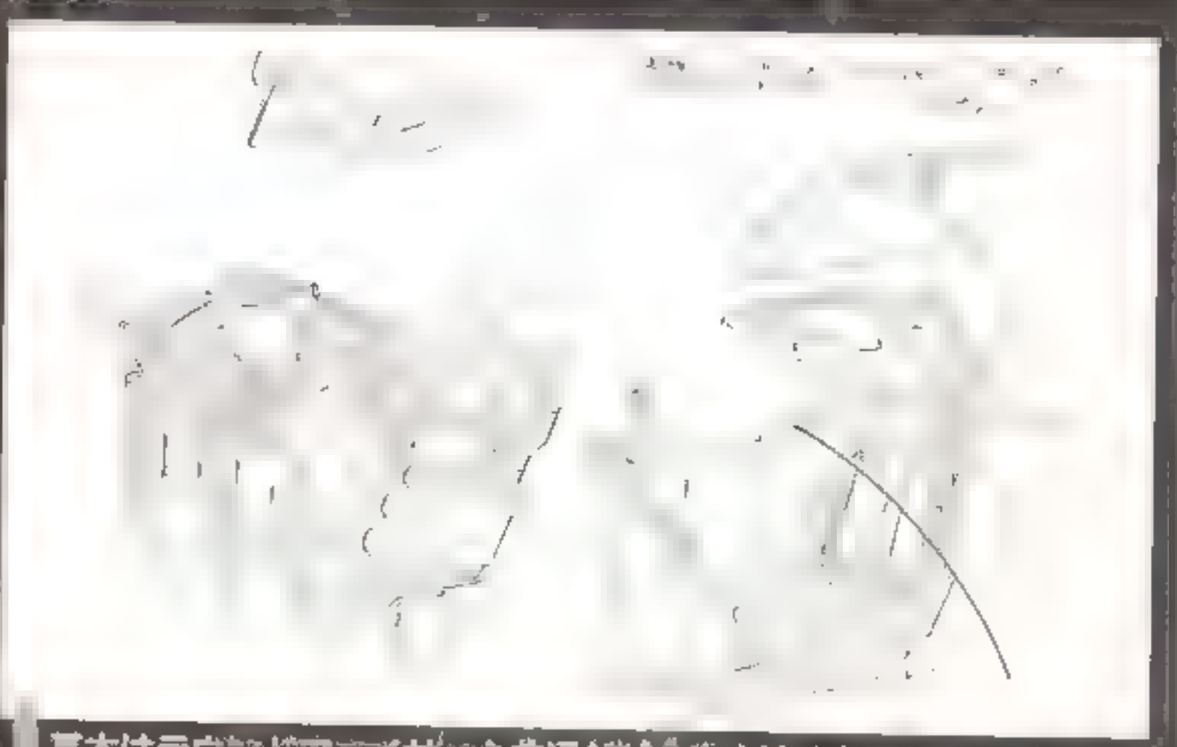
頭部コクピットを抜けるようにロケット弾ポッドが一体化されている。

武器/マグランチャー

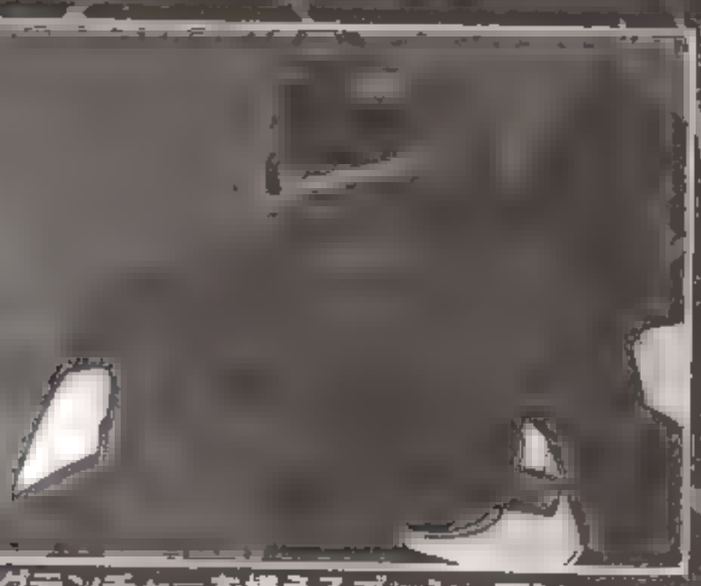


グレネードランチャーを携帯兵器と共にマグランチャーを標準装備する。

正面



基本はラウンドフェイザーと共通だが、広さはひと回りコンパクトにまとめられている。



グランチャーを構えるブッシュマン

名称	ソルティック H404S マッケレル SOLTIC-H404S-MACKEREL
搭乗員	1名
全高	8.7m
空虚重量	19917kg
作戦全備重量	25817kg
設計最大重量	31100kg
ジェネレーター	ロールスロイス N14-S6 ×1
基本出力	53万[illegible]
設計最大歩行速度	42km/h(作戦全備重量時)
水中最大推進速度	24ノット
最大跳躍加速度	1.4G
燃料搭載量	NM44 [illegible]
標準作戦行動時間	316分(5時間16分) 水中用ブースター背部装着
標準武装	ロケット弾ポッド ×2 対アーマーライフル ×2

マッケレル MACKEREL

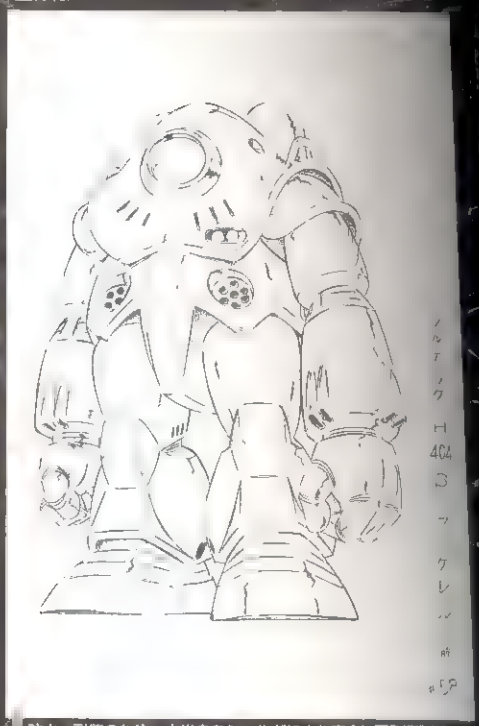
水陸両用CBアーマー

水中（海中）からの揚陸作戦を[illegible]CBアーマー。ラウンドフェイサーは防水[illegible]が入ると故障してしまう弱点があり[illegible]できないなどの制限があった。[illegible]ため、全身を包み込む潜水服のよう[illegible]水中推進器を背部に装備している。ただ[illegible]の装備はなく、上陸後も武器の威力不足[illegible]偵察や揚陸による奇襲作戦などで性能を発[illegible]

全体像・真横

くるぶしまで達する巨大な腕が特徴的。

全体像

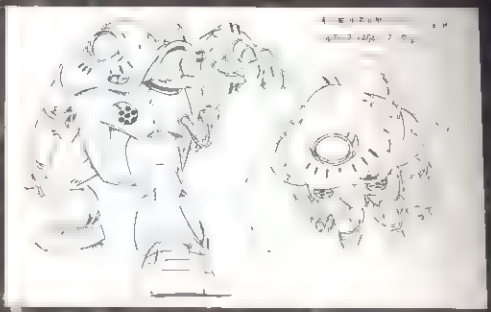


防水、耐圧のため、上半身をシールドにより完全に覆う構造となっている。

全体像　背部

背部には、着脱可能の水中推進器を装備している。

コクピット　操手席



水中推進時と腕を上げ対アーマーライフルを構えた時のポーズ。

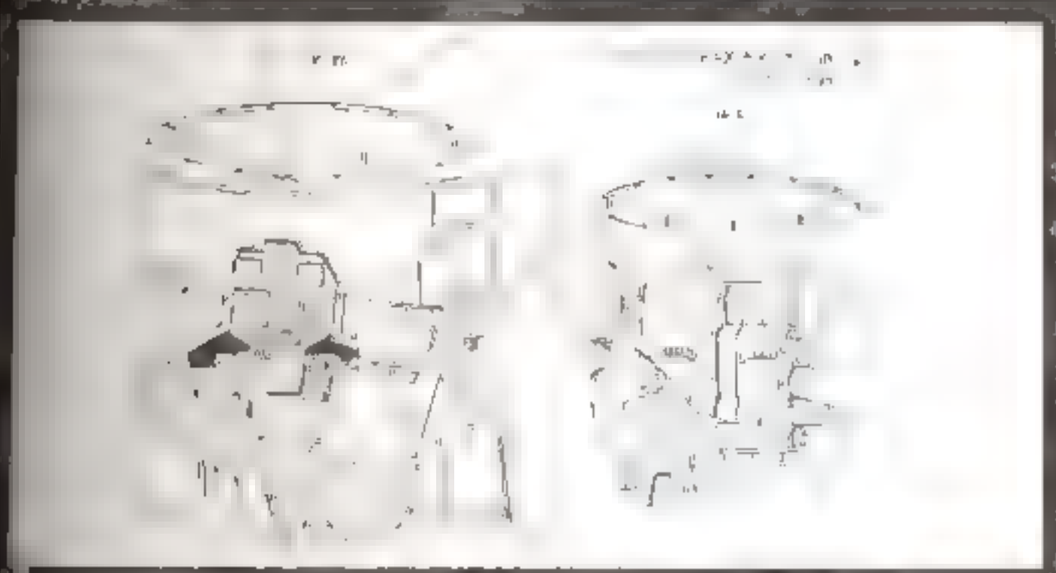
◀設定補足▶
❶#18-c323←でソルティックH8ラウンドフェイサーが臨時に使用　❷発射時排気煙が出る　❸作画注意　人物の比率はこれより大。もう少し大きめに作画

ヘイスティ HASTY
Xネブラ対応型CBアーマー

機体名	アイアンフット F4X ヘイスティ IRONFOOT-F4X-HASTY
搭乗人数	1名
全高	8.94m
総重量	29963kg
機体重量	31164kg
装甲重量	33516kg
最大重量	35610kg
動力炉	ロールスロイス N13-G
出力	63ポイント/3
最大歩行速度	47km/h(作戦全備重量時)
最大瞬間速度	2.3G
推進剤	NM46タイプ×5
作戦行動時間	275分(4時間35分)
武装	リニアガン×1(右腕装着式) 対アーマーセイフル×2(左腕内装) ロケット弾ポット スモークディスチャージャー×3(左胸部)

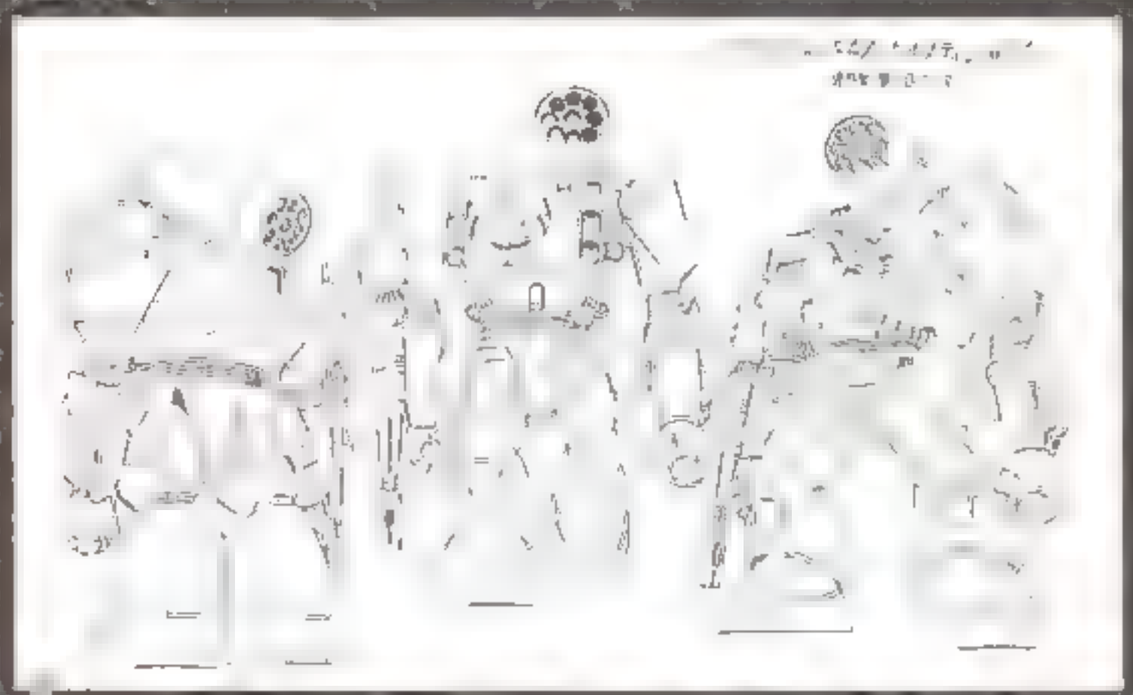
ラウンドフェイサーに替わる連邦軍次期主力機を期待され、開発段階から対CBアーマー戦闘を想定して誕生した最新鋭機。武装、装甲、運動性能など、どれも高い性能を有し、Xネブラにも対応している。頭部を廃し胸部右側に閉鎖式コクピットを設置するという機体構造は、パイロットの防御性を高め乗員の生還率を上げている。デロイア独立戦争後半、ウルナ基地に配備されたが、基地でのデロイア人兵士の反乱により、独立派ゲリラ(解放軍)に渡ることとなった。

コクピット



開放型のコクピットで、直接視界の狭さはセンサー類で補う設計となっている。

全体像



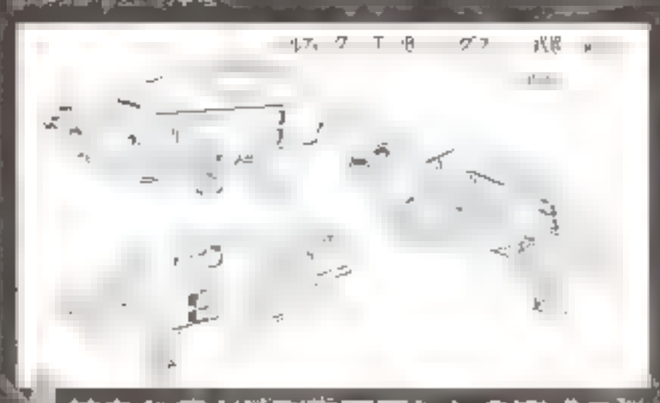
低い全高、左右非対称のデザインが目を引く。肩上のロケット弾ポッド、右腕のリニアガンは共に大型で強力な物となっている。

ビッグフット BIG-FOOT
寒冷地用複座CBアーマー

機体名	ソルティック HT128 ビッグフット SOLTIC-HT128-BIG-FOOT
搭乗人数	2名
全高	11.64m
総重量	27043kg
機体重量	28315kg
装甲重量	29261kg
最大重量	30012kg
動力炉	ロールスロイス N13R×1
出力	63ポイント/5
最大歩行速度	48km/h(凍土上)
最大瞬間速度	2.7G
推進剤	NM44Cタイプ×4
作戦行動時間	231分(3時間51分)
武装	2連リニアガン×1 ロケット弾ポット×1 スモークディスチャージャー×4

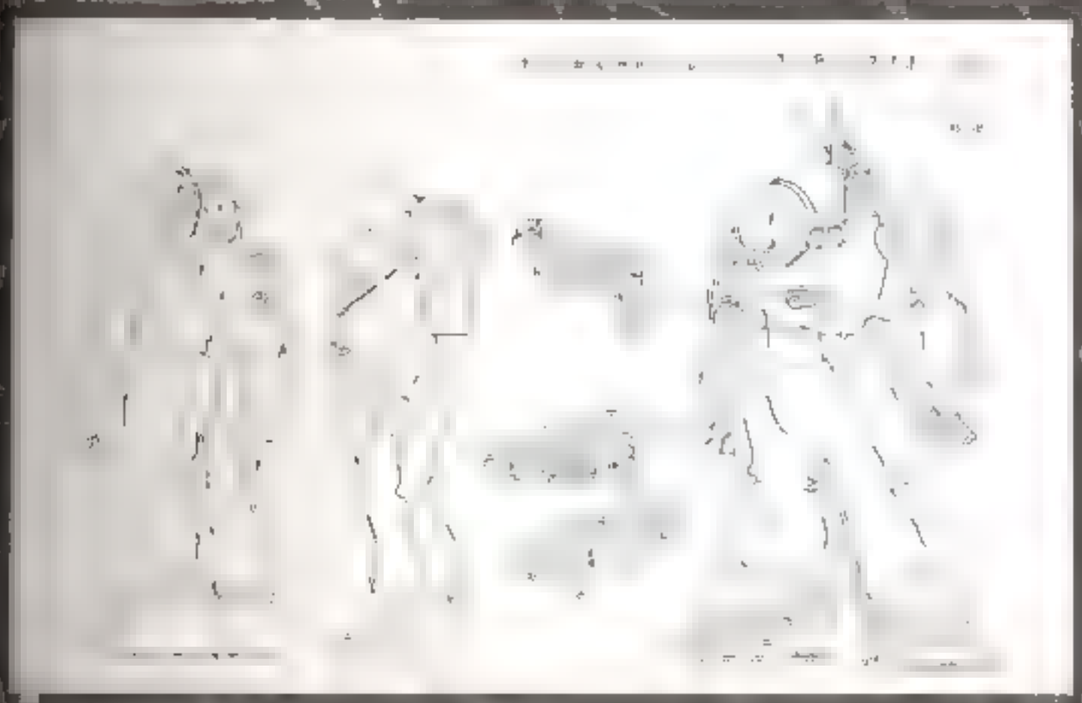
寒冷地戦用複座式CBアーマー。元々はソルティック社がラウンドフェイサーの後継機として開発を進めていたが、連邦軍からの仕様変更要請により寒冷地に特化した機体となった。Xネブラに対応し基本出力も高く、凍結路などでの歩行速度も速かった。雪中迷彩を施した偵察のためのカムフラージュスーツも用意され、マイナス50度でも作戦行動可能。デロイア独立戦争の最終決戦となった戦闘に参戦するガルナ[illegible]山脈の戦いで活躍した。

リニアガン



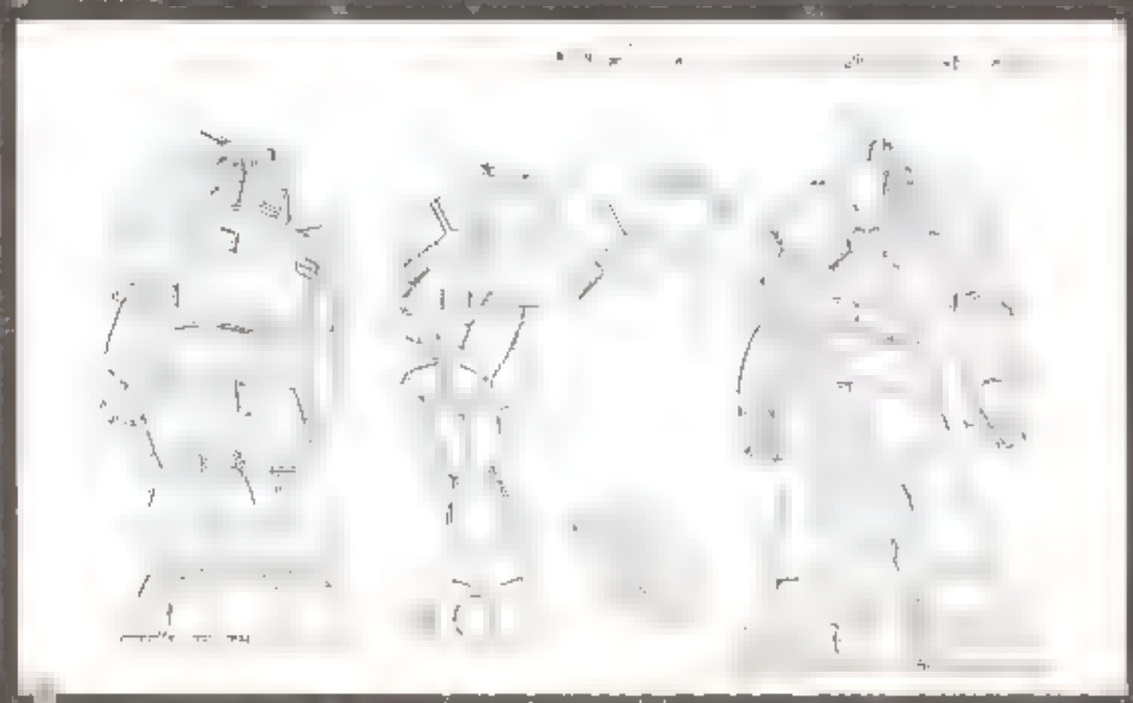
銃身を2本束ねた2連式のリニアガン。

カムフラージュ用服装



雪中での視認性を下げ、主要関節部への雪などの侵入も防ぐ効果を持つ。

全体像



複座式になり頭部コクピットと球形キャノピーや胸部などが大型化している。

ブリザードガンナー BLIZZARD-GUNNER
寒冷地用 CB アーマー

搭乗	2名
全高	10.388m
全幅	13.16m
空虚重量	29.850kg
作戦全備重量	38.543kg
最大出力	2741kW
ジェネレーター	アモチコフ RM6C ×1
基本出力	57ポイント/秒
最大推力	[illegible]
最大[illegible]	[illegible]
最大[illegible]	[illegible]
最大[illegible]	[illegible]
最大[illegible]	320分/6時間
武装	リニアカノン [illegible] [illegible] [illegible] 8連装 ×8

[illegible]が、メンブラに対応し、対CBアーマー戦を想定した[illegible]。[illegible]により[illegible]コンパクト機体にまとめられ、[illegible]に[illegible]ということもあり、戦果は限定的だった。

砲塔 足底 ポーズ

砲は左右には振れず、基本的に機体自体を動かすことで照準を定める。そのため高い運動性が確保されている。

全体像

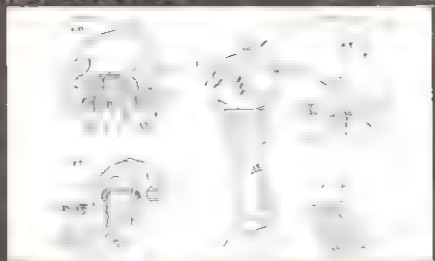
リニアカノンと乗員2名、そして無線や情報設備と動力関係、それらがこのコンパクトな機体にまとめられている。

ニコラエフ NICHOLAIEV
暴徒鎮圧用 CB アーマー

搭乗	1名
全高	9.[illegible]m
全幅	1.[illegible]m
作戦全備重量	21.[illegible]kg
作戦全備重量	22.[illegible]kg
最大出力	2301kW
ジェネレーター	モシナコフ RM2A ×1
基本出力	9ポイント/秒
最大推力	40.[illegible]
最大[illegible]	0.9G
最大[illegible]	[illegible]33分/[illegible]
最大[illegible]	457分/[illegible]
武装	リニアカノン [illegible]24ミリ[illegible] 6連ロケット内蔵ポッド ×2 [illegible]

[illegible]ていた[illegible]の二[illegible]型CBアーマー。[illegible]コクピット[illegible]と[illegible]。[illegible]白[illegible]。[illegible]速[illegible]。[illegible]動力は[illegible]。[illegible]ではなく、[illegible]として[illegible]。[illegible]。[illegible]として実用された機体で、デロイア星ではサマリン博士の軟禁場所の警備用機に配備された。

搭乗 コクピット 足底

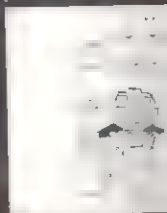


球形のキャノピーにより、コクピットは上方も含む広い視界を持つ。

全体像

ひみを帯びた扁平な上半身に二脚を付けたような特徴的外見。

コクピット



[illegible]型のコクピットで、[illegible]なっている。

ソルティック HT
SOLTIC-HT3

搭乗	2名
全高	[illegible]
全幅	[illegible]
作戦全備重量	[illegible]
作戦全備重量	[illegible]
最大出力	3820kW
最大[illegible]	3001kW
ジェネレーター	[illegible]
基本出力	68ポイント/秒
最大推力	[illegible]
最大[illegible]	[illegible]
最大[illegible]	[illegible]
最大[illegible]	31分/[illegible]
武装	リニ[illegible] コク[illegible]

カムフラージュ用[illegible]

雲中での視認性を下げ[illegible]う。

カタログスペックではうたわ

ーン
OSION
の開発と開発

5。命中箇所により破壊のさ

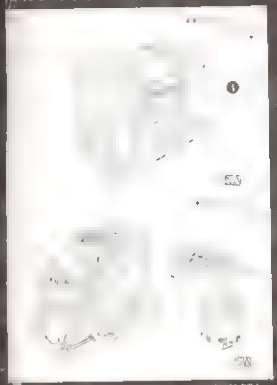
が命中したときの表現指示。

CBアーマー運用 OPERATION

運用・メンテナンス・補給

記録のための運搬から、弾薬や燃料の補給、機体の修理、整備まで。CBアーマーという兵器の運用は、[illegible]に出ない数多くの支援体制によって支えられている。そのごく一部分をかいま見ることでも、CBアーマーを取り巻く世界の息遣いを感じることができる。

ソルティック・パッケージ

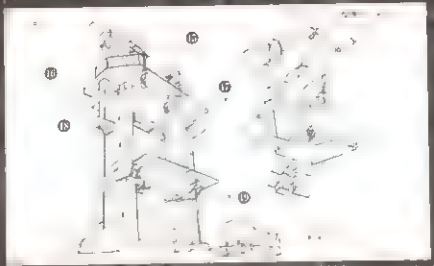


ソルティックは、ユニットごとに分解し、[illegible]

カモフラージュ・ネット

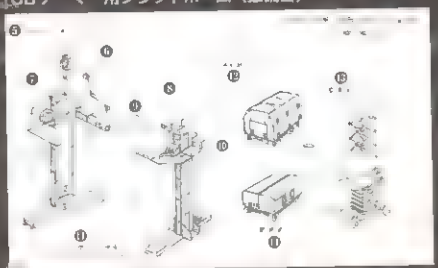
戦場での駐機中に敵の目から機体を隠すための迷彩ネット。

CBアーマー用プラットホーム（整備台）



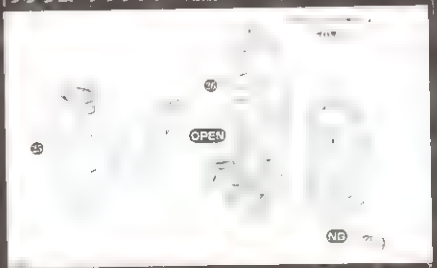
ソルティックを直立状態で整備することができる整備台。

CBアーマー用プラットホーム（整備台）



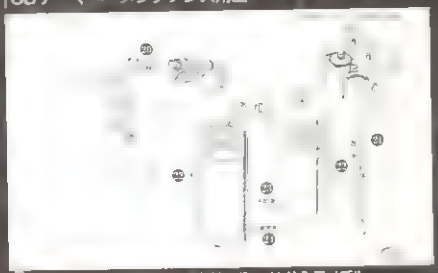
整備台は左右から機体を挟みこむようにする。どちらか1台だけでも使用可能。

ダグラム　メンテナンス用品

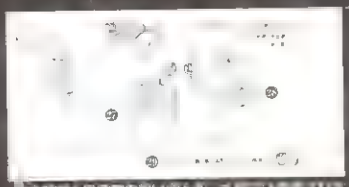


ダグラム用の燃料棒とその運搬ケース。

CBアーマー　メンテナンス用品



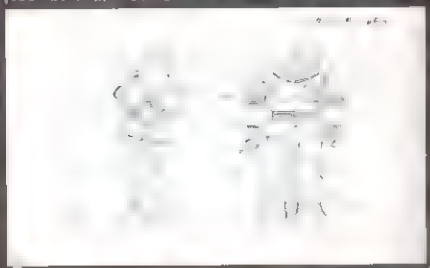
CBアーマー用の冷却剤と安定剤のボンベと注入用ノズル。



冷却剤と安定剤の[illegible]ボトル。[illegible]かった。

コホード州連商官ガーコフが、ラコックとの面談で持参した新型機のカタログ。

カタログに載っていたCBアーマー



ビッグフット以上の高い寒冷地性能が、カタログスペックではうたわれている。

ソルティック・パック

ソルティックは、ユニ
それらを一つのコンテナ

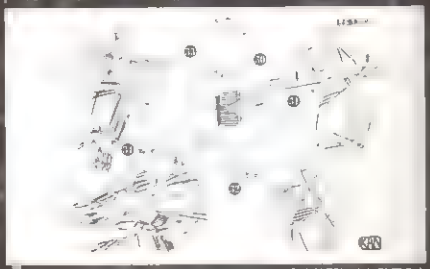
『太陽の牙ダグラム』で使われた兵器による弾痕や爆発の違いについても演出として描き分けていた。こうした細かいこだわりも、『ダグラム』を見ていて感じたリアル感を支えていたと言えるだろう。

爆発パターン EXPLOSION
兵器ごとの着弾と爆発

ナパーム弾の爆発パターン

着弾した周囲を焼き尽くす焼夷弾の爆発表現指示。

Eガン／レーザーガンの爆発パターン

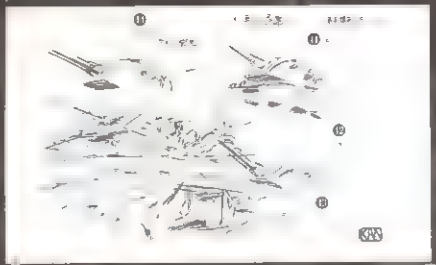


高速の弾体が装甲を貫通し内部を破壊する。命中箇所により破壊のされ方も変わることが指示されている。

CBアーマー用ブラッ

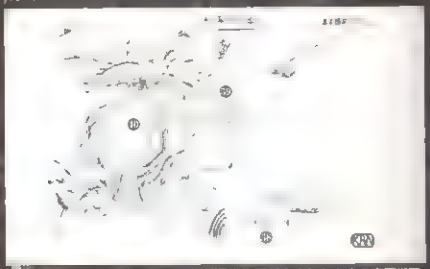
ソルティックを直立状態

熱弾の爆発パターン



放送当時は熱弾とも表現されていた対戦車榴弾（HEAT、成形炸薬弾）の命中と爆発の表現指示。

通常炸薬の爆発パターン



砲弾やロケット弾、ミサイルなど通常炸薬が命中したときの表現指示。

ダグラム メンテナ

ダグラム用の燃料場と

◀補足解説▶

●無線ネット　●本の無線ネットにさしこむ口。　●巻きされが結いつけてある　●一文字型のランプ　●CBアーマー用プラットホーム　●マジック・ハンド　●A　●B　●支柱　●リフト　●※A、B、Cは合で1個ですが、現場では1台のみで使われることが多い　●油圧用タンク　●燃料用プラットホーム　●電源車　●クレーン・オプション　●この高さダグラムの高　●手摺　●リフト　●梯子　●自走式発電ユニット（ダグラム搭載用）　●ケースは燃料棒のものと同じ型です　内蓋上面（フタ）だけこのようにして下さい。　●60cm　●冷気噴　●成型剤　●85cm　●70cm　●40cm　●43cm　●リテーク　ボンベ筒の高さ　方光80cm前後あり　●小さいものは貫通してしまう　●刺さる穴があ　●穴と近くのつぶ筒より放電する　●ガタガタになる　●圧力波でなればさらに爆発する　●光る　●パァーっと光がながり　●明るく輝き上る　●明光輝く輝き上る　●内光輝えて静寂に戻る　●輝く光の輪で渦巻き巻き上る　●輝く　●ぱっと輝く　●上がる　●へ入り、中から発光

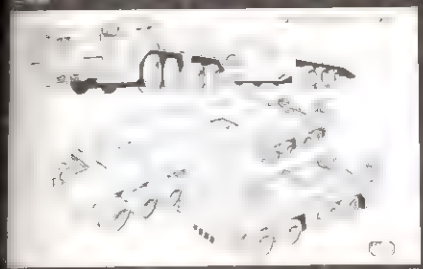
【完本　太陽の牙ダグラム】

車輌関係（軍用）

デロイアフのトレーラー
TRAILER TRUCK
メンテナンスクレーン付き

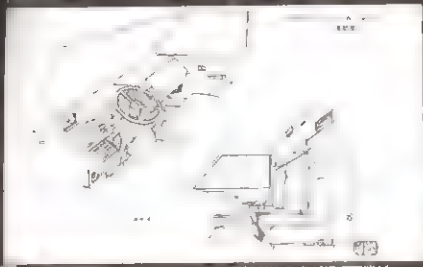
[illegible]

全体像



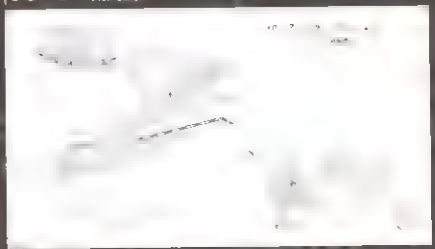
CBアーマーを搭載するための上面が平らなトレーラーを牽引する機

運転席



前部光塗りの運転室内部。ここには運転者他２名が乗車可能だ。

クレーン・機関銃



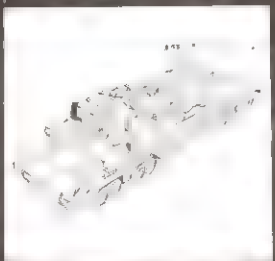
トレーラー搭載車と一体になるようクレーンは工夫されている。機関銃車はノーマルタイプ[illegible]してある。

全高も大きく なっている。

ジャッキ

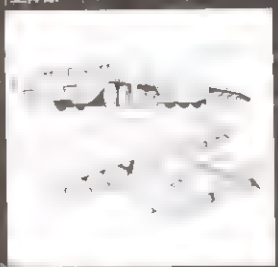
ジャッキで直立させダグラ
ム位置に合わせ縦横する

ダグラムを搭載した運用図



各部をワイヤーで固定しダグラムを搭載す

全体像



幅広の大型タイヤにより高い走破力を有
し[illegible]でも問題なく運搬する

トレーラートラック
TRAILER TRUCK
連邦軍が使用した物

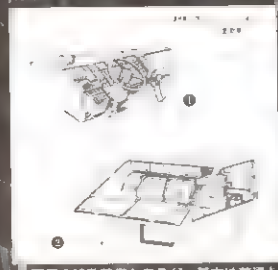
CBアーマー運搬用大型トレーラー「プロムリーLTR62」。この車体にはダグラム用のリニアガンなどを射出するカタパルトや大型ウインチを装備している（第１話でデロイアフのトレーラーとして登場）。

乗員・３名、車輌全長・17.76 m、全幅・5.90 m、全高・2.28 m、全備重量[illegible]
[illegible]
最高速度）80km/h（最大積載時最高速度）。

カモフラージュ用迷彩シート

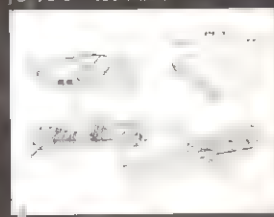
夜間休息時や日中の待機時などで、敵の目
を欺くための[illegible]

運転席



専用の特殊装備もあるが、基本は普通ト
ラックなどと大[illegible]

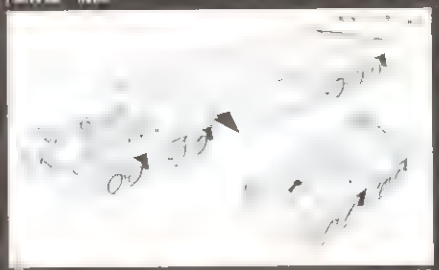
ウインチ・カタパルト



ウインチは荒地などでダグラムを吊り上げる[illegible]とも可能。カタパ[illegible]

[illegible]ングミラー[illegible]
ンド系の砂漠迷彩で
push ●[illegible]入口
入口 ●☆[illegible]ボタン
[illegible]ドル ●クリンの[illegible]

全体像　前側



全長などは長くなっているが、基本形態はそれまで使用したLTR62と大きな違いはない

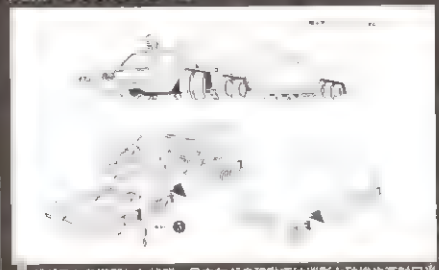
太陽の牙のトレーラー
TRAILER TRUCK
ターボザック収納タイプ

「ターボザックと同時に太陽の牙（デロイ7）に支給されたのが、ダグラム専用に開発された大型トレーラー「ブロムリー・アイバン DT2」。トレーラー最の格納室（ストールーム）に、ターボザックを搭載できる構造となっている。さらに、上に搭載する大型ユニット、ダグラムに装備していない単独状態でリニア・カノンを発射可能で、戦台としての役目もこなせる

全体像

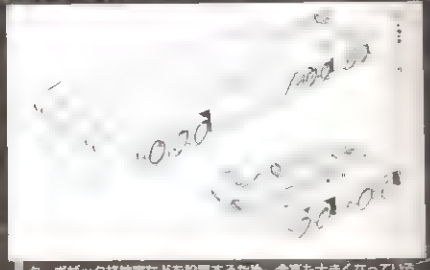
CBアーマーを

運用　ダグラム搭載・横



ダグラムを搭載した状態。日中などの移動では迷彩と砂塵や輻射日光を遮るための幌を掛ける

全体像　後ろ側

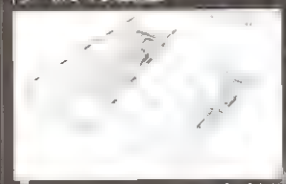


ターボザック格納室などを設置するため、全高も大きくなっている

運転席

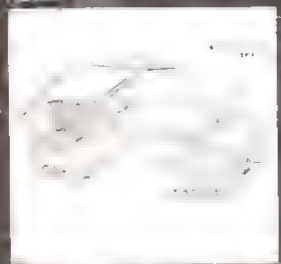
前部左寄りの運

ターボザック格納室



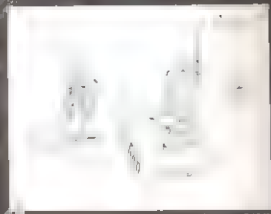
ジャッキで固定しトレーラー内部に寝かせる形でターボザックを収納する

運転席



LTR62をほぼ踏襲した構造で、運転室は

ターボザックジャッキ



ターボザックはジャッキで直立させダグラム背部の取り付け位置に合わせ装着する

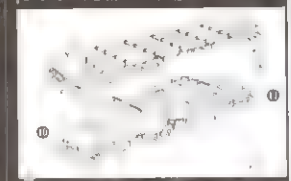
ダグラムを搭

各部をワイヤ

車用トラック
TRAILER TRUCK
改造し応急トレーラーに

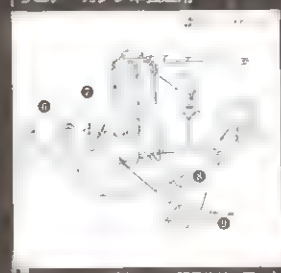
トラックを改造し応急トレーラーとすることが可能。

ダグラムを載せた車用トラック



トラック２台を前後反対向きに並べ、その間を木材などで台を組んで搭載した

リニア・カノン単独運用



ジャッキを砲座にして、簡易的リニア・カノン砲台として使うこともできる

ブロムリー・アイバン DT2
BROMRY-I-VAN DT2

全長	8.81m
全高	3.33m
全幅	2.34m
ホイールベース	0.43m
出力	928hp
速度	125km/h
搭載物最大重量	[illegible]
	（最大積載時最高速度）
装備	ウインチ　×
	投光器　×

●ガラス入ります　●バックミラー装備　●c-54　●迷彩シート（サンド系のみ）[illegible]す）　●人物対比　●push　●照準器へ接[illegible]　●ターボザックへ接続　●☆発射ボタンへ接続　●クリンとの対比　●クリンの構造

カモフラージ

夜間休息時や[illegible]を驚くため

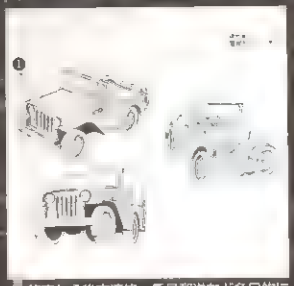
名称　ライリス OR390 ランドマスター
WILLIS-OR390

全長	3.30 m
全幅	1.78 m
全高	1.69 m
全備重量	1230kg
エンジン	ダッジ M26
出力	130PS
最大	72km/h
	121km/h
装備	ジープ装備、ライフル装備

四輪駆動車　トラック
4WD TRUCK
軍用小型・大型車輌

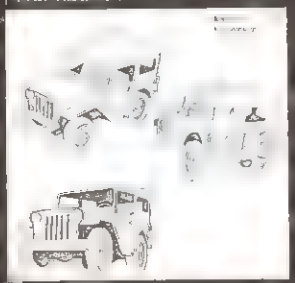
ジープ系車輌で、ジープ系の四輪駆動車や小型トラック系車輌で、ジープ系の四輪駆動車や小型～大型のトラック類は、戦闘や兵員物資の輸送など様々な場面で使用され、種類も数も多く存在する。

軍用四輪駆動車



偵察から後方連絡、兵員輸送など多目的に使用されるジープの基本仕様。

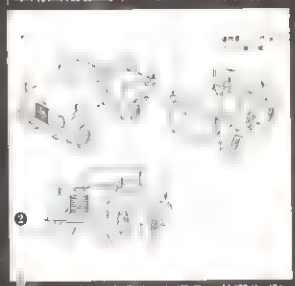
軍用四輪駆動車　キャンバストップ



ジープ装備の取り外し可能の布製天蓋を張った状態。

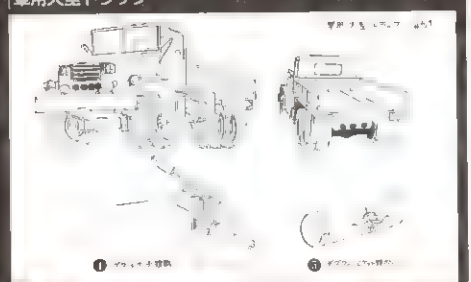
◀設定補足▶
●△蓋マークつける　●気持　WIDEに　●通常機銃です　12.7mm？　●グランドサーチ車輌　●ダグラム、ロケット弾ポッド　●ペリスコープ　●up　●対空仕様(I)　対空ロケット弾ポッド2門1基　●対空仕様(II)　対空ロケット弾ポッド　●重装備仕様(I)　ロケット弾ポッド2基　●軽装備仕様　機関銃　●重装備仕様(II)　無反動砲2連装2基　4門　●重装備仕様(III)　ミサイル・ランチャー　ミサイル2基　●内部は別紙参照　●各シートに座席式のシートベルトがついている　●逆ボジです。要するに左ハンドル

軍用四輪駆動車　ガルシア隊仕様



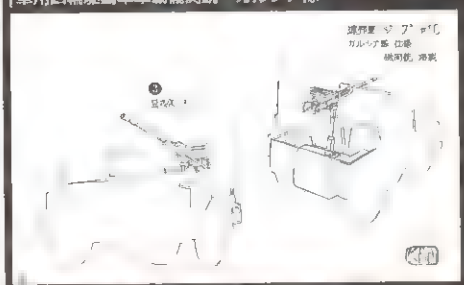
やや幅広でデザインも違う、前面やボンネットなどが仕様変更されたタイプ。

軍用大型トラック



より大きな積載力を必要とするホバークラフト「グランドサーチ」や、ロケット弾ポッドも輸送可能。

軍用四輪駆動車車載機関銃　ガルシア隊

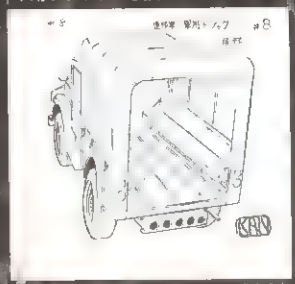


後部に機関銃座を設置し、対歩兵戦闘などで活用された。

名称　ライリス、HT380 ハーフローター
WILLIS-HT380

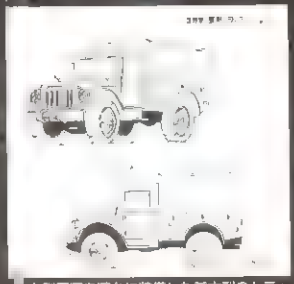
全長	5.31 m
全幅	2.28 m
全高	2.64 m
全備重量	2620kg
エンジン	ダッジ M41B
出力	112PS
速力	164km/h（空荷時最高速度）
	120km/h（最大積載時最高速度）
装備	[illegible]

軍用トラック　後部



兵員輸送時などで使用するベンチ式座席も装備。

軍用トラック　全体像



布製天蓋や荷台に装備した基本型のトラック。

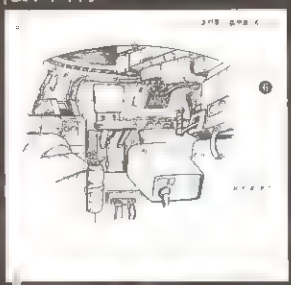
装甲車・兵員輸送車
ARMOURED CAR
小型戦闘車輌

[illegible]兵部隊の支援を目的として開発された[illegible]甲戦闘車輌。装備の違いにより多数のタイ[illegible]

名称　ブロムリー ARMCインステッド
BROMRY-ARMC-INSTED

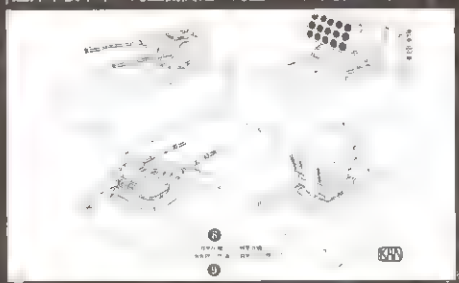
車輌全長	6.26 m
全幅	2.88 m
全高	[illegible]
総重量	28550kg
ホイルベース	4.28 m
トレッド	2.56 m
エンジン	GF-F888X
最大出力	264hp
最大速度	102km/h
標準航行距離	768km
最大渡渉深	[illegible]

装甲車車内



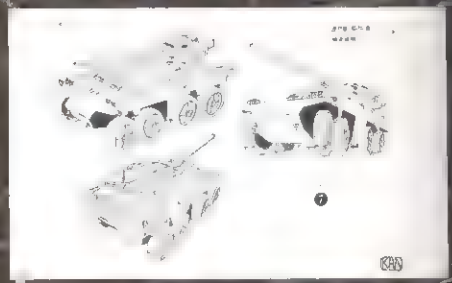
旋回砲塔の下側室内内部。

連邦軍装甲車　対空機関砲　対空ロケット弾ポッド



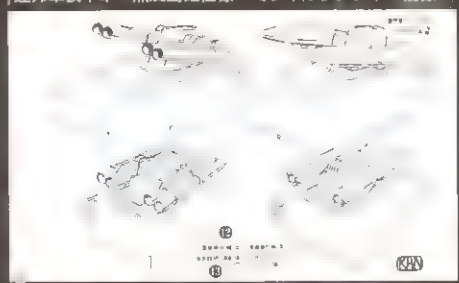
2機の対空機関砲（対アーマー・ライフル応用）を装備したDタイプ（左）と15連装ロケット弾ポッドを装備したEタイプ（右）。

連邦軍装甲車　標準タイプ



旋回砲塔にリニアガンを搭載したインステッドAタイプ。

連邦軍装甲車　無反動砲仕様　ミサイルランチャー仕様



2連装ミサイル・ランチャーを2機装備したFタイプ（左）と巡航ミサイルを2機搭載したGタイプ（右）。

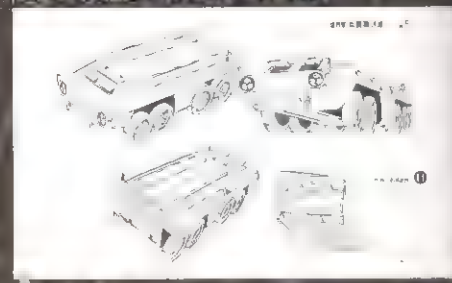
連邦軍装甲車　ロケット砲装備　軽装備仕様

Aタイプにロケット弾ポッドを2機装備したBタイプ（左）と22mm機関銃1機のみ搭載のCタイプ（右）。

兵員輸送車車内　運転席

運転手を含む15名の兵員を乗車させることが可能。

連邦軍兵員輸送車（ブロムリーBT480）



装甲車と同様、八輪式を採用した兵員輸送車。

クラフト
USHION VEHICLE
アーマー用　対人用

が開発された。連邦軍は対ＣＢ
ゲリラ側は反乱軍との合流に
クラフトにビッグＥガンな
したグランドサーチを手に入れ

サーチ

央にビッグＥガン、操縦席左
ー２機を搭載する。

ギー
ILE BUGGY
ック隊　使用車輌

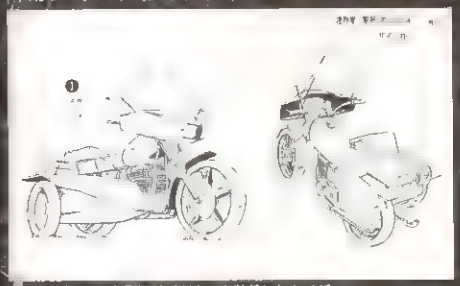
反軍ゲリラの「デロイアの要
ック隊」で使用されている機動
甲ながら、軽量で六輪駆
没のＪ・ロック隊の作戦を

て武装強化したタイプ。

軍用オートバイ・他
MOTORCYCLE
二輪車・コンテナトラック等

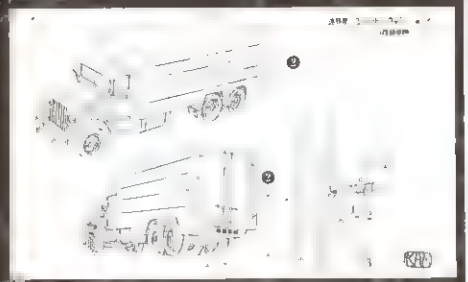
偵察や伝令、警備などの仕務で重宝され
二輪車で、連邦軍基地などにサイドカー
付きの物も含めて多数が配備されていた。
た、汎用の軍用トラックを改造し、ＣＢアー
マーのメインテナンス用品などを運搬する
めのコンテナトラックや、同じく改造で軍
車とした車輌も登場している。

軍用オートバイ（サイドカー）



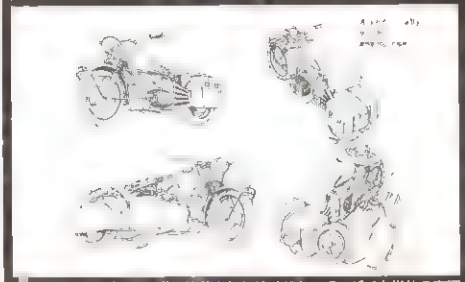
大型バイクの右側にサイドカーを装着したタイプ。

連邦軍　コンテナトラック



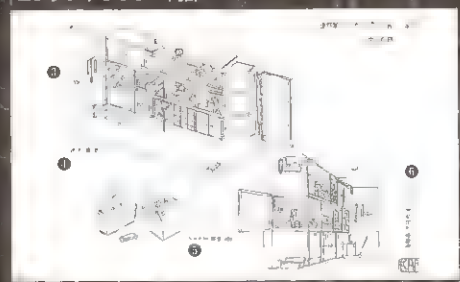
軍用トラックの後部荷台を、大型の屋根付きコンテナにしたもの。車輌全長が伸び搭載重量も増えた分、太えるタイヤを増設してある。

ガルシア隊　軍用サイドカー



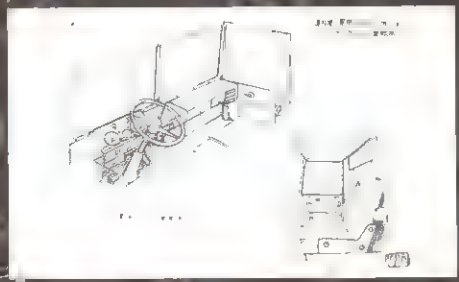
傭兵部隊のガルシア隊で使用されたサイドカーで、バイク単体の車輌も所有していた。

コンテナトラック　内部



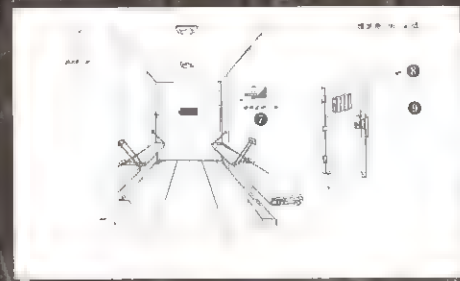
ＣＢアーマー用メインテナンス用品や雑貨など載せて搭載できる機
器が詰まる。

軍用トラック　コンテナトラック　運転席



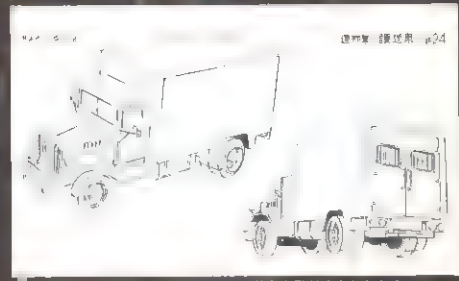
軍用トラックとも共通仕様の運転席。

護送車内部



簡易ベンチだけの簡素な作りで、小さな窓が運転席側と右側にあり後部ドアには鉄格子が入っている。

連邦軍　護送車

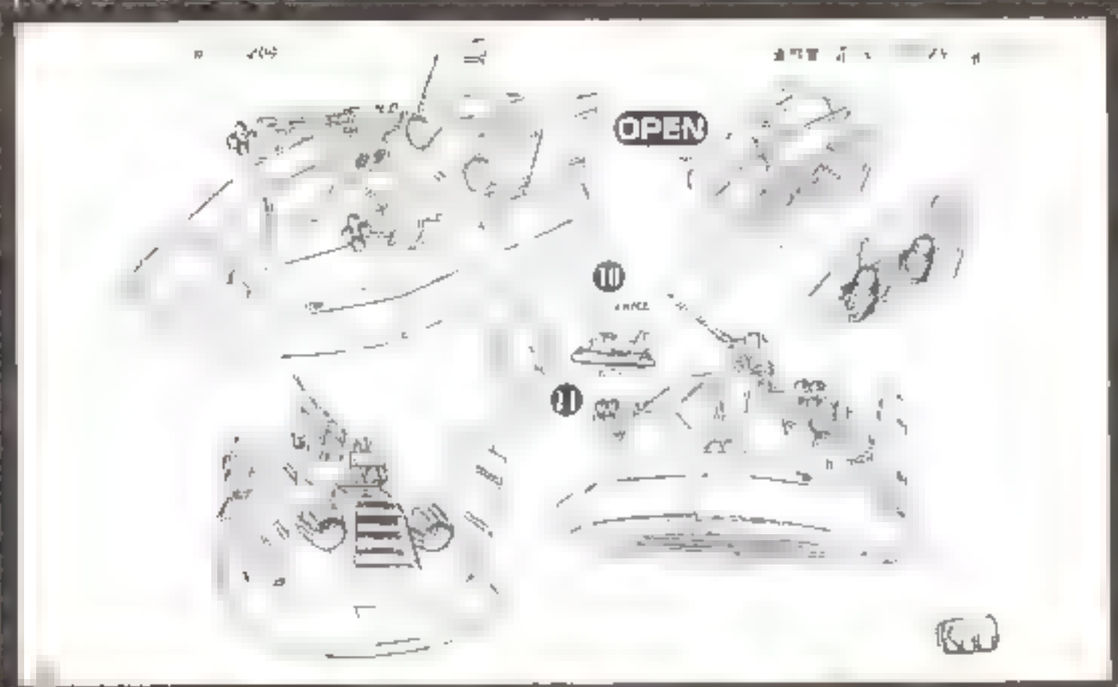


捕虜などを輸送するためトラックの荷台を監獄室としたもの。

ホバークラフト
AIR-CUSHION VEHICLE
対ＣＢアーマー用　対人用

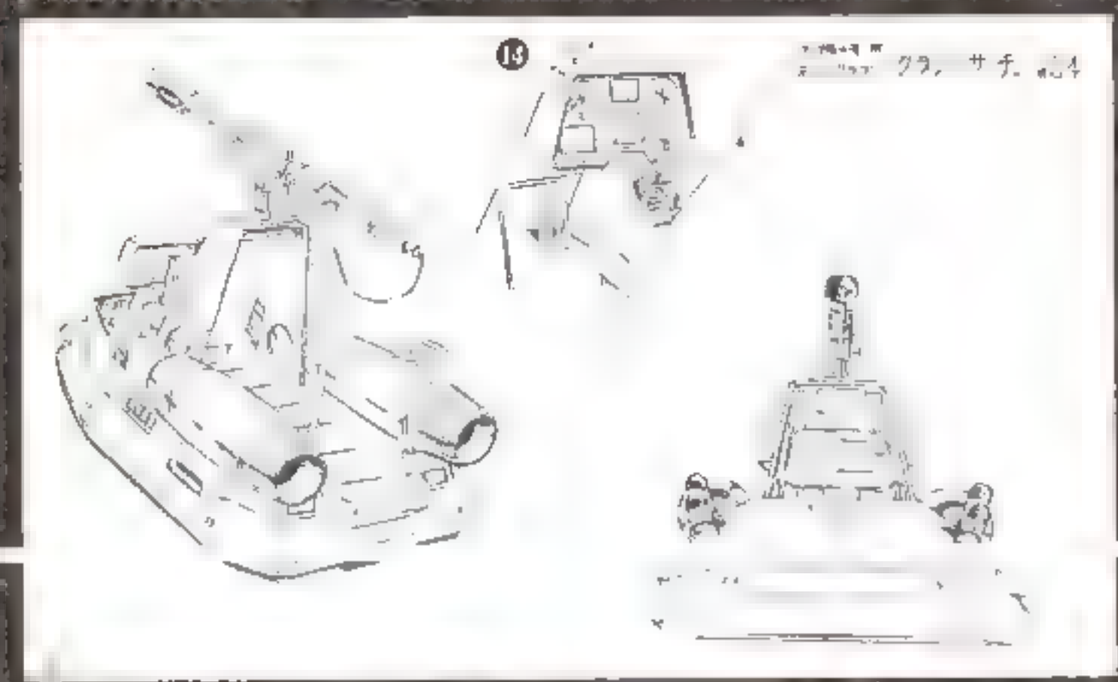
河川や湿地帯、さらに不整地路でも走行可能なホバークラフトの有効性に目を付け、戦闘用の機体が開発された。連邦軍は対ＣＢアーマー用の武装を搭載し、河川パトロールで使用。一方ゲリラ側は反乱軍との合流により、小型のホバークラフトにビッグＥガンなど火器を搭載したグランドサーチを手に入れた。

ホバークラフト



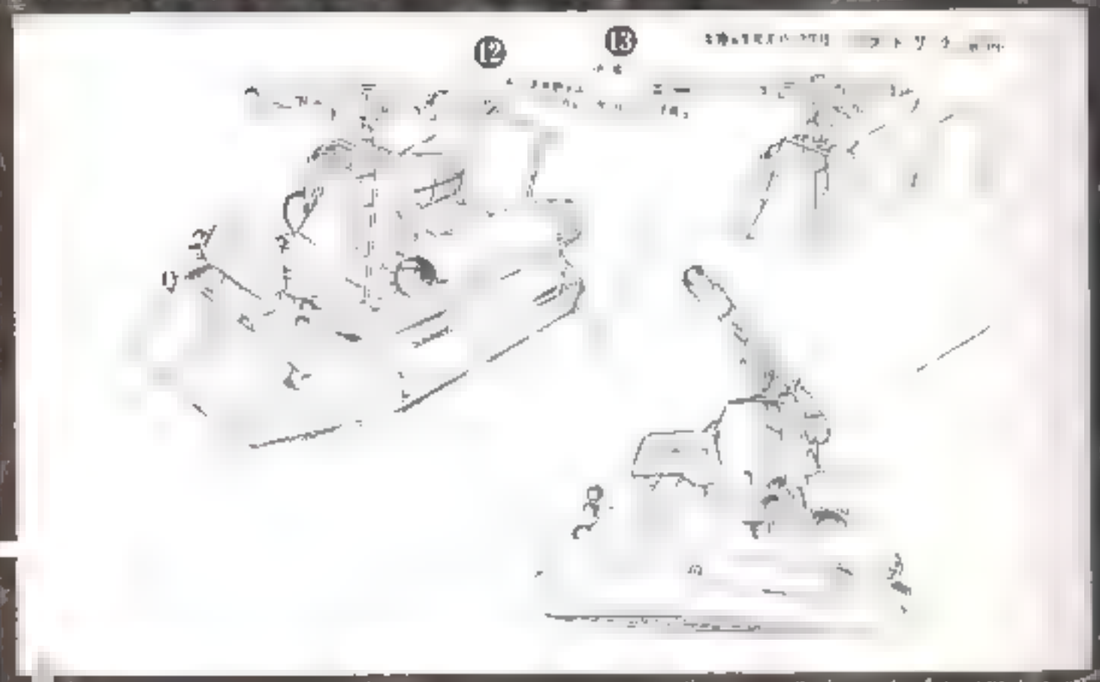
推進にはジェットエンジンを使用し高速走行する。リニアガン並びにミサイルポッドを搭載しＣＢアーマーとの戦闘も可能。

グランドサーチ　編隊



ビッグＥガンの射撃手は、機体後部に立って搭乗する。そのため落下防止用の柵が設置されている。

小型ホバークラフト　グランドサーチ



二人乗りの小型ホバークラフト。中央にビッグＥガン、操縦席左右にマーク・ツー機関スモークディスチャージャー２機を搭載する。

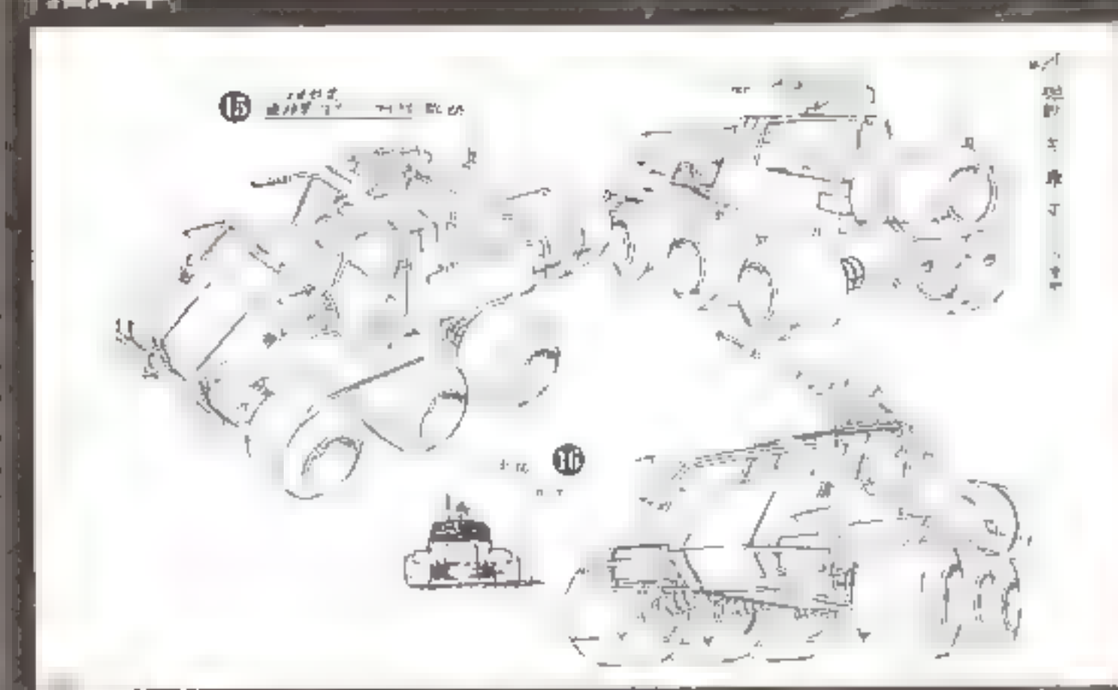
機動バギー
MOBILE BUGGY
J・ロック隊　使用車輌

デロイア解放軍ゲリラの「デロイアの星」（通称「J・ロック隊」）で使用されている機動バギー。小型で軽装甲ながら、軽量で六輪駆動による高い走破力、登坂力を持ち、対アーマーライフルやロケット弾ポッドなど強力な装備で、神出鬼没の「J・ロック隊」の作戦を支えた。

名称	ブロムリー JRS ネイティブランナー BROMRY-JRS-NATIVE-DANCER
車体全長	3.70 m
全幅	2.50 m
全高	1.63 m
車両重量	1115kg
ホイルベース	1.82 m
トレッド	前 2.04 m、中後 2.11 m
エンジン	OS 144M アイバン
最大出力	150hp（推定）
最高速度	180km/h（平坦路）
標準走行距離	900km
最大登坂能力	7°（最大）
武装	対アーマーライフル ×1 4連ロケット弾ポッド ×2

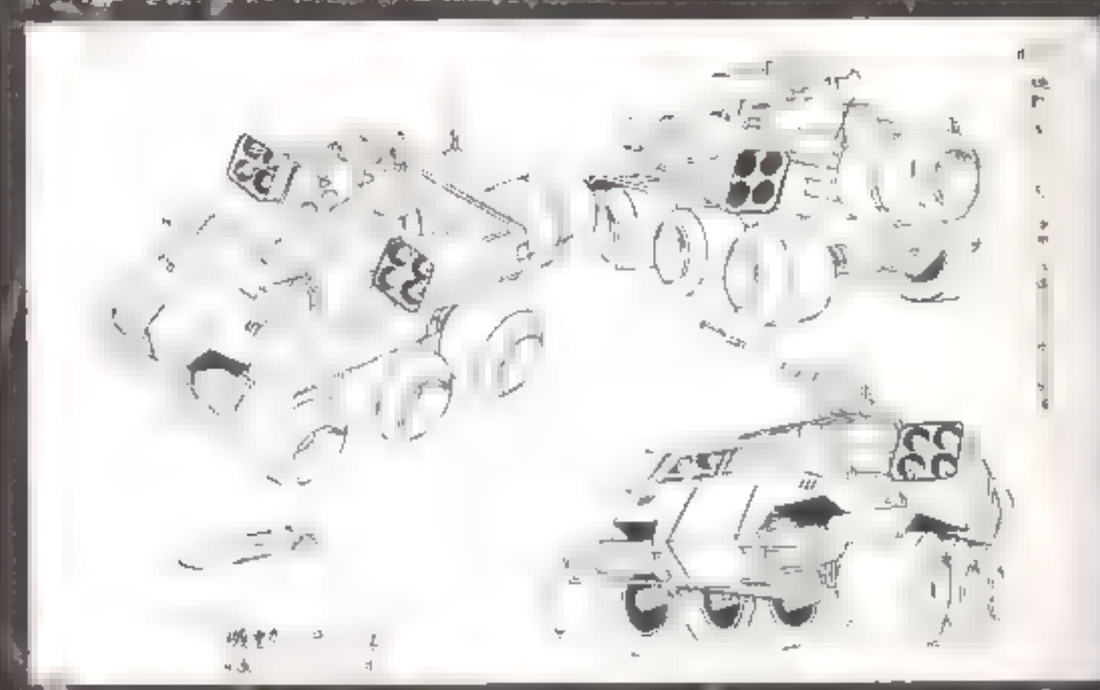
◀設定補足▶
●△部マークつける　❷ピト　❸人物　❹燃料棒庫　❺たなの上の雑貨、例　❻CBアーマー用安定剤、冷却液　❼運転席側から開く　❽ドア、内側　❾片方にはなし　❿ダグラムとの対比　⓫6.5m　⓬チコ使用時のみチコが自分で取り付けて使用スル　⓭通常　⓮こちらタコメーター　⓯メインメカ設定　連邦軍対アーマーライフルと同じもの　⓰く対比>J・ロック

指揮車



J・ロックが乗る指揮官用の車体。

4連ミサイルポッド装備タイプ



運転席左右にミサイルポッドを追加して武装強化したタイプ。

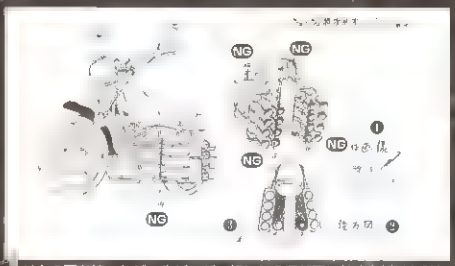
車輌関係（民間）

車用だけでなく民間でも車や二輪車などは貴重な交通機関である。多種多様な車輌が活躍している。敵デロイア星においては民間所有の車輌の一部は、ゲリラの移動の手段や輸送車輌として利用され、大きな戦力となった。

ロッキーたちのオートバイ

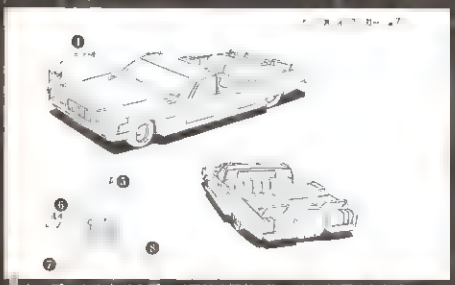
地球に労働者として来ていたデロイア人のロッキーたちが、仲間と集まる時に乗っていたオートバイ。

ジョルジュ特攻用オートバイ



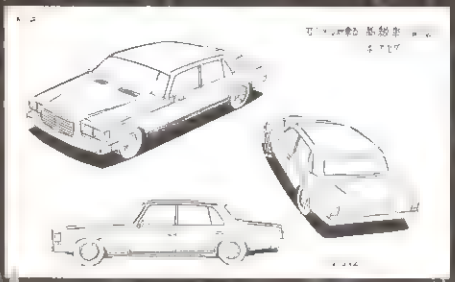
リタの死を知ったジョルジュが、怒りから連邦軍に特攻を掛けた時に使用したオートバイ。（実際に登場したものは、ロケット弾は左右一列すつの装備）

パレード用オープンカー



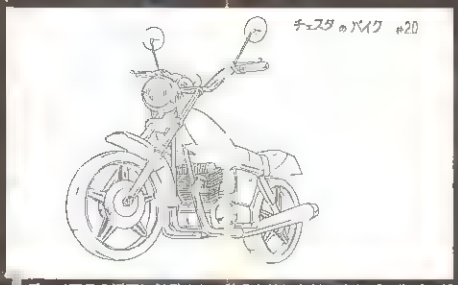
カーディナル市でのデロイア独立記念パレードで使用された車。

カルメルの高級車



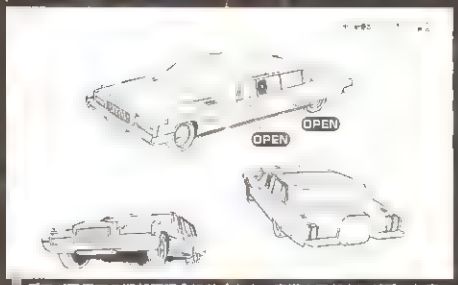
デロイア人民解放政府の首班となったカルメルの車。

ジョルジュのバイク



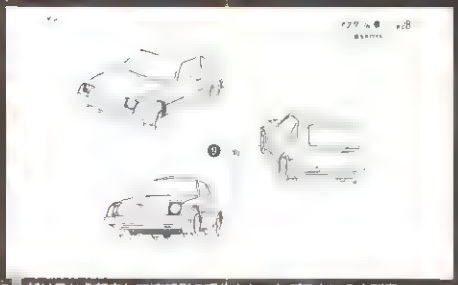
デロイア７の活躍に触発され、彼らを追いかけてきたジョルジュが乗っていたオートバイ。「チェスタ」はジョルジュの愛称。

ドナンのリムジン



デロイア星での連邦評議会に赴くとき、空港までドナンが乗った車。

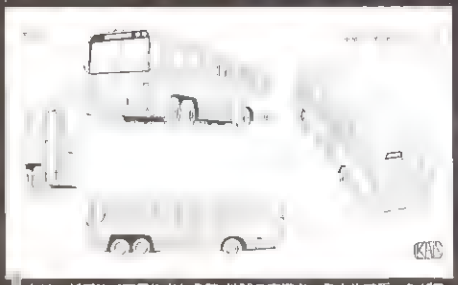
デスタンの車



ゲリラから転向して連邦側の手先となったデスタンの小型車。

●作画枚→実体は1列にして下さい。 ●〈〉表方向 ●マフラー ●デロイアの車 ●車 ●車輪（前広） ●サマリン ●カルメル ●人物 ●足台不要 ●カーディナル市までロッキー、デコたちが乗って来たジープ ●クリンとの対比 ●10本ぐらい動かす ●クリン ●クリンのサイズ ●解説等が入ります

地球　空港バス

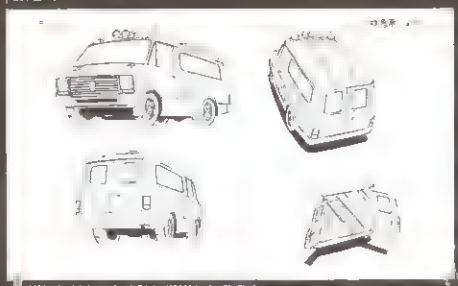


クリンがデロイア星に向かう時、地球の空港ターミナルで乗ったバス。

地球　メドール空港の消防車

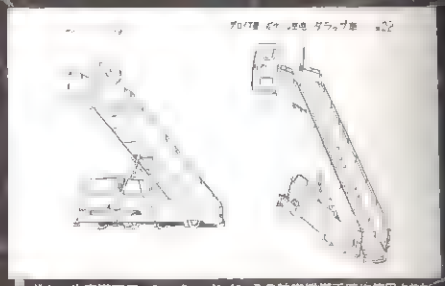
航空燃料火災に対応した化学消防車。

救急車



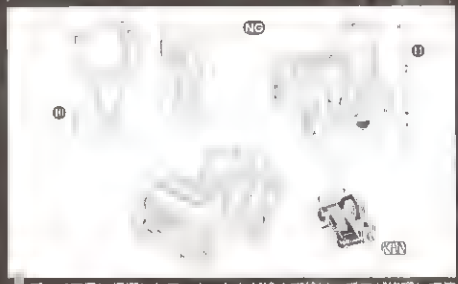
倒れたドナンを病院に搬送した救急車。

デロイア　ボナール空港のタラップ車



ボナール空港でフォン・シュタインらの航空機搭乗時に使用された。

民間のジープ



デロイア星に帰郷したロッキーたちが途中で拾い、チコが修理して使用したジープ。

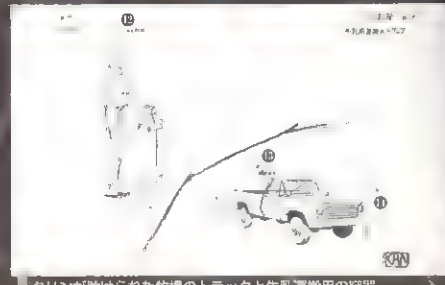
テレビ中継車

ボナールグランプリを中継するテレビ局の中継車。

小型トラック

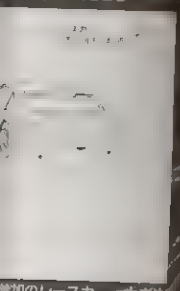
銀行を襲撃し現金を強奪したゲリラグループが使用した小型トラック。

牛乳缶搬送トラック　牛乳缶



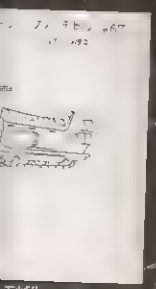
クリンが助けられた牧場のトラックと牛乳運搬用の容器。

ルティー4000



参加のレースカー。大きな

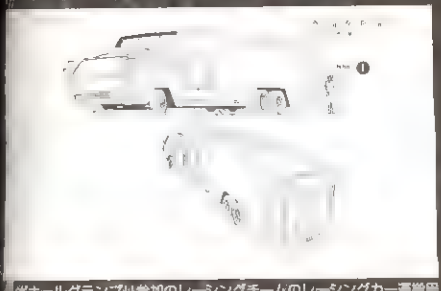
斜した後部と四灯式テー



モビル。

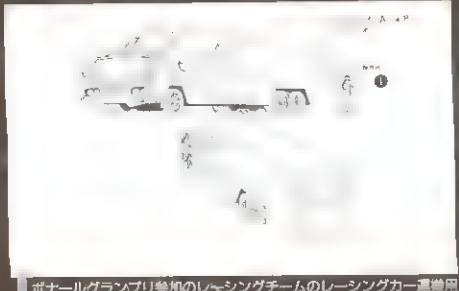
けめぐるクリンピテ

ーシングカートランスポーター 2



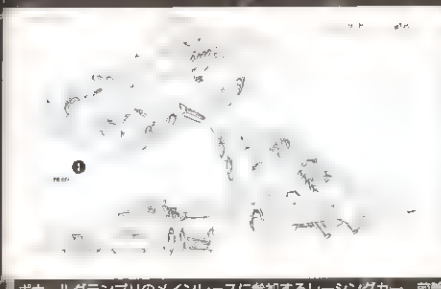
ボナールグランプリ参加のレーシングチームのレーシングカー運搬用車両の2。

レーシングカートランスポーター 1



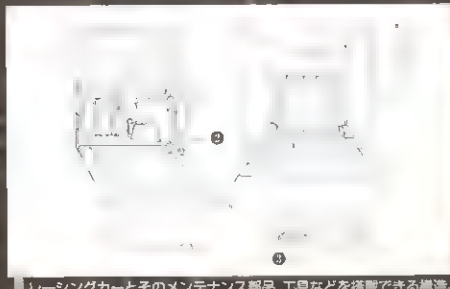
ボナールグランプリ参加のレーシングチームのレーシングカー運搬用車両の1。

レーシングカーA



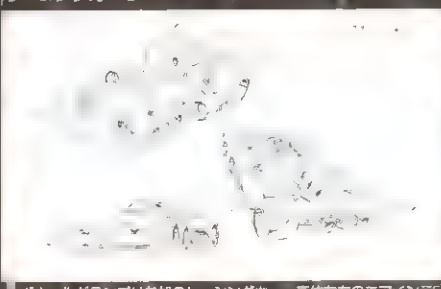
ボナールグランプリのメインレースに参加するレーシングカー。前輪をホイール側にしたバギー式。

トランスポーター 内部



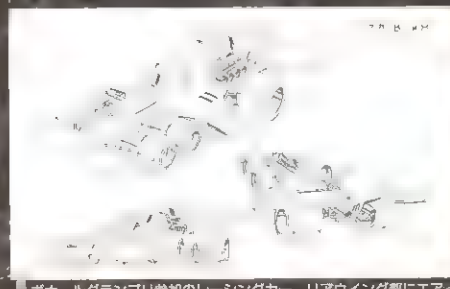
レーシングカーとそのメンテナンス部品、工具などを搭載できる構造。

レーシングカーC



ボナールグランプリ参加のレーシングカー。車体左右のエアインテークの形状が円筒形になっているタイプ。

レーシングカーB

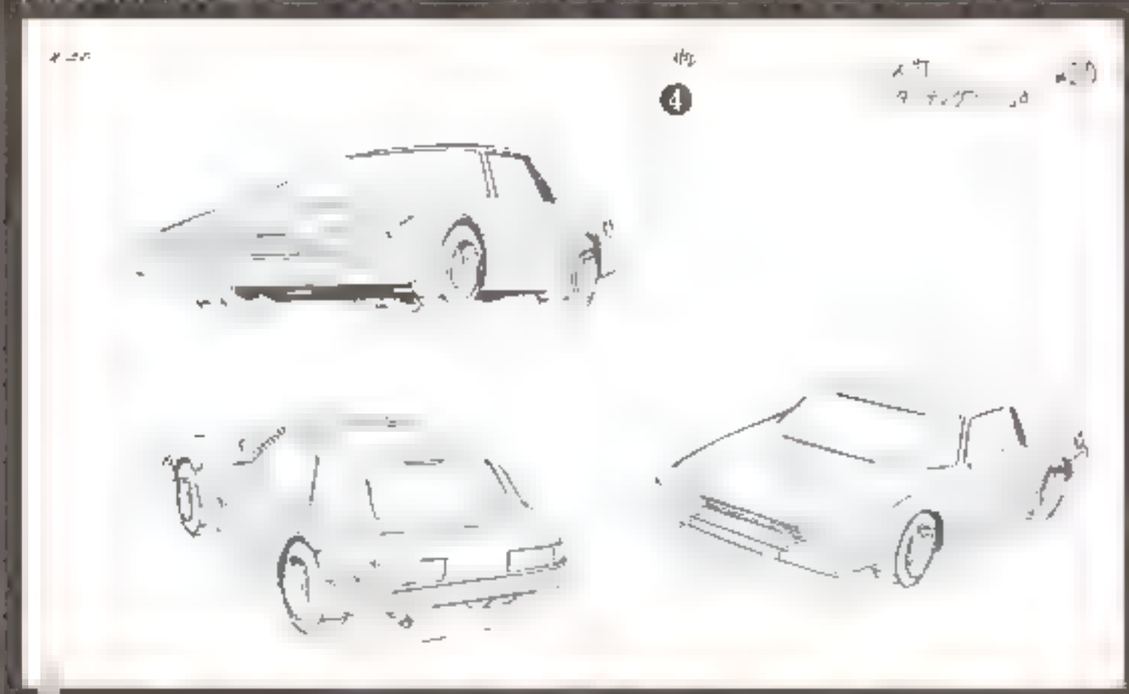


ボナールグランプリ参加のレーシングカー。リアウイング部にエアインテークを付けたタイプ。

レース前のパレードでスタンドに手を振るレーサーたちと、レーシングカー。

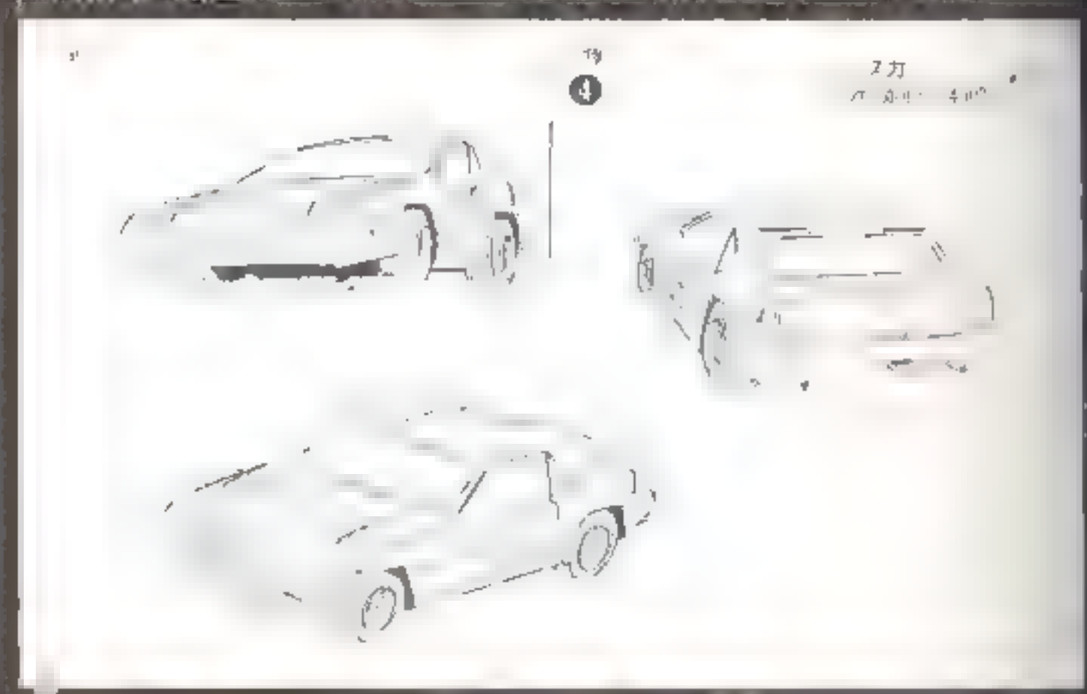
◀設定補足▶
●人物対比 ●同人比
●2台入ります ●人物

市販車改造レースカー　フェンダーティグラン　104



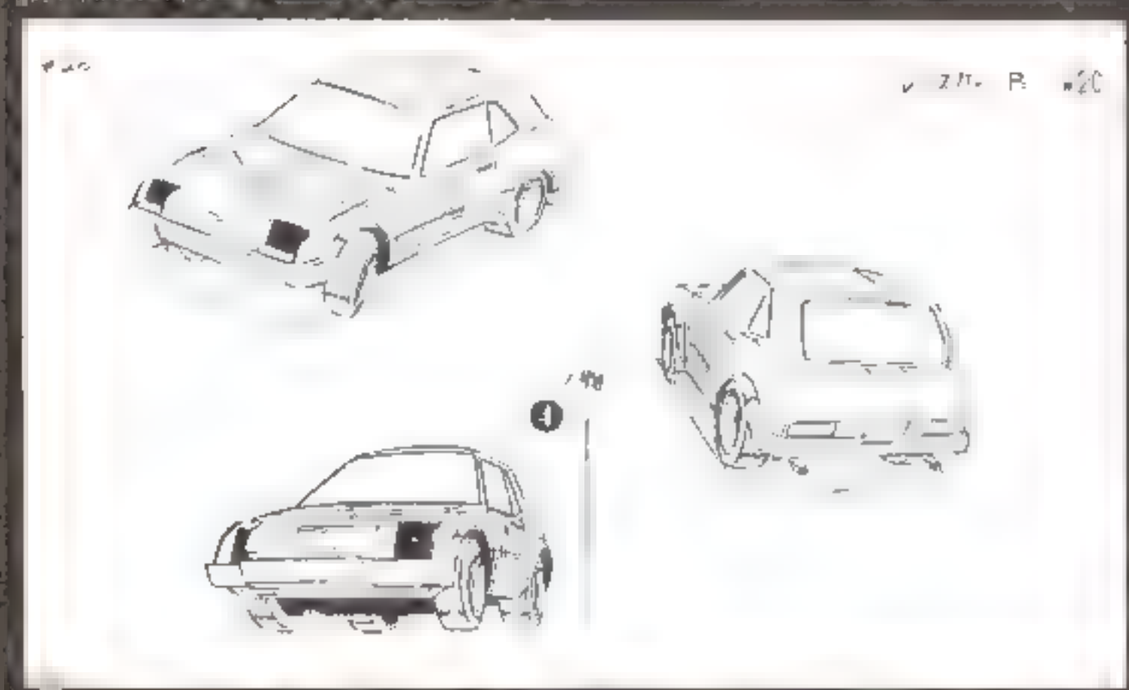
ツーリングカー部門のレースカー。リトラクタブルヘッドライトのスポーツカーを改造したタイプ。

市販車改造レースカー　パンテンボルティー4000



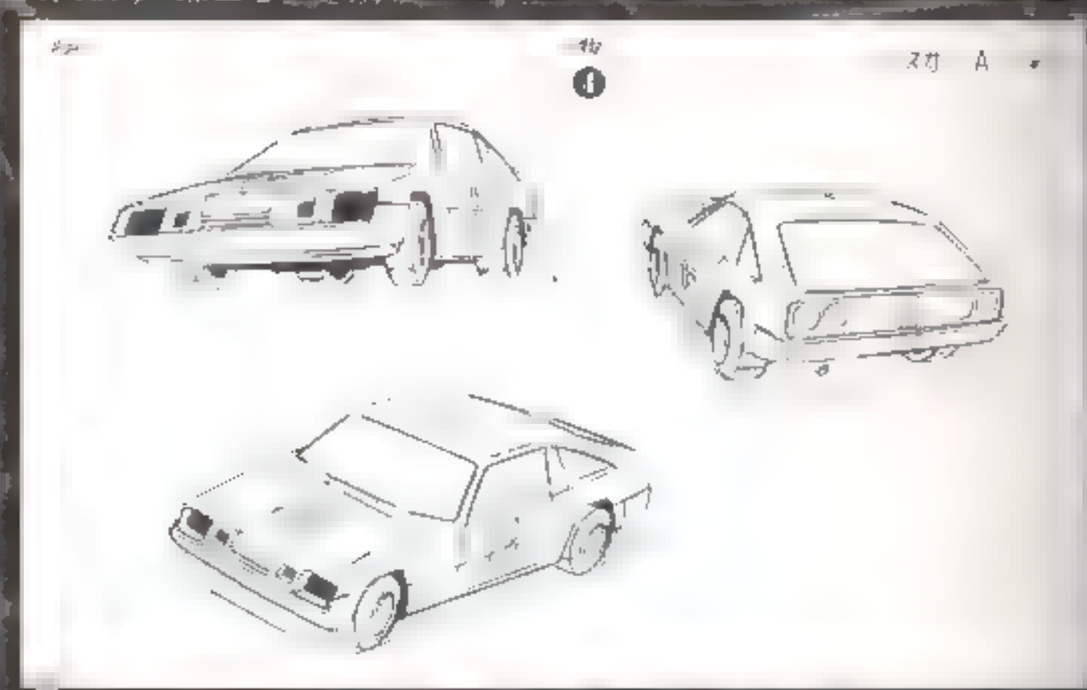
ボナービルグランプリのツーリングカー部門参加のレースカー。大きめの円形テールランプが特徴。

市販車改造レースカー　B



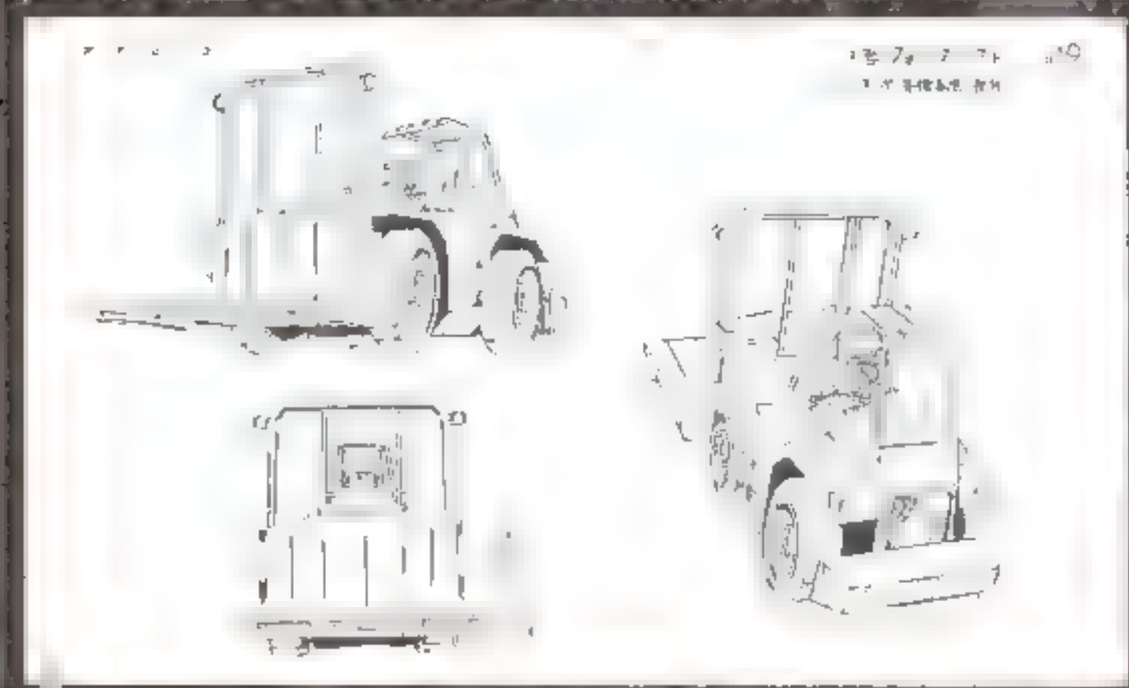
ツーリングカー部門のレースカー。ハッチバックタイプのコンパクトカーを改造したタイプ。

市販車改造レースカー　A



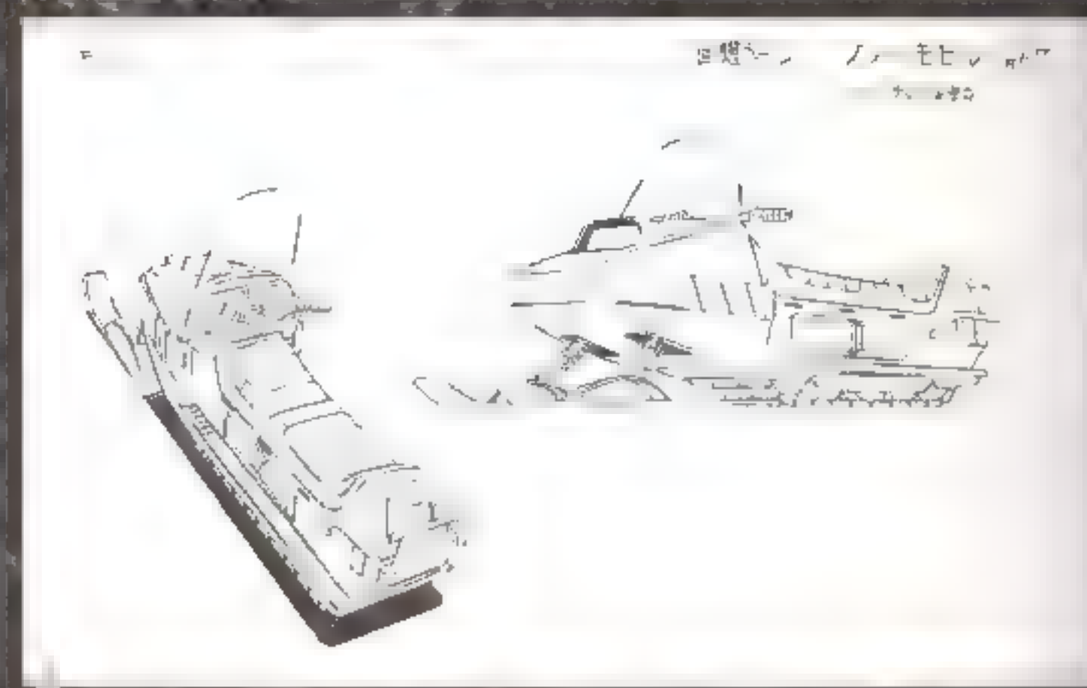
ツーリングカー部門のレースカー。斜めに傾斜した後部と四灯式テールランプのタイプ。

エネルギー集積基地の大型フォークリフト



ボナービル市のエネルギー集積基地で、分解したダグラムをコンベヤに載せるのに使用した。

スノーモビル



地球でクリンとデイジーが乗って遊んだスノーモビル。

山をスノーモビルで駆けめぐるクリンとデイジー

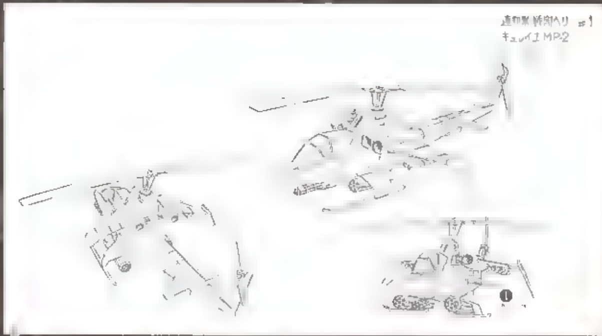
連邦軍戦闘ヘリ

デューイ DEWEY
キュレイユ MP-2 デューイ

キュレイユ MP-2 デューイ QULEIL-MP-2-DEWEY	
[illegible]	2名
[illegible]	11.5?m
ローター直径	9.80m
[illegible]	241?kg
エンジン	GE-199-X[illegible]
[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]
[illegible]	4[illegible]km/h
[illegible]	40[illegible]km/h
[illegible]	5380m
[illegible]	678km
[illegible]	[illegible]
[illegible]	20mm ガトリング[illegible] 80mm ロケット弾ポッド[illegible] (ロケット弾最大18発×2) [illegible] [illegible]ミサイル[illegible] [illegible]ミサイル

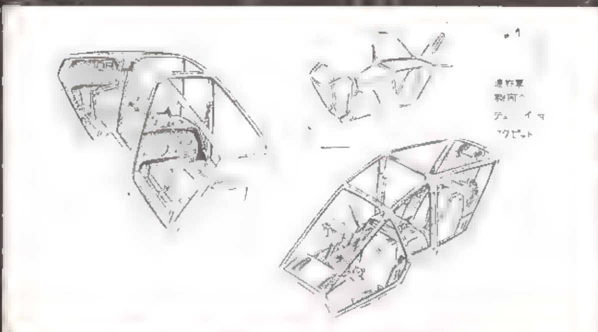
[illegible]における[illegible]ヘリ[illegible][illegible]主力[illegible][illegible]

全体像

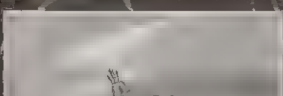


機体下部にガトリング砲を装備した細長い機体が特徴。ロケット弾ポッドは機体下部左右に、ミサイル[illegible]小さな翼の下に装着される。

コクピット

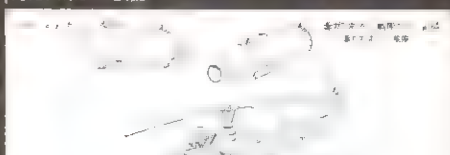


前席に射撃手兼副操縦士、後席に主操縦士が搭乗する前後タンデムタイプのコクピット。



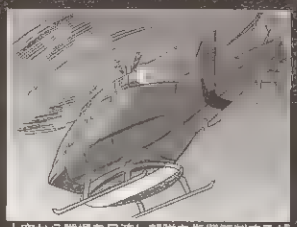
ガトリング砲でゲリラを銃撃するデューイ

毒ガスボンベ装備



ロケット弾ポッドの替わりに毒ガスボンベを装着したタイプ。

名称	キュレイユ CH24 グレイハウンド CULAILLES-CH24-GRAYHOUND
全長	8.5m（機首）
全幅	15.340m
ローター半径	7.13m
空虚重量	4720kg
エンジン	ロタレフ D-86-22A ×2
定格出力	210（ローター軸馬力）
最大巡航速度	400km/h
長距離巡航速度	400km/h
実用上昇限度	6250m
航続距離	980km
燃料	水素燃料 Hs-57
搭載武装	7mm機関銃 ×2（機内）



上空から戦場を見渡し部隊を指揮管制するザルツェフ少佐機。

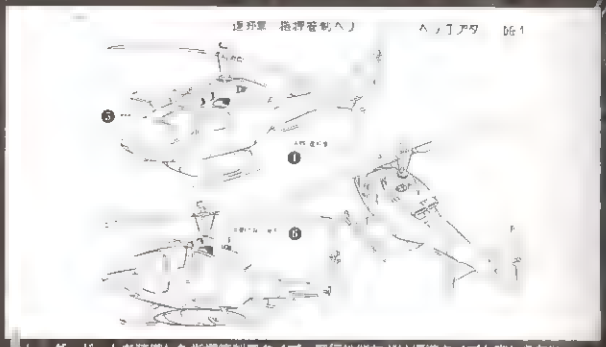
グレイハウンド GREYHOUND

キュレイユ CH24 グレイハウンド

連邦軍指揮管制ヘリ

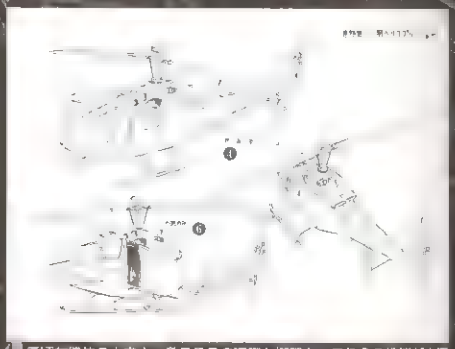
連邦軍の汎用ヘリコプターで、偵察、傷病兵や物資の輸送、後方への通信連絡など広範囲な任務をこなす。また、レーダードームを下面に装備して、戦場の情報を収集、部隊の指揮管制用とした機体もあった。

指揮管制用タイプ



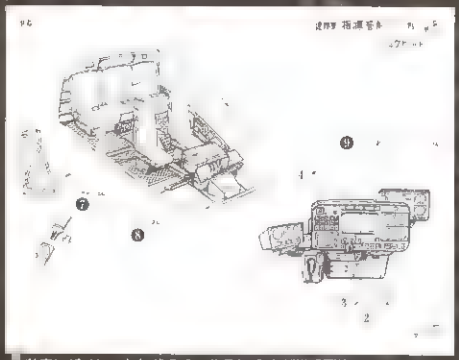
レーダードームを装備した指揮管制用タイプ。飛行性能などは標準タイプと変わらない。

標準タイプ



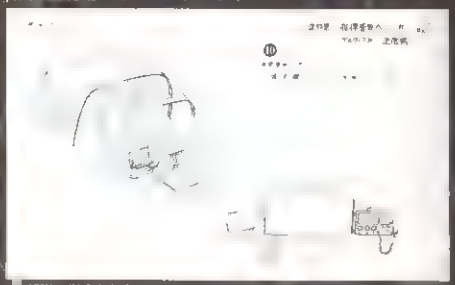
手頃な機体の大きさ、そこそこの速度と搭載力、これらの性能が上手くひとつにまとまり、高い汎用性となった。

コクピット　操縦パネル



前席にパイロットなど２名、後席に３名が搭乗可能。

指揮管制用タイプ　コクピット



部隊に指令を伝える専用通信機を装備した、ザルツェフ少佐搭乗の指揮管制用機のコクピット。

◀補足説明▶
●♡部マーク入る　●ボンベサイズと装備位置　●マーク　●△部　連邦軍マークが入る　●OPEN　●片側のみ　●シートベルト　●フットレスト　●C-98　コクピット・パネル　●指揮管制機内通信機（ザルツェフ用）C-35～

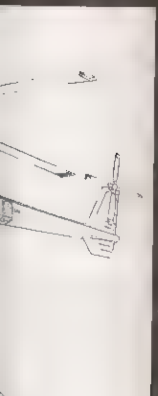
中型機動ヘリ

ット
OT

H35 パトリオット

輸送任務もこなす中型機動
第8軍は、この機を中心と
ゲリラとの戦闘で打撃を
行型CBアーマーなどをワ
な輸送力を持っている。

ボーンフィッシュ1機か



を吊り下げて輸送した。

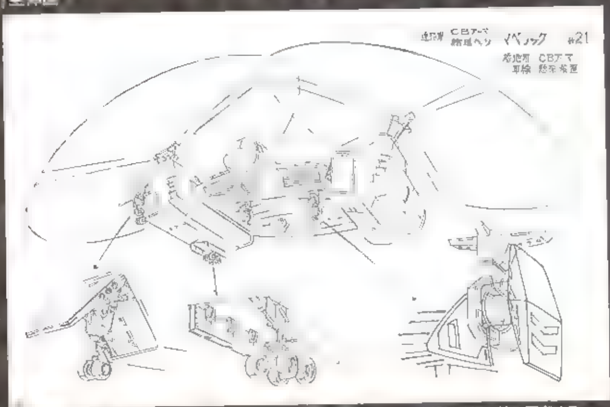
イーストランド WE211 マベリック EASTLAND-WE211-MAVELLIC	
[illegible]	8.09m
[illegible]	19.48m
ローター[illegible]	6.30m
[illegible]	10.1[illegible]
エンジン	GE 1250[illegible]
[illegible]	[illegible]
[illegible]	3[illegible]km（[illegible]）
[illegible]巡航速度	261km/h（[illegible]上、[illegible]） 170km/h（[illegible]上、[illegible]ルティック[illegible]中）
[illegible]	[illegible]
[illegible]	（[illegible]上、[illegible]ルティック[illegible]中） 210km（[illegible]タンク[illegible]ルティック輸送中）
[illegible]	水素燃料[illegible]
[illegible]	30mm [illegible]

マベリック
MAVERICK
イーストランドWE211 マベリック

[illegible]の[illegible]。[illegible]
[illegible]輸送ヘリ[illegible]
CB[illegible]専用の[illegible]
と二脚歩行型CBアーマーを吊り下げて輸送する。

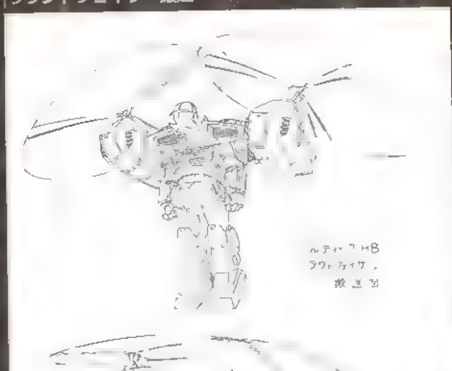
CBアーマー輸送ヘリ

全体図



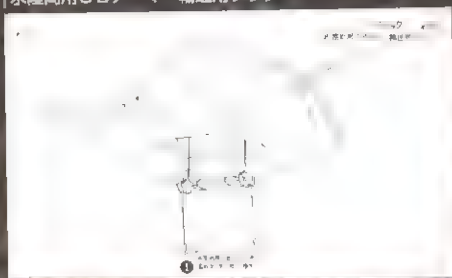
機体中央に固定具を装備し、これをラウンドフェイサーなどの腕部付け根を挟み固定する。

ラウンドフェイサー輸送



連邦軍の主力機ラウンドフェイサーを吊り下げ輸送するマベリック。

水陸両用CBアーマー輸送用フック



水陸両用CBアーマーのマックレルを、水中から引き上げ輸送する際に使用したフック。

CBアーマー投下時や回収時に敵の接近を防ぐため、操縦室下面に30mm機関砲を装備する。

●水陸両用CBアーマー[illegible]フックと同じ巾です ●人[illegible]の対比 ●前部ハッチ ステップ ●地面には接地しない。

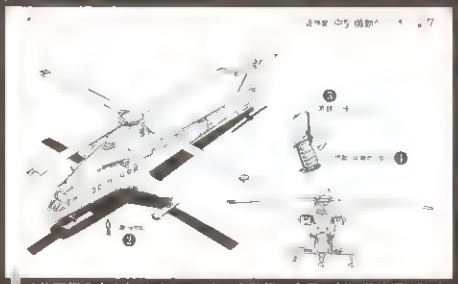
メカ編
マベリック／パトリオット

連邦軍中型機動ヘリ

パトリオット
PATRIOT
チュレイユ CH35 パトリオット

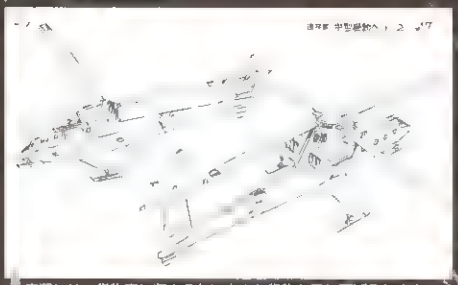
[illegible]ヘリコプター。デロイア星の連邦軍第8軍は、この機を中心とした救援部隊を前線に派遣し、独立派グリーンとの戦闘で打撃を受けた部隊の撤収を計った。4脚歩行型CBアーマーなどをワイヤーで吊り下げ飛行が可能など大きな輸送力を持っている。

全体図

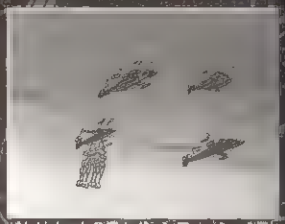


4枚羽根の大きなメインローターを装備、全長の割に機体幅は狭く、細長い外見をしている。

底面　背後

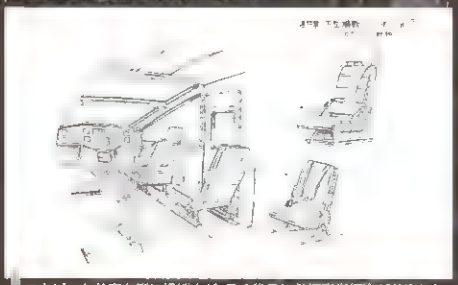


底面には、貨物室に収まらない大きな貨物を吊り下げるためのワイヤー取り付け部を装備する。



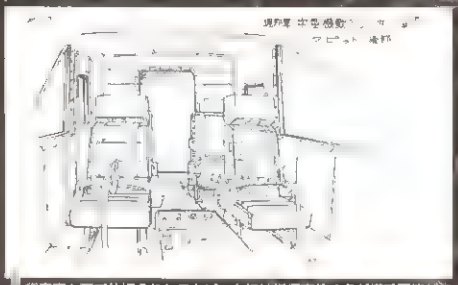
パトリオット3機とボーンフィッシュ[illegible]から左る第8軍救援部隊。

コクピット前面　パネル　シート



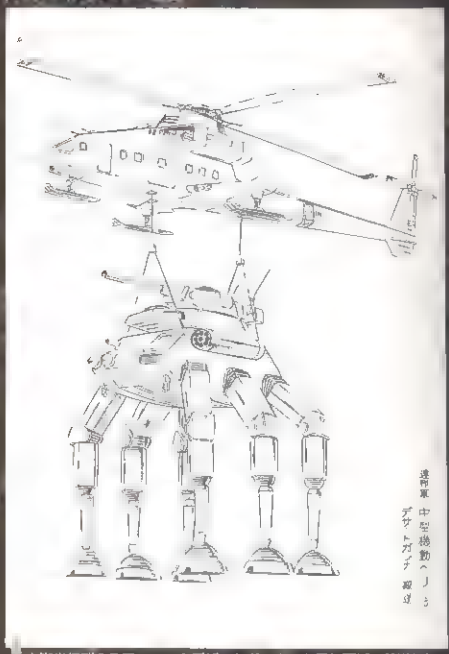
コクピット前席右側に操縦士が、その後ろに救援隊指揮官が着席した。

コクピット後部



貨客室と扉で仕切られたコクピットには指揮官他4名が搭乗可能だ。

デザートガンナー輸送



六脚歩行型CBアーマーのデザートガンナーを吊り下げて輸送した。

輸送ヘリ

こ大量の貨物を積み

プ。

えるタイプの輸送

機種	ヘルダットB ボーンフィッシュ HELRATAT-B BONEFISH
乗員	6名
全長	22.79m
ローター直径	18.82m
全備重量	39119kg
エンジン	プラット&ホイットニー社製 T[illegible]
[illegible]	[illegible]
巡航速度	3[illegible]km/h（海面上、通常コンテナ積載輸送時）
最高巡航速度	254km/h（海面上、通常コンテナ積載輸送時） 46km/h（海面上、クラブガンナー輸送時）
運用上昇限度	2293m（海面上、クラブガンナー輸送時）
航続距離	220km（燃料タンク満載、クラブガンナー輸送時）
燃料	水素燃料HS7

（注）空虫重量は、電子装備、燃料及び燃料タンク、乗員用射出座席、兵員搭載装備、非常用生存用装置、乗員兵員完全装備重量、オイル等を差し引いたもの。ボーンフィッシュは約2500kg。

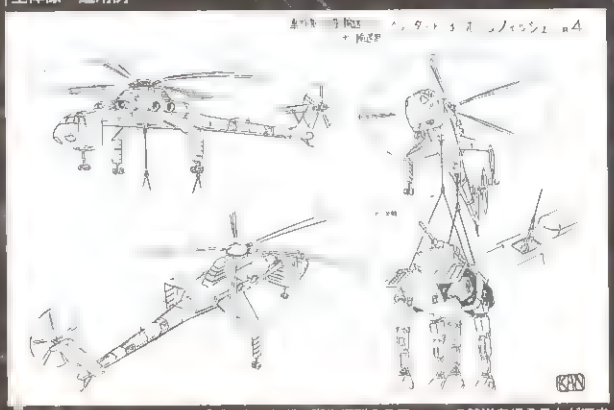
ボーンフィッシュ BONEFISH

連邦軍中型輸送ヘリ

ヘルダットB ボーンフィッシュ

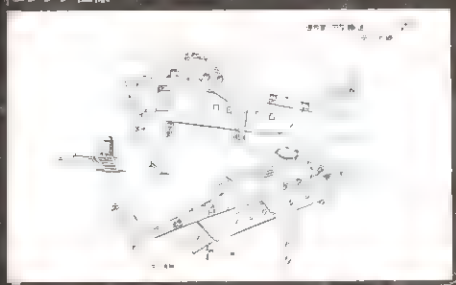
[illegible]載される。[illegible]上にクラブガンナーなど大重量物を載せた状態で輸送する。大型貨物の輸送に際しては[illegible]を機体下面に付けることでこれに対応している。

全体像／運用例



機体下面のワイヤーでクラブガンナーなど四脚歩行型ＣＢアーマーの輸送を行うことができる。

コンテナ仕様

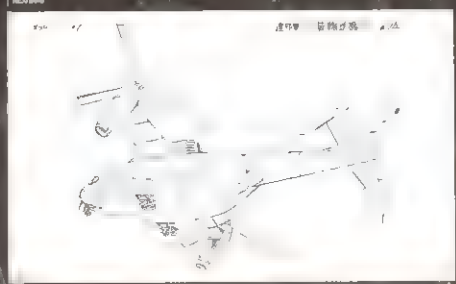


後部に大きな開放扉を持つ輸送用コンテナを装備し、人員や物資の輸送を行う。

連邦軍人員輸送機

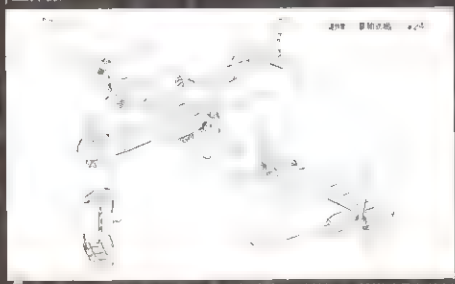
連邦軍が人員輸送のために所有しているティルトローター機で、離着陸時にはローターが上向きになりヘリコプターのように垂直離着陸可能と[illegible]水平位[illegible]

底面



荒れた不整地での運用は想定していないためか、ソリ式などの降着装置でなく格納式車輪を装備している。

全体像



第８章では損傷したゲリラを、収容所近くの基地まで輸送するために使用していた。

名称	スナーク Mir-770 ウェイル ZNAK-Mir770-WHALE
機体長	44.68m
ローター半径	10.49m
搭載重量	320t 5u
エンジン	ロタレフ D-201 × 2 ロタレフ D-601 × 2
[illegible]	5400kw（ローター[illegible]） × 2（D-201） 11000shp（ロー[illegible]） × 2（D-601）
最大巡航速度	320km/h（[illegible]上、[illegible]）
長距離巡航速度	267km/h（海面上、標準重量）
実用上昇限度	4800m（[illegible]上、[illegible]）
航続距離	800km（[illegible]タンク[illegible]）
乗員	操縦士[illegible]名

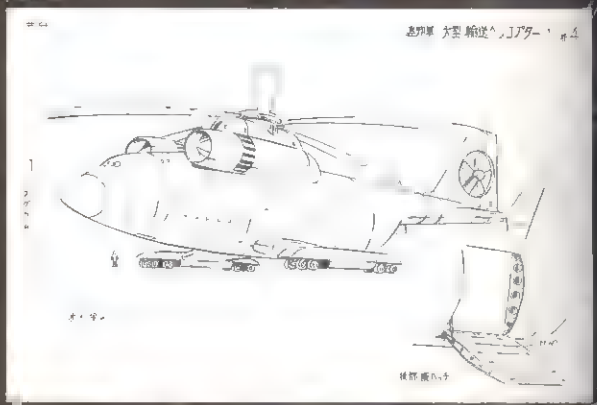
ウェイル WHALE

スナーク Mir-770 ウェイル

連邦軍大型輸送ヘリ

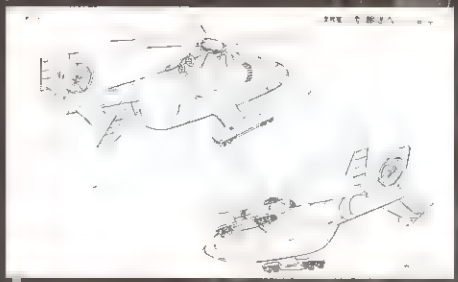
[illegible]本級の大型輸送ヘリコプター。[illegible]大な機体に[illegible]エンジンを搭載し、[illegible]に機動の[illegible]アーマーや装甲車[illegible]を積載し輸送することができる。[illegible]地と基地の間の兵[illegible]物資の輸送、[illegible]の[illegible]を[illegible]ます。

全体図　貨物室扉



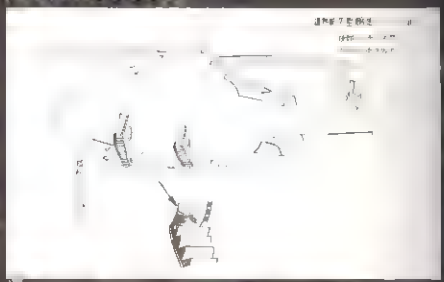
機体横の人間のサイズと比べるとその巨体が実感できる。この大きな機体に大量の貨物を載せ飛行させるため、そのメインローターも巨大な物となった。

後方　底面



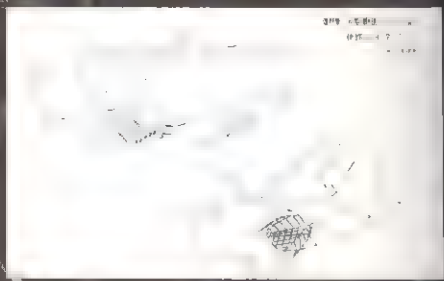
積載空間を確保するため、貨物室が長い箱状をしたこの機体形状が取り入れられた。

サイドハッチタラップ



乗員の搭乗、降機に使用されるハッチ兼用のタラップ。

後部ハッチタイプ



後部が大きく開き、そこから貨物の積載、搬出を行えるタイプの機体もあった。

[illegible]ウェイル[illegible]中のキャブ

飛行機　船　その他

大型旅客機
PASSENGER PLANE
北極ポートからの旅客機

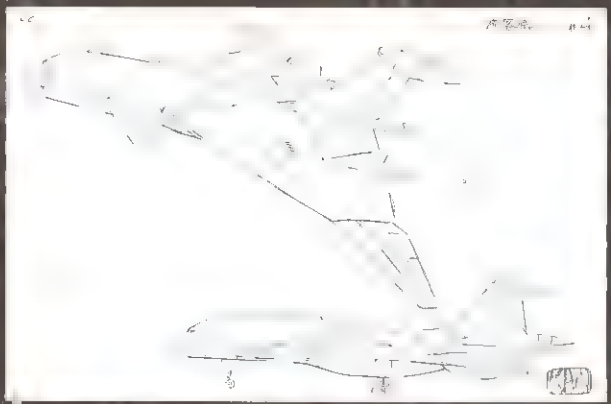
解放軍の勝利により独立を果たしたデロイア人民解放政府が、解放軍兵士たちを北極ポートから撤退させるに当たって用意した大型旅客機。

前面　底面　着陸脚

デルタ翼の先にウイングレットを持った大きな主翼を持つ。

北極ポートからサンドレア空港へ向けて飛び立つ大型旅客機。

全体像



デルタ翼機を基本に、胴体と翼が一体となったブレンデッドウィングボディ型的特徴も合わせ持っている。

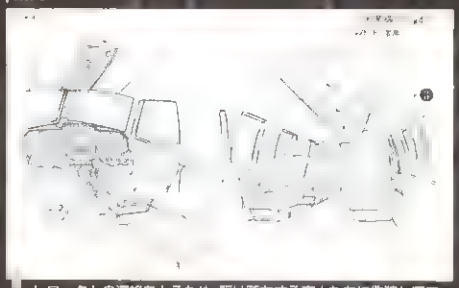
双発機
TWIN-ENGINE PLANE
逃がし屋の小型機

デロイア星における連邦軍では、固定翼の飛行機はほとんど見られなかったが、民間の航空会社もあり、小型飛行機を使って人や物の輸送をしそれを生業にしているものもいた。

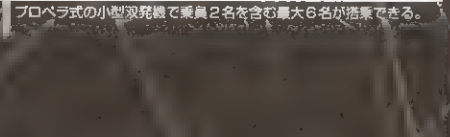
全体図

プロペラ式の小型双発機で乗員2名を含む最大6名が搭乗できる。

機内



J・ロックとの連絡をとるため、駆け落ちする恋人たちに偽装してロッキーとキャリーが乗ったもの。

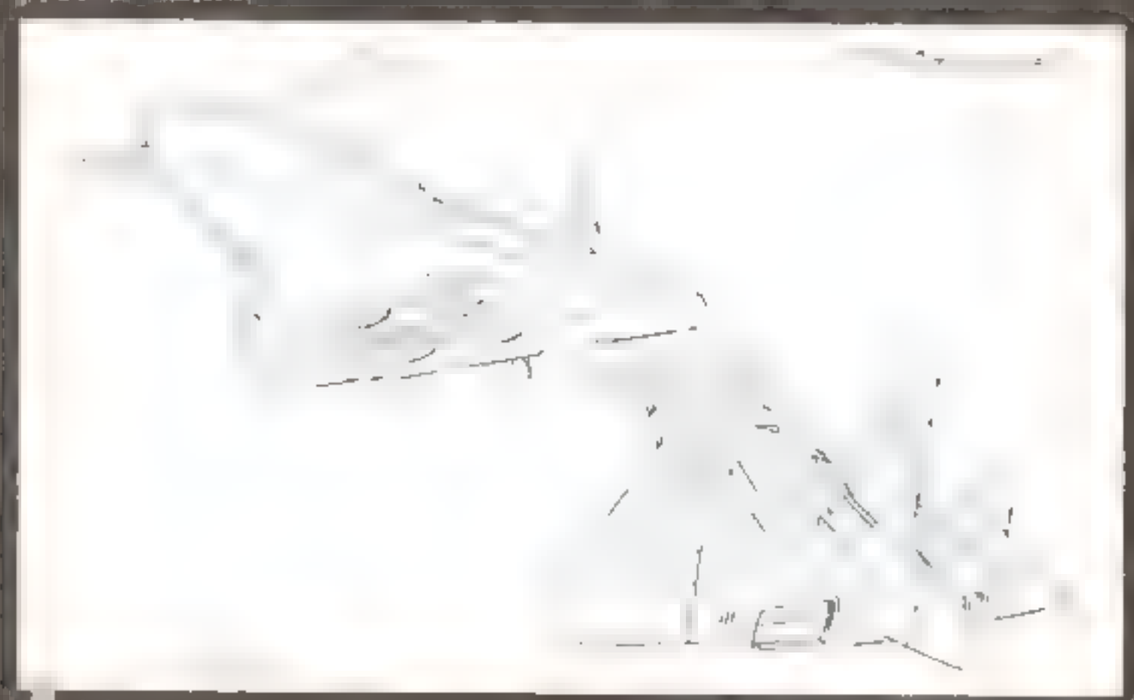


◀設定補足▶
●ロッキー　●人物はドアより大きいので、かがんで中に入ります。　●ドア　●コクピット　●窓　●同じ　●シャトルコクピット　●旅客機内部　●[illegible]

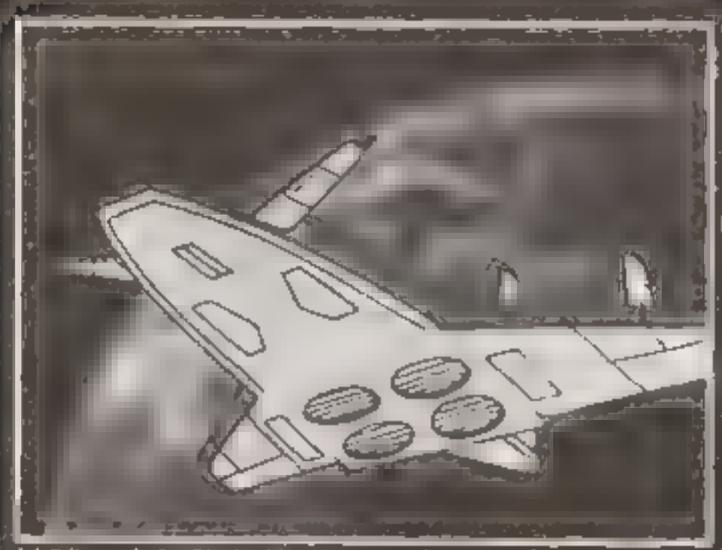
スペースシャトル
SPACE SHUTTLE
宇宙往還機

地球の空港と植民地星へ向かうワームホール宇宙船が出発するスペースポートの間を結ぶスペースシャトル。大気圏外との往復が可能な宇宙船であるが、普通の旅客機と同じように空港から離陸することができる。

背面　底面

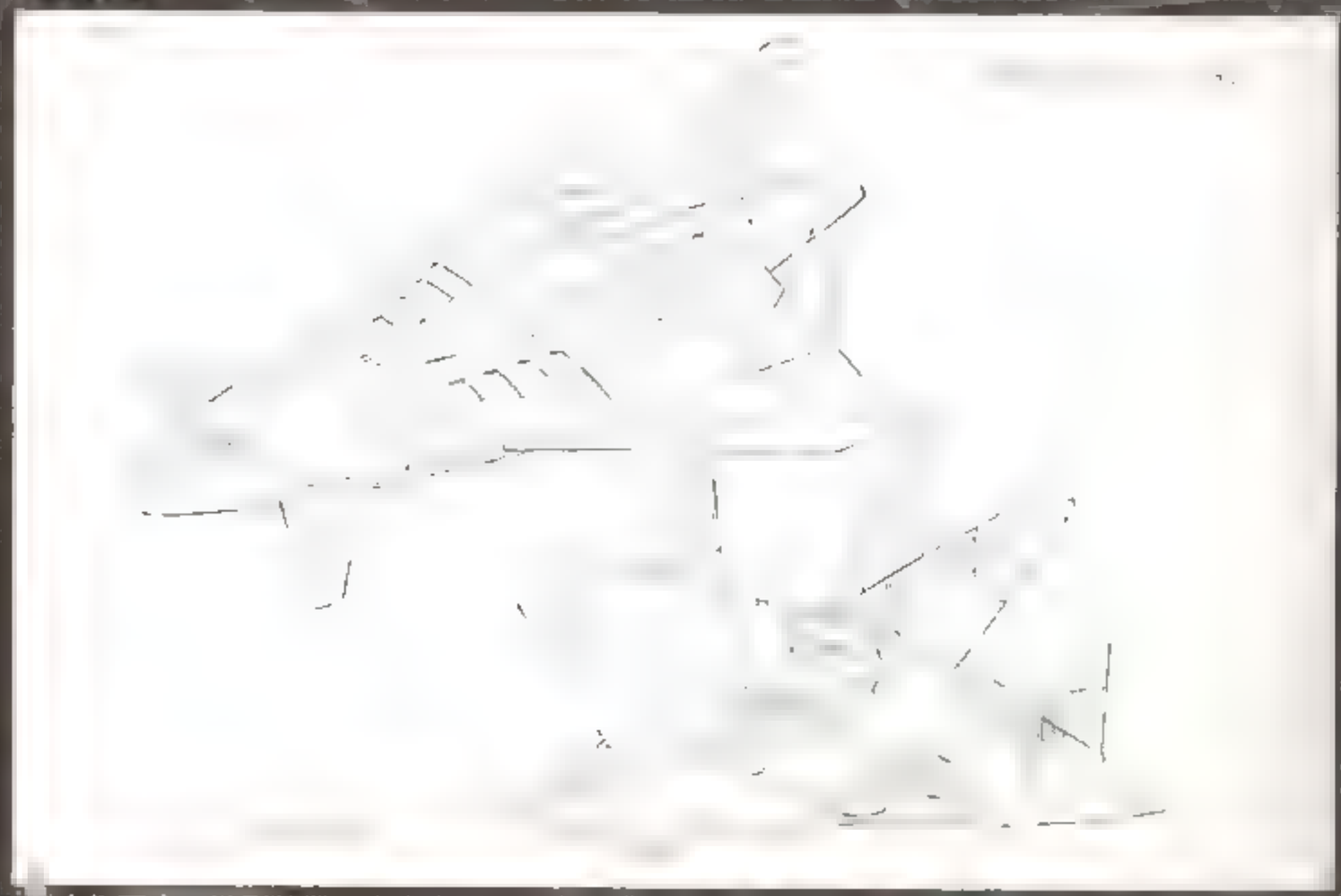


大気圏突入時の摩擦熱に耐えるよう底面は高度な耐熱処理がされている。



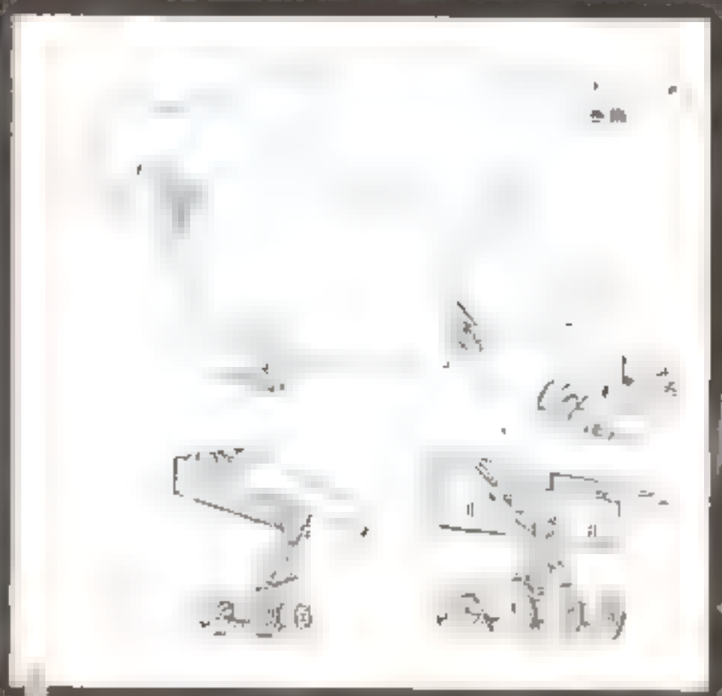
地球の大気圏を離れてスペースポートへ向かうシャトル。

全体図



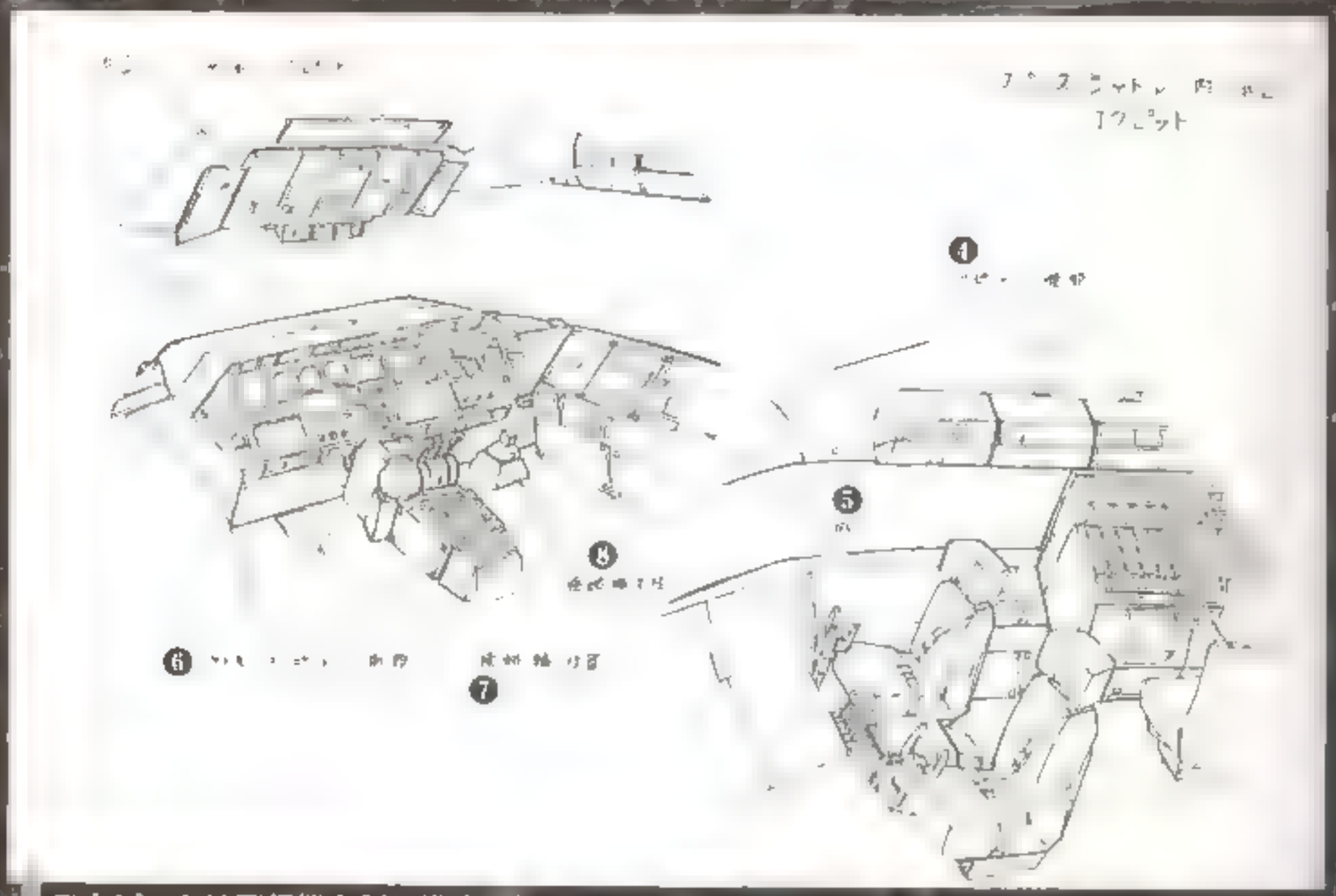
大気圏内では飛行機、宇宙空間では宇宙船にというように一つの機能を一つの船体で実現している。

着陸脚



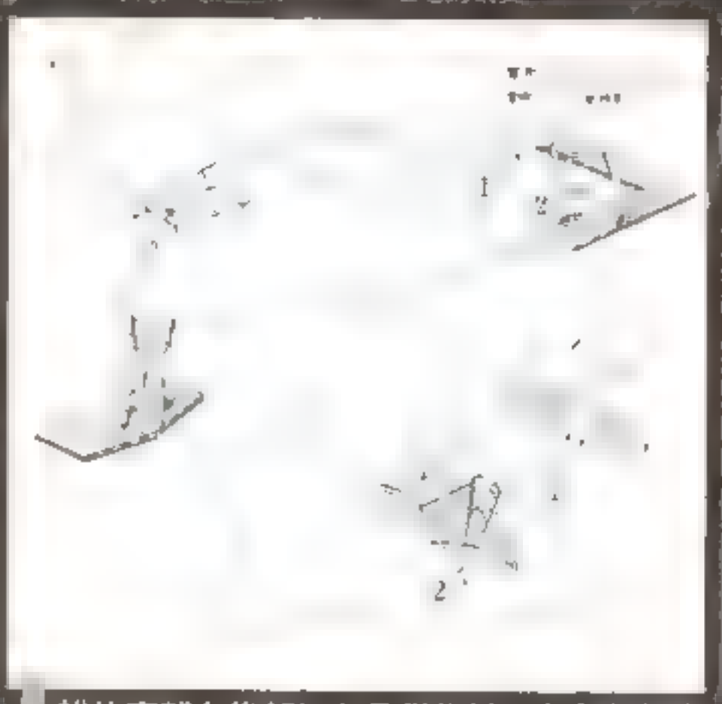
離陸時と着陸時に使用する車輪。

操縦席



コクピットは飛行機と似た構成になっているが、宇宙船であるため操縦桿ではなく操縦輪と呼ばれるなど違いも多い。

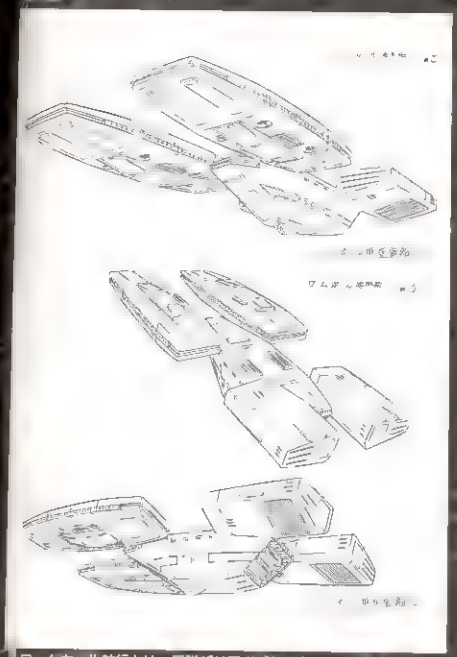
貨物リフト　貨物室ハッチ



船体底部と後部にある貨物リフトと貨物室ハッチ。

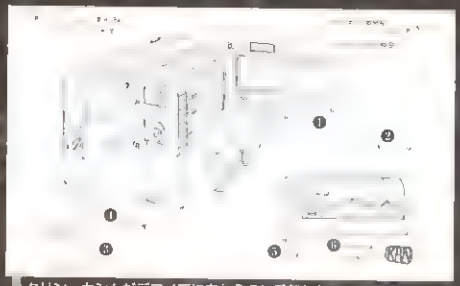
ワームホール宇宙船
WORMHOLESHIP
地球。デロイア間航行船

地球から約234光年の位置にあるスタフェウス二重太陽系。その7番惑星デロイアとの間を、超光速航行方のひとつであるワームホール航法を利用して行き来するのが、このワームホール宇宙船だ。民間船である本船は地球とデロイア間を75時間で結んでいる。



ワームホール航行とは、電磁バリアでブラック・ホールとホワイト・ホールの間の重空間チューブ（ワームホール）を[illegible]ために[illegible]して[illegible]航法。

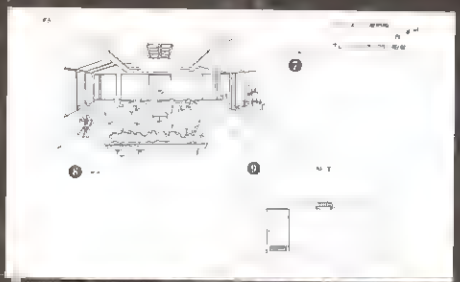
船室



クリン・カシムがデロイアに向かうのに乗船したエコノミークラスの[illegible]。

ワームホール内を航行する宇宙船。

船内ザロン

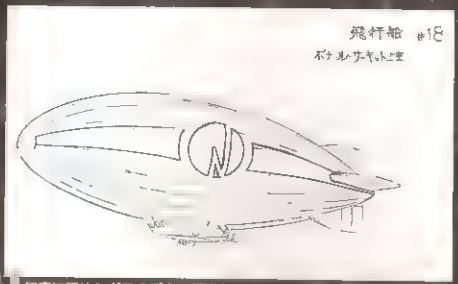


地球時間で3日ほどの時を過ごすため、船内に床ブロンやその他の[illegible]設備を備えている。

飛行船
AIRSHIP
ボナールサーキット上空

ボナール市で開催されたグランプリのテレビ中継のためにサーキット上空を飛行した飛行船。低速度で長時間飛行できるという特性が、こうしたイベントを上空から撮影するなどの用途に適している。

機内

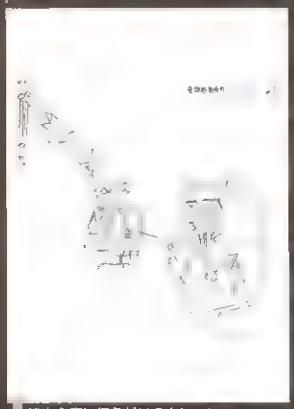


気嚢に溜めたガスの浮力で浮遊し、その下に吊り下げたゴンドラに人が搭乗、エンジンによりプロペラを回し推進する。

貨物船マリン・パパイア号
MARINEPAPAYA
大陸間貨物船

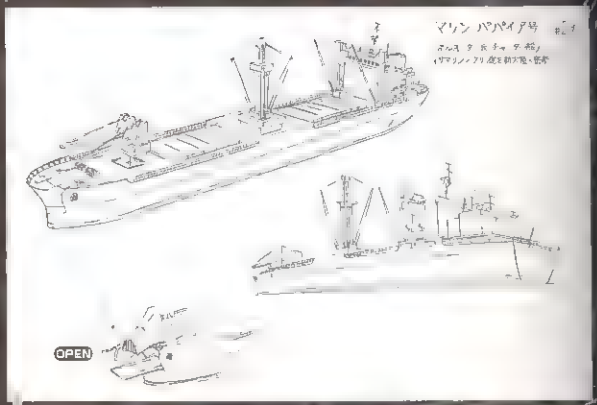
連邦軍の手から逃れたサマリン博士とクリンたちを、ランベル港から隣のパルミナ大陸に渡すため、独立運動に共感する実業家のネルオーダがチャーターした大型貨物船。

クレーン



船内倉庫に備え付けのクレーン。

全体像

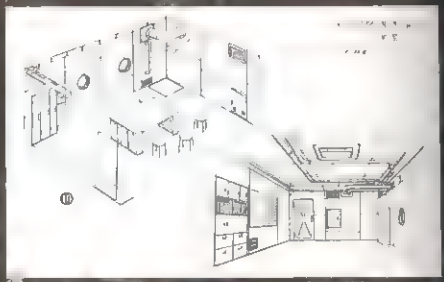


船首が開きそこから船内にトラックが出入りしたり、貨物の積み込みができる構造を持つ

機関室

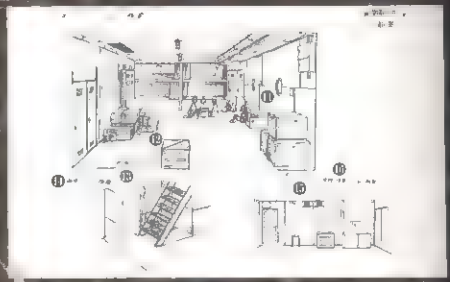
船体の下層に位置する機関室。

船室 1



ポナール号内部の船室。サマリン博士らとの会議で使用。

船室 2



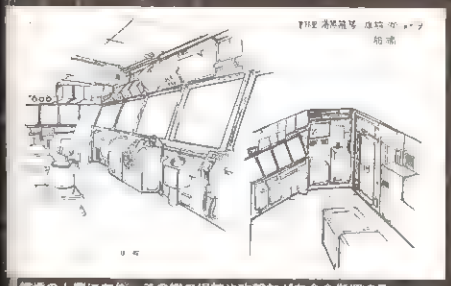
クリンたちが寝泊まりした船室。

◀設定補足▶
●左に同じ ●透明フード付 ●ドア ●ドア位置 ●伸してベッドになる 下も同じ ●カプセル式対Gシート ●ショウ・ウインドウ ●サロン ●エコノミークラス船室 ●ドア ●ランドセル等 ●サマリン ●荷物 ●船室外の階段 ●ドア ●荷物位置こちらへ移動させてください

連邦軍強襲艦隊旗艦
ASSAULT FLEET FLAGSHIP

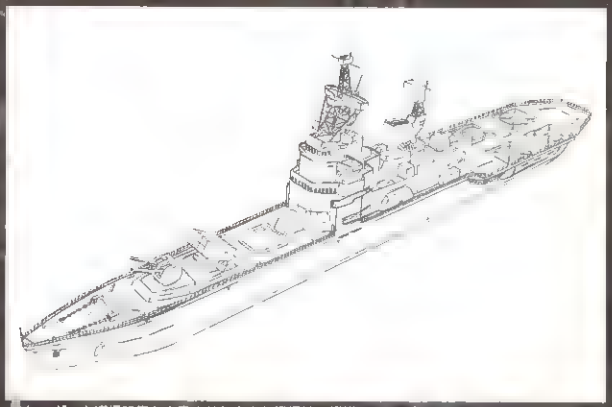
[illegible]に[illegible]名[illegible]れた[illegible]
治州の首都ドガ攻略のため、連邦軍が送り込
んだ揚陸艦隊の旗艦。大砲やミサイルに加え
て後部甲板から戦闘ヘリなどを出撃させられ
るヘリコプター巡洋艦。

艦橋

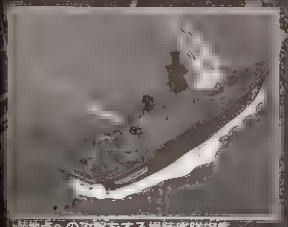


艦橋の上層にあり、この艦の操舵や攻撃などを命令指揮する。

全体図



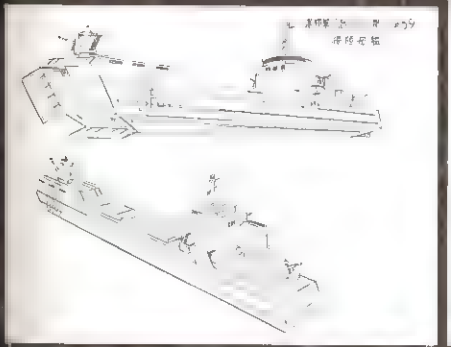
レーダーと通信設備を充実させた大きな艦橋は、艦隊とともに揚陸部隊の司令部機能も兼ねる機能を装備している。



上陸地点への攻撃をする揚陸艦隊旗艦。

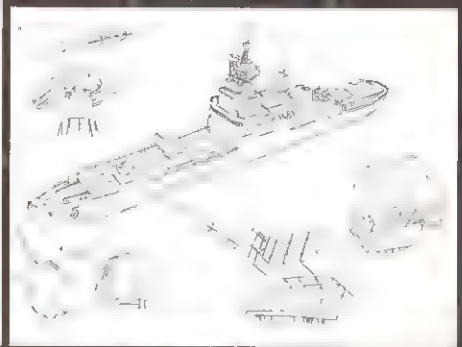
連邦軍揚陸母艦
AMPHIBIOUS ASSAULT SHIP

艦内に揚陸部隊を収容しており、船首ハッチからGBオーマー上陸用舟艇などを発進させる機能を持つ母艦。

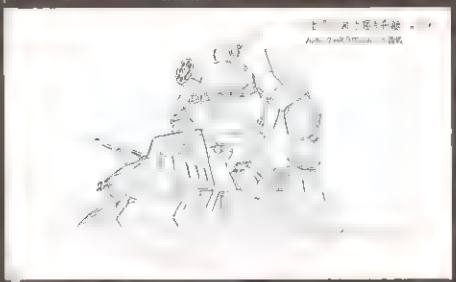


連邦軍ミサイル巡洋艦
MISSILE CRUISER

旗艦より小型の巡洋艦で、ドガ市攻略作戦に参加した艦のひとつ。大砲による砲撃や対地ミサイルなどで上陸地点を攻撃した。



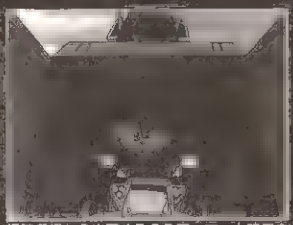
ラウンドフェイサー搭載図



搭載したラウンドフェイサーは臨戦態勢で、携帯するリニアガンで攻撃も可能。

CBアーマー用舟艇
CB-ARMOR LANDING BOAT
連邦軍 CBアーマー上陸用舟艇

[illegible]砲撃に続いて実施される[illegible]作戦で[illegible]を務めた小型艇。臨戦態勢のCBアーマー[illegible]機を搭載し、高速を生かし上陸地点を[illegible]その地点の確保や制圧を図った。[illegible]水の浅い[illegible]の船体により[illegible]が可能で、ラウンドフェイサーなどCBアー[illegible]



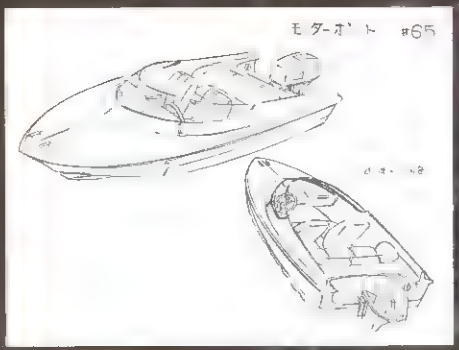
揚陸母艦から出撃するCBアーマー上陸用舟艇。

全体図

船首付近に操縦室があり、船体中央から後部に掛けてがCBアーマーを搭載するスペースとなっている。

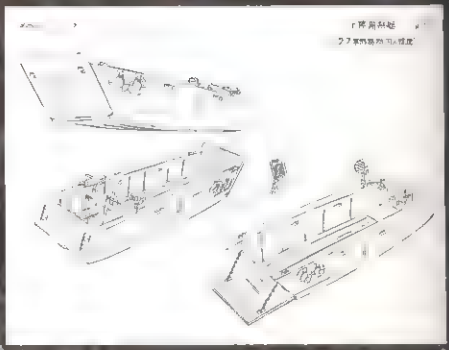
モーターボート
MOTORBOAT

第65話で、ガルメルがラコックと面談するため、ドガ湾に浮かぶ離れ小島まで利用した船外機式のモーターボート。



上陸用舟艇
LANDING BOAT
囚人護送用

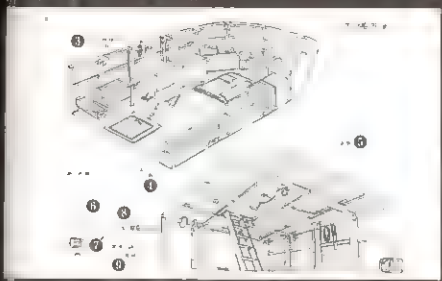
捕らえたゲリラを収監するバラク軍刑務所。海にせり出した岬に立つ刑務所への交通手段として使われている上陸用舟艇。



ダルマ船
RIVER BARGE
平底河川荷船

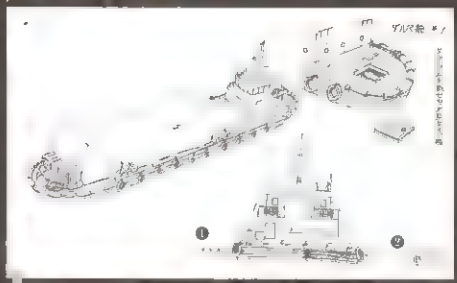
[illegible]したダグラムと共にクリンたちを運んだゲリラの小型船。普段は雑多な貨物を積み川を行き来している。

内

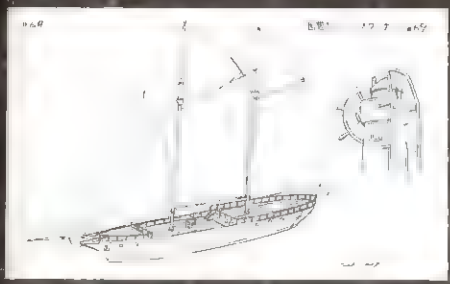


薄く居心地の悪い船内。居住性は二の次の構造である。

全体像



寝かせたダグラムをシートで覆っただけだったが、市街地の河川ではこうしたダルマ船はありふれた姿ゆえ脱出に成功する。



●この位いまで沈める ●ヒタヒタに ●クリンが立ち上るとこのくらいです。 ●前 ●前部 ●後 ●下る ●注 階段の付き方 ●荷物箱 上参照 ●機関車下部 ●機関車車 ●<先行貨物車> ●後方 ●後方 ●TEL ●トイレ ●客車内部

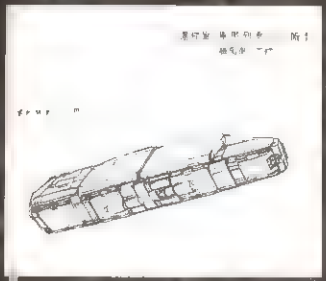
スクーナー
SCHOONER
縦帆型帆船

[illegible]父との思い出のひとつだ。

軍用列車
ARMORED TRAIN

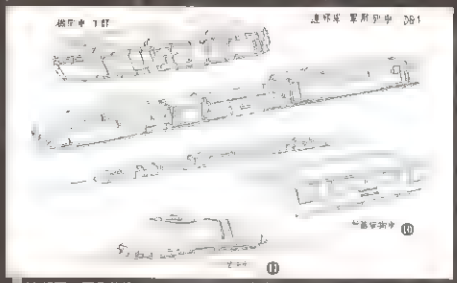
大砲を装備し装甲を施された機関車により牽引されている。また旋回砲塔を装備したタイプの機関車もあった。クリンの[illegible]

機関車武装



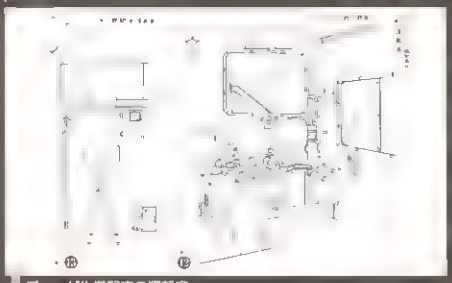
左右の動輪はもちろん、底部にも装甲がされていた。

全体図



連邦軍の軍需物資などを積載し軍の生命線のひとつとなっている。

運転席

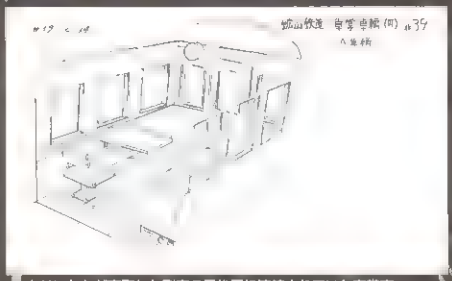


ディーゼル機関車の運転席。

アンディ鉱山鉄道列車
MINE TRAIN

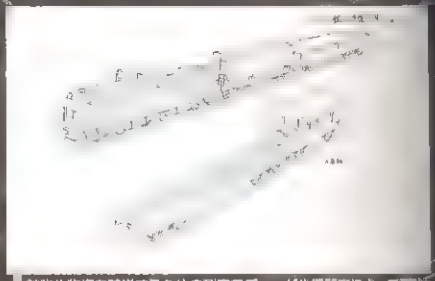
「ゲリラ解放地区となったアンディ鉱山と西と結ぶ鉱物輸送用の列車。クリンたち車を奪取し、サマリン博士とともに鉱山内に入ることに成功する」

車掌車輌



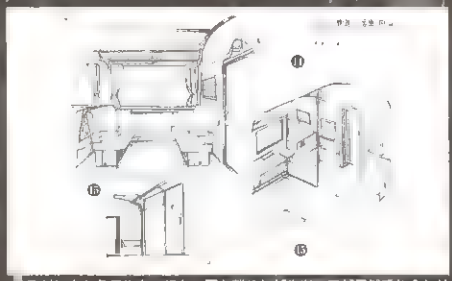
クリンたちが奪取した列車の最後尾に連結されていた車掌車。

全体図



鉱物や物資を輸送するための列車でディーゼル機関車によって牽引されていた。

客車内

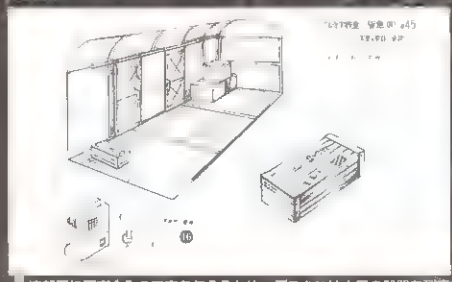


取材に向かうラルターフと、軍を離れたザルツェフが偶然乗り合わせた客車。

パルミナ大陸鉄道列車
PALMYNA TRANSCONTINENTAL TRAIN

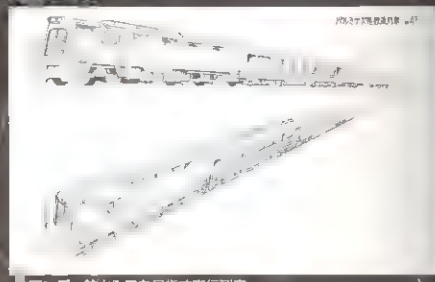
「パルミラ大陸を東西に横断する鉄道だったが、アンディ鉱山がゲリラ解放地区となり連邦軍との間で緊張が高まったため、アンディ鉱山の入口が終着駅となっている」

貨物車



連邦軍に軍事介入の口実を与えるため、デスタンは大量の武器を列車に積みこむ。

列車全体図

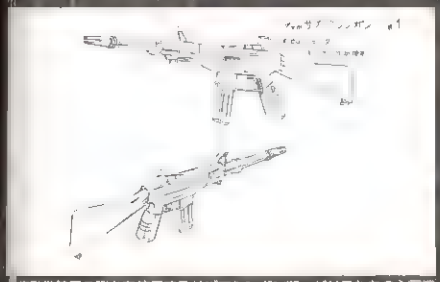


アンディ鉱山入口を目指す夜行列車。

携行火器類・他

主力となったCBアーマーをはじめ、ヘリコプターや装甲車など、デロイア独立戦争では膨大な数の武器が使用された。機動兵器などの紹介に続いて、ここでは拳銃や小銃、マ[illegible]、太陽の牙のメンバーたちや連邦軍の兵士たち、それら個人が携行し使用した火器類をまとめる。

9mm サブマシンガン

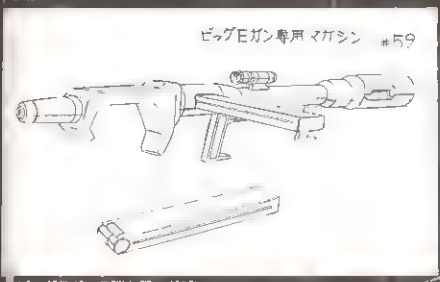


自動拳銃用の弾丸を使用するサブマシンガンで、ゲリラたちの主要武器となっていた。

ビッグEガン

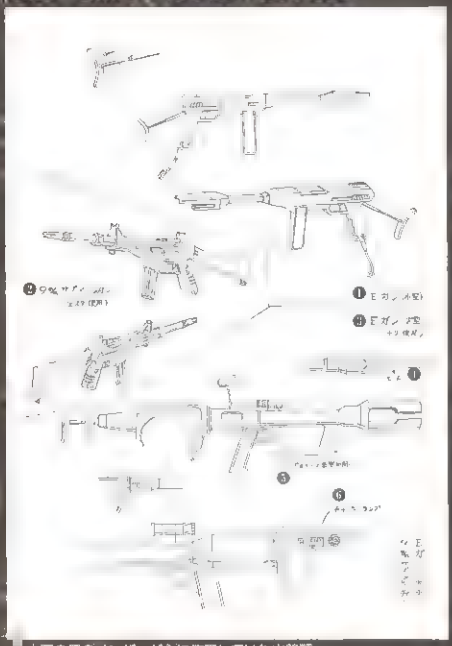
歩兵用のリニアガンで、携行できる火器としては最強の威力を持つ。

専用マガジン



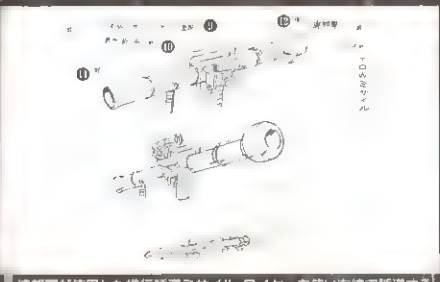
ビッグEガンの弾丸用マガジン。

Eガン、9mm サブマシンガン、ビッグEガン



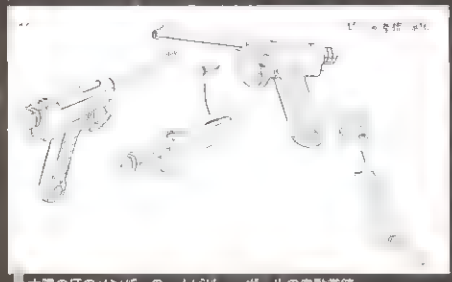
太陽の牙のメンバーが主に使用していた火器類。

連邦軍TOWミサイル



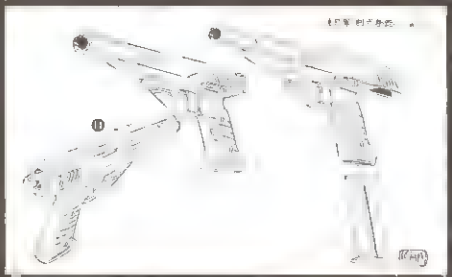
連邦軍が使用した携行誘導ミサイル。ワイヤーを使い有線で誘導する。

ビリーの拳銃



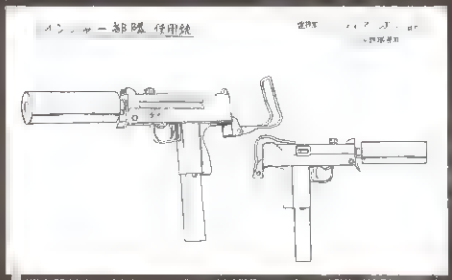
太陽の牙のメンバーの一人ビリー・ボールの自動拳銃。

連邦軍　制式拳銃



連邦軍兵士が携行する制式の自動拳銃。

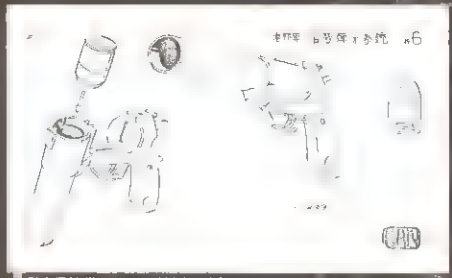
レンジャー部隊の使用するハンディマシンガン



消音器付きの小型マシンガン。連邦軍レンジャー部隊が使用。

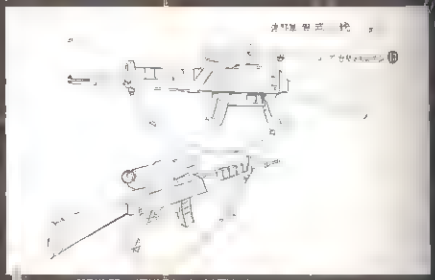
ハンディマシンガン装備のレンジャー隊員。

連邦軍　信号弾　信号弾拳銃



発光信号弾とそれを発射する拳銃。

連邦軍　制式小銃



スコープ照準器は標準装備では付属しない。

ガルシアの拳銃

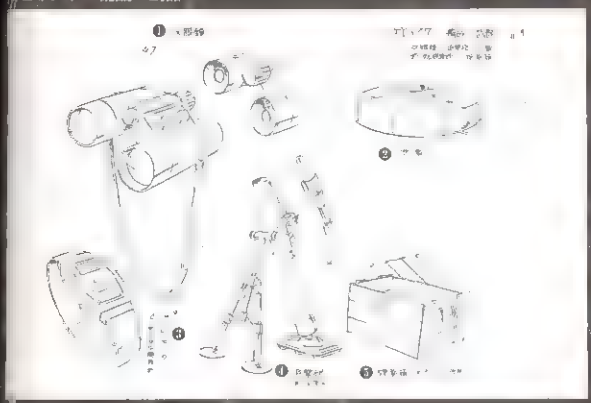
傭兵部隊の隊長、ガルシアが所持する自動拳銃。

●Eガン(小型)　●9mmサブマシンガン(フェスタ使用)　●E
ガン(大型)　(チコ使用)　●ビーム　●グリップを引くと薬室が開く　●チャージランプ　●グリップを手前に引くと薬室が開く　●チャージランプ　●TOWミサイル(ビリー使用)　●長さ約140cm　●銃　弾倉　●スコープ付属とキャニング　●Cal.9
●ガルシアの手は大きい

備品

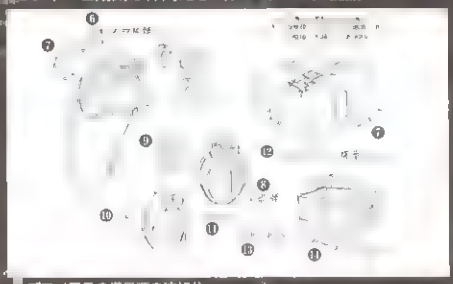
個人の武器だけでなく、通信機や殺傷具なども戦闘に欠かせないものではあるが、ここでは破壊したモノ機械類をまとめて紹介する。

デロイア7　備品　武器



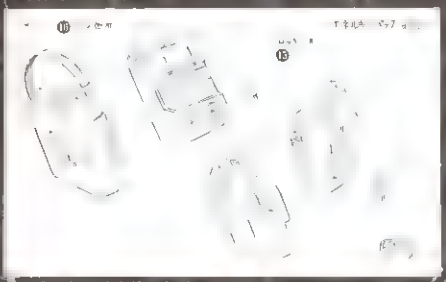
クリンやロッキーたちデロイア7が使用していた備品類。

ロッキーと陽気な仲間たち（デロイア7）備品



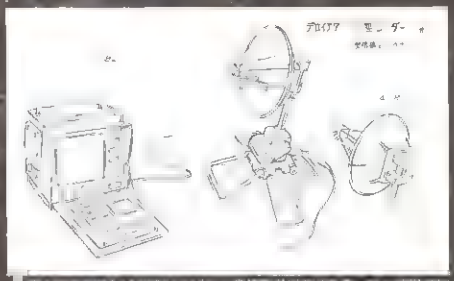
デロイア7の備品類の追加分。

エネルギーパック



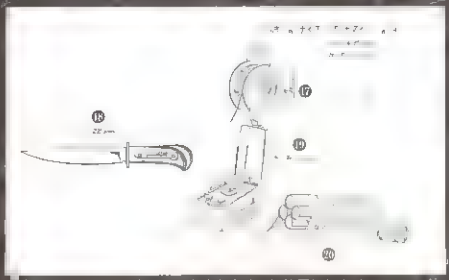
Eガン用のエネルギーパック。

デロイア7　小型レーダー



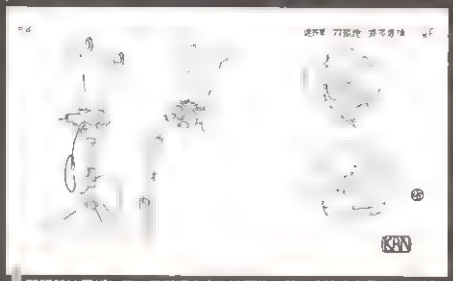
第1話で登場したハンドレーダー。連絡員用のハンドレーダーと、[illegible]赤を載せた。

ロッキーのナイフ　ダイナマイト



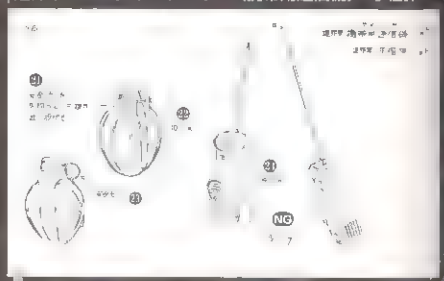
補給品を奪取する際、バックルを背すのに使用したナイフ。

連邦軍　双眼鏡　時限爆弾



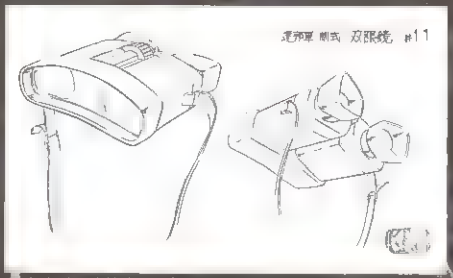
双眼鏡は屈折していて瓦礫の中や遮蔽物の陰から遠方を見ることができる。

連邦軍　パンティートーキー（携帯用通信機）　手榴弾



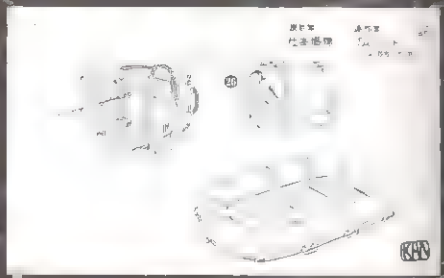
連邦軍の無線通信機。アンテナを伸ばして使用する。

連邦軍　制式双眼鏡



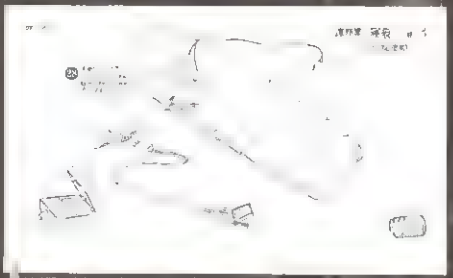
クリンたちを追跡するダーク軍曹などが使用した制式装備の双眼鏡。

反乱軍仕掛け爆弾　連邦軍ゴムボート



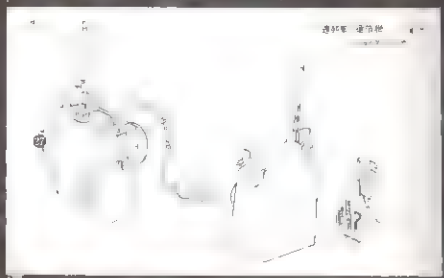
仕掛け爆弾はワイヤーに触れると起爆する罠が仕掛けられている。

連邦軍　寝袋



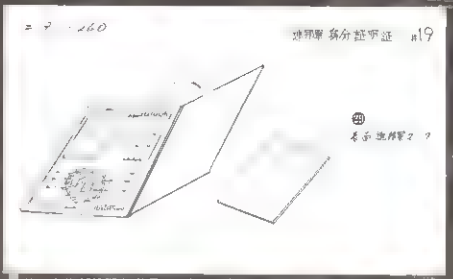
連邦軍兵士に支給される寝袋。

連邦軍　通信機（ショルダータイプ）



肩に掛けるなどして運搬するやや大きめの通信機。

連邦軍　身分証明証



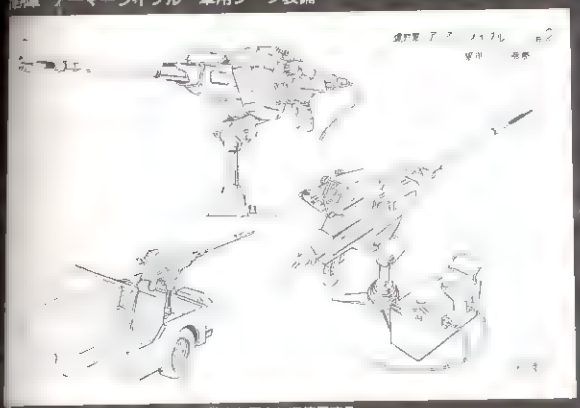
ハックルが検問を通過するために提示した身分証明書。

◀設定補足▶
❶双眼鏡　❷地雷　❸ロッキーのデジタル腕時計　❹治療剤（#1未使用）　❺治療剤（#9ナナシ使用）　❻ロッキーの双眼鏡　❼20cm位　❽手榴弾　❾安全ピンを矢印の方向に引き抜いて投げる。　❿10.3cm　⓫安全ピン　⓬プラスチック爆薬　⓭何物を入れる袋　⓮60cm位　⓯ロッキー用　⓰クリン用　⓱リール径20cm　⓲22cm　⓳取りはずせる　⓴30cm　㉑安全ピンを矢印の方へ引抜き放り投げる　㉒10.3cm　㉓安全ピン　㉔24.2cm　㉕マグネット　㉖PULL　㉗36cm位　㉘本来ならこの辺にコントロールシステムが組み込まれているのかと思いますが　㉙金属　連邦軍マーク

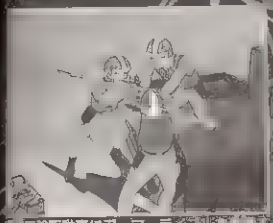
分隊支援火器他

[illegible]

連邦軍　アーマーライフル　車用ジープ装備

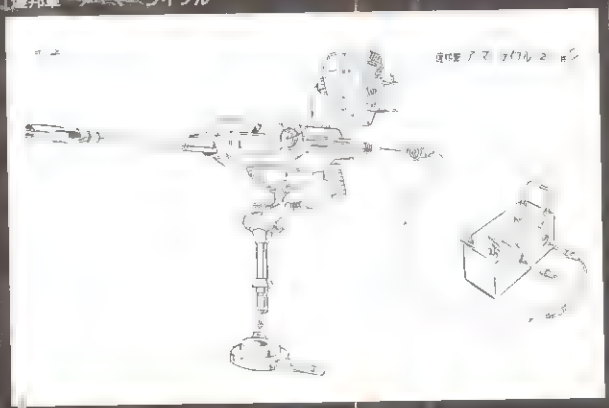


中型のリニアガンでジープなどに銃座を固定して使用する。



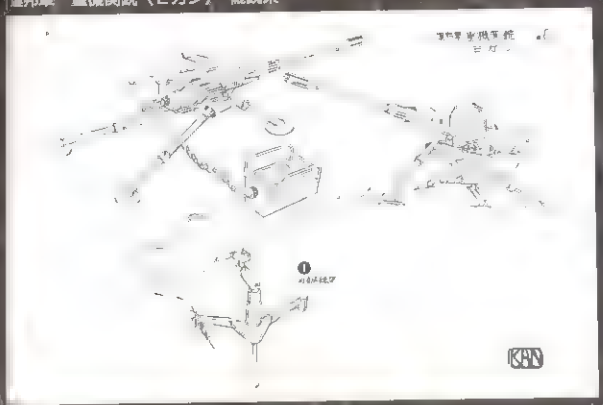
[illegible]四輪駆動車にアーマーライフル[illegible]

連邦軍　アーマーライフル



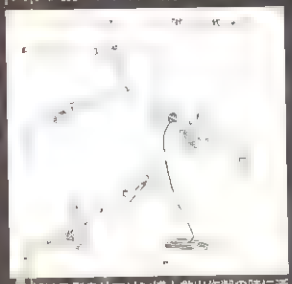
アーマーライフルのパーツ分解図。

連邦軍　重機関銃（Eガン）　機銃架



リニアガンを連射可能な重機関銃とした。

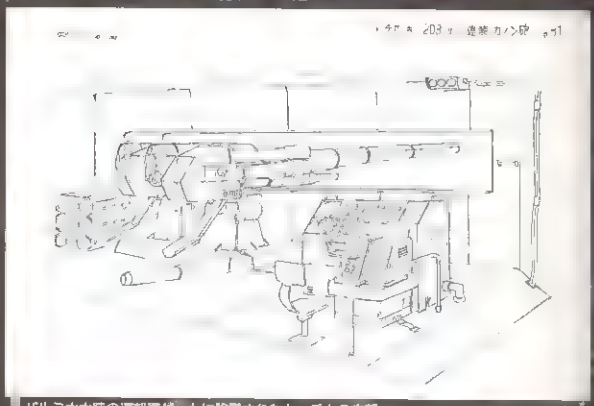
パイプ銃　アンカー銃



ゲリラ側のサマリン博士救出作戦の時に活躍した。

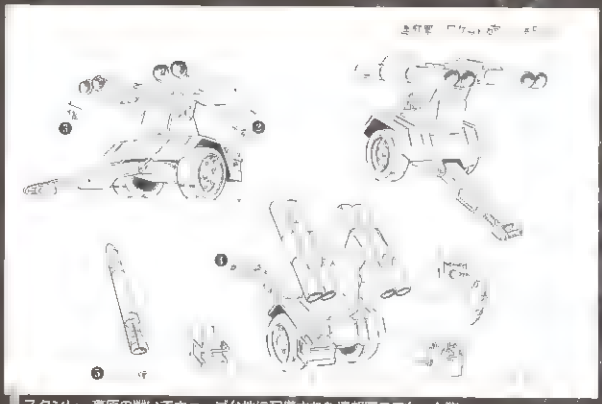
[illegible]カノン砲。

トーチカ内　203ミリ二連装カノン砲



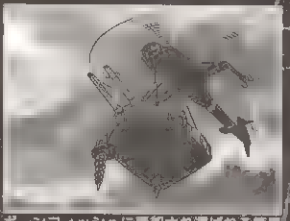
パルミナ大陸の連邦軍ゲートに設置されたトーチカの内部。

連邦軍　ロケット砲



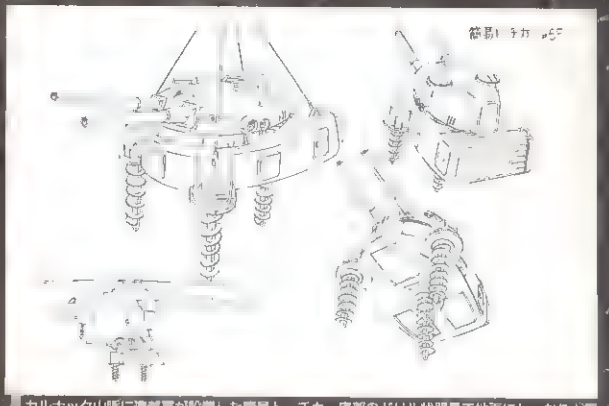
スタンレー高原の戦いでウェーブ台地に配備された連邦軍のロケット砲。

勝敗を左右する要地であるウェーブ台地に連邦軍はロケット砲を運び込んだ。



ボーンフィッシュに撃墜され運ばれる[illegible]

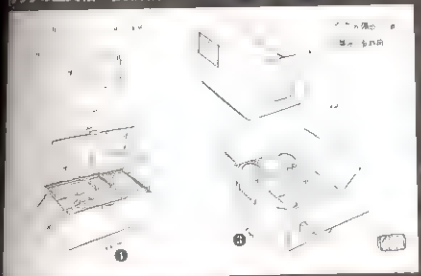
簡易トーチカ



カルナック山脈に連邦軍が設置した簡易トーチカ。底部のドリル状器具で地面にしっかりと固定される。

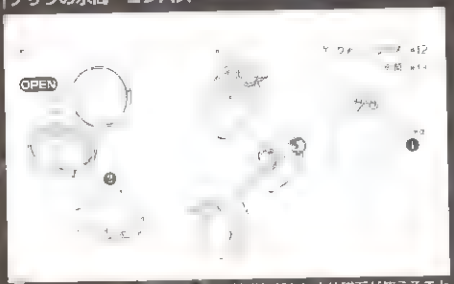
◀設定概要▶
●対空用誘導[illegible]　●[illegible]
●[illegible]　●人物
●ロケット砲

ゲリラの工具箱　食料箱



ゲリラ活動で使用する工具を収めるケース。食料等を運ぶには、やは[illegible]

ゲリラの水筒　コンパス



ゲリラの装備品。デロイア星にも地磁気があり方位磁石が使えることが分かった。

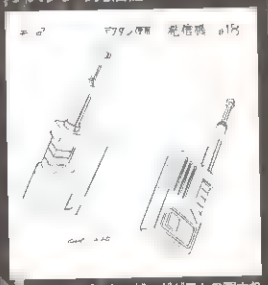
[illegible]

[illegible]25cm位 ●4cm位 ●70cm ●85cm ●エン[illegible]の置き ●蓋のシガーライターソケットへ ●左手に[illegible]ています ●左腕装着時 ●↓時間 ●↓手首間 ●注意[illegible]他人物はバックルのものと同じものを持たせて下さい。[illegible]ランドセルより大きめです ●<チェスタのバッグ[illegible] ●こんな風にして下さい ●セル書きにして下さい。[illegible]70cm ●100cm ●<対比 ●サマリン ●イスもハ[illegible]ブイスです ●バルミナ大陸 地図 ●地図 ●<対比> [illegible]開すると開く ●チャンネル ●同ッ [illegible]今夜いろりで[illegible]上げ!? よしっ！ 作戦はやめだ [illegible] ●ダグラム!! [illegible]ダグラム！ 応答せよッ！ 来たナ。よし 行こう！ ●[illegible]こまで下がります ●<く使い方> ●間に浮かじです。[illegible]りきすると地雷が[illegible]カーンバクハツ)です。 ●発光部(赤く光る) ●<く対比> ●タバコです ●[illegible]装置 ●プラス[illegible]ック装置 ●発光部(赤く光る) ●発光部 ●この部分●[illegible]く使い方 ●#22では[illegible]ケース[illegible]使用せず

簡易電熱器

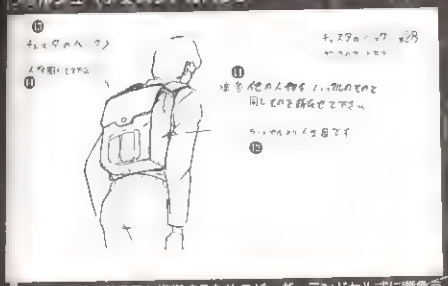
水を入れたカップに落とし湯を沸かすための簡易器

デスタンの発信機



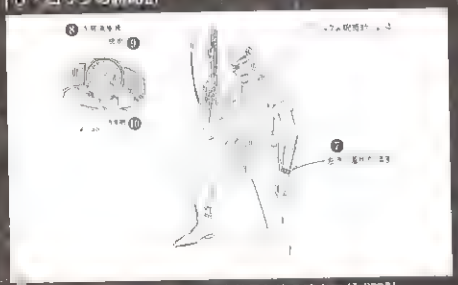
裏切ったデスタンが、ダグラムの隠された位置を伝えるため携帯していたレーダー発信機

ジョルジュ（チェスタ）のバッグ



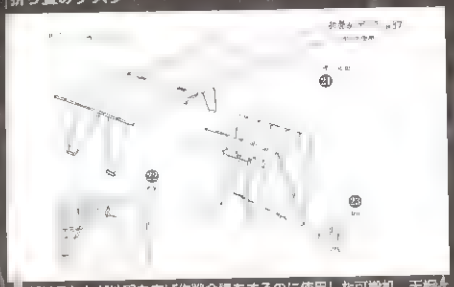
弾薬や食料など備品を携帯するためのバッグ。ランドセル式に背負う形式のもの。

J・ロックの腕時計



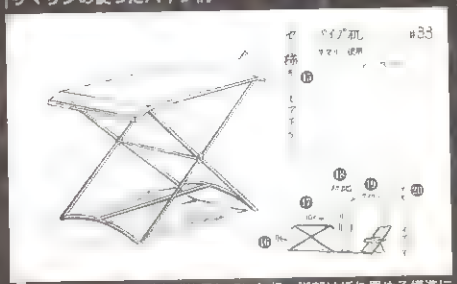
作戦の決行時刻や経過時間などを知るためのアナログ式時計。

折り畳みテスク



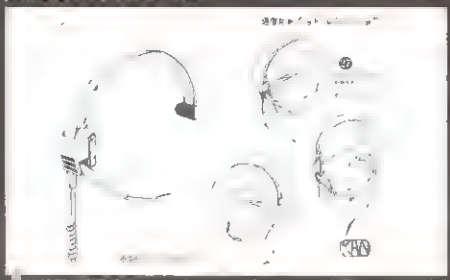
ゲリラたちが地図を広げ作戦会議をするのに使用した可搬机。天板と脚部を折り畳み、持ち運びやすくすることができる。

サマリンの使ったパイプ机



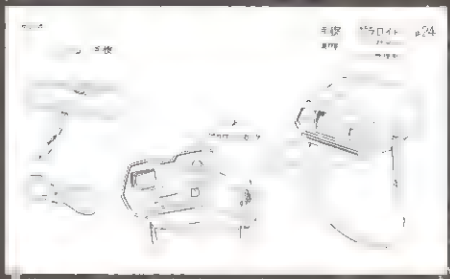
野営中にサマリン博士が使用していた机。脚部は折り畳める構造になっている。

通信兵用ヘッドレシーバー



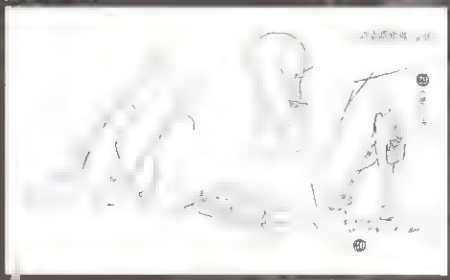
連邦軍の通信兵用レシーバー。タイプにメモなど作業用のため両手が解放されるヘッドセット型装置。

連邦軍手錠　ゲリラのインスタントカメラ



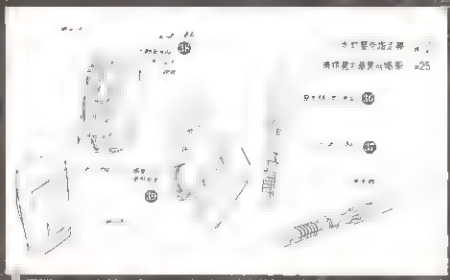
サマリンが囚われる軍刑務所にチコを潜入させるため、書類を偽造するための[illegible]した[illegible]の手錠。

地雷探知器



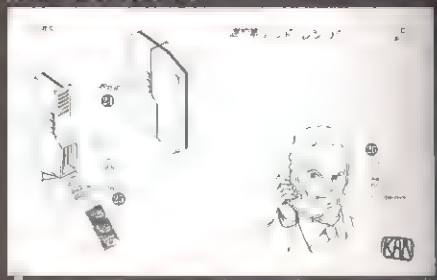
金属を感知し、地中に埋設された地雷を発見するための装置。

赤灯警告指示棒　時限発火装置付爆薬



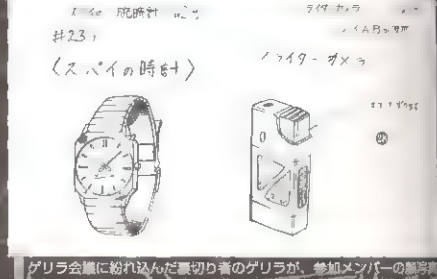
爆弾ケースと組み合わされた時限発火装置。本来はこのように時限爆弾として[illegible]されていた。

連邦軍　バンドレシーバー



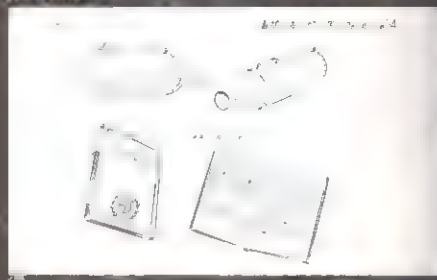
連邦軍の通信機用レシーバー。中折れ式でポケットなどに入れても可搬なサイズ。

スパイ道具　腕時計　ライター型カメラ



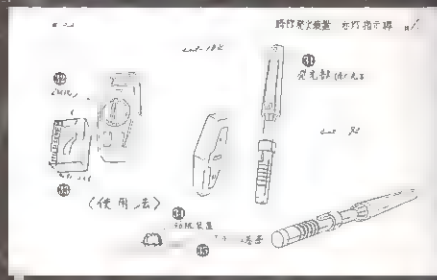
ゲリラ会議に紛れ込んだ裏切り者のゲリラが、参加メンバーの[illegible]を撮影するために使用したライター[illegible]

毒ガスボンベ　四人ファイル



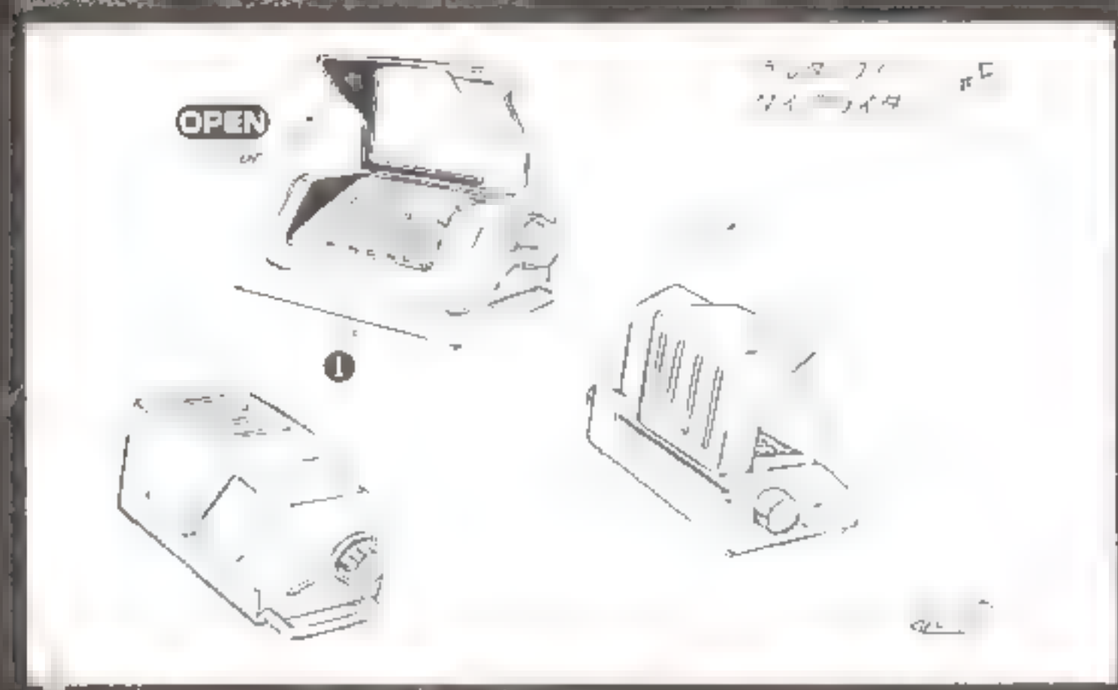
バラク軍刑務所に突入しようとするゲリラを撃退するため、ヘリコプターに搭載した毒ガス[illegible]で[illegible]ファイル。

時限発火装置　赤灯指示棒



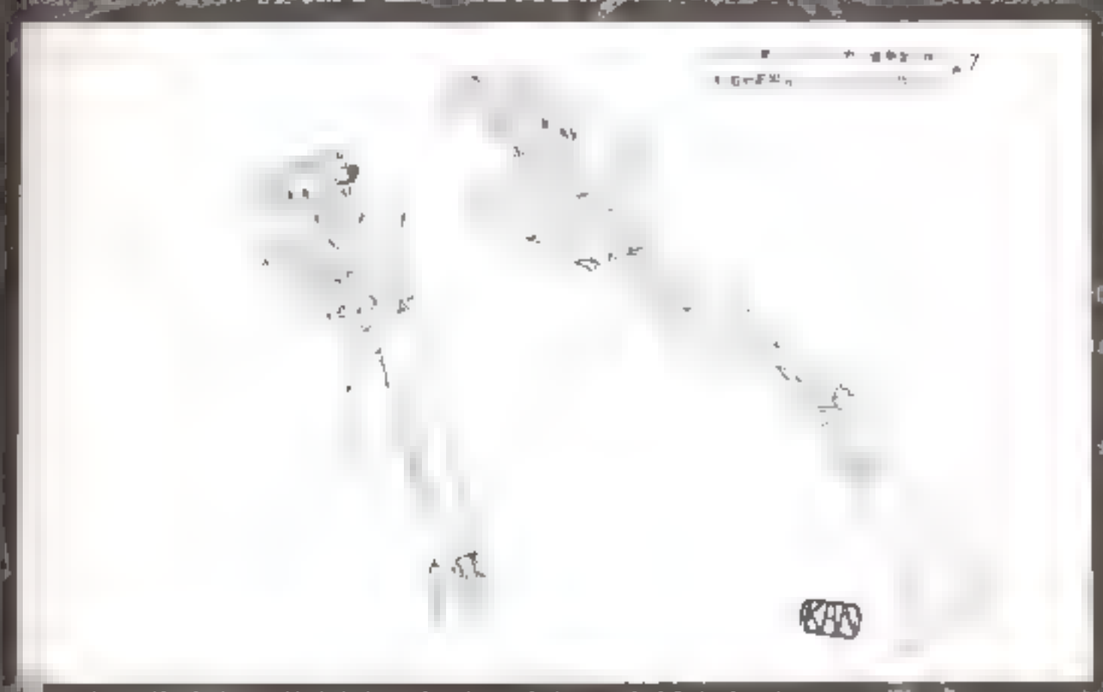
左はダグラムの燃料棒など補給物資獲得のため、連邦軍基地を襲撃したときにゲリラたちが使用した時限発火装置。右はCBトラックなどの誘導用発光指示棒。

ラルターフのタイプライター



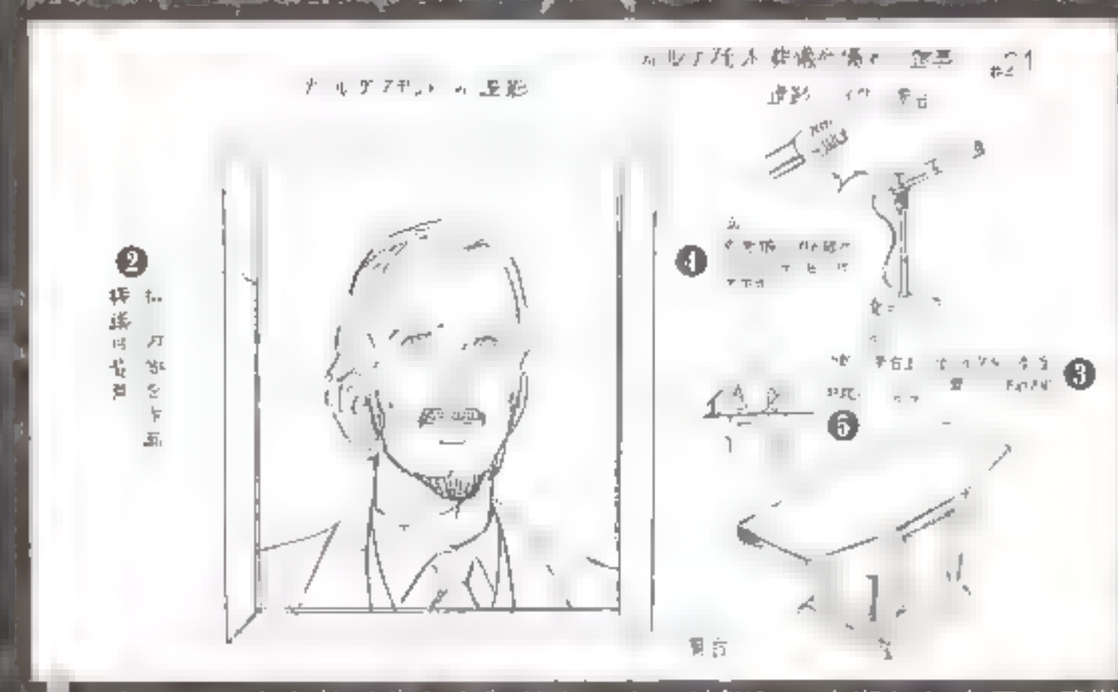
ラルターフが記事を書くときに使用するパーソナルタイプライター

カーディナル市議事堂　記者会見室のクレーンTVカメラ



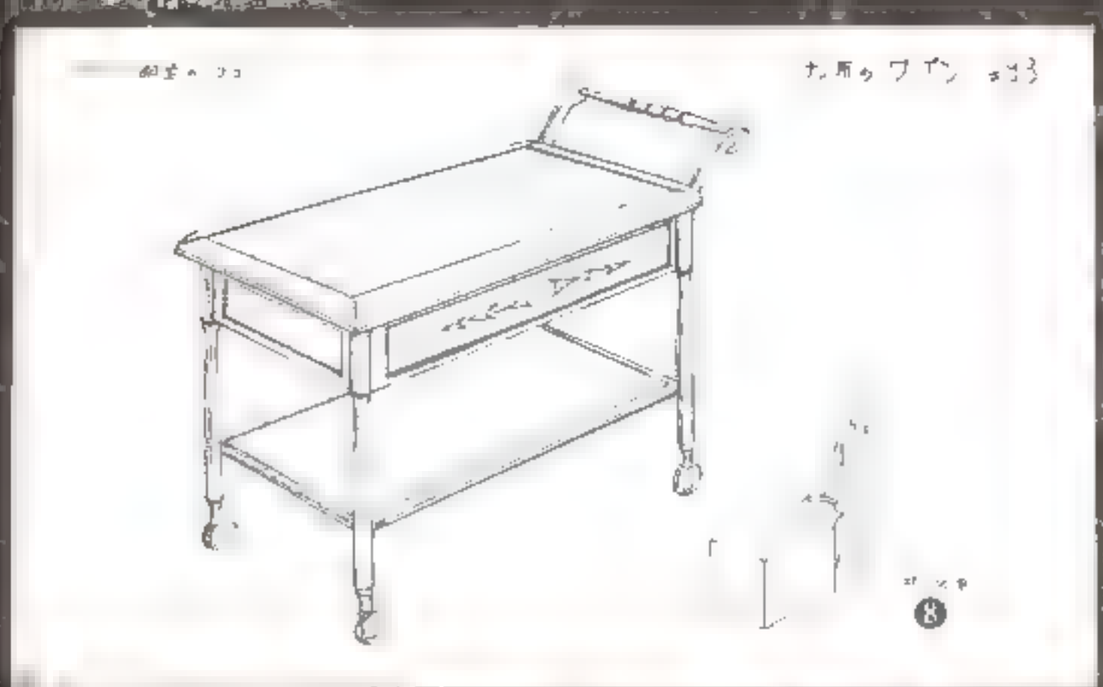
記者席後方から撮影するためのクレーン付きカメラ

カール・デスモンド葬儀の小道具　遺影　マイク　演台



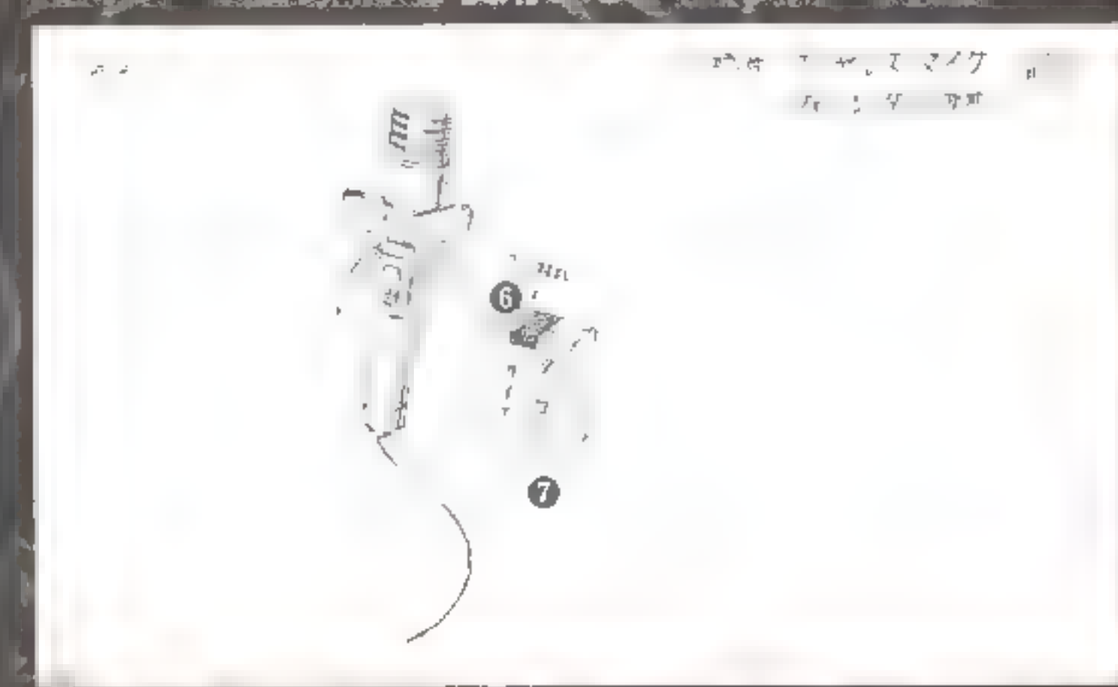
連邦軍の圧力と政敵たちとの軋轢の中で苦悩し、自殺した市長の葬儀時に使用された小道具。

ドナン用のワゴン



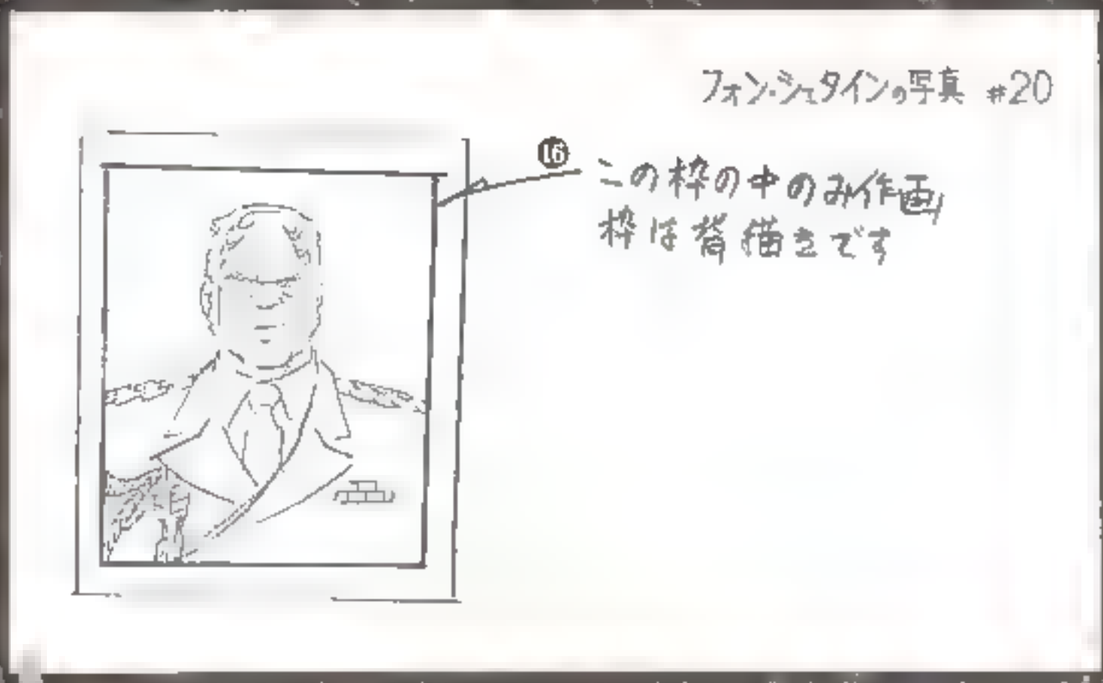
ドナンの執務兼応接室に飲み物などを配膳するために使用されたワゴン

フォン・シュタインが使用したワイヤレス・マイク



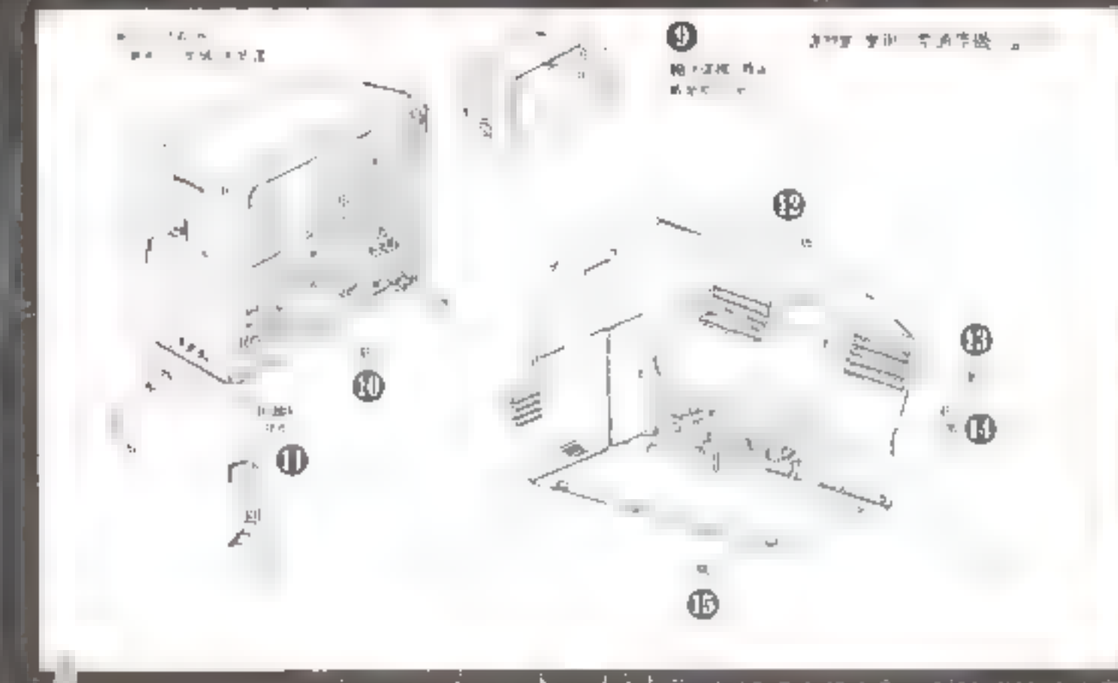
ボナール市でのグランプリにおいて貴賓接待で使用されたマイク

フォン・シュタインの写真



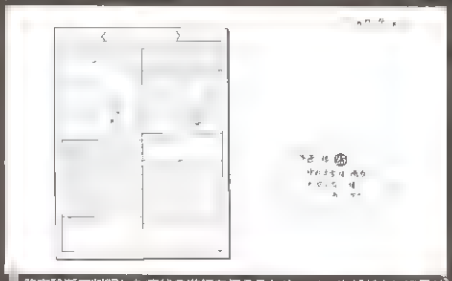
ボナール市でのグランプリにてサーキット場に掲げられた巨大な写真

連邦軍　軍用大型通信機



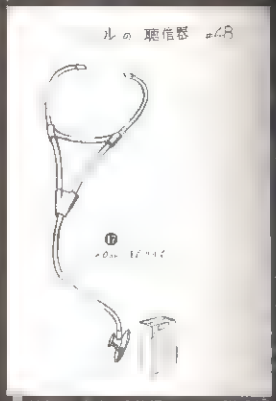
連邦軍補給部隊が野営地で使用した通信機

ドナンのカルテ



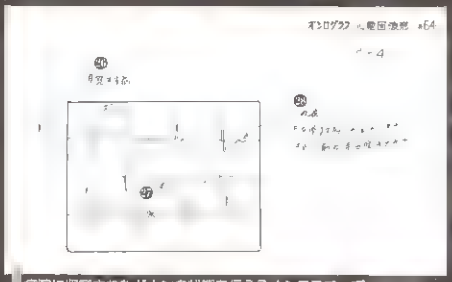
健康診断で判明した病状の進行を伝えるため、ニールがドナンに見せたカルテ。

ニールの聴診器



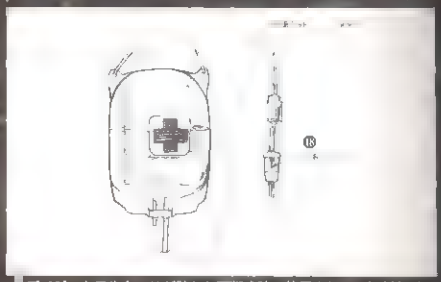
ドナンの友人で主治医のニールが使用する聴診器。ドナンの健康診断時などで使用

オシログラフ　心電図波形



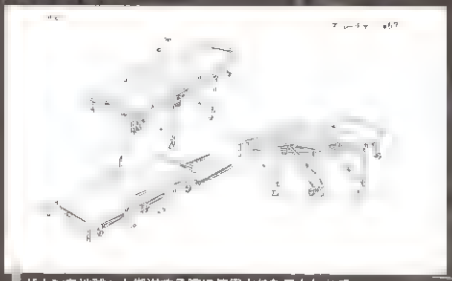
病院に収容されたドナンの状態を伝えるオシロスコープ。

点滴セット



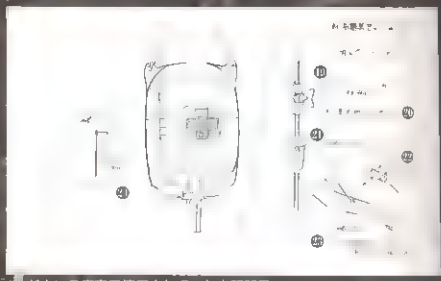
デイジーとラルターフが訪れた野戦病院で使用されていた点滴のセット。

ストレッチャー



ドナンを地球へと搬送する際に使用されたストレッチャー。

点滴器具セット



ドナンの病室で使用されていた点滴器具。

◀設定補足▶

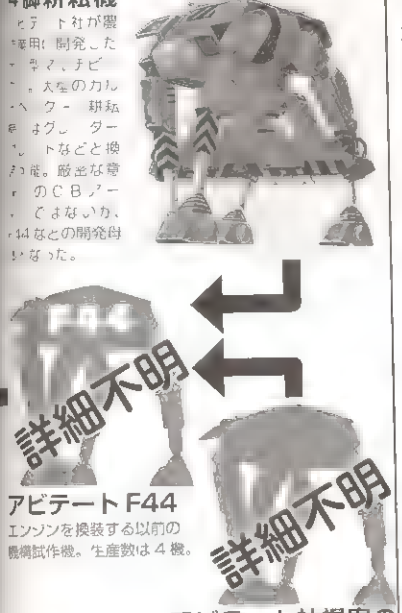
①34cm　●枠の内側を作画　●線は背景　●①(表)演台上にはマイクを3本立てて、それぞれ　●③の先端は画面に入りエーションを付けて下さい　●<対比>　●対比　●タバコのサイズ　●才人比率　●※無線通信の[illegible]前面カバーがつく　●(前)　●同縮尺対比　●55cm位　●(後)　●45cm位　●(裏)　●この枠の中のみ作画　枠は背景きです　●60cm位あります　●1清すつおちる　●ラコックc-121でこれに手を伸ばす……　●回すと[illegible]が加減できます。　●1清すつおちる　●これをパン/ウゴウで止めます　④NG　計の向き→計の方へ／隣の向き→隣の内側　●<対比>　●作画指[illegible]中の文字は遠目にわからない間に入れて下さい　●[illegible]します　●[illegible]この線　温を覚ます時この位の大きさ　●色に[illegible]分性の大きさ

[illegible]れた　ドナンの[illegible]、心電図をつなが[illegible]

CBアーマー開発史

The History of Combat Armor development

CBアーマーとは、二脚以上の歩行脚と、機銃や砲などの火器、あるいは戦闘用に特化された作業肢などにより、それらを駆使する汎用性を備えた陸戦兵器である。S.C.140年代、唐突に開発され始めたこの兵器は、地球連邦軍に制式採用されるや否や瞬く間に主力兵器の座に躍り出た。その開発の軌跡を追う。真実は見えるか!?



4脚耕耘機

アビテート社が農業用に開発した[illegible]、チビ[illegible]、大型のカル[illegible]ター耕耘[illegible]はグレ[illegible]ター[illegible]トなどと換[illegible]能。厳密な意[illegible]のCBアー[illegible]ではないが、[illegible]44などの開発母[illegible]となった。

アビテートF44

エンジンを換装する以前の機構試作機。生産数は4機。

アビテート社提案のCBアーマー原型機

CBアーマー開発の背景

S.C.（スペース・センチュリー）110年代初頭、あらゆる地形条件に適合し、重装甲、重武装を条件とする陸戦兵器の開発が提唱された。「乱暴に要約すれば、3年前後の期間内に歩行戦車を実用化せよ」という内容であったということができる。これは、通常の軍需メーカのみならず、関連する民間企業にも広く公募された。軍による設計提案要綱に対し一数社が応募したものの、一業製品としての難易度が高く、また、開発期間の短さなどから、ほとんど辞退する企業が続出した。第一次設計案のほとんどか、人形の戦闘車輌そのものの改良型や、移動システムに若干の一工夫を施した程度の物であったと言われている。

軍がこのような要請を行った背景には、既存の機甲部隊の構成に限界を感じていた事や、イメージ戦略の一環としての側面があったとされている。この新兵器は、基本的にデロイア星での運用を目的とした陸戦兵器であり、未知の兵器体系に対する潜在的な興味やモチベーションも大きかったとされている。

デロイア星は、地球と比べ開発が遅れているため不整地が多く、車輌での走破性には限界がある事、植民星での戦闘に既存の兵器を展開した場合、反発が予想される事などを勘案した結果、可能であれば、人型の陸戦兵器を開発、投入することでイメージアップを図りたいという政府関係者の思惑もあったとされている。

実際には、この時期の連邦軍に明確なビジョンがあった訳ではなく、既成概念にとらわれない斬新な兵器体系を構築したいという、漠然とした願望のようなものであったとする資料や証言も散見される。

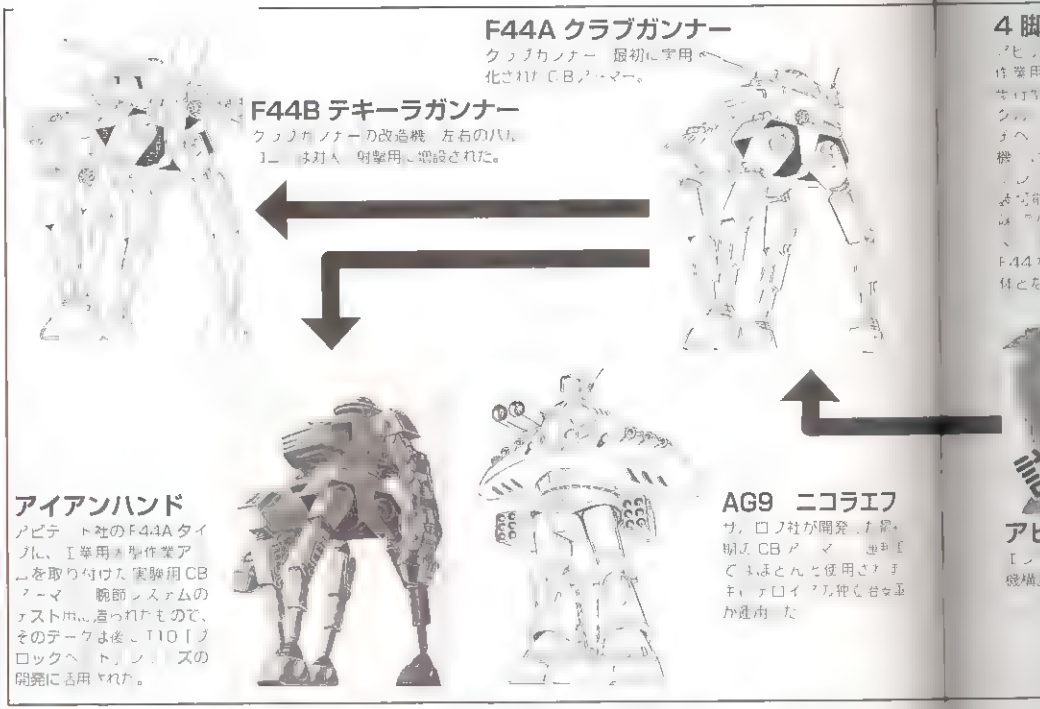
一方、ソルティック社が提出した設計案は、外観はほぼ人型で、実戦投入の際には「歩兵」としての運用が想定されていた。二脚歩行その[illegible]なわち、ソルティック社製の二脚歩行機に対する軍の期待は依然として高く、これらの新兵器群を開発する部署や要員、予算枠などを維持する

かくして、軍の極一部では、アイアンコンバット」などと仮称されていた未曾有のプロジェクトは実際に動き出すこととなった。

第一次募集において、在来兵器の延長線上にある兵器は基本的に全て却下され、一ヶ月後に第二次提案が行われることとなった。この短期間で各社は発想の転換を図り、軍の要望に沿ったプランが提出された。なかでも戦闘車輌メーカーのアビテート社、および航空機メーカーのソルティック社の設計案は、奇抜でありながら軍の要求に応えたものであった。

まずアビテート社のプランは、エンジンユニットを搭載する本体に一本の歩行脚を設け、前方には地表面まで届くマニピュレーターを装備。最一部に視界360度のコクピットを据え、本体左右のオプションポートには兵装ポッドを実装できるというものであった。その基礎設計案は、空想科学小説に登場する異星人の戦闘メカさながらであったものの、軍の要望を一分に取り込んでいた上、技術的にもそれなりの裏付けのあるものであった。本体の形状は円錐形の作業用ポッドに酷似しており、4脚歩行は構造的に二脚歩行のものより単純であったため安定性や生産性も良好で、整備性も実際的な範囲に収まっていた。ちなみに、この試作案には大出力のハーニアスラスターが装備されており、宇宙空間での運用を想定した機能も盛り込まれていたと言われている。

この設計案は、アビテート社内で「戦闘装甲」を意味する「CB（コンバット）アーマー」と呼ばれており、それは当初この試作案そのものを指す名称であったが、後にこのカテゴリに含まれる兵器全体の総称とされた。



〝多脚型〟から〝人型〟へ

太陽の牙ダグラム 073

ム、ソルティック社が提唱した設計案は、外観はほぼ人型で、実戦投入の際には、歩兵としての運用が想定されていた。脚歩行そのものは既に珍しい技術ではなかったが、実際に兵器としての実現性を伴った設計案として提出された事は、軍にとっても驚異的な事であったとはいえ、構造が非常に複雑で、実用化に当たっては、更なる技術の蓄積が必要であり、それはメーカーサイドも認識していた。それでも、それらの不確定要素の排除と問題解決のロードマップも既に作成されており、近い将来には一分に実現可能なものであると評価された。

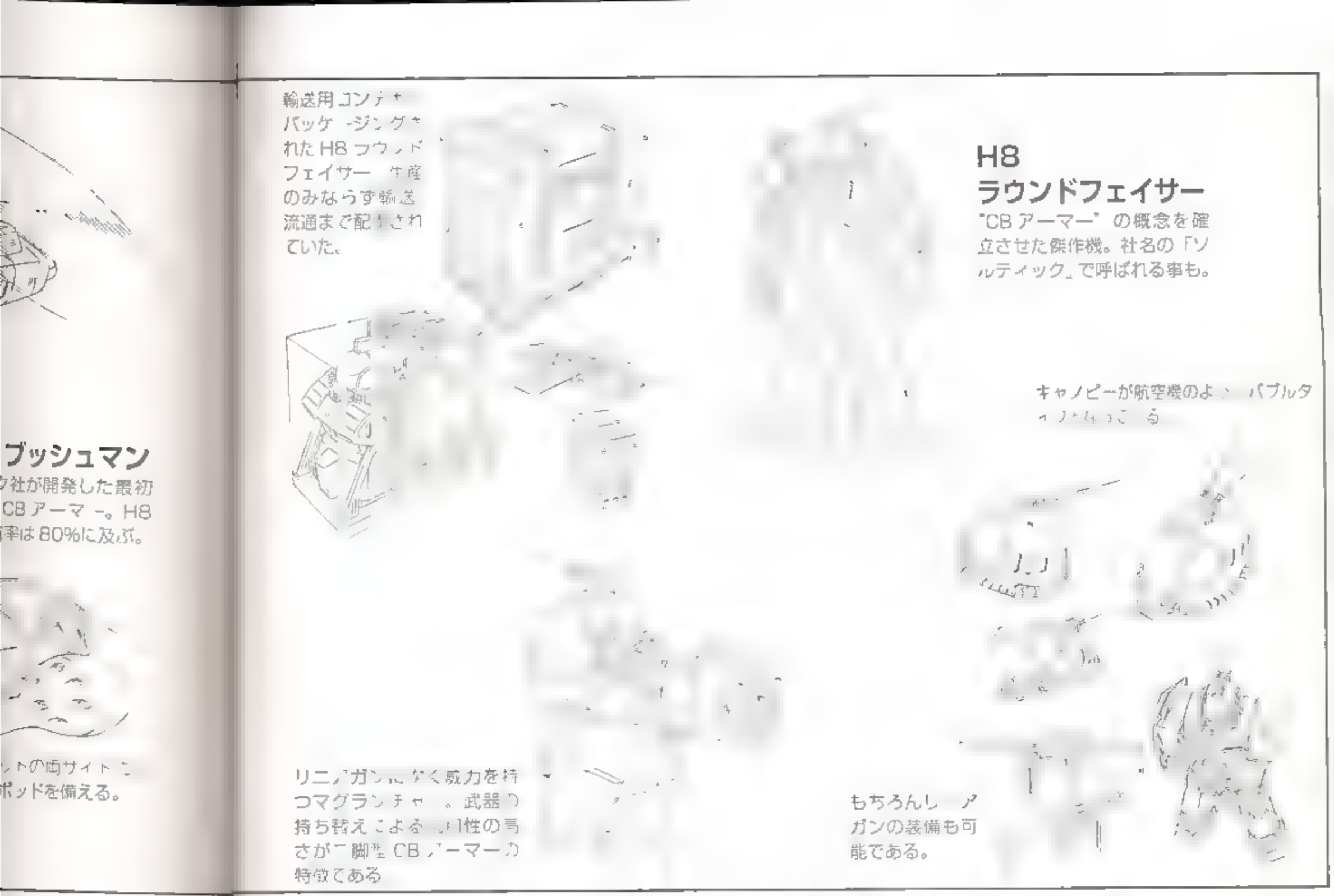
ほかにも、モボットタイプの二脚歩行ユニットをベースとするアイアンフット社や、歩行ユニットをホバー装備で補助するサハロフ社などが飯補として選考に残り、各社にはシンメーワ社が開発した試作エンジン7基が提供され、計画は次の段階へと進展する。

供給されたエンジンの規格に合わせ、搭載兵器などの実装を想定して設計の細部に手直しを加えた結果、各社の設計案は地上高10mを超える規模となった。そして、開発の進展に伴い、デロイア星での運用条件に最も早く適合したのがアビテート社製のものであった。軍は早々に採用を決定し、量産九行型として12機をアビテート社に発注する。ただし、軍は、脚歩行のプランを諦めた訳ではなく、ソルティック社に開発の継続を命じている。なぜなら、この時点でシンメーワ社製の試作エンジンのスペックにムラがある事が判明しており、その稼働許容範囲内での実用化が可能だったアビテート社の設計案を承認する事によって、このプロジェクト全体を維持、推進するための判断であった。すなわち、ソルティック社製の二脚歩行機に対する軍の期待は依然として高く、これらの新兵器群を制覇する部署や要員、予算枠などを維持するための措置であったと言われている。実際、エンジンの新造も決定し、この時の仕様のままでアビテートタイプは実際に建造された。

プロトタイプを軍に納入したアビテート社は、続けて量産九行型のF44タイプを4機建造していたが、軍が想定する「CBアーマー」がソルティックれの二脚歩行型である事が明らかとなったため、この4機はデロイア星でのテストに使用されることとなった。これらはプロトタイプから信頼性の高い前進式シャーンに換装されていたが、機動性が優先されたため移動時の乗り心地や居住性が劣悪であった。

エンジンをゼロBA型に再更換え、歩行脚の基部構造やユニット化を盛り形状や居住性などが見直された改良型は、F44A「クラブガンナー」として量産化されることとなった。本格地の走破性などは高い評価を得たものの、地上高が11mを超えるなど、気象条件によって運用が制限されるような問題点もあり、兵器としての完成度は疑問視されていた。ただし、実働に際しては、既存のAEV（戦闘車輌）の代替機として十分な性能を持っていたため、その走破性や整備性も相まって、CBアーマーの主流が二脚歩行型へと移行してからも長く運用されることとなった。実際、戦術的にも、脚歩行型との住み分けが可能であったため、改造型のみならず、同系の新型多脚機も開発されている。

この系譜に連なる機体は、F44B「テキーラガンナー」、F44D「デザートガンナー」、F35C「ブリザードガンナー」などである。



輸送用コンテナにパッケージングされたH8ラウンドフェイサー。生産のみならず輸送流通まで配慮されていた。

H8 ラウンドフェイサー
"CBアーマー"の概念を確立させた傑作機。社名の「ソルティック」で呼ばれる事も。

キャノピーが航空機のようにバブルタイプとなっている。

ブッシュマン
社が開発した最初のCBアーマー。H8の率は80%に及ぶ。

ントの両サイドにポッドを備える。

リニアガンに強く威力を持つマグランチャー。武器の持ち替えによる汎用性の高さが二脚型CBアーマーの特徴である。

もちろんレーザーガンの装備も可能である。

最初期のCBアーマー

CBアーマーの第一次設計提案要請の選考に残った4社のうち、アビテートおよびソルティックの2社が優勢であったため、アイアンフット社とサハロフ社は事実上、予備的な処遇を受けていた。そのうちサハロフ社はなおも設計調整を継続し、独自の情報網からソルティック社の二脚歩行機構のノウハウを入手することに成功する。当時の状況に焦燥を覚えていたサハロフ社は、下請身の構造や機能を初期案のままでプロトタイプを建造し、結果的にソルティック社に先んじて実機のロールアウトを達成する。スパーケーは火器搭載量や二脚歩行といった要件を満たしていたため、軍側もこの機体を採用せざるを得ず、AG9「ニコラエフ」として12機の生産を承認し、後に26機を追加発注することとなる。しかし、CBアーマーの運用方法や戦術の確立はおろか、使用目的さえあやふやな時期でもあったため、軍とサハロフ社の意見対立は深刻であった。用心の少行能力自体、移動速度を上げるためには跳躍が必要で、姿勢制御やホバー機能を併用しなければならなかった事や、劣悪な汎用性などが評価そのものにも影響していた。納入後も事実上の死蔵状態にあり、実戦に参加したケースも極めて稀であったとされている。

アビテート社のF11タイプの実戦配備がほぼ完了したのとほぼ同時期にソルティック社の二脚歩行型CBアーマーが完成した。エンジンはロールスロイス社製の高出力タイプを採用し、10mの全高でロールアウトした原型1号機との相性も良好であった。F11タイプが実際には既存のAFVに近い"車輌的な"操作性と運用法を持っていたのに対し、この機体は航空機に近い単座式のコクピットを採用したことで、独自の操作感を備えていた。デフォルトの武装として右肩にミサイルポッドを装備し、人間と同様に機能する腕部に相応しいハンドガンタイプのリニアガンも開発された。さらに腰部の可動域や各部をコンパクトに改良した2号機以降は、外装も合理的にユニット化され、接地バランサーの小型化やマニピュレータの精密化も図られている。

機体のユニット化は、生産や輸送そのものに配慮した構造であり、機体一式を規格化されたコンテナに収納する事ができる。また、初期型を除く量産型は、ハイロットの有効性の確保やセキュリティー対策などにも万全の配慮がなされており、IDカードと連動した始動キーシステムや脱出用のイジェクションシステムも完備されている。その反面、パイロットの育成に必要な期間が長期にわたるなど、運用面でのシステム確立も、既存の兵器体系とは一線を画するものとなっている。さらに、設計段階から背部に装備換装用のハードポイントが設けられており、装備のバリエーションにはターボザックなども含まれていた。

コクピットの視界も良好で、ハブレタイプのキャノピーが正規の仕様とされたため、H8の制式番号が充当されてから、ラウントフェイサー」と名付けられている。

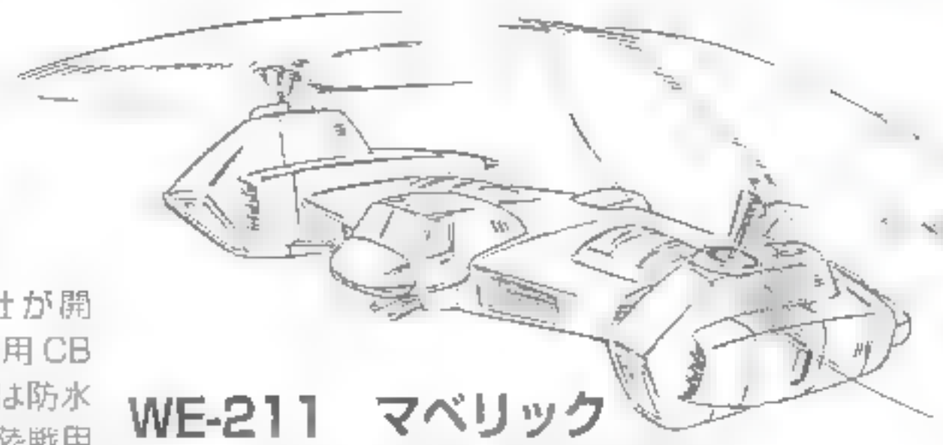
この機体の完成によって、"CBアーマー"そのものの概念が確立されたと言っても過言ではない。また、デロイア星がXネブラの影響下に入ってからも、軽量化やバックパックの換装などの改良が繰り返され、長期にわたって最前線で主力兵器の座に君臨し続けている。

本格的な"人型"CBアーマーであるH8の完成を目前としながら、軍首脳の一部には、CBアーマーをいわゆる「コンバット ビークル 戦闘車輌」の変種のひとつに過ぎないとする考えもまた根強いものがあった。驚くべき事に、ソルティックはH8と同時期に「ヴァーハウト」の開発に着手していた。H8が開発途上にあるこの時期に、ソルティックは、軍が"防水シールドシステムを持つCBアーマー"として発注したにも関わらず、水中戦をも可能とする水陸両用CBアーマーとして完成した。H8が開発途上にあるこの時期に、ソルティックは、軍が"防水シールドシステムを持つCBアーマー"として発注したにも関わらず、水中戦をも可能とする水陸両用CBアーマーとして完成した。H8が開発途上にあ

への進出である。かくして開発されたH40-S「マッケレル」は、軍が"防水シールドシステムを持つCBアーマー"として発注したにも関わらず、水中戦をも可能とする水陸両用CBアーマーとして完成した。H8が開発途上にあ

H404S マッケレル

ソルティック社が開発した強襲揚陸用CBアーマー。本来は防水シールド装備の陸戦用CBアーマーとして発注されていた。



WE-211 マベリック

進軍時のみならず後退、撤収時にも運用されるヘリポーン。CBアーマーの運用には欠かせない。

上陸後に戦闘を行う場合はデッドウェイトとなるハイドロジェットは一日投棄する。

H102 ブッシュマン

ソルティック社が開発した最初期の軽量型CBアーマー。H8との部品共有率は80%に及ぶ。

コクピットの両サイドにミサイルポッドを備える。

本格的な"人型"CBアーマーであるH8の完成を目前としながら、軍首脳の一部には、CBアーマーをCV（コンバット・ビークル　戦闘車輌）の変種のひとつに過ぎないとする考えもまた根強いものがあった。驚くべき事に、ソルティック社はH8と同時期に「解りやすいCBアーマー」としてH102「ブッシュマン」の設計案を提出している。この機体は、H8の基本設計を80%以上流用し、徹底的な軽量化が図られたもので、森林地帯のような極端に移動に対する制約が厳しい領域での運用が前提とされていた。特にエンジン周りや各部装甲は徹底的な軽量化が施されており、機動性とのバランスも破綻する寸前まで追い込まれている。それによって獲得された走破性は、CVとは次元が異なるレベルに到達しており、しBアーマーと既存の兵器との差異を見せつけるに十分なスペックを達成していた。

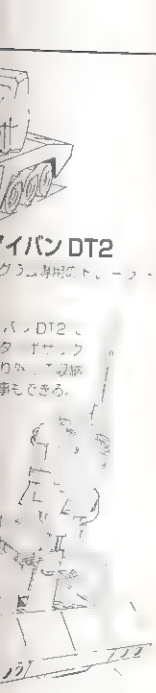
固定武装は、両腕部に対しBアーマーライフルを内装し、頭部左右に6連装ミサイルポッドを装備している。このため、コクピットの視界は劣悪であったものの、稼働そのものは良好であった。ただし、パイロットの練度によっては忌避される傾向もあったようだ。携帯火器としてはマグランチャーを装備するが、これは軽量化のために採用したマルタイプ03サードエンジンの出力がリニア砲の稼働基準に達していなかったためである。

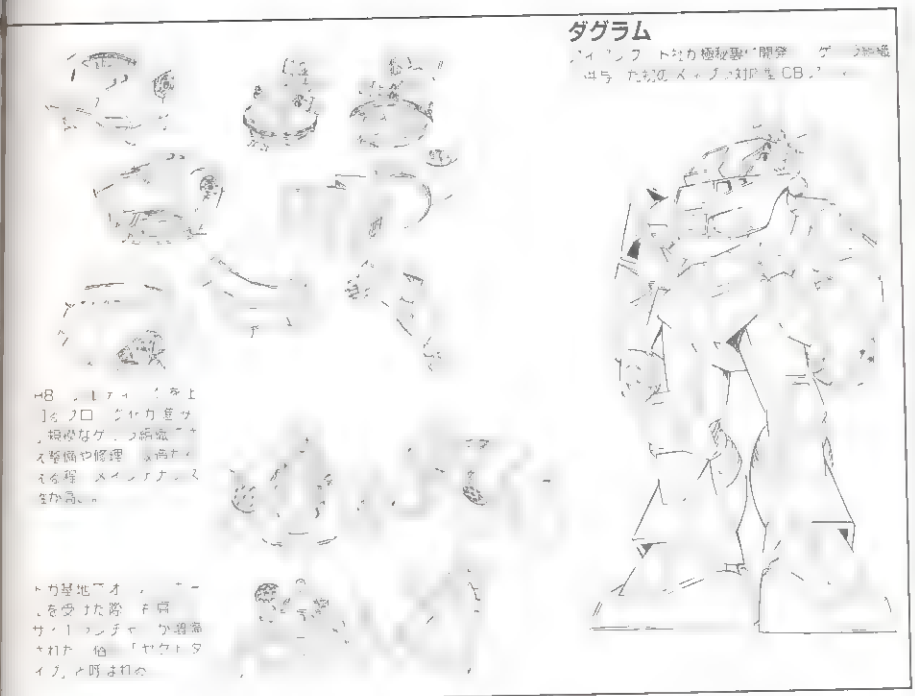
CBアーマーの開発が現実的な様相を呈するに従い、軍首脳陣からは、その戦術的利用に関して、あくまでしBの代替装備とする考えがある一方で、反対にあらゆる領域への適応を期待する考えもあった。その代表的なものが、水中への進出である。かくして開発されたH404S「マッケレル」は、軍が「防水シールドシステムを持つしBアーマー」として発注したにも関わらず、水中戦をも可能とする水陸両用CBアーマーとして完成した。H8が開発途上にある時期に並行して開発が進められたが、設計は本機の方が若干早めに着手されていたらしい。試作もH8と並行して行われ、採用されたエンジンはロールスロイス社製のV14SGという新造品である。もっとも、スペック的にはH8用のV8とほぼ同等で、水陸での稼働に対応したチューンを施された程度であるようだ。機体は流体抵抗に配慮した形状で、H8と比べて可動部分が少なかった事が、設計も建造もH8より短期間で完了した要因と考えられる。また、水中航行時は背部のハイドロジェットエンジンを使用し、上陸後に戦闘を行う際には投棄する事もできる。ただしその場合、航路による帰還が不可能となるため、撤収にはまた別の移動、輸送手段の確保が必須となる。基本的には、戦闘終了後にハイドロジェットエンジンを回収し、マベリックなどの補助航空機によって懸架、帰投するのが一般的な運用法である。

ちなみに、H404の武装は、腹部の7連装ミサイルポッド2基と両腕の対アーマーミサイル8門のみで、手持ちの兵装は使用できなかった。汎用性を旨とするしBアーマーの中にあって、これほど投入環境や戦術が限定されている機種も珍しく、強襲揚陸作戦の先鋒や湾岸施設の破壊工作などの他に運用される事はほとんどなかった。そのため生産数も少なく、デロイア星の独立戦争時に後期型のSタイプが運用されたのが数少ない実戦投入例であったようだ。

CBアーマーの機能的バリエーション

【完本　太陽の牙ダグラム】





CBアーマーとデロイア独立運動

地球軍が新兵器開発の要諦を行い、アビエート社の4脚型CBアーマーが配備されるまで、およそ3年が経過していた。ソルティック社のB8の九行星産型のローレアウトまでにはさらに2年を要した。その間、サハロフ社のAG9型なども完成し、SC149年までには相当規模の部隊編成が可能なほどの量産体制が整っていた。アビエート社のB8系はすでにハリエ・ノコン機が生産されており、ソルティックのB4-01も出居地帯などに配備されつつあった。CBアーマーは、デロイア星において、すでに実質的なキーウェポンとなっていた。

植民開始からおよそ150年が経過し、独立機運が高まっていたデロイア星の治安維持や武装ゲリラ組織の摘発、殲滅などに、CBアーマーはその威力を発揮していた。デロイアのB4独立を弾圧する暴力装置として確実に機能していたのである。

地球軍のB4型はデロイア星のほぼ全域に配備され、次期主力CBアーマーとして B8の生産、配備も始まっていた。あらゆるチャンネルやレベルを通じての圧攻法による交渉は全て破棄され、武力による反攻を余儀なくされていたデロイア星のゲリラ組織にとって、CBアーマーの圧倒的戦力は最大の障害であった。しかし、あらゆる一般的ノウハウスに乏しいデロイア星でCBアーマーをいくつ調達できたところで、圧倒的な数的優位をもつ地球軍に対抗する事は不可能であった。そんな中、デロイア星に起死回生の幸運が訪れる。

近い将来、デロイア星を含むスタフェラス星系が、「Xネブラ」と呼ばれる帯電粒子を多量に含むガス状星雲の領域に突入し、その影響で各種の警告が起きる。電波状態は有視界程度の距離でしか通じない程まで悪化し、さらには超集積回路の性能にも影響を与えるどころか、近代的な電子機器の性能が著しく低下する事が予見されたのである。CBアーマーの制御には高度なコンピュータシステムが不可欠であり、また、戦術展開や索敵、哨戒にはレーダーやセンサー類が必要であった。この前提が崩壊した環境において、もしXネブラの影響を受けないCBアーマーが投入できれば、たとえ少ない戦力であっても活路を見出すことができる。

SC140年代、デロイア星各地のゲリラ組織を統合させたのは、カリスマ的な中南半島人地下運動指導者とするサマリン博士が指導する人地下運動拠点とするサマリン博士が指導する人地の経・グループであった。革命を説く自著の発禁処分を機に地下運動に身を投じたサマリンは、地球資本の進出に反感するデロイア財界に働きかけ、活動資金を調達すると同時に、反メトール州の駐在人使と交渉し、地球政府内における政治的支持を得た。デロイア住民の日常的な貧困を背景に、反メトール感情を利用したサマリンは密約を成立させる事に成功する。

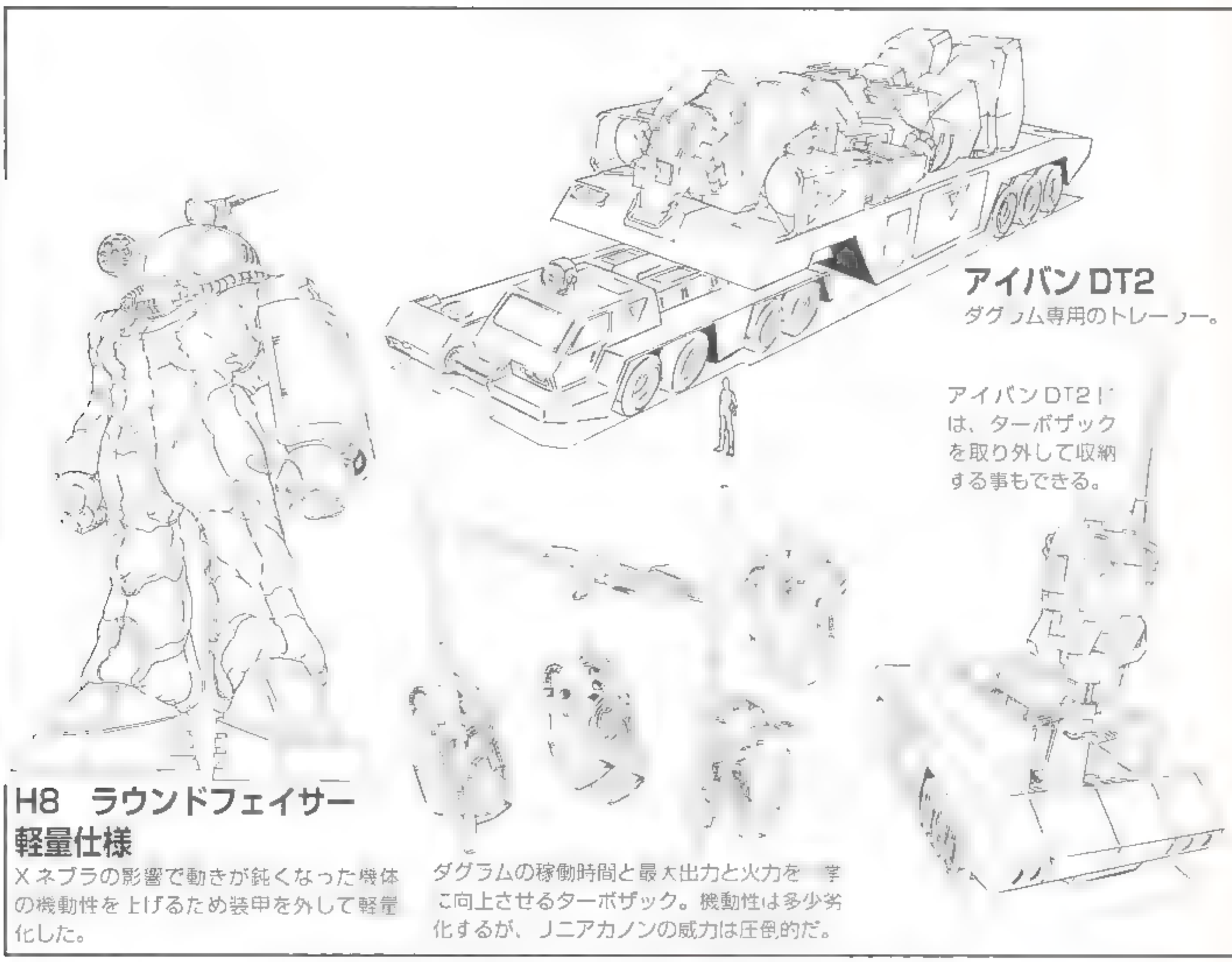
独立の要点は、北極ポートの制圧にかかっていた。デロイアに資源や食料の40%を依存する地球に対し、物資の搬出そのものをデロイア側でコントロールできるようになれば、地球経済は事実上破綻する。実際の禁輸措置を採るまでもなく、デロイア星は独立交渉を有利に進める事ができるようになるだろう。

サマリンは、Xネブラによる影響を受けないCBアーマーを開発すべく、反メトール系ミンガス州に本社を置くアイアンフット社と接触し、極秘裏に技術協力を要請する。

Xネブラ対応型のCBアーマーの調達は、サマリンの計画にとって不可欠な要素であった。そこで、新型CBアーマーの実動データの提供を条件として、アイアンフット社の協力を得られる運びとなった。ソルティック社に水をあけられていたアイアンフット社にとっても、この

の運動組織が連携した場合の規模は計りかねないが、それでも、ダグラムのスペックは突出しているといわざるを得ない。その開発経緯は前述のようなものであったのだ。

ダグラムの原型は直線的なキャノピーで構成され、近接戦闘用にマルチディスチャーシャー



アイバンDT2
ダグラム専用のトレーラー。

アイバンDT2には、ターボザックを取り外して収納する事もできる。

H8　ラウンドフェイサー軽量仕様
Xネブラの影響で動きが鈍くなった機体の機動性を上げるため装甲を外して軽量化した。

ダグラムの稼働時間と最大出力と火力を　挙　こ向上させるターボザック。機動性は多少劣化するが、リニアカノンの威力は圧倒的だ。

ダグラムの開発経緯

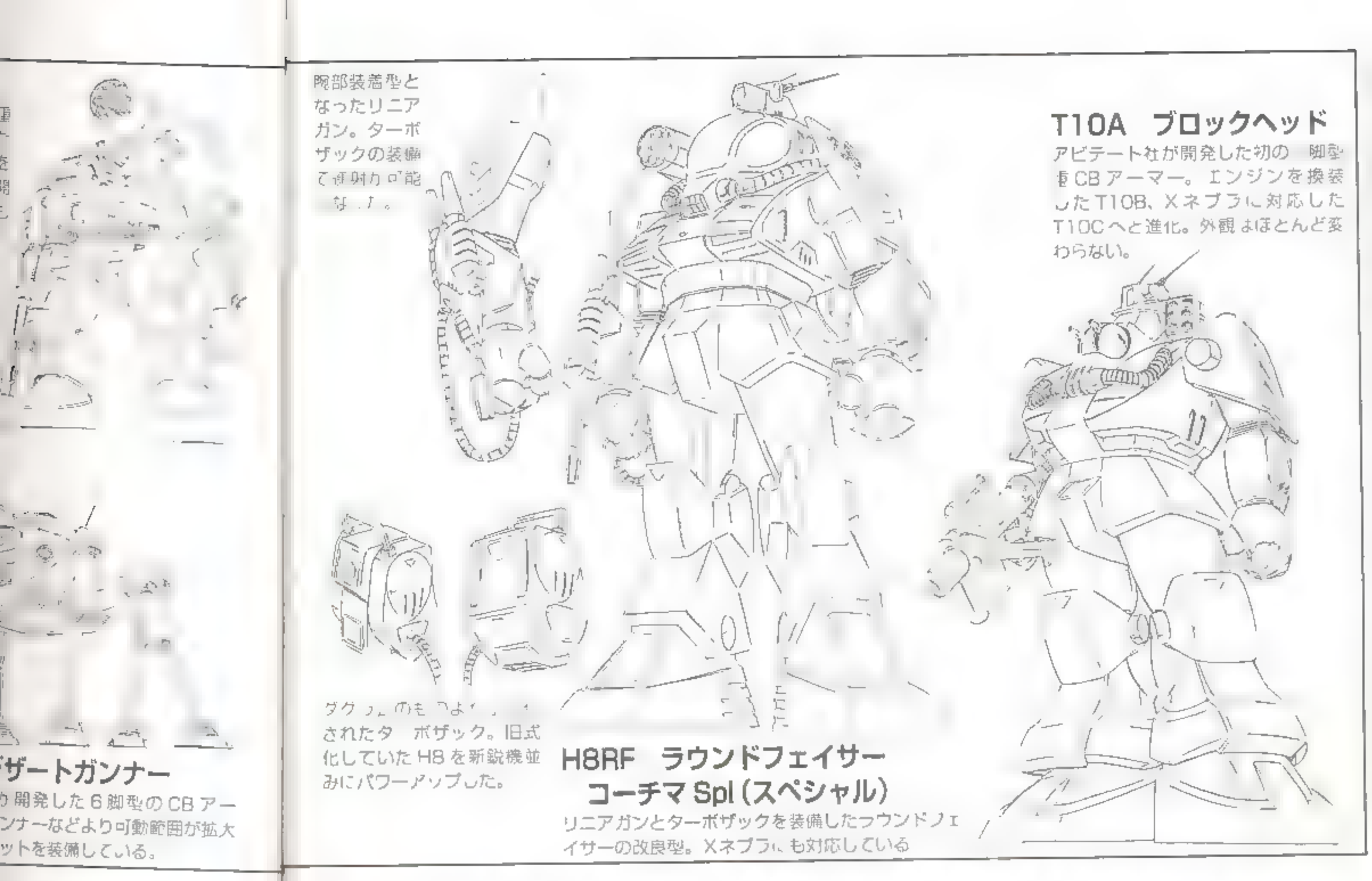
Xネブラ対応型のCBアーマーの調達は、サマリンの計画にとって不可欠な要素であった。そこで、新型CBアーマーの実動データの提供を条件として、アイアンフット社の協力を得られる運びとなった。ソルティノク社に水をあけられていたアイアンフット社にとっても、この開発計画は渡りに船だった側面があったであろうことは想像に難くない　連邦軍による第一次設計案公募の際、アイアンフット社は二脚型のモボットを提案したものの、ソルティックの設計案には対抗できなかった　だかっといって、サハロフ社のように拙速に出て不良品を生み出してしまうより、他社の動向や軍の要求をしっかりと見極め、なおかつ、着実に技術的な蓄積を積み重ねた上で開発することが肝要だとの判断があったのだろう。

S.C.150年。かくして〝ダグラム〟の開発が開始された。Xネブラ現象の詳細なデータが地球に送られ、それに対応したCBアーマーの精密部品がデロイアに届けられる。デロイアがXネブラに完全に覆われる時期は、S.C.152年とサマリンは予測していた　サマリン率いるゲリラ組織がCBアーマーの開発に踏み切ったのは、Xネブラの影響と、その対策に目処がついたためと考える事もできるだろう　そして決起の時が到来する

〝ダグラム〟と名付けられたこのCBアーマーの基本的な仕様は、鹵獲したH8タイプの部品を多数転用したとされているが、Xネブラ対応はともかく、H8以上に進んだユニット化や整備性、高度な防水能力、ターボザックとの連動など、不正規の小規模なゲリラ組織が独力で調達できるものではない　無論、デロイア星の独立運動組織が連携した場合の規模は詳らかではないが、それでも〝ダグラム〟のスペックは突出していると言わざるを得ない。その開発経緯は前述のようなものであったのだ。

ダグラムの頭部は直線的なキャノピーで構成され、近接戦闘用にマルチディスチャージャーを装備する。左手には20mmチェーンガン2門を内装し、装甲は同クラスのCBアーマーとの戦闘に対応した強度を持つ。当初のプランでは手持ち式のリニアガンを装備する予定であったが、使用する武装の選択肢を増やすため、右腕部のハードポイントにマウントする方式が採用された。さらに、ターボザックシステムは、作戦行動範囲を拡大し、リニアガンの連射を可能とする他、ターボザック自体が装備するリニアカノンは当時のデロイア屈指の威力を誇る。その反面、重量の増加に伴う機動性の低下や運搬に際しての負担増は、ダグラムを実運用する小規模なゲリラ部隊である「デロイア7」にとっては悩みの種ともなっていた。それでも、Xネブラの影響を受けないことによるダグラムのアドバンテージは大きく、既存のCBアーマーをほとんど寄せ付けなかった。

Xネブラの影響によって反応速度の低下した既存のCBアーマーはダグラムに対抗できず、敗退を続けていた。連邦軍の〝ザルツェフ追討隊〟は、ダグラムへの対抗措置として、H8の基本装甲を全て取り外し、カムフラーンシュートを〝着用〟させた。このH8「ラウンドフェイサー軽量仕様」は、H102を上回る機動性を発揮したものの、実質的には撹乱以上の効果はなく、機体の防御能力が著しく低下するため、この措置が採られたのもこれきりであった。



腕部装着型となったリニアガン。ターボザックの装備で連射が可能となった。

ダクトのもつよい[illegible]されたターボザック。旧式化していたH8を新鋭機並みにパワーアップした。

T10A ブロックヘッド

アビテート社が開発した初の脚型重CBアーマー。エンジンを換装したT10B、Xネブラに対応したT10Cへと進化。外観はほとんど変わらない。

H8RF ラウンドフェイサー コーチマSpl（スペシャル）

リニアガンとターボザックを装備したラウンドフェイサーの改良型。Xネブラにも対応している

[illegible]ザートガンナー

[illegible]開発した6脚型のCBアーマーンナーなどより可動範囲が拡大ットを装備している。

第一世代CBアーマーの発展と挫折

多脚型で実績のあるアビテート社が開発したT10型は「ブロックヘッド」と呼ばれ、軍の提供によるH8型のデータを転用した重CBアーマーとして開発された。全高は12mを超え、パイロットの他にガンナーが搭乗する複座式のコクピットを持ち、リニアガンも効かない装甲を持つ。1号機の組立を調整した後、T10A型承認を受けて量産されるが、程なくエンジンをロールスロイス製のV9 PW 500に換装した改良型が開発され、T10Bブロックヘッドタイプとして量産されることとなった。通常、ブロックヘッドとは、「えばこのBタイプを指す。変更点は、「サイルボ[illegible]」か1連装から6連装になり、照準システムも精度化されるなど、攻撃能力の拡大が図られている。また、この機種はさらにXネブラ対応機へと仕様変更され、T10C「ブロックヘッドCタイプ」として量産されている。シールドコンピュータが採用され、エンジンもPW 730型に換装されているが、外観上は全く同じだったため、塗装色をモスグリーンとして区別している。

一方のH8タイプもXネブラ対応機、H8RF「ラウンドフェイサー コーチマSPL（スペシャル）」として開発されている。H8は開発当初からターボザックの搭載計画もあって、シールドコンピュータの搭載と並行して量産計画されていたが、生産施設の事故などが原因で計画に遅延を生じていた。最終量産型のJ212-38型をベースとして開発が進められ、エンジンはV8Gタイプに換装されている。また、リニアガンとターボザックは、体型で計画されていたが、生産性や取り回しなどを勘案し、ケーブル接続による外装式へと変更された

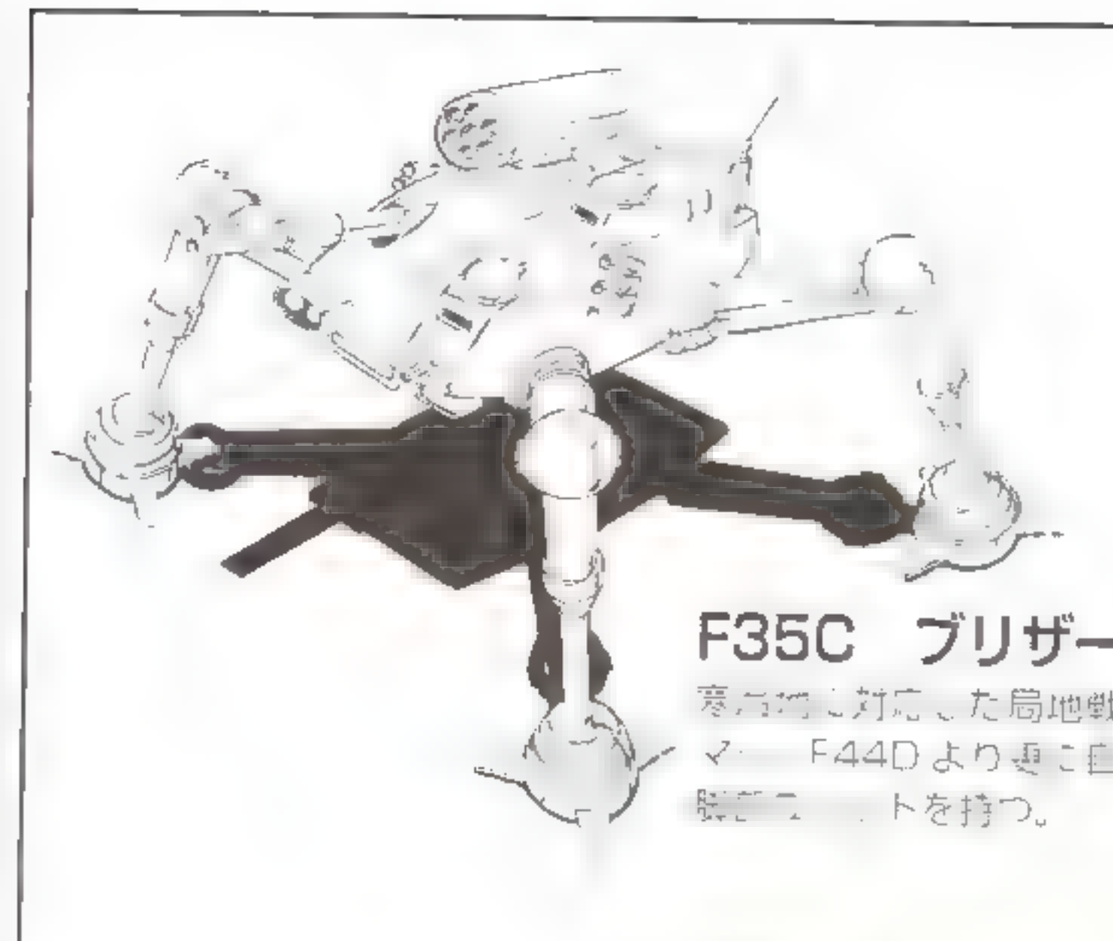
CBアーマーに関してのノウハウを持たないはずの国家であったが、ソレティック社系列に属するレーメーカーであったため、データ面での協力を得る事で開発にこぎ着けたとされている。Xネブラ対応を前提とするCBアーマーは便宜上第三世代にカテゴライズされるが、第二世代機の改装機は、原則的にこのカテゴリーには含まれない。その意味でF4Xは、連邦軍初

多数の名機、傑作機を生み出した第二世代CBアーマー群ではあったが、実際の運用とは「ダグラム」との戦闘などにおいて、様々な欠点なども明らかとなっていった。特に限定された地域での特殊環境下における局地戦など、通常兵器や視界の「いわゆる第一世代」CBアーマーの方が有利な局面も度々見受けられた。それらの事例は、軍部が「脚型CBアーマーのあまりの優秀さに、さながら万能兵器」であるかのような錯覚を抱いてしまっていた事や、実際に運用されるようになってから10年も経っていない事を忘れた戦術論自体が未成熟であった事などが要因であった。

そういった運用上の反省を踏まえ、使用地域や運用目的を明確に設定し、その条件に適応した機体の開発が試みられることとなった。つまり、CBアーマーの調達自体に明確な目的や生産基準が策定されるようになったのである。例えば、デロイア星での実戦投入を考えた場合、Xネブラ対応が必須となる事は言うに及ばず、対CBアーマー戦闘においても、近接戦闘を行うのか、中距離支援や砲撃戦などに限るのかなど、その用途をある程度明確にする事が必要とされた。これらの基準を満たした機体群が、第三世代CBアーマーに分類される。

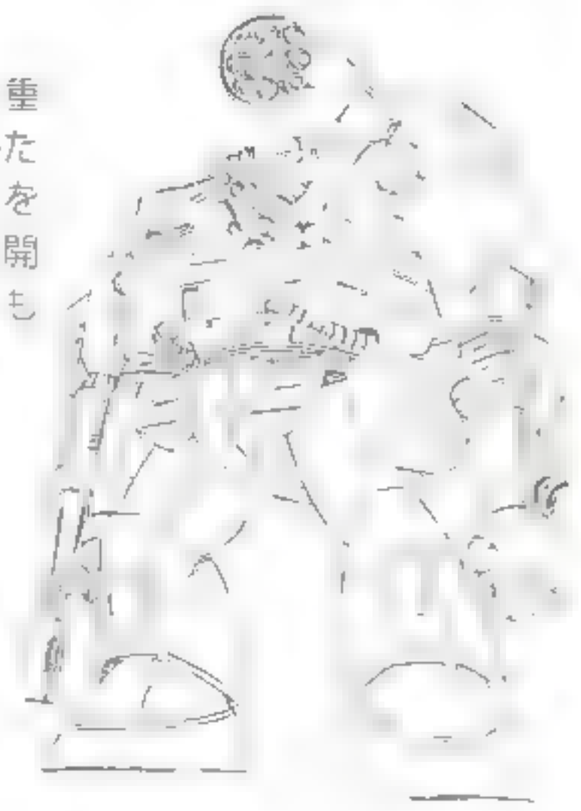
第一次設計案提出時、3脚式モボットの発展型を提出したものの、それ以降は連邦軍が管轄するCBアーマーの開発から事実上撤退していたアイアンフット社が、Xネブラ対応機開発の要請に応じて提出した機体がF4X「ヘイスティ」である。開発、生産基準は、対CBアーマー格闘戦よりも砲撃戦の展開能力を主眼とする機体構成が求められていた

4脚以上の歩行脚を持つCBアーマーは、二脚歩行型の出現以降、第一世代とされて新規開発はほとんど行われていなかった。アビテート社製のF日系の改装機か、それぞれの環境や運用法に適応、拡散していたか、例えば地球の寒冷地向けに多脚型CBアーマーの市場なども形成されていたのである。例えば雪原などにおける走破性は、機体が軽い事はもちろん、自重を



F4X　ヘイスティ

アイアンフット社が開発した重CBアーマー。極秘裏に収集したダグラムの開発と運用データを元に、連邦軍の要請に応じて開発された。後にデロイア側にも供給され、主力兵器となった。



F35C　ブリザードガンナー

寒冷地に対応した局地戦用4脚型CBアーマー。F44Dより更に自由度が改善された脚部ユニットを持つ。

F44C ファイヤーガンナー

A型試作機を改造して開発された戦闘能力強化型CBアーマー。冷却装置素付きリニアガンの装備や装甲強化、ヘッドセットシステムの改良などが施されたが、二脚型が主流となったため、2機が試作されたのみであった。

F44D　デザートガンナー

アビテート社が開発した6脚型のCBアーマー。クラブガンナーなどより可動範囲が拡大された脚部ユニットを装備している。

第三世代CBアーマー

CBアーマーに関してのノウハウを持たないはずの同社であったが、ソルティノク社系列に属するCVメーカーであったため、データ面での協力を得る事で開発にこぎ着けたとされている。Xネブラ対応を前提とするCBアーマーは便宜上第三世代にカテゴライズされるが、第二世代機の改装機は、原則的にこのカテゴリーには含まれない。その意味でF4Xは、連邦軍初の第三世代機だということができる。

F4Xはアビテート社のT10Cと同クラスの"重CBアーマー"に分類されるが、設計の開始時期がT10Cよりも後発であったため、Xネブラ対応機能はもとより、軍部の作戦構想の転換に伴って策定された　複数の重火器搭載機によるフォーメーション攻撃　に基づく戦術に対応したモデルとして設計されている。

リニアガンは同社で開発中だったCV用の大型ユニットが流用され、中距離射程で絶大な威力を発揮する。また、実戦投入時の整備プロセスを簡略化するため、当初は肩部に装備する予定だったリニアガンは腕部に装着するスタイルに変更された　左肩にはミサイルポッドが装備される事となり、コクピット構造なども併せて見直された結果、トータルでのバランス配置から非対称な設計が施されている　その異様な外観とは裏腹に、高い耐破性と機動性を発揮する。また、サポートシステムと強化型アクチュエーターの採用や低重心であることなども相まって、砲撃時の安定性は二脚型CBアーマー随一であった。さらに、高コストな耐リニアガン装甲をあえて使わずに生産性を向上させ、二脚型の泣き所であったコクピット周りの装甲を強化し、パイロットの生存性を高めている。

4脚以上の歩行脚を持つCBアーマーは、二脚歩行型の出現以降、第二世代とされて新規開発はほとんど行われていなかった　アビテート社製のF44系の改装機が、それぞれの環境や運用法に適応、拡散していたが、例えば地球の寒冷地向けに多脚型CBアーマーの市場なども形成されていたのである　例えば雪原などにおける走破性は、機体が軽い事はもちろん、自重をより広範囲に分散させる多脚型の方が有利な側面もある。すでにT10タイプで二脚歩行型CBアーマーの市場に参入していたアビテート社ではあったが、多脚型ガンナータイプのニーズも確実に存在する事から、再び新規開発に着手することとなった。

ほぼ唯一と言ってよい多脚型CBアーマーのノウハウを豊富に持つアビテート社は、驚異的な早さでF35C「ブリザードガンナー」をロールアウトする　アラナコフ社製RM6C型エンジンを搭載し、F44Dと同様のマルチ駆動脚を持つ4脚型CBアーマーとして完成した同機は、ターレットを廃し、主砲であるリニア・カノンを直接本体にマウントしている　これによって最低地上高を1m以内に収める事に成功し、雪面下に身を潜めるアンブッシュ戦術すら可能としていた。無論、寒冷地対策も万全で、居住スペースや可動部には凍結防止の与熱装備が施されている。この機体は、あくまで極地などの極寒地での稼働を前提とした局地戦用であったため、生産数は極わずかであったものの、F44系のF44A「クラブガンナー」、F44B「テキーラガンナー」、F44C「ファイヤーガンナー」などの単なる仕様バリエーション機とは異なる意義を持つ機体であった。

第三世代CBアーマーとその未来

ソルティック社が開発していた重CBアーマーSV-J322（後のHT128 ビッグフット）は、T10およびF4Xと競合する形で開発が進行していた。しかし、H8型のXネブラ対応機開発の遅延が原因で他社に後れをとり、すでに運用が始まっていたF4Xが軍部から（後には敵機としても）高い評価を得ていたため、同機の開発計画は却下されてしまった。

しかし、局地戦用CBアーマーの必要性が増大した事によって、同機の開発が再開されることとなった。当時の連邦軍と〝デロイア解放軍〟の戦闘状況から、北極ポートなど寒冷地での脅威の増大が予想されており、ソルティック社が持つH404「マッケレル」の防水シールド技術を応用する事で、寒冷地対応型への改装が可能と判断されたからである。

ただし、本来の設計は、近接戦闘や格闘戦を含む対CBアーマー戦闘用の機体であったため、その耐寒性能はF35Cほど充実したものではなかったとされている。また、さらに過酷な山岳地帯など、特に北極ポートへ至るカルナック山脈での戦闘なども想定されたため、機体可動部への着氷防止のため、装甲の外側から更に〝着る〟防寒シールドなども用意されている。これは実際にはエンジンの過冷却を防ぐための装備であった。基本的には耐寒性能が基準を満たした時点で即座に量産化が決定した。

HT128の武装は、左肩に6連装ミサイルポッドと2連装短距離射程リニアガンを内装し、T10シリーズを参考にパイロットとガンナーを同乗させる複座式コクピットが採用された。キャノピー形状はもちろん同社が得意とするバブルタイプである。

第三世代機は始まったばかりだが、その基本性能はすでに第二世代CBアーマーを多くの面で凌駕している。軍組織の主力CBアーマーとして、第二世代機と置き換えられるのも時間の問題であるかのように思われる。また、第二世代機がより環境適応能力を拡大することで、更なる新鋭CBアーマーやバリエーション機の展開も目前の事と思われる。

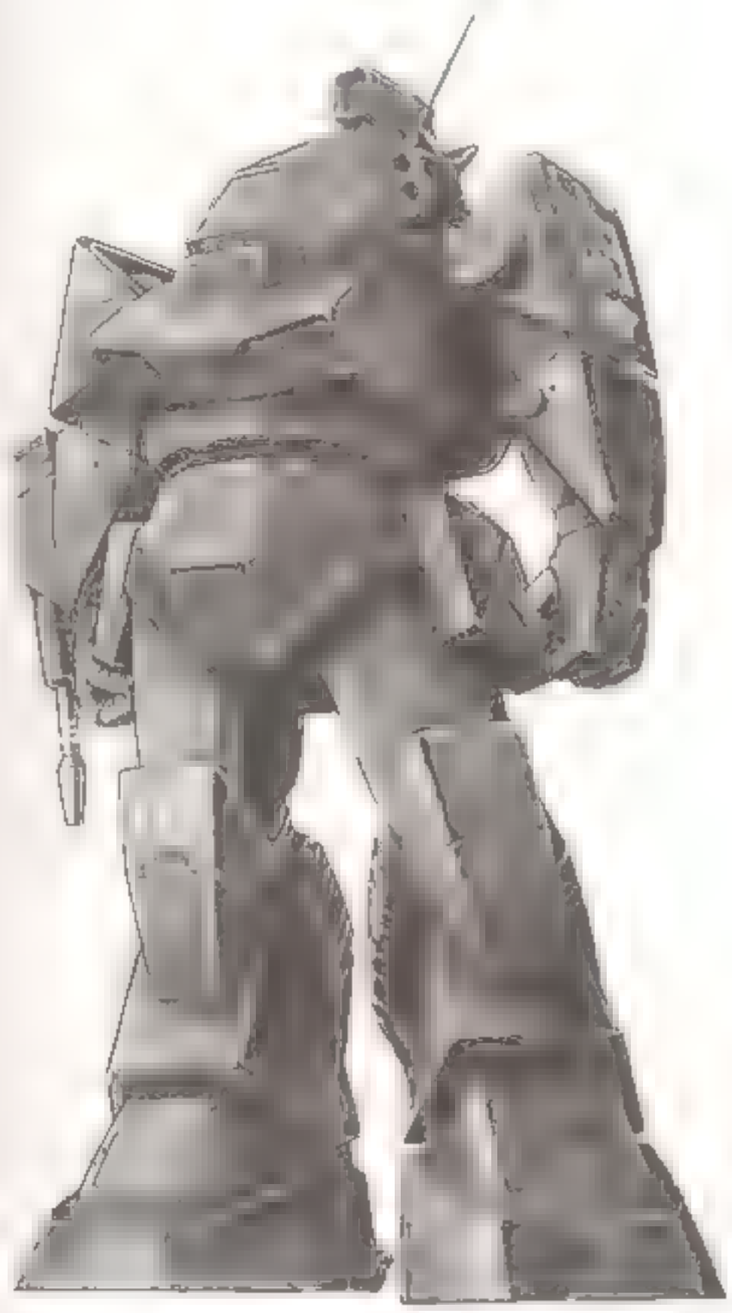
しかし、CBアーマーの開発は、デロイア星と地球の緊張関係から促進された事は否めない。デロイア独立運動が一定の成果を得た今、CBアーマーの進化を推し量る事は可能だろうか。それには不確定要素が多すぎると言わざるを得ない。とはいえ、デロイア星と地球の間に横たわる問題が根本的に解決された訳でもなく、再び戦乱の時代が到来しないとも限らない。

一度生まれた工業製品は、そのメディアやジャンル、用途などのニーズが消滅しない限り生産され続ける運命を伴っている。CBアーマーは、既存の兵器体系を塗り替えつつあり、また、その途上にあった。人類が抱える〝兵器〟の総量から言っても、依然として微々たるものであるとすら言える。こういった状況が、複数の星系とWH（ワームホール）によって結ばれている地球とデロイア星にとどまる事は、逆にあり得ないと考えざるを得ない。

あるいは、最初期の原型機が農作業用マシンであったように、穏やかな未来が待つのだろうか。あるいは、量産型ダグラムがサマリンの意志を継ぐかのように、更なる新天地を開拓する先兵となるのだろうか。CBアーマーにどんな未来が待つのか、それは誰にもわからない。

量産型ダグラム

完全独立を果たしたデロイアの人々が独自に開発したCBアーマー。サマリン博士の遺志を継ぎ、スタフェラス星系の他惑星開拓のため開発された。



HT128 ビッグフット

ソルティック社が開発した重CBアーマー。Xネブラ対応機能を搭載した優秀な機体だが、開発が遅れたため採用機は少ない。

HT128 ビッグフット 雪上用カムフラージュ 防寒シールド仕様

カルナック山脈に配備された機体が、保温と着氷防止のため装備した。

太陽の牙

クリン・カシム

連邦評議会議長ドナ・カシムの愛妻ジャナの子で、兄姉とは異母兄弟となる。地球人でありながらデロイア解放のためにダグラムのパイロットとなり、地球で出会ったデロイア人のロッキーらと共に戦いに身を投じていく。

Color Chart Collection Character

「ダグラム」の長大な物語を視聴者と共に駆け抜けた数多くのキャラクターたち。本頁画像及び現存する色設定画を通して、彼らのたどった軌跡を今一度振り返ってみよう。

主人公 クリン・カシム

防寒服

幾多の戦いを経てクリンは精悍な成長を遂げ、北極戦の頃には一人前の解放軍戦士になっていた。

標準装着時

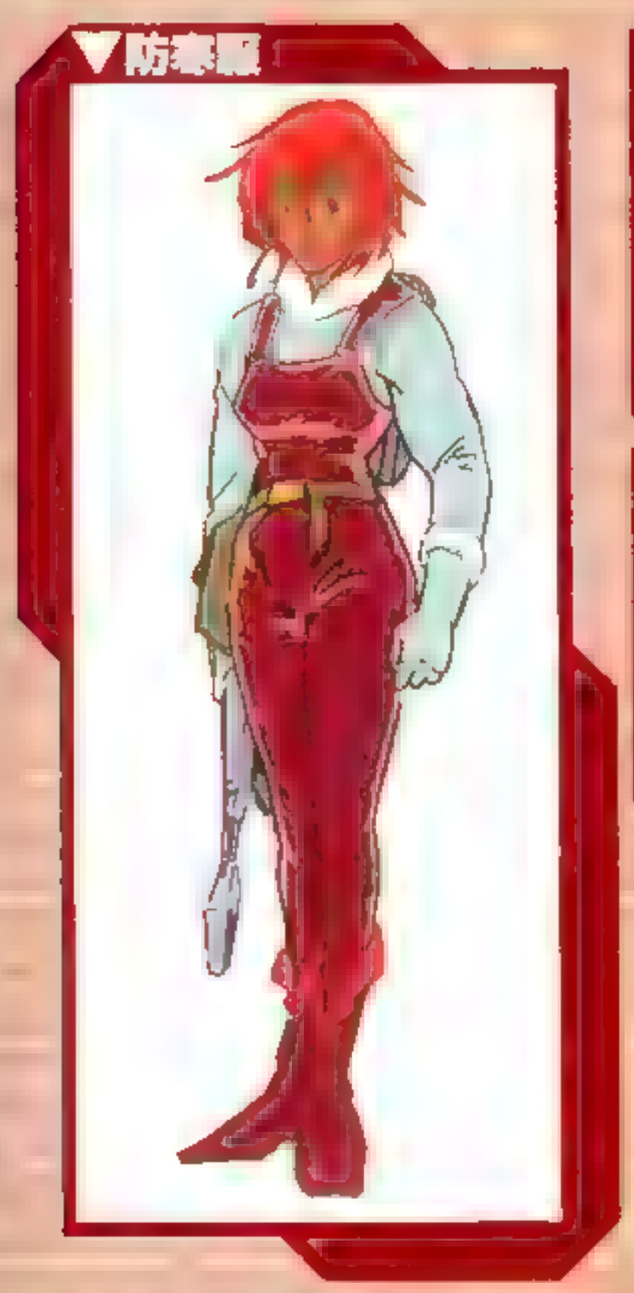
正規の軍事教育を受けていたクリンはCBアーマーの貴重なパイロットとなる。

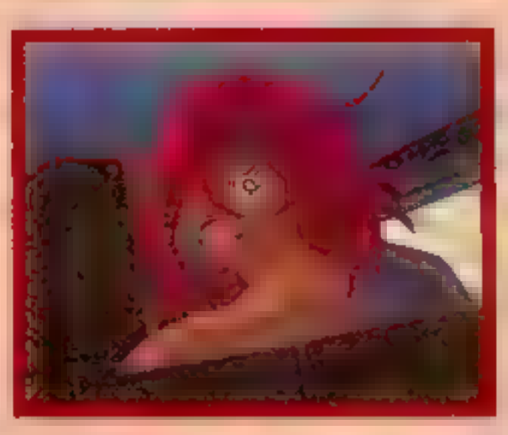
太陽の牙

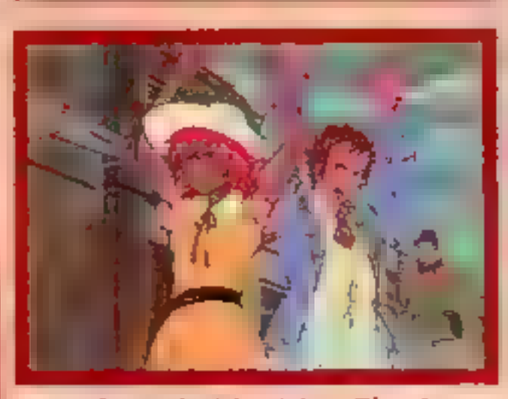
キャナリー・ドネット

デロイアに真の独立を求めた兄ディオルの遺志を継ぎ、彼女はゲリラとして戦うことを決めた。兄の死の原因である地球人に対しての恨みは深く、その感情はクリンへと向かうこともあった。だが、やがて信頼する仲間へと変わっていく。

▼防寒服







カップルに変装してカーディナルへ潜入。調子が狂う、とホヤきながらもまんざらでもない様子だった。

ロッキー・アンドル

地球から故郷のデロイアへ帰ったロッキーを待っていたのは、名ばかりの独立宣言と連邦軍によるゲリラ狩りだった。本当の兄のように慕っていたディオルがその犠牲となったことで、仲間と共に解放ゲリラとして戦うことを決意。後に太陽の牙のリーダーとなる。

▼防寒服

もと暴走族のヘッドというだけあって、度胸も腕っぷしもあるロッキーは仲間から大きな信頼を得ていた。

ディオルはフォン・シュタインの独立正規軍に参加し、クーデター終結後は反乱兵となって鎮圧部隊と戦った。

▼防寒服

その肉体同様とても大らかな人柄で、些細なことでは態度を崩さない。そこにいるだけでも安心感を与えてくれる存在である。

チコ・ビエンテ

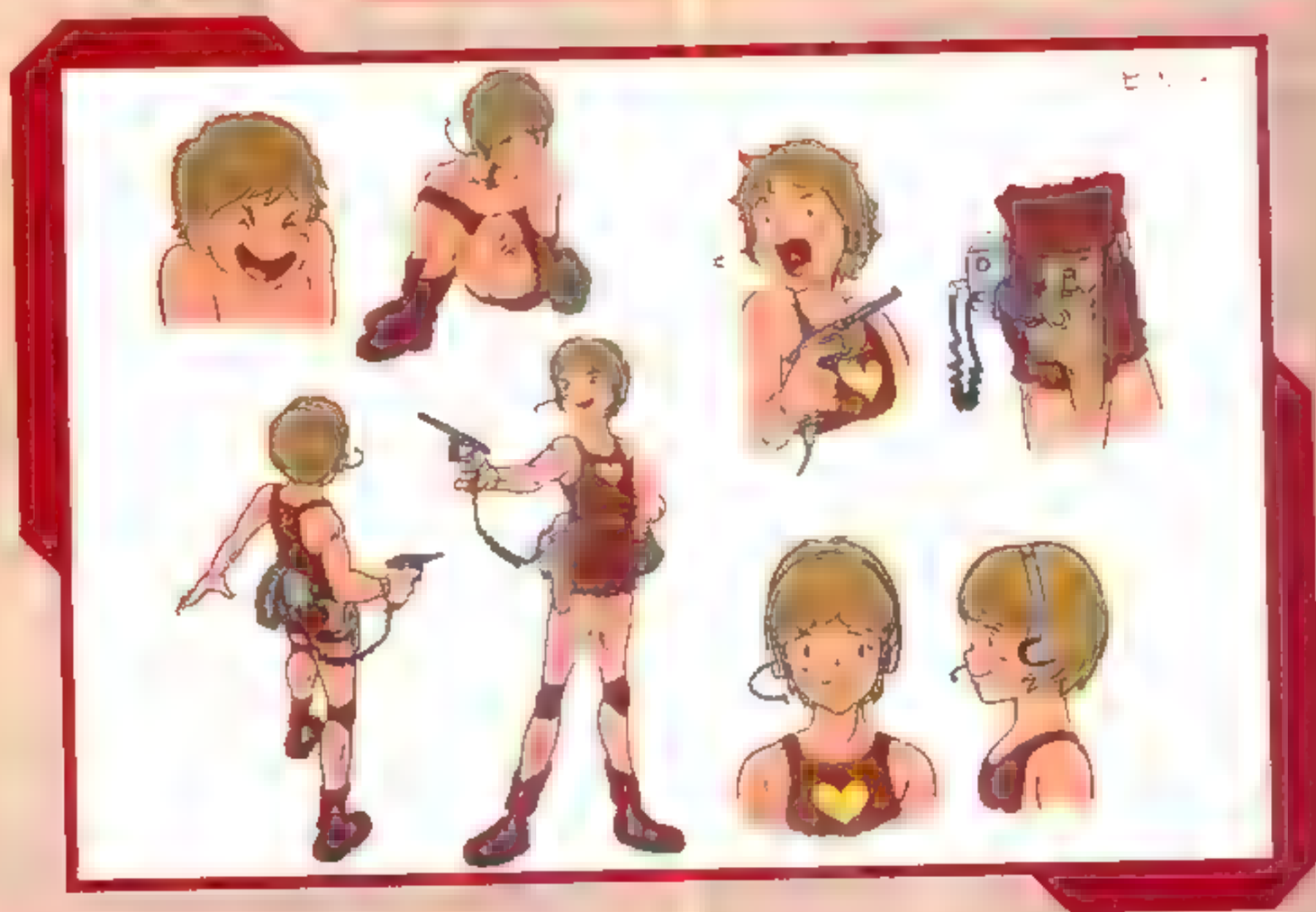
ビッグEガンの名手として活躍した、頼れる男である。普段は黙々としている印象があるが仲間を侮辱されると黙ってはいられず、共同作戦を行ったゲリラグループに「クリンをダグラムから降ろせ」と言われて真っ先に殴りかかったこともあった。

▼防寒服

用事があってクリンを呼びに行ったものの、なにやらデイジーと「いい雰囲気」でちょっと気まずい……。

ビリー・ボール

一人称は「おいら」。幼い外見と言動が相まって、ジョルジュからはよく「幼稚園」呼ばわりされていたが本人は全く気にしていない。それどころか相手にもしていない様子だった。



ハックル・G・トンプスン

デロイア人の元連邦軍人。ダグラムの整備を主に担当するほか、緊急時にはダグラムの操縦も何度か行っている。ブエスタとジョルジュからは共に『オジン』というアダ名で呼ばれており、最初のうちは嫌がっていたものの、そのうち普通に返事をするようになってしまった。

ナナシ

憎めない、というか本気で怒る気がしなくなってしまう不思議なキャラクターの持ち主。周囲の状況に対する観察眼が野生動物の如く卓越しており、思わぬところからゲリラたちを助けるカギを見つけ出すことが多い。また、意外と教養のあるところも見せたりする。

▼防寒服

ジョルジュとハックル、まるで性格の違うふたりはお互いに腐れ縁とでも言うべき友情が成立している。まさにケンカするほど仲がいい、というやつである。

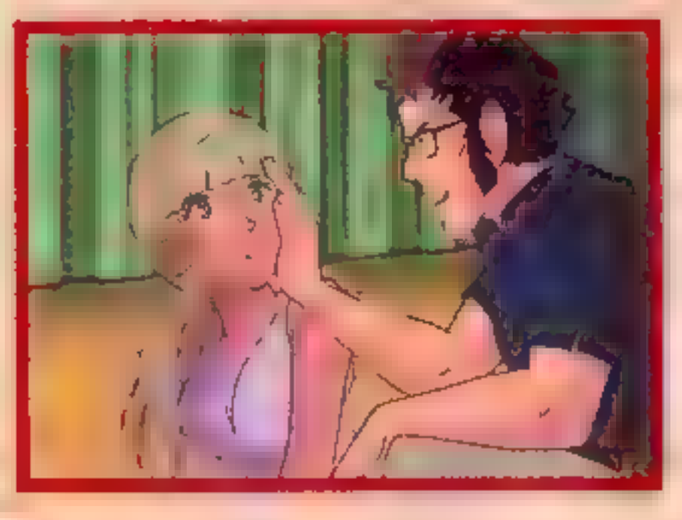
太陽の牙

リタ・ベレット

パルミナで太陽の牙と合流。かつて慕っていたデスタンに彼が裏切り者とは知らずゲリラたちの情報を教えてしまい、それがきっかけとなってスパイの疑いをかけられてしまう。クリンたちの元を離れてデスタンと逃げようとするが、皮肉にも最後はデスタンの放った凶弾に倒れる。

フェスタ・ブロンコ

火薬の匂いに執着があるらしく、クリンたちにEガンが支給された後も通常火薬の9ミリサブマシンガンを使い続けていた。バックルとはいがみ合いながらもウマが合っていたようだ。彼のあまりにも突然の死は、太陽の牙たちに現実の不条理を突きつける。



▼防寒服

ジョルジュ・ジュールダン

ボナールでの騒ぎがきっかけで「太陽の牙」に合流した。ビリー曰く「ローカル暴走族」。非常に短気な性格で、待機命令などの際は常にイラついていた。リタの死を知り、やぶれかぶれになってミサイルを装備したバイクでCBアーマーに特攻するが、運良く命拾いしている。

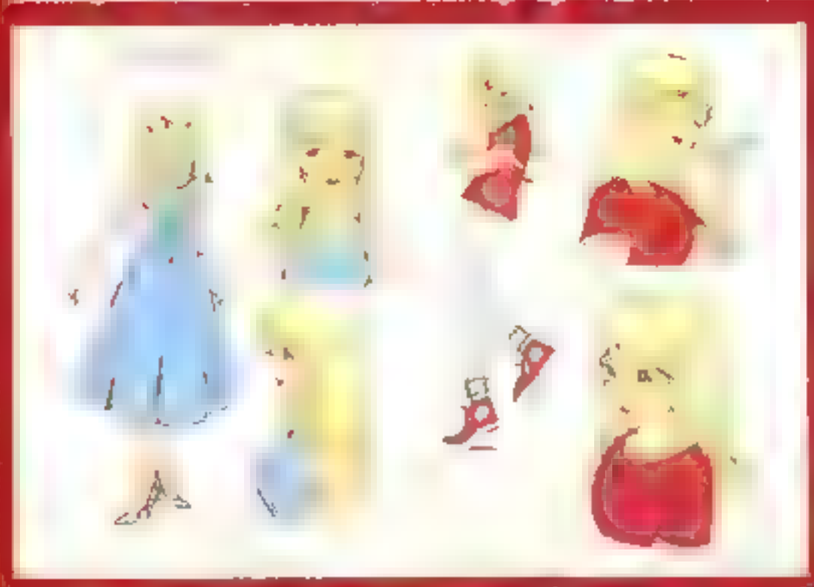
ラルターフからリタの死を告げられたジョルジュは「嘘だ！　嘘だ！」と何度も叫びながら激しく取り乱した。

CITIZENS

ディック・ラルターフ

厳しい人生観を持つジャーナリストのラルターフは若さゆえに迷いやすいクリンやデイジーにさまざまなアドバイスを与え、戦争終結後もデロイアに残った。

デイジー・オーセル



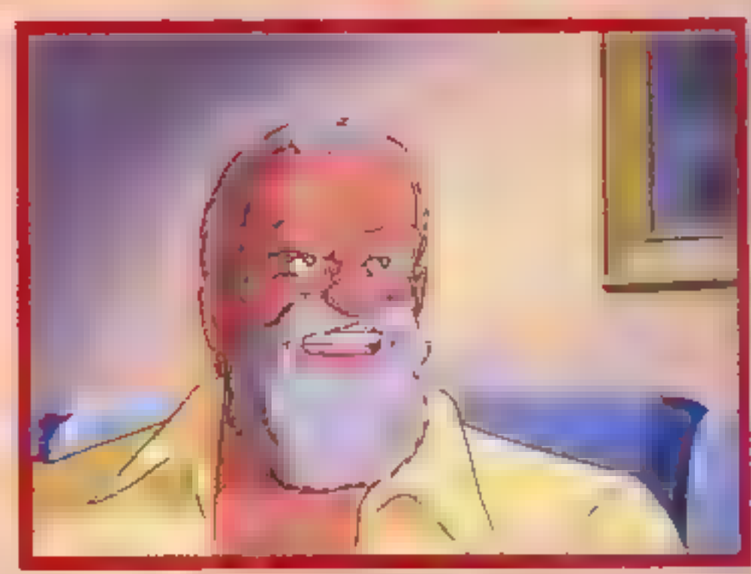
クリンを追ってデロイアを訪れたデイジーは、当初ラルターフに同行していた。後に自らの意志で動く場所を見つけ、頼る存在ではなく頼られる存在へと変わっていく。

人民解放政府

J・ロック

ボナールでの戦闘で危機に陥ったクリンの前にパギー部隊を率いて現れた、ゲリラ『デロイアの星』のリーダーで、『太陽の牙』にとっては先達にあたる存在である。戦争の終盤、解放軍の解体後も最後までクリンたちと行動し、軟禁されたサマリンの救出に協力した。

デビッド・サマリン



解放軍にとって、なによりも「太陽の牙」たちにとって、サマリンはかけがえのない指導者だった。大人のやり方に反発する若者たちを理解し、導き、死んでいった「大人」がサマリンだったのである。

ガボール・ザナ

元連邦軍中尉。ウルナ基地反乱事件の首謀者。後に解放軍に参加し、ザルツェフの右腕となるか北極ポートを前に戦死。武装解除はこの直後のことであった。

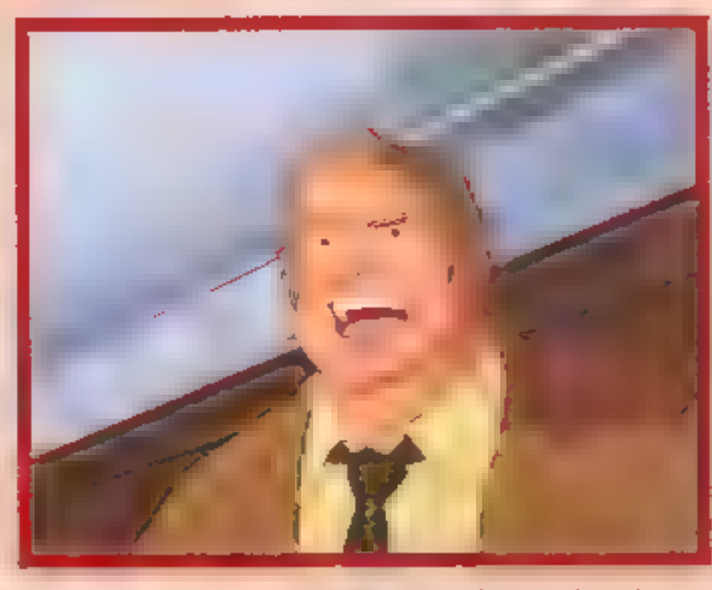
ジャッキー・ザルツェフ

元連邦軍第８軍少佐。後に解放軍の作戦参謀を務める。彼の参入によって解放軍の作戦行動の質は一挙に高まった。武装解除時に協定破棄の責任者として逮捕、軍刑務所へとその身柄を移されている。

バックス

「太陽の牙」にとっては最も長い間付きあったゲリラ仲間ではないだろうか。武装解除後に武器を調達するなどの協力を行い、やり場のない怒りを大人にぶつける若者たちを叱責し、道理と心意気を説いた。

ヘシ・カルメル



人民解放政府の渉外を担当していたが、後にフコックと通じて造反。サマリンから主導権を奪い、代表となった。

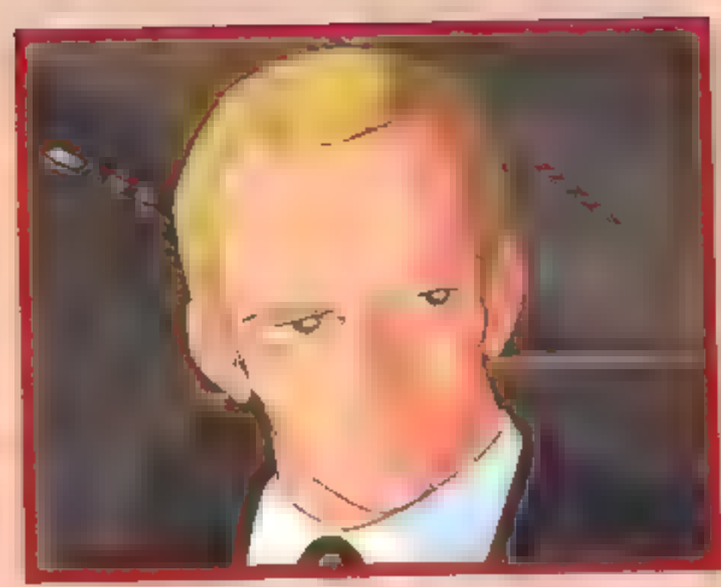
ショーク

バルミナ大陸で活動していたゲリラ仲間。リタも彼らのグループに所属していた。和平交渉を強行しようとするカルメルにつかみかかろうとした際、その部下が反射的に発砲、射殺された。

地球連邦

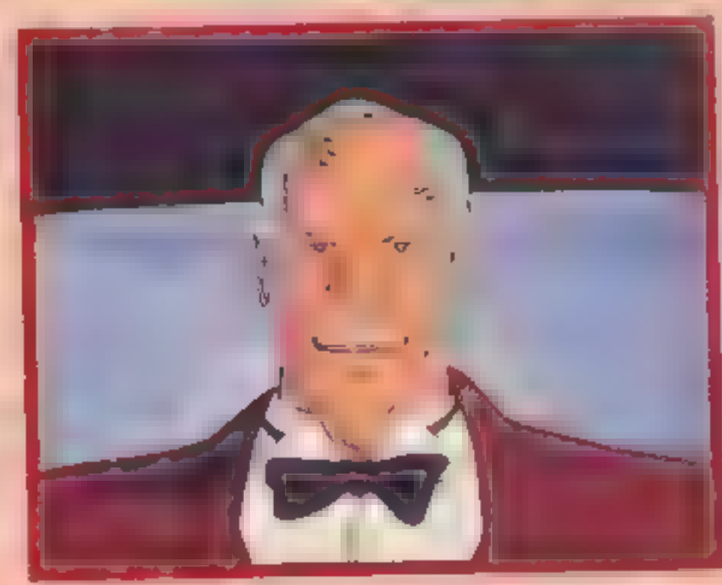
レーク・ボイド

クリンの姉、サラの夫。軍人としてばかりでなく、まず人間として高潔な人物だった。パルミナ行政官となった彼はゲリラとの対話を訴え続けたが、現実の壁はその理想を裏切っていく。



ドナン・カシム

クリンの父。地球連邦評議会議長。偽装クーデターの真の首謀者である。連邦分裂による人類同士の戦争を恐れてデロイアの独立を阻止しようとしていた



ヘルムート・J・ラコック

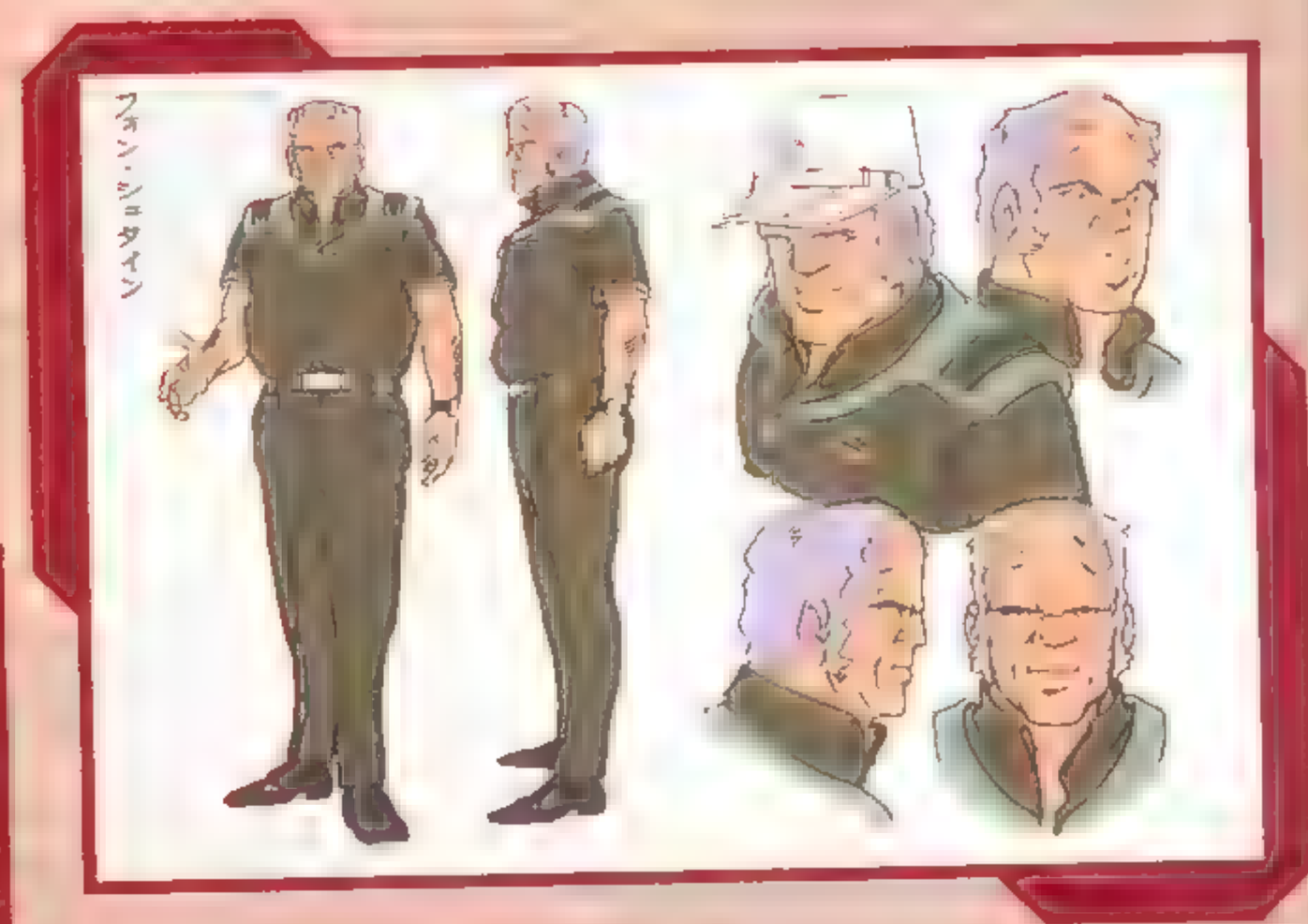
彼の秘めたる野心は、ドナンが倒れたことを契機に燃え上がる。策謀の果てにカルメル政権を成立させた彼はデロイアの主権を認めず、明らかに地球より格下の植民星として扱おうとしていた。

フォン・シュタイン

デロイアをラコックの思い通りにさせまいとサマリンとの和平交渉に赴くが、ラコックの策謀によりミサイルで撃墜された。

ターク書長

地球連邦軍書長。ドナン救出作戦の折にクリンは彼の指揮下にあった。後にゲリラとなったクリンと戦うことになるが、苦悩の中で放たれたダクラムのリニアガンによって命を散らした。



兵士(1)

連邦軍の一般兵士。議事堂、北極ポートなど重要所の警備を行っている兵員。物語の終盤、北極ポートでラコックの野心を知ったフォン・シュタインがラコックを問い詰めた際に軍止に入った。

カーディナルに展開している連邦軍の憲兵隊のひとり。クリンの宿泊したホテルをディジーが訪ねた際に、彼女のボディチェックをした。

連邦軍第8軍司令部幕僚の面々。護衛中のザルツェフがゲリラとの内通の疑いを質された際に同席していた。

24部隊

ブリンク大尉率いる第8軍の精鋭部隊。ターボザクを備えたカスタム機のスルディックを操り、ゲリラたちに大きな損害を与えた。

ハンク

ブロックヘッドのパイロット。当初は上官として命令を遵守すべきだという態度を見せていたが、殺された仲間の仇を討つため、退去命令を無視してアーロンと共にダグラムを追った。

兵士(2)

連邦軍の一般将兵。地球に比べて非常に蒸し暑いとされるデロイアでは、このようなジャケットの少ない制服を着た兵が多く見られた。

アーロン

ブロックヘッドのパイロット。アンディ鉱山で殺された仲間の仇を討つべくダグラムを付け狙う。ダグラムを追いつめたときの彼は、普段とはまるで別人のような表情を見せた。

HELMINTH

コール・デスタン

弁が立つが実行力に欠けていたために、サマリンの転向声明を知らされ、真っ先に仲間を裏切った。直情はグランツ・ヒルの無謀なクーデターの手先となり、ダグラムへのスパイ行為及び破壊を実行した。ラコーダを射殺。

ガルシア隊

オッペ

ガルシアの部下で、ユイ[illegible]が特徴。ウリンを強姦に[illegible]時には暴行を加えていた。ガルシアの覚えめでたいが、[illegible]以外では唯一キツイ[illegible]

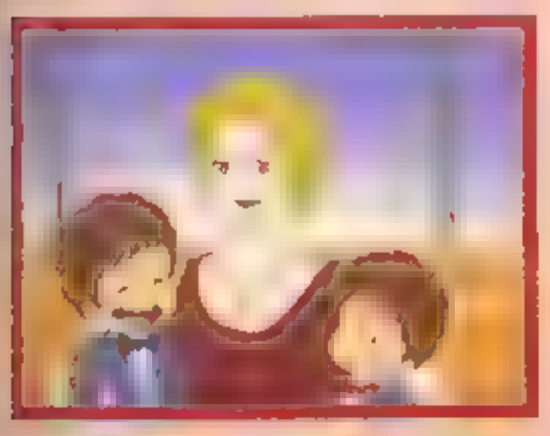
ブルドラン・ガルシア

傭兵部隊長。[illegible]られるべきである[illegible]を自覚している。[illegible]味方である連邦軍長官に銃をつきつけて[illegible]するなど、目的のためなら手段を一[illegible]ない。アザート[illegible]ーのコンピュータにビーム[illegible]の直撃を受け死亡した。

カシム家

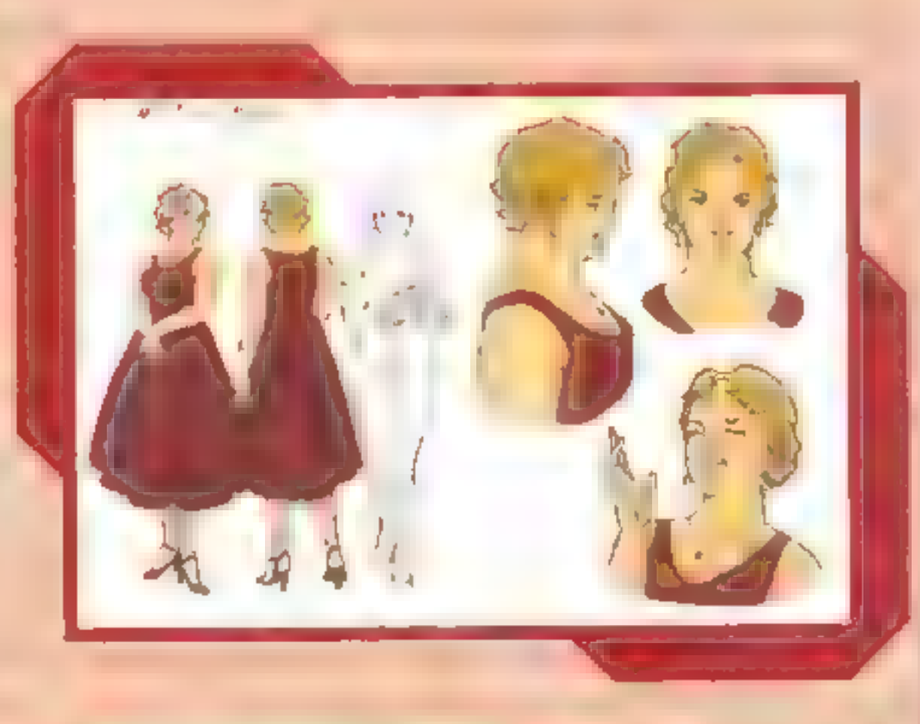
サラの子供たち

レークとサラの子供らしく、元気溌剌な性格である。祖父のドナン、祖母のフィナによくなついていた。

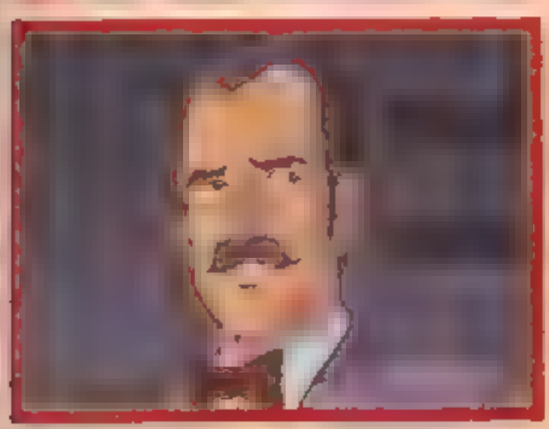


フィナ・カシム

ドナンの妻。クリンがゲリラへと身を投じたのは、自分の血のせいではないかと思い悩んでいた。



ワトキンス



カシム家の執事。病状に倒れたドナンのそばに居続けた彼は、家族からの見舞いの花が徐々に届かなくなっていく様子から、壊れつつあるカシム家を感じていたのかも知れない。

サラ・ボイド

レークがデロイアに赴任中、ふたりの子供とともに実家であるカシム家に身を寄せていた。ふたりの兄、ラビン、ロイルとの仲はあまり良くないようだ。

ラビン・カシム

名家カシム家長男としての強烈な自負を持っている。ケリフ側に付いた弟のクリンを親不孝者と呼び、父ドナンがクリンに対して理解を示していたことに最後まで気付いていなかった。

ロイル・カシム

兄同様、権力者である父にことあるごとに頼ろうとしていた。RDカンパニーの課長を務めており、ネルオーダー・メタリック社との合弁事業の責任者としてデロイアに赴いた。

ラナ・カシム

ラビンの妻。義父のドナンがデロイアで遭難した際は、ただうろたえるばかりだった。ラビンとの間に子供はないようだ。

CITIZENS

オレア

[illegible]

モレア・オーセル

[illegible]

ダロウェイ

[illegible]

人物編

CHARACTERS

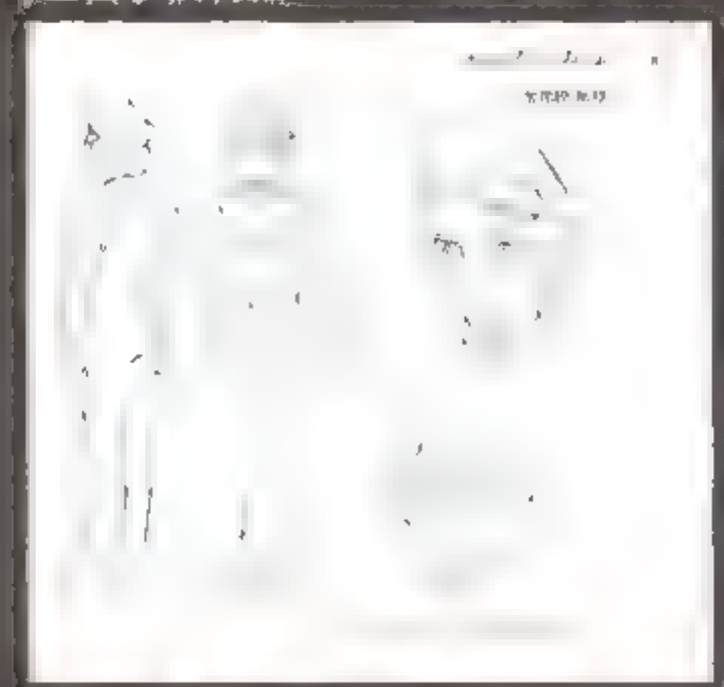
クリン
CBアーマー「ダグラム」パイロット

17歳。地球人。ダグラムを操縦する「太陽の牙」中心メンバー。地球連邦評議会議長ドナン・カシムの末っ子であり、元は連邦軍の士官学校に所属するパイロット候補生だった。上流階級に属する身分でありながら世間体にはこだわらない性格で、夜中にバイクを乗り回すなどして兄のロイルやラビンからは煙たがられていた。打算で動くことを嫌い、あくまで自分の信念に基づいて行動しようとする。士官学校時代に身につけたCBアーマーの操縦技術や戦術知識などは「太陽の牙」での活動に大きく生かされており、立ちはだかる困難な状況を乗り越える力となった。

全体図（1）

劇中での基本スタイルとなる戦闘服姿。さすがに士官候補生として訓練を受けてきただけのことはあり、鍛え抜かれた肉体美――と言ってはいかずとも、体はしっかりと引き締まっている。

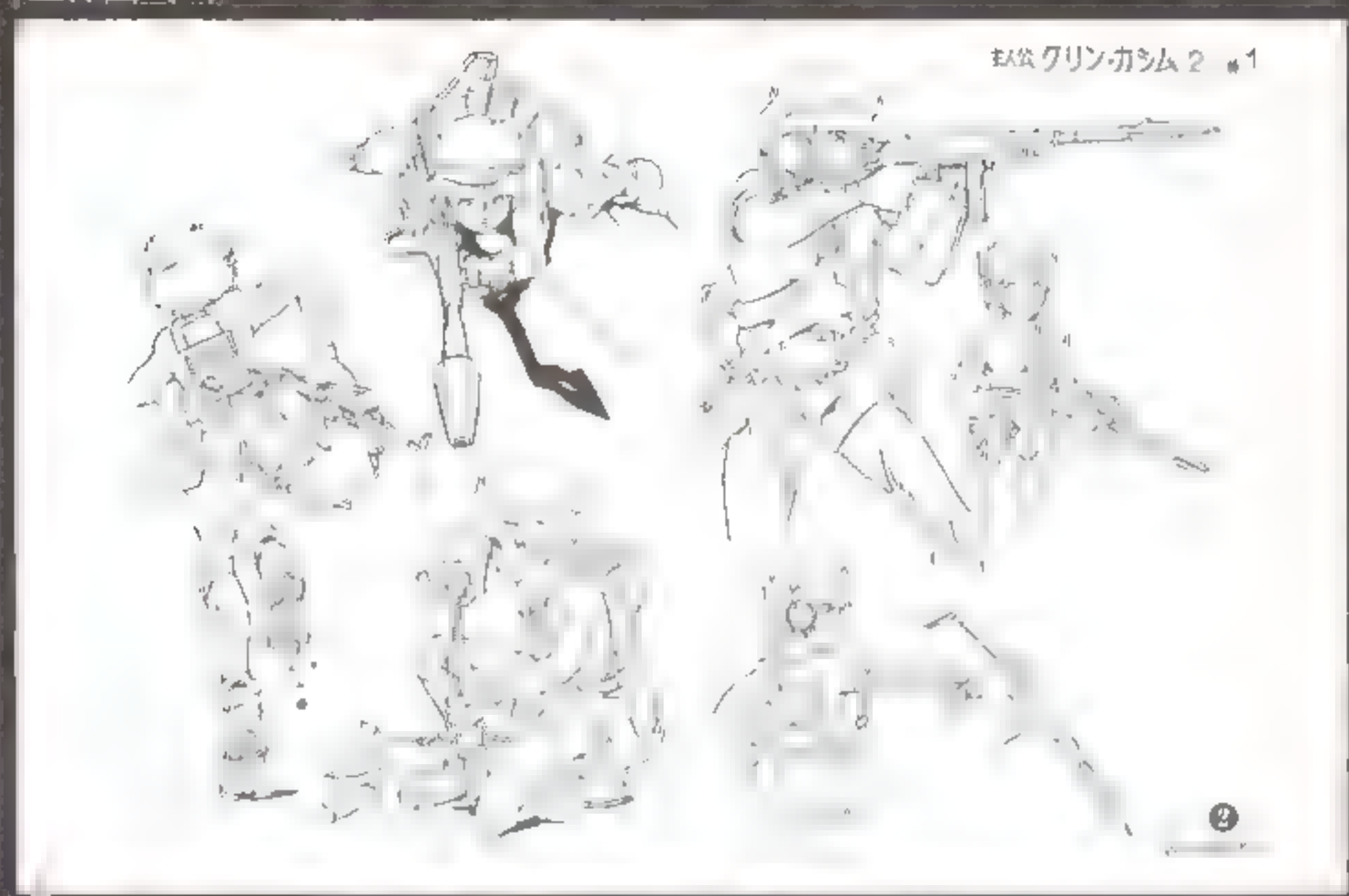
士官学校制服



ライダー・スタイル

盗んだ服

全体図（2）



Eガンを構えるポーズ集など――ボディーチェックのチェック箇所（ブラグの位置は左右異なるものが描かれているが、劇中では基本的に右側。ただしアイキャッチは左側）。

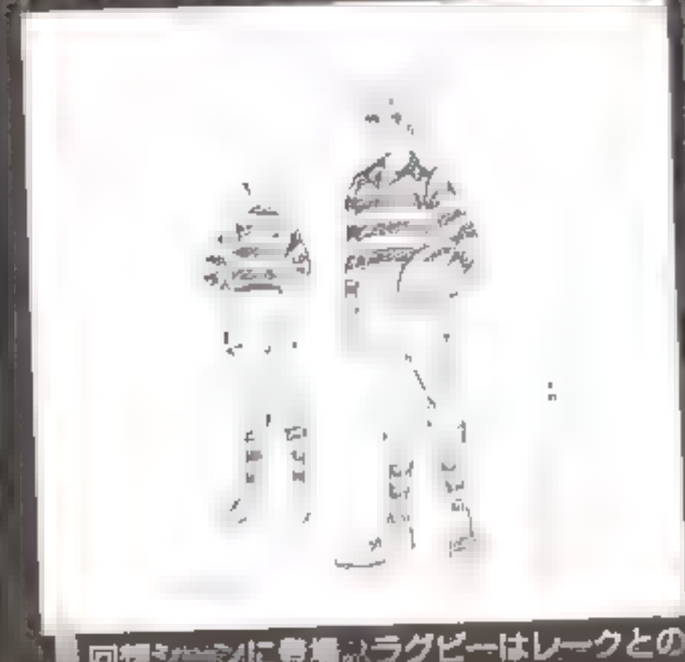
アクション・表情

設定としてはあまり表情のバリエーションは描かれておらず、比較的原作マンガの表情を優先するかたちとなっていたようだ。ただ、実はこれまでは数人パターンを使用して描写するタイプ

回想シーン　12年程前

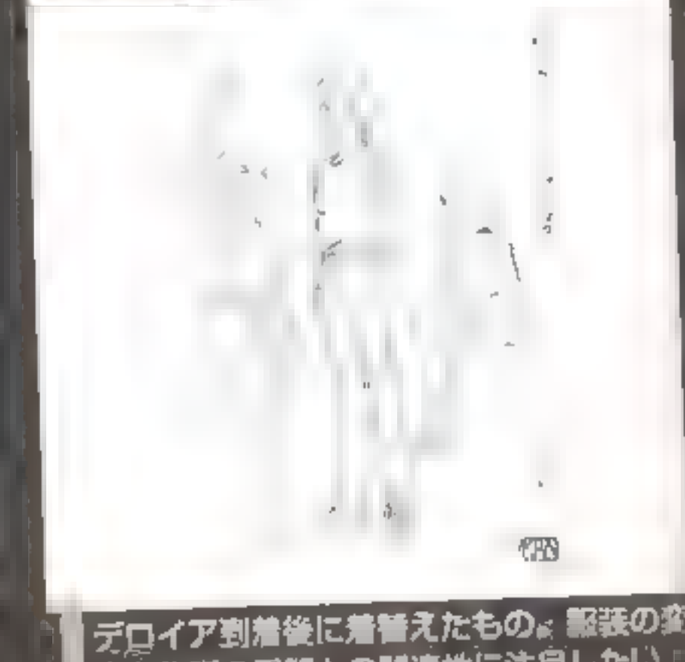
ドナンと共にクルーザーに乗ったときのもの。さすがに幼い。

ラガー・スタイル



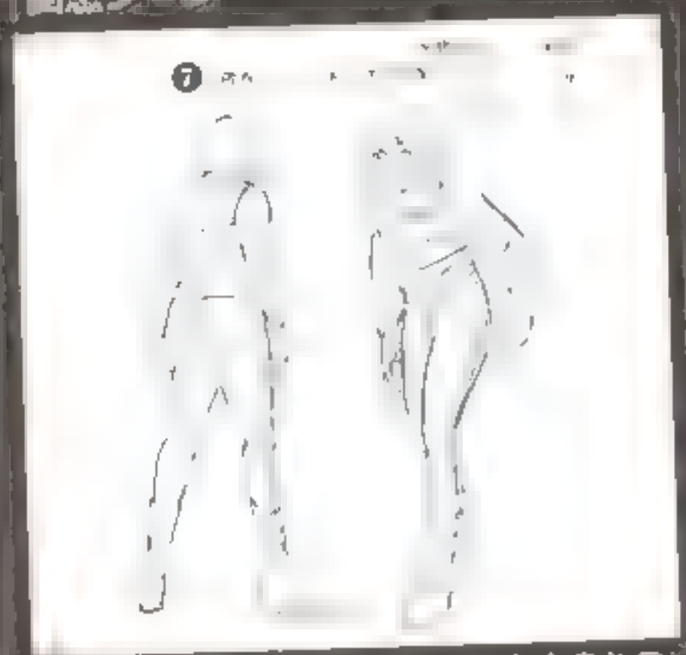
回想シーンに登場。ラグビーはレークとの親交を深めるきっかけともなった。

Tシャツ姿



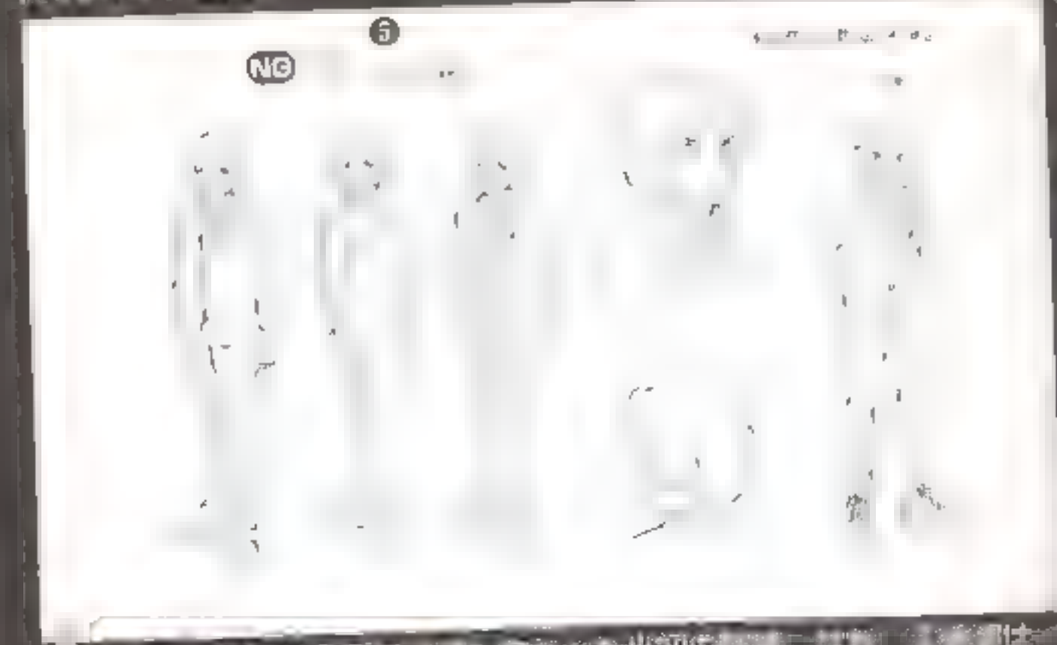
デロイア到着後に着替えたもの。服装の変化と物語の展開との関連性に注目したい。

回想シーン



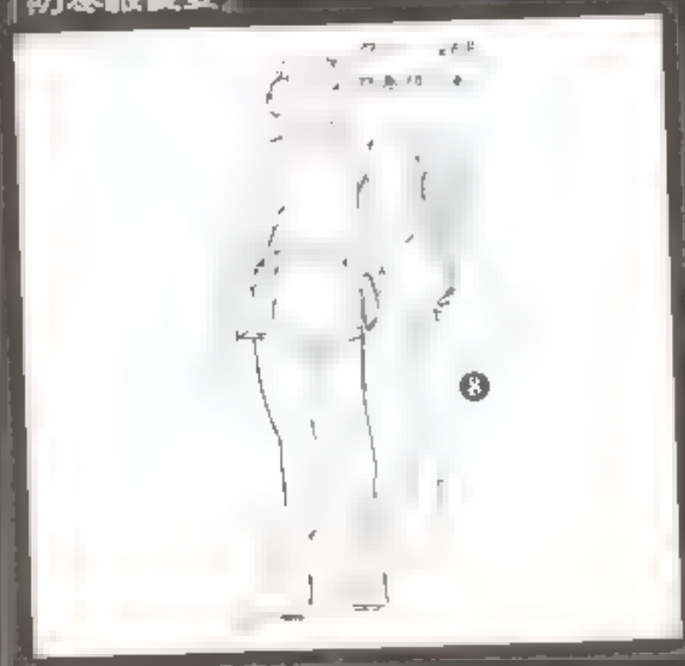
雪山でディジーらと過ごしたときのもの。何年前であるかは定かではない。

外出着　正装

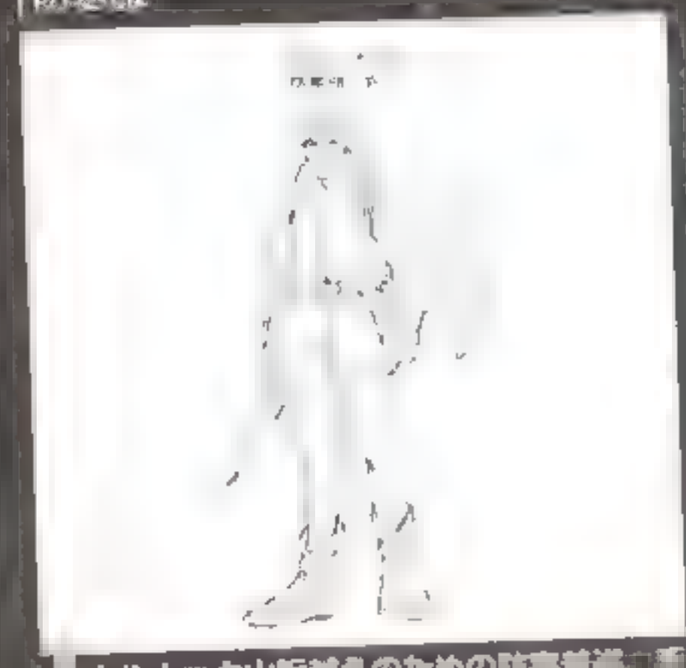


外出者は球からデロイアへ向かった当初の服装であり、上着は青右側のものがOP映像のみに使用され、本編には未登場である。

防寒服後姿



防寒服

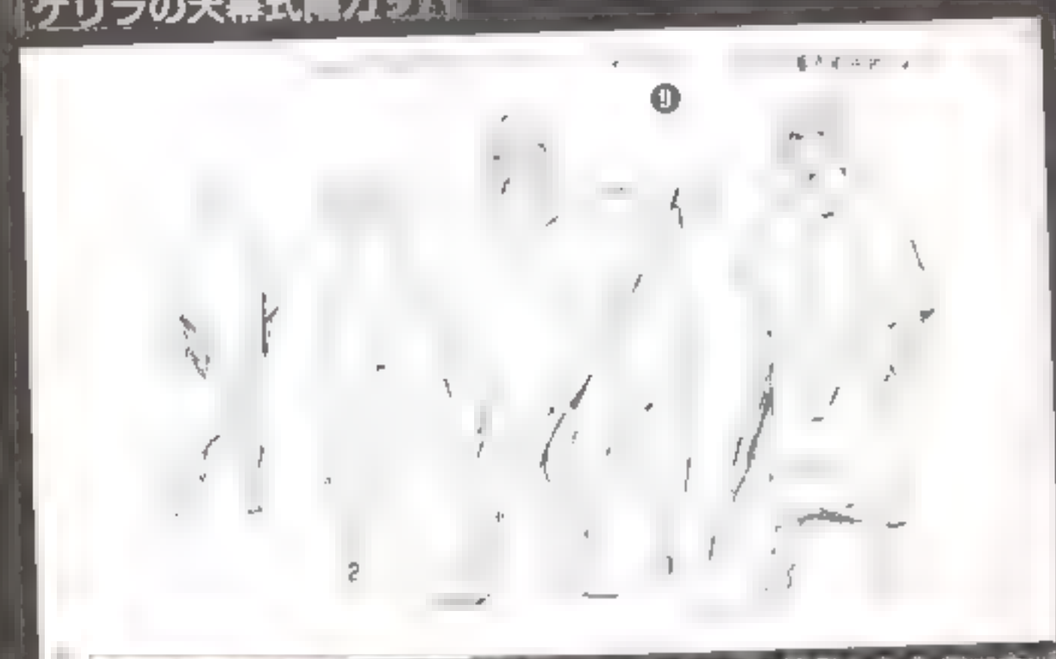


カルナック山脈越えのための防寒着装。手袋を外したものも描かれている。

後ろ姿　背嚢なし

ミガンの武器バックを外した姿。固定方法などの設定は存在しない。

ゲリラの天幕式簡ガッパ



クリンがはじめて大佐のメンバーとの接触に使用したもの。モバ[illegible]は[illegible]の天幕式であるかどうか[illegible]

◀設定補足▶
●(注)前は別紙参照　●(注)前は別紙参照　●(注)前は別紙参照　●前は別紙参照キャラのまま　●どれかえらんで下さい　どれもだめ　使用せず　●クリン5、6才　●(現在よりいくらか幼さが残っている)　●(クリンはランドセル風にバンドごと背負う)　●(テントにもなります)

地球時代の５人

ライダー・スタイルのデロイアフたちのコスチューム設定。制作段階であったのか、フェスタは顔からは体格や顔つきが別人のようであり、またビリーもスーツは若干背が高いなど違いが見られる。

デロイアフ

独立派ゲリラ部隊　通称「太陽の牙」

「ロッキーたちのグループ」「デロイアフ」はもともと地球で暴走族をしていた時に彼らが名乗っていた名前であり、第1話ではゲリラグループの名称として使用されている。ロッキー、チコ、ビリー、フェスタ、ナナシ、そのほかにキャメロン・ジョンソンを加えて「7人」というわけである。「太陽の牙」はラルターフが新聞記事上で彼らに与えた呼び名で、主に先のデロイア・メンバーにA・ダルシュを加えたものを指す。後にデロイア解放軍の一員となり「解放軍遊撃隊」という正式名が付けられた。なお本編では、ハロックも同じ部隊に所属するとのセリフがある。

地球時代の５人

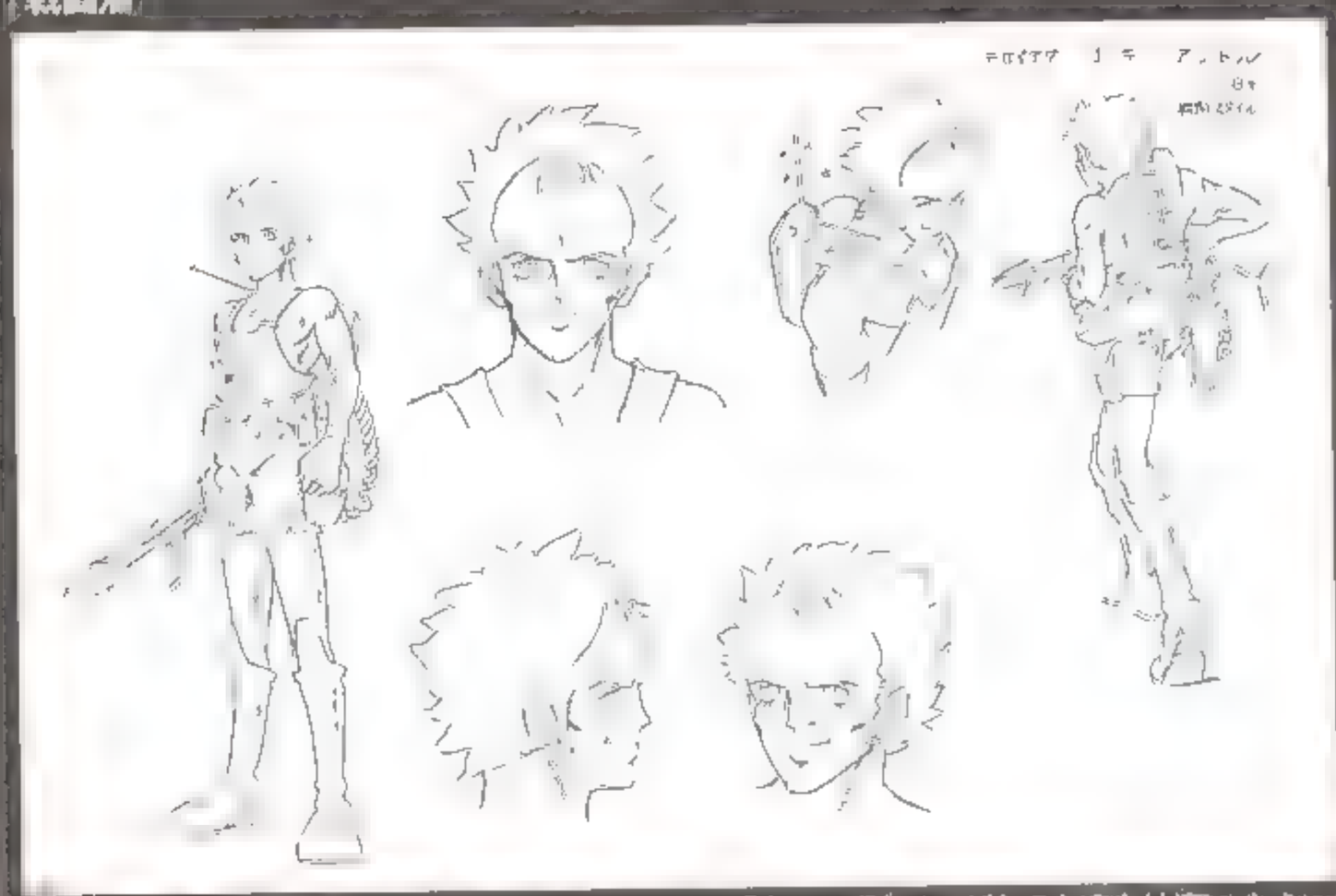
カーディナルへ帰ってから以降の服装。非常にラフな格好から生活環境や気候条件などが窺える。全員とも後にかりうとして戦闘したスタイルになるのだが、ナナシとビリーに関しては特に着替えることもなく同じ服のままだった。

ロッキー・アンドル

「太陽の牙」リーダー

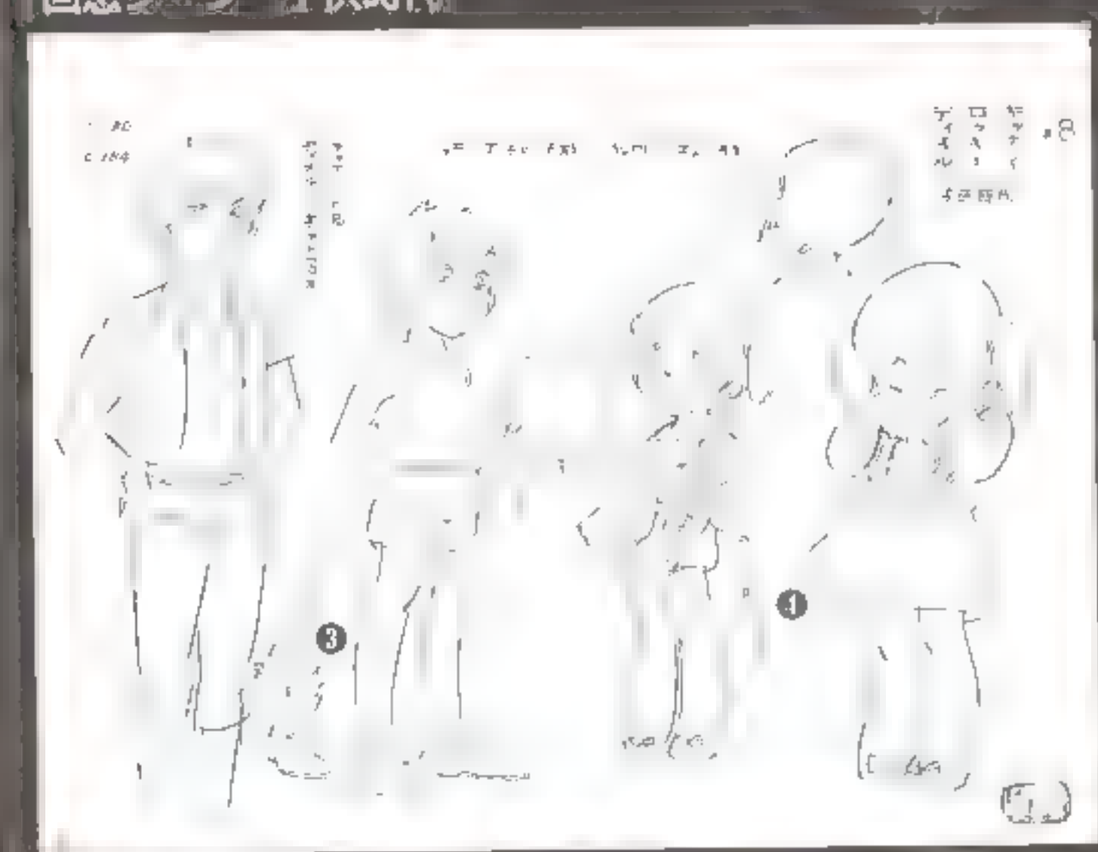
18歳。カーティナル出身のテロイア人。地球をテロイア人仲間と作った暴走族グループ「テロイア7」のリーダーであり、同じメンバーを含むゲリラグループ「太陽の牙」（解放軍遊撃隊）でもリーダーを務める。統率力にあふれ仲間からの信頼もあつい。テロイアを搾取する地球連邦に対して強い反感を抱いており、地球人そのものに対するわだかまりから、当初はクリンを拒絶することもあった。しかしクリンとの友情を深め、強い絆で結ばれるようになる。幼なじみのキャナリーとはお互い憎からずな関係ではあるものの、他のメンバーがいるところでは表に出さない。

戦闘服



ロッキーの戦闘服スタイル。パワーパックは他の「太陽の牙」メンバーのものとは違いレッドバーが内蔵された指令用のものである。

回想シーン　子供時代

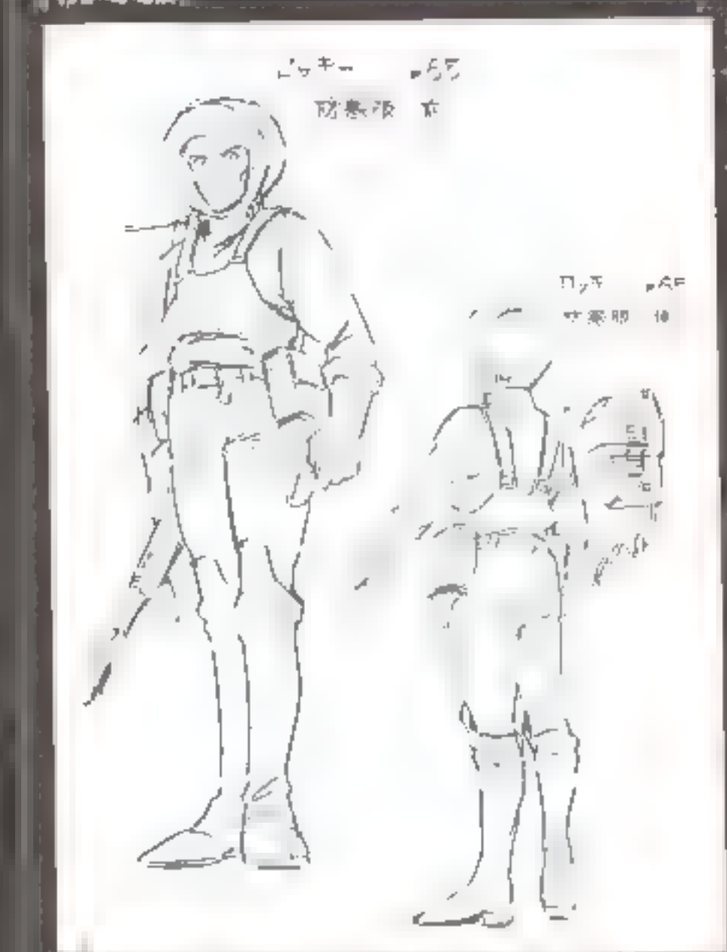


第8話の回想シーンのもの。ロッキーの不敵な構えは子供のころから変わっていないようだ。キャナリーの顔がなんとなくかわいらしい。

街着

ロッキーとキャナリーの普段着。右側は回想シーンで使用されたものである。

防寒服

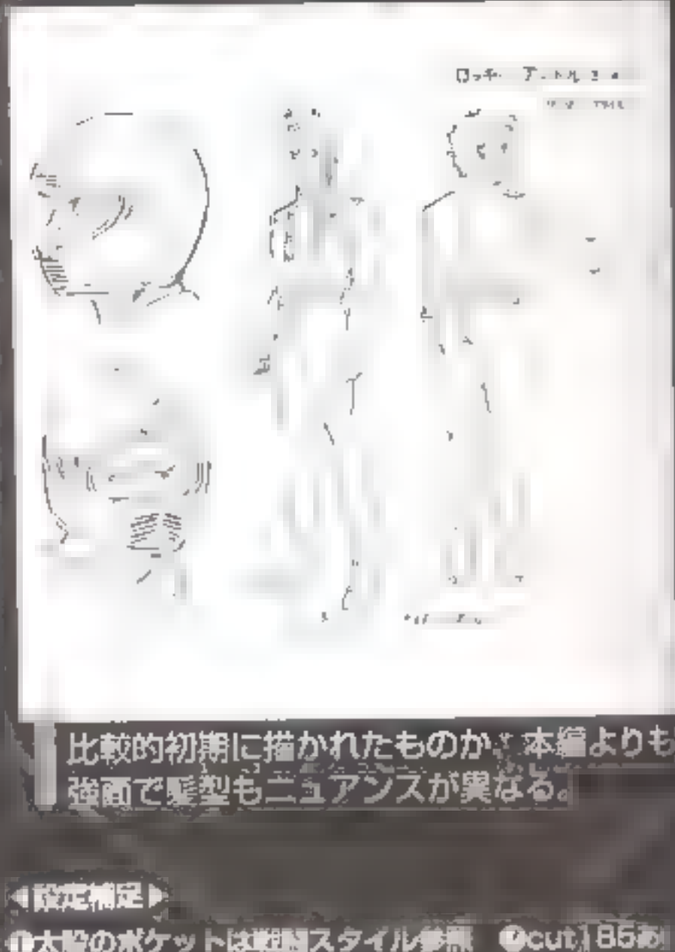


カルナック山脈越えのための防寒着。パワーパックは上着に固定している。

擬装新婚カップル姿

ジャロックと連絡を取るため旅行者を装ったときのもの。盛大に冷やかされていた。

ライダースタイル



比較的初期に描かれたものか。本編よりも強面で髪型もニュアンスが異なる。

◀設定補足▶

❶太股のポケットは戦闘スタイル参照　❷cut.185あ[illegible]りからのロッキーとミディアム。このくらいの長さにしたいですネ　❸ズック　❹服こちらで　❺（擬装新婚旅行スタイル）劇中通称・だましかけおちスタイル

キャナリー・ドネット

「太陽の牙」メンバー

（本編、デロイアの人、月、ティターンの酒場で働いていたが、兄の死をきっかけに反地球ゲリラ活動に加わった。男勝りで気が強く、何かにつけてつっかかるようなところがあるが、少女らしい愛らしさもあわせ持っている。ロッキーとは兄と一緒に小さいころから遊んでいた幼なじみ。

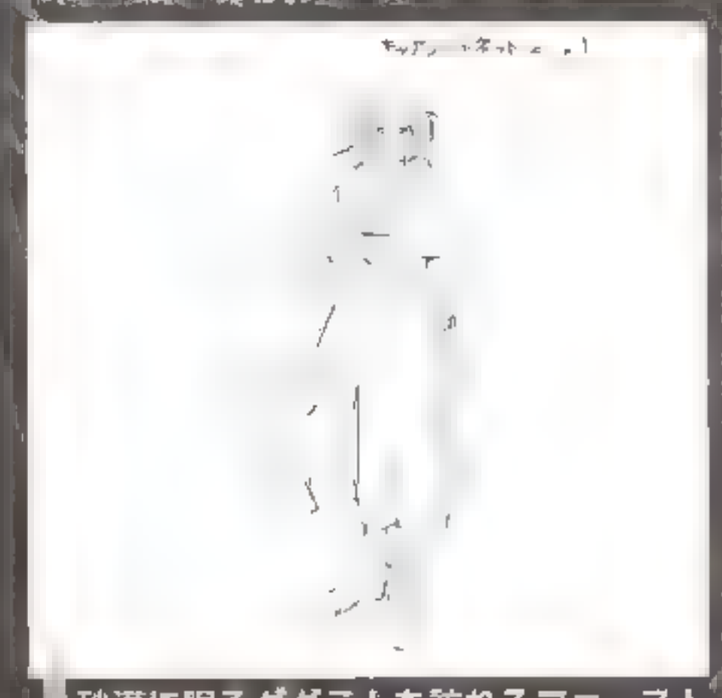
戦闘着

キャナリーの全身図。設定画にある「ミディア」とは初期名称で、本編とは異なる。

表情

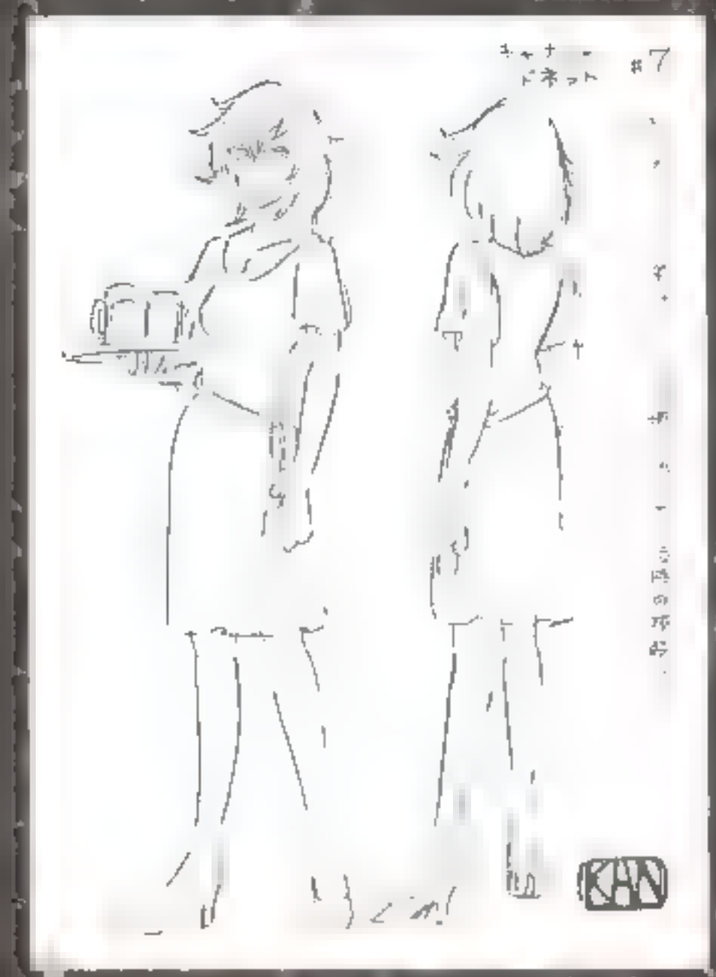
服の素材は薄い布ではなく厚みと光沢のあるもの。活動的なポーズがよく似合う。

第1話　砂漠シーン



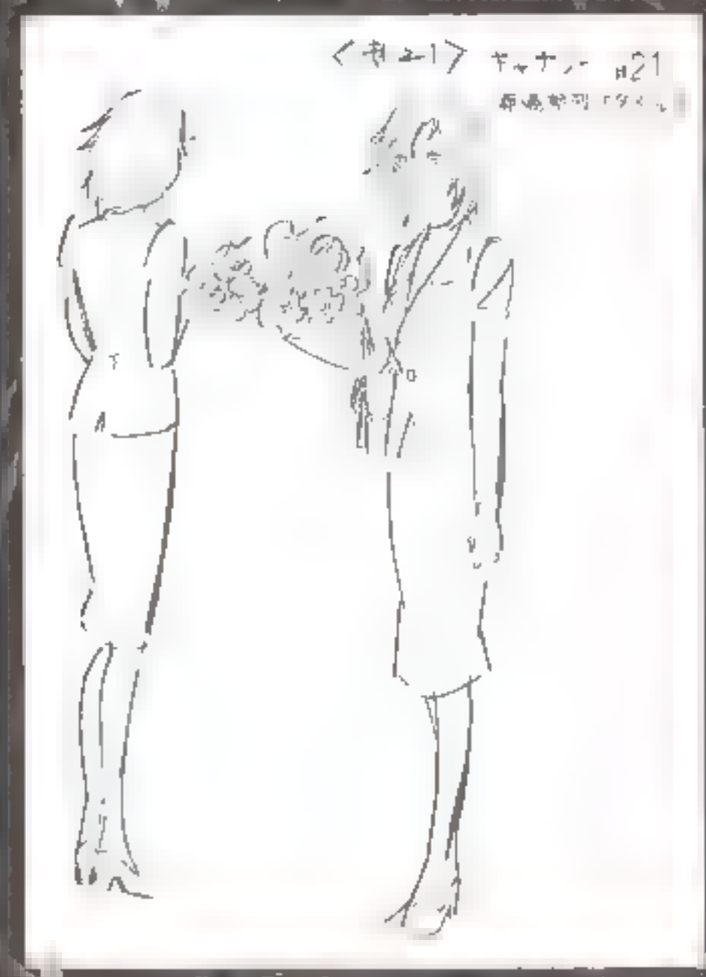
砂漠に眠るダグラムを訪れるファーストシーンでの姿。儚く寂しい印象を与える。

酒場で働いていた時の衣装



気の強さはそのままだったが、衣装はウェイトレスらしい動きを重視していた。

葬式参列時の礼服



グラン・ブルーの葬儀に出席した時の衣装では、シックなドレスに身を包んでいた。

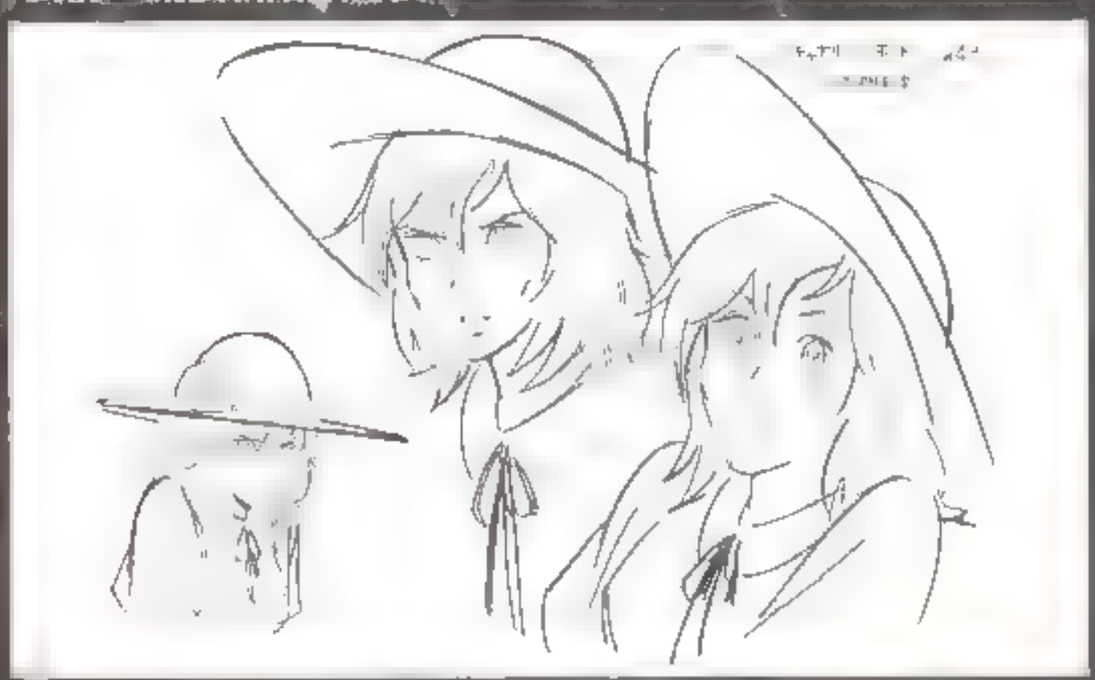
防寒服

雪原での防寒着。普段の戦闘服を意識したようなデザインになっている。

ポーズ　擬装新婚旅行姿

着慣れぬ裾の長いスカートにとまどうキャナリー。

表情　擬装新婚旅行姿



偽装と自覚していても、年頃の女の恥ずかしい表情もかいま見せてくれた。

チコ・ビエンテ

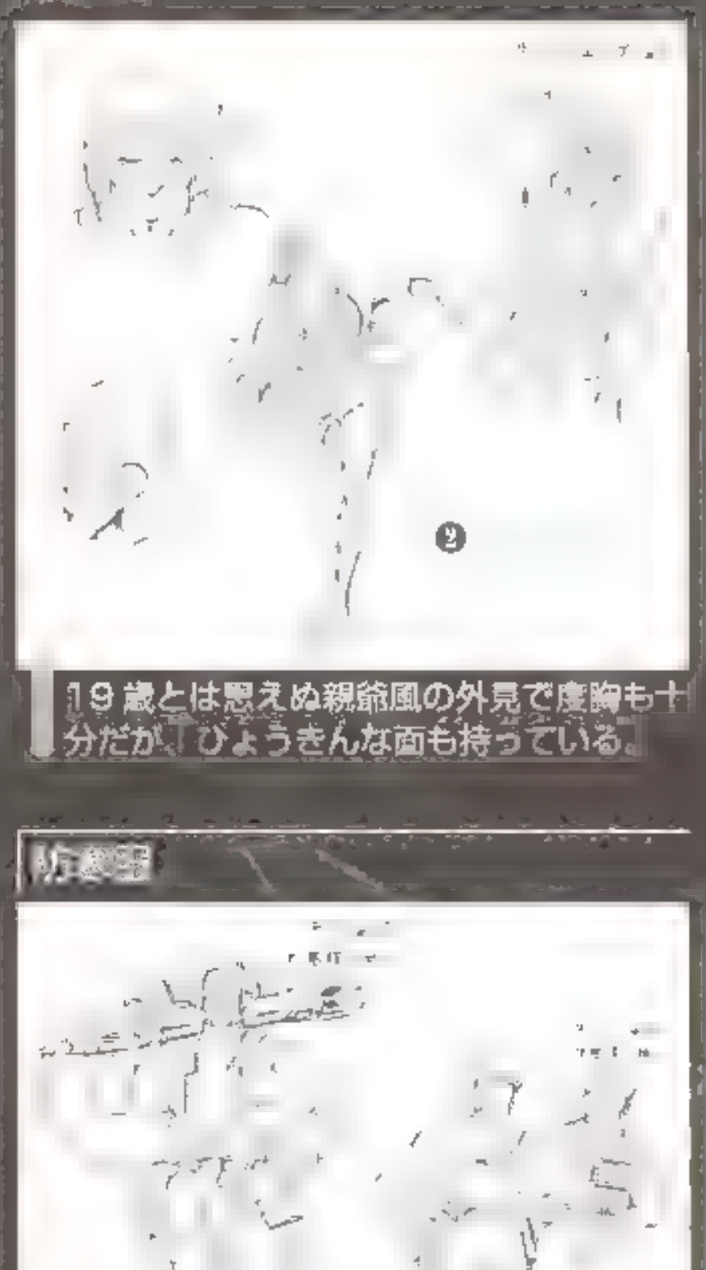
「太陽の牙」メンバー

19歳。デロイア人。出稼ぎに行っていた地球でロッキーたちの暴走族グループに所属し、そのままゲリラ活動に参加した。修理工の息子でメカ関係に造詣が深く、ジープや銃器などの修理を得意とする。またその大きな体格と怪力により、反動が大きく扱いが難しいとされるビッグBガンも使いこなした。

戦闘服

胸当て付きのオーバーオール風サスペンダーズボンを愛用。

ポーズ

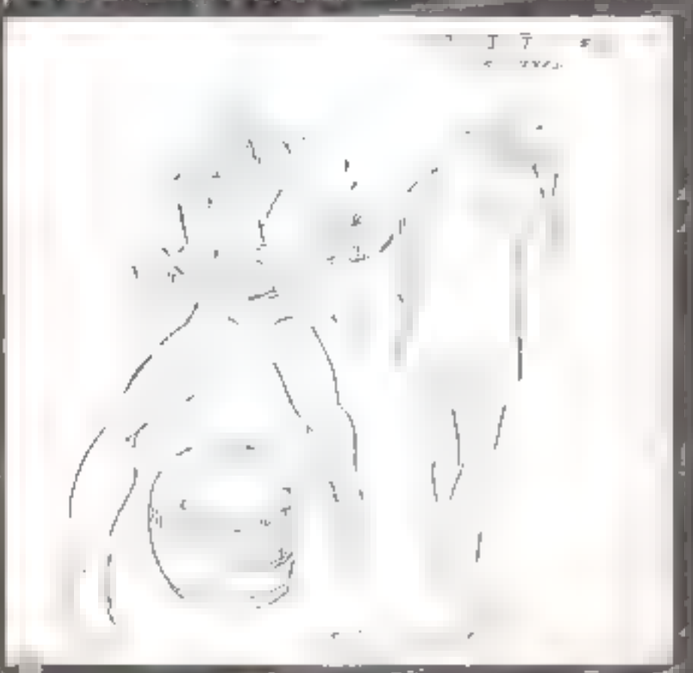


19歳とは思えぬ親爺風の外見で度胸も十分だが、びょうきんな面も持っている。

防寒服

カルナック山脈では[illegible]もの服の下に長袖の厚着を着て防寒対策した。

ライダー・スタイル



地球では暴走族のお揃いの上着を[illegible]

◀設定補足▶
●バイライト　❷(注)銃は別紙参照　❸ビリーの銃(コート不要)

ビリー・ボール

「太陽の牙」メンバー

16歳。デロイア人。ロッキーの暴走族グループの仲間で、ロッキーの舎弟のような存在。デロイア星帰還後もそのまま仲間たちとゲリラに参加した。年齢以上に幼く見える外見や態度で、仲間から子供扱いされることも多いが、すばしっこく機転が利き、連邦軍基地へ潜入し発火装置を仕掛けるなど活躍した。

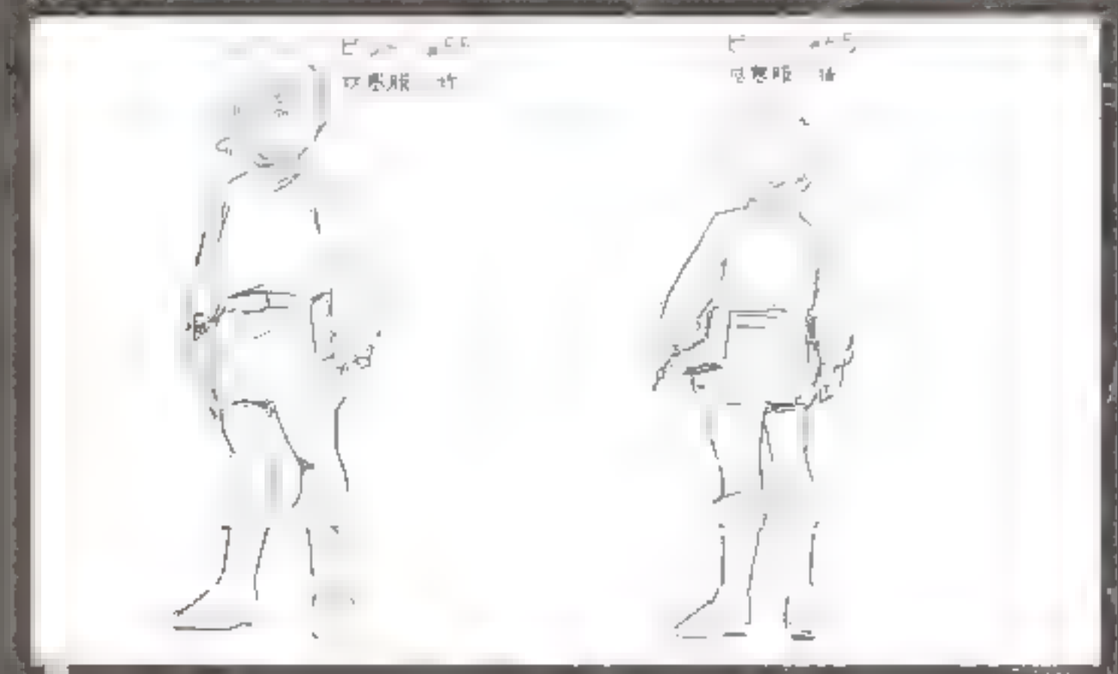
ライダー・スタイル

地球で暴走族グループに参加していたときの服。

葬式用正装

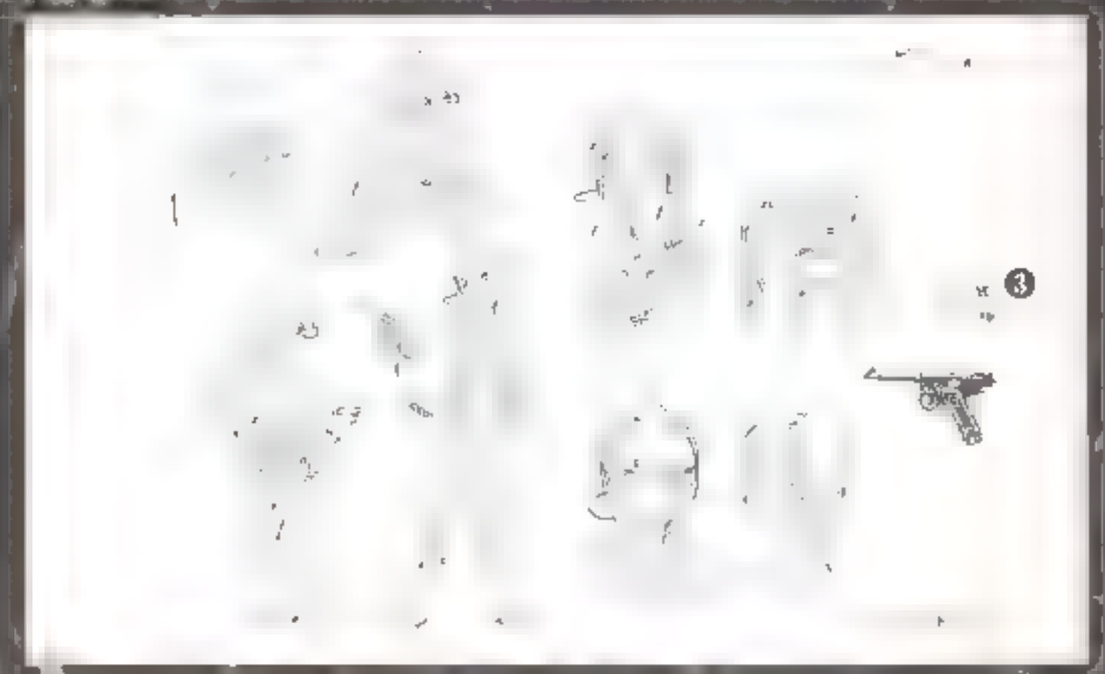
グランフェルドの葬儀に出席した際の姿。サイズがだぶだぶで急ごしらえの様子。

防寒服



カルナック山脈での防寒服。フード付きのコートや防寒用のブーツを着用。

戦闘服



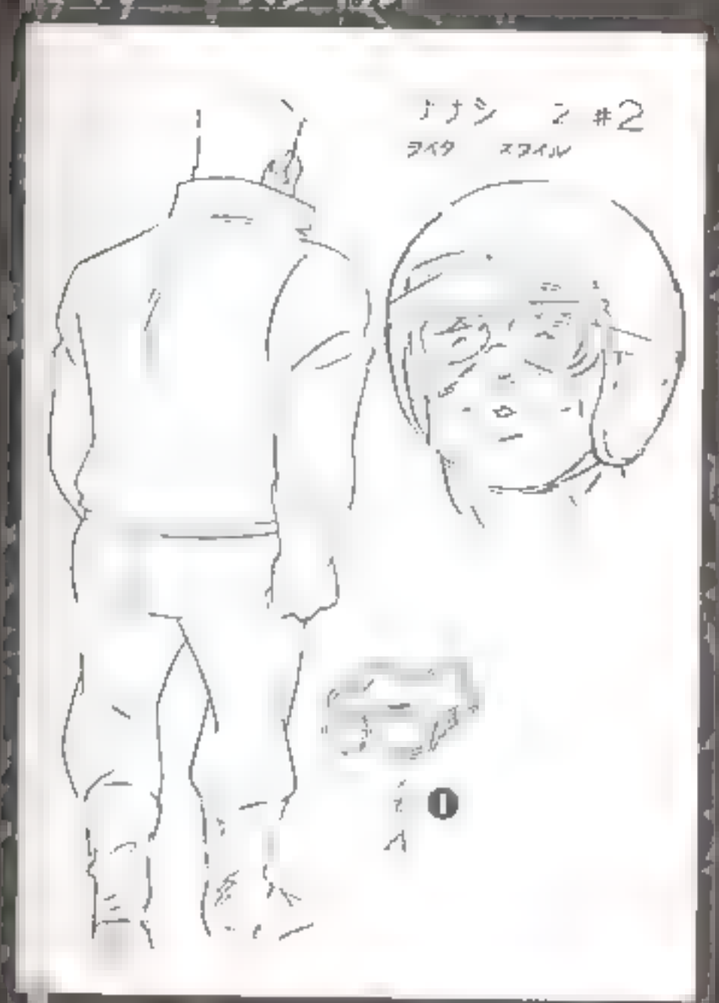
ゲリラに参加してからの普段着。活発に動ける少年らしい格好だ。

ナナシ

「太陽の牙」メンバー　通称ナナシ

年齢不明、出身不明、本名不明。特徴ある話し方だが、それがどこの訛りなのか不明。いつの間にかロッキーたち暴走族グループの仲間となっていたという謎の人物。陽気でよく笑い、飄々としていて、何かを思索しているのか、ボーっとしているような時もあるが、思わぬ行動力で仲間を助けたりもした。

ライダー　スタイル



地球で暴走族に参加していたときの服装

ポーズ　表情

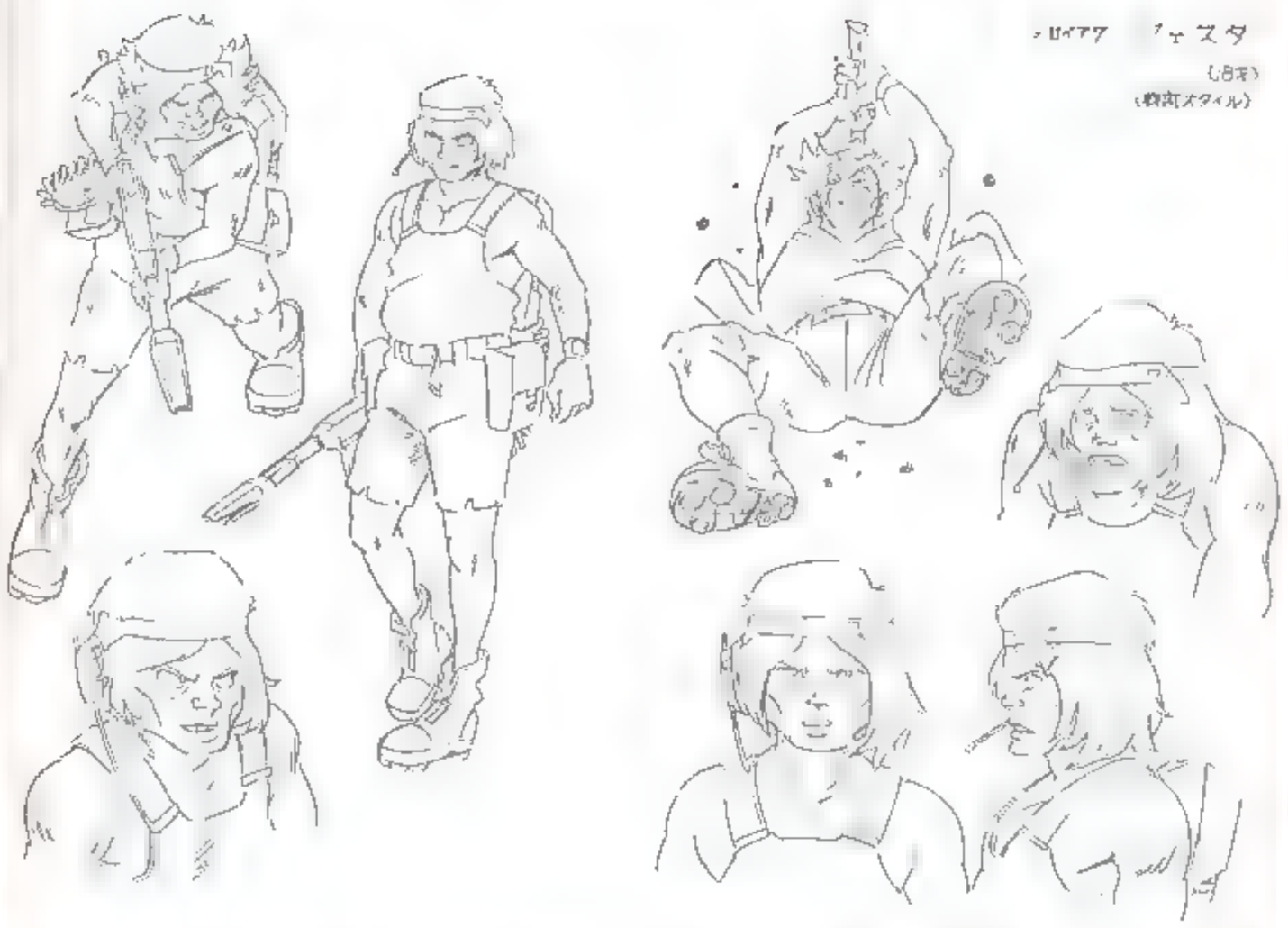
寒冷地を含めて、ほぼこの半ズボンという軽装で過ごした。廃墟で服を見つけては本を開いていた。

フェスタ・ブロンコ

「太陽の牙」メンバー

18歳。「ロイヤル人」チコたちと同じく地球で暴走族グループに所属し、そのままゲリラに参加。不平家で乱暴な口を聞くが、仲間を思う心は強い。捕虜にしたハックルとは当初対立したが、友情を築きつつあった。ガルシア隊を撃破した戦闘などで活躍するが、手榴弾の暴発でサイドカーとともに爆死する。

ポーズ　表情



不平不満をすぐ口にし、周りに対して攻撃的な態度を取るが、それも傷つきやすい心の裏返しだったのだろう。

ポーズ　表情

不敵な態度を取るも、その話し方といいかなりにぎやかなキャラクター。設定内にある＜チェスタ＞は初期設定時の仮称。

◀設定補足▶
❶メガネ　❷チェスタ　❸クリン　❹笑うときは人が変ったようになる　❺ヒーッヒヒヒ　❻このくらいハ　キビシイカオにもなります　❼しかし　❽(注)ナナシのはナシ、今までのスタイル

ショルシュ・シュールダン
『太陽の牙』メンバー

17歳。デロイア人。ボナール市の暴走族だったが、『太陽の牙』によるグランプリ会場襲撃に触発され仲間に加わった。ボナール地方独特の方言で話すのが特徴。外見が死んだフェスタにどことなく似ていることもあり、とけ込むのも早かった。リタに対して真剣な思いを抱いていたが、その愛は報われなかった。

防寒服

寒さは苦手なのか、カルナッタ山脈では防寒服を着込んでいた。

戦闘服

『太陽の牙』に誘拐されたときに着ていた補給部隊用のシャツをそのまま着用。

表情

気弱でおとなしいが、兵器の知識は豊富で、ダグラムの整備をまかされた。

ハックル・G・トンプソン
『太陽の牙』メンバー

24歳。デロイア人。連邦軍の補給部隊隊員だったが、太陽の牙に部隊が襲撃され誘拐されてしまった。最初はクリンたちに反抗的だったが、フェスタらと接してゲリラ側の主張にも理があることを知り、さらにガルシア隊の悪辣さを目にすることで一大決心。クリンを助けてゲリラ側に寝返った。

防寒服

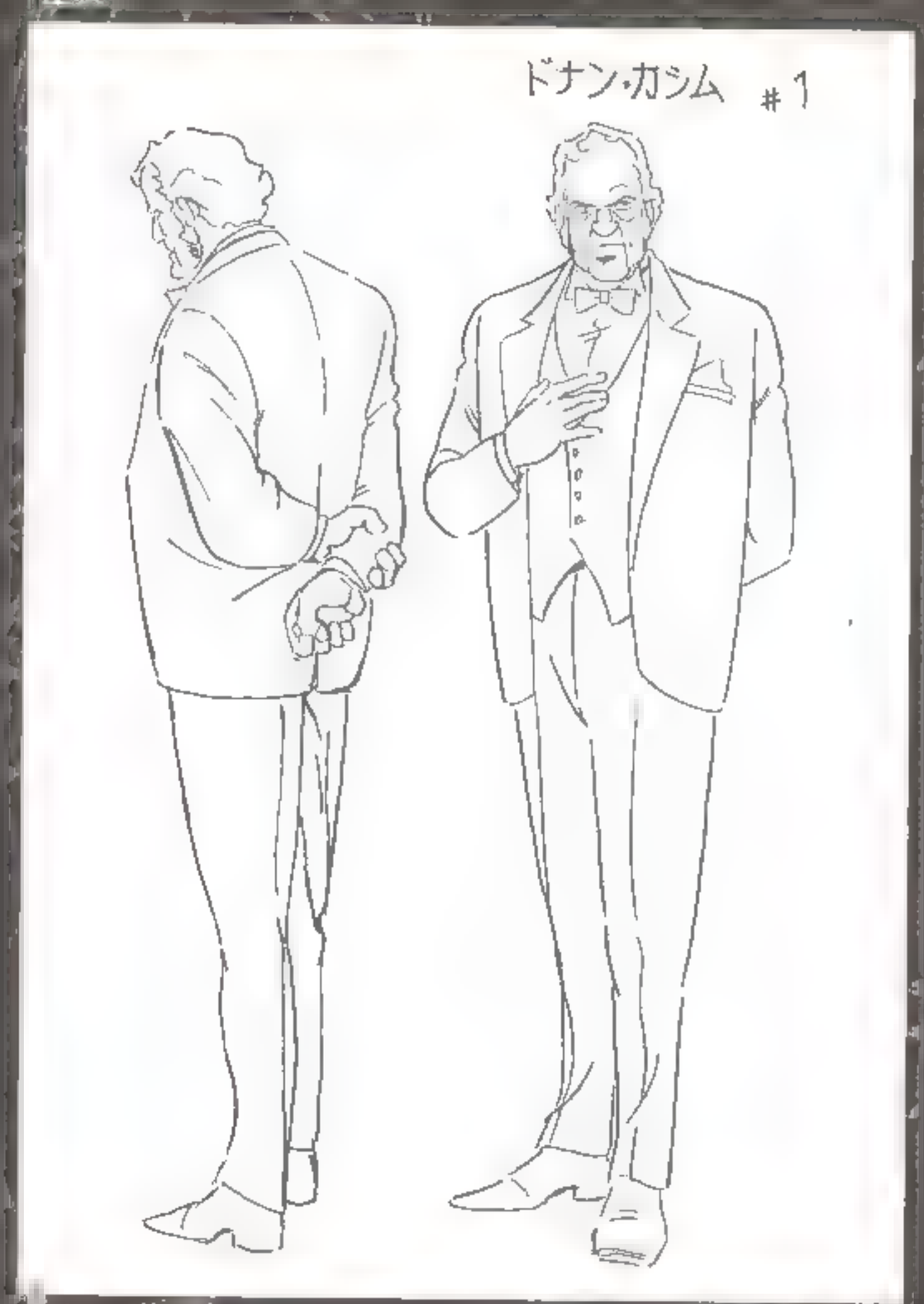
カルナック山脈で着用した防寒服でレインヤーウォーマーを使用していた。

ドナン・カシム

地球連邦評議会議長

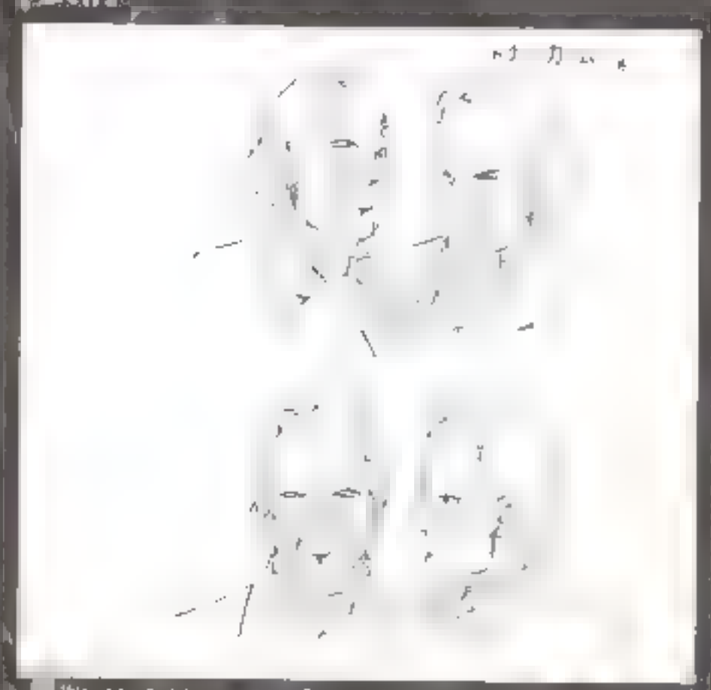
57歳。地球人。メドール州の副首相にして連邦評議会議長という超大物政治家。デロイア星独立は地球人はもとよりデロイア人にとっても不幸な結果を招くと確信し、少数の[illegible]と強硬な政策を[illegible]する。[illegible]に倒れるが、私利私欲におぼれることなく最後まで人類の行く末を案じていた。

正装



あの[illegible]トに愛ネクタイのこの正装を[illegible]公式の場や執務中も着用していた。

表情

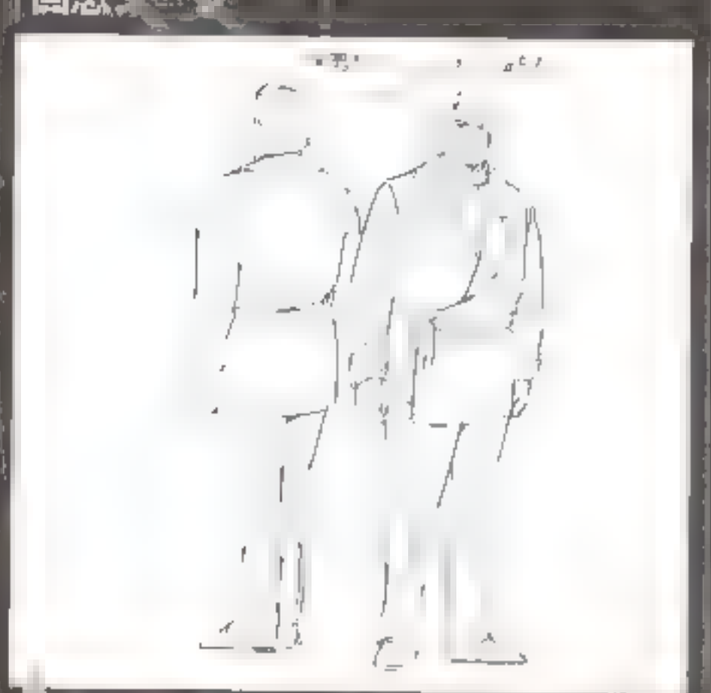


沈着冷静で威厳ある政治家の表情。クリンに対してはそれが崩れることも多かった。

Yシャツ姿

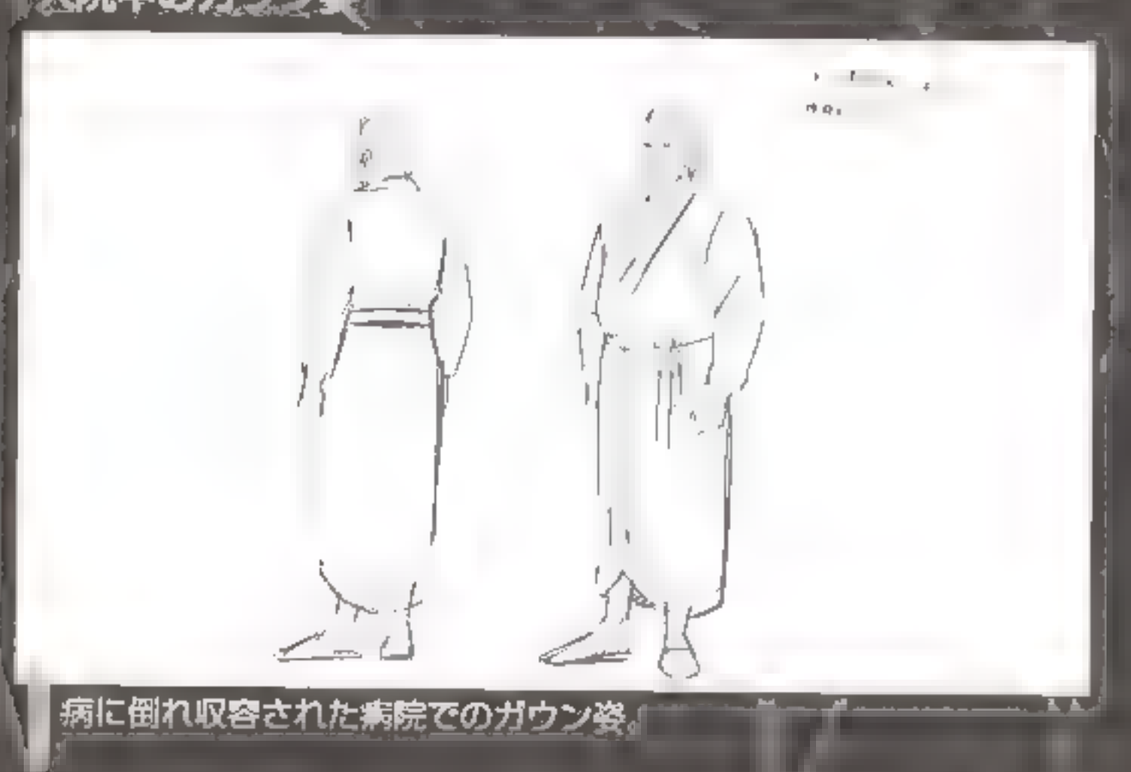
定期健康診断で、胸をはだけたところ。

回想シーン



雪山の別荘で家族団らんするシーンで着用していた。

入院中のガウン姿



病に倒れ収容された病院でのガウン姿。

回想シーン

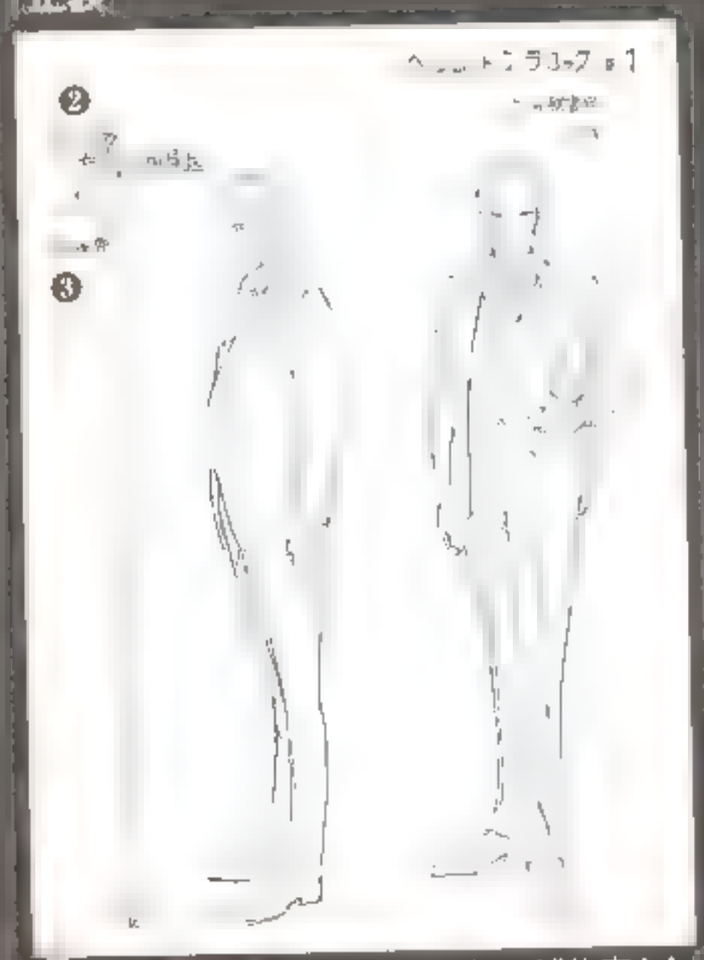
クルーザーでの航海では、幼いクリンを乗せ自ら舵を取った。

ヘルムート・J・ラコック

連邦評議会議長補佐官

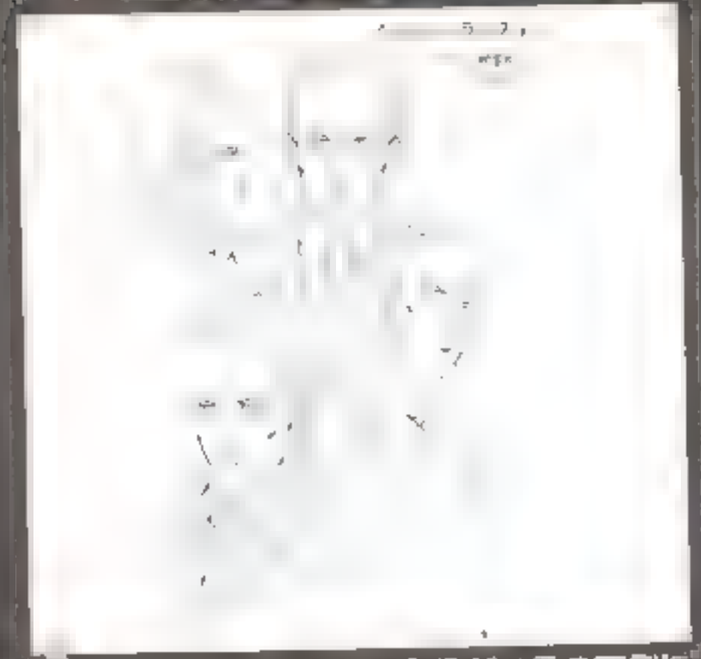
25歳。地球人。ドナンの補佐官。非常に[illegible]切れ者[illegible]。[illegible]その才能を買っていたが、一方で人徳のなさを惜しんでいた。ドナンが倒れた後に、反ドナン派に取り入りデロイア駐在弁務官に就任。その野心は着々と満たされようとしていたが、利用だけされて逆上したデスタンに射殺されてしまう。

正装



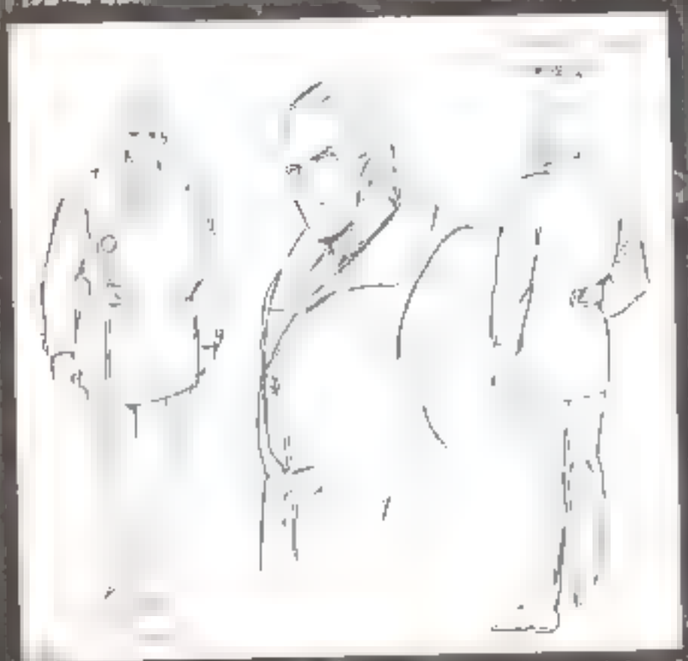
安物ではないが派手すぎない。補佐官としての立場を考えた服装。

表情



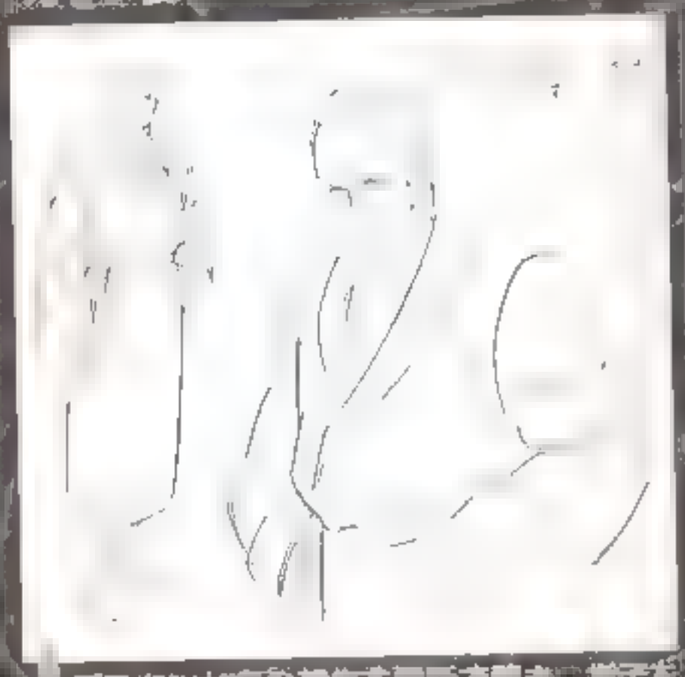
冷静で穏やかそうに見えるが、その裏側には野心が潜んでいる。

防寒服



シュタインの乗るヘリを撃墜させた時もこのコートを着用していた。

ガウン姿



デスタンからの報告を電話で聞き、指示を出すシーンで着用。

フォン・シュタイン

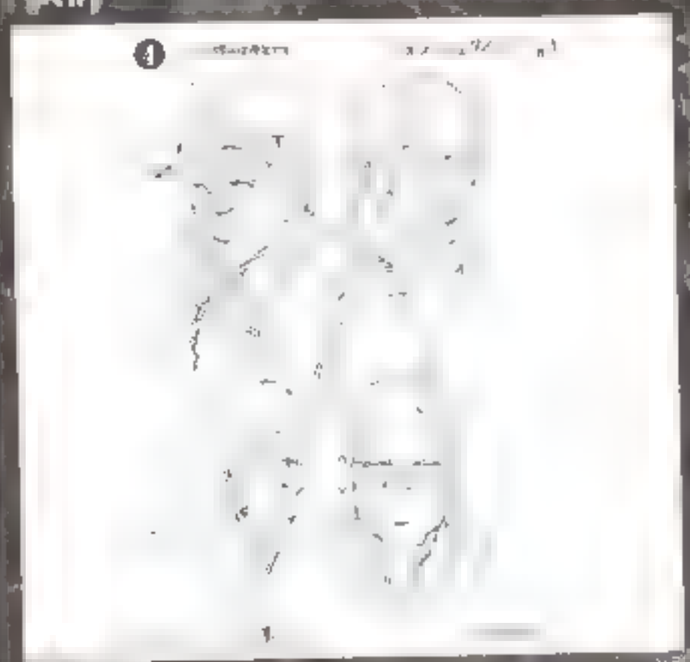
地球連邦軍第8軍大佐

地球連邦軍第8軍のデロイア人大佐で、ドナンらと共謀しデロイアを独立ではなく自治州に留める方策に荷担した。デロイア自治州の代表となり独立派ゲリラとの戦いに苦慮することとなる。ドナンが倒れ、地球側、特にラコックのデロイア支配の悪辣な手口を知り、サマリンとの直接会談を決意する。

軍服

政治の代表となるも軍人としての自分を忘れぬためか、執務中なども軍服を着用。

表情

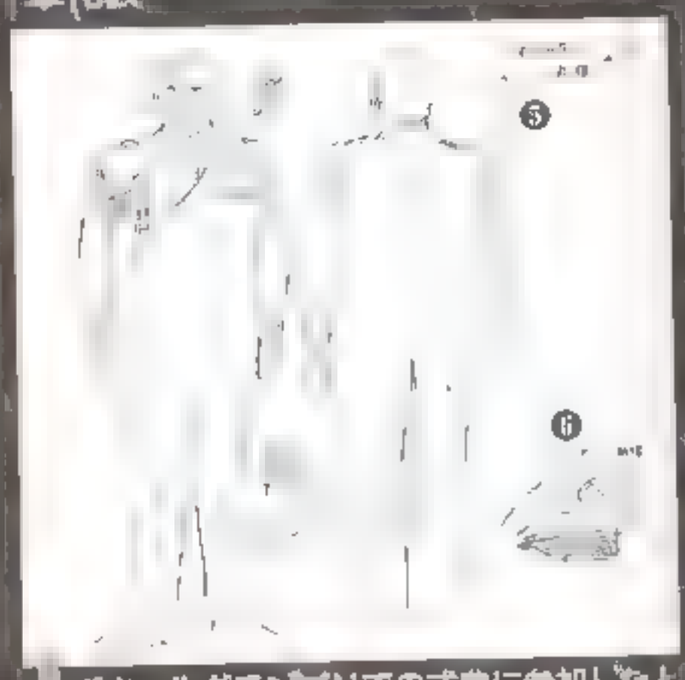


厳しいながらも部下思いで慕われていた将校の顔。

防寒服

北極ポートなどで着用した防寒具。

軍礼装



ボナールグランプリでの式典に参加したときは礼装を着用していた。

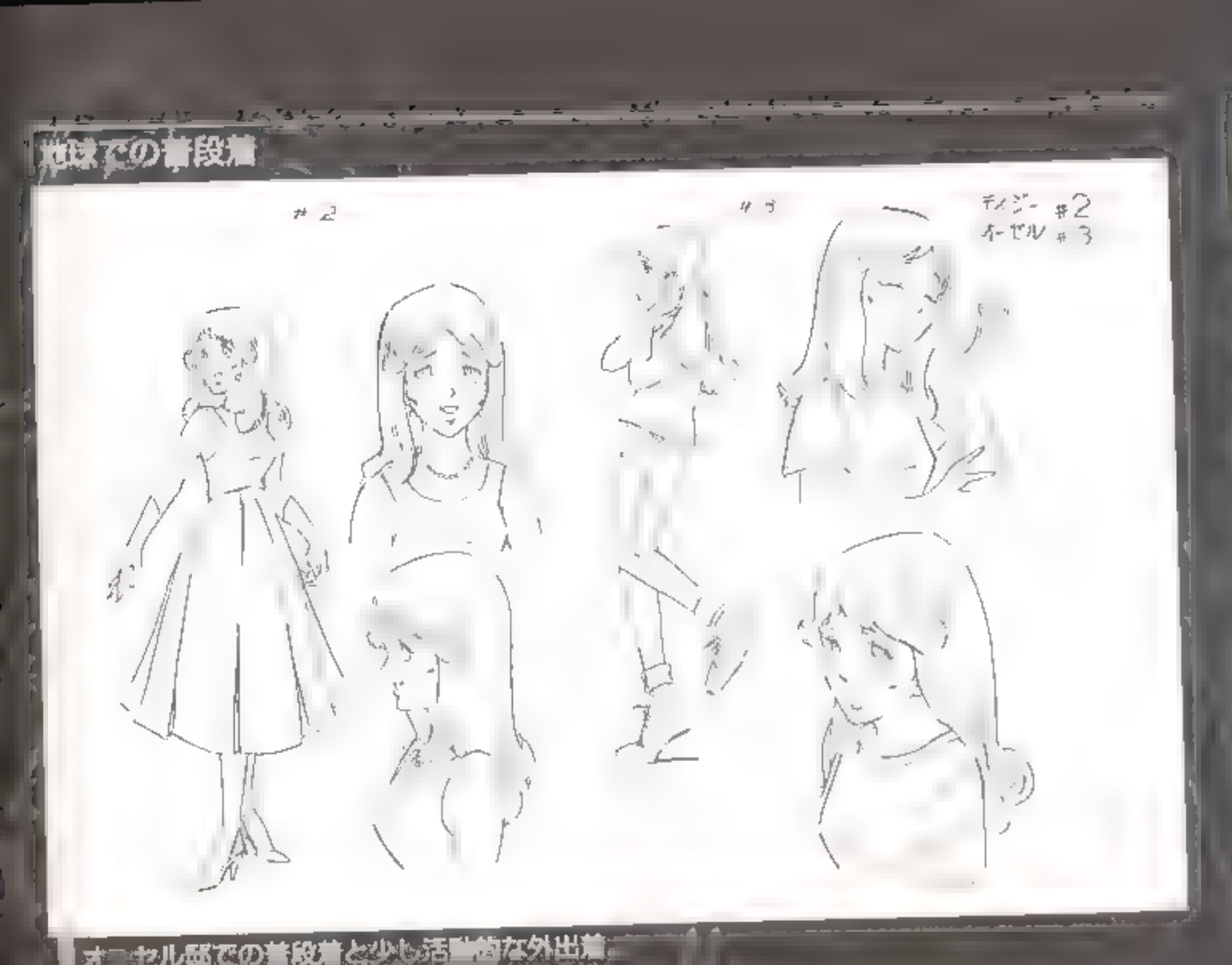
◀設定補足▶
❶若い！ ❷カシム家長男ラビンと同身長 ❸180cm強 ❹この帽子は使用せず ❺デイジー ❻フォンシュタインの制帽 ❼連邦軍制式拳銃 ❽手袋

デイジー・オーセル

オーセル財団会長令嬢

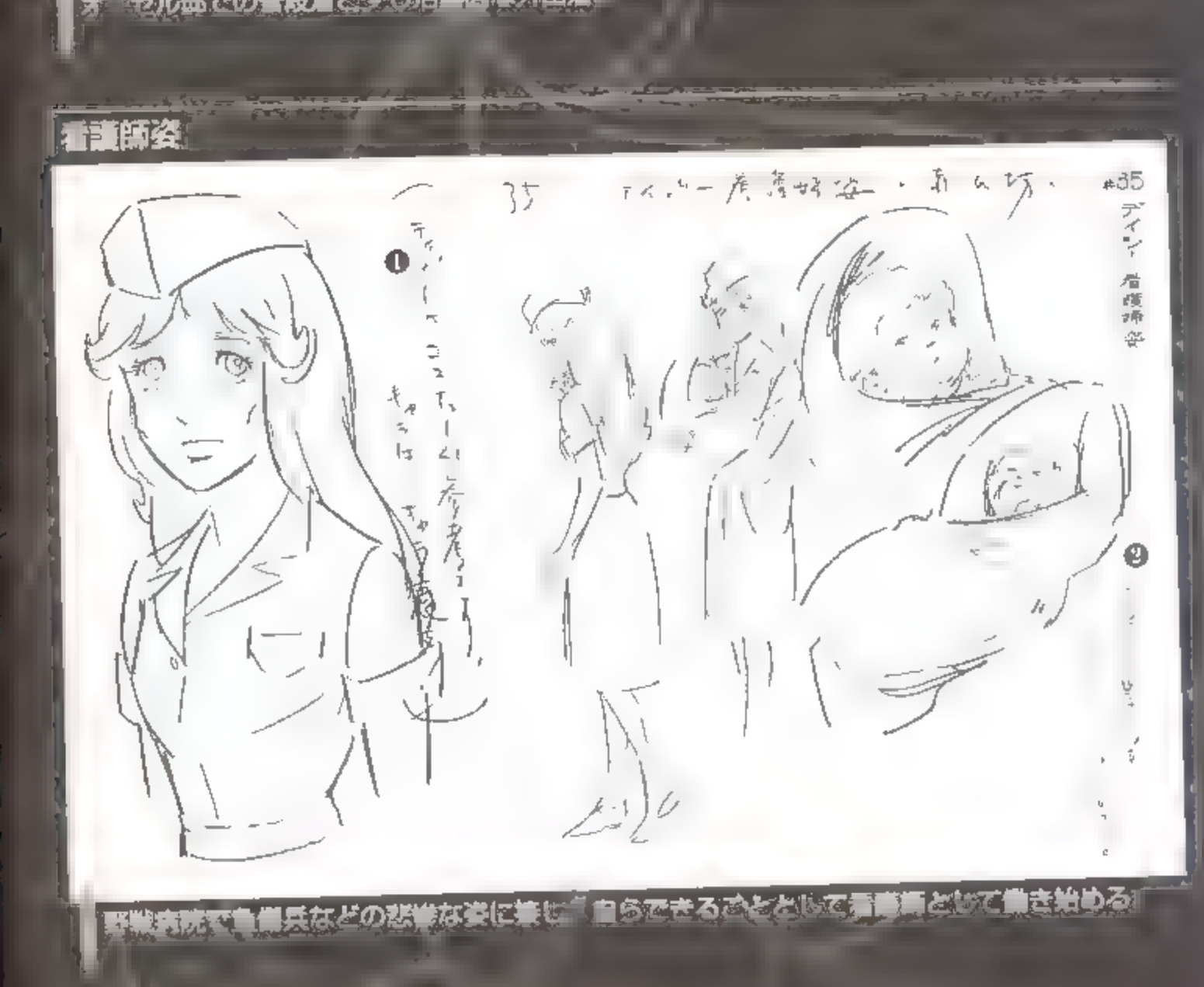
（6歳）地球人。オーセル財団の会長令嬢。[illegible]とは両親もふくめる仲。[illegible]で単身デロイヤに赴き、そこで見聞きした体験を重ねる中で世間知らずのお嬢様から見聞[illegible]と[illegible]で野戦病院で働いたり、[illegible]を手伝ったりと[illegible]は未来を約束したようだが…

地球での普段着



オーセル邸での普段着と少し活動的な外出着

看護師姿



野戦病院で負傷兵などの悲惨な姿に接し、自らできることとして看護婦として働き始める

旅行姿

デロイヤ星でサリンを探して旅するときの姿

デイジーの母　ロミナ

娘を案じつつも、その気持ちにも理解を示す優しい母である。

回想　クリンとのデート

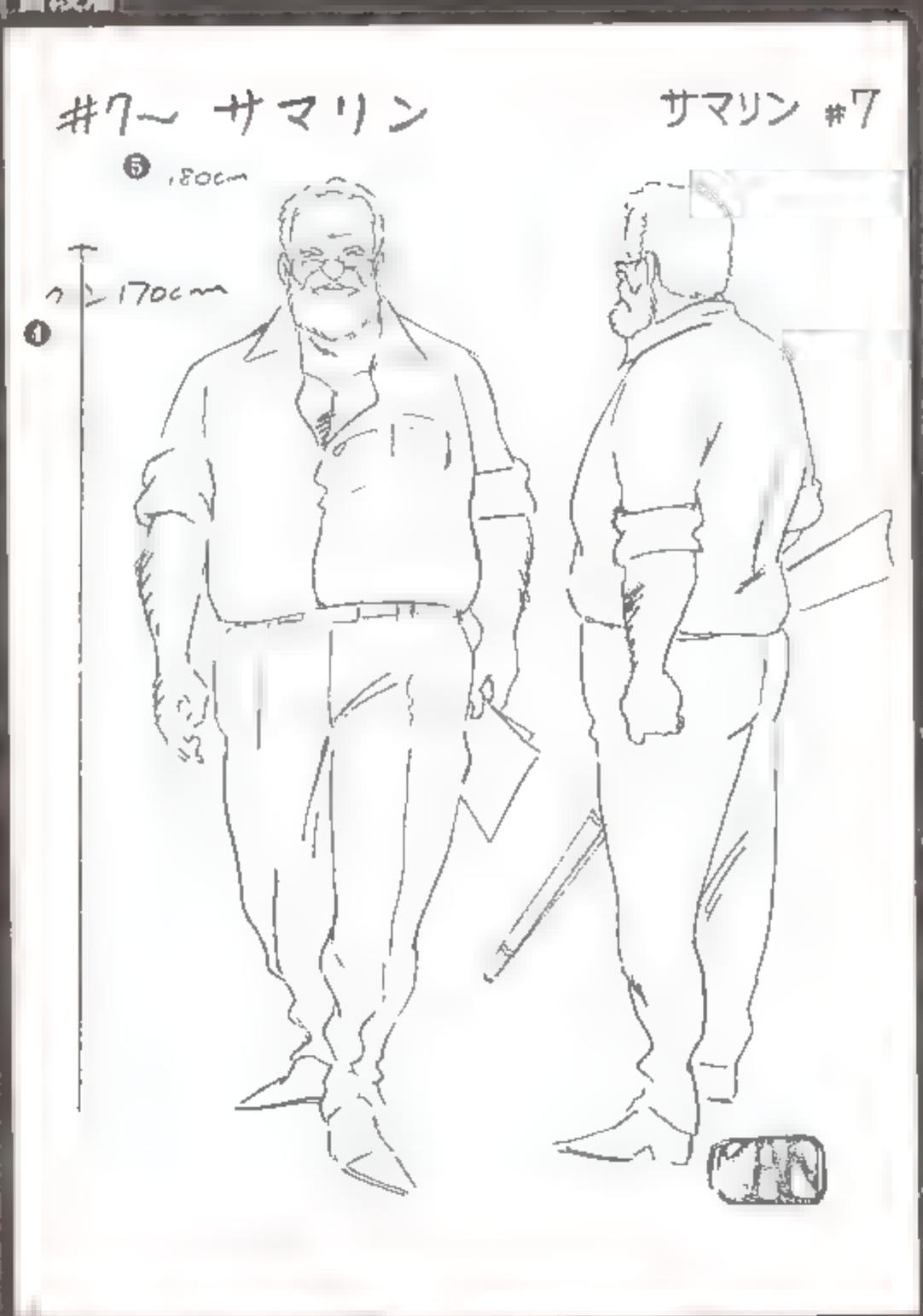
久しぶりに[illegible]モビルに乗った[illegible]楽しい時間

デビッド・サマリン

歴史学博士　独立運動指導者

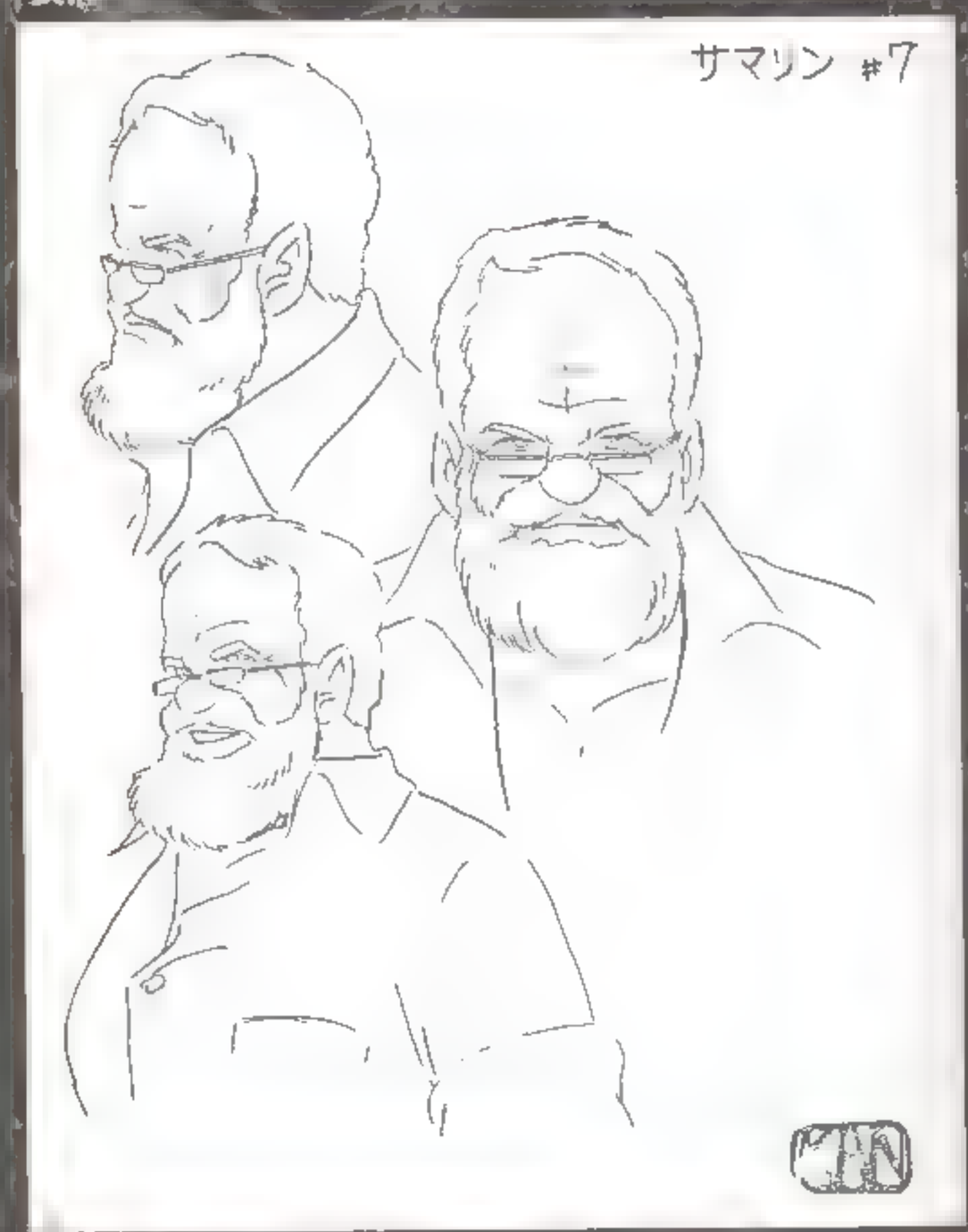
歴史学者のデロイア独立運動の指導者。穏健主義者で、穏健主義のトリンとは違のれな[illegible]お互いに元主合に[illegible]く認め合ったところもあった。中道半端な妥協は悪い結果を生むと強硬な独立路線を支持した。和平の後、元グリフ[illegible]と過激派が[illegible]するのを阻止する中、撃たれ[illegible]

普段着



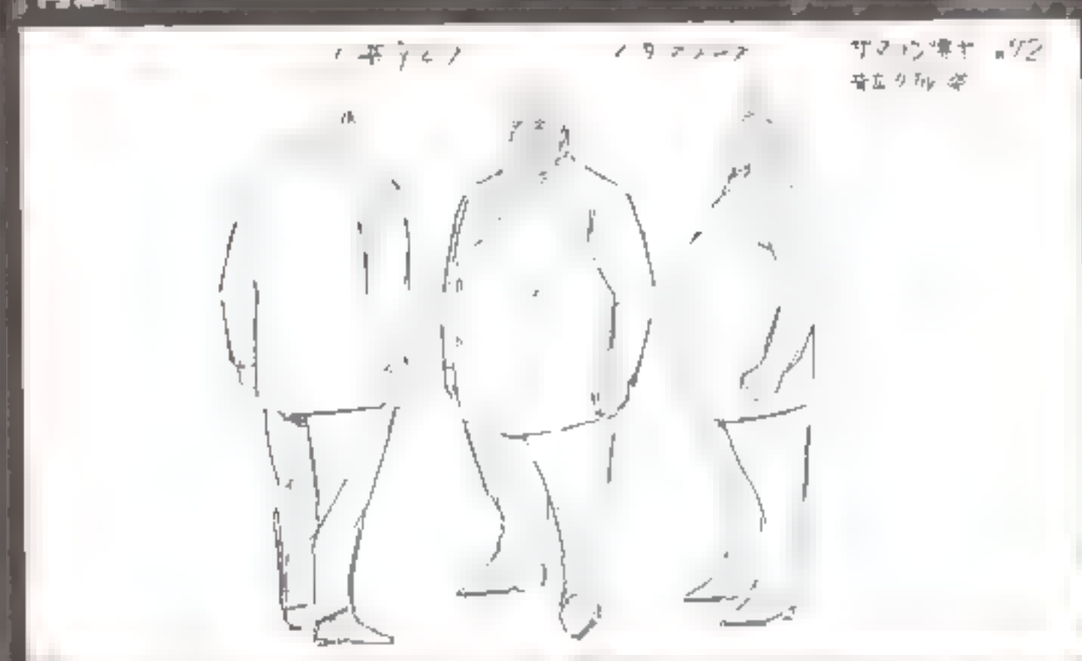
飾らない人柄そのままにラフな格好で過ごす

表情



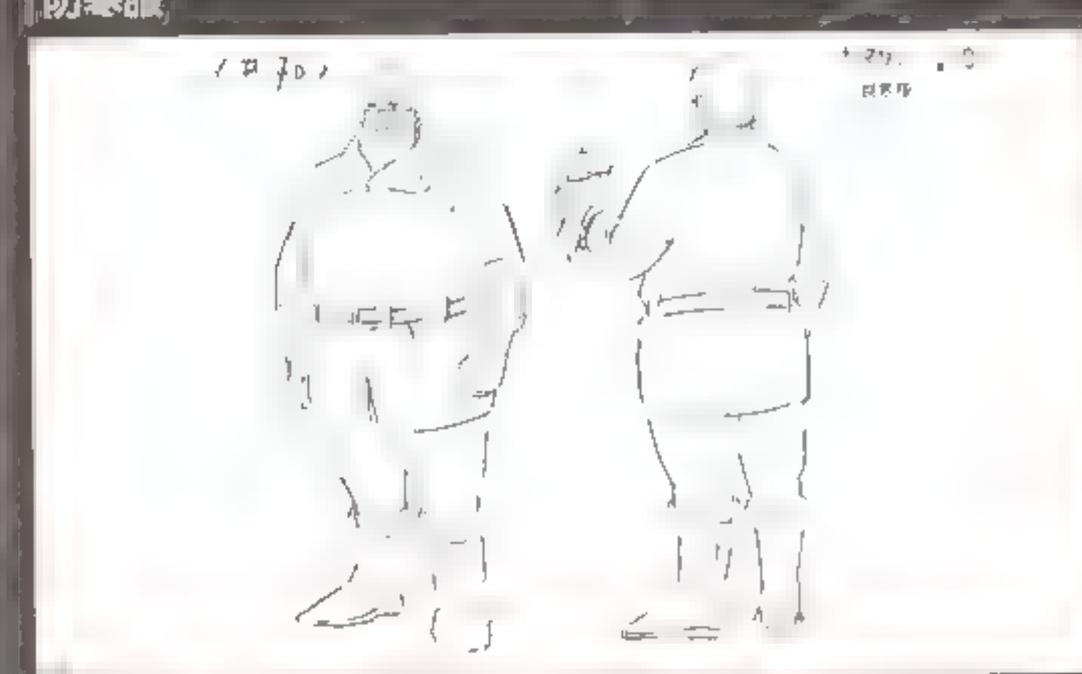
知的で包容力にあふれる中に厳しさを秘めた表情。

背広



式典などで着用したダブルの背広。

防寒服



カルナック山脈以降の寒冷な土地で着用した[illegible]

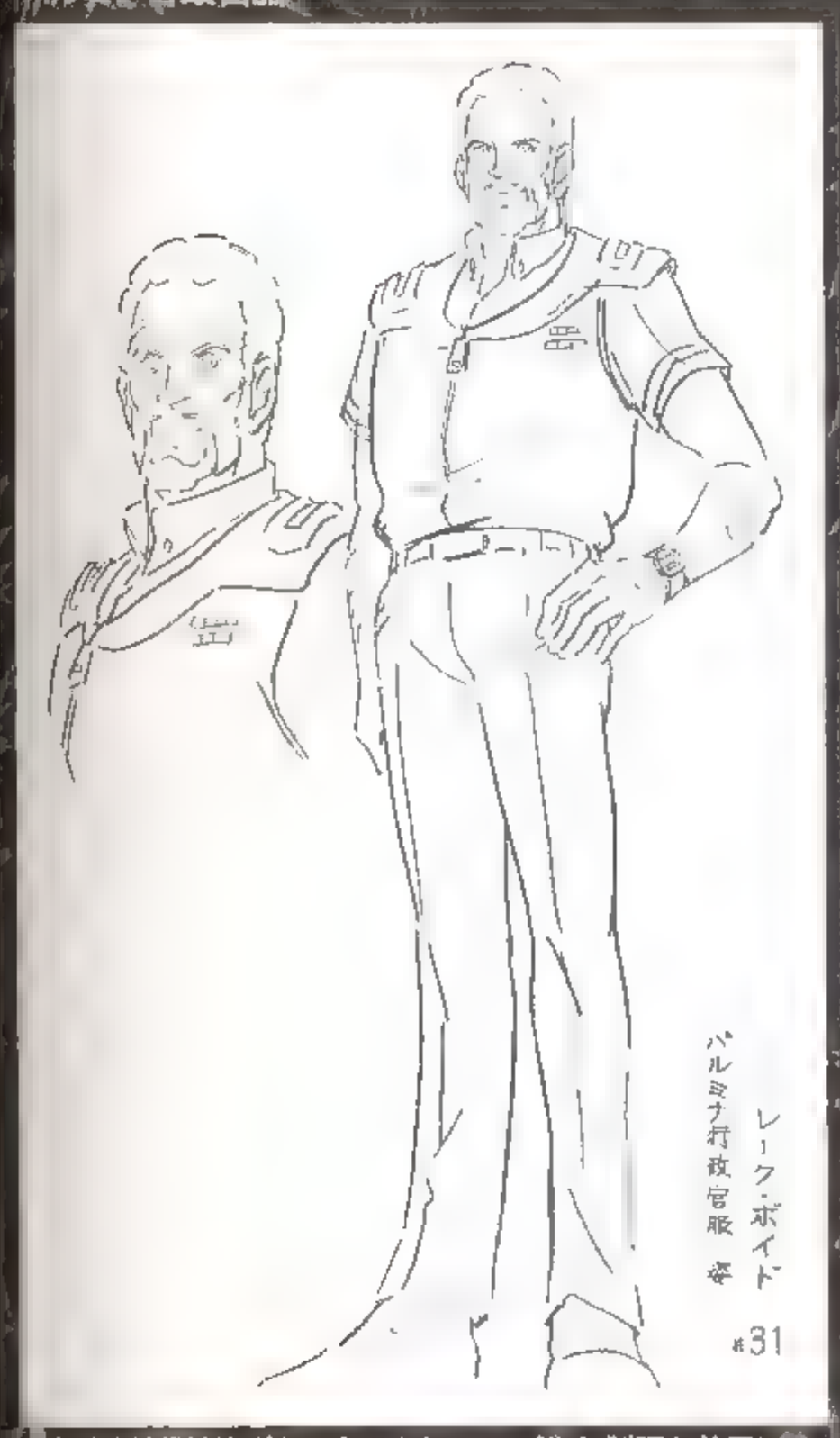
◀設定補足▶
❶デイジーはコスチューム参考です。キャラは[illegible]キャラ表を！　❷さほど上等じゃない毛布にく[illegible]るまれている　❸こんな手袋をかけてる　❹グ[illegible]リン170cm　❺180cm

レーク・ボイド

地球連邦軍大尉

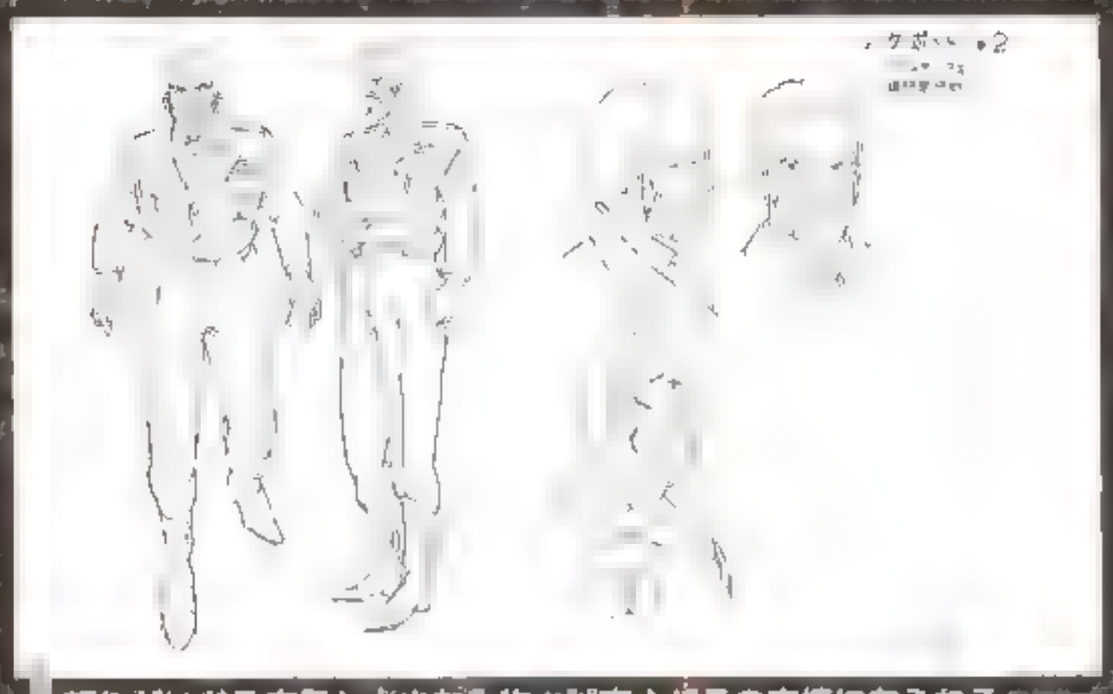
29歳。地球人。クリンの姉サラの夫で連邦軍大尉。評議会議員救出作戦の指揮を執り、後にバルミナの行政官に任命された。行政改革で善政を行い、ゲリラとも対話路線を進めるが、ウルナ基地反乱の収拾に失敗、行政官だけでなく軍からも身を引いた。クリンを実の兄たち以上に心配し気に掛けていた。

バルミナ行政官服



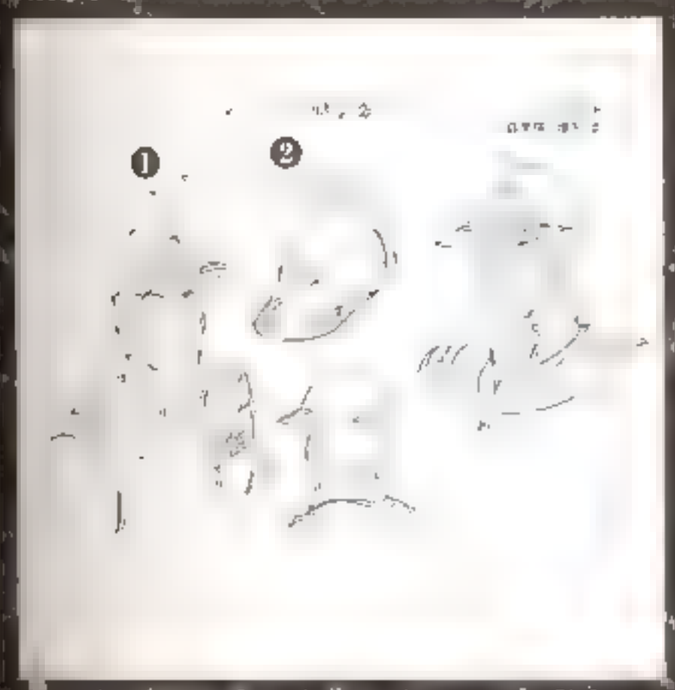
行政官時代は胸ポケットのないシンプルな制服を着用。

表情／ポーズ



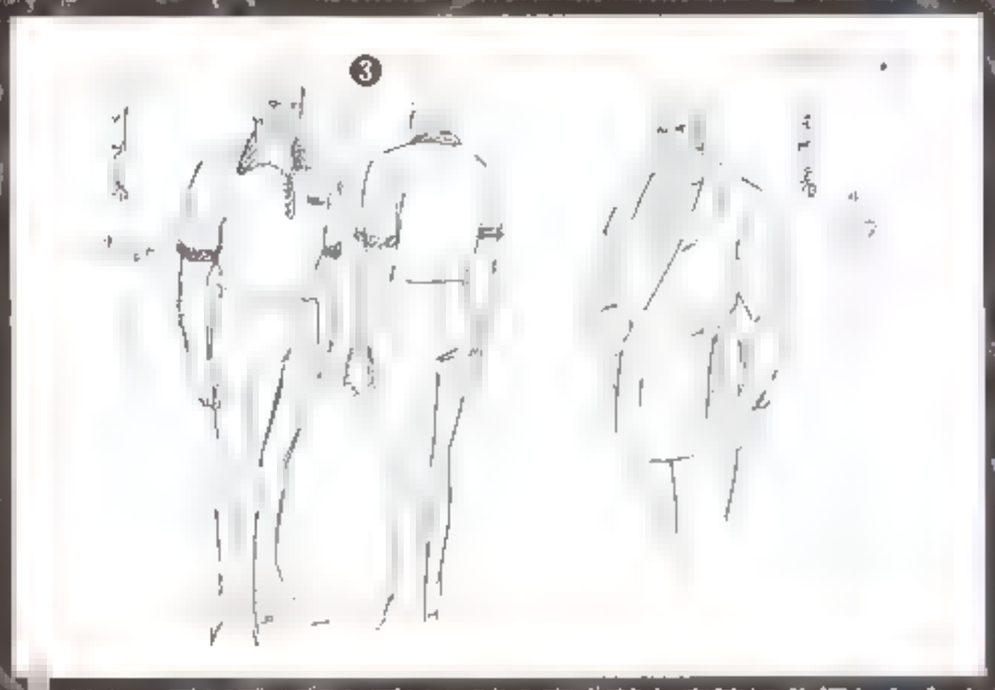
頼りがいある度量も大きな人物。誠実さがその表情にあふれる。

帽子姿



行政官の時に着用していたキャップ帽。

外出着／室内着



ドナン殺れるの報を受けた時の室内着と病院に急行したときの外出着。

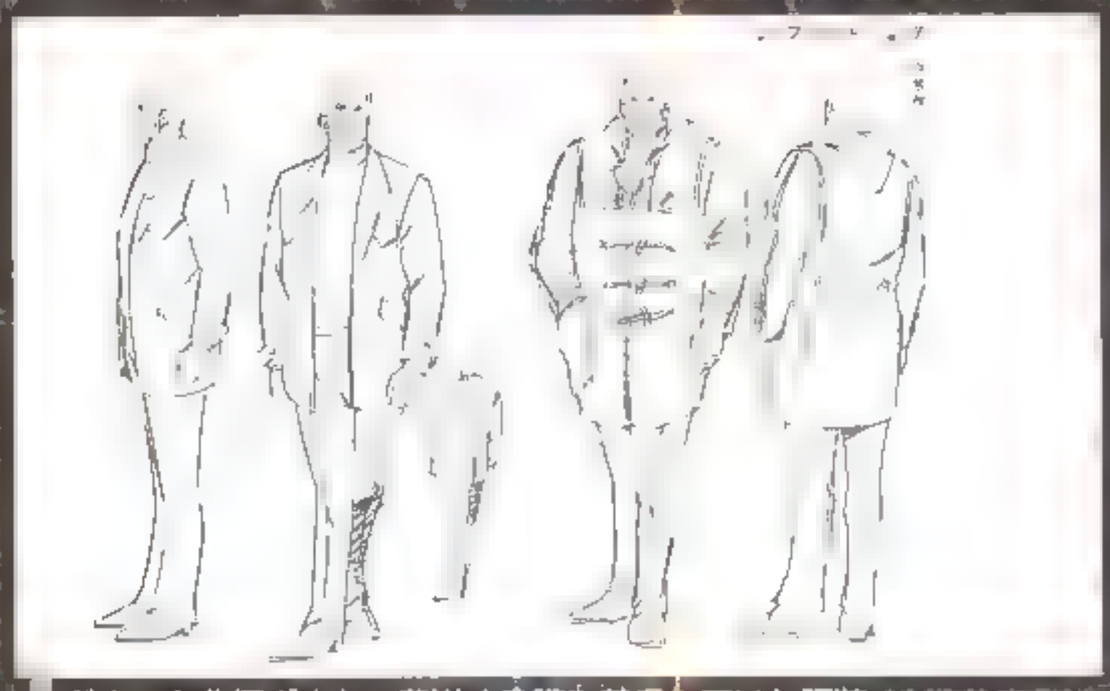
回想シーン

結婚前のカシム家との雪山バカンスの時。

ドナン葬儀時の礼装

すでに軍から離れているため、普通の礼服を着用。

普段着／防寒服



ドナンを北極ポートへ搬送する時に着用していた防寒服。

フィナ・カシム

ドナンの妻にしてクリンの母

ドナンの妻でクリンの母親。後妻なのでクリン以外の子供とは血縁はない。温厚で誠実、ドナンの一番の理解者でもあったはずで、夫と子供の対立に心を痛めながらも、両者への愛情、家族への思いやりは少しも変わらなかった。クリンが帰宅するのを心待ちにしていたが、その自立を見守ることとなる。

ポーズ

慎ましさと華やかさ、そして人としての強さを持つ女性

表情

穏やかで優しい妻であり母親の表情。

外出着

危篤の夫を看取るためデロイアに到着した時の服装。

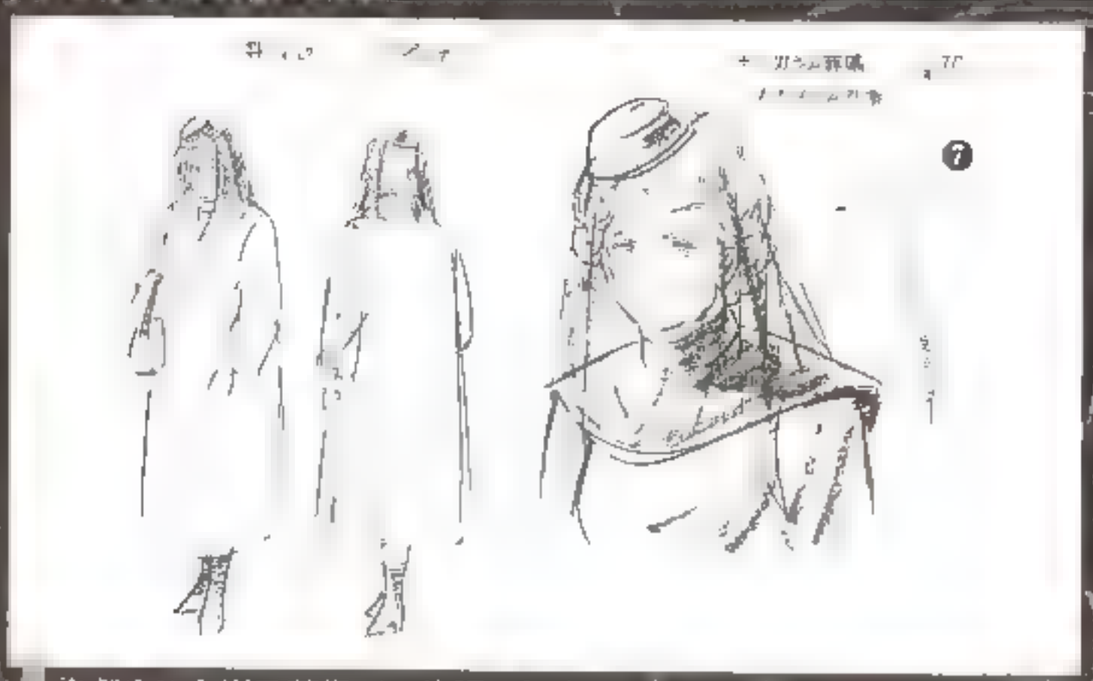
回想シーン

別荘での家族団らんシーンでの服装。

◀設定補足▶

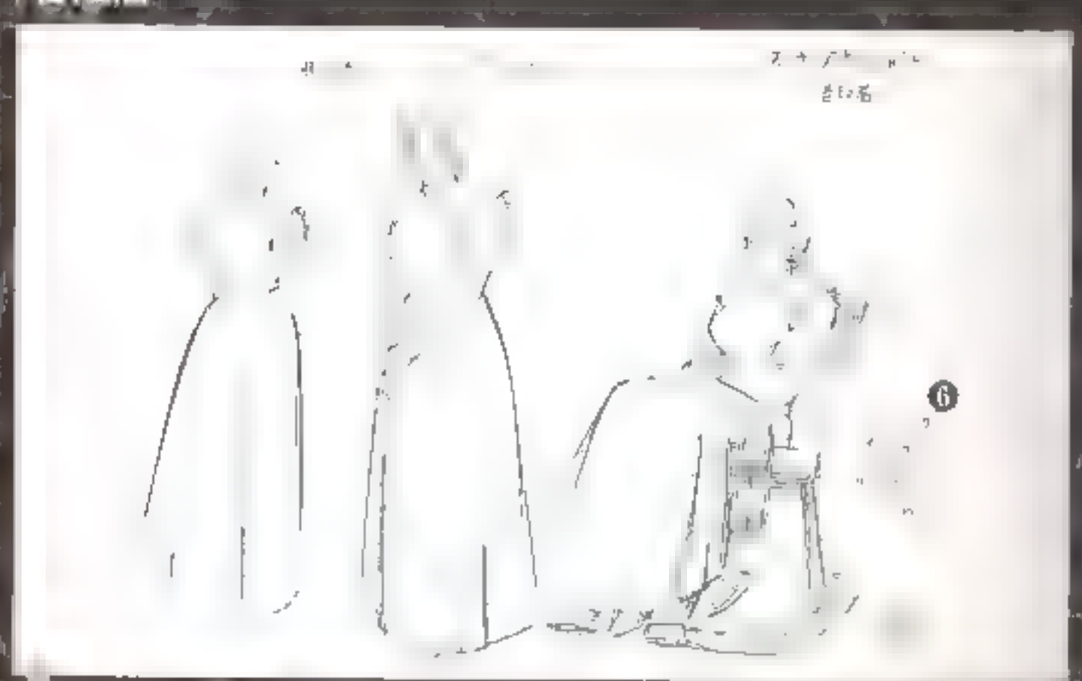
❶円にならない様に。❷文字は別に意味ありません。適当にそれらしく。❸ヌリ。❹連邦旗❺ブーツ？。❻ロッキングチェアは別設定有り❼この上にコートを着用

ドナン葬儀時の喪服



夫ドナンを送る葬儀での礼服。気丈にふるまう中に悲しみがにじむ。

普段着



ドナン亡き後、子供たちも去ったカシム家でクリンの帰りを待つフィナ

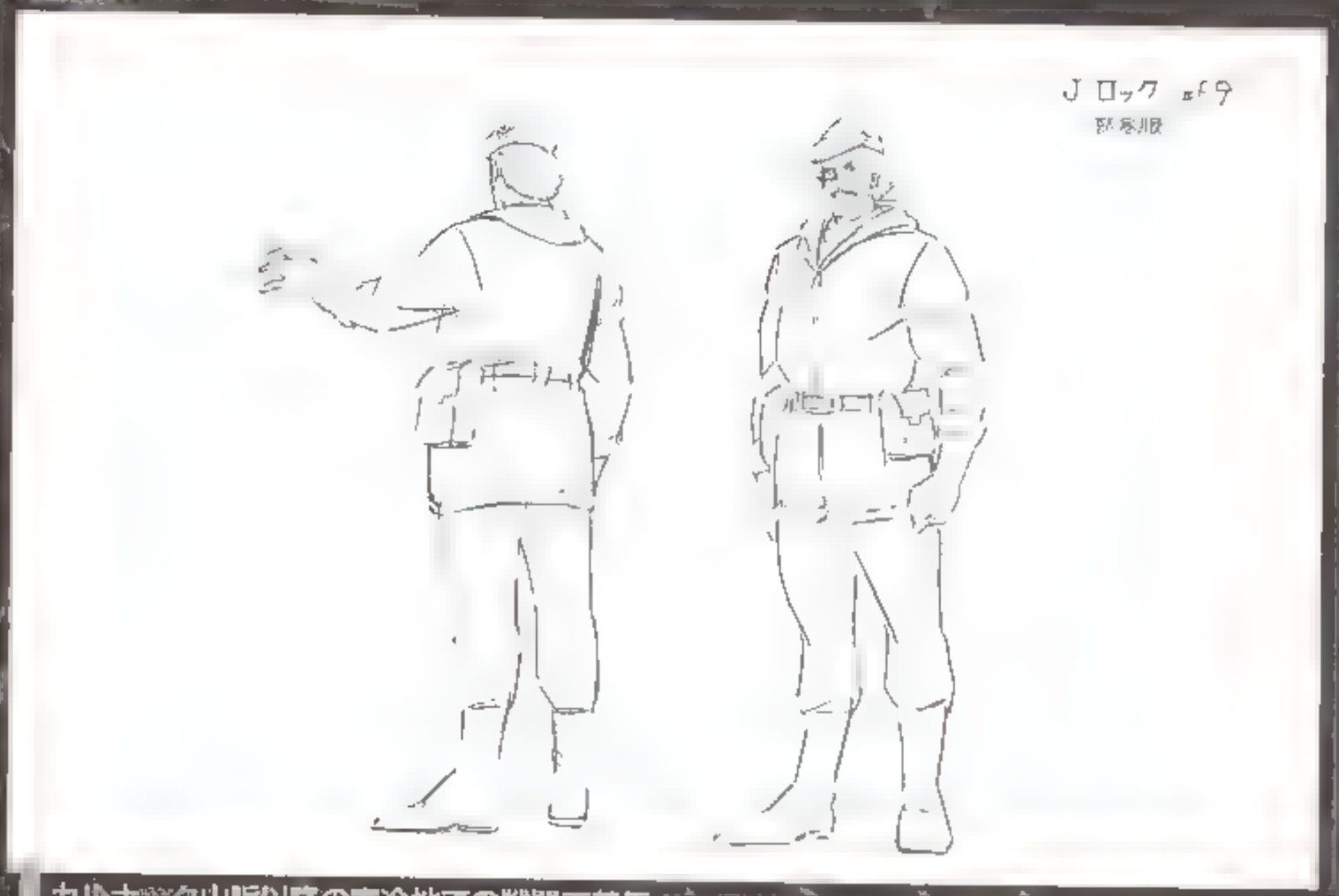
J・ロック
「デロイアの星」のリーダー

独立派ゲリラ部隊『デロイアの星』のリーダー。第8軍のザルツェフとは因縁深く、片目を失ったのも彼との決闘が原因と言われている。情報工作、破壊活動による撹乱などゲリラ戦術に長け、独立派の勝利に大いに貢献した。クリンたちにとっては援助の手をさしのべてくれる心強い先輩戦士である。

戦闘服　ポーズ

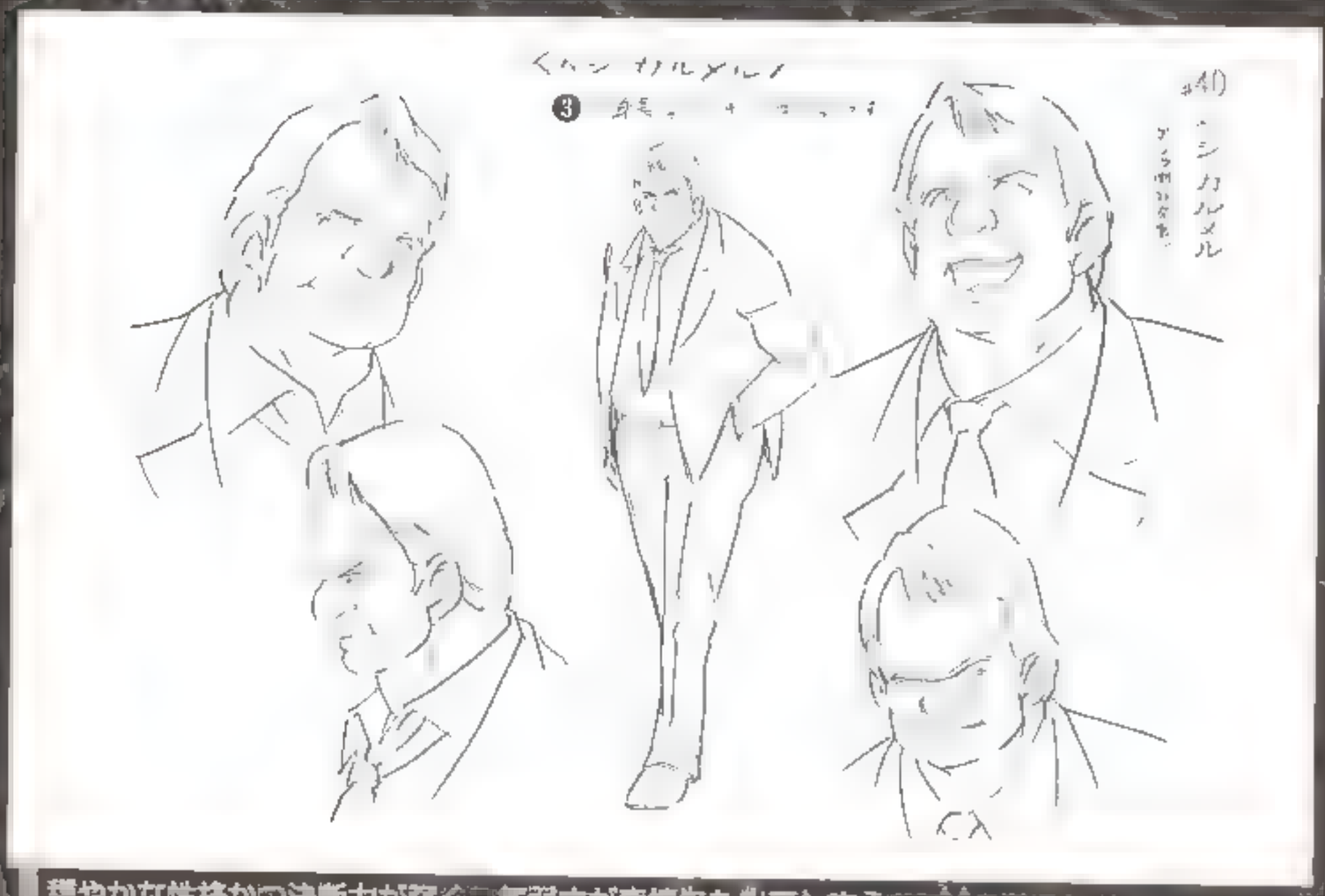
精悍な二枚目で、ポーズや動作が実に様いほど決まる。ベレー帽を愛用し、それもまたセンスよく見せてしまう。

防寒服



カルナック山脈以南の寒冷地での戦闘で着用。

ポーズ　表情



穏やかな性格かつ決断力が弱く、気弱さが表情にも出てしまう。

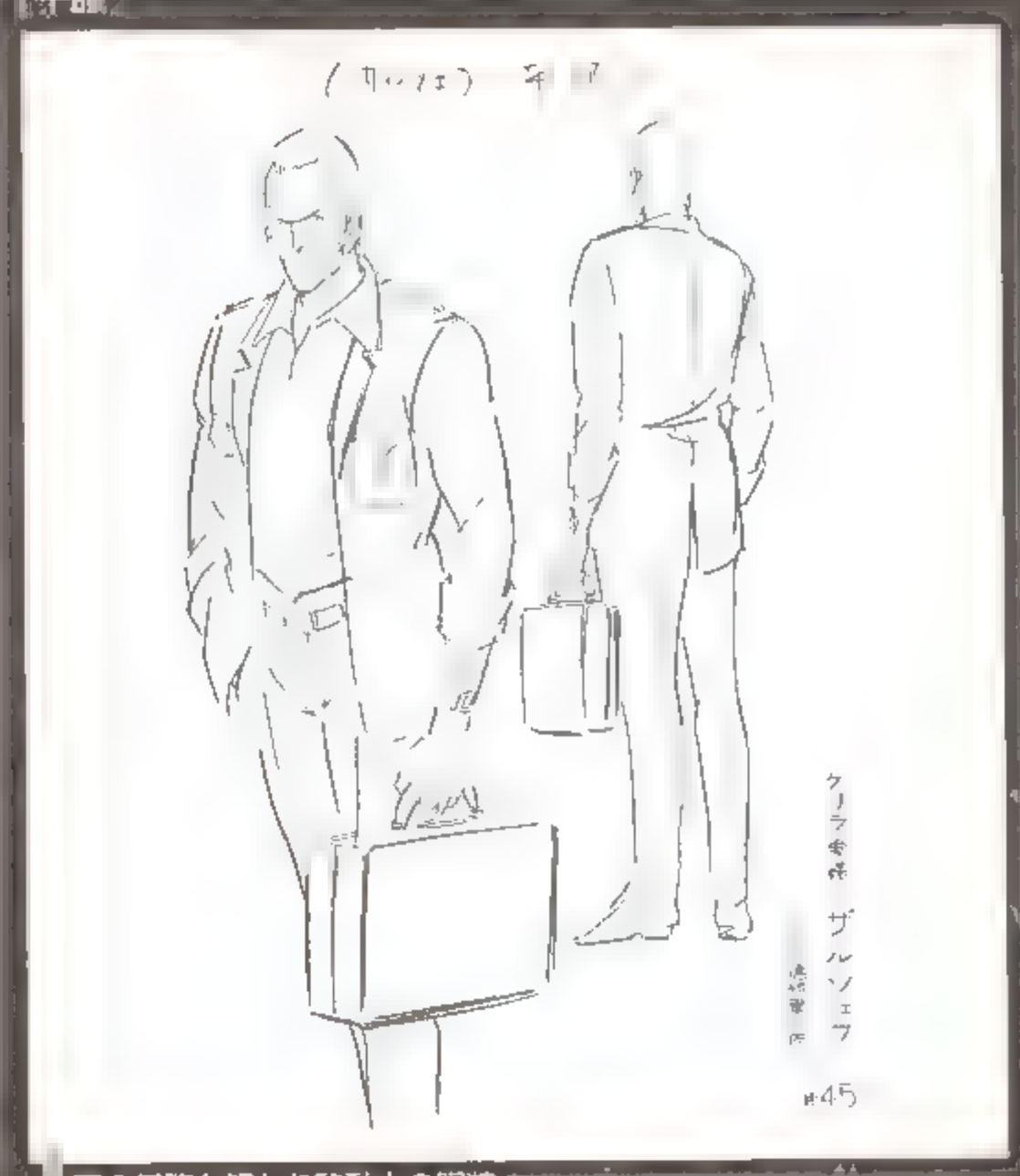
ヘシ・カルメル
人民解放政府首班

デロイア人民解放政府和平派のリーダー。海外担当となりサマリンの片腕として活躍するが、その後、徹底した戦いではなく話し合いでの独立を主張し対立する。人民解放政府の首班に就任するが、気弱さと優柔不断さをラコックにつけ込まれ、独立も名ばかりのものにされかけてしまう。

シャッキー・ザルツェフ
連邦軍第8軍少佐

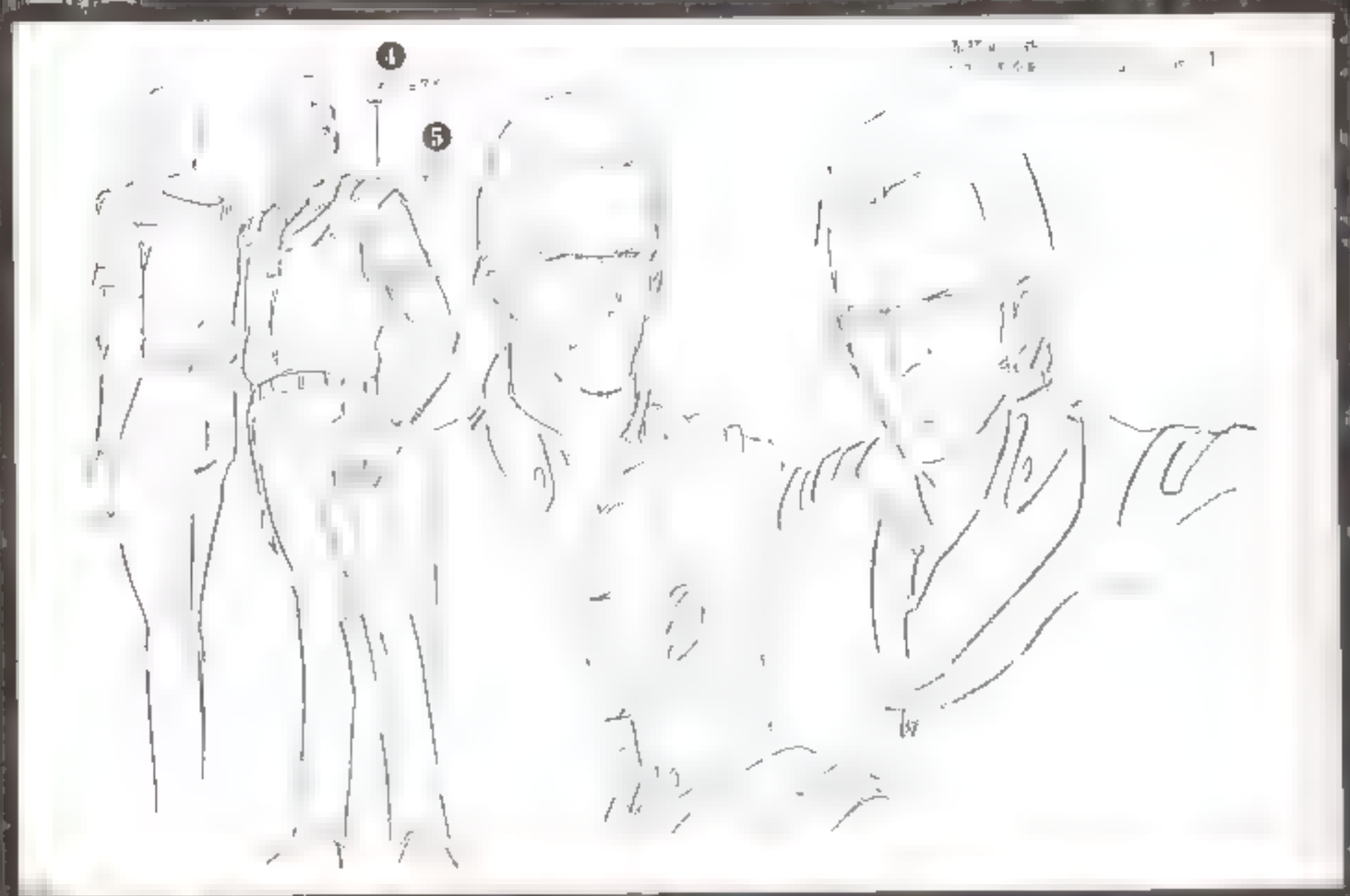
連邦軍第8軍の少佐。ダグラム追撃を命じられ、クリンたちを苦しめたが、撃破には至らなかった。重大なる作戦の失敗から任を解かれ軍刑務所送りとなるものの、その能力を高く評価する。ロックの推薦によりゲリラに救出される。その後はサマリンの軍事参謀として独立戦争の勝利に大きく貢献した。

平服



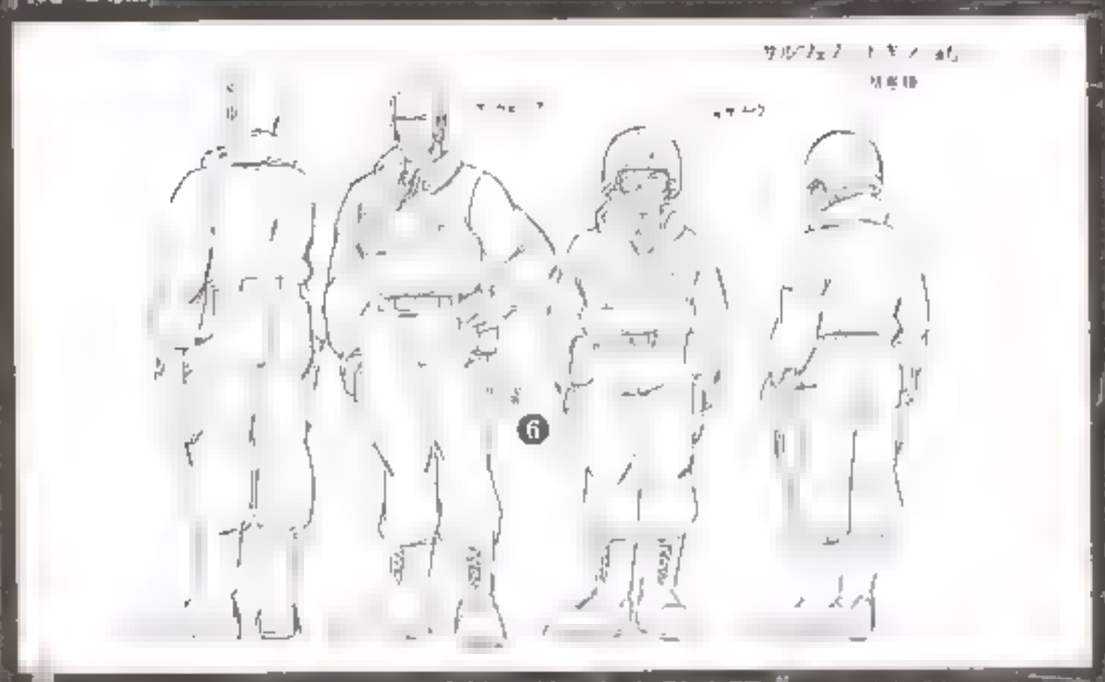
軍の任務を解かれ移動中の服装。

全体図



厳格な軍人に見えるが、その発想は柔軟で、機多の奇策によりダグラムを追い詰めた。

防寒服



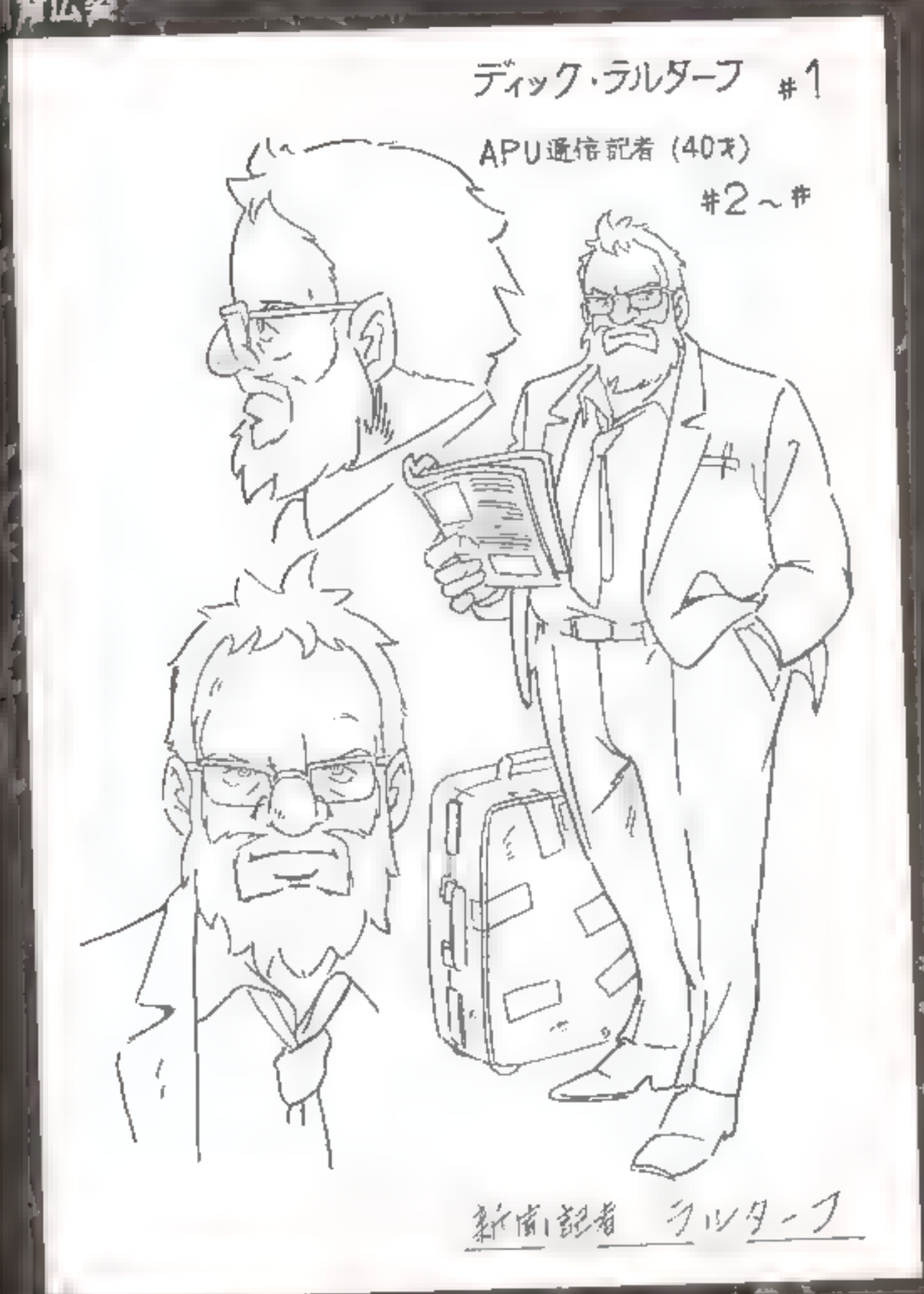
カルナック山脈以降の寒冷地で着用した防寒服。

◀設定補足▶
●J・ロック ●クリン ●身長はロッキーと同じくらいです ●フォンシュタイン ●クリン ●手袋

ディック・ラルターフ
APU通信デロイア特派員

40歳。シャーナッツ[illegible]でAPU通信のデロイア特派員。連邦軍、独立派ゲリラ両方の要人や兵士たちにも取材し、広く太い人脈を築いている。クリンたちのグループを「太陽の牙」と名付けたのも彼である。単身デロイアを訪れたティターンも彼の助力を受けるなどクリンたちとの関係は深い。

背広姿



記者会見などに出席する際に着用する背広

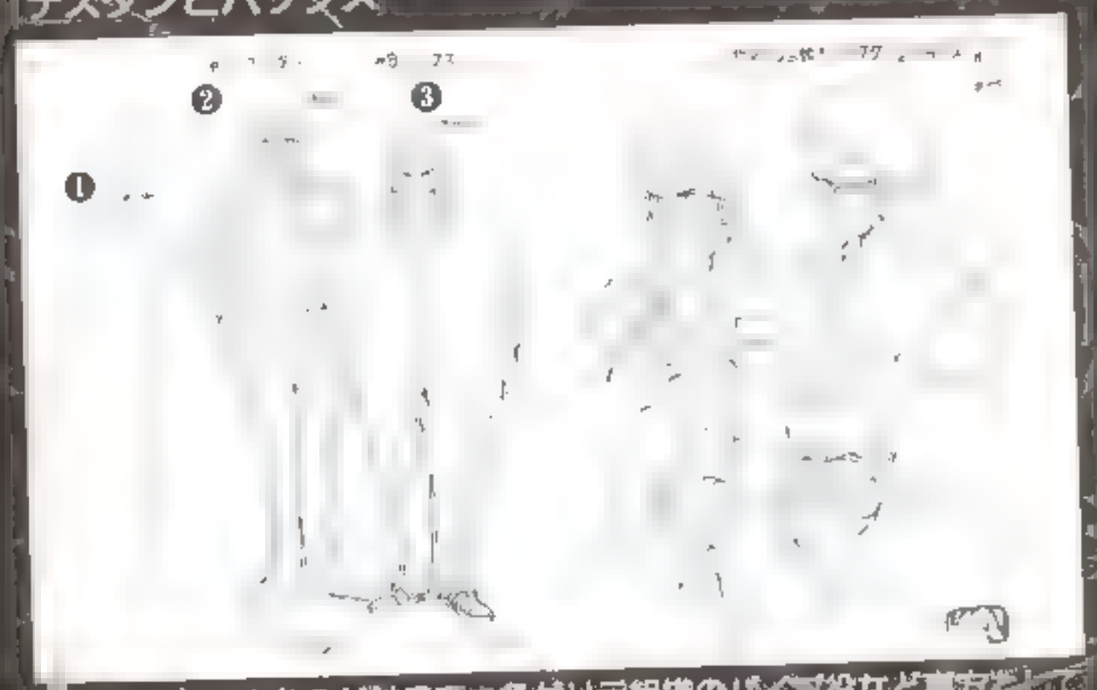
従事記者姿

この戦争の本質を取材するため戦場へも赴いた

コール・デスタン
ゲリラの裏切り者

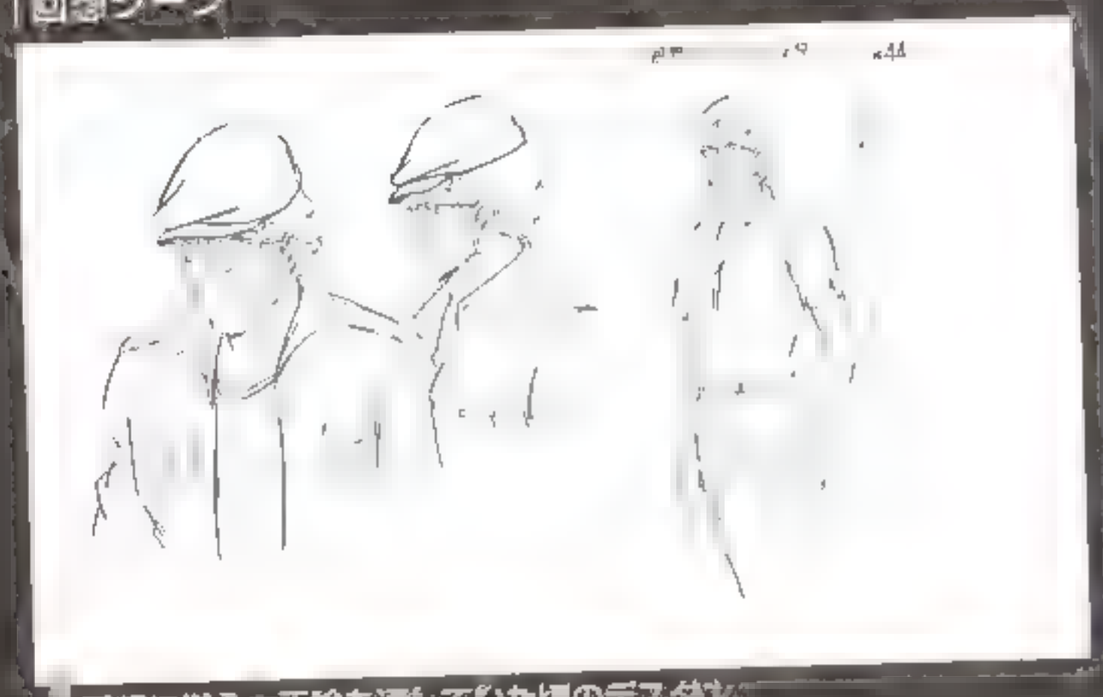
[illegible]マリッ[illegible]ゲリラグループのリーダー格だったが、ゲリラ弾圧の中でラコックら地球人の情報屋に転向する。自分の中の理想と現実、[illegible]や能力との折り合いを付けられず、それがリタなど他人も巻き込む[illegible]となった。自分が手を貸したラコックに裏切るも、断られた[illegible]に暴露され逆上、ラコックを射殺する。

デスタンとバックス



バックスは古参のゲリラで、各ゲリラ組織のパイプ役など裏方として活躍した。

回想シーン



理想に燃え、正論を通していた頃のデスタン

背広姿

ラコックに会うために着ていった背広姿

リタ・ベレット

「太陽の牙」に協力する踊り子

[illegible]ラ編、パルミナでダッシュたちと合流した少女で、元は踊り子をしていた。デスタンに誘され、彼の連盟に共鳴したことで独立[illegible]に参加した。可愛いい上に明るく純真で、誰にでも好かれる。デスタンの裏切りを知り、それでも彼を更正させようと説得するが、裏切りからデスタンに射殺されてしまう。

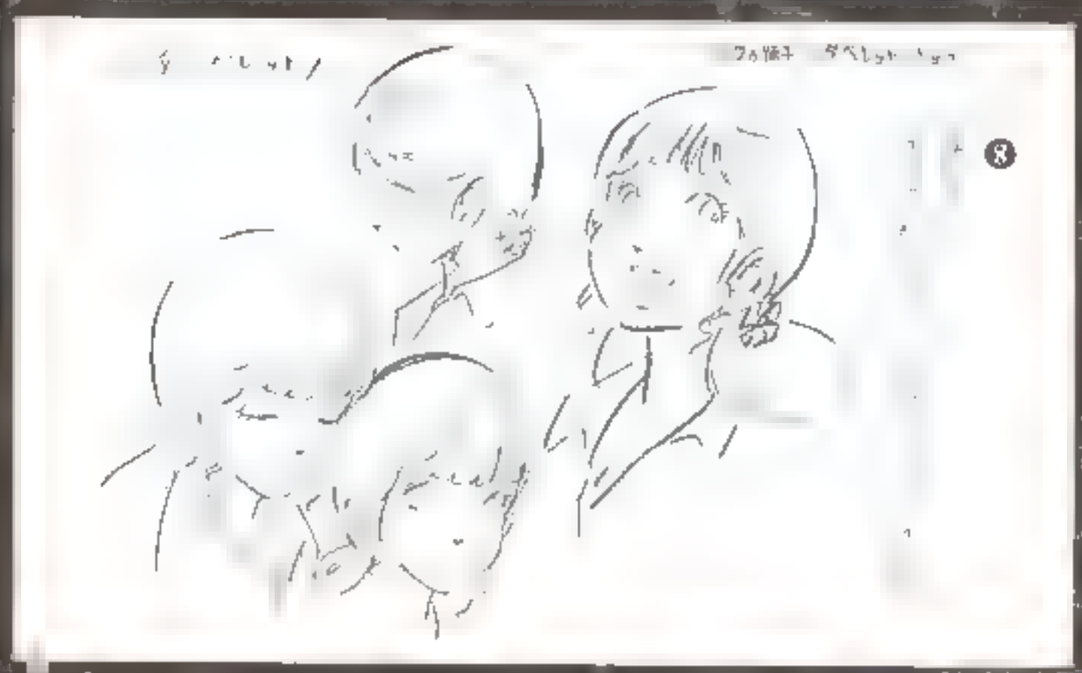
ポーズ

スタイル良く、踊り子時代はよく男に声をかけられたらしい。

ポーズ 表情

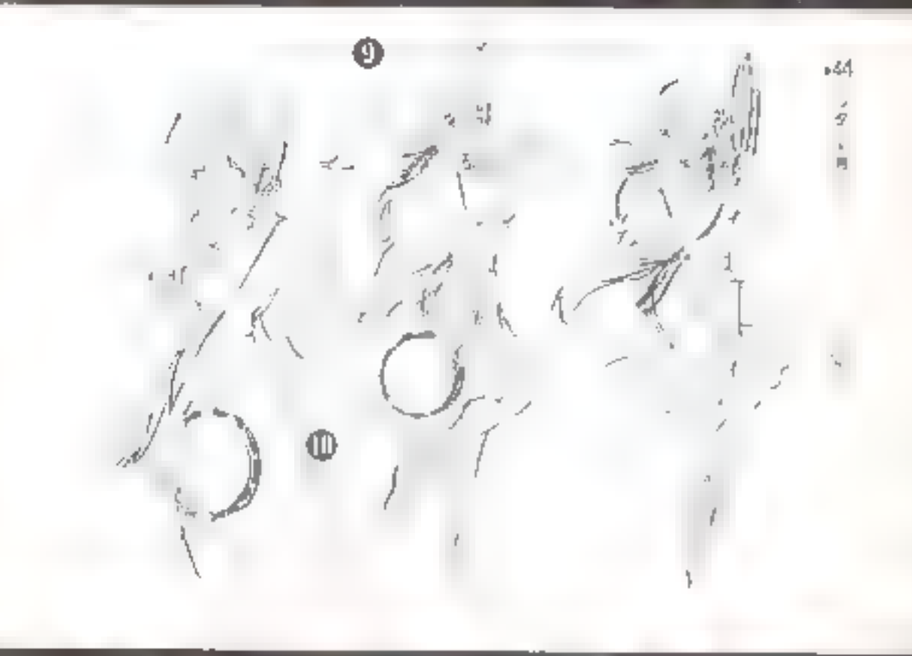
まだあどけなさを残す無邪気で可愛らしい表情を見せる。

表情



デスタンの正体を知り、悩みながらも未来を信じようとしたが。

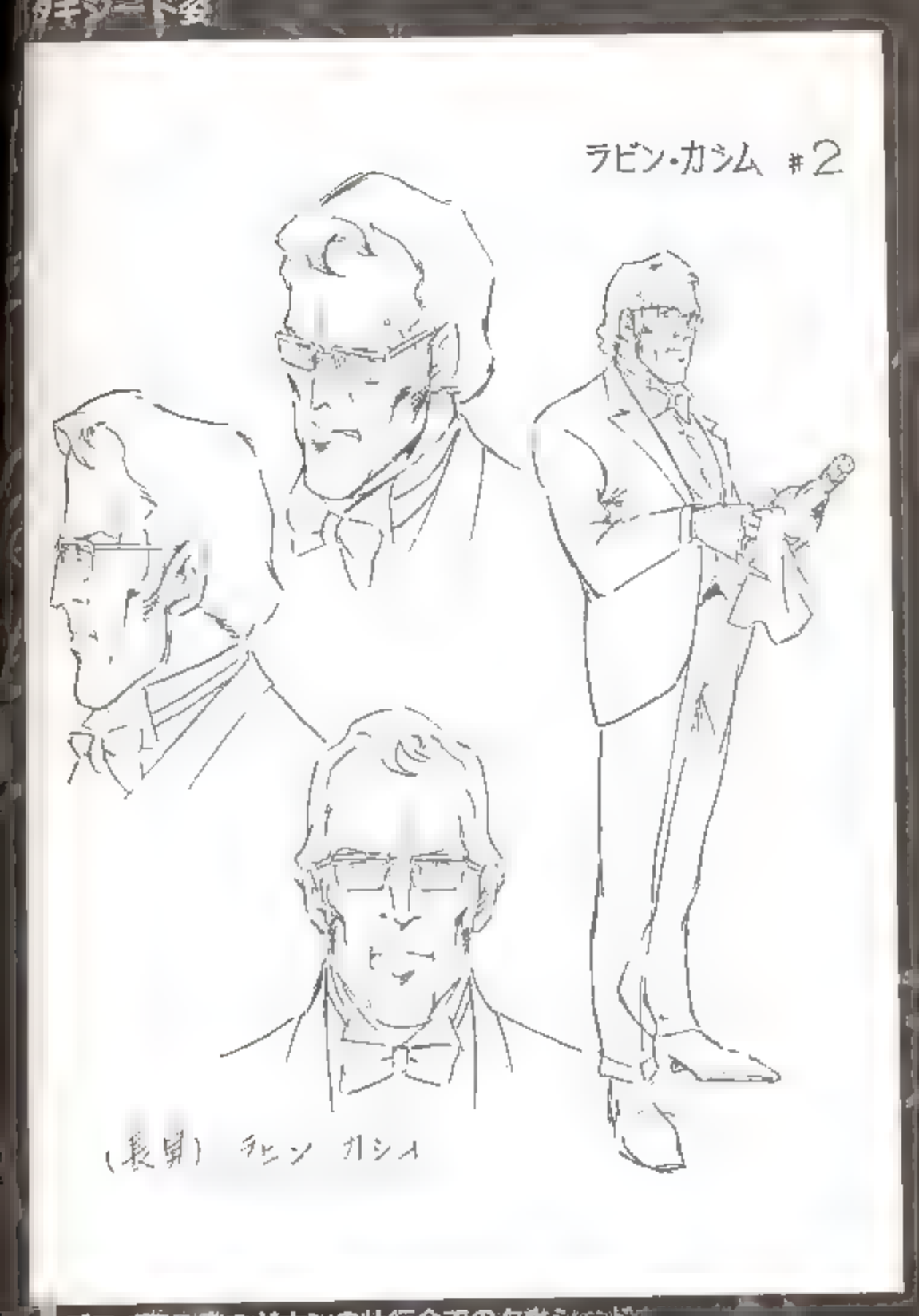
踊り子姿



軽快な中に哀愁さも匂わす踊りを披露するリタ。

◀設定補足▶
●クリン170cm ❷デスタン183cm ❸バックス172cm ❹クリン ❺身長はディジー位です ❻目の中の小さい丸は眼に非ず、ハイライトです ❼巻スカート時々チラリと足が見えたりする ❽原則として、肩は髪の上に隠れて見えません ❾マフラー ❿タンバリン

タキシード姿



デロイアで発つドナンの壮行会での夕キシード

ラビン・カシム

カシム家長男

30歳。カシム家の長男で財務省勤務のエリート官僚。プライドが高い上に感情的なところがあり、ドナンの後妻であるフィナに対しては一線を引いたような態度を見せる。また奔放なクリンの生き方に対して反発もあるのか、兄としての愛情深さを見せることもないようだ。

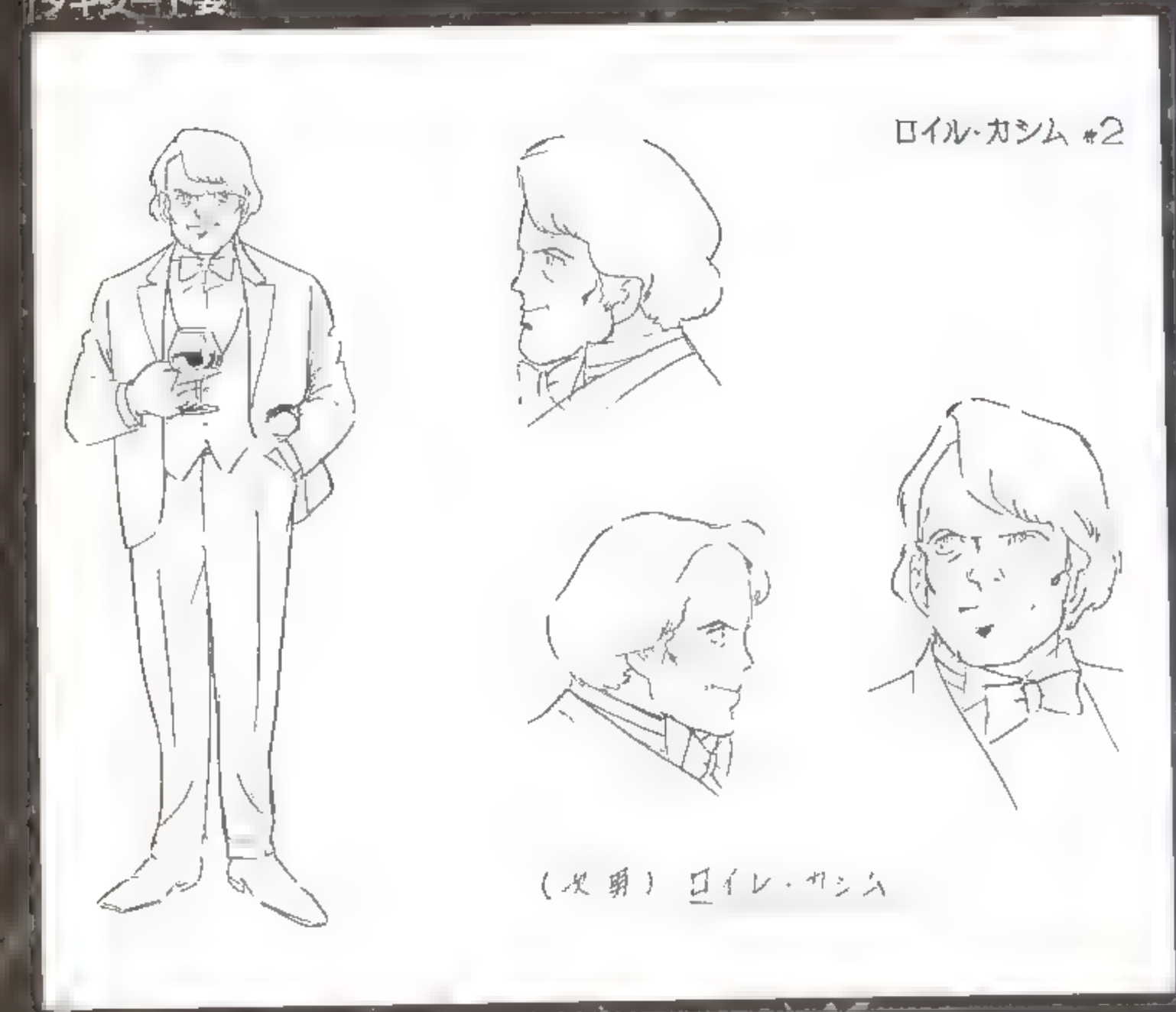
裏 ラナ

夫婦仲は壊れているのか冷たい間柄のようだ。

コート姿

ドナンを見舞うためにデロイアを訪れた時に着用。

タキシード姿



ドナンの壮行会でのタキシード姿。

ロイル・カシム

カシム家次男

25歳。カシム家の次男で総合商社RDカンパニーに勤める。偉大すぎる父親や、エリート面を吹かす兄の下で鬱屈して育ってしまったようだ。ラコックの真意を見抜けず利用され、ゲリラへの武器売買に手を染め、それをマスコミにばらされ社会的信用を失うこととなる。

◀設定補足▶
●ベビーチェア

サラ・ボイド

カシム家長女　レークの妻

27歳。レーク・ボイドの妻。理知的で快活な女性で、兄弟の中では一番クリンを心配している。レークとの間にふたりの子供がいる。継母であるフィナとの間は良好で、母親として認め愛情を持って接している。

ポーズ

ドナンの社行会でのドレス姿

表情

理知的で自信にあふれる表情。

サラとレークの子供たち

喧嘩もするが仲の良い兄弟のようだ。

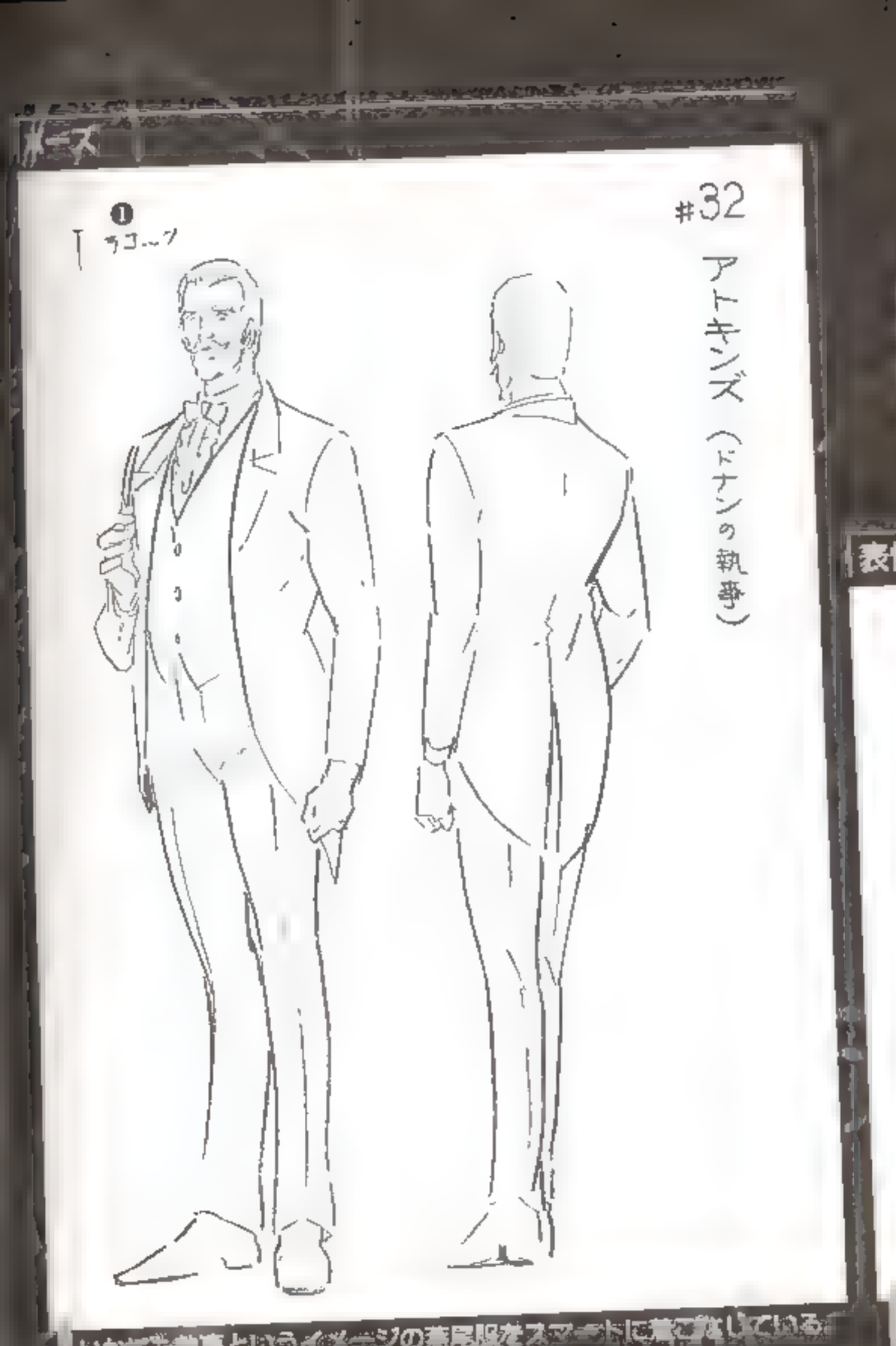
回想シーン

別荘での団らんシーンでの場面。

ワトキンス
カシム家の執事

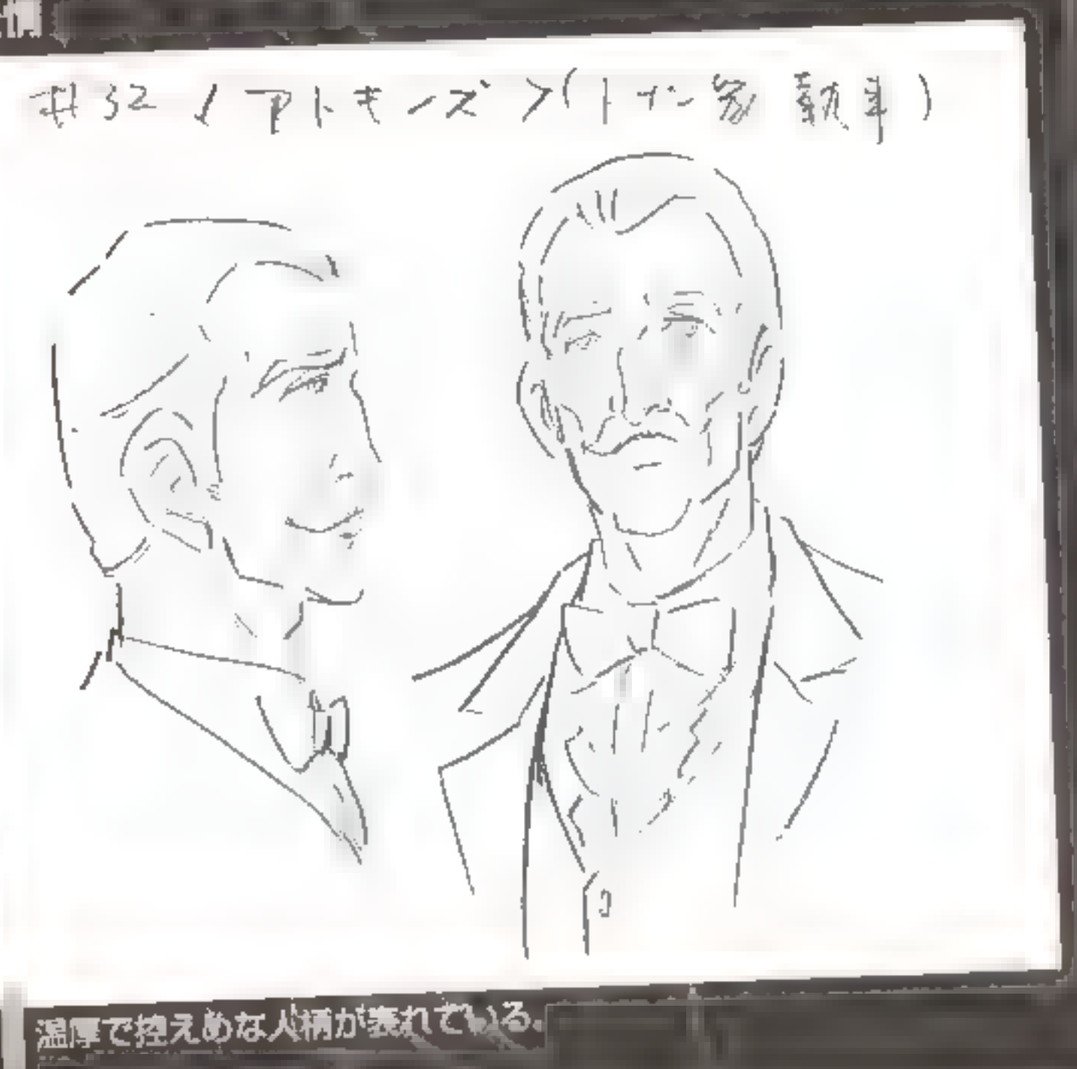
長年忠義を尽くしてきたドナンとカシム家に仕える執事。温厚で礼儀正しく、常に主人と主人家族のことを思いやっている。ドナンが倒れた際にも、真摯に努めて看病に当たった。ドナン亡き後はカシム邸で女主人となったアンナを支えている。初期設定では「アトキンス」となっていた。

ポーズ



いかにも執事というイメージの燕尾服をスマートに着こなしている。

表情

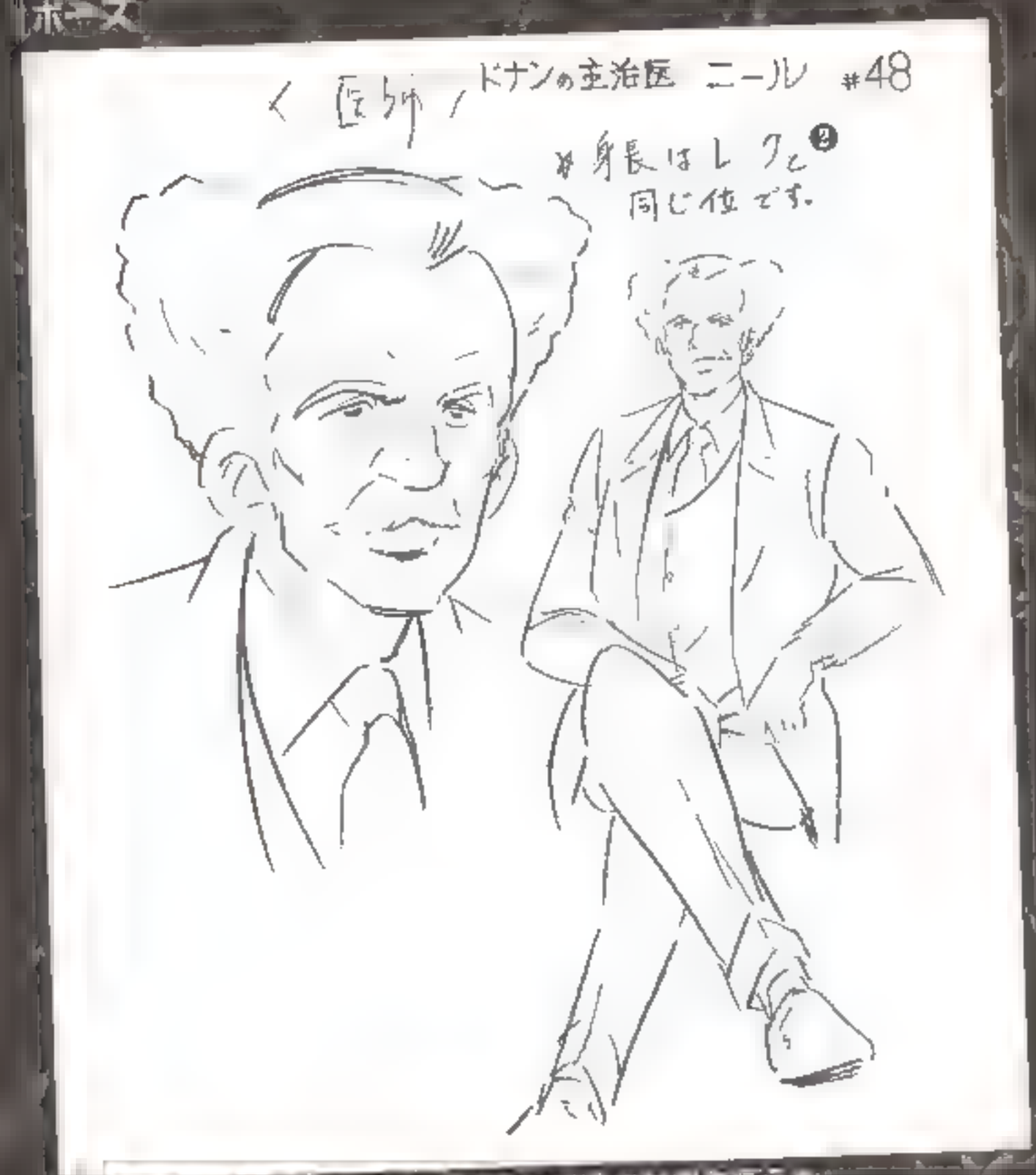


温厚で控えめな人柄が表れている。

ニール
ドナン・カシムの主治医

ドナンの主治医で、学生時代からの親友。部下や家族にも漏れない心の内や悩みなど、公私の別なく語り合える仲。定期診断でドナンの体調を把握しており、病状が悪化して余命が半年ほどであることを伝えた。デロイアでドナンが倒れた際には急ぎ渡航し、治療に当たった。

ポーズ



白衣をまとい医師としてドナンに対する配慮を伝えた。

防寒服

ドナンを北極ポートに移送するときに着用。

表情

ベテラン医師として冷静で穏やかな表情。

《設定補足》
●ラコック ●身長はレークと同じ位です。

植民惑星に上がる革命の狼煙

～デロイア独立前史～

S.C.153年、ついに地球連邦からの分離独立を果たした惑星デロイア。発見と開拓、そして植民地としての長きに亘る隷属。本稿ではデロイアが独立に立ち上がるまでの歴史経緯を追う。

地球連邦の誕生

人類の歴史は戦争――破壊と建設の歴史だった。古代世界に中世ヨーロッパ、二度にわたる世界大戦と東西冷戦下での代理戦争、文明や文化の繁栄には常に戦争の影が存在した。いや、繁栄こそ戦争の影なのもしれない。

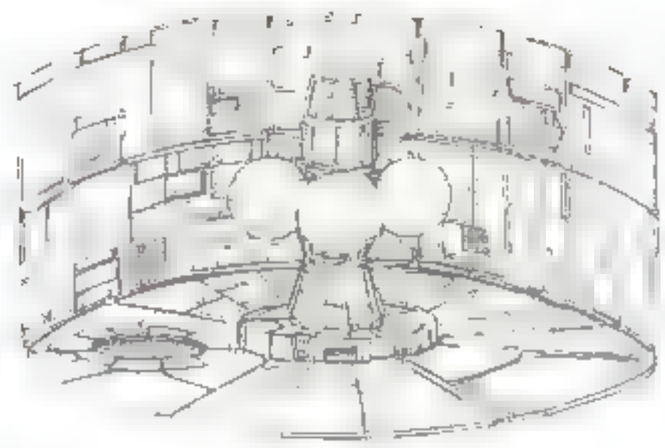
しかし20世紀の末、破壊と再生の限りなきローテーションにより文明の進化は限界に達していた。石油をはじめとする資源の枯渇という脅威が現実のものになりはじめ、また、自然環境の破壊による食糧生産量の減衰がそれまでの人類社会を根底から揺さぶりはじめたのだ。

そう遠くない未来、人類は溜まりに溜まったこれまでのツケの支払いのために破滅するであろうことは、誰の目にも明白だった。暗澹たる未来が世界を覆っていたとき、某国において恒星間における超光速航行を可能とするワームホールトンネル理論と、それに基づいた新技術が完成し、他の恒星系に資源を求められる可能性が生じた。

この技術を巡って主要先進国と発展途上国の間で高強度紛争が続発、事実上の第三次世界大戦――非核大戦にまで拡大した（ただ国際法的観点からは「戦争」ではなく、あくまで「紛争」である）。そして戦後、人類に残されたのは、戦争でさらに疲弊した地球だった。

事ここに至り人類は宇宙開発の必要性を再確認、他恒星系への進出という有史以来の大事業を成し遂げるための母体として、地球連邦を結成した。その結果、世界はメドール、マルドー、コホード、ミンガス、ローディア、テシオ、マランの7州に再編された。それぞれ首相を指導者とし、また、最高意志決定機関である連邦評議会へ議員を送ることで連邦の政治に参与する権利を得たのである。

こうして初めて統一政府を持った人類は宇宙開発に邁進、暦をワームホールポートの完成を以てスペースセンチュリー――S.C.に移行させた。この後人類はワームホールを使って10数年にわたる恒星系探査を開始、スタフェラスと命名された二重太陽系の中に資源が豊富で短期間での移民も可能な惑星を発見する



↑➡ワームホールポートと、その内部に設置されているワームホール発生エリア。乗客は宇宙船で地球からポートへ赴き、そこで専用宇宙船に乗り換える。

植民惑星に上がる革命の狼煙 ～デロイア解放前史～

植民惑星デロイア

S.C.17年、人類はまずデロイアと名付けられた惑星の近傍にワームホールトンネルを設置、有人調査団を送りこんだ。この調査の過程でデロイア星の持つひどく特殊な性質、つまり惑星を囲む強いバン・アレン帯を有するがために、衛星どころか高々度の飛行が難しいということが明らかになった。また二重太陽系の影響で電離層の乱れが激しく、電波による通信の範囲はひどく限られてしまうことも分かった。地表も砂漠や険しい山岳地帯が多く決して緑豊かとは言い切れなかったが、それでも銅、鉄、鉛、金、ボーキサイトなど地下資源は豊富であろうとの調査結果が報告されるなど、植民星としての条件は十分過ぎるほどに満たされていたため、植民は速やかに開始された。

時にS.C.22年、スタフェラス二重太陽系を発見したのがメドール州の放った無人探査機だったことから同州に開発の優先権が認められ、メドール系企業と公募による移民団が第一次開拓団として入植を果たした。開拓団はまず調査団が建造した北極基地（第6軍が駐留する北極基地とは別物、後に機能が整備され北極ポートと呼称変更された）を起点にメインランド南部の沿岸部に開拓都市を建造、ここに植民地行政府を設置した。後のカーディナルである。開拓団はカーディナルからさらに各地へ分散し、デロイアの開発をはじめた。

だが植民星としての条件は満たされているといっても、収穫を得るにはそれなりの努力は必要で、特に地球から持ち込んだ農作物を根付かせるには長い時間がかかったという。植民星開拓は言うほど簡単なものではなかったのである。特にメインランドは砂漠地帯が多く、大陸北部には入植から120年以上の時を経てもなお、手つかずの荒涼とした土地が広がっている。

第一次開拓団のプログラムがステージ2に移行するとほぼ時を同じくして、倍の規模を有する第二次開拓団がデロイアに降下した。この中にはコホード、ミンガス、ローディア系の企業も含まれており、彼らの多くは既得権が形成されつつあるメインランドを避けてパルミナ大陸に渡り、開拓都市の建設を進めていった。

ここでも地球産の農作物を根付かせるまでに大きな苦労が伴ったが、それでも農業従事者たちの努力の甲斐もあって収穫高は年々増え続け、開拓開始から50年も経つとデロイアの食糧の輸出入の割合は逆転の様相を呈しはじめた。それまでデロイアの食糧の多くは地球からの輸入に頼っていたのだが、収穫高が増えた結果、地球への輸出率の方が上回るようになったのだ。

カーディナルの植民地政庁は、これを以て開拓の初期目的は達成されたとの声明を発表した。農業ばかりでなく鉱物資源の採掘も軌道に乗り、ボナールなどは地球に勝るとも劣らない工業都市に成長しつつあった。公共事業の成功に伴い生活も向上していった。開拓の苦労が実りつつあることに多くの移民が歓びを感じ、労働意欲は否が応にも高まっていった。この時代が、植民地デロイアの最も幸福な時代だったのかもしれない。

だが、そうした幸せは長くは続かなかった。食糧輸出の利益率の上昇と財界からの要請を受けた連邦評議会は、開発の主導権を各州政府から民間企業に移管する法案の検討を開始した。デロイアの開拓に投入された資本は名目上は地球連邦から供出されたことになっていたが、実のところそれは財界からの借入金、しかも信用貸しに近いものであり、デロイアからの利益が生じるようになった時点で、彼らは投資を回収すべく評議会議員たちに働きかけはじめたのだ。

この動きに対して連邦評議会の内部には、利益至上主義である民間への移管を疑問視あるいは危険視する声も少なくなかったが、各州政府自体がもはや企業の支持なくしては成り立たない現状においては、抗すべくもなかった。

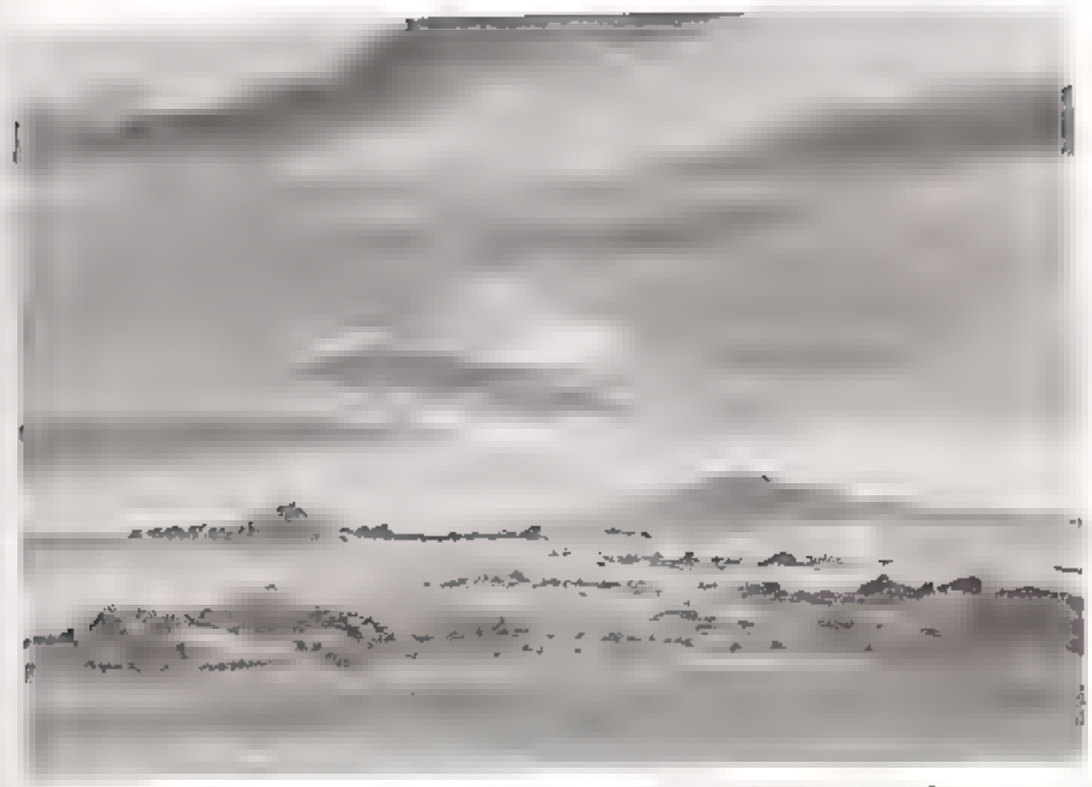
デロイア植民法

植民が開始されて80年、デロイアが食べ頃になったと判断した資本家たちは、その牙を剥き出しはじめたのである。デロイアの開拓は政治主導で行われ、土地の所有権はその性格上、各州政府にあった。移民は州政府からの借入金で土地を購入するという形で開拓に従事、少しずつ返金を行い完済した際には名実共に自分の土地を持てるということを励みにしていた。

しかしS.C.107年、連邦評議会においてデロイア開拓史上最大の悪法と呼ばれた「デロイア植民法」の施行が決議された。この法に基づき、それまで各州政府が持っていたデロイアの土地所有権を払い下げられた民間企業は、政府の外郭団体というカテゴリーから解き放たれ、改めて地球資本家が支配する民間企業として再出発した（それでも当然のことながら役員には天下り役人が多く、監督省庁との太いパイプは維持された）。

さらに彼らは一気にそれまでの植民地開拓に要した資本の回収を開始、支払いの終わっていない移民を債務者に仕立て上げ、彼らの持つ土地をハゲタカのように奪っていった。この結果、特にパルミナの人口の8割を占める農業従事者のうち、実に9割が農地を企業に買い叩かれ、事実上の小作農に転落してしまった。独立戦争においてはパルミナの農民ゲリラが大きな役割を果たしたが、彼らが不当に搾取される原因となったのは、この希代の悪法にほかならなかった。

この悪法に対し多くの移民――いまやデロイア人となった労働者や農業従事者は怒りを燃やしたが、それらが暴動へと発展することはなかった。こうした事態を予期していた連邦評議会は制定発布以前にデロイアへ各州混成による特別編成軍を送りこみ、公布後、暴動が発生した場合には力でねじ伏せようと目論んでいたの

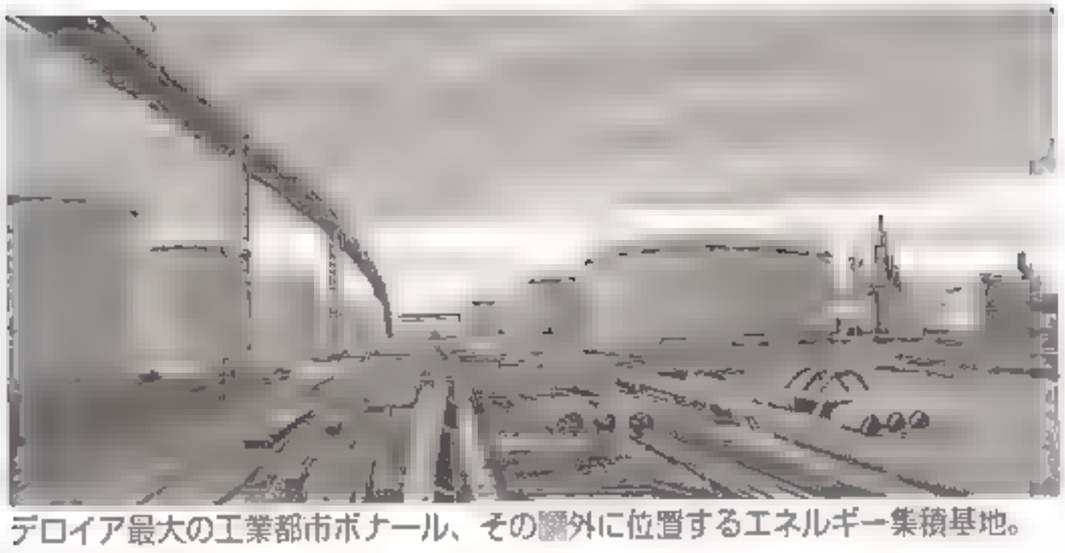


荒涼とした惑星デロイア。やがてこの星は人類の生命線になっていく。

だ。圧倒的な武力を前に人々は口を閉ざし、小規模なデモがいくつか行われるだけで終わった。

その後混成軍の中心を務めていたメドール州は連邦評議会に対し、植民地の治安維持を目的とした第8軍の設置を提案、これを認めさせた。第8軍と言えばそのほとんどをデロイア人で構成されていたことで知られているが、編成当初はメドール州第6軍から移籍した地球人が士官以上のポストを占有し、デロイア人は下士官と兵卒のみという特殊なものだった。これは当時デロイアには士官教育を行う機関が存在しなかったためであり、いわば状況における必然としての帰結だった。だがデロイア人士官が増えていった後も慣例として是正されず、長い間、地球人士官に比べてデロイア人士官兵卒はさまざまな点で差別を受けるという状況は続いた。

さて、デロイア植民地軍ともいうべき第8軍の設置後、植民政策の制度化を進める連邦評議会は次に第8軍から行政官を選出させ、デロイアを構成する5つの自治区にそれぞれ配置した。これは市長が公選制となり、連邦の影響が薄れることが懸念されたために創設されたポストだった(最初に公選市長が生まれたのは、デロイア屈指の工業都市ボナール)。行政官は自治区内に駐留する軍の最高司令官であり、また、民政の最高責任者として市長に命令する権能を有していた。つまり市長が反地球的政策を選んでも、行政官権限によって覆すことが可能としたのだ。


デロイア最大の工業都市ボナール、その郊外に位置するエネルギー集積基地。

これは強権政治システムに他ならなかった。

事実表立ってはいなかったものの、行政庁は地元出版社への「指導」あるいは「要請」という形で言論を統制し、市民の権利を迷惑行為から守るという名目で集会などの制限を進めたのである。だがこうした処置は多くのデロイア人の怒りを買い、狙いとは正反対にゲリラ勢力を生む遠因になってしまった。

胎動〜CBアーマー開発計画〜

S.C.140年代、資源豊かな植民星デロイアは痩せ衰えた地球を支える、一大プランテーションへと成長していた。

当初、デロイアからの資源の採取・加工・製品化・輸送・販売は、地球に本拠を持つ企業が各州政府のバックアップの元に、手に引き受けていたが、民族資本ともいうべきデロイア系企業が体力をつけて市場への参入をはじめたことから状況に変化が生じはじめた。

それまで地球系企業は地球への輸出を事業の核に置いており、デロイア市場の育成にはあまり積極的ではなかった。これはデロイア開拓の最大の目的が地球の資源枯渇を救うことにあったためで、政策の基本方針がそうである以上、まず地球への輸出が優先されるのは当然のことだった。地球はそれほど疲弊していたのだ。

対して地球市場へ参入できるほどの体力も商品開発力も持っていなかったデロイア系企業は、自らがデロイアに市場を形成することに生きる道を見出した。

購買力を持った民衆の育成は容易ではなかったが、各行政府の協力を得ることに成功した彼らは、デロイア人特有の粘り腰の強さと克己心で長い時をかけてこれを成し遂げた。市政運営に大きな権限を持つ市長が公選制になったこ、とも、この成功に大きく影響している。

こうしてデロイアに購買力を持った中産階層が生まれ、徐々にではあるがデロイア市場が生まれるに至った。むろん、そうはいっても主産業のほとんどは地球系資本に牛耳られており、市民の生活レベルもさほど高いとは言い難く、中産階層の誕生はデロイア人の中にさえ経済格差が生じたことを意味した。チャンスに恵まれた者は富み、持たざる者はより貧窮していく。歴史上、すべての国が通ってきた道を、デロイアも歩きはじめたのだ。貧困は常に革命の苗床であり、権利意識という肥料を与えられたとき、はじめて芽吹く。

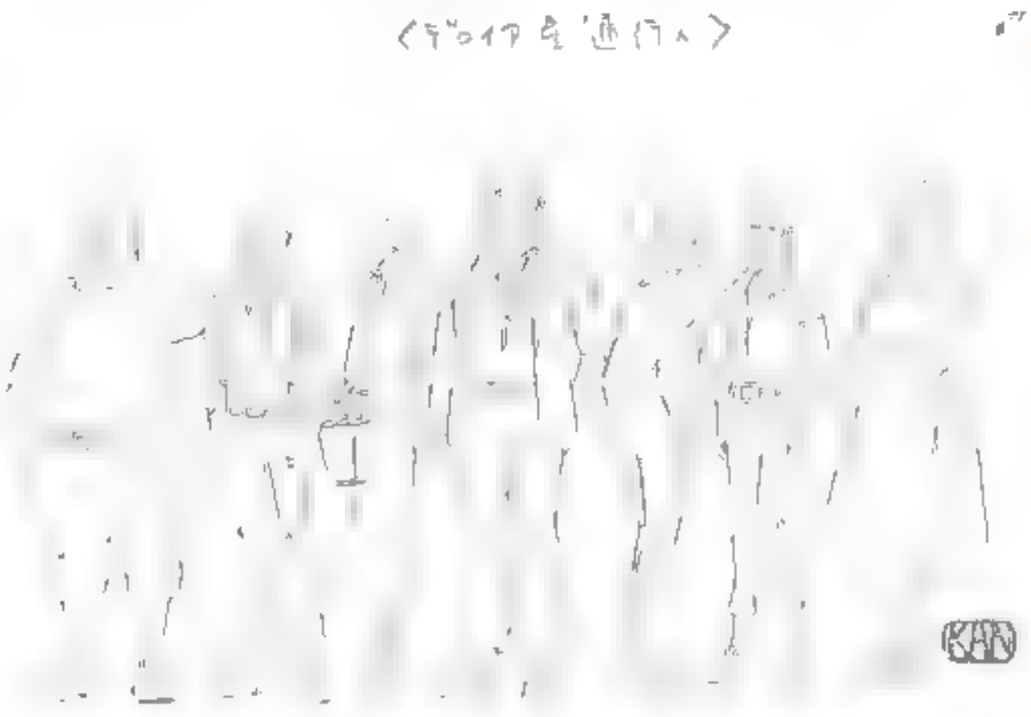
貧農の子でありながら苦学して大学へ進み、歴史学の博士号を取得したデビッド・サマリンは、まさにこの「肥料」を民衆に与えた最初のひとりだった。

彼は大学院を出た後に刊行したデロイア史観ともいうべき歴史書が、当局によって発禁処分を受けたことを契機に地下活動へ身を投じた貧困層の多いカーディナル旧市街に身を潜めたサマリン博士は独自の政治論に基づき、まず都市部の低所得労働者層の間から独立運動を開始した。

当初のそれは、運動と呼ぶにはあまりにもささやかな政治勉強会のようなものだったが、彼は革命や独立は民衆が自己の権利を自覚し覚醒しなければ成し遂げられないと考えており、この勉強会はそれを促すための種蒔きの場だったのである。実際、勉強会で歴史や政治を学んだ人間の多くが、後に独立闘争にさまざまな形で身を投じたと言われている。

やがて活動が順調に進んでいると判断したサマリンは次の段階として、彼の指導を受けている独立運動グループを介して、いまやデロイア財界と呼ばれるまでに成長したデロイア系企業の経営者たちにコンタクトを取りはじめた。

彼らの多くは関税率が地球側にあまりにも有利な現状に強い憤りを感じており、デロイア人であるというドメスティックな理由からだけで



デロイア星の平均的住人たち。地球に比べて所得高は低く、服装も地味である。

植民惑星に上がる革命の狼煙 ～デロイア解放前史～

なく、事業を拡大していくという企業論理の面からもサマリンの独立運動に賛意を示した。また、ここで培った人脈が、後のダグラム建造計画を進めるにあたって大いに生かされたという。

こうして啓蒙された労働者は自分たちが不当に搾取されていることを自覚し、中産階級や事業家たちは財力に見合った政治を得る権利を求めはじめた。それは、かつて地球上界が辿ってきた近代という、より進歩した時代に変遷したときに見せた様子を彷彿させた。権利の請求や不当な待遇の改善要求が、やがて独立を求める民衆運動に発展していくのは火を見るより明らかだった。デロイア各地で地球からの独立を謳う政治結社が雨後の筍のように生まれ、大きなうねりを生み出しつつあったのである。

だがこうしたデロイア民衆の動きに、地球連邦評議会は力を背景にした威嚇的政策で対応してきた。軍はデロイアの治安維持を担う第8軍に、実力化されたばかりの新兵器CBアーマーを大量に配備したのである。当時のCBアーマーは対人戦闘を主任務としており、配備を進めた連邦の意図は明々白々だった。

だがCBアーマーの第8軍への大量配備は、思惑とはまったく別の効果を生じさせた。サマリンたち独立派に「力」の必要性を強く認識させてしまったのである。

この頃になるとサマリン博士は怜悧な思考に理論的で理解しやすい言説、誰の意見にも耳を傾ける度量の深さなどから、独立運動に欠かせない人物になっていた。

後に人民解放軍の最終戦略となる北極ポート制圧は、実はすでにこの時代から唱えられていた。サマリン博士は独立の要は地球からの干渉を断ち切れるか否かに掛かっており、その実現のためには北極ポートを抑えることが至上命題であると確信していたのである。

しかし第8軍の監視の中では武器を得ることは難しく、さらに北極ポートはメドール州第6軍隷下にあるデロイア派遣軍（司令はブレナー中佐）に防衛されており、それを打ち破ることなど不可能に近かった。

たとえ武器を入手できても良くて自動小銃、せいぜい装甲車が限界である。最新兵器であるCBアーマーを擁する連邦軍に立ち向かうなど、ナンセンス極まりなかった。が、この膠着した状況を動かすニュースが入ってきた。

強い帯電磁性質を持ったガス星雲〝Xネブラ〟の存在が確認されたことに付け加え、数年後にはスタフェラス太陽系を覆うであろうとの観測結果が発表されたのだ。Xネブラがコンピュータ、特に通信機材などの電子機器の性能を著しく低下させることを知った彼らは、これに対応したCBアーマーを独自に開発し、武力闘争における切り札にしようと考えたのだ。

むろんCBアーマーの開発生産能力など、独立派組織どころかデロイア自体になかった。そこでサマリン博士はコネクションを使って武器メーカー・アイアンフット社に接近し、極秘に技術協力を依頼した。アイアンフット社は反メドール州で知られるミンガス州に本社を持っており、また、CBアーマー開発にメドール州のメーカーであるソルティック社に水を空けられていることから、新型CBアーマーが完成した際にはその実働データの一切を渡すという条件で協力を承諾した。

こうしてXネブラの観測データが地球に、新型CBアーマーの諸元や検討図面がデロイアに秘密裡に送りこまれ、検討が両星で繰り返されていった。並行してサマリン博士は独立までのタイムテーブルを作成、S.C.153年夏に決起することを定めた。これはS.C.152年の秋頃からデロイアがXネブラに覆われるとの予測のもと、万全を期する意味もあってその翌年に決定されたのだ（夏期を選んだのはカルナック山脈越えを考慮に入れていたため）。

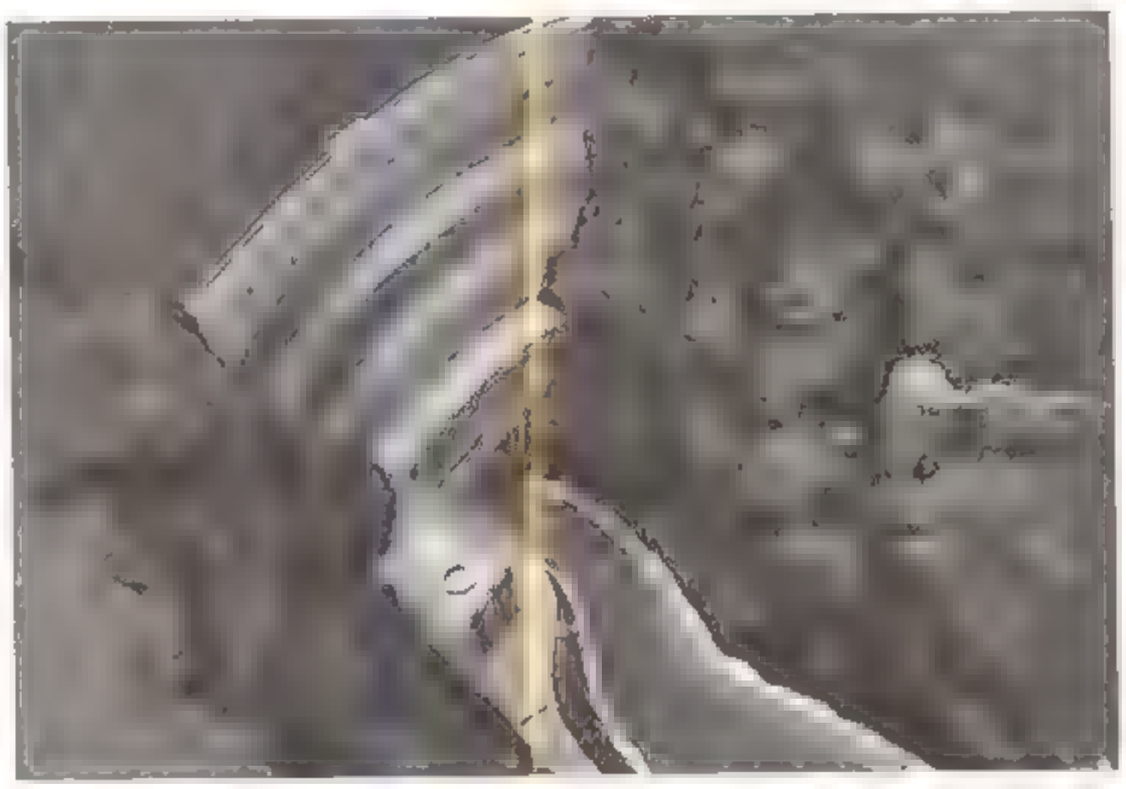
力には力を。対等な話し合いや関係は、互いの力が拮抗したときに初めて結ぶことができるとサマリン博士は考えていた。新型CBアーマー……ダグラム建造計画は実現に向かって順調に進んでいたが、CBアーマー1機では話にならない。ダグラムを量産し、且つまた装甲車輌や武器などを大量に調達することも必要だった。

そこでまず組織の拡大と資金の調達を推し進めることが最優先事項として浮上した。とりあえずサマリン博士は連携している各組織に自重を求め、Xネブラ対応型CBアーマーを量産するまで当局の監視の目から逃れるため地下に潜ることに決定する。

だが歴史の皮肉なのか、サマリン派の動きが非活性化していくのと反比例するように、他の独立ゲリラ組織の行動が激しさを増していった。なぜそうなったのか、もはや知る術はないが、事態は思わぬ方向へ進んでしまう。

街頭でのアジテーション、ビラ撒き、過激なデモは、地球側にこれまでにない勢いでデロイアに独立の機運が高まっていると認識させ、ある策謀の引き鉄を引かせてしまったのである。

北極は国際法上デロイアではなく、地球連邦の直接管理下にある。メドール州第6軍からの派遣軍が守備にあたっている。

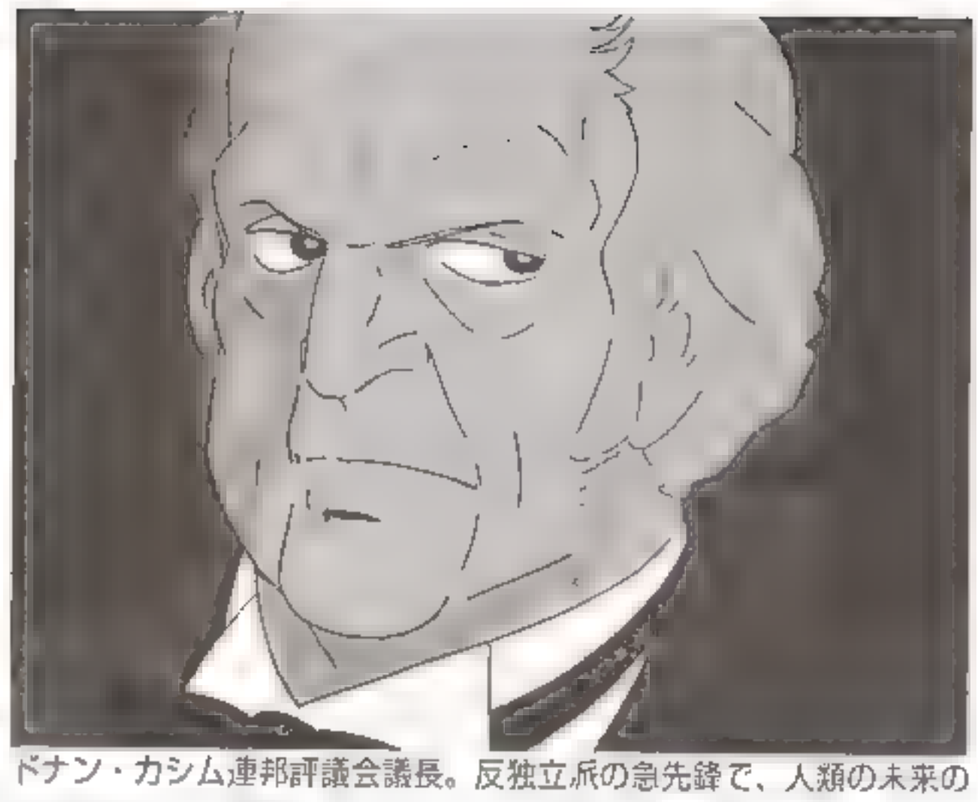


ダグラムの開発、建造が行われたダム。カーディナルの郊外に位置している。

蠢動〜独立へのカウントダウン〜

絶え間ない騒擾事件の多発に、これまでにない危険なものを感じ取ったドナン・カシム地球連邦評議会議長は、デロイアを植民地から州政府に格上げすることでデロイア民衆の不満のガス抜きを行おうと考えた。すでに評議会の一部には、地球に匹敵する経済力を持ちつつあるデロイアの独立は歴史の必然だと見る勢力が少なからず存在していたが、地球人類存続のためにはデロイアは絶対に必要だと考えるドナン議長は、同時に彼らの排除を決意する。

なぜドナン議長はデロイアの独立を認めないのか？　よく知られた理由のひとつに、資源問題が挙げられる。地球の資源はすでに枯渇状態にあり、いまや食糧資源の40パーセント、鉱物資源の80パーセントをデロイアからの輸入に頼っていた。地球はデロイアなしでは立ちゆかなくなっていたのである。そのような状況下でもしデロイアの独立を認めたらどうなるか？



ドナン・カシム連邦評議会議長。反独立派の急先鋒で、人類の未来のためにあらゆる手段を用いてデロイア独立阻止を画策する。

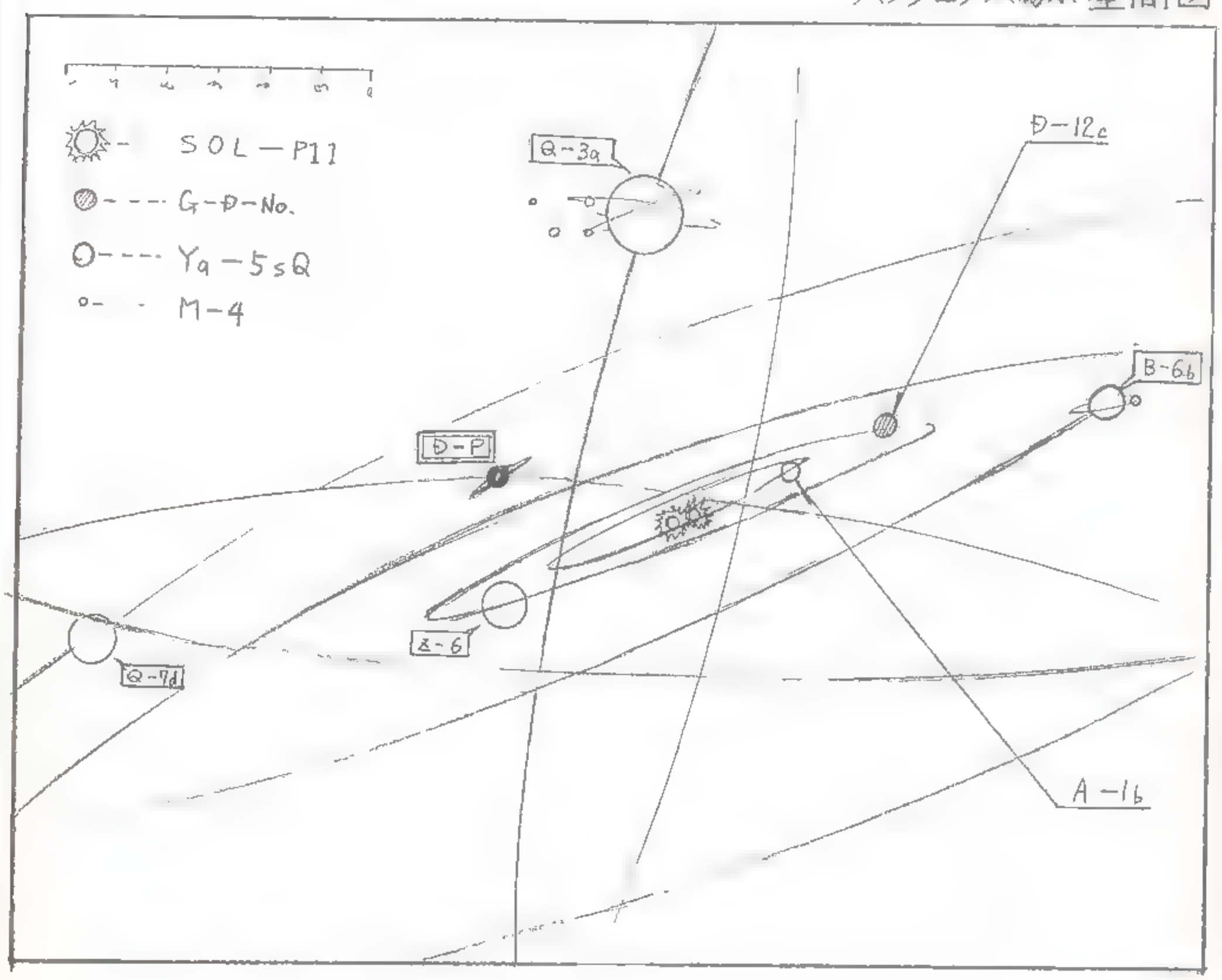
ひとりではできない喧嘩もふたりならできるようになると生前のドナンが語った様に、連邦を構成する一州となるならともかく、主権を持つ独立国家になることは、地球の生命線たるデロイアに連邦と対立する可能性を生じさせ、最悪の場合、国交断絶という事態に陥ることもあり得るのである。もしそんなことになったら地球は破滅してしまう。また、国交断絶まで行かずともデロイアの独立により地球に有利な貿易処置が撤廃されただけで、原料の高騰を招くことになり地球人の市民生活は大きな打撃を被ることになるだろう。地球人類48億に責任を持つ立場にあるドナンには、到底容認できることではない。ゆえに彼はいかなる手段を以てしても、デロイアの独立を阻止しようとしたのだ。

実はデロイア側にとっても地球との断交など百害はありこそすれ、なんの利益もなかった。なぜなら前述したようにデロイアの市場はまだまだ脆弱であり、地球のそれと肩を並べられるようになるまでには、まだまだ大量の資本と時間が必要なのである。となれば、デロイアが経済成長するには地球という成熟した市場の存在が欠かせないということが理解できるだろう。そしてデロイア経済が地球と張り合えるほどに成長した頃には、経済の相互依存の深化は進み、お互いを欠かせないパートナーとして認めているに違いない。

むろんこれは経済上のことであり、政治はそれだけでは動かない。だが経済なくして政治が動かないということも、また動かし難い事実なのだ。また、経済的相互依存が深まれば、国交の断絶や戦争といった極限状況は生じ得なくなることは、歴史が示している。

この点においてドナン議長の考えはナンセンスとまではいかないまでも、杞憂に等しいものだった。あえて独立を認め、その上で利益を追求すれば良いとするコホード、ミンガス、ローディア二州の考えこそ現実的なものといえる。しかし――。しかし辣腕で鳴らしたドナン・

スタフェラ太陽系 星間図



カシムともあろう政治家が、この程度のことに気づかないなどありえるだろうか？

答えは否、である。彼がデロイア独立を認めない真の理由は、それだけではなかった。より重要な問題が隠されていたのである。

連邦の重要機密として一部の高官にしか知らされていなかったが、スタフェラス二重太陽系には第7惑星デロイアの他に、3つの有望な未開拓星があり、特にその内のひとつ、デミロスG2（後にミラネードと命名）は5年後には開拓を開始することが可能だとされていた（ドナン議長の死後に機密解除され、続いて地球・デロイア和平交渉の俎上にのぼったことから知られるようになった）。

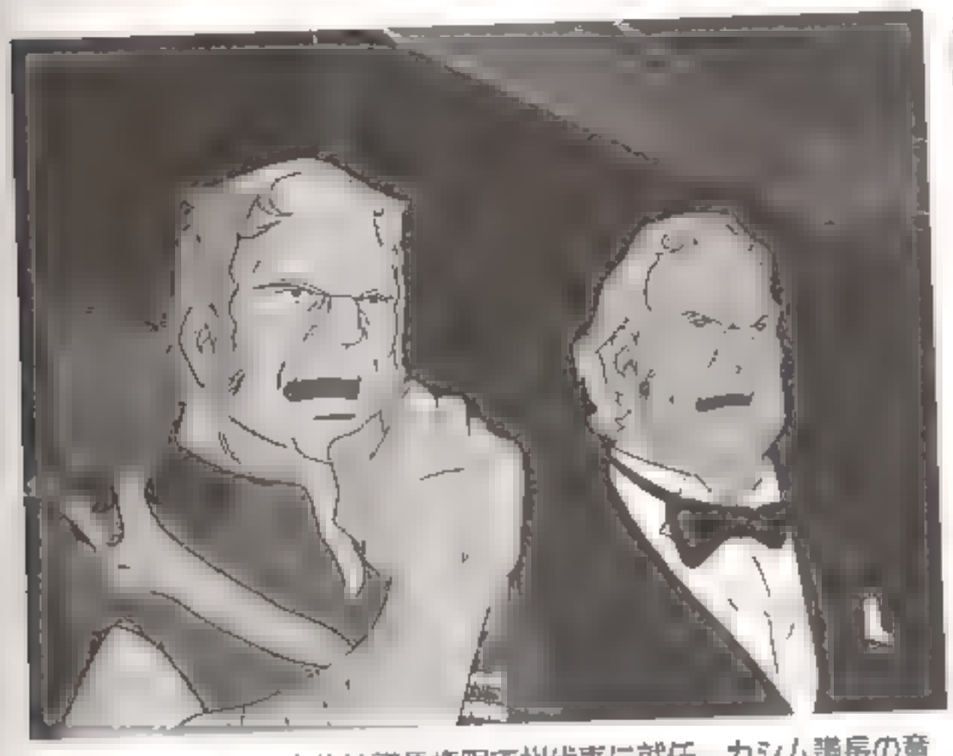
偽りの決起

デロイアの州昇格や独立を主張する評議員の排除を画策するドナン議長は、第8軍司令部付参謀のフォン・シュタイン大佐を共犯者として選ぶと、補佐官ヘルムート・J・ラコックを使って密かに陰謀を推し進めていった。フォン・シュタイン大佐が選ばれた理由は、デロイアではなくメドール州軍士官学校を卒業するなど、地球での生活が長く軍ばかりでなく政財界にも友人や知己を多数持っているなど、州代表に就任させた場合、なにかと便利だと思われたからだと推測される。秘密裡にラコック補佐官の接触を受けたフォン・シュタイン大佐は計画への参加を承諾、S.C.152年10月1日、第8軍司令ダンロック中将に決起を迫り、拒否されるとこれを射殺した。温厚で学者肌の中将は、日頃独立派将兵たちから「おっとり爺さん」と揶揄されており、フォン・シュタイン大佐を首魁とする決起派が中将射殺の報による混乱を最低限に抑え込むことは容易だった。

第8軍司令部決起のニュースは瞬く間にデロイア全土に広まり、特にカーディナル周辺の部隊からは続々と賛意を示す将兵が合流を開始した。決起の翌々日、フォン・シュタイン大佐はテレビ放送を通じて自らを独立正規軍と名乗り、デロイア独立を宣言した。

だがこれは罠だった。軍司令部に乗喰う独立派、とゲリラ組織を浮き足立たせ、次いで逮捕し壊滅させようという目論見だったのだ。同時にカーディナルで開催中だった連邦評議会を制圧し議員たちを逮捕軟禁、こちらではドナン議長が独立派の選別を行った。

敵味方の峻別を終えたことをドナン議長から知らされたフォン・シュタイン大佐は、地球から送りこまれてきた救出部隊の議事堂突入に合わせて独立派議員を拘束、やって来たラコック補佐官や記者の前で「カーディナル事変の真相」を語りはじめた。自分の真の願いは分離独立ではなく、地球第8番目の自治州として評議会に議席を持つことだと語る大佐に対し、ドナン議長はその権限で州立化を約束、事変終結の10月6日にデロイアは正式に自治権を持つ州に昇格した。



フォン・シュタイン大佐は議長権限で州代表に就任、カシム議長の意向を受けてゲリラ弾圧を行った。

ドナン議長の策謀は図に当たり、多くの反地球運動グループが壊滅して独立運動は大幅に後退した。サマリン派グループはちょうどカーディナル郊外のダムを利用した秘密工場で、念願のXネブラ対応型CBアーマー・ダグラムの1号機が完成、秘かに砂漠地帯で試験運用を行いその実働データを収集しようとしていた矢先だったため、予期せぬ事態の推移に少なからず動揺が生じた。彼らはスケジュールを前倒しし、設計図を含めた量産に必要とされる資料をすべて、量産工場のあるボナール市に移動させようと準備を進めていった　だが工場を憲兵隊が襲撃、速やかに工場を制圧しダグラムを接収した。居合わせたサマリン博士も逮捕され、偽の転向声明を出された挙句にハルツディーグ海に面するハラフ軍刑務所に収監された。

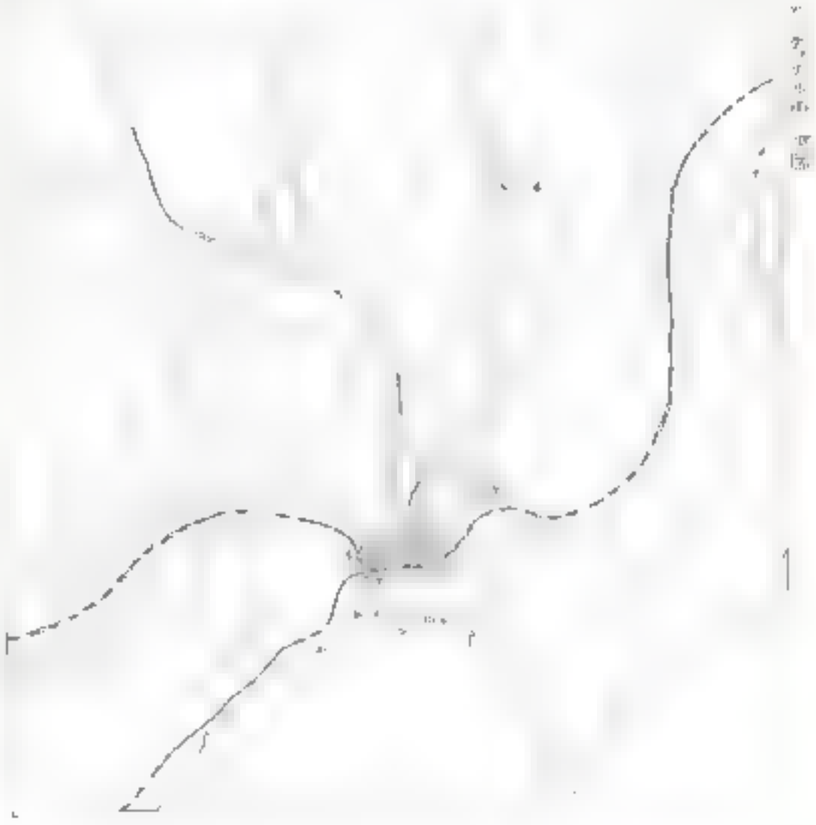


FIGURE ボナール市 地図 n18

デロイア独立もここに潰えたり、と思われたが、あるゲリラグループがカーディナル基地からダグラムを奪回、連邦軍の追撃を振り切ってボナール市、スパ市と転戦し、細々とながらも独立運動の灯火を守っていった。

彼らの闘争は地球支配とその代行者たるフォン・シュタイン大佐に不満を持つ市民の賞賛を得ることに成功するものの、S.C.153年2月17日、独立運動を非合法とするデロイア自治州法が発布され、連邦に対する従属度はますます高まっていった。スパ市で開かれたゲリラ会議も続く戦線を作り出すまでには至らず、連邦軍の攻撃を受けたため、結論がでないまま解散せざるを得なかった。

以後ハラフ軍刑務所から救出されたサマリン博士指導の下、アンディ盆地で人民解放軍が結成されるまで、独立派ゲリラ組織にとっての忍従の日々が続くのだった。

ダグラム用語集

本稿では、ダグラム世界への理解を容易なさしめるために適当と思われる用語をピックアップし、解説を行った。

■アンディ鉱山

コホード、ミンガス、ローディアの反メドール三州が経営する、バルミナ有数の鉱山。周囲を険しい山に囲まれた広大な盆地に位置しており、市街地及び別荘地も存在する。この盆地に進入できるルートは限られており、鉄道が最大の市民の足あるいは外部との連絡路になっている。

アンディ鉱山市街を鳥瞰したもの。山側には工場が見える。クリンたちはこの街でひとときの休暇を過ごした。

■Eガン

リニアガンを歩兵用火器にまで小型化させたものを指す。「太陽の牙」のメンバーが使用していたものは試作品で、劇中世界ではおそらく最も先進的な歩兵用火器だと思われる

■ウルナ基地防衛戦

人民解放軍と合流したウルナ基地叛乱部隊を、連邦軍が制圧しようと生起した戦い。連邦軍CBアーマー25機（24ソルティック含む）と解放軍CBアーマー9機による、独立戦争史上初めての大規模CBアーマー戦が繰り広げられた。

■APU通信

ラルターフが勤める、地球に本社を持つ大手配信会社　劇中ではカーディナルとトガの支局が登場した。サマリン博士との太いパイプを持つラルターフのおかげで、幾度もスクープニュースを掴むことができた。

■Xネブラ

強い電磁力を帯びたガス星雲で、あらゆるコンピュータに影響を与え、その性能を低下させる性質を持っている。S．C．152年にデロイアはこの帯電磁ガス星雲に包み覆われたため、惑星全土のコンピュータの機能が低下してしまい、さまざまな弊害が生じた。

■Xネブラ対応型

コンピュータの機能を極度に低下させる、Xネブラからの影響を防ぐ技術が施された機体。連邦軍も実用化寸前までこぎ着けていたが、デロイアに先を越されてしまった。連邦軍がXネブラ対応型を完成させるのはブロックヘッドのC型からで、その後はアイアンフットを皮切りに、24ソルティックやビッグフットなどが開発・実戦投入された。

■カーディナル

メインランドの内海に位置するデロイアの首都。市を横断する川はカーディナル川と呼ばれ、行政庁及び議事堂は中央の中洲に位置している。東の旧市街は労働者階層の住宅が多く、反対側の新市街は地球系企業などの現代的なビルやホテルが建ち並んでいる。

24ソルティックことコーチマspl。この機体はターボザックを装備することによってXネブラ環境に対応した。

■CBアーマー

S．C．140年代に実用化された、歩行式戦闘兵器。「アイアンコンバット」という名称で開発が進められ、まず4脚式のクラブガンナーが実用化された。

CBアーマーの特徴には、それまでの二次元移動に限定された戦闘車輌に対し、陸戦兵器でありながら脚部を用いた三次元機動（跳躍）が可能となっており、優位を持っていることが挙げられる。「脚であることは絶対的な条件ではなく、事実、ソルティックやブロックヘッドなど、脚型が登場した後でも、多脚型がなくなることはなかった。

研究講座 ダグラム用語集

■人民解放軍
サマリン博士を指導者に、独立派ゲリラを母体に結成された軍事組織。実際の指揮官は参謀であるザルツェフ少佐で、後にザナ中尉たちウルナ叛乱部隊がその幕下に加わった。組織の内容としては、軽武装とゲリラ戦をモットーとしたアンディ鉱山での結成直後の初期と、重武装と正面戦闘が可能になったウルナ叛乱部隊合流後の中期、そして人民解放政府が上位組織になった後期に分けられる。北極の戦いの後に武装解除、カーディナルでのパレードを以て正式に解散となった。旧第8軍の将兵はそのまま、新たに建軍されたデロイア治安軍に編入された。

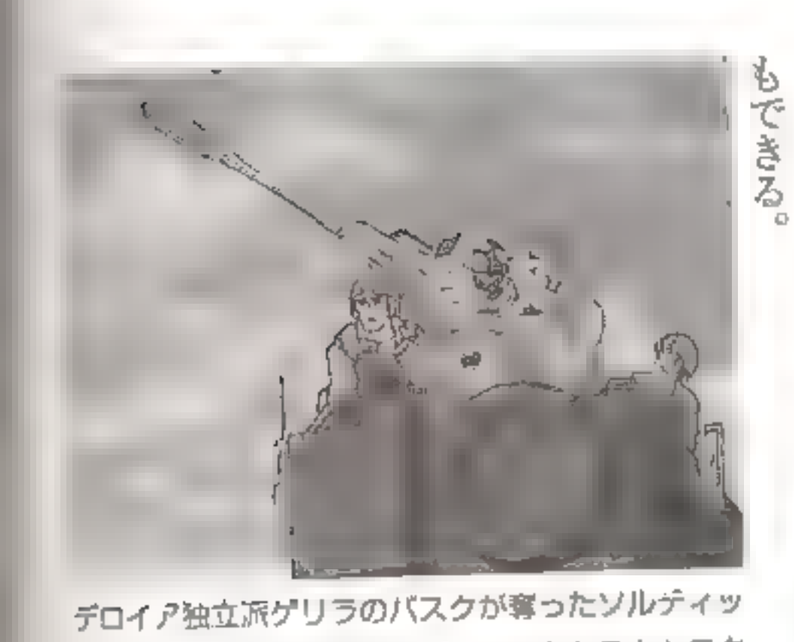
■人民解放政府
人民解放軍がドガ市を陥落させた後に、サマリン博士を代表として発足した政府。フォン・シュタイン政権を認めず、デロイア州政府撤廃と地球からの独立達成を目標に掲げた。その後、外交を担当していたカルメルがサマリン博士を追い落とし代表となり、地球との講和の仮調印を行いデロイア唯一の政府になる。

解放軍はバルミナ政庁を押さえ、サマリンによって人民解放政府樹立の宣言がなされた。

■ソルティック
史上初の二脚歩行式CBアーマー「H8ラウンドフェイサー」を開発したメーカー。よほど衝撃的だったのか、社名がそのまま機体の通称になってしまった。そのため「H102プッシュマン」もソルティックと呼ばれた。

クラブガンナーに替わる主力CBアーマーとして連邦軍に配備され、ゲリラたちと幾度となく戦った機体である。

■対アーマーライフル
Eガンの一種で、外部の電源パックを銃本体にケーブルで接続することで射撃可能となる。高い貫徹力を誇り、CBアーマーのキャノピーだけでなく装甲が施された機体を撃ち抜くこともできる。

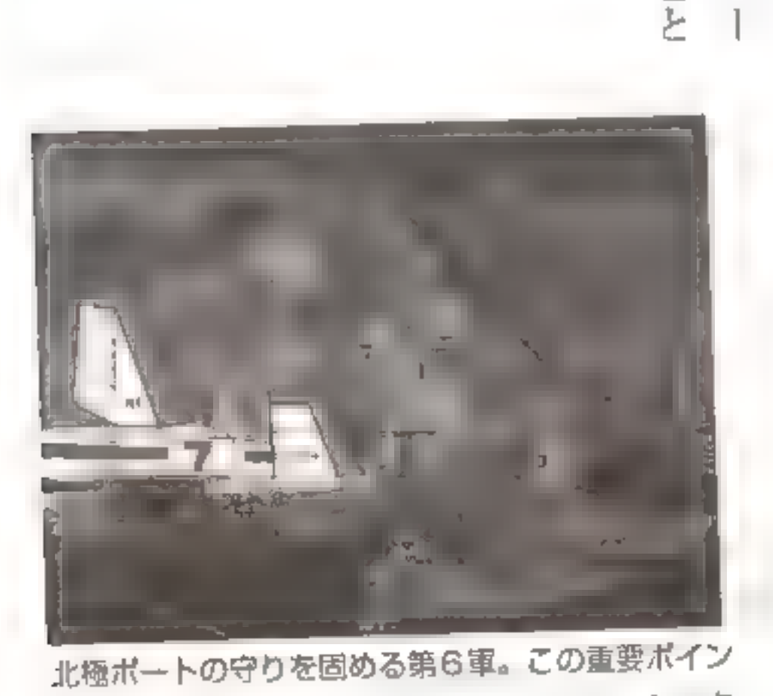

デロイア独立派ゲリラのバスクが奪ったソルティックに対して連邦兵が使用、パイロットもろともコクピットを撃ち抜いた。

■大地の絆
ゲリラの一組織。ゲリラ会議に出席したドックは、デロイア軍上層部への暗殺テロと実行部隊の結成を提唱した。

■第8軍
デロイアの治安を維持するために設置された、地球連邦軍8番目の軍隊。デロイアの州昇格化とともに、植民地軍から他の7軍と同格の州軍となった。

■太陽の牙
ロッキーたちデロイア7の別名。ラルターフの記事によって命名された。以後、この名称が彼らの通り名となり、敵味方問わず定着していく。

■第6軍
本来はメドール州軍のことなのだが、劇中では北極基地に駐留するブレナー中佐指揮下にある派遣軍を意味した。


北極ポートの守りを固める第6軍。この重要ポイントを第8軍以外が担当することに、フォン・シュタインは不満を隠そうとはしなかった。

■ダグラムの頭頂部カメラ
360度回転させることが可能で、後方の確認および周囲警戒を行うために用いる。設定ではカメラとなっているが、劇中では熱源センサーと思われる描写がなされた。

北極の戦いで森林に潜むブリザードガンナーを探し出した。

捕捉した敵は輝点として制御盤のディスプレイに表示される。

■多目的発射筒

ダグラムのコクピットの両脇に装備されており、スモーク弾だけでなく小型のロケット弾や吊光弾を発射した。吊光弾は俗に星弾あるいは照明弾と呼ばれる飛翔体で、一定の高度に到達すると自爆、内蔵されたコア部分が辺りを照らしながらゆっくりと降下していく。ドガ湾防衛戦で使用された。

ロケット弾は小型ながら威力は大きく、命中すればソルティックを撃破することも可能だ。

立されたものであり、その点が他の州軍とは大きく異なっていた。それゆえ地球人だけで成り立っている他の7軍とは違い、幹部将校を除き下士官兵卒は現地のデロイア人から雇用した。そのため現在、デロイア人が第8軍に占める比率は、8割に達している。

この比率の大きさをドナンは危険視し、万が一の事態が発生したときのために、地球から他の軍を呼び寄せ解放軍に当たらせるべきなのではないかと考えた。

■地球連邦7州

地球連邦が誕生する際、世界はメドール、マルドー、テシオ、マラン、コホード、ミンガス、ローディアの7州に再編成された。俗にメドールとマルドーがメドール派、コホード、ミンガス、ローディアの三州は反メドール派、テシオとマランは中立と呼ばれている。デロイアに対する利権の大部分はメドール州が握っており(ゆえに北極基地に駐留しているのもメドール州第6軍)、反メドール州の三州は隙あらば追い落とそうと狙っている。

■地球連邦軍

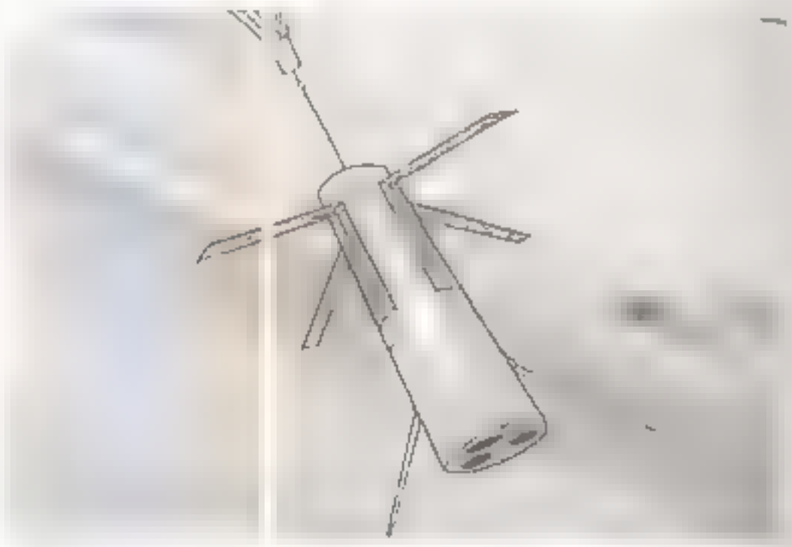
7つの州軍にデロイアの第8軍を加えて構成される、人類世界最大の軍事組織。平時においては各州軍は独立した編制を採っており、その指揮権も州代表が有しているが、戦時体制が宣言された場合は連邦評議会議長を最高指揮官とし、編制も縦割りの性格が強い平時型から、柔軟性の高い戦時編制(編成)に移行する(が、これまでにそういった事態は生じていない)。ちなみに将兵の配属や入隊は出身州に限られることはなく、コホード州出身のメドール州第6軍兵という人間も存在する。

フォン・シュタイン大佐の指揮下にある第8軍は、もともとは植民地の治安維持のために設

■長距離通信用ゾンデ

第1話その他に登場。デロイア星独自の、長距離通信が不可能という特異な環境に対応するために用いられる通信中継装置。

第1話では、「デロイア7」に襲撃された軍用列車から空中へ発射された。救命信号を発する発信装置も付属していた。パラシュートを開いた後にロッド・アンテナを展開、自動で送受信を開始する。



通信用ゾンデはデロイアで部隊を広範囲に渡って展開させるためには欠かせない装備である。

■デボヤ海記

予告編にたびたび登場した。デロイアの開拓初期にデボヤ海を越えて大陸に渡り、開拓に心血を注いだ人々を謳い上げた叙事詩。

■デロイア解放隊

ゲリラの"組織"禿頭の巨漢、クローニをリーダーとし、ゲリラ会議に出席した。後に人民解放軍へ参加、「太陽の牙」と共同作戦を展開することもあった。

■デロイア州政府

デロイアが植民地から州へ昇格した際に設置された、フォン・シュタイン大佐を代表とする政府。連邦評議会に議席を有していたが、連邦が人民政府を承認したため撤廃消滅の憂き目を見、参加は1回のみに留まった。

■デロイアフ

ロッキーたちゲリラグループ「太陽の牙」の別称。元々は地球で暴走族をしていたときのグループ名だった。

■デロイア動乱の背景

地球は食糧資源の40パーセントを、鉱物資源の80パーセントを輸入に依存しており、輸出元であるデロイア抜きではもはやその生存は成り立たなくなっている。

また、デロイア資本の成長も著しく、いまや地球資本を脅かすレベルになりつつあるという。このようにデロイア星は人類社会を支える立場にありながら、政治その他諸々の権利が地球7州に比べてひどく制限されている。

さらに一般デロイア人の賃金は非常に安く、デロイアを牛耳っている地球資本に徹底的に搾取されているため、市民の間には強い不満が根付いている。こうしたことが反地球勢力を育てる背景になり、やがて独立戦争の勃発へと繋がっていった。

■デロイアの通信事情

スタフェラス恒星系は二重太陽のため太陽風が地球太陽系より強く、また、デロイアはふたつのバン・アレン帯に包まれている特異な惑星系である。強い太陽風とバン・アレン帯の存在はデロイアの電離層に常に悪影響を及ぼしており、長距離通信を不可能にしていた。さらにこれにXネブラが加わったことで状況はさらに悪化、有視界距離以上の無線連絡は不可能となったのである。

北極と南極のみがこれらの影響を免れており、それゆえに地上と宇宙を繋ぐ空港施設が建設された。

■デロイアの星

J・ロックの属するゲリラ組織。ターボザックを開発する組織力を有する。

【完本 太陽の牙 ダグラム】

研究講座 ダグラム用語集

■TOWミサイル

正式名称をTube-launched Optically-tracked Wire-guide Misille、筒発射式光学追尾有線誘導ミサイルという、飛翔体をワイヤーで誘導可能なため、デロイアでは無線誘導や自律型よりも安定した命中率を誇る。連邦軍はむろんのこと、独立派ゲリラも多数用いた。「太陽の牙」では主にビリーが射手として活躍した。

小柄な体格でありながらビリーはTOWミサイルを使いこなし、数多くの敵機を撃墜した。

■独立正規軍

フォン・シュタイン大佐がカーディナル事変の際に、決起部隊の呼称として名乗った。キャナリーの兄ディオルも参加したが、すべては軍内部に潜む独立派分子をあぶり出すための罠だった。

■24部隊

州都カーディナルの防衛が任務の精鋭部隊。その中核を成すCBアーマー部隊は各部隊より選抜されたパイロットで、第8軍でもトップクラスの腕前を誇る。21のナンバリングが施された専用の貨物輸送機に加え、蒼い部隊色の塗装が施されたマベリックをも有する。24は「ニイヨン」と読む。

向って左から、バレル、テニスン、指揮官ブリンク、ランドの4人。この部隊は、これまでにない強敵としてダグラムの前に立ちはだかった。

■北極駐屯基地

デロイア星の北極点に位置する、地球とデロイアを結ぶ唯一のゲートである北極ポートに隣接している、地球連邦軍の軍事基地。国際法上北極はデロイアではなく、地球連邦の直轄地とされている。駐留している部隊は、地球のメドール州第6軍から派遣されている分遣隊。

■ボナール

カーディナルから砂漠を挟んで西方に位置する、マヨミーナ自治州の工業都市。市長が独立支持派のため、ゲリラ勢力の重要拠点が存在しており、ダグラムの量産もボナールで行われる予定だった。

年に1回同市で開催されるカーレースは、地球のル・マンに匹敵するビッグ・イベントと言われており、デロイア中から見物客が訪れ市の財政を大きく潤す。またフェスタのように、このレースに憧れる若者も多く、地球にもファンがいる。

広大な資源備蓄ヤードが広がるボナール郊外のエネルギー集積基地。

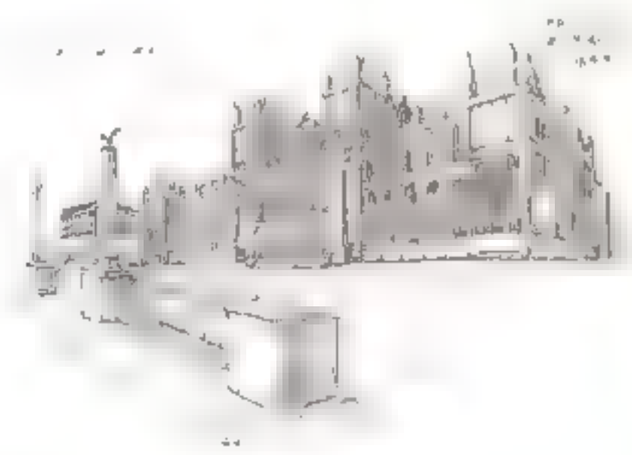
■リニアガン

それまでの火薬式と異なる、電磁力を用いて弾丸あるいは砲弾を射出する砲煙システム。大電力が必要なのでCBアーマーなどの大型兵器などにしか搭載できなかったが、技術革新によりパワーソースの小型に成功、対アーマーライフルなど歩兵が扱える銃火器サイズのものが実用化された。このとき、大型のものは「リニアガン」、銃火器サイズのものを「Eガン」と呼ぶことで区別することが始まった。

■連邦評議会

地球連邦の各7州から選出された評議員たちから構成される、人類社会最高の意志決定機関。その議長は人類社会の指導者として絶大な権限を持っており、評議員を招集する権利も有している。

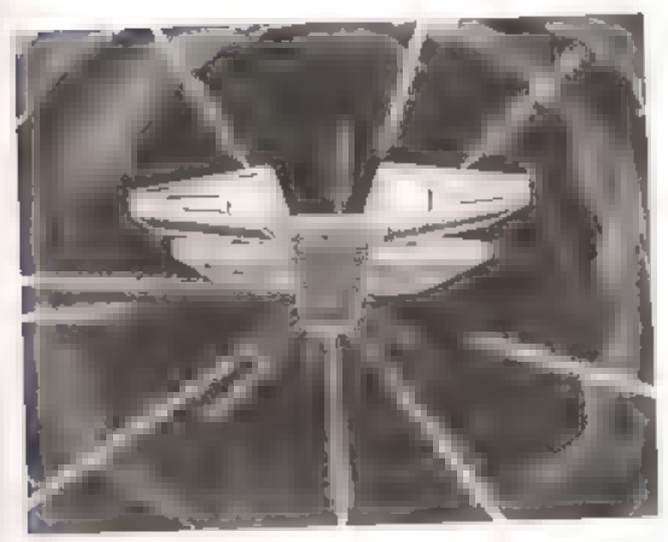
S.C.152年度の連邦評議会は、州ではない植民地で開催されるという異例のものだったが、これはドナンの発案によるものだった。これについてコホード州など、いくつか難色を示していた勢力があるとの描写がされたが、結局は評議員全員が出席することに同意したと、劇中で語られた。



議事堂の設計はクラシカルなものだが、人類社会の最高府に相応しい威厳を漂わせている。

■ワームホール

地球と植民惑星を繋ぐ超空間航行に使用されている、人ーブラックホールを用いることで形成される恒星間高速移動技術の根幹。距離の離れたA・Bポイントそれぞれにブラックホールを発生させた後、これを固定し超空間を作り出す。その内部は通常空間とは異なる物理法則に支配されており、ここを通過することで例えば224光年離れた地球とデロイアであっても、わずか52時間25分(民間航路の場合)で行き来することが可能になるのだ。

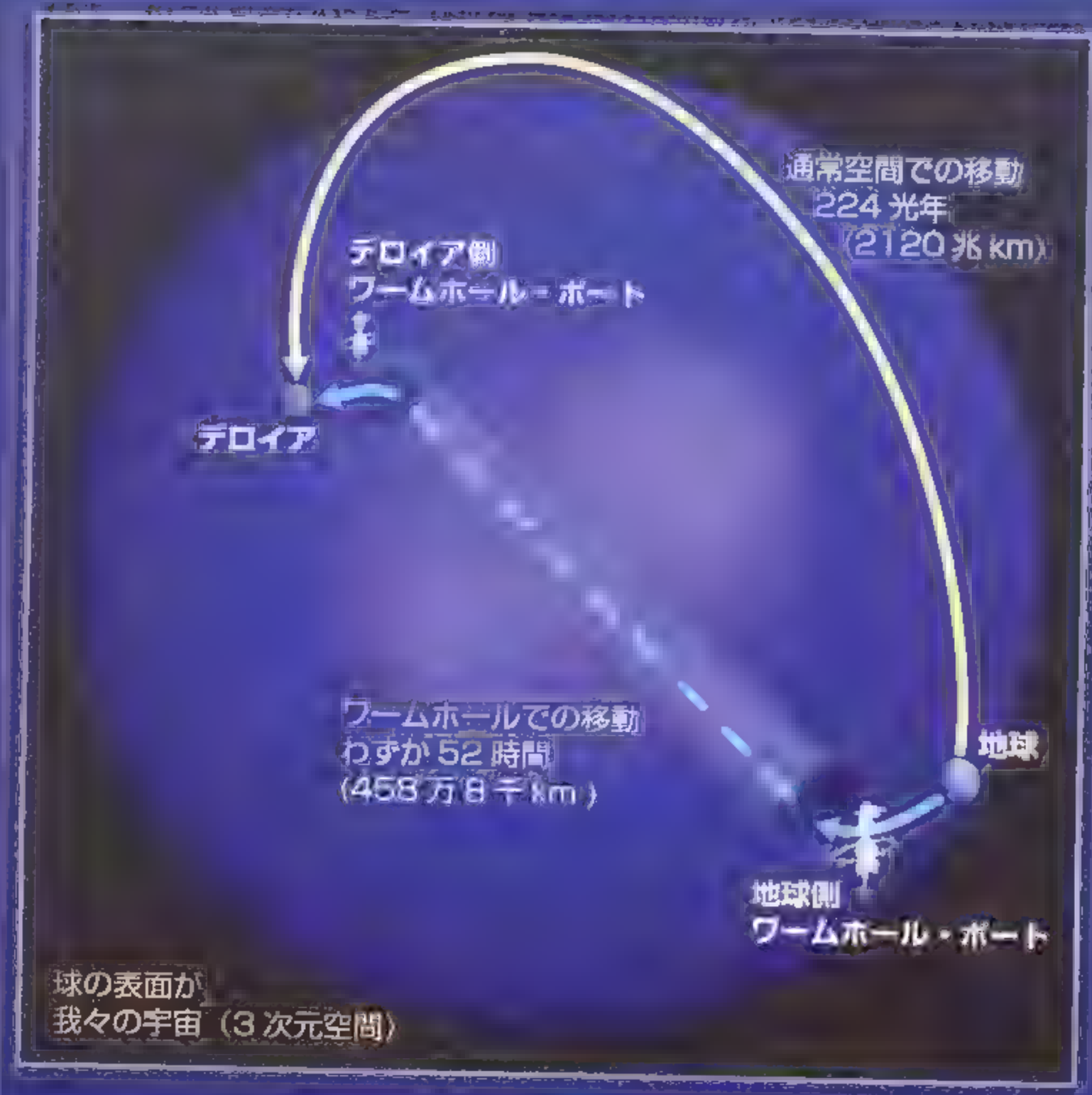


恒星間船は高重力に耐え得る、特殊な力場に包まれてワームホール内を進む。

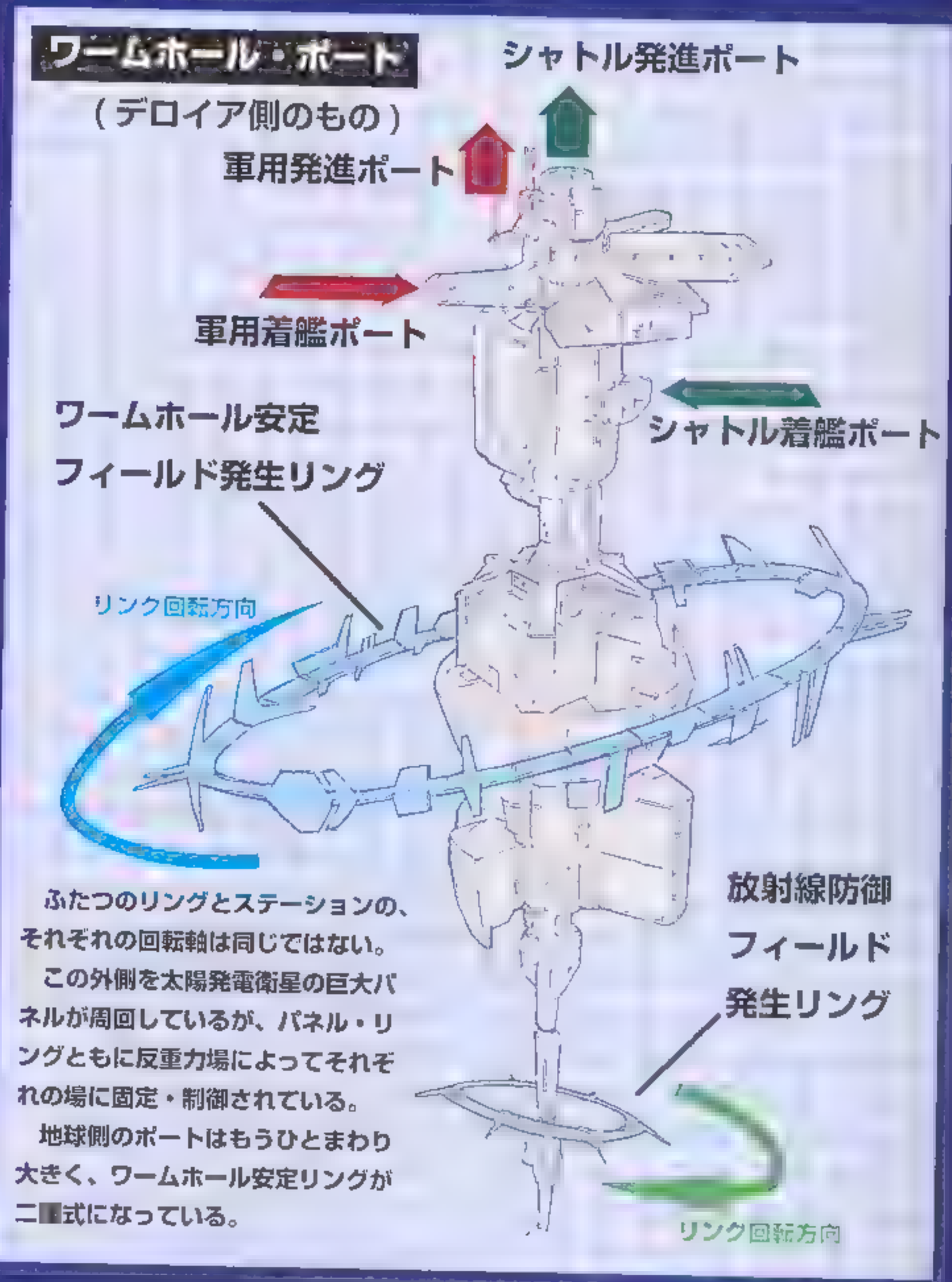
デロイアへの道

[illegible]は、まず地球上の宇宙ポートに集まって宇宙[illegible]が[illegible]ワームホールポートで専用の宇宙船へ乗り換える。次にこの耐高重力仕様に設計された宇宙船でポート内の[illegible]で[illegible]から人類[illegible]に作[illegible]。[illegible]26分[illegible]2泊3日[illegible]224光年離れたスタフェラス二重太陽系[illegible]。[illegible]ホールポートに至る。そこで[illegible]ホールに乗り換え、デロイア星の北極[illegible]ポートへ向かうのである。

この世界はおよそ[illegible]50年前、ホドール州の[illegible]人探査機によって発見された。そして[illegible]22年から本格的開拓が始まり、いまでは人類世界を支える資源地帯且つ[illegible]物資供給地として欠かせない存在にまで成長している。



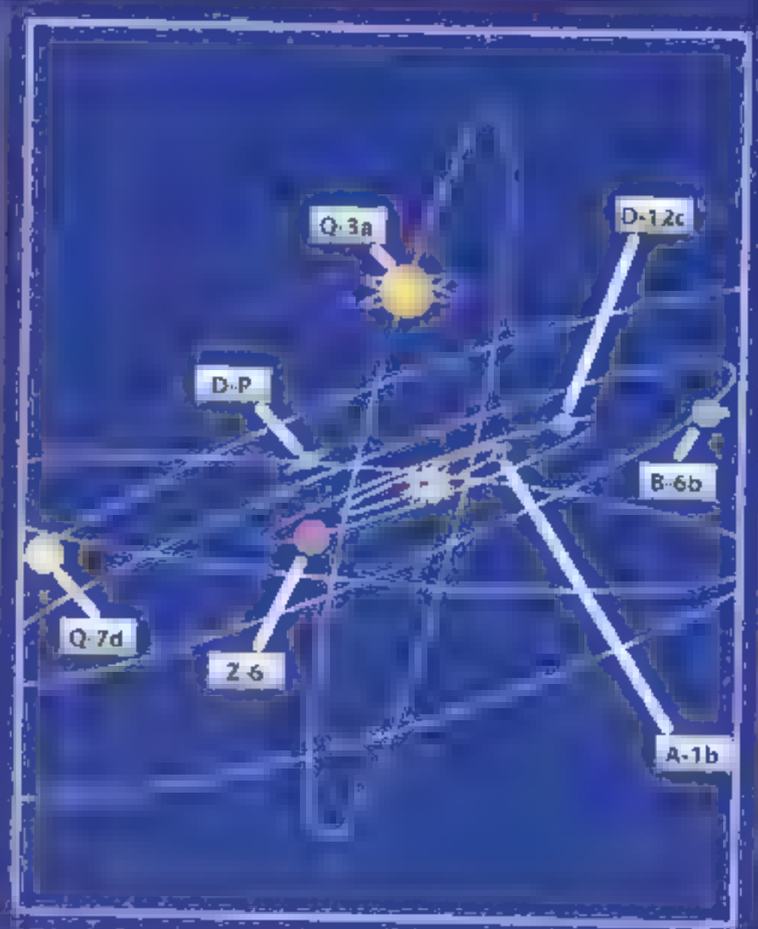
スタフェラス二重太陽系にはデロイア以外に、資源豊かな植民惑星として有望視されている惑星の存在が三つ確認されている。特にテミロスG2の豊穣で知られるミラネート星は、[illegible]52年の時点で5年以内に開拓を開始することが可能だという。こうしたことから、二重太陽系の開拓が進みより豊かな社会を築くことになれば、人類文明の中心の星をもいさらばえた地球太陽系から奪うことになるのではないか？　との将来予測を行う人々も少なくない。しかし独立を果たしたとはいえデロイアに惑星開発を独力で行う国力はなく、また一部の特権によっては連邦にとって危機感まりない状況を生みかねないので、開発計画はペーパープランの域を脱していない。



ふたつのリングとステーションの、それぞれの回転軸は同じではない。

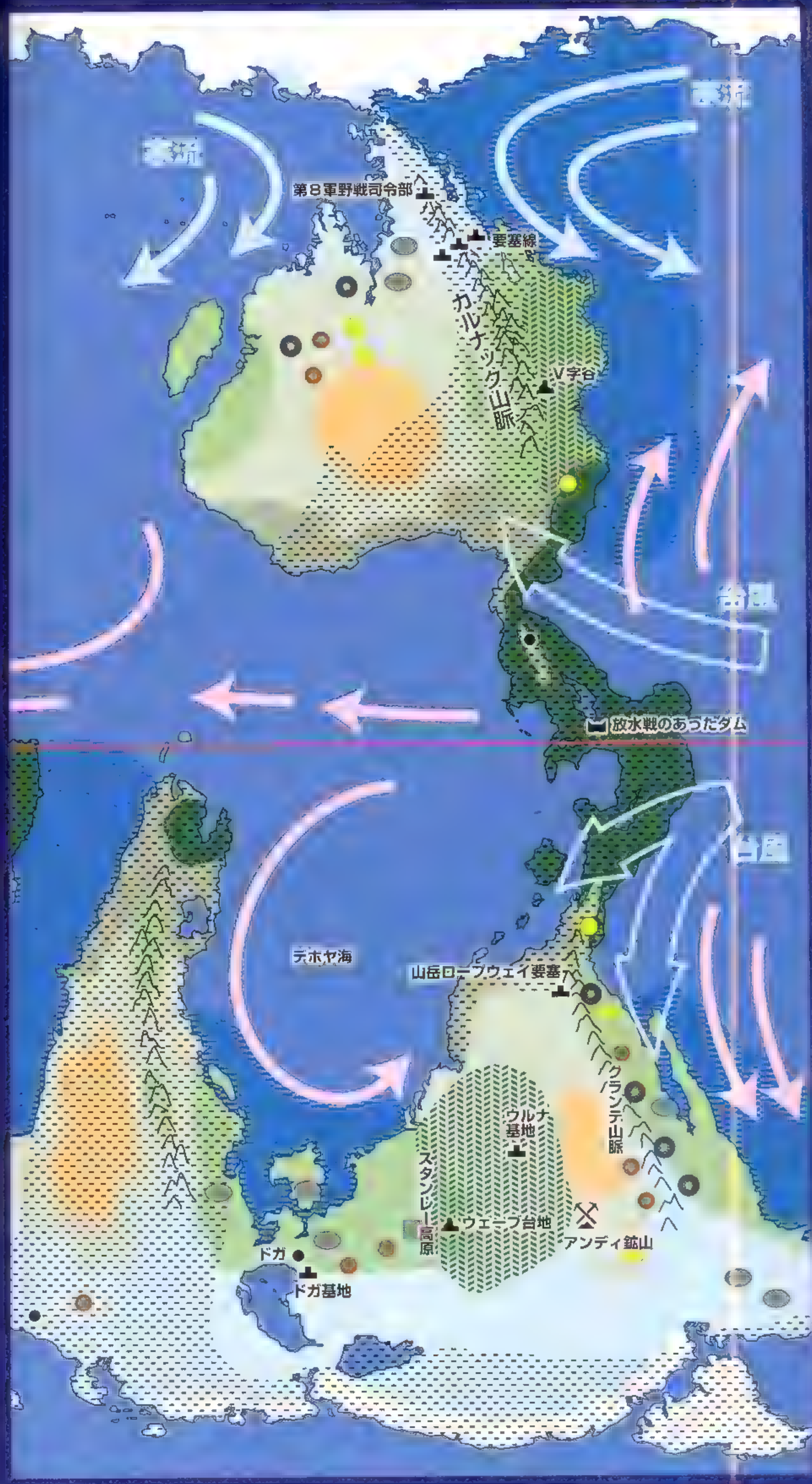
この外側を太陽発電衛星の巨大パネルが周回しているが、パネル・リングともに反重力場によってそれぞれの場に固定・制御されている。

地球側のポートはもうひとまわり大きく、ワームホール安定リングが二[illegible]式になっている。



地理編

デロイア概要地図



デロイアの特徴を一言で表すと、「地球とは南半球と海半球の位置が逆転しているものの極めてよく似た環境を持っているということに尽きる」。わずか100年余りでここまで開発できたのは、大気改造などテラフォーミングの初期段階を行わずに済んだからに他ならない。資源が枯渇し切羽詰まった状態にあった人類にとって、その発見はまさに福音ともいうべきものだった。

続いて地勢を解説しよう。デロイアの首都カーディナルのあるメインランド（第一大陸群）の内陸部には砂漠が広がっており、緑地帯は少ない反面、鉱や鉄鉱石が埋蔵する資源地帯を持つ。これらはパルミナに資源地帯が発見されるまで、長い間デロイアの資源事情を支えていた。いわば開拓時代の功労者である。次にパルミナ大陸との間に横たわるパルツディーグ海だが、この気候穏やかな海はメインランドとパルミナを結ぶ主要海上交通路として、常に多数の船舶が行き交っている。そしてパルミナは豊多くデロイアばかりでなく、地球の穀倉地帯として非常に重要度が高い土地である。加えて鉄鉱石の鑛脈も非常に多く、アンディ盆地を中心とする鑛山地帯から産出する良質な鉱物資源は商社を通して地球へ輸出されている。中でも高品質、低価格を実現したネルオーダー・メタリック社のスタニウムは地球でも広く知られており、その精錬技術を欲するさまざまな地球系企業から合弁事業を持ちかけられたという。

北極ポート
北極基地
気候
寒帯
冷帯
ステップ
温帯
サバンナ
熱帯
砂漠
資源
漁場
農業地帯
未開地域
銅
鉄鉱石
鉛
金
ボーキサイト
ポナール
サウスシティ基地
スパ
フォートロックス
ダグラム工場のあったダム
サンドレア
カーディナル
バーディングヒル
アルツビーム地方
バルツティーング海
ランバン山脈
バラフ刑務所
ランヘル
寒流

囲み数字[20]等はドラマ『太陽の牙ダグラム』の放映話数です。

地球連邦旗

デロイア国旗

SC-153。人類社会に新しい国家が一つ誕生した。惑星国家デロイアである。これにより、地球連邦という唯一の統一政府を戴き、「楽園」に住んでいた人類が、再び、国と国という利害でぶつかり合う巨人の掌の上に乗せられてしまったという説がある。一方、実はこの「楽園」こそは一部上級市民のための偽りの楽園で、この独立はかつての奴隷解放に近い人類の進歩だと説く人々もいる。

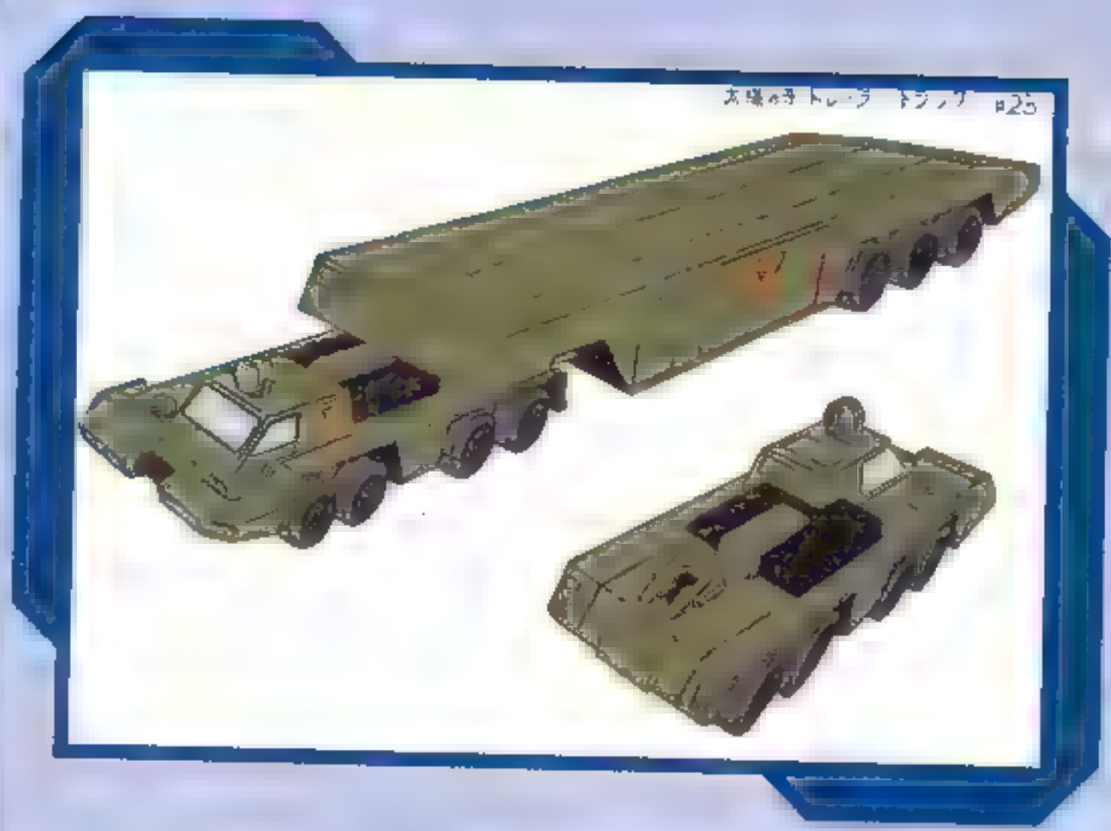
地球連邦は常に地球とデロイアは一体であり、そこに差別はないと唱えていた。だが実際は歴史上の植民地がそうであったように、デロイアも政治的経済的制限下に置かれていた。例えばデロイア系企業は地球系企業に比べて輸出量に厳しい制限が課せられており、また、関税率も高かった。一般市民に関しても良いポストは地球人に占められており、どれほど能力があってもデロイア人の出世には限界があった。こうした差別は階層が低くなればなるほど露骨になって行き、それは即座に経済力の格差に繋がった。

デロイア人の8割を占める労働者層の所得は低く、彼らは地球人が自分たちの働くべき利益を搾取していると考えた。地球とデロイアの関係は、20世紀中葉以降の地球世界最大の悲劇と謳われた南北問題を再現したようなものだった。地球は自らの胃を満たすために、デロイアから食糧や農業製品とその原料な加工品、つまり第一次産業の生産品を格安で購入し、彼らには高次の加工が施された製品――ちっぽけなクセにやたら高価な贅沢品――を売りつけていたのである。これは明らかに搾取の構造に他ならない。

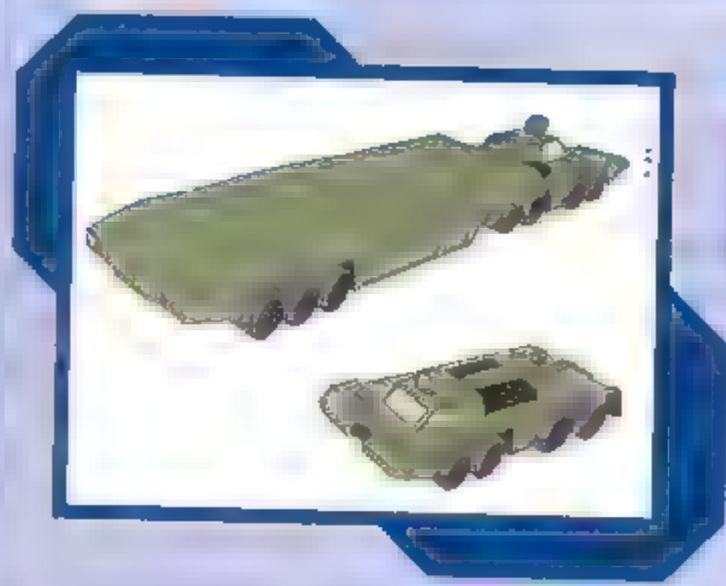
もっとも、40年代も後半になると事情が変わってきた。徐々にではあるがデロイアに中産階級が生まれたことで、市場が形成されはじめたのだ。市場の形成は経済力の向上に繋がり、経済力の向上は搾取への抵抗力が増幅されることを意味する。当初地球はデロイアにかりそめの自治を与えることでこの抵抗力を削ごうと考えたのだが、これはかえって反発を生み独立戦争を引き起こしてしまった。次に彼らは独立を認める建前の裏で、経済のチョークポイントを握ることで経済支配を続けようと画策した。デロイアが地球のくびきを脱し、真の自決権を手に出来るか否かは、生まれて間もない新政権に課せられた最大のテーマだと言えるだろう。

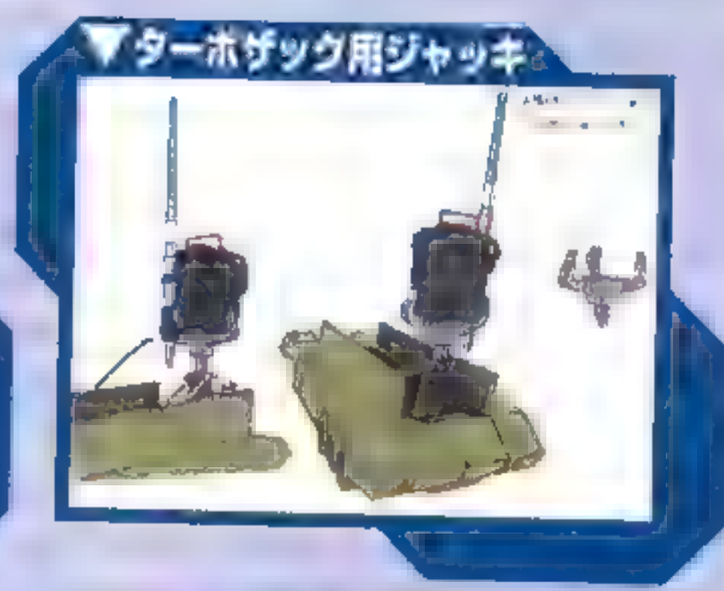
Color Chart Collection
Other Mechanics

「ダグラム」にはCBアーマー以外にも車輌やヘリ、銃器といったメカが多数登場する。ここではそうした「物語にリアリティを与える名脇役たち」の代表的なものを紹介する。



ブロムリー・アイバン DT2





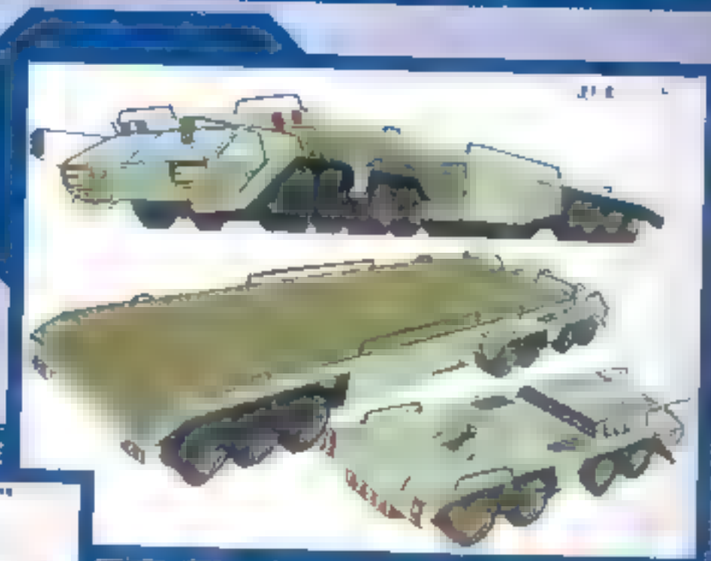
▼ターボザック用ジャッキ

通称ダグラムトレーラー。第23話でターボザックと共にJ・ロックによって「太陽の牙」に支給され、彼らが物語の最後まで使用した車輌である。第71話ではこの車輌にダグラムを乗せて凱旋パレードが行われ「太陽の牙」はトレーラーごとダグラムを奪い自らの手に取り戻す。

ブロムリー LTR63GB

ブロムリー LTR62

第13話にて「太陽の牙」が連邦軍の補給隊から奪い、スパ市到着まで使用したもの。物語の終盤では陣営を問わず運用され、陸路でのCBアーマー輸送の主な手段となっている。



▼ウインチ・カタパルト

主に連邦軍が使用したCBアーマー輸送用トレーラー。第1話で太陽の牙が使用したものもこのタイプの車種だった。

太陽の牙　携行火器

長きにわたる独立戦争を太陽の牙と共に戦った相棒たちである。なお、9ミリサブマシンガンは当初フェスタが使用し、後に加わったジョルジュが手にしたものも同型の銃である。最終話において、自爆したダグラムが吹き上げる炎の中へとくべられ、彼らはその役目を終えた。

▼Eガン

▼9mmサブマシンガン

▼ビッグEガン

▼ビリーの拳銃

イーストランド WE211 マベリック

前線への二脚歩行型ＣＢアーマー輸送の主な手段として多用された。輸送ヘリとはいえ防御兵装として機関砲を装備しており、ゲリラたちにとっては単体でも厄介な存在であった。主に連邦軍が使用したものだが、ウルナ基地事件後は解放軍もダグラムやアイアンフットの輸送などに活用している。

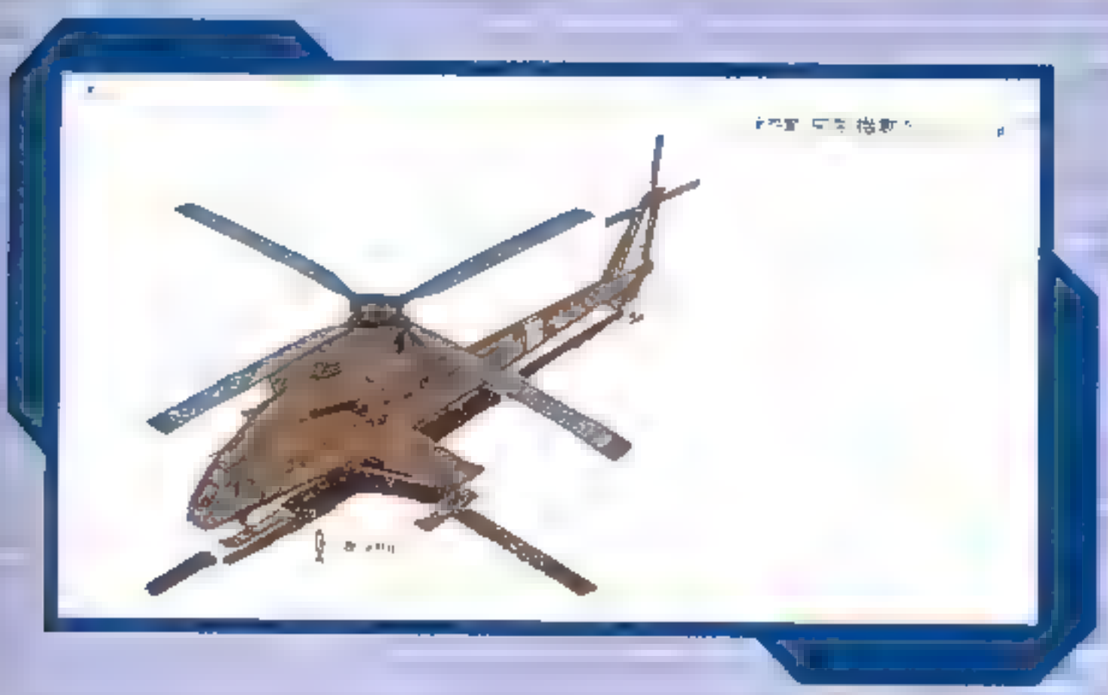
ヘルタット3　ボーンフィッシュ

▼コンテナ装備

ワイヤーフックを装着しＣＢアーマーの輸送ほか、コンテナを装備することで物資や人員の輸送任務などにも使用された。

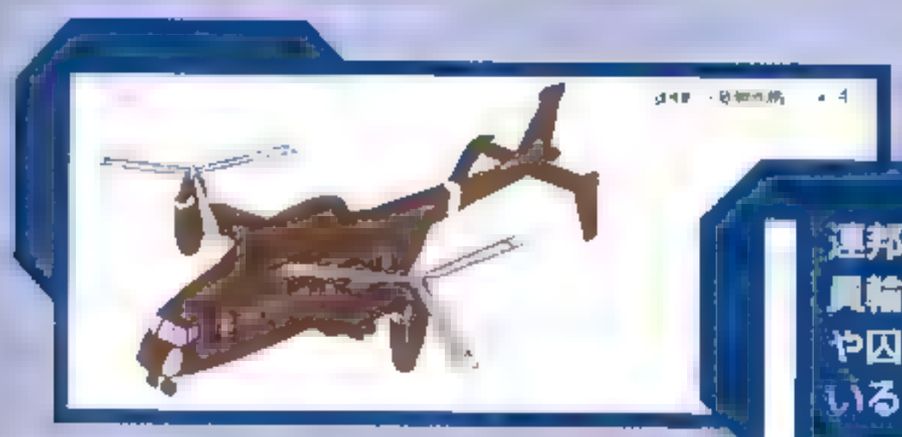
キュレイユ CH35 パトリオット

汎用性の高い中型輸送ヘリ。主にクラブガンナーなどの四脚型ＣＢアーマーの輸送任務に使用された。



ズナーク Mir770（ミル） ウェイル

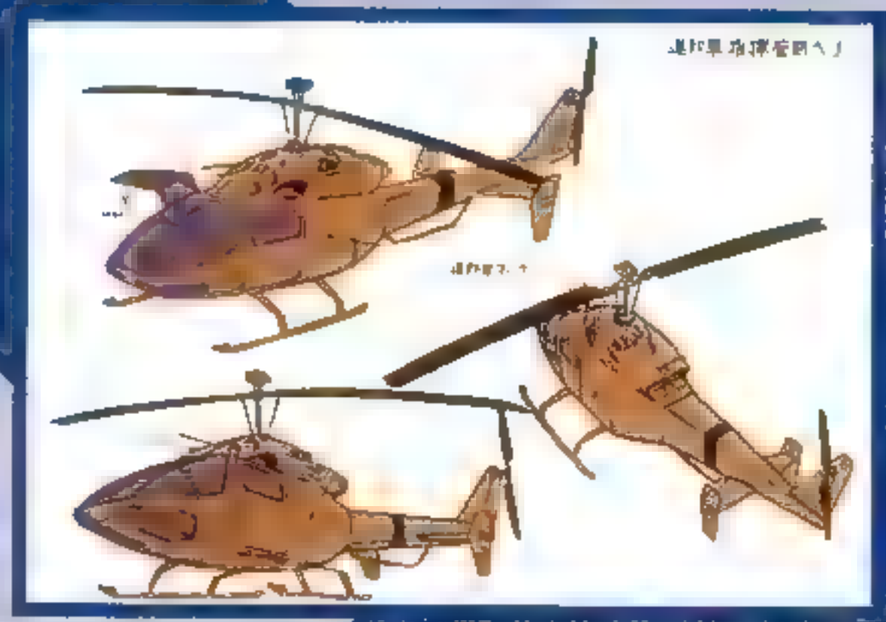
兵員輸送機



連邦軍の所持する比較的小型の兵員輸送ヘリ。兵員だけでなく捕虜や囚人の護送などにも使用されている。

大型の輸送ヘリ。ＣＢアーマー、物資や兵員の輸送任務の他、民間人の避難にも使用された。

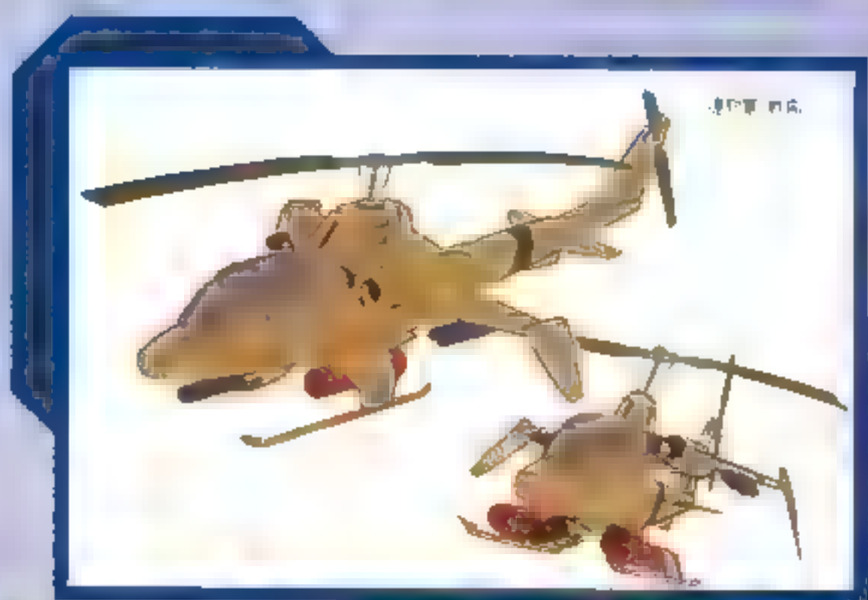
キュレイユ CH-24 グレイハウンド



▼レドーム装備

偵察任務や指揮管制用ヘリ。連邦軍時代のザルツェフが前線指揮を行うためによく搭乗していた他、物語終盤では両陣営が使用し、全編に数多く登場している。

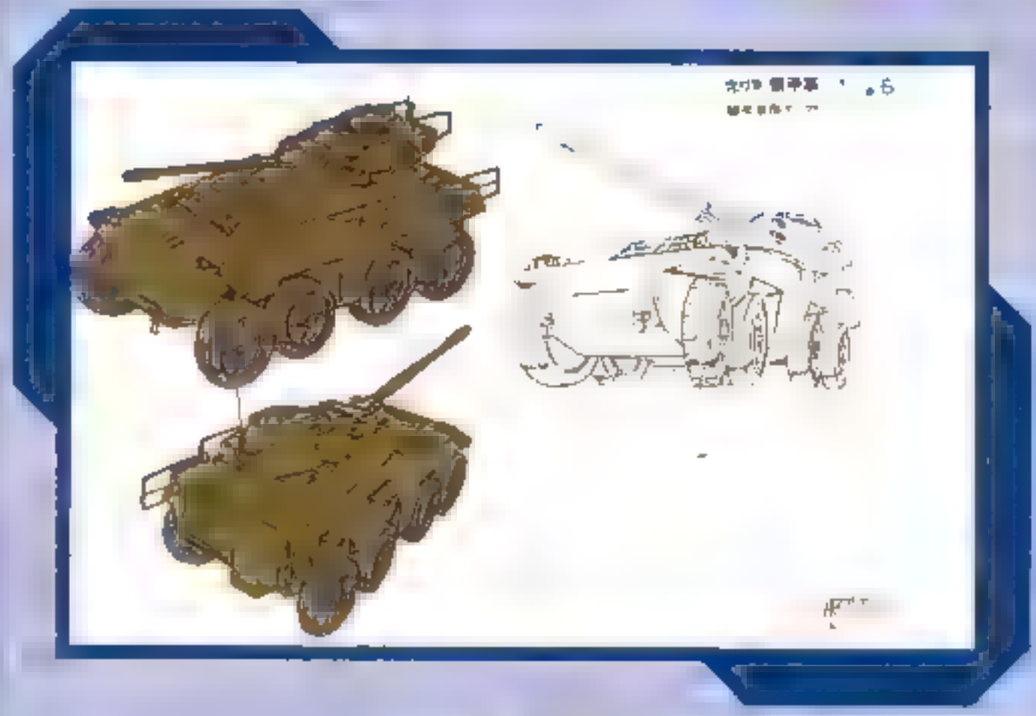
キュレイユ MP-2 デューイ



▼コクピット

全編を通して登場する連邦軍の戦闘ヘリ。空からの攻撃はゲリラたちにとって非常に不利な状況となるため、常に恐怖の対象となっていた。後にこの機体は解放軍の戦力となる。

ブロムリー ARMC インステッド

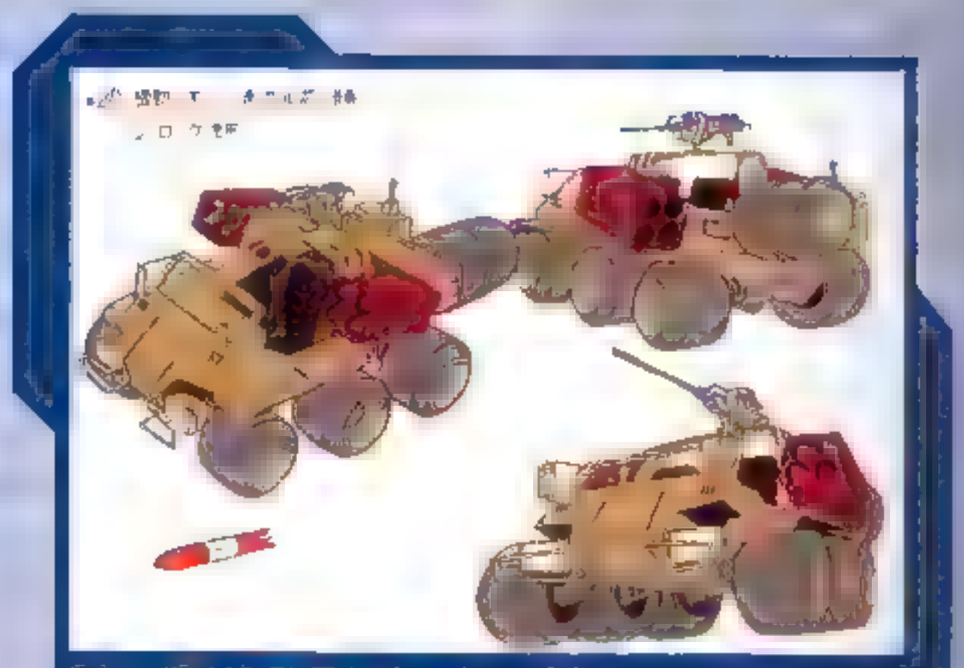


▼オプション（1）

▼オプション（2）

用途に合わせ、さまざまなバリエーションを持つ装甲車。劇中、終盤では両陣営が使用し、スタンレー高原の戦いでは24部隊のソルティックを相討ちながら1機撃破するという戦果を成し遂げた。

ブロムリー JRS ネイティブダンサー



J・ロックの部隊が使用したバギー。市販のバギーにJ・ロックたちが武装を施した改造車である。

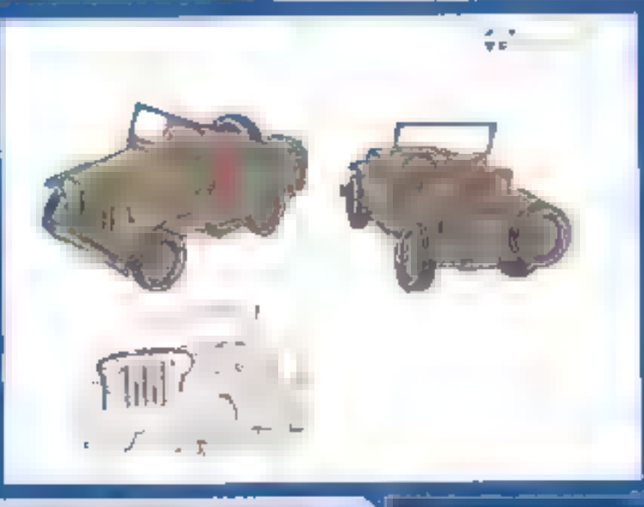
イーストランド ARH52 グランドサーチ

ウルナ基地の反乱によって解放軍に渡った。スタンレー高原で多数投入され、解放軍の機動力を大幅に向上させる役目を果たした。

軍用車輌(ガルシア隊仕様)

ガルシア隊をより印象付けるためか、ほぼガルシア隊の専用車となっていた。

ウイリス OR39D ランドマスター

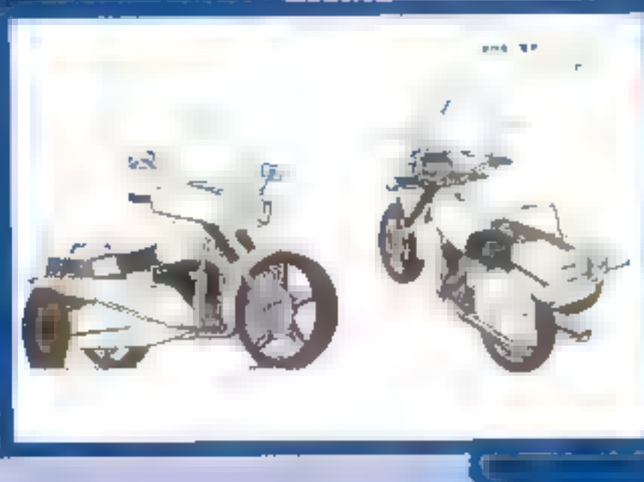


全編に渡って登場し、陣営を問わず使用されている。ラルターフなどもこの車種を移動手段として使っていた。

軍用バイク(ガルシア隊仕様)

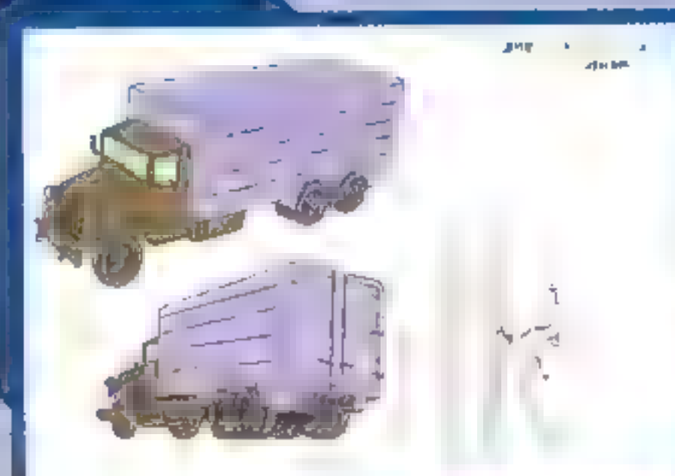
劇中で初使用したのはガルシア隊であるが、その後は陣営を問わず登場している。フェスタが運転していたのも同タイプと思われる。

軍用バイク



連邦軍のサイドカー付きバイク。第2話でメトール州の空軍基地へと向かうドナンの護衛として随行していた。

コンテナトラック



全編に登場する。連邦軍の補給隊などが使用するほか、ゲリラたちも輸送用に同型のものを所持していたようである。

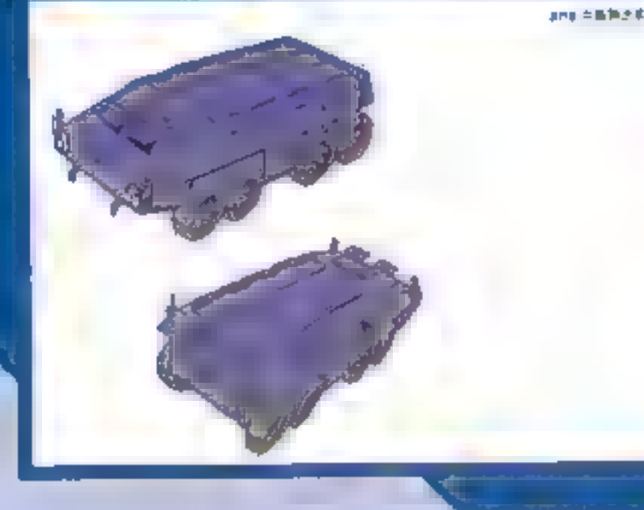
ウイリス HT38D ハーフローダー

両陣営が所有する軍用トラック。前線での使用の他、デイジーの働いていた孤児院から子供たちが疎開するときにも使われた。

ホバークラフト

第10話で連邦軍の河川警備隊が使用していた。水中での行動を可能にするシールド装置を作動させたダグラムに全機撃破された。

ブロムリー ST48D



連邦軍の兵員輸送車輌。主に前線付近での人員輸送に用いられ、全編に渡って登場した。

物語編

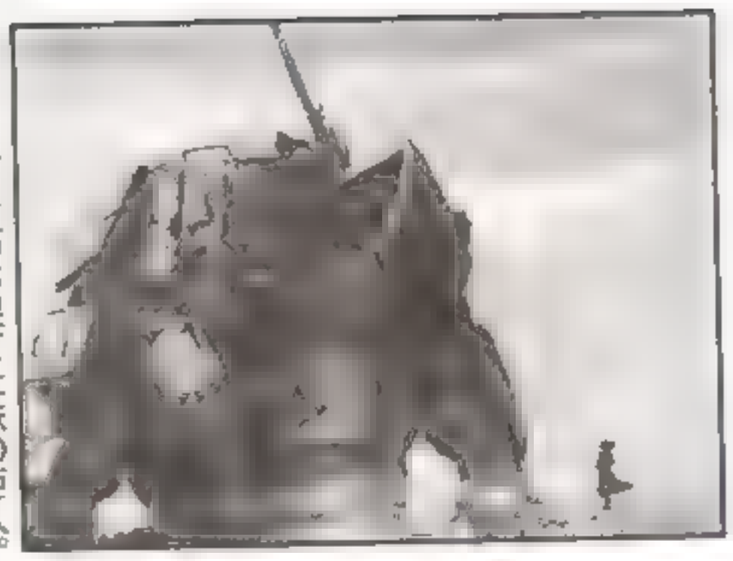
STORY

#01 光りの戦士

#01 光りの戦士　#02 始まりの銃声

#01 光りの戦士

【予告編】 FIGHT FOR A WHATS？　FIGHT FOR A WHO？
スタフェラス二重太陽系デロイア　燃え上がる大地を
光の戦士たちが駆け抜ける



大地に座る、朽ち果てた鉄の巨人。彼が見てきた若者たちの物語が、いまここに語られる。

【ストーリー】

砂漠に佇む、朽ち果てた鉄の巨人ダグラム。その姿を見に、キャナリーはかつて共に戦った仲間たちの幻を見た。

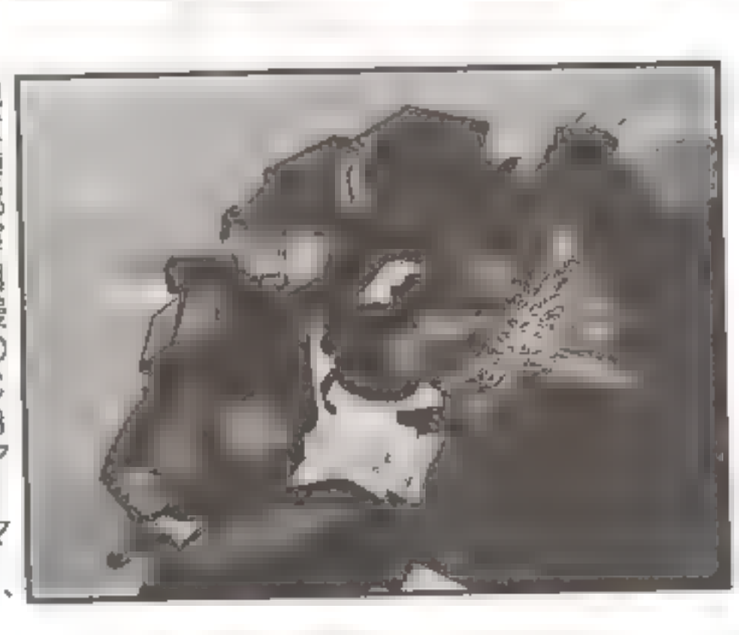
――SC 152、デロイアは独立戦争の最中にあり、多くのデロイア人がゲリラとなって地球連邦軍との抗争に明け暮れていた。ロッキーをリーダーとする「デロイア7」も、そうしたゲーフの一派だった。

彼らはゲリラが支配するダム・シティと対峙する地球連邦軍のダンクーガー基地への補給物資の輸送を阻止するため、本部の合図によって武装車輌を含む輸送列車を赤い谷で襲撃した。クリンが操るCBアーマー・ダグラムの活躍で、物資の輸送の阻止は成功したものの、戦闘ヘリとCBアーマーの混成部隊がロッキーたちを急襲した。実はこの物資輸送計画は「デロイア7」をおびきだし撃滅するための罠だったのだ。

CBアーマー3機の攻撃を受け撤退するダグラム。だがチコの放ったビッグEガンをきっかけに形勢は逆転、ソルティックはダグラムによって撃破されてしまい、主戦力を失った連邦軍は撤退を余儀なくされた。

こうして赤い谷の戦いは「デロイア7」の勝利に終わり、クリンは幼なじみのディンに思いを馳せるのだった……

フォン・シュタインはミゲロ大尉に仇敵ともいえる人民解放軍遊撃隊「デロイア7」撃滅を下令した。

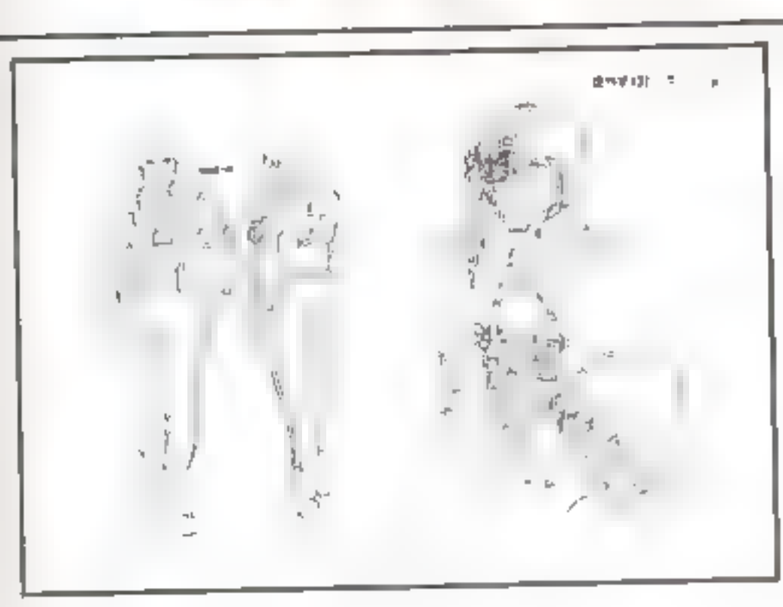


地球連邦軍自慢のCBアーマー、ソルティックもダグラムの敵ではなく次々と撃破されていく。

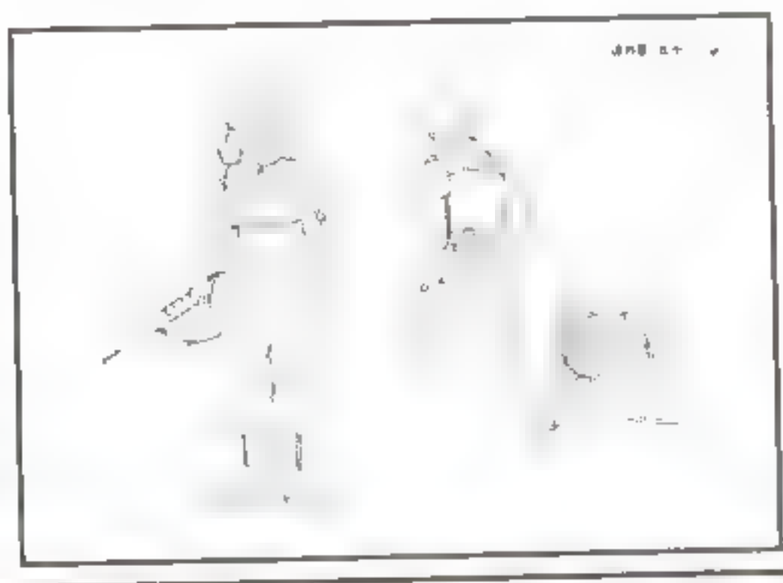
【ワンポイント】

主役メカが朽ち果てた姿で登場するという、後にも先にも類を見ない衝撃的なプロローグが大きな話題を呼んだ。プロ・アで問わず、多くのモデラーがこのシチュエーションの立体化に挑戦し、果ては劇場映画のキービジュアルになったことからも、このシーンがファンに与えたインパクトの強さが窺い知れるだろう。

ちなみに本エピソードは初期構成では存在せず、第1話（後述）のあまりの地味さに不安になった当時監督が発案し、事実上のパイロット・フィルムとして制作されたのだという。



連邦軍大尉ミゲロ
「デロイア7」撃滅作戦の指揮官に、フォン・シュタイン直々に任命された。作戦が成功すれば特進物だと部下を鼓舞するが、失敗に終わってしまう。



連邦軍兵士
「デロイア7」を誘き出すための罠である、ダンクーガー基地へ向かう増援部隊の兵士たち。熱帯地域の兵士らしい野戦服の着崩し方である。

補完辞典

つ半球形装甲が施された連装式機関砲が装備されている。

※文頭の■＝本文中語句の解説　★＝それ以外の解説を表す

#02 始まりの銃声

【予告編】 荒野に朽ちる鉄の戦士はなぜ　風を追う少女は誰
狼のごとく心飢える青春が
獅子のように雄々しい青春がデロイアの大地を走る
物語は　発の銃声ではじまった

地球連邦第8軍司令官ダンロック中将。叛乱決起に反対しフォン・シュタインに射殺されてしまう。

【ストーリー】

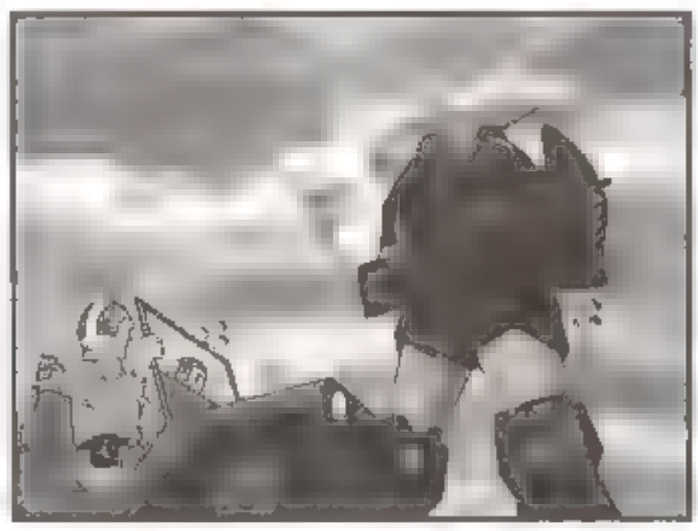
在デロイア地球連邦軍第8軍参謀フォン・シュタインたち佐は、軍管区司令ダンロック中将に決起を促すが、時期尚早だとしてもなく断られた末、中将を射殺　この一発の銃声が、デロイア動乱を開け狼煙　のろしとなった

いっぽう地球では、ドナンが来るべき連邦評議会をしと して認められておらず、また、評議会議員も持たないデロイアで開催するという声明を発表し、その前例にない決定で世の注目をあびていた

そんな中、クリンはロノキーたちデロイア人と出会いをいを認め合う中、デロイア人排斥を唱える者たちの襲撃を受けてしまう。

傷した彼を救ったハスクと名乗るデロイア人は、自分はデロイア人だが政治家ドナンを尊敬しているとあり、巧みにクリンの信頼を得る　実はハスクはドナンの暗殺を目論む独立派テロリストで、彼はクリンを利用し空軍基地に忍び込むとソルティックを奪い、ハンドリニアガンでドナンの乗る旅客機を狙う。弾は旅客機に命中するもののドナン暗殺には失敗、ハスクは対アーマーライフルによって射殺されてしまう。クリンは彼がテロリストだったことに大きな衝撃を受け、ちつくすのだった……。

バスクは親ドナン派を装いクリンに接近、彼を利用する。だがその末路は無惨なものだった。

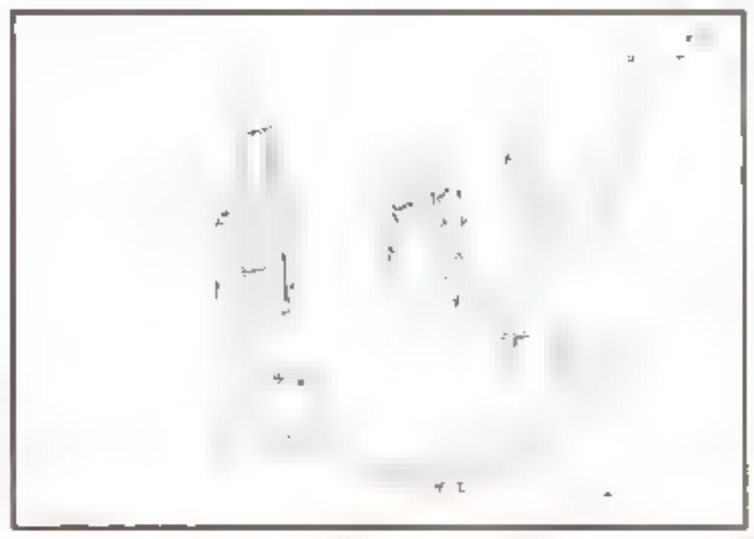


バスクのソルティックはドナンの乗った旅客機を狙うが失敗。連邦軍に狙撃され死亡する。

【ワンポイント】

放映順では第2話だったか、物語の上では第1話であるその人間的な部分は谷場人物たちの仕関係と、地球とデロイアの関係の描写に費やされている　同様の作品と比べると地味な印象を与えるものの、しかし、例えば竜騎兵がおいて、話題の中心となるクリンを不在にすることで、逆説的に彼がカシム家において、このようなポンコツにいるのか、そして家族からどのように見られているのかという人間関係をカシム　スに見せていくまは高く評価できるだろう　非常に優れた脚本かつ、地に足が着いた堅実な価品だと言える。

オーセル夫妻
ディジーの両親。夫モンアはドナンとは古くからの友人であり　カシム家とは家族ぐるみの付き合いをしている。



バスク　デロイア人スパイ
クリンを利用してソルティックを強奪、ドナン暗殺を謀ったテロリスト。対アーマーライフルの狙撃を受けて死亡する。

イア行き

板を撃ち抜くことができる。

【完本 太陽の牙 ダグラム】

#03 デロイアの動乱

【予告編】 物語は前奏曲を奏ではじめた
悲鳴とともにすくむクリンの胸に　疑惑の芽が広がる
デロイア　その遠い星で　どんな運命が
待ち受けているのか　歴史の幽弦が軋みはじめた

ドナン遭難を知ったクリンは、デイジーの協力で単身デロイアへ渡ろうとする。

#03 デロイアの動乱　#04 実戦のコクピット

【ストーリー】

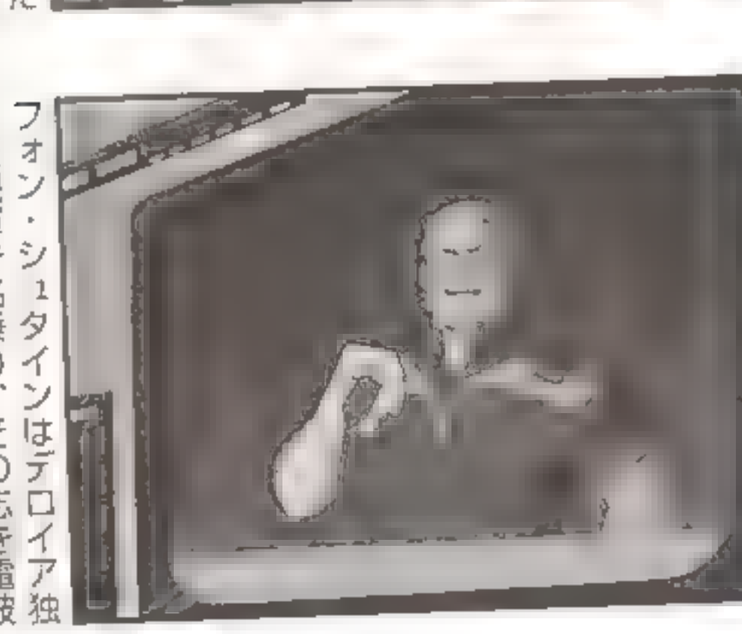
士官学校のクリンの元に、ドナンがデロイアで拉致されたとの報せが届いた。急き帰宅したクリンに、兄のリヒンは冒険とレークの捜索隊に任せておけばよいと答える。納得できない彼は、レークに行かせてほしいと願い出るが、すげなく断られてしまう。それでも諦められないクリンは単身デロイアに渡ることを決意、デイジーに費用を借りて地球を後にした。

なぜ父はデロイア人に狙われるのか？　そんな疑問を抱きつつデロイアに降り立ったクリンは、地球から帰郷したロッキーたちと再会する。喜ぶクリンとは正反対に、彼がドナンの息子だと知ったロッキーたちの態度は冷たかった。

同日頃レークは捜索隊を率いて北極基地に到着、合流したケンコックから事情は単なる誘拐ではなく独立派らしいよる反乱であり、トナンたちかいる首都カーディナルを目指していることを知らされた。

早速出撃準備を始めようとしたその矢先、反乱軍の戦闘ヘリ部隊が襲来、次いでクラブガンナーが空挺攻撃を仕掛けてきた。基地はひとく破壊されてしまうがクリンの活躍で事態は逆転、敵部隊の撃退に成功するその直後、フォン・シュタインによるデロイア独立宣言が放送された。

クリンは北極ポートでロッキーたちと再会するが、実はドナンの息子と知られ冷たくされてしまう。


フォン・シュタインはデロイア独立正規軍を名乗り、その志を電波に乗せて、惑星全土に放送した。

【ワンポイント】

今回はクリンの士官学校生活にはじまり、カンム家、市街地、宇宙港、軍事基地と、徐々にその舞台が広がっていくように構成されているという点を高く評価したい。なぜなら、このような未来を舞台にしたSF作品の難しさのひとつは、生活感が伴うと観を手間を掛けずにどうやって観客に認識させるか、ということが挙げられるからだ。本作は冒頭に述べたように、段階を追って背景を拡大していったため、観客は理屈ではなく、皮膚感覚でその世界の雰囲気を自然な形で認識することができたのである。

連邦軍　ブレナー（北極基地司令官）
階級は中佐で第6軍（メドール州）に属している。つまりデロイアに駐屯してはいるものの、第8軍とは異なる命令系統下にある。これはデロイアの州昇格後も変化していない。

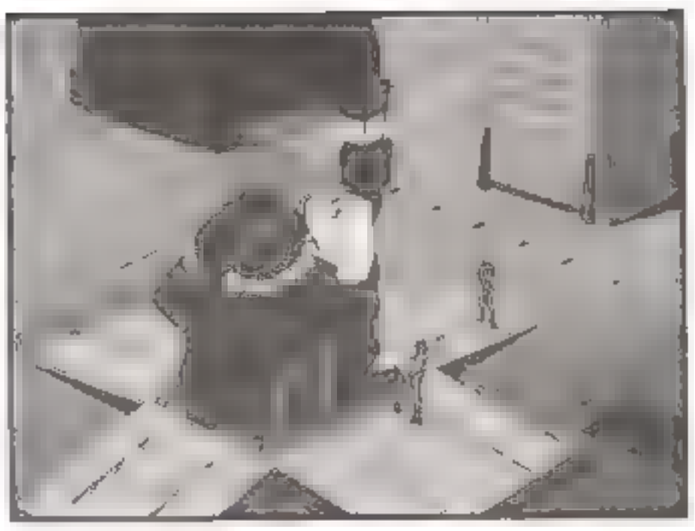
連邦軍兵士　防寒服
北極基地は当然のことながら[illegible]地のため、すべての将兵は防寒服[illegible]につけている。

地球とデロイアを結ぶ唯一のゲートである北極ポート[illegible]便の[illegible]

北極基地司令部（[illegible]）
デロイア星の北極点に位置する、現度については疑問が拭えない

#04 実戦のコクピット

【予告編】 動乱の星デロイア　吼える大地　唸る空
叫ぶ風　遥かなる父を求めて　獅子の血が燃える



輸送しやすいようにパッケージングされたソルティック。救出部隊の装備が続々と基地に積まれる。

【ストーリー】

ノヴン・シュタインの独立宣言後、反乱軍北極基地司令ブレナー大佐は地球　デロイア間の行き来を絶ち、ターミナルへ繋がる宇宙の孤路を閉鎖した。

そんな緊迫した情勢の中、とっくにカーディナルへ行きたいクリンは、私かに見切りを付けて北極レッド　ディナルの中継都市サンドレアへ向かう。行便がないのなら、そこから鉄路でカーディナルに入ろうというのだ。しかし、列車も自分合で運休状態であり、線路も連邦軍兵士たちによって閉鎖されていた。

デロイア独立　規軍を名乗る反乱軍の攻略目標かサンドレアとの情報を得たレークたちも、急ぎサンドレア基地へ移動して部隊の編成をはじめた。その様子を見た記者ソルターフは、もう少し「事」を進ませるためにもムスイノラ対応型CBアーマーも完成し、それを持たない連邦軍に対して圧倒的優位を得ることができたはずなのに、なぜそれを待たずに独立派は決起したのか？　と疑問をレークとラコックに投げかける。

フコックがその言葉に口をひそめたとき、ロッキーたちを伴ったクリンが姿を現し、軍に便乗させてほしいとレークに頼み込んだ。むろんレークはこれを拒否、もともと乗りなどなかったロッキーは、皮肉な笑みを浮かべてその場からあとにした。

と、その直後、反乱軍のクラフガンナー部隊が基地を襲撃した。予期しない敵の攻撃に、最初の[illegible]が次々に破壊されていく。このままではいいようにやられて[illegible]まうと考えたクリンは、パイロットをリ[illegible]ルティックに乗り込みクラブガンナーへ立ち向かう。実戦の苛烈さに恐怯しながらも、クリンはなんとか敵機を撃破することに成功した。実戦での勝利に意気揚々とするクリンだったが、レークは彼の勝手な行動を厳しく戒めるのだった……。

時でも地球人に頼ろうとした自分たちが馬鹿だったのさ、と自嘲気味に笑うロッキー。

クリンは出撃準備中のソルティックに乗り込み、基地を奇襲した独立正規軍CBアーマー隊と戦う。

連邦軍曹長ダーク
レークが地球から連れてきたCBアーマー隊の指揮官を務める腕利きの下士官。妻と子どもがいたが、後にクリンと戦い戦死する。

【ワンポイント】

緊迫感を増しつつある情勢、相変わらず市民、不審な点が多い反乱軍の行動など、[illegible]デロイアの[illegible]格へ[illegible]伏線が張られていく。その一方でロッキーたちのクリンに対する感情は、注目したい。確かにロッキーはクリンに冷たい態度をとり、彼を寄せ付けないように振る舞うが、それこそいながらクリン個人を嫌っているわけではないという心の奥底が見え隠れする。ロッキーはデロイアと地球の問題にクリンは関係ないと言い、ロッキーは現実はそう甘くないと応える。短いながらも実に秀逸なやりとりだ。

【完本】

★起動カード〈#03〉
フルティックを起動するためのキーとなるこれをコンソールのスロットに挿入しなければいけない。コンピュータは動かない。#02では紙だったが、今回はカードに描かれた

■CBアーマーの開発時の名称。ラ[illegible]ると[illegible]に用いられた。レークは開発[illegible]してしまったのだろう。

■北極ポイントとカーディナルの間に位置する都市。カーディナルとは[illegible]

#05 戦時特例法205号

#05 戦時特例法205号　#06 暁の救出作戦

レークが指揮する部隊に同行したラルター・フは、今回の叛乱についての疑問点を並べ立てていく。

【予告編】　吹き飛ぶ砲塔　千切れるキャタピラ　燃える装甲板
踏みしめる大地から　動乱の鼓動が伝わってくる
父のいる都はいまだ遠く　行軍は続く
運命はクリンを戦場へと誘う

おいてけぼりを喰らったクリンは我慢できずにソルティックを持ち出し、強引に救出作戦に参加する。

【ストーリー】

サンドレア基地の後片付作業が開始される中、レーク、ラコックの別働隊を搭載した航空機がカーディナルから1200キロの地点へ向けて進発した。クリンも同行を求めるが、付の役にもたないとしておいてけぼりを喰ってしまう。

ラルターフはハリのきいた文面で戦の説明を受けるが、いまひとつ納得がいかなかった。たとえ本隊が増援としても、後からのやってくるにしても、反乱軍200人に対してレークの別働隊の兵力はわずか個中隊あまりしかおらず、十分とはいい難い。しかも作戦はラコックのもたらした情報に依拠し過ぎている感が強かったからだ。ラコックたちは作戦案にはコンピュータによるモデル試算が用いられており、その結果は信用に足ると言い切るが、長年のジャーナリストの勘なのか素直に納くことはできなかった。

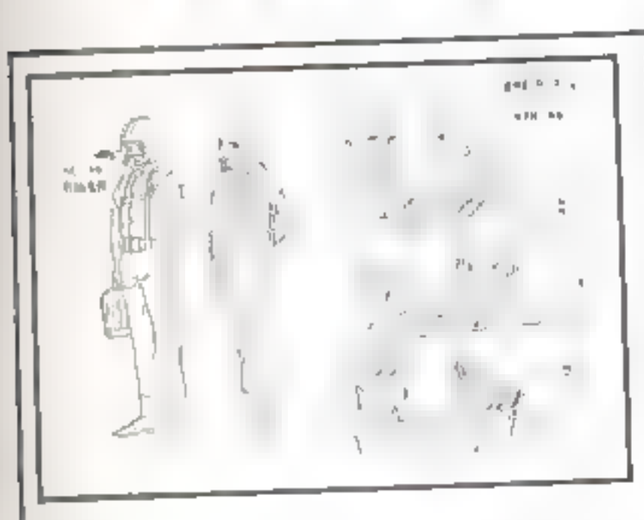
レークたちが目標地点に降下し設営したころ、クリンがソルティックを載せたトレーラーを強奪したとの報せが入った。レークは基地のロックウッド少佐へクリンは発見次第逮捕すると伝え、移動準備を整えると部隊をカーディナルから北へ8キロの地点、バーディング・ヒルへ進発させた。移動中の車内でラルターフは、今回のフォン・シュタインの行動には疑問点が多く裏に何か真相が隠されているのではないか、とラコックに議論を吹っかける。

そして日暮れ後、サンドレア基地から救出作戦の本隊が出撃するのと前後して、ダーク曹長が指揮を執る防衛部隊が反乱軍の警戒ヘリに遭遇、続いてクラブガンナー隊と交戦状態に突入する。クラブガンナー隊は強く、別働隊は苦戦を強いられてしまう。そこへクリンの駆るソルティックが到着し、ラコックの窮地を救った。戦闘終了後、レークはクリンを逮捕しようとするが、ラコックの進言で戦時特例法205号に基づき、クリンを補充要員として准尉に任官させるのであった。

【ワンポイント】

相変わらず断片的ではあるものの、独立正規軍による反乱事件の様相が少しずつ明らかになっていく。

スタッフはカーディナル市そのものは描かず、ラコックの計いや救出作戦の内容という周辺情報をちりばめることで反乱の輪郭を見せ、そこから核心に迫っていくという、推理物に多い手法を採用した。今回の事態に関する様々な疑問点をラコックにぶつけ視聴者の予想を裏切し、そこへ誘導していく彼の姿は推理物の探偵を想起させるクリンがまの上人公なら、ラルターフは、本エピソードの裏の、人公ってえんだろう



連邦軍CBアーマー　パイロット
連邦軍のCBアーマーにはクラブガンナーやソルティックなど数種類が存在するが、パイロットスーツなどはすべて共通している。

デロイア星　カーディナル市全景
デロイアの中心都市であり、州立化した後は州首都となる。中州に政庁および議会が存在する。

■別働隊（#05）
レークが指揮官を務める部隊。呼び出し符丁はホワイトハイル。ソルティック5機、オジステッド兵員デュティ機（ヘリ3機）を搭載する

■ロックウッド少佐（#05）
[illegible]ルティック[illegible]ライトを車い運走す

#06 暁の救出作戦

【予告編】 動乱の都カーディナルを眼下にして　クリンの心ははやる
父は無事か　鉄の戦士に翼つけ　あらぶる魂がテイクオフ
戦場の夜明けに真実は見えるか

ダーク曹長率いるCBアーマー隊は、グライダーを使って上空からカーディナルへの侵入を開始。

クリンが声をかけてもドナンは一瞥しただけで、老獪な政治家の貌を崩すさず事態の収拾を進めた。

【ストーリー】

レクたちの偵察隊はついにハーディンク・コルに到達した。数人に偽装した斥候が市内に侵入、収集した情報をもとに、ドナンたち議会員たちが監禁されている場所は事実上定された。救出作戦の内容は、あと深夜12時の作戦開始を待つだけだ。その様子を見ながらレクタ　フは、デロイア人としてはじめて市内に生まれた境遇にあるフォン・シュタインは反乱決起する理由がない。また、どこもすべてにおいて連邦軍の狙い通りに事が進み過ぎているように思える、とのかねてからの疑問をクリックにぶつけるか、彼はまったく取り合おうとしなかった。

一方監禁された議員たちは、デロイア独立賛成派と反対派に分かれ議論を交わしていた。独立は歴史の必然だという賛成派に対し、ドナンは地球との戦いの原因になるとして反対の態度を崩さない。しかし結局は押し切られ、独立の宣言をすることに同意する。

そして深夜、救出作戦がはじまった。作戦は成功し反乱軍は鎮圧され、議事堂も救出部隊の手中に落ちた。だがそこでクリンたちが見たものは、親しげに談笑するドナンとフォン・シュタイン、そして銃を突きつけられた独立派議員たちの姿だった。

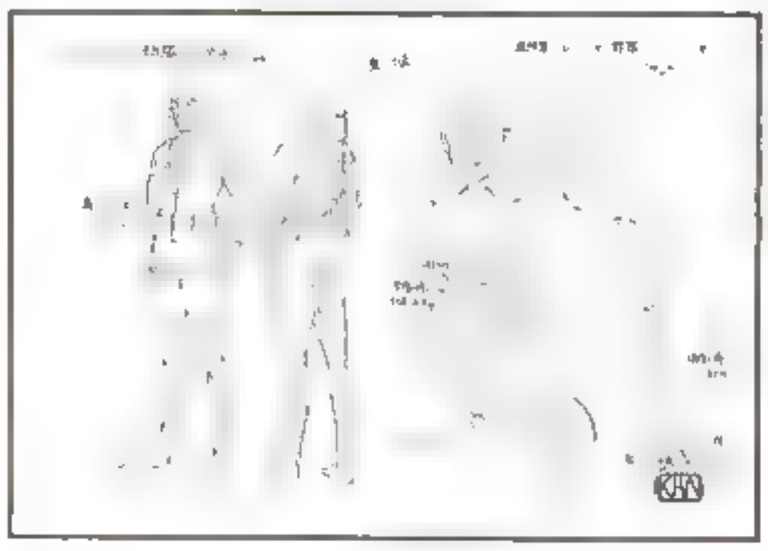
ドナンは反乱は独立によって利権を得ようとした議員たちの策謀が原因であり、フォン・シュタインは言葉巧みに騙され利用されたに過ぎないのだと説明した。またフォン・シュタインも、自分の望みは独立ではなく植民地がロイアを第8番目の州と連邦に認めさせ、議会に議席を得ることであったと語る。

思わぬ事もが予想外の展開に驚く中、ドナンはデロイアの州昇格を認めると宣言し、フォン　シュタインを

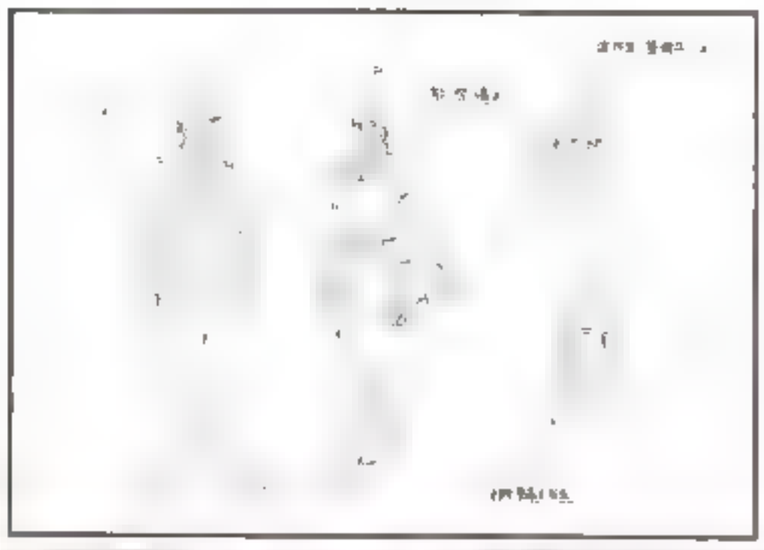
その代表に据えるのだった。事の成り行きにルタ　フは胡散臭いものを感じていたが、とりあえず反乱は独立議員の逮捕で終結を見た。

【ワンポイント】

反乱事件のクライマックスにふさわしく、政治と事件が入り乱れて展開する　ドナンの「ひとりではできないケンカもふたりになればできる」と、独立宣言は独立の必然という結果は、現実世界においても幾度となく唱えられてきた言葉であり、事実、第二次大戦後に相次いだ東南アジアの植民地独立闘争や連邦解体という歴史的事実を想起させる。これこそ本作のテーマのひとつであり、放映からおよそ26年、いまもなお色褪せない要因でもある。自由と民主主義は人類永遠のテーマなのだ。



連邦軍レンジャー部隊
独立正規軍が占拠する議事堂に潜入、囚われているドナンたちを救出する任務を帯びていた。



連邦軍整備兵
サンドレア基地で復旧作業に当たっていた兵士。

[illegible]

★ダークの忠告（#06）

[illegible]

クのコクピットを点検しようとしたクリンに、CBアーマー隊員のダーク曹長は「その仕事でメシを喰っている連中がいるんだ。素人はしないでおくんだな」と忠告する。

[illegible]

嫌われたら、CBアーマーひとつ満足に動かせねえぞ」と続け、[illegible]ンは気を利かせたつもりなら[illegible]が、彼の行動はそれぞれの職分を侵[illegible]

[illegible]

よれば、地球は食料と資源の40%以上をデロイアに依存しているのだという。作中で再三語られる[illegible]

[illegible]

り、確かに地球はデロイアなくしては存続できないとドナンが言うように、両者が対立したら、地球は戦わずして屈服せざるを得ない可能性が非常に高いと言える。つまり彼[illegible]

[illegible]

#07 ゲリラ狩り

#07 ゲリラ狩り　#08 裏切りのデロイア

【予告編】 デロイア州誕生　[illegible]　デロイアの動乱は
理想的に終息したかのように見えたが
権力の暗闇はゲリラを生んだ　植民の星に硝煙は消えない
流れる赤土は大地を変えることができるか

第8軍はゲリラ狩りにCBアーマーまで投入し、地下潜伏中のゲリラたちを狩り出していった。

クリンは連邦軍のやり方を見かねゲリラを逃がすが、そのため連邦軍将校に射殺されそうになる。

【ストーリー】

事件後、暗殺のことを公にしたドナンは、もはやデロイア州は植民地ではなく真に連邦を構成する一員であり、独立はないと改めて発言した。続いてデロイア州政府の首長となったフォン・シュタインは[illegible]に臨み、報告を操作、デロイアと地球の離反を画策する者は徹底的に取り締まると宣言、[illegible]な措置をとる。その最も顕著なものは、協力者には報酬が与えられるというものだ。つまり密告の奨励である。その結果デロイア人が同胞を売るといった状況が頻発、独立運動は奴らに取られていき、それは容赦のないゲリラ狩りの様相を呈していった。そして金のために同胞を売る密告者の存在に、カーディナルに戻ったロッキーは故郷の変貌を痛感する。また、クリンもドナンのやり方が間違っていると感じていたが、彼にそれを思い出させる力は、いや、術さえなかった。

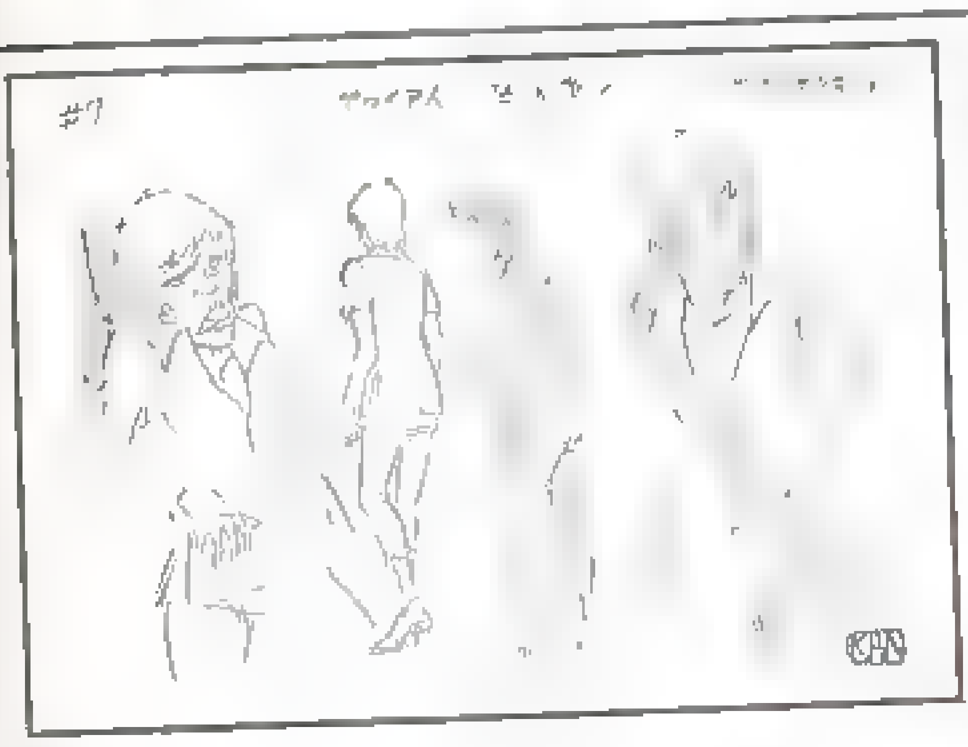
その頃ラルターフは、独立運動の思想的支柱と目され指名手配されているサマリンとの会見を実現。反乱事件の真相について、あの反乱は独立派をおびき出し、かつ、ドナンの政策に反対する議員たちを排除することを目的としたものだったのだ。

街へ出たクリンは連邦軍の情け容赦のないゲリラ狩りを目撃、感情に駆られて、兵士たちを敵に回してしまう。危うく射殺されそうになった彼を助けたのはサマリンだった。ドナンの弾圧政策は間違っていて、独立派の機運を高めていると指摘するサマリンは、クリンに極秘のアジトに[illegible]されているダグラムを見せる。

敵側の指導者の息子である自分になぜ？　と問うクリンにサマリンは「君は父ドナン・カシムではない！　私は個人を信じる。組織だとか社会を後ろ盾にする人間は軽蔑する。個人[illegible]、ここで社会は成り立っているんだよ」と熱く語ったその言葉はクリンの心に深く突き刺さったのだった。

【ワンポイント】

ドナンの対極に位置し、彼[illegible]、クリンたちを見守る形で、サマリンが登場する。彼は歴史学者であり、その観点からドナンの対デロイア政策が誤りであることを指摘していく。さて今回のエピソードで注目すべきなのは、密告者とロッキーのやりとりだろう。同胞を売って金を得た男の「この金があれば、一家5人飢えないですむんだよ」と[illegible]、ロッキーは憤然として何も言えなくなってしまう。綺麗事ではない家庭で育った彼には、男が抱えている家族の重さがイヤというほど分かってしまうのだ。


デロイア人密告者
独立運動家やゲリラたちの居所を連邦軍へ通報していた。すべては家族を食わせる金を稼ぐためだった。

連邦軍背のう
連邦軍がゲリラに対し優位を保った理由のひとつに、装備が優れていたことがあげられる。背のうひとつとっても、良質な装備を兵士に与えることが、良き軍隊を作り上げることとなる。

■密告（#07）
貧窮するデロイア人男性は、ゲリラのアジトを軍に密告することで家族[illegible]同胞を売ったことは許し難いが[illegible]かった

■[illegible]る」という記事を[illegible]の操作は支配の初歩であり、常套手段でもある

■[illegible]乗った名称。多くのデロイア人兵士たちがこの名前に騙され集い、そし[illegible]た

■[illegible]名目上のお飾りでしかなかった

#08 裏切りのデロイア

【予告編】 デロイア・ゲリラが開発したXネブラ対応型CBアーマー・ダグラムは　ついにその姿を見せた
その性能は　その力は
ダグラムがデロイアに　新たなる風を呼ぶ

親友ディオルを殺されたロッキーは、地球人に対する怒りをクリンにぶつける。

デロイアの現実を知ったクリンに、サマリンはなぜ自分たちが独立を求めるのかを教える。

【ストーリー】

デロイアの刑務所、[illegible]は理想的な形で、政治犯のように見えたが、根本的解決を避けた政治的取引は多くの抵抗ゲリラを生み、事態を悪化させつつあった。独立を求めるデロイア人たちへの弾圧を目の当たりにし思い悩むクリンに、ラレタ・フはもう現実を見なければならない、そうしないとディオルの甘さは、生なかなものだ、と言い、彼を元狙撃手規軍の兵士たちが集まる場へ連れ出す。

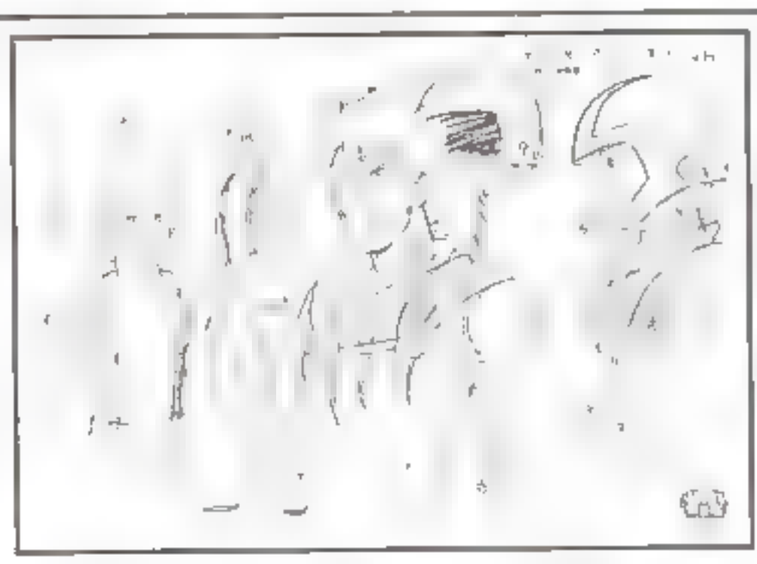
「ロッキーは、この情勢下に甘んじて、妥協に日々を過ごそうとする兄夫婦に嫌気がさし、家を飛び出していった。クリンはトナンとゲリラ狩りのリーを求めるが、多数の繁栄のためには少数は切り捨てざるを得ないというドナンが聞き入れるわけがなかった。クリンに意見を求められたサマリンは、政治とはそうしたものであり、ドナンの言葉であれば中央のことだと答える。

なぜデロイア側からまれば求める答えは異なる。サマリンは目指している方は少数の意志が多数の中へ反映される社会であり、クリンにそのために戦い――ダグラムのパイロットになってほしいと訴める。

あるサマリンによって、デロイア側から意見が語られはじめる。面白いのはサマリンがドナンの一張にも正当性があることを理解したうえで、独立を主張するという図式だ。政治とは妥協の産物であり、意見の対立は交渉のはじまりなのだ。それは有史以来の歴史のあらゆるところにある。歴史者であるサマリンは、確かにその教訓を実践しようとしていると、えるだろう。

【ワンポイント】

これまでデロイア独立の見方は、地球人であるクリンに議員レーの間だけで語られてきた。しかし今回、独立運動の支柱であり思想的指導者でもあるサマリンの見方が語られ、デロイア側の意見が明らかにされる。



キャナリーの兄
ディオル・ドネット
第8軍に属するCBアーマーパイロット。独立運動に参加したものの、フォノ・ジュタインの裏切りにあい、それでも残った同志たちとともに独立を唱え死んでいった。

私服の憲兵
トナンの命を受けてクリンを尾行し、サマリンたちのアジトやダグラムの工場の所在を突き止め通報した。

【完本　太陽の牙ダグラム】

#09 ダグラム奪回

【予告編】 新鋭CBアーマー・ダグラムを巡り　植民の星に父と子の
愛憎が渦巻く　目には目を　歯に歯を　力こそが正義か

身の潔白をしめすため、クリンはカーディナル基地に潜入し、独力でダグラムに乗り込み奪還する。

#09 ダグラム奪回　#10 ガルシア隊参戦

【ストーリー】

サマリン派ゲリラの拠点だったダムは軍部の手中に落ち、サマリンとダグラムのみなどあらゆる機材や資材は残らず押収されてしまった。サマリンの側でだったスタンはかねてからこのような事態に際して申し合わせていたように、警戒をうけまために仲間を連れてゲリラのシンパが多いボナール市へ向かうが、バックスは新しい拠点を作るためにカーディナルに残った。ロッキーとキャナリーはダグラムの機密を守るために爆破すべきだと主張、チコたちデロイア7の仲間とともに基地潜入を目論む。

独立派勢力のXネブラ対応型CBアーマーの実用化を阻止したい連邦軍は、奪ったダグラムを徹底的に解析しその性能を暴こうとする。用いられている部品や技術の詳細が明らかになれば、それらがどこで生産されたのか特定することが可能となり、ひいてはダグラム量産計画の頓挫へと繋がっていくからだ。

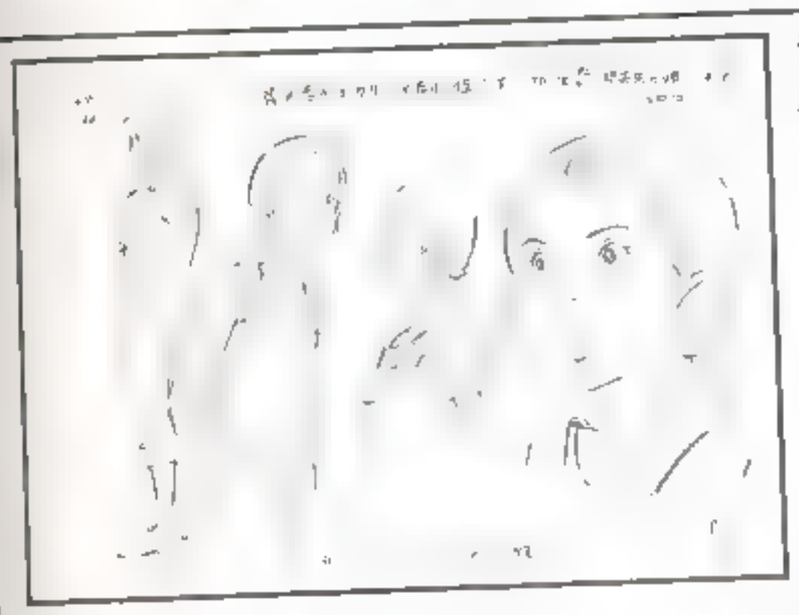
調査が開始されたダグラムを前に、サマリンとドナンの会見が行われた。分離したふたつの国家はやがて対立し争うようになる。これは歴史の記すところであり、ゆえにデロイアの独立を許すことはできない、と語るドナンに、サマリンは地球は民主主義と公平を謳いながら、常にデロイアに対し優位に立ち統治を進めてきた。デロイアが求めるのは対等な立場であり、「まやかしの民主主義など必要ない」と喝破する。さらにドナンが「不幸な結果になっても、ですか？」と言うと、「それは民衆が決めればいいことです」と毅然として答えた。

会見終了後、事件は起こった。密かに基地へ潜り込んだクリンが、ダグラムに乗り込み暴れはじめたのだ。これを知ったロッキーたちは爆破を撤回、CBアーマー用トレーラーを手に入れダグラムを載せると軍の追撃を振り切って逃亡する。身の証を立てたクリンをロッキーは共に戦う仲間と認めるのだった。

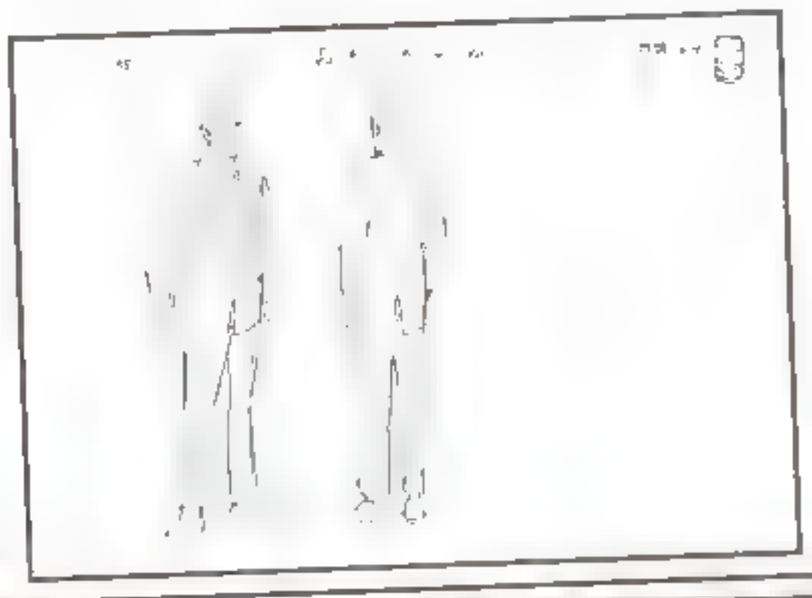
ロッキーはダグラムを奪い返してきたクリンを仲間と認める。ここに若者たちの戦いがはじまった。

【ワンポイント】

今回の見どころはドナンとサマリンの会見、そしてクリンのダグラム奪回だろう。虜囚のサマリンがドナン相手に物怖じもせずに、その政治哲学と歴史観を語るシーンは本作一、二を争う名場面である。そして物語はクリンがダグラムを奪回すると、一気に静から動へ変転。一微なクリンの誠実さとそれに感じ入るロッキー、彼らは十人公正んべき資質を見事に見せてくれる。



デロイア星　ダム近くの開拓民の娘
川に飛びこみ意識を失っていたクリンを助けた。クリンがゲリラとは思っても、地球人とは気づかなかったらしい。



技師
カーディナル基地で捕獲したダグラムの分析に当たっていた。

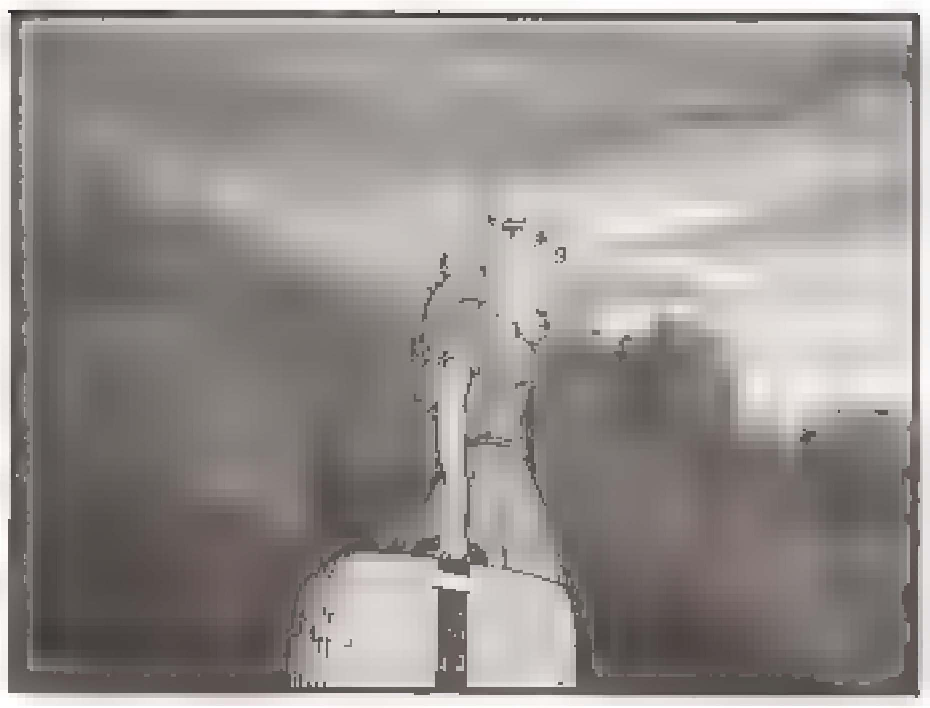
■Xネブラ対応型（#09）
コンピュータの機能を極度に低下
技術が施された機体。連邦も実用化
に先を越されてしまっ

■ドナンとサマリンの会見（#09）
ドナン「地球とデロイア（つまり）」

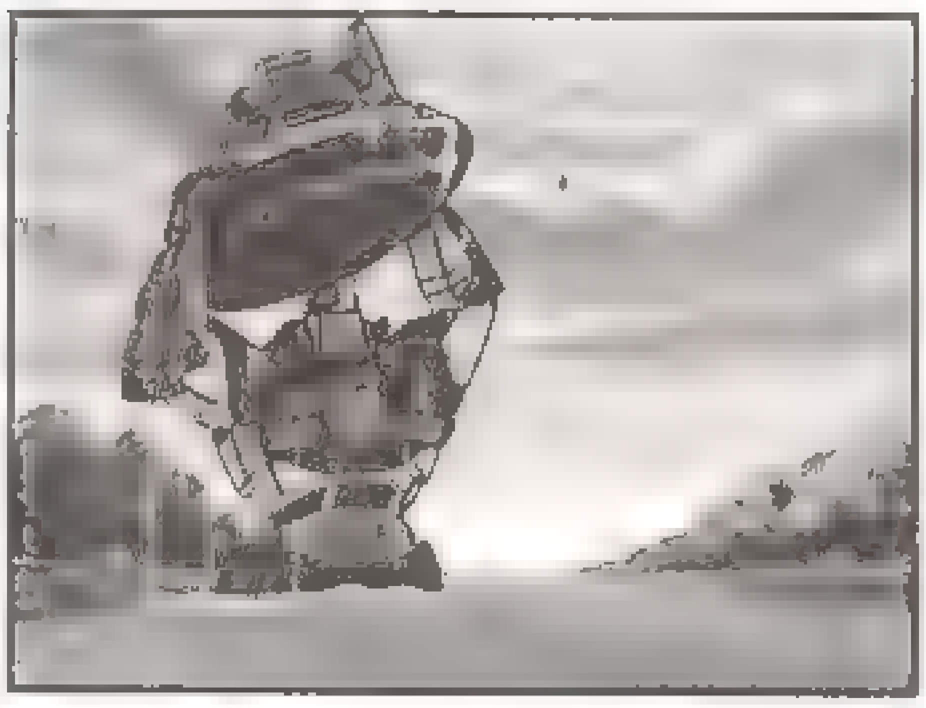
（中略）地球のやり方はいつも同じ
手続を外してもらっても囚われ
し合っていても、まるで立場が違う
ドナン「同じ人間同士が血を流し会
らお分かりになるはずだ」
未来です。（中略）創造です！過
去に人間が果たし得なかったものを
創るのです」
ですか」
サマリン「同じ立場に立てるように
ですが、そのために
流しても
います。人間を尊重なさるなら、
まずそれを尊重して頂きたいです
な。（中略）我々に立脚

#10 ガルシア隊参戦

【予告編】　それは許されぬコクピットなのか　それも定めなのか
鉄の戦士との出会いが　若者を
大きな川の流れへと投げこむ



デイジーは思い悩んだ末、置き手紙を残し家出、クリンのいるデロイアへ渡ることを決意する……。



武装ホバークラフトは、短時間なら水中行動が可能なダグラムにあえなく撃破されてしまう。

【ストーリー】

対ゲリラ戦を得意とする傭兵部隊、ガルシア隊がフォン・シュタインの招きでカーディナルへやって来た。任務の内容はダグラムの奪回である。独立派のシンボルとなりつつあるダグラムを、連邦軍が総力をあげて叩きつぶしたのでは民衆から反感を買ってしまうと判断したフォン・シュタインは、粗暴な振る舞いと汚いやり口で嫌われているガルシア隊に行わせることで、非難の矛先をそらせようというのだ。これに伴いレークを後方勤務へ転換させ、その指揮下にあったターク曹長のソルティック隊はガルシア隊へ一時的に編入された。だが今なすべてのガルシアに、ダグラム撃破の手柄をダークたちに渡すつもりはなかった。

その頃クリンたちはハックスの手引きで、カーディナル川を船で進んでいた。目的地はこの大陸中で最もゲリラ勢力が強いボナール市で、この地でダグラムと歩兵用リニアガン・Eガンの取引を行うというのだ。試作品のEガンを渡されたロッキーたちは、その威力の大きさに大いに意気を上げる。

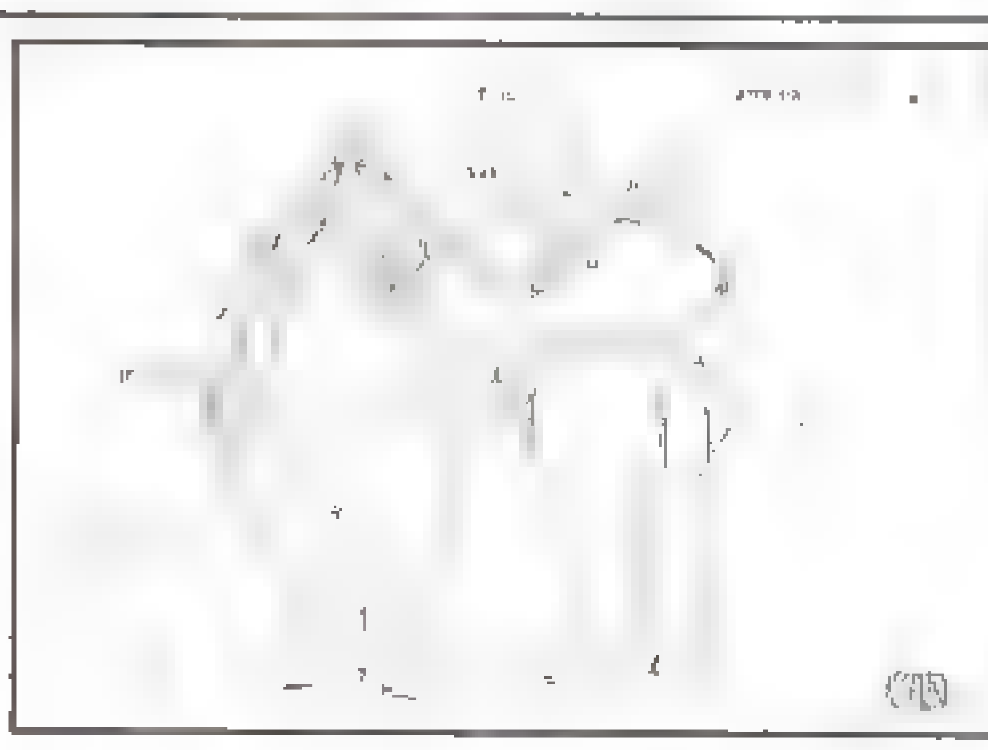
一方クリンと離れてはじめてその存在の大きさに気づいたデイジーは彼に会うため、置き手紙を残してデロイアへ旅立った。果たして彼女の前にはどのような試練が待っているのか。

連邦軍の哨戒ヘリからハックスの船を発見したという報を受けたガルシアは、ダークに教えることなく追撃に向かった。だが彼らが到着をする前に、河川で臨検を行っていた治安警備隊が船に接触した。臨検を求められたクリンたちはダグラムを起動し、警備隊のホバークラフトと交戦状態に突入した。通常、水上戦闘ではホバークラフトが圧倒的に優位を誇るが、今までのCBアーマーにはない可潜能力を生かして攻撃し撃破に成功し窮地を脱する。だが安心するのは早かった。ガルシア隊が着実に迫っていたのである。

【ワンポイント】

1クール目を代表する敵役ガルシア。彼が率いる傭兵部隊が登場する。ここからクリンたちの本物のゲリラになるための通過儀礼ともいえる、戦闘のプロを相手にした戦闘がはじまったのである。

また、本編以前あるいは他の土地でゲリラ戦が行われているであろう事実を示唆している。ゲリラ狩りに精通した傭兵部隊という存在は観る者の想像力を刺激する。クラブガンナーをより局地戦に対応できるように改修したテキーラガンナーの登場など、いったいどのような戦いが行われてきたのか、興味はつきない。

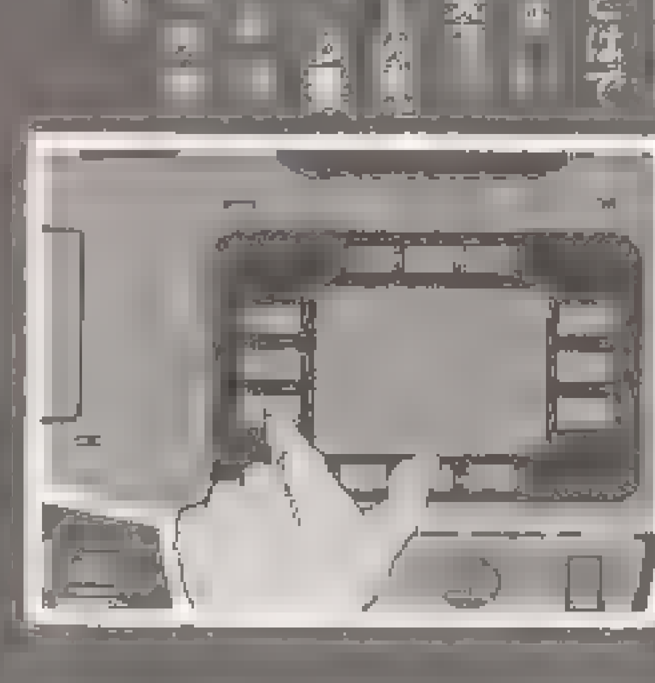


連邦軍中佐　ガルシア
設定画では「連邦軍」となっているが、正しくは傭兵隊、つまり私軍である。正規軍の将兵たちから蛇蝎のごとく嫌われているが、ゲリラ狩りの腕には定評がある。

連邦軍兵士　ライフジャケット
ホバークラフトに搭乗する際のスタイル。カーディナル川を下るロッキーたちを捕捉、ダグラムと交戦した。

[illegible]いう歴史書を[illegible]
でまたゆっくり話し合いましょう
サマリン[illegible]そのときは美味い物を並べたテーブルを囲んで、[illegible]を飲みながらにしたいですな。（中略）クリンのことですが、彼はあな[illegible]

[illegible]ら水中に潜ることを可能とする防[illegible]
装置を装備していないた[illegible]
行動する[illegible]
ことはで[illegible]



#11 遠すぎた父

【予告編】 空回りする車輪　のめる足　泥濘ではまり込んだクリンたち
そこにも人のような嗅覚でケリラ狩りの手は伸びる
戦いは心を癒してくれない　吹っ切れない思いは
誰にぶつければいいのか　父よ答えてくれ

お尋ね者になったクリンを訪ねたため、デイジーはいままでにはわったことのない屈辱を受ける。

ドナンと決別し仲間のもとへと帰還したクリンは、早速ダグラムに乗り込み敵を撃退していく。

#11 遠すぎた父　#12 ためらいの照準

【ストーリー】

西部軍はガルシア隊とダーク隊の2個部隊を用いてタクマの行方を捜索。ここ数日が、その収穫を掴んだのはガルシアだった。そこへファン・ジュタインなるクリンは単身で現れたガルシアは表面上は平静を装いつつ今かと待ち構えるものの、いざとなっては解散するものの、いざというときは始末してしまってもかまわない、理由はなんとでもなるとうそぶく。

ロノキーたちは、トラックのエンジントラブルで立ち往生してしまう。修理が長く掛かることを知ったクリンは、弟を頼りにもういちどトナンとコンタクトを取ろうとした。大勢が捜索するもりだと疑ったロノキーは彼を信じるとともに切り告げ脱出クリンを追いかけるのだった。

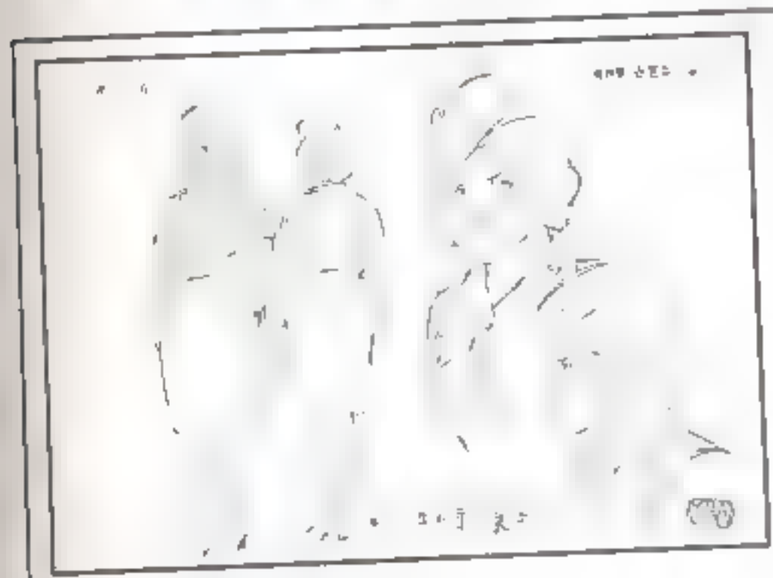
幻を追いかけてロイアを訪れたクリンは、クリンがケーフェ村を救った指名手配されていることを知り大きく動揺する。

緊張感をかいくぐって潜入作戦、姿を現したクリンは、ドナンとサイクリンを狙撃しロイアの独りをねめるよう迫る。しかしドナンはその事に数時間前の出来事、地球とガロイアはひとつであり絶対に独りよがめないとい放つ。クリンは決をくんだ父ドナンへ決別を宣言するとともに、愛を宣言するファイシーを振り切り警兵隊の包囲網を突破、仲間のもとへバイクを走らせる。

その頃ロノキーたちはガルシア隊に捕捉され、テキーラガンナーの猛攻に晒されていた。ダグラムが動かないまま、CBアーマー相手にライフルなどの小火器だけではあまりにも分が悪い。が、そんな状況でもロノキーはクリンの帰還を信じて疑わなかった。完全に包囲され絶体絶命となったそのとき、舞い降りたクリンがダグラムに乗り込んだ。迷いなくテキーラガンナーを撃破していくクリン。形勢不利を悟ったガルシアは即撤退、ロノキーたちは危機を脱するのであった。

【ワンポイント】

クリンが父ドナンと決別するエピソード。指名手配されているにも拘わらず、自分の目にある父への感情、愛情をけるため、敢然体制にある義事へ向かうクリンの生真面目さと、彼を最後まで信じ通そうとするロノキーの男っぷりな心地よいまた、くっつけをこらえるファイシーの健気さか、男同士のロノキ、車を支えているラコノクが思いたたえ今は幻とも、獅子の子は獅子」の言葉通り、やがてクリンはけたれから成度し、解放戦争の大きな役割を担う戦士に成長していく。



連邦軍　女憲兵
ゲリラに身を投じたクリンを訪ねたデイジーの身体検査を行った。高圧的な態度でデイジーを萎縮させた。

ガルシアの子分たちA
ガルシア隊のメンバー。軍規まなきに等しく、素行も悪いことで知られている。

#12 ためらいの照準

【予告編】 別れの言葉はいらない　もう引き返さないと誓ったのだから
ダグラムのために　流された血のために
戦わなければならん　撃たなければいけない
クリンの震える指先が　引き鉄に触れる

デスタンはかねてからの申し合わせに従い、ダグラムをボナールへ運ぶとジョージに告げる。

クリンは仲間を救うため、かつて共に戦ったダーク書長を自らの手で葬らざるを得なかった。

【ストーリー】

デスタンをリーダーとするゲリラたちは森を抜け、ゲリラの拠点のひとつである フォート・ロックへ向かい た。指揮官のジョージは、組織はこれからカーディナルへ行き、残ったバックスを助けるのだという。さらに彼は、ボナールではすでにダグラムの[illegible]体制が整っているが、[illegible]も開発者たちも死んでしまっているため、たった1機完成したクリンの機体が必要不可欠なのだと告げた。これに対しデスタンは任せて欲しいと答えるが、こういうときはは雄弁になる彼をビリーやフェスタは軽口でからかう。

ガルシア隊はすでに彼らを捕捉し、攻撃を開始しようとしていた。ケーラたちは気づきもせず、出発準備を進めていた。

そんな中、キャナリーに地球のスパイかもと拘束され落ち込むクリンを、ロッキーは気にするなと慰める。そして彼はクリンに、自分たちと行動を共にすればかつての知り合いと戦うことになるかもしれない、そのときおまえは撃てるのか？と問う。つまり引き返すチャンスはこれが最後なのだ。静かに見つめ合うクリンとロッキー。と、そのとき、ガルシア隊の攻撃がはじまった。真っ先にジョージは戦死、指揮を執るべきデスタンは戦闘を恐れ窮陰に隠れてしまう。

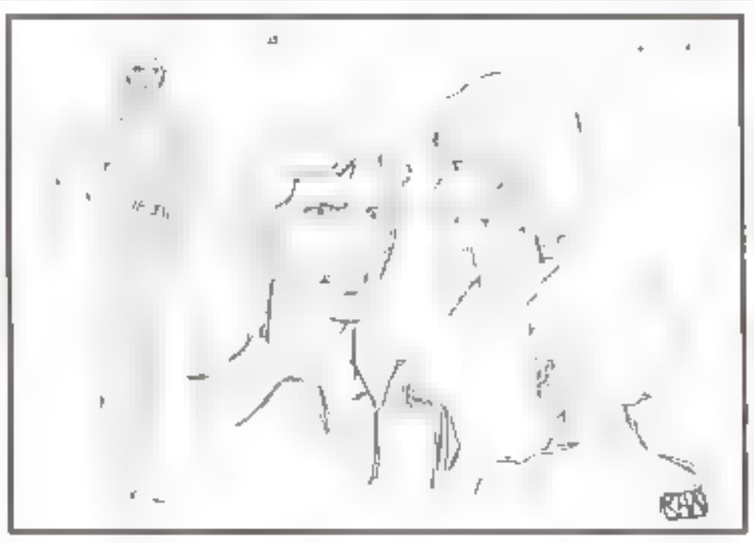
ダグラムの応戦によってガルシア隊を退けることには成功するものの、間髪入れずにダーク書長率いるソルティック隊が襲いかかってくる。ロッキーの言ったことが、早くも現実となってクリンの前にたちはだかった。敵がダークと知ったクリンは戦意を低下、トリガーを引けずに機を逃してしまう。そこへ、ダグラムを助けようとビリーとキャナリーがミサイルでダークを攻撃するとの、又対ニアカンの砲口が狙われる。ふたりの死の危険を前にして、ついにクリンはリニアカンでダークのソルティックを射抜き葬るのであった。

戦いは終わり、ボナールへの行軍が再開された。クリンは流れる血を拭い、仲間のもとへと向かう。彼が帰るべき場所は地球の[illegible]ではなく、もはやデロイアの仲間の元なのだ。

【ワンポイント】

[illegible]のごとく暗い、[illegible]戦[illegible]た[illegible]手を[illegible]のあまりにも重いシチュエーションは、後に本作の原作者である高橋良輔氏の監督作品『[illegible]』SPTレイズナー』で再度描かれることになるか、なんにしろ放映当時としては空前であった。また、これこそが内戦あるいは独立戦争独自の、対外戦争とは大きく異なる[illegible]であり、本エピソードは見事にその要素を描ききったと言えるだろう。

タークを殺すことでクリンは最後の一線を越えたのであり、この瞬間、彼は解放戦士になったのである。



ジョージ
サマリン派ゲリラのひとりで、フォートロック拠点の指揮官。ガルシア隊の攻撃を受けてあえなく戦死する。

ガルシアの子分たちB
人間としての評価はともかく、歴戦の傭兵だけあって戦闘員としては優れた能力を持つ。

たろうな、そ[illegible]
なかなか
「俺は[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]ア側に立って独立運動に身を投じる理由はないし、しかもかつての友人や知人と殺し合う可能性が非常に高い戦いである。ロッキーはその覚悟[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]す。

#13 敵補給隊から奪え

さしものガルシアとオッペも、キャナリーたちの発した偽の交信にまんまと騙されてしまう。

予告編

過ぎ去った思いは断ち切れ　後悔は戦場に置き去りにしろ
明日のため、こ考えなければならない
自ら敵に襲いかかる作戦を　流離う若きゲリラたちには
悲しみよりも身を守る弾の方が重いのだから

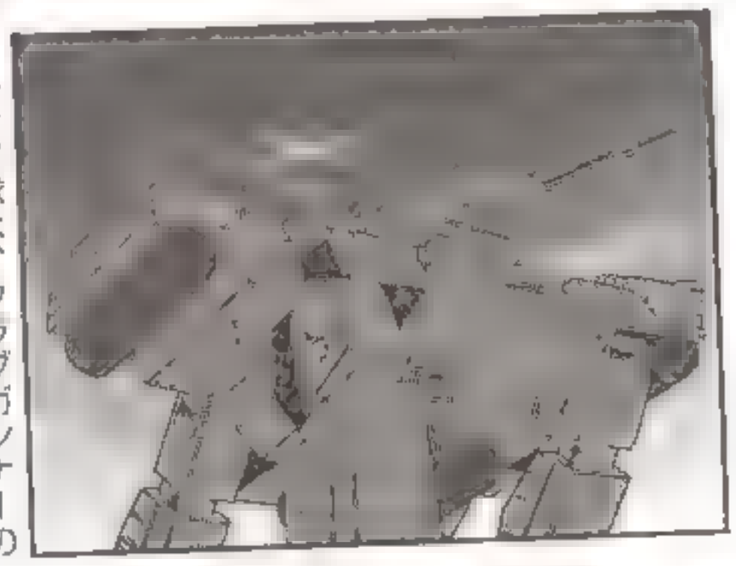
#13 敵補給隊から奪え

ストーリー

ダグラムの燃料ばかりか食料と水、そして弾薬さえも底をつきかけたいま、ゲーラリー反乱はひとく低下していた。フェスタとヒリ　は物資を求めしに出るものの、広大な砂漠地帯に人家などあるわけもなかった。ふたりは斥候を発見、ガレンア隊かもしれないことを察知する。その報告を聞いたデスタンは、ダグラムを放棄すると言い出すがロッキーたちはこれに反対、両者は引行動を取ることになった。

クリンは士官学校のとき教わった知識を生かし、敵の本隊の後方10キロを進む兵站部隊を待ち伏せ、彼らから燃料弾薬に食料物資を奪い取るというアイデアを出す。

作戦は図に当たり、必要な物資を奪い取ることに成功したが、最後の最後で発見されてしまい、ガレンア隊と交戦状態に陥る。ダグラムへの補給は、捕虜にした敵の整備兵ハックルに協力させてなんとか終了した。クリンはダグラムを稼働させるとテキーラガンナーを攻撃、激しい戦闘の結果、岩山が崩壊、ガルシア隊に大きな損害をあたえたうえにロッキーたちは、脱出に成功する。だが物資は手に入ったものの、捕虜のハックルはダグラムには整備が必要で、放っておけばまたすぐに動かなくなるとこぼしたのだった。



ガルシア隊は、クラブガンナーの改良型CBアーマー、テキーラガンナーを、主力兵器にしている。

クリンの策が見事に的中、岩場に誘い込まれたガルシア隊は爆薬による落石で大損害を被った。

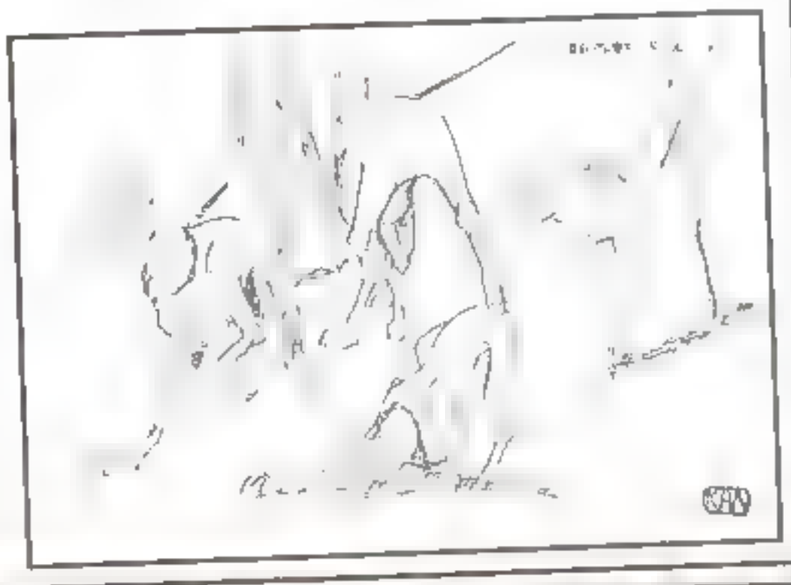
#14 やっかいな捕虜

ワンポイント

補給はその重要性においては戦術よりも上位に位置づけられるとい、娯楽作品で扱うには地味なテーマであるいも拘わらず、嘘けたり誤魔化したりせずに取り組んだことは特筆に値するだろう。またクリンに作戦を立案させることで、士官教育を受けている者といない者の差も上手く描写されている。

ちなみに今回登場したハックルは後に「太陽のオ」の仲間となり、ダグラムの整備を任されていくことになる。彼の有能ぶりは、士官教育を受けた経験のあるクリンだっ

オッペ
ガルシア隊の副官。後にフェスタが爆死する原因となった。コインを使った占いが得意で、また、意外と的中することが多い。



ガルシアの愛犬　ドベル
なドーベルマンで、市民や正兵士に牙を剥きだしにしてるのだが、ガルシアとオッペには子犬のように甘える姿をる。

■補給部隊（#13）

★マナカウラ（#13）

★燃料庫（#13）

#14 やっかいな捕虜

【予告編】 作戦は成功した　だがダグラムに意外な損傷が
連邦軍の捕虜を道連れに砂漠の逃避行は続く
誰かそれを望むだろうか　誰も望みはしない
いまはただ戦士となって駆け抜けねばならん

捕らわれたハックルは殺されないようにするため、あの手この手でフェスタの歓心を買おうとする。

第8軍から戦力の補充を受けたガルシアは、この地でダグラムを捕捉・撃滅しようと策を練る。

整備兵であるハックルは、ダグラムにはオーバーホールが必要だという事実を見抜いていた。

【ストーリー】

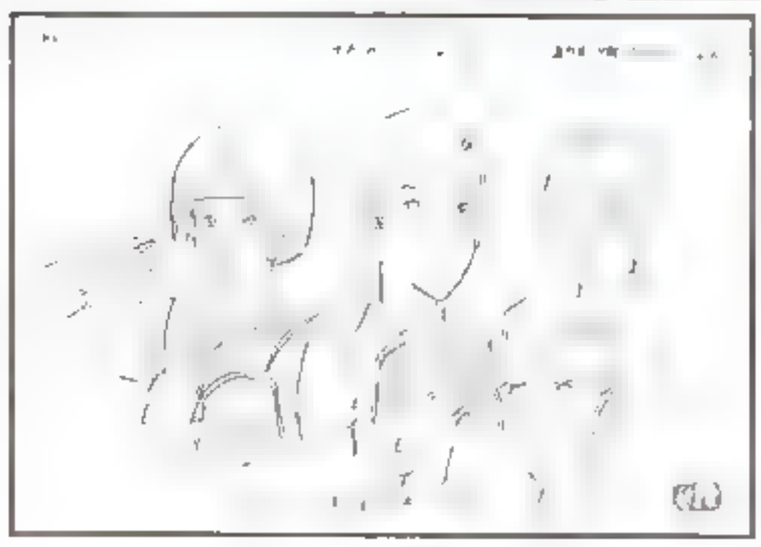
カルンアン隊はダグラムとの野戦で少なからぬ戦力を失った上、ガルシア自身も傷を負っていた。彼はフォン・シュタインに砂漠用CBアーマー、デザートガンナーを含む戦力の補充を要請、クリンたちの一刻も早い討伐の完了を求めるフォン・シュタインはこれを受理した。ガルシアはクリンたちに本当の戦いの恐ろしさを教えてやると、不敵な笑みをうかべる。

ロッキーたちはボナールへ向かうものの、頻繁に行われる敵の偵察のため、身動きが取れないでいた。そんなとき、ハックルの処遇が問題になった。置いていこうにも構わないだろうとクリンは言うが、ダグラムの欠点を知っているスニー的地かボナールだと気づいているからには放り出せない、殺すべきだとする意見が出た。

あわや処刑と思ったそのとき敵の偵察隊が彼らを発見、復讐に燃えるガルシアはまずヘリとミサイルによる執拗な反復攻撃で消耗させ、武器や食料が底をついたところへデザートガンナーが猛攻撃を開始した。ハックルは砂漠ではCBアーマーは動けないことさえ満足に出来ないと忠告するが、やむを得ずクリンはダグラムで出撃した。しかしハックルの無事、ダグラムの脚はその重量を支えられず、砂漠にめり込んでいく。

【ワンポイント】

本エピソードでは、見出された砂漠のアマチュアとプロの差が、はっきりとした形で現れた。ゴミ箱に入れた物資も焼け石に水、カルンアン人手先を打ち計算された行動によって、クリンたちは徐々にそして確実に追い込まれていく。その結果はやがては、ゲリラ狩りのエキスパートの用心棒如き思えるだろうその中で、ハックルとフェスタの間に奇妙な関係が生じはじめる。捕らえた側と捕らえられたはずの人間、同じデロイア人ではあるのに、ふたりは立場を越えておかれた状況を埋めていくのである。



連邦軍少尉　ガセール
基幹戦力の多くを失ったガルシア隊へ、補充部隊を率いて派遣されてきた新米士官。今回の作戦が初陣で、それを祝った母親に香水をプレゼントされていた。

デロイア星　砂漠1
カーディナルとボナールの間には、広大な砂漠地帯が横たわっている。ろくに街もないため、なんの備えもなく渡ろうとするのは無謀の極みである。

■[illegible]

★ピーターパンとティンカーベル
[illegible]
ヘリ部隊とガルシア本隊の[illegible]
し待て。

[illegible]れる若者も多い。

#15 ダグラム砂に沈む

【予告編】 吹き荒れる砂嵐　照りつける太陽　砂漠は巨大な
蟻地獄のようにダグラムを捕らえて離さない
デザートガンナーを戦列に加え絶対の優位に立ったガルシアは　ゲリラたちに巧妙な罠を仕掛けた

ハックルの言葉通り、接地圧の高いダグラムは砂漠ではまともに動くことさえできなかった。

【ストーリー】

砂漠を舞台にした戦いがはじまった。彼女は戦用に開発されたデザートガンナーはダグラムを制圧、ガルシア隊はロッキーたちへの攻撃を開始、その制空権を見せつけるべく、ガルシアはカーディナルではアイがラルターフのもとを訪れ、ボナーレへ乗れて行ってほしいと頼みこむ。しかしラルターフは、ボナーレはゲリラの解放区とも噂される都市だ、どんな危険があるか分からないので、連れてゆくことはできないと拒絶するが、最後には彼女のひたむきさに打たれ同行を許した。

ロッキーたちは砂嵐の中を逃げていた。だがガレンア隊を引き離すことはできないうえに、水も失い完全に追いつめられていた。ガゼールはこれをチャンスと見て即座の攻撃を具申するが、ガルシアは下・動下する。散々引きさせられた仕返しに、ゆっくりいたぶろうというのだ。

そこに気が上むと再び攻撃が開始された。ちょうど撃ち町をあったロッキーたちに、ガレンアはクーンとダグラムを引き渡せば命だけは助けると条件を出す。信用はできないが他に手はなく、クリンは仲間を助けるため、投降を決意する。ハックルの操縦で歩き出したダグラムを見たガレンアは、勝利を確信した。

デザートガンナーの猛攻に、ダグラムは徹底的に追い詰められていく。もはや反撃する手段はない。

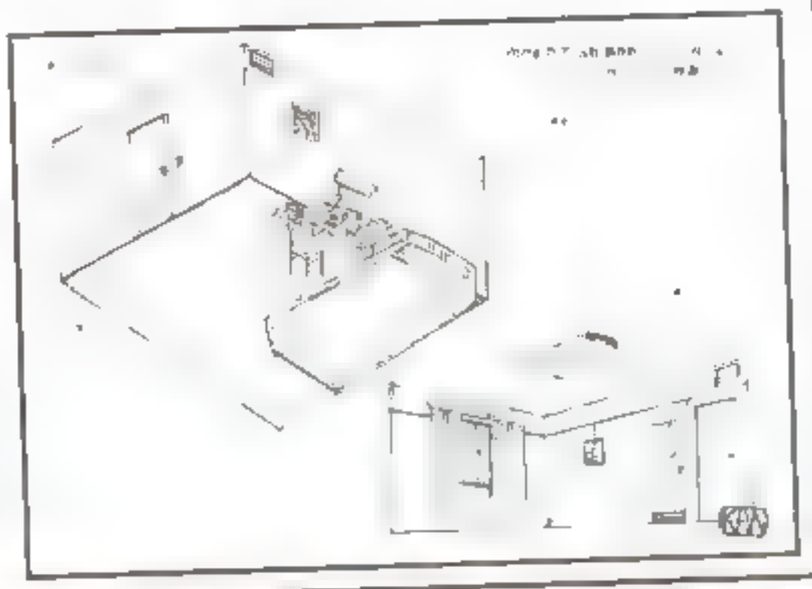
ロッキーたちを助けることを条件にクリンは抵抗を止め、ダグラムと共にガレンア隊へ投降する。

#16 砂漠に熱く燃えて

【ワンポイント】

本気になった老獪なガルシアの前に、クリンたちは立ち向かう術を持たず、ついに投降以外の選択肢を失ってしまった。ガルシアの品性は確かに誉められたものでないが、戦争のプロとしてその戦い方は十分に評価に値する。彼らは常に零敵を行い情報を収集し、有利な状況を作り上げてから目標に対する戦力を投入した。これらは作戦式指揮のイロハだが、実行するのは容易ではない。そこでアビゆえに本気になったガルンアの作戦のほうが優れ果たしてクーンはどうやってこの危機を脱するのか

デロイア星　砂漠2
デロイアには不毛の地が多く、植民開始150年を経た今でも開拓の手が届いていない土地は少なくない。



カーディナル市
新市街ホテル（内）ラルターフの部屋
デイジーの訪問を受けた部屋。ラルターフは利権と感情と圧政の歴史が絡み合い、複雑な模様を描き出しているデロイアの真実をペンで明らかにしようと、ここからロッキーたちを追う旅に出た。

★砂漠用CBアーマー（#15）
そもそもCBアーマーは荒れ地や
[illegible]
[illegible]
は適していなかった。そこでアビ
テート社開発陣は、脚部を6本に増
やし一脚あたりの接地圧を軽くする
ことでCBアーマーを砂漠に適応さ
[illegible]
ナートを生み出したのである。

#16 砂漠に熱く燃えて

【予告編】 いまはこうするほかにない　なにが待っていようと
敵の手の中へ歩いていくほかにない
なにができるというのか　だか　負けたくない
誰にも　何にも

ハックルの操縦するダグラムの掌から降りるクリン。ガルシアとオッペが彼を待ち構えていた。

【ストーリー】

ロッキーたちを生かすために、クリンはハックルの操縦するダグラムに乗れられて、ガルシアのもとへ、投降した。大事な金ヅルなので殺しは、しないものの、これまでの恨みを晴らしにガルシアとオッペはクリンをいたぶり、トドメをさしたかどれだけ今をむしり取るかの相談を始めると、ロッキーたちが引き返してきた。確かにクリンの身の安全は証されていなかった。だからと言って自分を見捨てることなどロッキーには、できなかったのだ。そんな彼らをリニアガンの砲火が襲う。ロッキーたちが戻ってきたことに驚くクリン。嬉々として約束を破るガルシアたちの非道さに耐えられなくなったハックルは寝返りを決意、奸計を用いてクリンと共にダグラムを奪回する。不意を突かれたためにガルシア隊は有効な反撃が出来ず、デザートガンナーも懐に飛びこんだチコのビッグEガンによって撃破された。残る敵機は1機。クリンは格闘戦に持ち込み、これを小破せしめると、形勢不利と見た残存部隊はガルシアを抑えつけ遁走した。クリンたちゲリラが勝利したのだ。

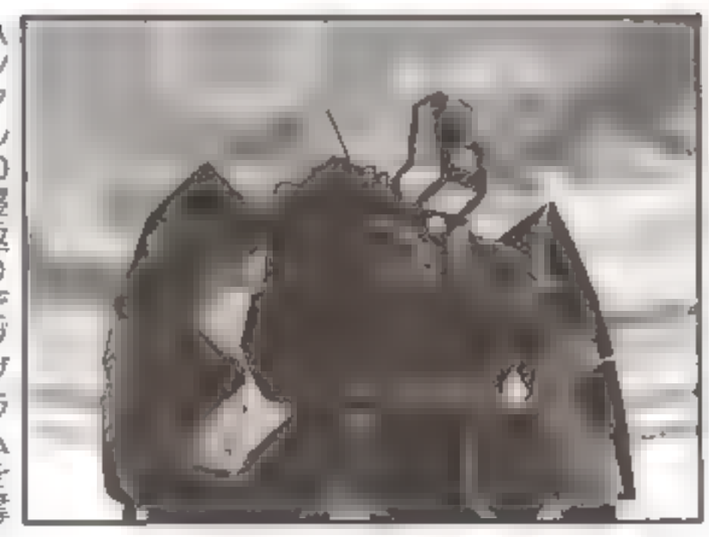
そしてハックルがダグラムの整備士として仲間に加わり、意気揚々と小ナーしへの旅を再開するのだった。

オッペはこれまで散々翻弄されてきた恨みを晴らそうと、クリンに殴る蹴るの暴行を加える。

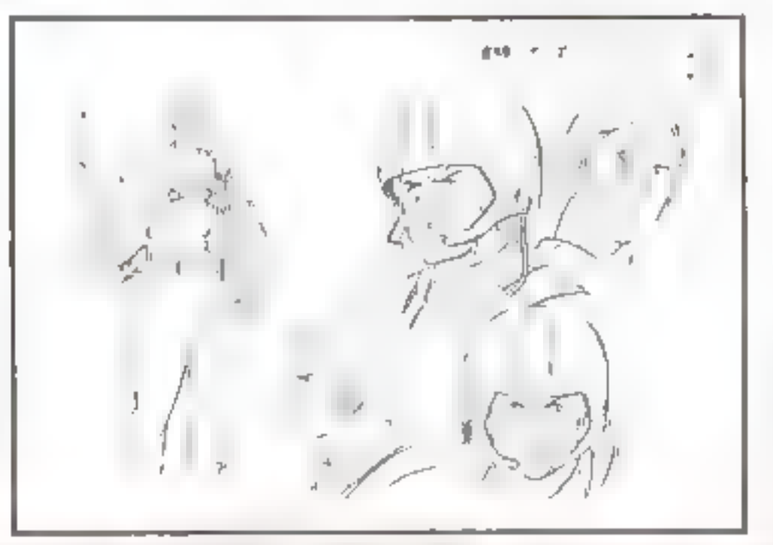
ロッキーたちはクリンを見捨てられずに引き返して来た。彼らの意地を賭けた反撃がはじまる。

【ワンポイント】

ちっぽけな友情と称賛のために、ろくな勝算もないのにクリンを助けるため、引き返してくるロッキーたちの男ぶりが小気味よい。また、クリンのためにロッキーを死なせたくなかった、というキャナリーの女心も胸を打つ。ハックルの寝返る理由も、理不尽が罷り通る中で耐えながら生きている社会人から見れば、青臭くてナンセンス極まりないだろう。だが、それらを押し通し自分に正直であろうとする彼らだからこそ、魅力的に見えるのだ。サマリンもそこに惹かれたのではないだろうか。



ハックルの寝返りでダグラムを奪回したクリンは、強敵デザートガンナーを退けることに成功した。



連邦軍デザートガンナー　パイロット
ガレンア隊ではなく、連邦軍に所属する軍人である。ガレンアの命令に背き戦闘から離脱する。

[illegible]遅してクリンを助けようとす[illegible]
[illegible]で乗がってるだけじゃなく[illegible]と怒鳴りつける。しかしロッキーは力強く[illegible]
そうさ。その安っぽ[illegible]
[illegible]
デロイアのリーダーの面目躍如[illegible]
■オッペの最期（#16）
デロイアが勝利し気が緩んだと[illegible]
ハックルの銃撃によって絶命する。しかし彼の遺した置き土産が、思[illegible]
かけ[illegible]感謝を込め[illegible]ることになる。

【完本 太陽の牙 ダグラム】

#17 死に神の執念

[アラスカ] 起死回生　ハックルの寝返りにより危機を脱したクリンたちは　路希望の街ボナールへ向かう　だが相目を賭けたガルシアの執念が　鬼火のように砂漠に燃える

ガルシアはワサキに銃を突きつけて、失った面子を取り戻すためにダグラムの追撃を強要する

[ストーリー]

ガルシア隊に勝利したロッキーたちはボナールに近づきつつあった　陽炎に揺らめいた　陽炎の中は会議への恐怖か頭かい融れないハックルを、フェスタは不審ながら見ますのだった

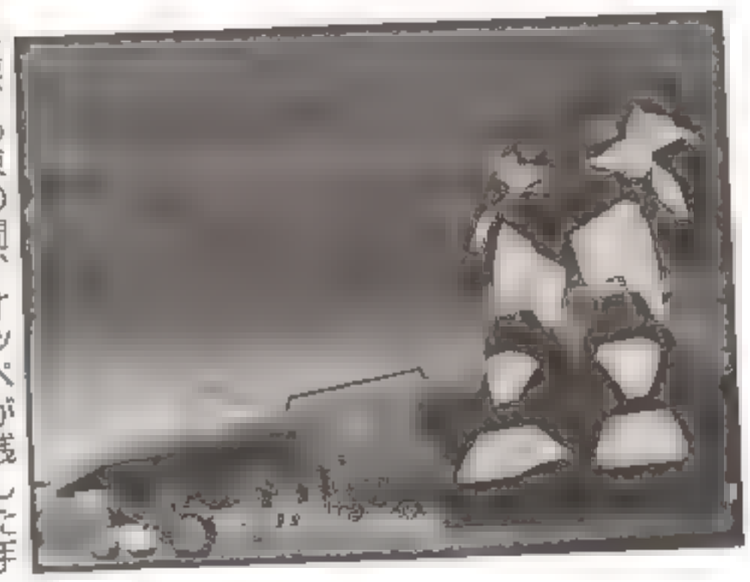
其実、壊滅したカルシア隊はダグラム追撃の任を解かれた　しかし面子を潰されたカルシアは残ったデザートカンナーでの追撃を、救援部隊のワサキ少佐に願い出るが、とりつくしまもなく拒否されてしまう　作戦目的のためにも諦められないガルシアは、ワサキを銃で脅してダグラム追撃を再開する

同じ頃、カーディナルの最事室内ではドナン、フォン・シュタイン、ラロック、レークの間で、発布が来週に迫ったデロイア自治州法案の最終的な詰めが行われていた　レークは政治・軍事の指揮権が代表であるフォン・シュタインに集中し過ぎており、人民の権利と自由を侵害する虞れがあると意見するが、これに対しドナンはデロイアはまたまたすぐ一つを作るには成熟度が足りなく、これらの処置も致し方ないことだと答えるのだった

デロイア7」を抽出したカルシアはワサキを殺害、デザートガンナーに乗り込んで襲いかかった　クリンは接近戦に持ち込もうとするが、ガルシアはフットワークを生かしてダグラムを翻弄する　ダグラムよりも素早いデザートガンナーに、さしものクリンも焦りを隠せない　このままではいけない、なぶられて破壊されて　まうだろう　そこへフェスタのサイドカーが参戦、デザートガンナーの腹部に飛び込んだ　すかさず横に乗ったチョがビッグ王ガンのトリガーを引いた　弾丸を射抜かれたデザートガンナーは爆発、カルシアもついに死んだ

勝利にはしゃぐフェスタだったが、オッペが死ぬ寸前にサイドカーの中へ取り落とした手榴弾が暴発、ボナールを前に爆死するのだった

デザートガンナーで立ち向かったガルシアだが、フェスタの活躍の前に敗北、炎の中に消えた。

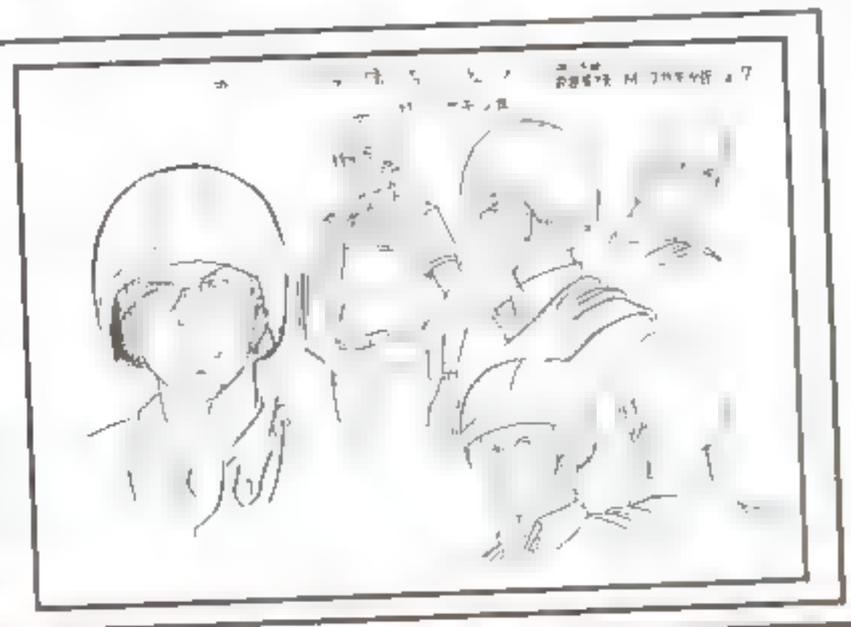


喜びも束の間、オッペが残した手榴弾が爆発し、フェスタはボナールを前に短い生涯を終えた。

[ワンポイント]

強敵との戦いの末でも仲間を助けるためでもなく、単に敵の残した手榴弾の暴発による死」　これほど納得のいかない死はないだろう　だがその無念さが、その無情さが、クリンたちが身を投じた戦争がどれほど厳しく凄惨なものなのかを浮き彫りにしてくれる

あまりにも早いフェスタの死とその事ったなさに、当時多くの視聴者がショックを受けたという



連邦軍救援隊隊長　M・ワサキ少佐
部下を失ったガルシアを助けるため、輸送ヘリを率いて砂漠にやって来た。ガルシアに銃で脅迫された挙句、最後は砲撃を受けて死んだ。

#18 蜃気楼の街

【予告編】 戦いには犠牲が付き物だと言い切るにはあまりにも突然なフェスタの死 悲しみをねじ伏せ戦士たちは闇雲に進む この砂漠の向こうに希望の街ボナールがあるデロイアの大義を守るため ダグラムをボナールへ若者は信じて走った だが…

ボナールに近づいた「デロイア7」は、郊外の放棄された基地にダグラムを隠して街へ向かった。

【ストーリー】

1週間後に迫ったグランプリレースを目指すボナール市は熱狂的なお祭り気分に沸き返っていた。その陰で公安長官グランフェルドは、独りぼっち望まない財界を後ろ盾にし、市長の命令もないのに独自に支持者の市議会議員やランハを逮捕していた。

カール・ハルの裏にきな臭いものを感じ取ったロッキーたちは郊外の基地跡地にダグラムを隠し、クリンとハ・クルを残して街へ向かう。引き換、デイン・レラルターンも、足早くボナールに到着、クリンたちの行方を探すが何の情報も得ることができず、たたなめ息をつくばかりだった。

ロッキーたちはエディからデスタンが裏切り、サマリンが転向を発表したと知らされ愕然とする。

ロッキーたちの来訪を受けたデスタンは妙にそわそわしながら、ダグラムの隠し場所へ案内させるが、その途中でエディが彼は裏切り者だと告発した。

ロッキーたちが引き返してボナールに戻り着いた後、デスタンは命令しきって仲間を連れ車に乗ったのか すぐにゲリラ組織は壊滅し、ボナールは安全な場所ではなくなってしまった。いまも軍はすでに出動し、着々と基地跡地を包囲しつつあったのである。

切羽詰まったロッキーたちは6キロほど離れたエネルギー基地へ、デューイやソルティックの追撃を受けながらもなんとか逃げ・むことに成功した。続々と連邦軍の後続部隊が到着し、基地を包囲するものの、全部隊に攻撃中止命令が下った。この基地が損壊すればボナールの都市機能は麻痺してしまうため、連邦軍も手出しすることはできないのだ。

ほっと一息つくロッキーたち。なお持久戦になれば何の力策もない彼らが敗北することに疑う余地はない。動揺する彼らに、さらなる驚愕の事実をエディが告げた。サマリンが転向声明を発表したというのだ。この声明がきっかけとなって、ボナールのゲリラは自壊してしまったのである。

ロッキーたちは連邦軍の追撃を逃れるために、郊外のエネルギー集積基地へ逃げこんだ。

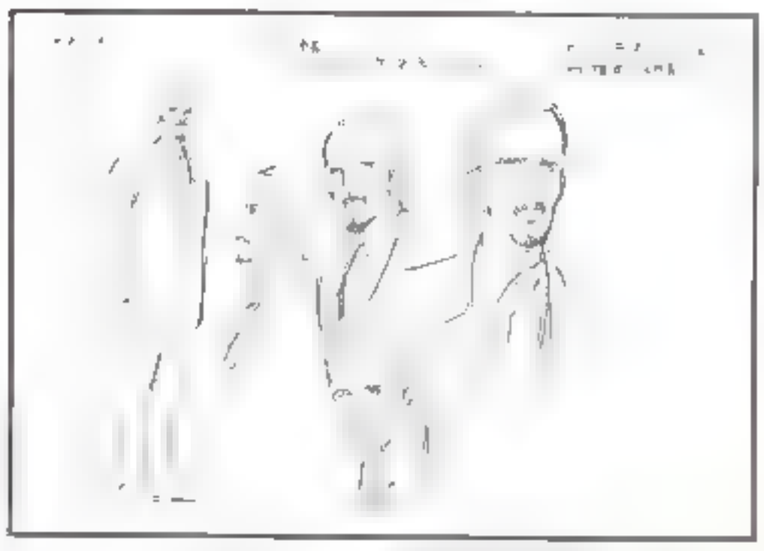
【ワンポイント】

ガルシア隊を撃破し、フェスタを失ってやっとボナールへ辿り着いたものの、そこでクリンたちを待っていたのは組織の完全壊滅とサマリン博士転向という、驚天動地の事態だった。

また、デロイア財界の眼目が、独立運動とそれに関係することを非合法化することにあるとドナンが語るシーンも見逃せない。これまで必死の戦いで戦術的勝利を収めてきたクリンたち「デロイア

[illegible]

ポナール市公安長官グランフェルド
元は連邦軍の軍人で、退役後に公安方面へ移った。フォン・シュタインの軍における同期生で、後に彼の推しで市長に就任する。設定画やクレジットでは「グランフェルト」だが、劇中では「グランフェルド」と発音されている。



カール・デスモント（ボナール市長）
デロイア財界の支持の下に親ゲリラ的な政策を行っていたが、後に財界に裏切られてしまい、執務室で無念の拳銃自殺を遂げる。

【完本 太陽の牙 ダグラム】

#19 包囲網を破れ

【予告編】 無惨に砕かれた戦士たちの夢　希望の街の裏切りに
若者たちの絆も揺れる　自由がなんだ　独立がなんだ
消えかかった闘志はよみがえるか

ロッキーたちは職員に変装して脱出するが、クリン、キャナリー、ハックルは残ることを選択した

【ストーリー】

グランフォルド指揮のもとに連邦軍が、ロッキーたちかつて組もうとしたコネルキー基地を包囲しつつあった頃、ホナールではデスモント市長が怒りに身を震わせていた。これまで独立運動を支持してきた彼を支援してきたデロイア財界から、市庁を辞めるように迫られていたのだ。理由は簡単だった。いままでデロイアの民放資本はその成長を喜ばない地球から各種制裁をたびたび加えられており、財界はそうした不平等に大きな不満を抱いていた。かねから独立運動のシンパであるデスモンドを支援してきたのである。だがデロイアが州となり連邦議会に加わったことで、情勢は大きく変わった。もはや地球資本とデロイア資本は対等な関係にあり、独立運動は彼らの利益を大きく損なうことになる。となれば、独立運動を支持するデスモントが市長でいることは、多分に不都合なわけだ。デスモントは財界の身勝手さを怒るかすでに見ぬく、フィン・ハルタインは州自治法を法的根拠としてグランフォルドを新市長に任命していた。

クリンを敵視していたキャナリーだったが、この危機を境に仲間として認めるようになる。

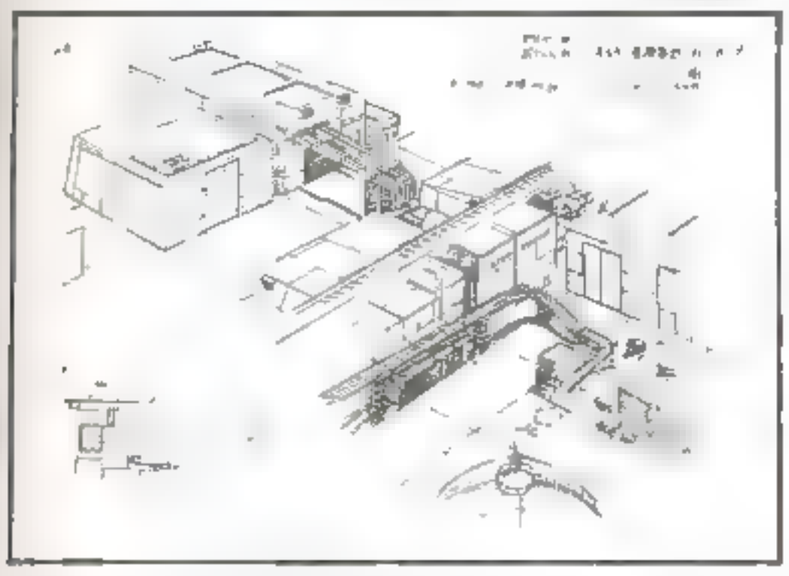
方マリンの転向旨明に絶望したロッキーたちは、ダグラムを捨てて脱出するがクリン、キャナリー、ハックルはこれに反対、1人と別れて基地に残った。ダグラムを捨ててしまったら、クリンは「負け」てしまうのだ。ここで退くわけにはいかない。

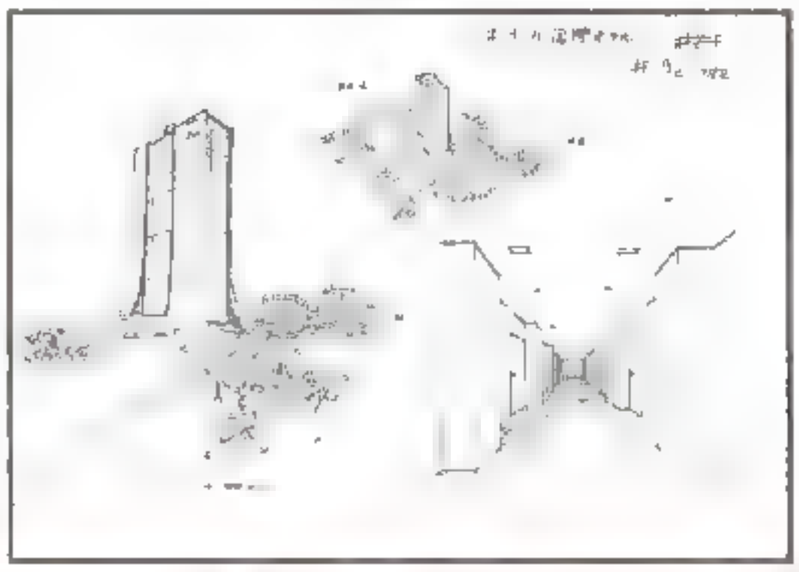
包囲が厳重になっていく中、クリンはダグラムを分解して運びだすことを思いつく。もともとダグラムなどCBアーマーは、輸送し易く簡単に分解できるように造られているのだ。分解後、敵に気取られないように基地の設備をフル稼働させ、その騒音の中、ベル、コンベアで外に運びだしていく。

失脚したデスモントが拳銃自殺した頃、作戦は開始された。自棄になったエディが敵弾に倒れたものの作戦は成功、クリンたちはダグラムとともに軍事基地を脱出した。

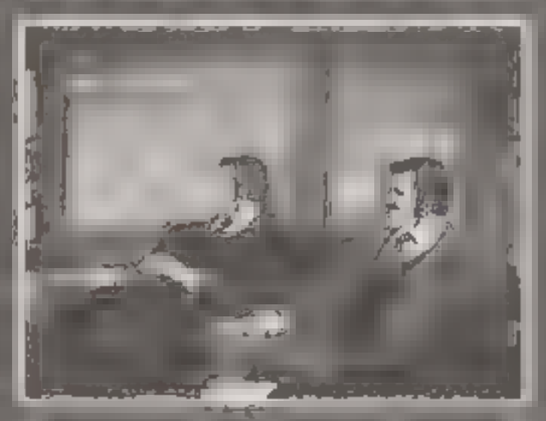
【ワンポイント】

ふたたびダグラム放棄を迫られるクリン。ロッキーは命あっての物種だと言うが、クリンは頑として首を縦に振らない。ダグラムを手放すことはクリンにとって敗北を意味するのである。しかしその理由は今回は語られない。彼の心中で明らかにされるのは、実は最終回のクライマックス、武装解除のシーンにおいてである。人間にではなく、さらりと自然体でこうした伏線を張っていくのが『ダグラム』の特徴であり、また味なのではないだろうか。


ボナール市エネルギー集積基地（内）
連邦軍に追われたクリンたちがなだれこんだ。ボナール市の電力を賄っており、それゆえ軍は追撃を断念させるを得なかった。


ボナール国際ホテル
ボナールの指導者的立場にある人々が集ったパーティーが開かれた。デイシーはここでレースで献花することをラコックから依頼された。

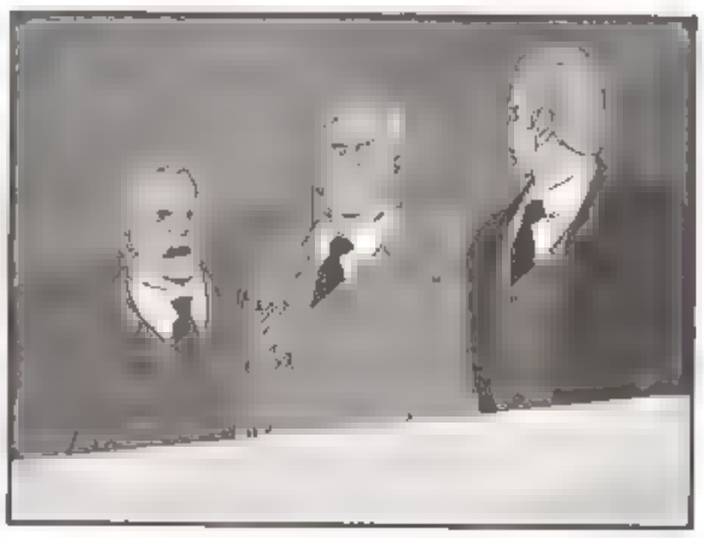
■デロイア財界（#19）



#20 偽りのグランプリ

【予告編】 そうだ ただ君だけを見続ければいい 戻る場所も
帰る家も 幼なじみと語る言葉も もうないのだから
戦士たち 偽物の祭りを潰せ
大人のその仮面を剥ぎ取るのだ

エネルギー基地脱出後、クリンたちはダグラムを使ってボナールグランプリを襲撃しようと企む。


レースを政治宣伝に使おうとしたフォン・シュタインは観客たちからブーイングを浴びせられる。

【ストーリー】

待望のボナール・グランプリレースがはじまった。ロックキーたちは基地に残ったクリンたちの安否が気になったが、彼らが無事に脱出したことを知り安心するのだった。

スタンドに設けられた貴賓席はフォン・シュタイン、ゲラーツェルデ、ファックたちでいっぱいだった。ライバルの姿もあった。彼女は同会式でガロイアの少女とともに、フォン・シュタインに花束を贈呈するのだ。すべては、対外のキーかねまえた筋書きだった。シュタインの人気を盛り上げる道具に利用しようと、ラックかねまえた筋書きだった。しかしレース場の内外にはBアーマーを含む軍の警備が配置され、華々しいレースとは裏腹に会場は物々しい雰囲気に包まれていた。

そして開会式。フォン・シュタインは地球レベルのイアの独立運動政策の一貫性を厳々と述べはじめた。しかし会場の雰囲気は白けきっており、フェスタに似た男の野次が引き鉄になって観客たちのブーイングがはじまった。さらにキャナリーが放送塔を乗っ取り、フォン・シュタインを地球の人と罵倒する。観客たちもキャナリーに同調、シュプレヒコールをフォン・シュタインへ浴びせはじめた。予想外の事態に唖然としているとき、レース場の向かいの山からダグラムが出現し、スタンドに掲げられたフォン・シュタインの肖像を破壊する。ラックは州政府の名でレースの中止を宣言、責任はゲリラにあると叫ぶものの、それは余りに無力な反発心を引き起こしただけに終わった。

カタグラムは空と陸から攻撃され危機に陥るが、眼前をしかける武装バギーによってその窮地を救われた。危地を逃れたクリンはロックキーたちと合流、観客たちの好奇心を応に、これまでの戦いは無駄ではなかったのだという自信を深めるのだった。

【ワンポイント】

袂を分かった仲間たちの再結集と新たな味方の登場、一枚岩でない敵の内情など、今回のエピソードは盛り沢山の内容で彩られている。その反面、メカ戦の描写はいまひとつの感があるが、そこまで要求するのは酷というものだろう。

本エピソードで最も重要なのは、一度は絶望したクリンたちが、いままでやってきたことが無駄ではなかったことを知り、ふたたび立ち上がることができた要因。仲間たちからの支持が、ゆるされたことだ。また、名は分からないが同志がいるという事実。これまで孤立無援の戦いを続けてきた彼らにとって、これほど嬉しいことはないに違いない。

J・ロックの部下たち
戦闘バギーで現れ、連邦軍に包囲されたダグラムを救った。

J・ロックの部下たちB
銃をとっての戦闘だけでなく、潜入や破壊工作などの技術に秀でている。

■ボナール・グランプリレース（#20）

イアはか

★デロイア自治州法（#20）
SFC-153、2月23日発布。独立運動を非合法とする項目が盛り込まれており、州政府はこれを法的

#21 計算された奇襲

【予告編】 権力に一矢報いて意気上がる若き戦士たち 巻き返しを図る
権力者は 連邦軍屈指の戦闘のプロフェッショナルを
呼び寄せた その氷のような頭脳がダグラムを
ゲリラたちを追いつめる

連邦軍から逃れたロッキーたちは、フェスタそっくりの男ジュルシュの手引きで、廃工場に隠れた。

カモフラージュスーツの下には装甲がまったくなく、1発でも弾が当たれば破壊されてしまう。

【ストーリー】

レース会場で知り合ったフェスタに似た男の手引きで、クリンたちは山中の廃墟に逃れた。そこへJ・ロックが現れ、サマリンの動向を明はゲリラの士気を失わせるための、州政府による捏造であると告げる。さらに明日に葬儀を控えているデスモントの死が報道されたような物死などではなく、ゲリラに好意的だったがゆえに政治的追い詰められ拳銃自殺したという真相を教えた。葬儀は新市長のお披露目に利用されるのが、古い州政府側のやり口に怒りを覚えたロッキーたちは、参列するフォン・シュタインを誘拐し、囚われているサマリンと交換させる計画を思いつく。

一方フォン・シュタインは最も頼りになる部下、ザルツェフ少佐にダグラム撃滅の命令を下す。ザルツェフはダグラムに対抗すべく、手持ちのソルティック3機の軽量化を開始した。すべての装甲を外し軽くすれば、たとえXネフラの影響であっても機体の運動性を向上させることが可能だと考えたのだ。

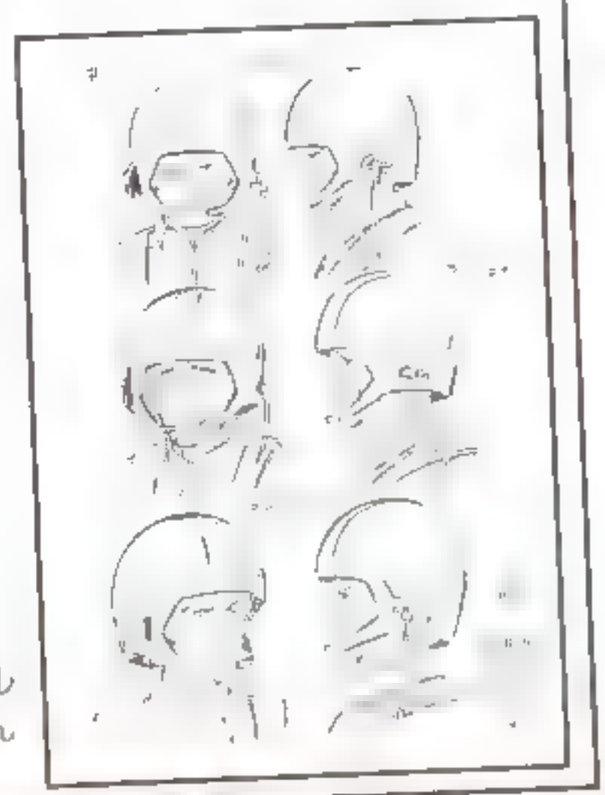
そして葬儀がはじまった。欺瞞に満ちたグランフェルドの弔辞に我慢ならなくなったデスモントの娘ミリンダが「この男の言っていることは嘘です!」と叫びはじめたことで葬儀は混乱、密かに接近していたキャナリーはフォン・シュタインに銃を突きつけ会場から連れ去ろうとする。計画は上手く行くかのように思えたが最後の最後で失敗。逃走したキャナリーたちを追ってザルツェフは追撃部隊を出撃させた。

軽量化されたソルティックの速度と運動性はダグラムを圧倒し、クリンを窮地に追い込んでいく。だがJ・ロックの部隊が支援に駆けつけ、指揮を執るヘリを攻撃した。不利を悟ったザルツェフは速やかに撤退していった。J・ロックはその鮮やかな手並みから敵がザルツェフだと見抜き、これからの戦いが容易でないことを知った。

【ワンポイント】

後に転向し人民解放軍の軍事部門指揮官となるザルツェフ少佐が初登場する。フォン・シュタインをして「誰よりも頼れる軍人」との評価を得ている通り、冷静且つ慎重にダグラム追討作戦を練っていく姿が印象的だ。プロの軍人といえば有能でも融通が効かず、そこにつけ込まれるという描かれ方が多いが、サルツェフは弾にぶたらなければ良いのだろうと、すべての装甲を外させる思い切りの良さと思考の柔軟性を見せ、彼はつけいる隙を容易には見せない強敵であると描写された。

ミリンダ・デスモント
デスモント市長の娘。葬儀の最中、父を殺したのは地球人たちだと叫び訴える。



ソルティック パイロット
装甲を外して軽量化されたソルティックに乗ってダグラムに挑んだ。

■太陽の牙(#22)

■アルタミル行政区スバ市(#22)

■サウスシティ基地(#22)
ボナールとスバを結ぶ線上に位置する連邦軍の重要基地。交通の要衝なのか、比較的規模が大きい。[illegible]クが3機配備された。

#22 襲撃作戦一石二鳥

【予告編】 新たなる敵　新たなる味方　混迷深めるデロイアの地を
若きゲリラたちが奔る　新たなる標的を定め
さらなる闘志を抱いて　走れ！　戦いの終わる日まで
戦いの最中を!!

次の目的地スパ市への針路上に、連邦軍基地が現れた。ロッキーたちは物資を奪うことを計画する。

【ストーリー】

ラルターフはクリンたちを「太陽の牙」と呼びその活動を讃える署名記事を発表、地球外文明に不満を抱く市民からも大きな反響を得たこのところ失態が続くフォン・シュタインにとっては不愉快極まりない、取材を許していたラコックを叱責するしかし市民の評判や新聞記事をいちいち気にするフォン・シュタインなど、ラコックにとっては保身に汲々とする小物にしか思えず、ふたりの溝は少しずつ大きくなっていた。

これまでの戦いが功を奏し名が売れてきたクリンたちは、意気揚々とゲーラ会議に出席するためにアルタミラ州のスパ市へ向かっていた。だが、その途上には連邦軍のサウスンティ基地が立ちはだかっていた。迂回することも可能だが、そうなると会議への参加が遅れてしまう。基地を突破しようにも現在ダグラムは燃料切れで動かすことができない。CBアーマーが配備されている基地に、タグラムなしで戦いを仕掛けることは無謀の極みだ。そこでクリンたちはまず基地へ潜入して燃料を奪い取り、その後に敵基地を撃破する作戦を開始した。

仲間を裏切ってグランフェルトの手先になっていたデスタンは、今度はラコックの下についていた。彼は運動家を捕まえ拷問、ゲーラ会議開催の情報を入手する。これを知ったラコックは、開催地がどこなのか調べ上げろとデスタンに命令する。デスタンは手下を使って情報を収集させるが、何も掴むことはできない。

その頃クリンたちは燃料の奪取に成功、タグラムで逆襲してきたソルティック家を撃破する。ロッキーたちは勝利に沸くが、この戦闘が原因で、デスタンに会議の開催地がスパだと見抜かれてしまう。そうとは知らないロッキーたちはボナールから引き付いてきたフェスタに化けたガジョルジュを加え、ゲリラ会議に出席するために一路スパ市へ向かうのだった。

【ワンポイント】

ラルターフという男、ジャーナリストにしては少々詩情溢れる質であることが、彼の記事から窺える。もっとも、クリンたちを「太陽の牙」と命名する冒頭の記事は署名だったからこそ、ああした内容だったのかもしれないが

今回注目したいのは、ロッキーたちが作戦を成功させたがゆえに、結果的にはデスタンに敵情判断の情報を与えてしまうという構図が描かれている部分だ。戦術に秀でているだけでは闘争を戦い抜くことは難しい。この問題は、次回のエピソードのテーマとして引き継がれていく

厳重な敵の警備網をかいくぐり、ハックルとチコはサウスシティ基地に潜入しようとする。

デイジーはラルターフからの助力も得てクリンを必死に探し求めるが、いまだに再会できなかった。

デスタンの部下　スミス
単に金で雇われているだけなのか、デスタンからの命令を受けてもあまり熱心な行動を見せない。

デロイアの通貨。ダグラム世界は

る。

■ゲリラ会議開催地（#22）

チリン、スパ、エアホルトの4つの市を開催される疑いがあるとラコックに説明した。デスタンによれ

ていたという。

★連邦軍公安情報部員（#22）

#23 狙われたゲリラ会議

【予告編】 明日の勝利を目指し　連帯を求めるゲリラたち　互いに励まし　絆強める集まりのはずだったが　あまりにも遠い道のりが　厚い壁が　舐め合うべき傷をさらに広げる　こんなときにこそあの人がいてくれたら

クリンたちはJ・ロックから、ダグラムの性能を向上させるための装備、ターボザックを受領する。

強襲してきた連邦軍のブロックヘッドと戦うダグラム。アームリニアガンで次々と撃破していく。

#23「狙われたゲリラ会議」

【ストーリー】

J・ロックからの呼び出しを受けたロ　キーとクリンは、仲間を自邦外の山中に待機させてスハ市をめざす。そこふたりはダグラムの性能と火力を向上させる新装備ターボザックを受領するか、サウスシティ基地を攻撃した彼らの浅慮を諌められてしまう。

同じ頃カーディナルでは、ボナールでの　里の事件についてラコックからの報告を受けた、ナンか、フォン・シュタインに、彼の政治家としての能力に疑問を投げかけている。かも中のトップでもあるも拘わらず、サウスシティ基地襲撃事件の報告を受けていない事実を指摘され、フォン・シュタインのいらだちは深まるばかりであった。

そしていよいよ海上治いのハーマン邸でゲリラ統一戦線を作るための会議がはじまった。が、誰もかデロイアの独立を最終目標としているにも拘わらず、主義・思想の違いから話し合いは難航した。クーンベバックスは、海千山千のゲリラをまとめ上げる指導力を持ったサマリンの人間としての大きさと必要性を痛感、バラフ刑務所に収監されているサマリンの救出を急くべきとの意見に達した。

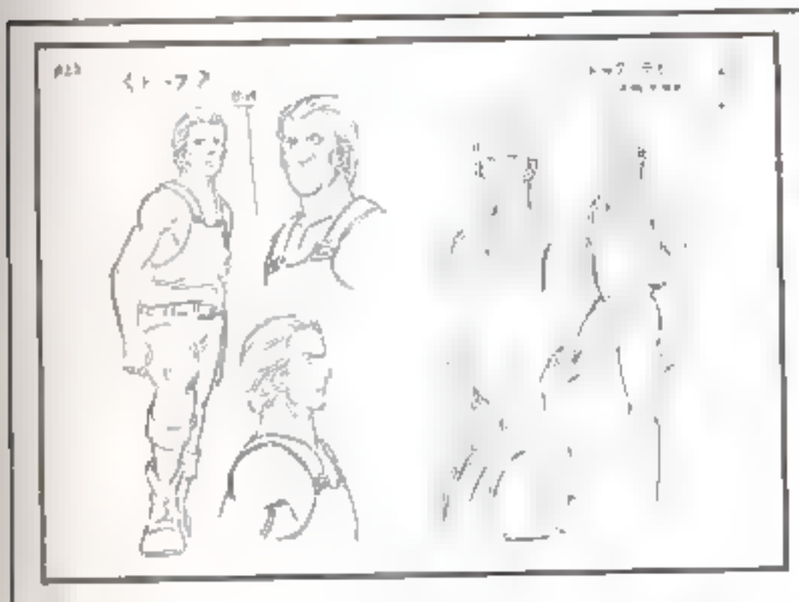
結局、陽が落ちる時間になっても、何の成果も生まれなかった。そんなとき山中の要路警備を担当していたキャナリーたちが不審な電波をキャッチ、連邦軍を察知した。だが明らかに遅く、ザルツェフ率いる空挺隊の攻撃がはじまる。敵の奇襲は成功しハーマン邸は敵の包囲下に置かれてしまう。クリンたちは海岸に逃れるものの、新型CBアーマー、ブロックヘッドに追い詰められていく。そこへハックルがダグラムで乱入、クリンが乗り込んで反撃を開始した。リニア・カノンの威力に驚いたザルツェフは作戦を中止、部隊を撤退させた。

結果的に会議は失敗したが、敵対的だったゲリラと笑い合えたことは、将来への希望は繋がったナ　ナ

#24 サマリン救出作戦

【ワンポイント】

ボナール・グランプリ以来、加速する一方のフォン・シュタインの小物ぶりが心地よい。町長程なのは何の落ち度もないのに彼に八つ当たりで基を張られた部下だろう。軍においては大佐という高級将校であり、政府においては代表という責任ある立場なのだから、もう少し大きなものを見せて欲しいものである。片やゲリラたちはゲリラたちで好き勝手なことばかりを主張し、まとまりに欠ける。観ていると思わず、クーンやハックスたちの「サマリン博士さえいてくれたら」という言葉しうなずきたくなる。



ゲリラ　ドック、デビット
ゲリラ会議に参加した大地の絆のメンバー。要人暗殺の実行隊の結成を提案した。

クローニー
クローニーはデロイア解放隊のリーダー。いかつい容姿だが、きめ細かな心配りのできる男である。

■[illegible]

[illegible]

■[illegible]

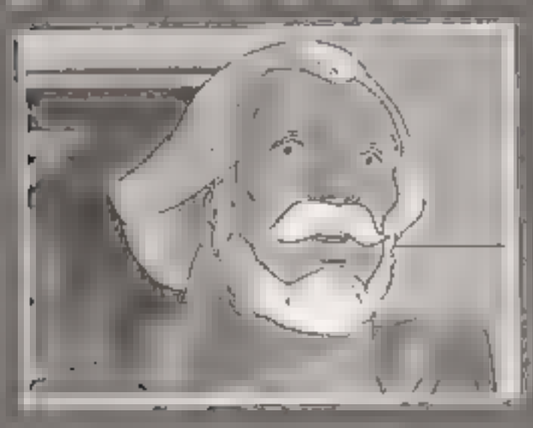
[illegible]

■[illegible]

[illegible]

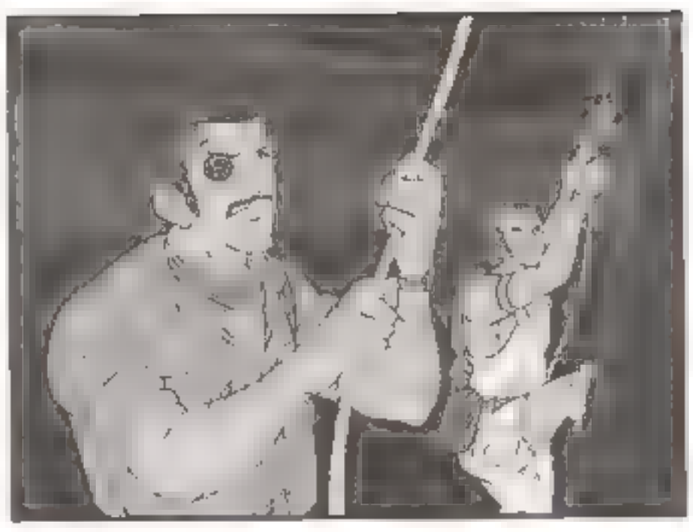
■ハーマン邸（ベイカー）（#23）

[illegible]



#24 サマリン救出作戦

【予告編】 サマリン博士がいないのが悔しい　博士がいれば
ゲリラたちをまとめることができる　若き戦士たちの
願いが通じたのか　博士の居所がわかった
バラフ軍刑務所D独居房　音に聞こえた脱走不可能
難攻不落の要塞刑務所か



J・ロックたちはウイリーら政治犯がひき起こした騒乱に乗じ、外壁から刑務所への侵入を試みる。

囚人たちが決起する情報を得たザルツェフは、密かにCBアーマー隊を配置しこれを失敗させる。

【ストーリー】

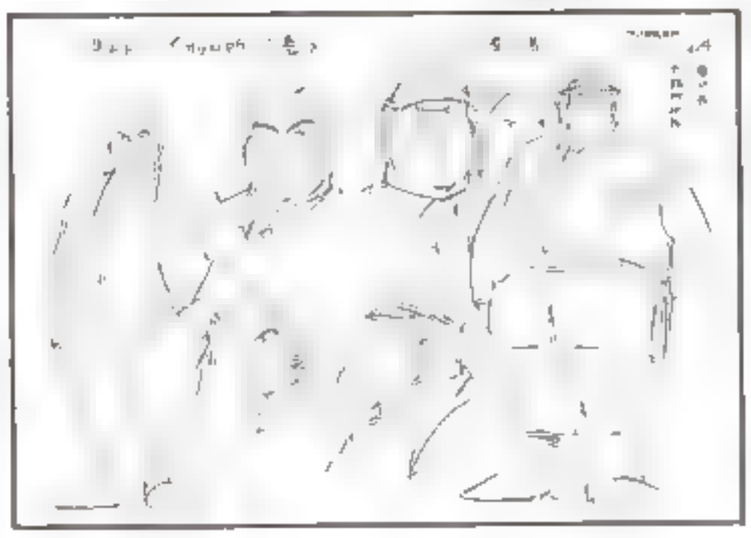
「人喰の牙」レッドもに移動のハックスのもとに、サマリンが又盗まれているバラフ軍刑務所で3日交に政治犯たちの脱走が行われるという情報が入いた。しかし脱走を計画している連中は、回、刑務所にサマリンが囚われていることを知らない　もし脱走が行われれば警戒が厳重になる　サマリンを救い出すことが難しくなってしまう。もしこのままこちらが内部に合わせて動くしかない　J・ロックたちは、やっと来た　刑務所に到着したザルツェフは、とっそくサマリンを別の牢房へ移すなどの対抗策を打ってきた

ウイリーたちは看守から監房のマスターキーを奪うことに成功、中庭に出ようとしたものの、そこへザルツェフが連れてきたブロックヘッド隊が現れ取り囲まれてしまう。看守相手ならともかく、CBアーマー相手ではまずかしいようがない　絶体絶命を余儀なくされ、暴動は失敗に終わってしまった

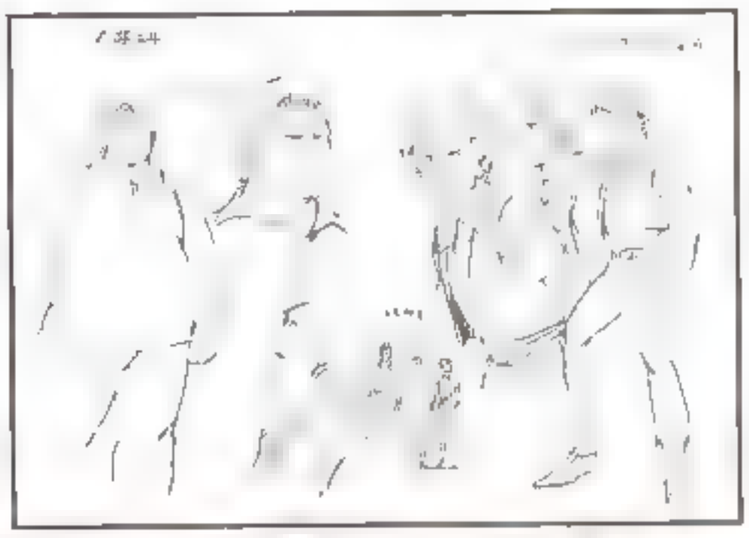
時を同じくしてサマリンを救出しようと、クリン、ロックの　人は外壁から刑務所内部に入り、ようとするが、ハリガンの攻撃を受けて海へ真っ逆さまに転落してしまう……！

【ワンポイント】

チコ活躍編　これまでも軽妙な台詞やイ奴は少ないが、を突いたチコで、なかなかのハイフレイヤーぶりを見せてきたチコだが、今回は出ずっぱりこその有有感を見せつけて、これが　後の魅力ずとのに、軽妙洒脱な台詞のい回しがあげられるが、このエピソードではそれらを存分に堪能することができる。これまでロックやキャトリーたちの陰に隠れがちで、ヒッグ・Eガンでタグラムを救い以外にいまひとつ冴えない場のなかった彼だが、これ　このキャラ性が明確になった。



バラフ軍刑務所　刑務所所長
看守長
所長はサマリンが収監されると同時に、彼を監視せよとフォン・ンュタインに命ぜられて着任した。



スパイ、ウイリー（右）
政治犯。囚人の間に叛乱組織を作り上げ、脱出の機会を待っていた。チコにサマリンの居場所を教える。

★ダルヒ（#23）
連邦軍の内通者。妻と子供を殺い
★[illegible]
バラフ軍刑務所がある地所の名
★[illegible]
★ジム・ジェリドマジ（#24）
チコが身代わりになった囚人。

#25 潜入バラフ軍刑務所

【予告編】 潜り込めるか鉄壁の牢獄
守るザルツェフ　攻めるJ・ロック
バラフ軍刑務所で再会した両雄には火花散る過去が
敵を　手強い敵を　愛しいライバルよ
私はおまえに会いたかった

ザルツェフの作戦に問題はなかったが、命令を徹底させることができずサマリンを奪われてしまう

ロッキーたちは下水道を通って刑務所内へ侵入、牢に捕らわれていたサマリンの救出に成功する。

【ストーリー】

作戦は失敗に終わったものの、J・ロックは再度反乱作戦を実行すると言い出し皆を驚かせる。そこには、まさか敵も一度、攻撃した日の翌日に、ふたたび仕掛けてくるとは思わず、そこに付け入る隙が生じるだろうという計算があった。また、見方が高まれば、そのふん守りも堅くなるに違いない、と、そこへ、アジトにしていたゴミ処理場が連邦軍の管理下に置かれてしまったとの報がもたらされた。その事件から、J・ロックは仲人の中にスパイがいることに気づく。チコの身を案じながらクリンたちは、再度の救出作戦の準備をはじめた。

一方、刑務所内ではシェリーマンではないと知られたチコが、看守長から手酷い尋問を受けていた。しかし彼はとれだけ痛めつけられても、決してシーを吐こうとはしなかった。そして夜、クリンたちは行動を開始する。一枚岩の彼らとは対照的に、刑務所側ではザルツェフと所長の対立が表面化しつつあった。任務の達成第一だけを考え、他人の面子などには頓着しないザルツェフの行動に、所長は抑え難い反感を募らせていたのだ。

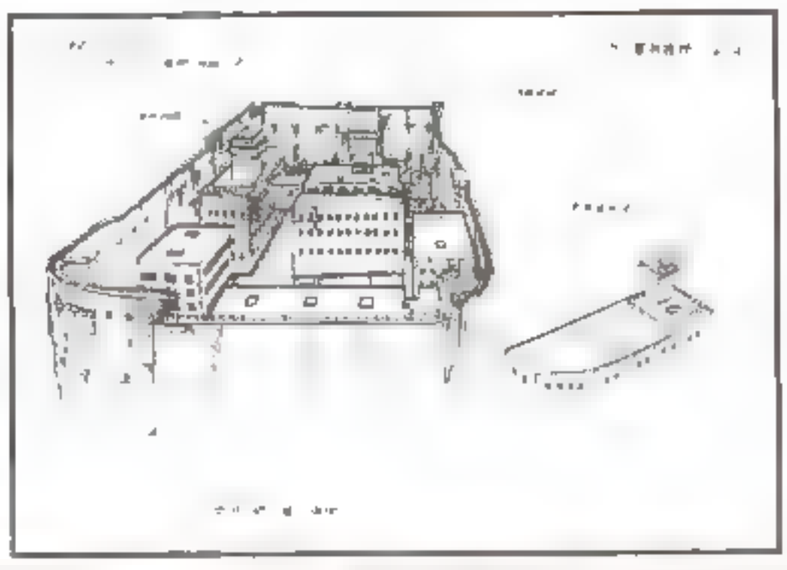
そこで監視所の爆破を狼煙に作戦がスタートした。報告を受けた所長はJ・ロックの思惑通りに増援隊を出動させるが、ザルツェフはこれを陽動だと見抜き兵力を刑務所内に留まらせよと命令する。本隊を務めるJ・ロックたちは下水道から刑務所内への侵入を開始、クリンは彼らの行動を容易なさしめるためにダグラムで正門を砲撃し敵を引きつけようとする。

作戦は成功したかに見えサマリンを人質に使おうというザルツェフの計略は所長が命令に従わなかったために頓挫、ロックヘッド隊も撃破されてしまう。サマリンとチコは無事に助け出され、囚われていた政治犯たちも解放された。任務に失敗したザルツェフはヘリに乗って刑務所から脱出するのだった。

【ワンポイント】

ザルツェフは確かに優れた戦術家だが任務を第一に考えすぎるあまり、いたずらに囚人の反感を買うような行動を繰り返し、結果的に失敗を招いてしまうことが少なくない。指揮も徹底的なトップダウン方式を採っており、どうも部下に自己判断などは求めていないように見受けられる。作戦の遂行には確かに優れた指揮能力が必要だが、同じように部下の掌握もまた重大なのだ。部下に駒であることを求めては、たとえ指揮が優れていても、作戦の成功はおぼつかないことをザルツェフの失敗は教えてくれている。

バラフ軍刑務所　附近　全景
※設定書表記は#24。
自然の地形を利用した、難攻不落の刑務所。


バラフ軍刑務所
※設定書表記は#24。
二重の壁に囲まれており、容易に突破できないように設計されている。

★バラフ軍刑務所
バラフ軍刑務所が面している海の名称。

★第二次救出作戦（#25）
[illegible]
[illegible]流し。河口に位置する監視[illegible]
[illegible]
が二重になっている正門をリニアカノンで破壊。同時に本隊が内部へ[illegible]
[illegible]
ある。

★ダスティン（#25）
今回投入されたブロックヘッド隊のコールサイン。ダスティン1番が[illegible]

★[illegible]
[illegible]
号弾は徹甲弾、3号弾は炸薬を内蔵している。

★ランベル（#25）
[illegible]
[illegible]
かく限りなく優しい日々であった。
S・C・1520、10月1日、一発の[illegible]
[illegible]

【#26予告編】
[illegible]
[illegible]

#27 戦場にきたデイジー

【予告編】揺れる時代が若者を行動に駆り立てる　時代が若者を変え
若者が時代を動かす　だがひとりを追いひとりを求めて
鍛えられる青春がある　少女が心決めるとき
もうひとつの旅がはじまる

戦場とは異なる戦い　政治闘争が、フォン・シュタインとラコックの間で激化しつつあった。

【ストーリー】

カーディナルの行政府では、フォン・シュタインとラコックが火花を散らし合っていた。フォン・シュタインの中央大陸におけるゲリラ鎮圧は成功し、現在は治安も落ちついたというドナンへの報告に対し、ラコックはそれは見せかけに過ぎないと異を唱えたのである。しかしフォン・シュタインは自分の方法ではやり方がある、力を傾注すべきはパルミナ大陸だと主張した。ドナンは彼の意見を容れつつも、その一方でラコックに独自の行政プランの作成を命じるのだった。

サルツェフはそんな一部の動きなどに介すことなく、諦めずに空挺部隊を率いてダグラムを追撃せんとしていたが、肝心の「太陽の牙」はサマリンの指示でランベル市に向かっていた。山道を進む彼らの前に、ラルターフが助手となったデイジーを伴って追いついてきた。ラルターフはサマリンからゲリラの真実を取材したい、対してサマリンはマスコミを通してその考えを世間にアピールしたい。利害が一致したためにラルターフによる独占取材が実現した。その中でサマリンは、州政府に対抗して別の政府を作る可能性をほのめかし、ラルターフを驚かせる。ドナやっとの思いでクリンと再会を果たしたデイジーは、クリンの家族が心配していると告げるか、彼は昔の自分はもういないと突き放すのだった。

ターボザックのデメリットに気づいたザルツェフは、崖を利用した挟撃作戦でダグラム撃破を狙う。

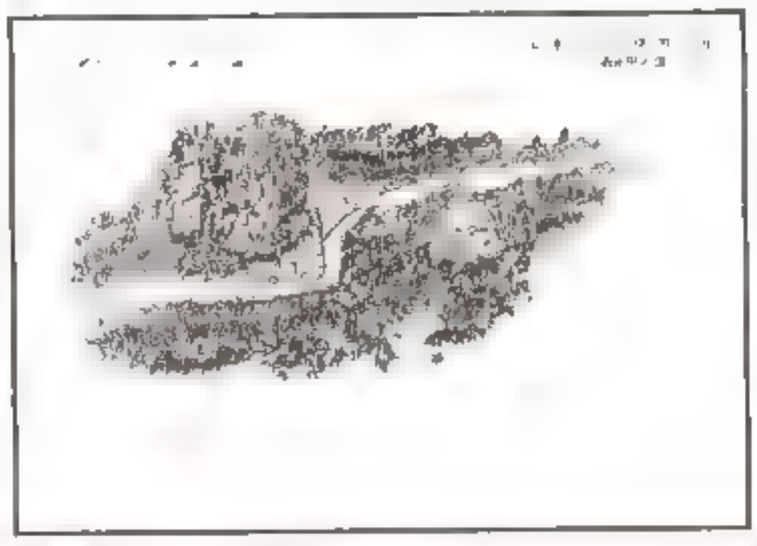
クリンはターボザックを装備したことを逆手に取られ、ナッシュマンに苦戦を強いられてしまう。

ザルツェフは「太陽の牙」の移動経路を予測、絶対の自信を持って道路を挟む両側の崖の上に新型CBアーマー、ブッシュマンを配置して待ち伏せていた。クリンは勇敢にも、回かうかターボザックのために跳躍力が低下してしまい、敵の優勢を崩すことができずに追い詰められていく。だが崖の途中に足場を見つけることで形勢を逆転させ、ブッシュマンの撃破に成功する。

戦闘終了後、デイジーはクリンと同じようにこれらの意志で道を進むことを決意した。

【ワンポイント】

フォン・シュタインとラコックの仲がどんどん険悪になっていく。今回など、フォン・シュタインにあからさまに馬鹿にするような嘲笑をラコックがぶつけてくる様などは、エリート系憎まれ役の面目躍如である。彼は自分の能力に絶対的な自信を持っており、能力の高さはドナンも認めるところである。かなドナンはそれゆえにラコックを切れ過ぎる男」だとする組織地球側、いちばん物分かえている人物はドナンだけなのか。癖の強過ぎる部下を持った彼の心労と、後継者足り得る人物のいない現実が実感できる。



ランバン山脈（内）
森の中の道
ランベル港を目指す「太陽の牙」たちが進んだ道。クリンとデイシーはここで再会した。

※#26「振りむけば遠く…」は総集編のため割愛いたしました。

#28 戦火の陰の打算

【予告編】 憎しみが戦火を呼び　戦いが暗い欲望を生む
銃火飛び交う陰に権力を望み　密かに爪を磨き
牙を研ぐ男たちがいる　時代はますますうねり
人々は嵐の中に立ちつくす

政治家に変貌しつつあったフォン・シュタインに、ザルツェフは未来の姿を感じはじめていた

ランベル港でザルツェフ部隊と砲火を交えるダグラム。この後海に追われて追撃を振り切った

【ストーリー】

ロイルがRDカンパニーを代表してネルオーダー・メタリック社を訪れたが、その目的は彼らの資本協力で建造中の新しいスタッツ・ー場の設の遅れを督促することにあった。ロイルは社長のスレオーダーに建設を急ぐように要求するが、のらりくらりとはぐらかされてしまう。そもそもネルオーダーはアロイア民族資本が地球系資本に呑みこまれることをよしとしない独立派の人間で、それゆえ今回のRDカンパニーからの資本協力を拒絶しないというのが本音なのか、そこにサマリンが現れ、高動資金の援助を要請した。これまでは物資がなくなったら敵軍を襲い奪い取るという、行きあたりばったりなものだったが、これからは計画的に行動しなくてはならない。そのためには少なくない資金が必要不可欠なのだ。ネルオーダーはサマリンの要請を快諾するが、交換条件として建設中のスタッツム工場の破壊を求めてきた。工場が完成すればそれを足掛かりに地球資本が経営に食い込み、やがて完全に吸収しようとするに違いない。だが工場の完成が遅れればアロイア系資本からの資金調達が可能になるのだ。クランたちは最初は市民の支持を失うとして反対していたが、結果的にはアロイアのためであり、マスコミを利用することで真意を伝えられれば問題はないとサマリンに論され工場破壊に同意する。だがネルオーダーとサマリンの接触を知ったラコックにその狙いを看破されてしまう。

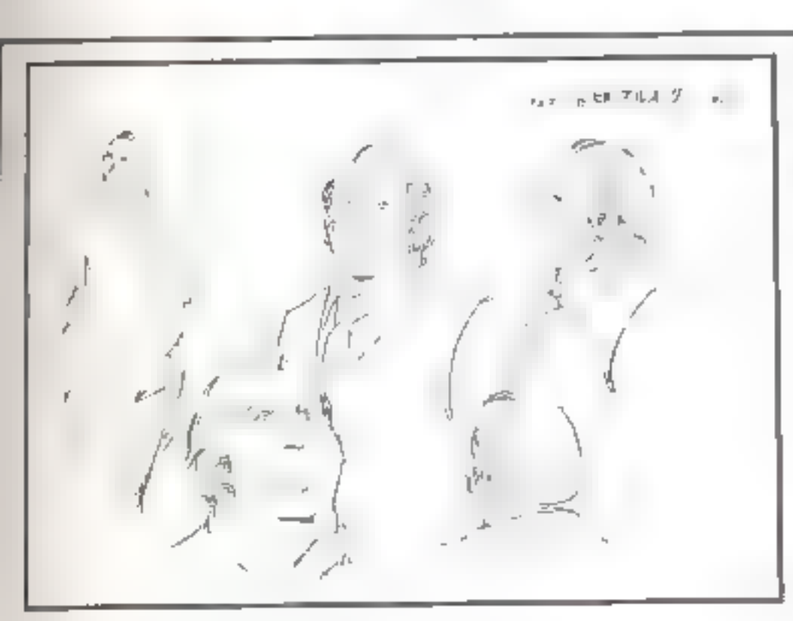
フコックを出し抜くためフォン・シュタインはサルツェフに工場破壊阻止を命令、待ち伏せを仕掛けた。ロッキーたちが人質になってしまい、破壊工作は失敗に追い込まれそうになるが、チコたち工場は灰燼に帰した。

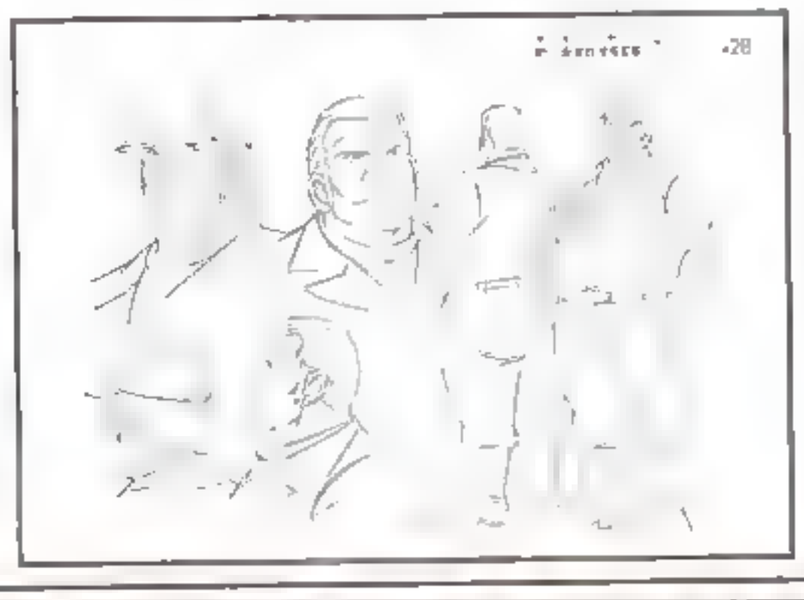
ルターフは彼らが汚名を着ないように、その真実を記した記事を書くのだった。

【ワンポイント】

合法活動だろうが非合法活動だろうが、なにをするにも資金は必要である。また、政治・軍事面よりも、市民生活に直結した経済面からの侵略こそが最も脅威なので、革命は武力のみでは達成できず、また民の支持がなければ成し得ない。

当たり前のことはかりだが、これほどの内容を1981年当時に描き得た事実は特筆に値するだろう。『ダグラム』こそ「戦争」という、あらゆる事象が絡み合ってしる出来事を過不足なく描いた作品だと言えるだろう。


ネルオーダー社長
アロイアの独立を望み、サマリンに資金協力を行う。だがラコックの奸計により「太陽の牙」の動向を漏らさざるを得なくなってしまう。


ネルオーダー社
新工場建設現場監督　アミット
ロイルが進めるネルオーダー社との合弁事業の要である、新工場の建設を管理している。慇懃無礼なロイルを「小僧」と評した

■[illegible]

■RDカンパニー(#28)
カシム家の次男ロイルが勤める地[illegible]

■[illegible]
ネルオーダーが扱っている金属資[illegible]

★PX(#28)
[illegible]
命令が下った際、ザルツェフたちはここにいた

#29 ラコックの策謀

【予告編】 理想を追う者は追え　正義を語る者は語れ　私に掲げる旗などはない　目の前には昇らねばならない階段がある　欲望に道連れはいらない　ひとりでやるさ　理想や正義など暗闇で眠れ

ロイルはドナンに、ネルオーダーに圧力をかけてほしいと頼み込むが、すげなく断られてしまう。

出港を間近に控え、住み慣れた大陸での最後の夕焼けに、ハックルたちは魅入られていた。

【ストーリー】

サマリンたちはネルオーダーから、パレミナへ渡る船の乗船可証をとりつけるイアトルをそそのかす取る。しかし、工場破壊から連邦軍の警戒が厳しく、身動きが取れなくなっていた。ロイルは工場が焼かれたためイアトルを結ぶこすターゲットの切り替えとなってきず、ドナンに向きつくもののすげなく断られてしまう。かたそこにノックが助け船を出した。ネルオーダー社を出てにしているアロイア民加資本、つまりドナル財界からの融資を自分の力で掴えつけ、RDカンパニーと切りすえるしかないよう仕向けようというのだ。契約人

以こよるを性ノ西れを知ったロイルは、ラコックの申し出を渋々に応じ受け入れた。ラコックが陰謀を張り巡らせている中、ドナンにその了解を貰われたレックがパレミナ行政官に就任した。

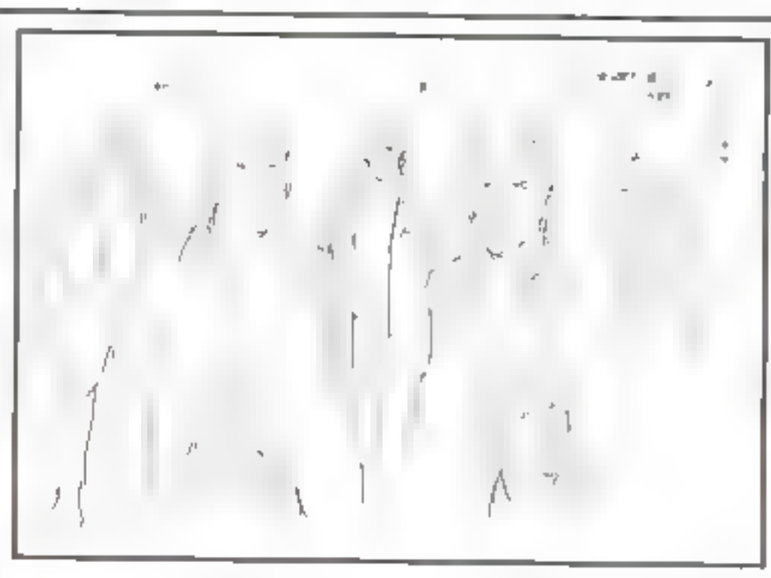
工場破壊によってRDカンパニーとの契約を反故にされドナンとしているネルオーダーのもとに、ドナンが資本融資を断ってきたとの報せが届いた。動揺するネルオーダーに資金援助をちらつかせながら、ラコックはサマリンたちがいつなんという船で出航するのか聞き出そうとする。劣極まりないやり口だが、このままでは資金が調達できずに会社は倒産、多数人の従業員とその家族を路頭に迷わせることになってしまう。

ラコックからサマリンたちの情報を入手したザルツェフは、サマリンたちが乗り込む貨物船を買収し、待ち伏せを画する。計画は順調に進むかと思われたが、政治的保身を図ろうとするフォン・ンェタインの横槍とナナンの観察力が原因で失敗に終わる。

ネルオーダー社は倒産を免れたものの、代償として人間に不利な条件での契約を余儀なくされてしまう。

【ワンポイント】

タイトルに違わず、ラコックがその陰謀家ぶりを全開にするエピソード。口八丁で周囲を手玉に取り、労せずして目的を達成をしていくその姿は、登場人物随一の野心家ぶりを



ザルツェフ少佐の配下　軍人A　その部下
サマリンたちが乗り込む貨物船の船員になりすまし、「太陽の牙」を一網打尽にしようと目論んだ。

マリン・パパイヤ号
船員たち　船長
ザルツェフの部下から大金を握らされ、さらに軍の名前で脅しをかけられて船を明け渡す。

いた。加えて軍人礼なども局振舞いと物言いは、まるで『蛇の金狼』の主人公、鬼倉哲也を彷彿とさせる。人間的には多々問題がある人物だが、その野心家ぶりは妙に魅力的で惹きつけられるものがある。『ダグラム』とはラックの物語だという意見もあるが、本エピソードを見返すと思わず自問してしまいそうになる。

ムーンの情報を入手したレックはしてあえて裏切りの策を講じた。

収、兵士たちを潜ませて待ち伏せを企んだ。

#30 パルミナへ渡る日

ザルツェフが後任された　後任のギルソンは若い新鋭中尉

【予告編】 海の彼方から激動の大地が呼んでいる　胸の高鳴りを銅鑼の音に変えて若者は船出した　いろいろなものを捨ててきた　いろいろな人と別れてきた
デボヤ海記に曰く　彼の地が我らに望むものはなに
彼の地が我らに恵まんとするものはなに

#30 パルミナへ渡る日　#31 パルミナの熱い風

【ストーリー】

待ち伏せから逃れたサマリンたちは別の貨物船でパルミナへ渡ることにし、ザルツェフはダグラム部隊の任を解かれ、デイジーはデロイアに残ることを決意、そしてドナンの病いは悪化の一途を辿っていた。さまざまな想いを巻き込みながら、時代は確実に動いていたのである。

パルミナに渡る前、サマリンはネルヴォーダーと会見、情報を漏らしたのは自分だとの告白を受ける。しかしサマリンは彼の苦しい立場を察し快く許し、その上資金を半分返却すると申し出た。だがネルヴォーダーは独立運動を頑なに欲しいと返金を辞退するのだった。

ザルツェフの後任ギルソン中尉による捜索がはじまった。その手緩いやり方を見ながらザルツェフは、ラコックたち学徒組に振り回されるフォン・シュタインに失望の念を抱かざるを得なかった。

自信満々なギルソンだったが、まんまと裏をかかれてサマリンたちの出航を許してしまう。しかしザルツェフは彼らの行動を見抜き、海上で捕捉することに成功する。だがギルソンは船が沈むことを用心してミサイル攻撃を禁じ、ザルツェフのアドバイスを無視して機銃による威嚇射撃のみを許可した。しかし当然のことながら機銃の威嚇程度で船の脚を止めることなどできはしない。威嚇射撃が通じないことを知るとこんどはブノシュマンを甲板に降下させた。その手際の悪さに呆れながら、ザルツェフは戦力不足を理由に帰投してしまう。

船内の倉庫で組み上げたダグラムによる反撃がはじまった。兵力では連邦軍が有利だったが、ギルソンがミサイル攻撃を禁じていたため決め手に欠け、ダグラムにそこをつけ込まれた末、ブノシュマンは海の藻屑と化してしまう。

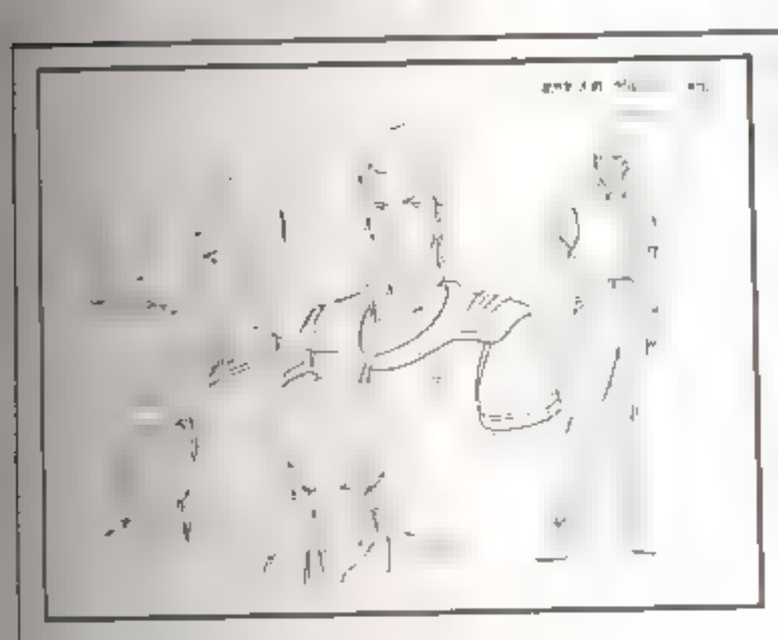
デイジーは発作止めの薬を飲んで眠るドナンに手紙を残し、ひとりクリンを追うことを決意し旅立つのだった。

ドナンを気遣うアイシー　メンへの[illegible]

貨物船の甲板上でCBアーマー数[illegible]

【ワンポイント】

ザルツェフが[illegible]の失敗の責任を問われて、ダグラム追討部隊指揮官を解任されてしまう。特にサマリンを奪われたことが問題視された。戦闘詳報を読めば奪回を許してしまった直接の原因は、刑務所長の命令不服従にあると理解できる。責任を負わされる人間は不可欠なのだが、なにもザルツェフである必要はな[illegible]



連邦軍大尉　ギルソン
[illegible]敗続きのザルツェフに代わりダグラム追討の指揮を執る。優秀だが現場の経験が少なく、判断力に少々難がある。劇中での階級は中尉。

貨物船　船長
[illegible]トレードマークの、[illegible]キが特徴的な男。[illegible]サマリ[illegible]を協力した。

ザルツェフは有能だが扱い難い存在だった。そこでラコックはサマリン奪回を口実にフォン・シュタインを[illegible]めぬ、ザルツェフを排除したのだろう。

ダグラムはブッシュマンの撃破に成功、貨物船は無事にパルミナへの途へ着いた。

#31 パルミナの熱い風

【予告編】 人の世は誰が操る　群衆のマリオネット　目に見えぬ糸は綾をなし　混迷のドラマへと人を誘う
デボヤ海記に曰く荒々しき大地を渡る風は熱く
人々はただ光りさす彼方を目指した

ロッキーたちはパルミナに着いた早々、連邦軍部隊に追われているゲリラたちと遭遇する。

助けたゲリラたちのリーダー、ジョークの案内で、サマリンたちはノキオの元へ向かうことに。

【ストーリー】

荒波に揉まれながら「太陽の牙」は革命の旗印が盛り上がっている新大陸パルミナへの上陸を果たすが、程なく到着すると落ち着く暇もなく、ゲリラを自称するこの国の連邦軍を目にした。クリンたちは早速ダグラムを起動、クラブガンナーを撃破する連邦軍部隊を蹴散らしていった。ダグラムの出現の報はすぐにドガ市の政庁に伝達されたばかりのレークのルへ届けられる。彼は軍の将兵に、まず市民との対話を大事にするよう言えた。市民の理解と支持を背景にすることこそ、ゲリラの融和へ繋がるのだとレークは考えているのだ。かし多くの将兵は対話方針を掲げる彼を腰抜けと嘲り、ゲリラは殺すしかないと断じるのだった。

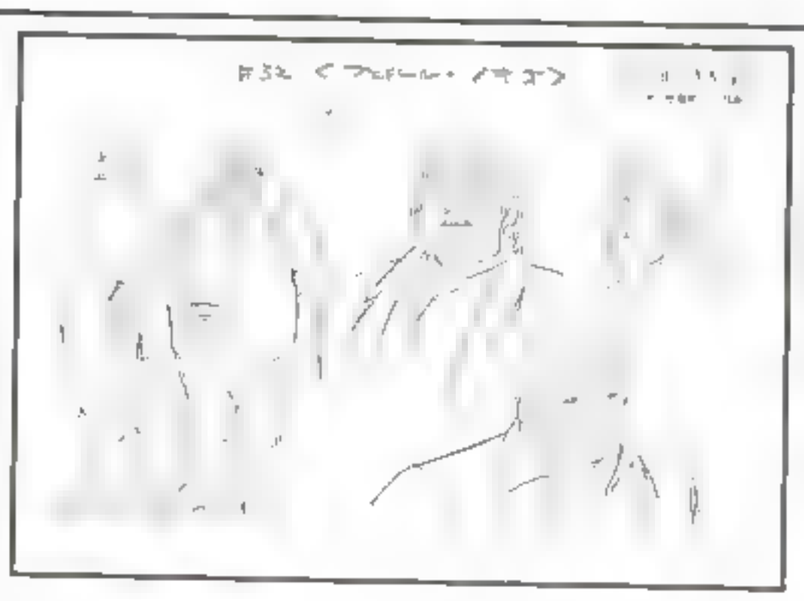
クリンたちが助けたのはジョークをリーダーとするゲリラの一派で、サマリンとの交流があるパルミナのゲリラの中心人物ノキオの知己でもあった。サマリンたちはジョークの案内でノキオがいるドガ市へ向かい出発するが、その途中、要塞化されたゲートに遭遇する。このゲートを迂回するとドガ市に到着するのは1週間は遅くなるが、犠牲を抑えることはできる。しかしゲートの向こうではゲリラの仲間たちが孤立していた。彼らを助けるためにサマリンはゲートの破壊を決断、トーチカの死角を突いて突撃を敢行する。敵の大砲に苦戦し何人もの犠牲を出したが、ダグラムのリニアカノンが、トーチカを吹き飛ばすことに成功する。

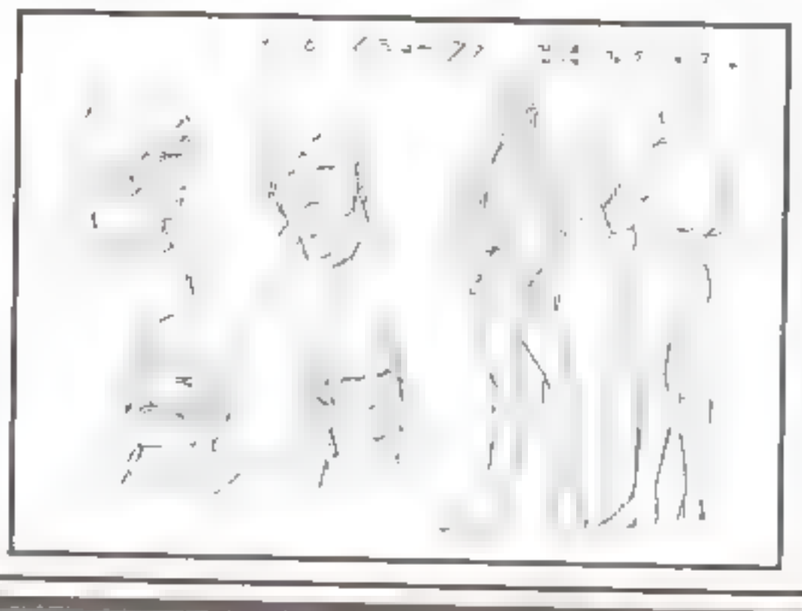
孤立していたゲリラとも合流し、彼らはドガ山目指してパルミナの夕日の中を意気揚々と進軍していくのだった。

【ワンポイント】

今回の見どころは要塞ゲート突破戦はむろんのことだが、なによりもレークの就任演説に他ならないだろう。馬し合いによる「和睦」の現を信じるレークだが、彼に対する兵士たちの冷ややかな反応がこれからの苦難の道を予感させる。

連邦軍のクラブガンナーを撃破したダグラム。ゲリラたちはその姿に言葉を失った。


フェドール・ノキオ
（パルミナ大陸の
農民ゲリラ代表）
サマリンの「時期尚早」の意見を退けドガ攻略に決起するも失敗、クリンの目の前で銃撃に倒れる。


パルミナ大陸ゲリラの
リーダー　ジョーク
元はゲリラ同士の連絡などを取り持っていただけだったのだが、やがて自身も独立闘争に参加するようになった。

[illegible]

ここは不毛の地であっ[illegible]労を重ねて、やっとのことで現在のごとく、農産物の収穫を得られるよ[illegible]

作物を貪り叩かれているという実態も、また知らない。この土地の人々は、荒れ果てた大地にいじめ抜かれ、[illegible]

とは、拒むことは出来ない。よって、我々が武力でゲリラを鎮圧したと[illegible]心までを変えることは出来ない。本官は、そう確信しておる。本官は、諸君らが一般の人たちと話し合う機会を、大[illegible]

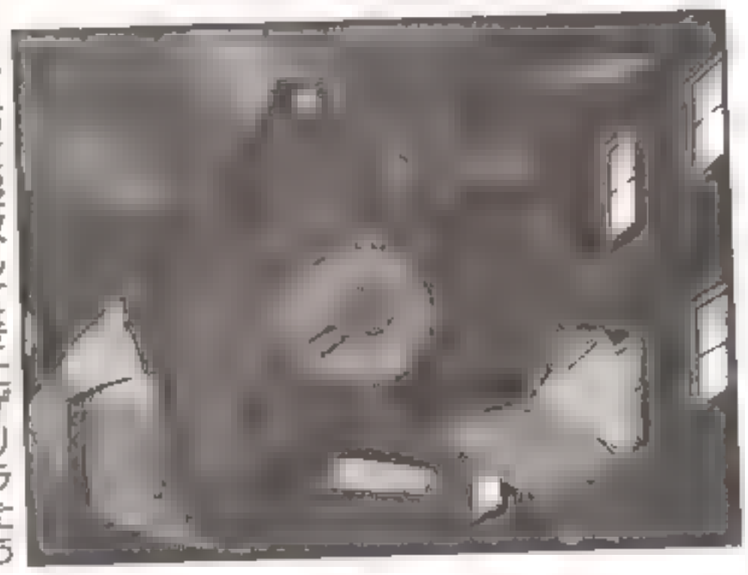
う前に、もういちど、話し合う姿勢を、忘れないでもらいたい。それが、本官の考え方である。

#32 血気はやる進軍

【予告編】 パルミナはまさにデロイアの火薬庫
止まることを知らない
熱い想いが導火線に火を点けた
弾ける火花が目指す先はドガ　血気は奔る　ドガへドガへ
パルミナに時代の風穴は空くか

ジョークの仲間のリタは元は酒場の踊り子だった。土地に不慣れな「太陽の牙」の案内役を務める

ドガ基地と市街地を結ぶ道路上にダグラムを配置するが、敵はヘリを使ってすり抜けてしまう。


ドガ市に侵攻してきたゲリラたちを、重CBアーマー・ブロックヘッド部隊が掃討していく。

【ストーリー】

[illegible]攻略を[illegible]、各地で敗[illegible]いたケーリ[illegible]だ次々とノキオのトへ参集していた。サマリンと「太陽の牙」がノキオと合流を果たしたことで、ゲリラたちの[illegible]る。方がたは行政庁[illegible]はすでにゲリラのそうした動向を察知しており、レークの指揮でドガ市周辺の防備を固めはじめる。[illegible]兵力数では確かにゲリラが優っていたが防衛は素人の集団、彼らの作戦はすべて見抜かれていたのだ。

待望の[illegible]蜂起。昂り上がるノキオたちは対抗的に、サマリンはまた機は熟したとおらず今回の作戦は見合わせるべきだと[illegible]する。戦闘のプロである軍隊に正面から対抗するには、圧倒的に[illegible]がその理由だった。だがサマリンの弁舌を持ってしてもはやるゲリラたちの心を抑えることは不可能で、一抹の不安を抱えながら攻略作戦は開始された。

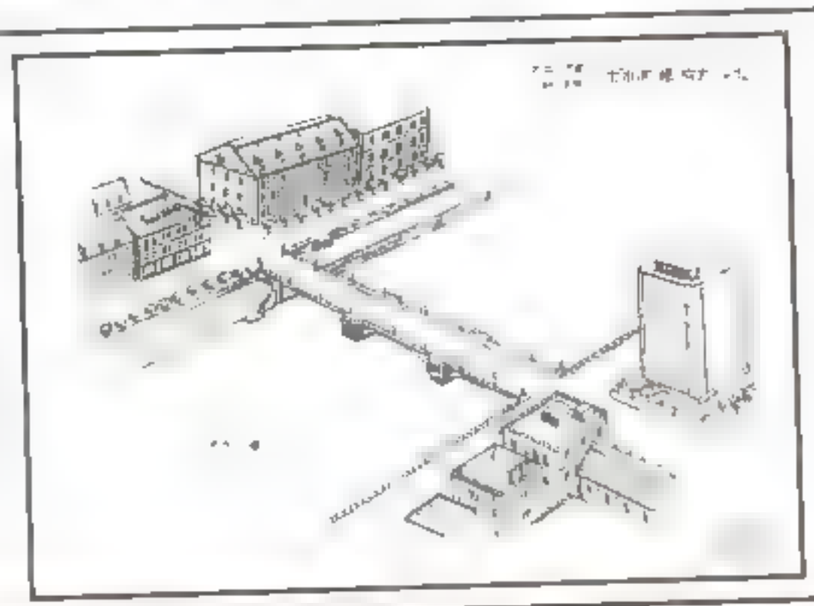
レークは[illegible]合いを第一とする釘を刺していたが、いざ戦闘となると一転して優秀な軍人らしい冷静目つ的確な指揮ぶりを見せた。彼はダグラムかCBアーマーの市内突入を阻止するため市と郊外の基地を結ぶルートに配置されていると読み、近距離であるにも拘わらずヘリによる空輸を命じたのだ。

市内で蜂起したゲリラ本隊のまえに、次々とプロックヘッドが降下してくる。どれほどの兵力があっても小銃ではCBアーマーを倒すことはできない。瞬く間にゲリラたちは追いつめられ、撃破されていく。ダグラムが駆けつけたときにはすでに大勢は決していた。市内はゲリラの屍で埋め尽くされていた。その凄惨な光景に言葉を失ったクリンの目の前で、ノキオは機銃弾で蜂の巣にされてしまう。

戦いはゲリラの敗北に終わった。ドガ市からのがれ[illegible]黒煙を見ながら、ロ[illegible]キーは「負けたな[illegible]」と静かに言うのだった。

【ワンポイント】

今回はレークの指揮ぶりに注目したい。確かにノキオたちの作戦はセオリー通りのまずいものだったが、だからこそ読まれ易いという弱点を孕んでいた。実際、一手先を読む程度では戦闘に勝利することは難しい。戦いとは一手先を読み手を打たなければならないのだ。そのプロフェッショナルが軍人なのであり、彼らに対抗するには本編でサマリンが言っているように、同じプロの頭脳が欠かせない要件になってくる。本エピソードはレークの優れた指揮を見せることにより、逆説的にその必要性を訴えている。



ドガ市（内）橋　附近
勢いこそあったものの、装備、練度などすべての点でゲリラ側は連邦軍に劣っており、橋の周辺を含むあらゆる市内でCBアーマーをはじめとする守備隊に撃破されていった。

■[illegible]
[illegible]行政庁が置かれ[illegible]
[illegible]州をはじめ地球7州の代表的な民間商社が支社を設置し、輸出入の業務を行っている

■ドガ市攻略作戦（#32）
夜陰に乗じて市内各所に侵入し[illegible]制圧する。また、市郊外に位置する[illegible]隊を阻止するため、ドガ市と基地を[illegible]

#33 戦火は村々に

【予告編】 思わぬ大敗は独立への陣痛か　戦いの炎は夜空を翔け
混沌の大陸に戦乱の火種を散らす　敵のうねりは風を呼び
バルミナの大地を吹き渡る　風は聞く　風は見る
人の世の悲しみを　そして激しさを

レークは独立闘争を金儲けの手段と考えているかのようなコホード州領事の発言に、激憤した。

連邦軍の攻撃に晒されている同志を救うために、リタの案内でロッキーたちはタロス村へ向かった。

【ストーリー】

　ドガ市に残された残骸から押収されたゲリラたちの武器は、明らかに地球のコホード州やミンガス州で作られたものだった。かねてから地球製の武器がゲリラに流れ込んでいることは噂になっていたが、それを目の当たりにしたレークは地球系商社の節操のないやり口に大きな憤りを抱く。

　ドガ市のコホード系商社に乗り込んだレークは責任者を詰問するが、彼は密輸を認めるどころかゲリラが使っている小銃は密造模造銃であり、自分たちこそ被害者だと開き直る。その傲岸な物言いに、レークは深い怒りを覚えた。

　ここへ、ドナンが[illegible]した。最近地球ではメドール州がデロイアを私物化しているとの批判が高まっていたことが、怒りの原因だった。そして密輸問題の報告を受けたドナンは、わざわざデロイアを訪れたメドール首相になぜ自分がこの惑星に固執するのか、その理由を説明しはじめた。

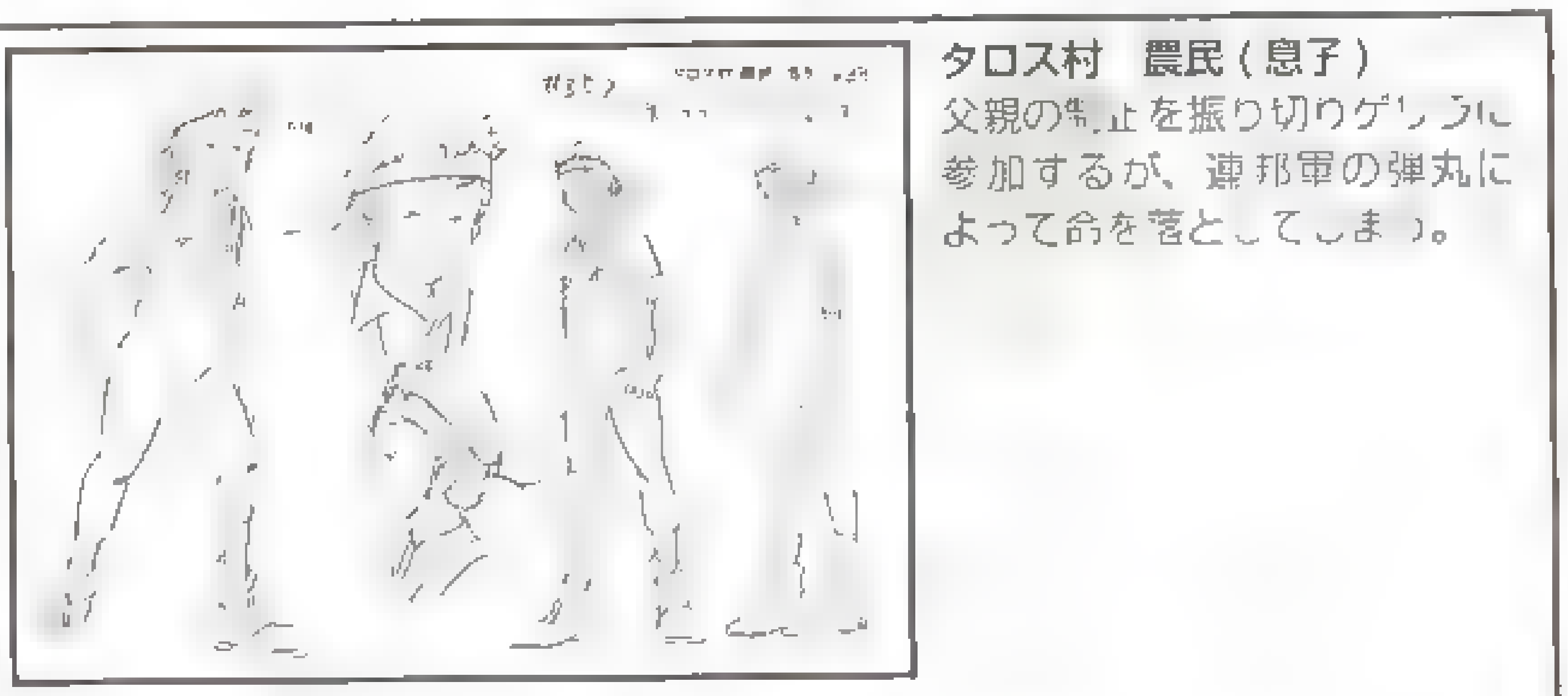
　一方ドナンの自分に対する処遇に不満なラコックは、野心達成のためにロイルにゲリラへの武器密売をそそのかす。最初は無理だと言っていたロイルも、立身出世の材料になるのならとラコックのアドバイスを受け入れるのだった。

　ドガ市から逃れたサマリンは、50キロほど離れたタロス村に武装したゲリラがいることをジョークから知らされると、急いでダグラムを向かわせることを決める。ジョークが知っていたのだから、おそらく連邦軍もタロス村にゲリラが潜んでいることを察知している可能性が高い。

　サマリンの危惧通りタロス村は連邦軍の攻撃を受けていた。ダグラムの活躍で撃退に成功するものの、タロス村に向かう途中に出会った、反対する父親を振り切ってゲリラとなった少年がクリンの目の前で敵弾に倒れてしまう。父親を残し若い命を散らした少年の形見を残し、クリンたちは村を後にするのだった。

【ワンポイント】

　地球系商社によるゲリラへの武器密輸を皮切りに、デロイアを食い物にしようとする地球の姿が浮き彫りにされていく。また今回、ドナンによって独立を認めない理由が語られるが、あっさりとした描写に反してその内容は衝撃的である。その内容については本頁下段を見て欲しいが、地球とデロイアが妥協することはかなり困難であることが理解できるだろう。こうなれば独立闘争どころか全面的な戦争は避け得ないことは間違いなく、事実、物語は徐々に大規模な戦いに向けて胎動していく。



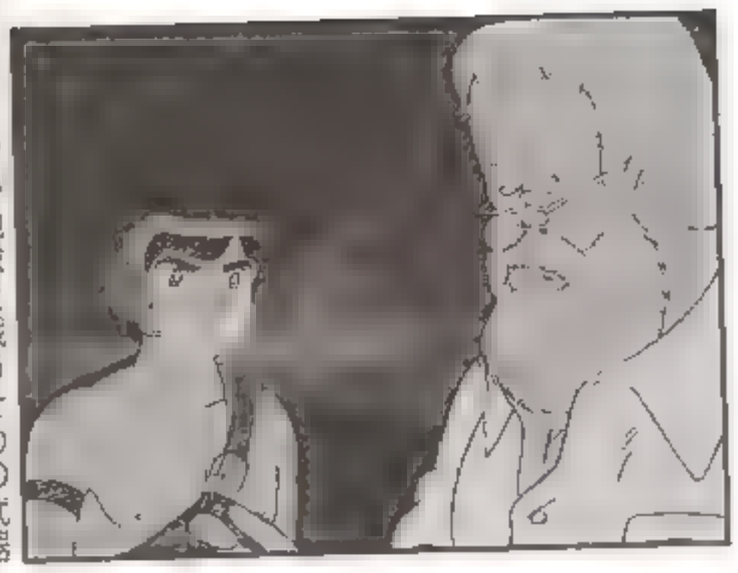
タロス村　農民（息子）
父親の制止を振り切りゲリラに参加するが、連邦軍の弾丸によって命を落としてしまう。

駐バルミナ　コホード州領事
設定画では「領事」となっているが、劇中では商社の責任者として登場した。ゲリラに武器を流していることをレークに詰問されるが、のらりくらりと言い訳する。

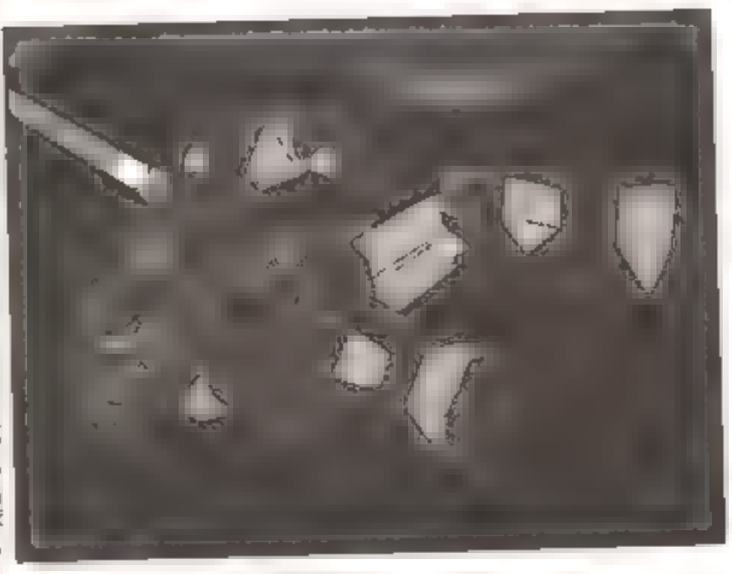
[illegible]
ある。これらの鉱星は地球が開拓す[illegible]
[illegible]
口の増加に反比例して年々低下の一
途を辿っており、その上で[illegible]
[illegible]ドナンは地球が
生き残るためにもデロイアの独立を
[illegible]

#34 武器は誰がために

【予告編】 望み求めることに　戦いが遂げ得ぬものならば
流される血からは目を背けまい　だが せめて戦うは
己が手で　己が脚でと望むのは戦士としては未熟なのか
デボヤ海記に曰く　光りある者は明日へゆんで　その極みを
馬手（めて　に感いを　しかして心に牙を持てりと



サマリンが地球と戦うための武器を敵である地球から買っていることに、クリンは疑問を抱く



武器の取引現場を連邦軍が奇襲した。クリンは迷いを抱きつつダグラムでソルティックと戦う。

#34 武器は誰がために

#35 再会の野戦病院

【ストーリー】

パルミナの8割の人間が従事する農業が地球系企業を地主とする再時代的小作農だと知ったレークは、これでは農民が不満を持つのは当然だと官僚に怒りをぶつける。このような理不尽さが、ゲリラをむ温床になっているのだ　こうした農民の待遇を改善することが、独立運動の根幹問題である経済の解決に繋がると考えた彼は、ドナンに許可を取った上でパルミナに限定した農政改革を進めようとする　そんなレークの真面目な取り組みをドナンは高く評価していた　メドール州首相はレークだけでなくラコックにもとこかの行政府をまかせたらどうか？　と進言してみるが、ラコックの期待に反しドナンは否と答える　確かに政治家としてはラコックは優れている　だが彼には人を治めていくだけの徳がないそれが理由だった　ドナンの心の裡を知ったラコックは、ならば俺は俺の生き方を、自分で切り拓くだけだ、と唇を噛みしめる

カサマリン指揮するゲーラは、ある農場の保管庫へ向かっていた　そこでクリンはサマリンがコホード州から武器を買い付けていることを知り、なぜ敵である地球から武器を買うのかと怒りを覚える　そんな彼をサマリンは、敵味方を単純なレノアルで分けてはいけないと諭すのだった。

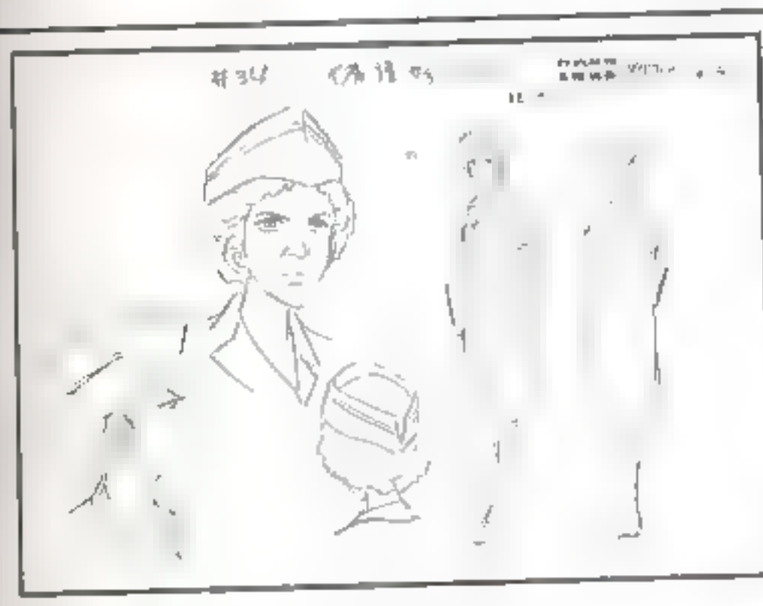
時を同じくしてラルターフの助手としてパルミナへやって来たディンゴは、空港でゲリラによる無差別テロに遭遇する　罪のない人々を巻き込む憎しみの連鎖に彼女は深く悲しみ、さらに訪れた野戦病院で苦しむ負傷者たちを見て自分も看護師として働くことを願い出る

武器の取引現場を連邦軍が急襲した　敵はダグラムに

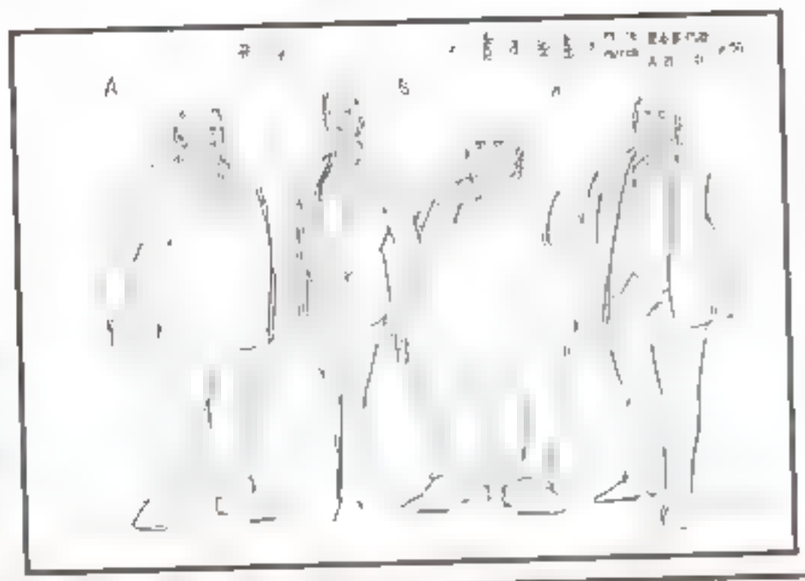
クリンが傷を負ってしまい、クリンが野戦病院に連れて行くことに　サマリンは野戦病院がクリンの良い教師になってくれれば、と呟くのだった

【ワンポイント】

これまた地味ながダグラムファン好みのエピソードである　地球資本とプロイア労働者という対立する双方から思惑を投げかけられても決して押されず、平和的解決を成し遂げるためにはなんとも同じことを繰り返すと決意するレーク　目的を達成するためには敵であろう地球との取引さえ辞さないサマリンのやり方を理解できないクリン　国家の市民を犠牲にするプロを行う主人公個のゲリラ勢力と、目の前の悲劇を見逃すことができないディンゴ　この復雑に絡み合う人間ドラマこそ、本作の本当の魅力なのだ



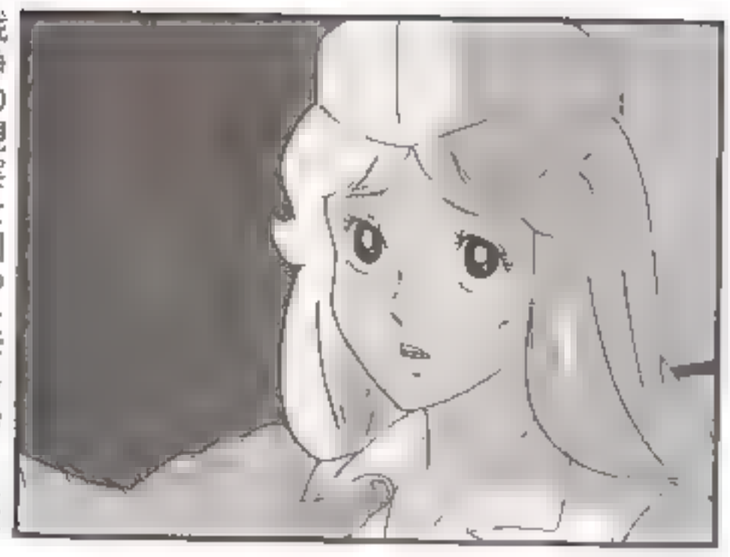
野戦病院看護婦長ダロウェイ
言動はキツイが、それは患者たちをなんとしてでも助けようという意思の現れである。病院解散後はドカ市で孤児院を開く。



パルミナ大陸資本家代表
A、B、C、D
パルミナ大陸にはメドール以外の外資本を投下している。彼らの経営方針はまるで帝国主義時代のような、徹底した搾取に根幹を置いている。

#35 再会の野戦病院

【予告編】 時の流れの中で出会い　別れ　そしてまた巡り会う
炎が走る動乱の地に　少女が戦士の胸に問うものはなにか
戦士が少女の瞳に見るものはなにか　デボヤ海記に曰く
空と波　出会いて風舞り　大地を分かつと

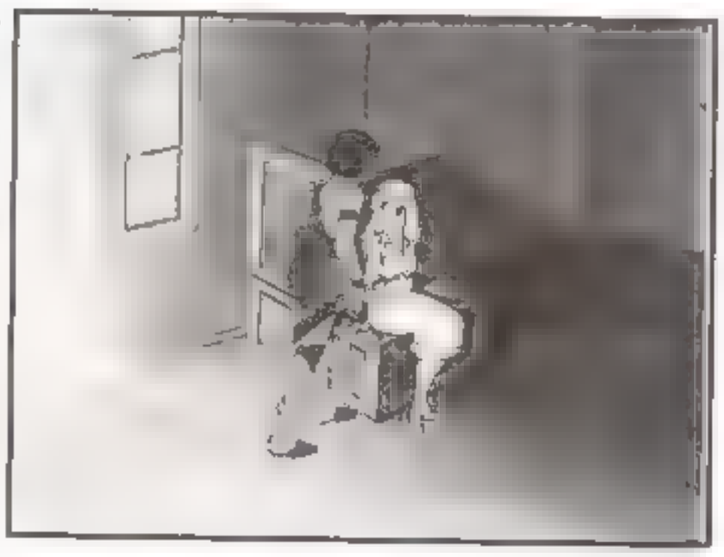


戦争の現実を知ったデイジーは、野戦病院に自分が進むべき道を見出した。

【ストーリー】

野戦病院もまた戦場だった。負傷した兵士の呻き声と血の臭い。運び出されていく物言わぬ死体。表には出難い戦争のもうひとつの姿がここにある。デイジーはいま看護師として、この戦場で戦っていた。

彼女はそこで、シャルルンコルンたち負傷者を野戦病院に運れてきたクリンと再会し喜びにひたする。またクリンも、嬉しくなったデイジーに驚きを隠せず、彼女のあのような姿を見るのは初めてだと、ラルターフ。「っ。次いでクリンは彼に、サマリンが地球から武器を買っていることは触が通らないのではないか？　と



ひさしぶりにデイジーと再会したクリンは、もはや彼女がかつての弱々しい少女でないことを知る。

いう疑惑をふくらませる。それに対しラルターフは、確かにそれは不吉だが、このゲリラ・理想軍閥わず治療する野戦病院も同じだと答える。なぜならば維持費用は敵であるパルミナ行政府から出ているからだ。全我人を助けるためには綺麗事はいっていられない。そして、信念を貫くためには時に目を瞑らなくてはならないこともある。たとえ筋が通らなくても……。ラルターフの言葉にクリンは自分の視野の狭さを悟り、心を覆っていた迷いを振り切るのだった。

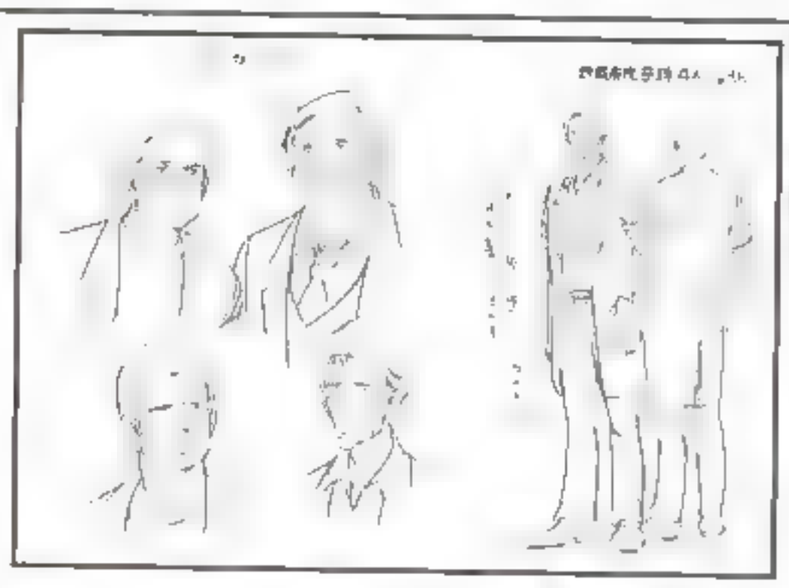
地球を旅立ってから半年、クリンは無性にデイジーが恋しくなっていた。彼は一緒にアンディ鉱山へ行こうと誘うが、デイジーは野戦病院に残り看護師として働く決意を打ち明ける。ふたりはまたの再会を誓い、互いの道を進むのだった。

クリンたちがサルビア峠を進むサマリンたちと合流しようとしたそのとき、ソルティック隊が襲いかかってきた。ミサイルとリニアガンの猛攻を受けるものの、すんこのところでダグラムに搭乗する。いかに3機のソルティックといえども、迷いを吹っ切ったクリンが操るダグラムの敵ではなく、瞬く間に撃破されてしまう。クリンたちが危機を乗り越えたそのころ、野戦病院では危険な状態にあった赤ん坊の容体が回復しつつあった。

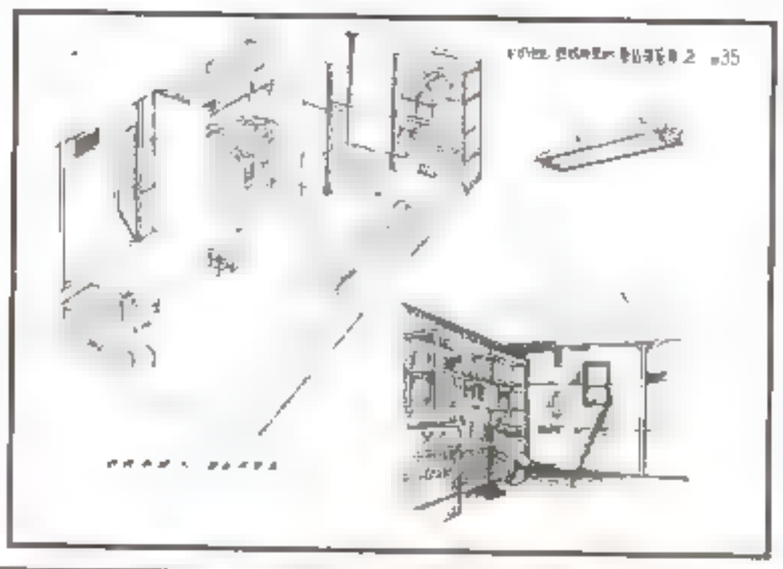
【ワンポイント】

戦場を描くだけでは、戦争を描いているとは言えない。そして戦争の凄惨さは戦場よりも、本エピソードの舞台になった野戦病院のような後方地帯でこそ浮き彫りになる。そうしたポイントをしっかりと押さえているのが『ダグラム』の優れた部分だと言えるだろう。

またいうまでもなく部分だけでなく、今回の戦闘描写は作画、動きともに非常にレベルが高く、躍動感たっぷりのソルティックとダグラムの激闘はシリーズ中でもトップクラスに入るのではないだろうか。



野戦病院医師４人
敵味方、軍人民間人を問わず、戦傷を負った人々を助けようと働く。



ドガ地区野戦病院（西）薬品保管庫２
クリンがテ[illegible]をかけた場所。

★[illegible]
とつ[illegible]ハックルによれば「ラングディン[illegible]ファイナルランチャーM4」という型落ちだという。CB[illegible]

■ダグラム（#34）
[illegible]ツの7割が、実は地球製なのである。

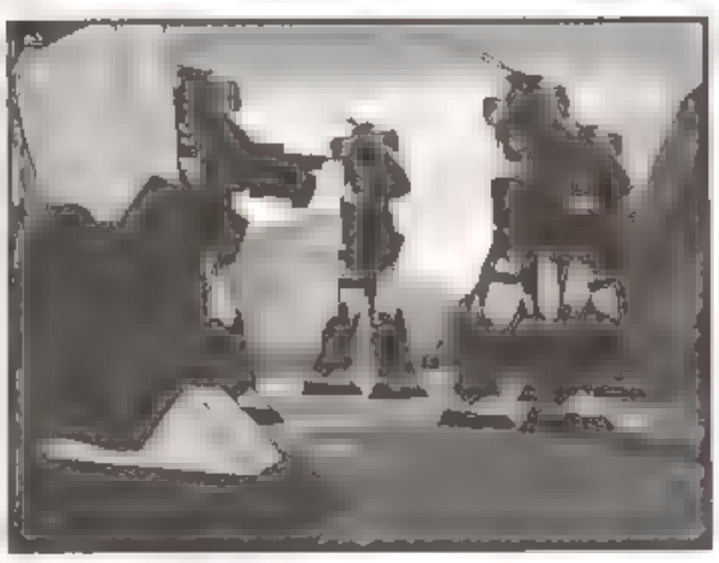
★サマリン派ゲリラの次の行動
[illegible]
「これから我々は、ここから800[illegible]鉱山へ向かう。そしてそこをとりあえずの本拠地として、人民政府樹立の準備を進める。（中略）アンディ鉱山は、コボード、ミンガス、ロードティア、これ三[illegible]
[illegible]
[illegible]ば、連邦内の利害が複雑に絡んで[illegible]撃できんというわけだ」

★特別連絡No.24（#34）
野戦病院は中立地帯とし、[illegible]した兵士の立ち入りを一切禁じるとうもの。レークによって発布された。

#36 塞がれた行く手

【予告編】 戦士の行く手を阻まんとして　大地は裂け空は燃える
地を走る者は大地に問う　流される血は誰のために
心に翼持つ者は空に問う　時の行く手を遮るものは誰か

ゲリラたちは連邦軍から地雷探知機を手に入れて地雷を除去、進行ルートを切り拓いていく。


地雷を除去しているために身動きが取れない「太陽の牙」に、ソルティックの大部隊が迫りくる。

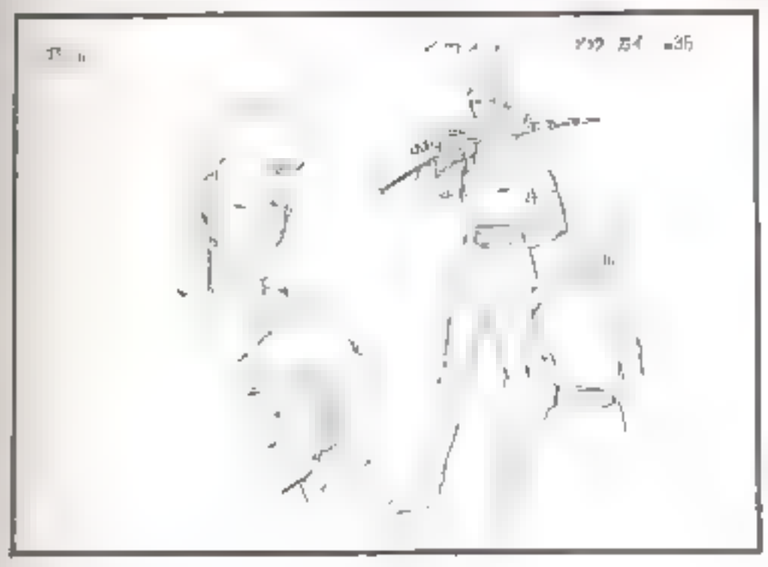
ハックルはトレーラーに固定されたリニアカノンでソルティックを砲撃、ダグラムを危機から救う。

【ストーリー】

アンディ鉱山を目指し谷間の道を進む「太陽の牙」たち。連邦軍が仕掛けた地雷原に入りこんでしまった。設置部隊を撃撃して手に入れた地雷探知機とデジタルマップを使い、ハックルが地雷除去をはじめた。しかしいくつかの地雷を爆発させてしまったことで、連邦軍に動向を察知されてしまう。地雷の除去が完了するまえに、デューイ戦闘ヘリ1機とソルティック5機からなるゲリラ掃討隊が後方から迫ってきた。除去を完了させる時間を稼ぐため、クリンはダグラムでソルティック家に立ち向かう。まず2機撃破するものの互いに地雷原へ入ってしまい、十分な身動きを取ることができなくなってしまった。地雷原の脱出を諦めたロノキーたちは脱出に成功するか、敵がいるかクリンはその場から動くことができない。そこでハックルがターボザックのリニアカノンで援護射撃、ソルティックを1機撃破する。形勢不利を悟った残りソルティックは撤退。「太陽の牙」は見事に危機を免れたのだった。

【ワンポイント】

往年の名作海外ドラマ『コンバット!』を想起させるエピソードである。地雷原突破と機動性が封じられてしまったダグラムの戦いを主軸に展開するため、今回サマリンはほとんど台詞なし。対していまひとつ活躍が少なくなっていたロノキーが、久しぶりにそのバイクテクニックを披露してくれる。ある意味、1クール目のテイストを強く感じさせるストーリーとも言えるだろう。


ゲリラ　カイ
サマリンたちの進路上に連邦軍部隊がいることを報せようとした。敵が仕掛けた地雷原に入ってしまい爆死する。

ゲリラ　ブティック
カイの相棒。目の前でカイが地雷によって吹き飛ぶ様を目のあたりにする。

#37 選択の渡河作戦

【予告編】　歩まねばならぬ道がある　渡らねばならない川がある
幾筋かの道がある　いくつかの橋がある
いま　命賭けて選択のとき　心に浮かぶただ　筋の道

レークは資本家と震民の和解を取り持とうと話し合いの場を設けるが、失敗に終わってしまう。

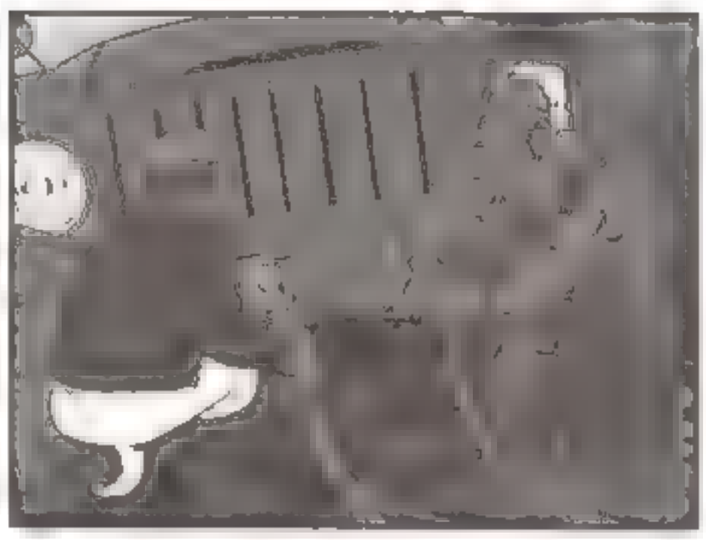
【ストーリー】

ゲリラによる地球系企業への爆弾テロが行われたため、ドカ市に外出禁止令が発令されたCBアーマーが市内を闊歩し、兵士たちはひどく殺気立っている。だが真犯人はゲリラではなく、裏切り者のデスタンだった。テロが頻発すれば外出禁止令を出さざるを得ず、それはレークの治安維持能力への疑問へつながる。すべてはレークを追い落とそうとするラコックが命じたことだった。

ゲリラの蠢動（しゅんどう）。レークが頭を悩ませている頃、太陽の牙ダグラムは鉱山に渡る最後の難関である、ブリーズ川へとさしかかったものの、この川さえ渡れば鉱山は目と鼻の先だ。しかし橋にはクラブガンナーとソルティーケが配置されている。きっと戦闘へ持ち込まれているに違いない。ジョルジュが橋の強行突破を唱えるが、そうなれば少なくない犠牲が生じるだろう。なによりもせっかく調達した物資を失いたくない。

10キロほど上流に古い橋があることを知ったサマリンは、ショルジュとハックルを斥候に出し、意外と手薄であることを知る。同じ賭けならこちらの方が勝率が高い。そう考えたサマリンは上流の橋を渡ることを決断、移動を開始する。

警備兵たちの排除には成功したものの、増援を呼ばれてしまいCBアーマー隊に襲われてしまう。少々苦戦するがダグラムがこれを撃破したサマリンの決断力がもたらした勝利だった。

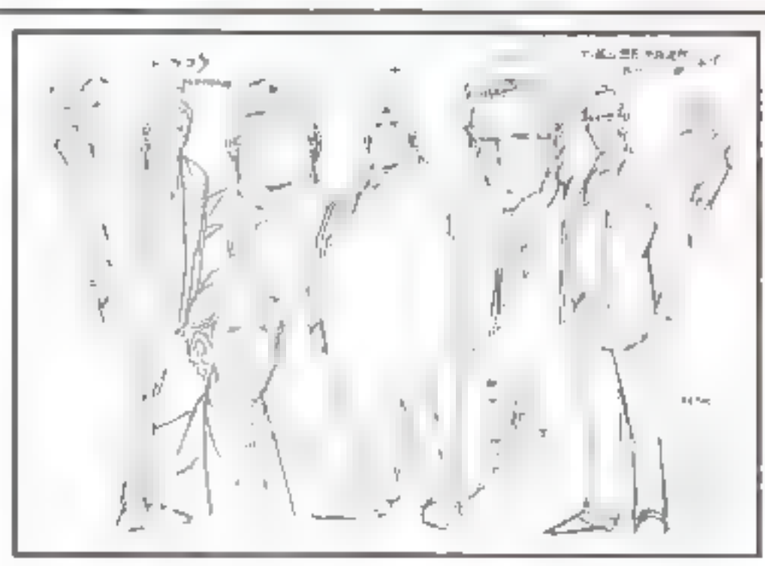

崩れ落ちそうな橋から落ちそうなトラックにロープをかけて、ダグラムで引っ張りあげようとする。

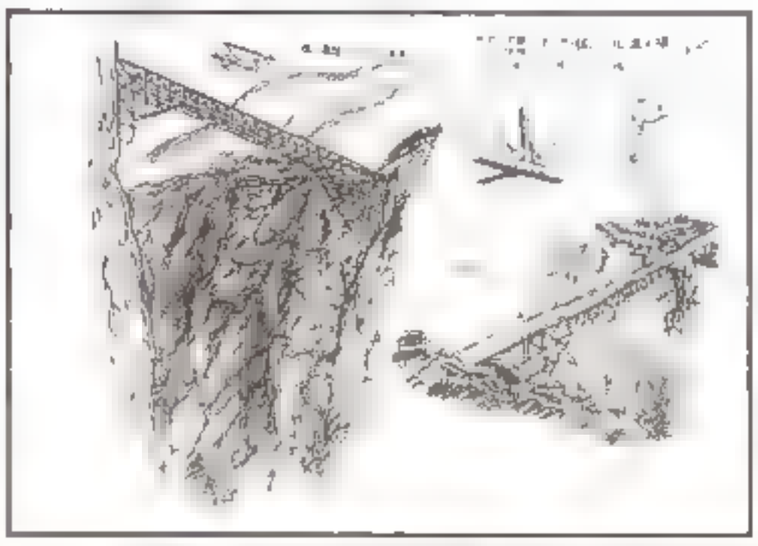
背後に落ちかけているトラックがいるため、ダグラムは思うようにクラブガンナーと戦えない。

【ワンポイント】

とんとん自転車でいくデスタンの有様が小気味よい。今回も、格闘のはなから結局は無駄な役人の心者ぶりが、かなりと描かれている。カゲリラ側ではジョルジュとハックルの迷コンビぶりが発揮されはじめる。面白いのはフェスタ相手とは違い、どちらかといえばハックルがツッコミ役になっているところがなかなかふたりの性格を表す。

ふたりの性格を表す。

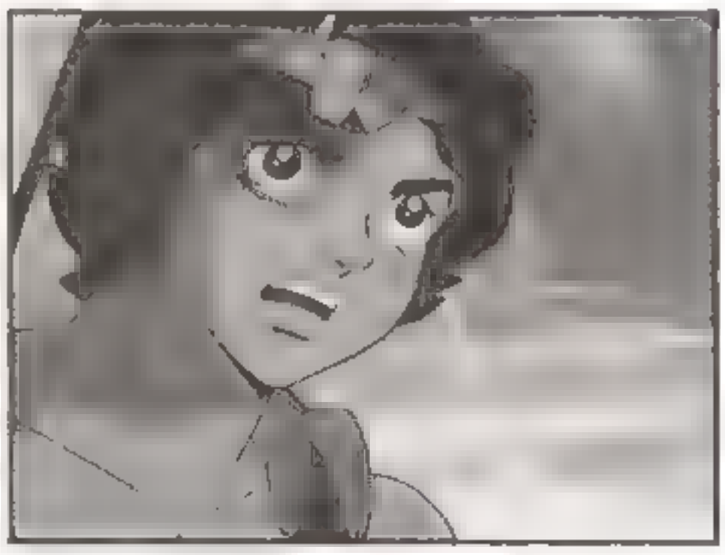

アンディ鉱山駐在地球連邦各州代表
メトール外と経済的対立関係にある地球連邦から鉱山経営のために送り込まれてきた役人。利害の関係からゲリラを助ける。


アンディ鉱山　旧道の橋
鉄と木材を組み合わせた　老朽化が著しい橋である。クラブガンナーの攻撃を受けて半壊状態になる。

#38 アンディ鉱山封鎖

【予告編】 地球連邦内の主導権争いが生んだ真空の三角地帯　アンディ鉱山
そこが果たして　デロイア軍独立誕生の地となるのか
あの山なみを越えればと思う弟と
越えさせてはならんと決意する兄とが
立場を賭け　主義を賭け　命を賭けて再会する

ゲリラとの武力衝突を望まないレークは、危険を顧みずサマリンの元へ直接出向き交渉を行った。


サマリンとレークの交渉は決裂、最新のXネブラ対応型ブロックヘッドがダグラムに襲いかかる。

左腕を欠くダグラムだが、アームリニアガンの徹甲弾が、ブロックヘッドの分厚い装甲を撃ち貫く。

【ストーリー】

「人質のオ　がアンディ鉱山を目指し、すぐそばまで接近しているとの報告を受けたレークは眉をひそませた。なぜならアンディ鉱山を経由するナポード、ミンガス、ローディア　州はメドル州のやり方に反発しているうえ、デロイアが独立すれば優先的に利益を得ることができるからだ。サマリンはこの対立関係を巧みに利用しようというのである。むろんレークもそうしたサマリンの意図を察知しており、先手を打って三州を代表する評議員会見を持ち、彼らにサマリンへ協力しないように要請する。代表たちは要請を受けるか、それはあくまで表向きな態度でしかなかった　彼らの口調や素振りからそのことに気づいたレークは、こんどはサマリンとの直接会見を試みることを決意する。

一方サマリンはフリアンの案内でロリーの町からアンディ鉱山へ入りこむ手管を整えていくが、そこへ単身レークが現れ会見を求めた

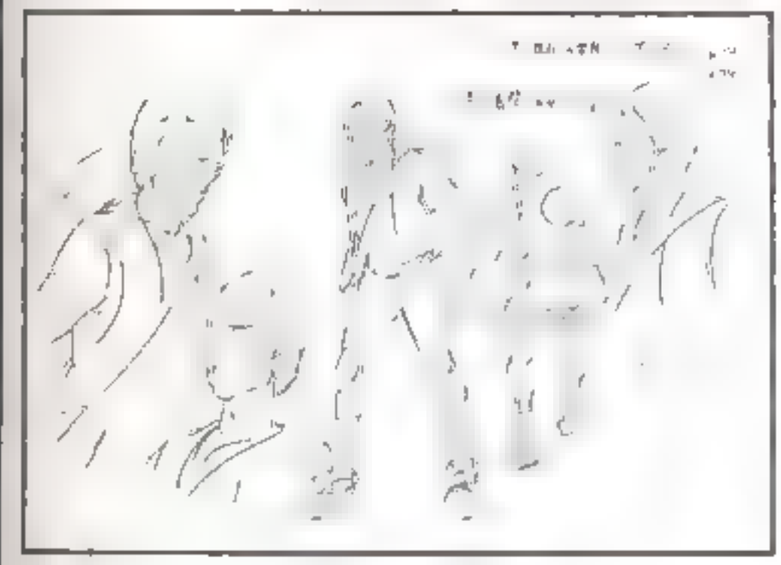
武力衝突を望まないレークはサマリンに、アンディ鉱山への入口にを要請する。もしアンディ鉱山へ入ればゲリラは力を蓄え、結果、戦いはより凄惨なものになり多くの犠牲者を生むことになるレークはなんとしてでもそんな事態を避けたかったのだ。サマリンはレークの見識に感服しながらも、やはり決意を変える気はないとコロい切った。会見は決裂に終わり、クリンはレークからドナンの「自分の道を進むがいい。だがくれぐれも、後で悔やむことのないように」との言葉を受け取ると、仲間とともに去っていった。

戦闘が開始されたXネブラ対応ブロックヘッドは運動性、装甲共にダグラムを上回っており、さしものクリンも苦戦を強いられ、左腕を失ってしまう

穴に落ちて身動きがとれなくなるものの、それを逆手にとって死角からブロックヘッドを攻撃、見事これを撃破するのだった。

【ワンポイント】

ついにダグラムを上回る性能を持つCBアーマーが登場した。一はいっても外観上では長距離砲以外に目立ったはなく、また、強敵登場といったイベント的な内容もない　一種のロボットアニメに比べるとひとく地味だが、この地味さ加減こそが『ダグラム』の魅力だろう。また出戦はするものの、やはりくぐり抜けてきた場数のせいか、前線にありながらもクリンは冷静に戦い戦況を逆転していく。こうした地味さが他の作品にないリアルさを感じさせてくれるのである。



アンディ鉱山への案内人
ブリアン
アンディ鉱山周辺の地理に長けた初老の男。後の鉱山脱出の際にも尽力する。

レーク付副官　連邦軍中尉
ドリップ、ゲイダ
行政官の副官。レークの誠実な人柄に惹かれ、上官としてだけでなく、人間としても尊敬するようになる。

■[illegible]

★マッスルシリンダー（#38）
[illegible]ターを意味する単語。人体の筋肉に相当することからこの名がついた。

■[illegible]
アンディ鉱山へ向かう「太陽の牙」が通過した廃坑。

■[illegible]

■[illegible]
グラムと交戦、撃破する。

#39 封鎖山脈を越えろ

【予告編】 希望の中に策略が潜み　約束の中に打算が踊る
目指す彼の地はパワープレイが生み出した
危険で脆い真空の三角地帯　だがいまは
この鉄路をただ走れ　車輪を軋ませ　ただ目指せ
もう爆走列車に乗り合わせてしまったのだから

ドリップたちは、義理とはいえども弟を敵にせねばならないレークの心情を察し、居住まいを正した。

ゲリップたちは無事にアンディ鉱山へ入山することに成功したが、ダグラムの左腕は失われていた。

【ストーリー】

レークはゲリラの侵入を阻むため、アンディ鉱山へ繋がる降路と鉄路を完全に封鎖した。クリンが敵にいることに一抹の疑いを抱くが、任務に私情を挟むわけにはいかないのだと自分に言い聞かせる。またクリンもレークを思いよってい[illegible]に、真の九頭[illegible]が彼と対峙する[illegible]係になってしまったことにナーバスになっていた……。

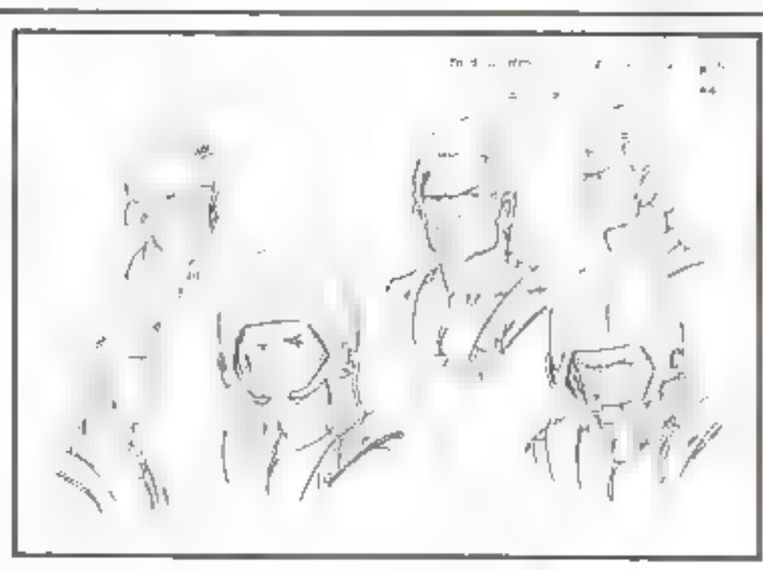
サマリン率いるゲリラたちは鉱山鉄道を利用してアンディ鉱山へ入りこもうとするが、操車場はブロックヘッドやソルティックを含む警備部隊によって押さえられていた。後は先のロリー鉱山戦でゲリラと戦ったCBアーマー隊の生き残りで、仲間を戦死させたダグラムに対し軍務を超えた恨みを抱きはじめていた。

そんなことなど露知らないゲリラたちは、ダグラムを囮にしての強行作戦を開始した。ダグラムがブロックヘッドを引きつけている間に、「太陽の牙」をはじめとするゲリラたちがソルティックと歩兵部隊を攻撃、これを撤退に追い込み操車場の制圧に成功する。ゲリラたちは急いでトレーラーや車輌を列車に搭載し、アンディ鉱山を目指して出発した。囮になったクリンはハンクとアーロンのブロックヘッドの攻撃を受け、さらに増援に駆けつけたノロックヘッドに挟撃されてしまう。だがクリンはミサイルの煙幕で生じた爆煙を煙幕に1機を撃破、返す刀でハンクたちのノロックヘッドを眼下の森へ蹴り落として難を逃れるのだった。

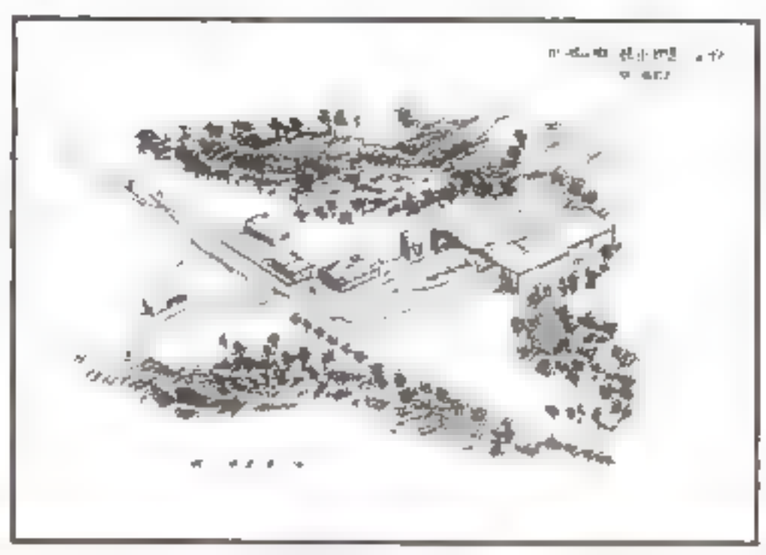
一方ハンクレが運転する列車に戦闘ヘリ部隊が襲いかかってきた。ロックたちが対空射撃を行うものの、有効打をあたえることができない。絶体絶命の危機のそのとき、追いついてきたクリンがリニアガンでヘリを撃墜した。残ったヘリは形勢不利と見て撤退、サマリンたちはついにアンディ鉱山へ辿り着くのだった。

【ワンポイント】

ダーク曹長やレークなど、これまでも魅力的なキャラクターが敵として登場することはあったが、クリンに個人的に憎悪の感情を抱くことはなかった。しかし今回登場したハンクとアーロンは違う。ふたりはダグラムを戦友の仇として、運命に反してまで追いかけはじめるのだ。部隊を失った彼のガルンアに似ているが、彼の場合は面子が潰されたことが理由の大半を占めていた。やがてアーロンたちは恐るべき敵に変貌、クリンをこれまでにない窮地に追い詰めていくのである。



ブロックヘッドパイロット
ヒース、エバンス
ハンクたちの戦友。ブロックヘッドに乗り込んだところをアームリニアガンの直撃を受けて戦死する。



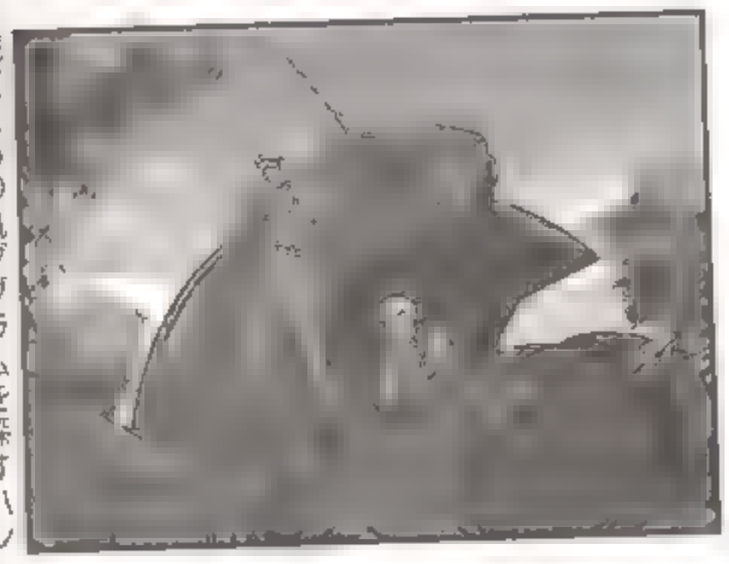
ロリー鉱山附近　鉱山鉄道
ゲリラはこの鉄度を使って山岳地帯を移動、連邦軍の哨戒線を突破しアンディ鉱山へと辿れた。

■ハンク（アーロン（#39）
アーロンはコロニー外出身で、実家

#40 戦士の休息（前編）

ゲリラかアンディ鉱山に入ったとの報告を受けるドナン。最も憂慮すべき事態に陥ってしまった。

予告編 アンディ鉱山潜入を果たしたゲリラたちにとって
しばしの安息の日が訪れるはずであったが　戦いが
憎しみを生むのか　憎しみが戦いを呼ぶのか　組織を離れ
主義からも遠く　ただ復讐の業火を燃やす
たったふたりの軍隊があった



戦友たちの仇ダグラムを探すハンクたち。撤収命令を無視してまでもタグラムを追いかけていく。

【ストーリー】

鉱山銀行動員隊のB[illegible]は、アーマー隊[illegible]引き残ったフロックハ[illegible]の拾乗員、ハンクとアーロンは撤収命令が発せられたにも拘わらず、原隊へ復帰せず、アンディ鉱山を臨むのしし潜んでいた戦友を[illegible]殺し、ダグラムに搭乗しようというのだ。

レークは戦闘が許されない鉱山銀行[illegible]で戦ったことにつて、鉱山経営陣から抗議の電話を受けていた。問題捜査の鉱山経営陣をタヌキどもと罵りながらも、ゲリラが鉱山街へ入った以上もはや手出しはできない。そこでレークは次善の策としてアンディ鉱山の封鎖作戦を発動、ゲリラたちを鉱山内へ封じ込める[illegible]段に出るのだった。

鉱山へ入ったサマリンは[illegible]陣の[illegible]の代表と会見し、協力の約束をとりつけた。彼らは狙撃は必ずしもあると語り、サマリンは狙撃の暁には三州の協力があったことを大いに恩に[illegible]めると答える。そのやりとりを見ていたロキはサヌキだ、大人は汚いと笑いながら揶揄、サマリンはそんな若者の[illegible]な言葉に苦笑している。

サマリンのアンディ鉱山への入山を待った作戦でレークがカ[illegible]ディリレへ召喚されたこと、ロキたちはアンディの街で久方ぶりの休息を満喫していた。一方クリンとハックはダグラムの整備を続けていたが、破壊された腕を交換するには人手のクレーンが必要だった。彼らは鉱山側との折衝し後であるカルメルに、条件に合うクレーンを借りた工場を紹介してほしいと依頼した。工場はすぐに見つかり、クリンたちはさっそくダグラムを載せたトレーラーで街外れにあるその工場へと向かった。

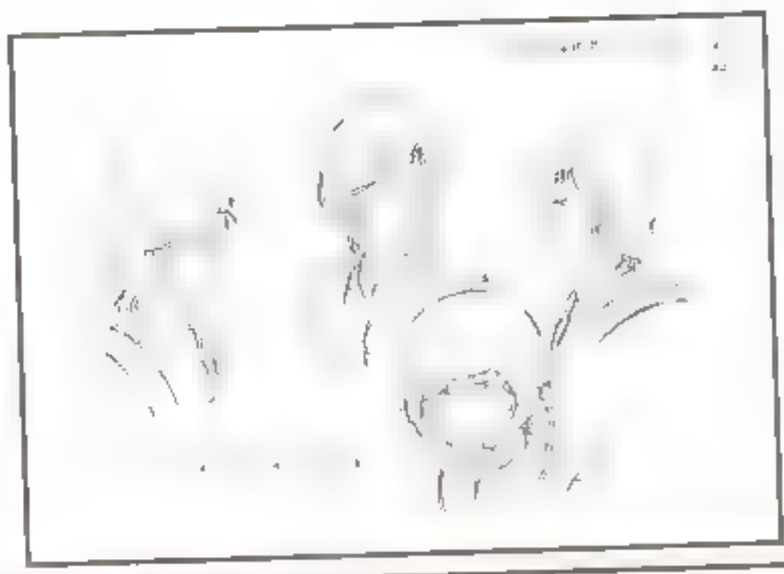
[illegible]

街外れに向かって通りを走るトレーラーを発見、荷のサイズからダグラムだと見抜く。[illegible]かるる中、ハンクとハックが鉱山の内部へと侵入していった。

【ワンポイント】

優れた作品[illegible]のひとつに「[illegible]語らせない」というものがある。どういうことかというと、[illegible]というものは気持ちを伝えることを容易にする反面、気持ちを薄っぺらいものにしてしまうことが間々あり、[illegible]を用いないことの方が心情を伝えることもあるのだ。たとえば今回アンとハックは戦友たちの[illegible]の残骸に遭遇し、[illegible]を失う。その直後に個人的復讐心に燃えてダグラムを[illegible]ことを明確に示すシーンである。このシーンは台詞がなかなかいこそ、彼らの決意が説得力を持ったのだと言えるだろう。

ブロックヘッドのパイロット ハンク
アーロンの上官。主にガンナーを担当する



ブロックヘッドのパイロット アーロン
ダグラム　殺された戦友たちの復讐を果たそうと、徐々に狂気に触れた表情になっていく。

#41 戦士の休息（後編）

【予告編】 鉄の塊に憎しみが乗り移り　阿修羅のごとく襲いかかる
この敵はなにか　この気迫はなにか　心軋ませる
初めての恐怖　戦い終わって雨が降る　心を冷やし
骨まで濡らす雨が降る　クリン戦場に発熱す

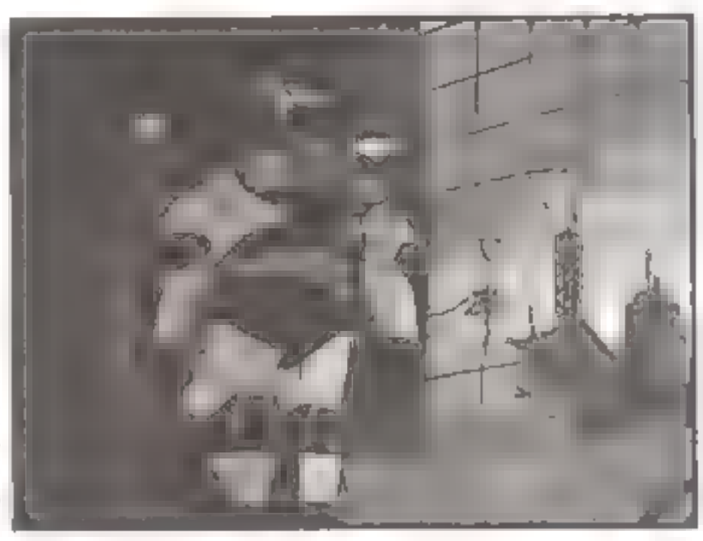
ダグラムは武装どころか片腕さえもない最悪のコンディションでブロックヘッドを撃破する。

【ストーリー】

ドナンは発作の苦しみを意志の力で押さえ込み、レーク、ラコック、フォン・シュタインらと、アンディ鉱山に対する対応策についての意見を交わす。メドール州と対峙関係にある[illegible]が経営する鉱山で、[illegible]を起こせば連邦内の不協和音を生じさせることになってしまうため、事は慎重に進めなければならないからだ。意見を求められたレークは、サマリンたちがこのまま鉱山に留まるとは思えない、組織をゲリラ戦[illegible]から工兵戦型へ改編するまでの時間稼ぎだろうと示唆する。ラコックもレークの意見に同調し、攻撃を強行すれば三州にドナン追い落としの口実を与えるだろうと続けた。ふたりの意見に対し、フォン・シュタインはサマリンの[illegible]みの深さに驚嘆するのみだった。[illegible]は、彼らとつ対峙するかという点に帰結した。

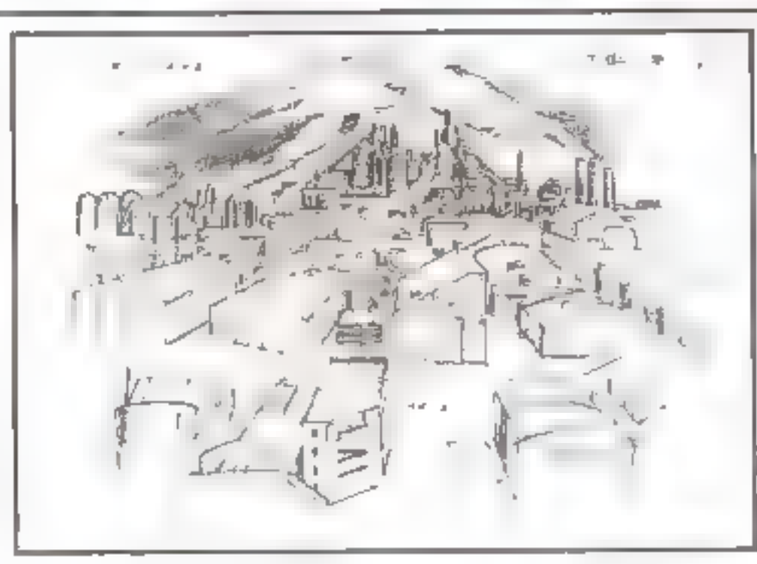
時間[illegible]、クリンたちはダグラムの修理を進めている[illegible]外れの[illegible]場で、アーロンたちのブロックヘッドが襲撃した。敵襲に気づいたクリンは喘嗟にダグラムを起動するが、左腕がないうえにリニアガンも取り外されているため反撃ができず、鉱山の中を逃げ回るしかない。アーロンはいまこそ戦友の仇を取らんと、まるで狂気に取り憑かれたかのようにダグラムを追い詰めていたぶっていく。たとえ強固な装甲を誇るダグラムといえども、このままではやがて破壊されてしまうだろう。絶体絶命のそのとき、ダグラムはブロックヘッドが落とすマクラインチャーをその下に掲げ、盾に転じこれを破壊する。

なんとか勝利したもののブロックヘッドにそれまでの敵にはない強い執念を感じたクリンはたまらず、のたった。

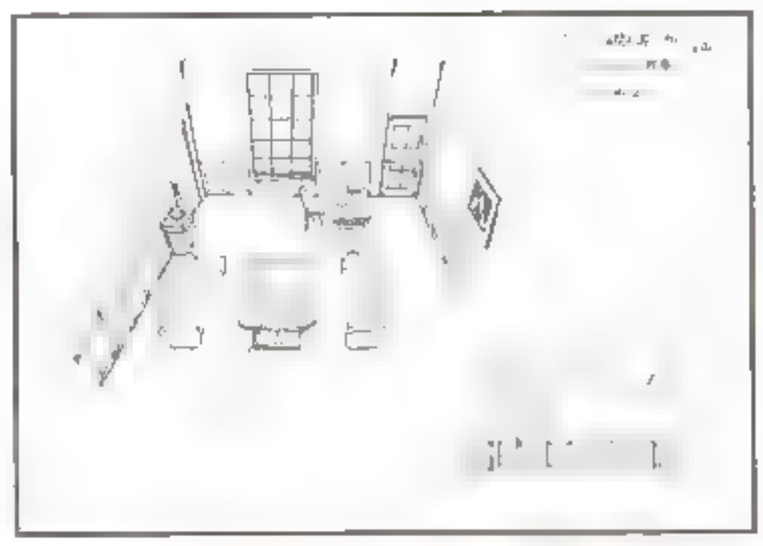


ハンクとアーロンを倒した後、ダグラムの右腕には再びアームリーガンが装着された。

戦闘の翌朝、ハックルはダグラムのコクピットで、高熱を出して苦しんでいるクリンを見つける。



アンディ鉱山　工場
破損したダグラムを修理するため、クリンたちはアンディ鉱山内の工場を借り受ける。



アンディ鉱山　工場（内）
嵐の到来とともにアーロンたちのブロックヘッドが突入、工場内を滅茶苦茶にしながらダグラムを破壊せんとする。

【ワンポイント】

思わぬところで足をすくわれるのは世の常、本来力CBアーマーのパイロットに過ぎないアーロンとハンクの私怨に駆られた命令違反はアンディ鉱山経営者とレークの生の神士協定をぶち壊し、レークの立場は危ういものとなる。ここまで[illegible]後にとっては有利な[illegible]というべき事件だったに違いない。反面、そうした事態を喜ぶ者もいる。敵にではない、よりによってこれ[illegible]である。レークの失点はラックにとって歓迎すべきもの。レークの立場が悪くなればなるほど、ラックはその野望に近づいていくのである。

※#42「動乱の航跡」は総集編のため割愛いたしました。

【完本　太陽の牙ダグラム】

#43 仕組まれた背信

【予告編】 戦いの質が変わる 戦いのスケールが変わる
ゲリラたちの戦いはレジスタンスの域を超え
全テロイアの　解放へと向かう　参謀が欲しい
戦略的に　戦術的に大事を　動かす司令官が欲しい
サマリン、J・ロックがこの男と見込んだその男の名は

ロッキーとキャナリーは駆け落ちした恋人を装い、カーディナルのJ・ロックのもとへやってきた。

相対する好敵手ふたり。ザルツェフはこの後バルミナのアンディ市へ行き、ゲリラに参加する。

#44 疑惑の二重スパイ

【ストーリー】

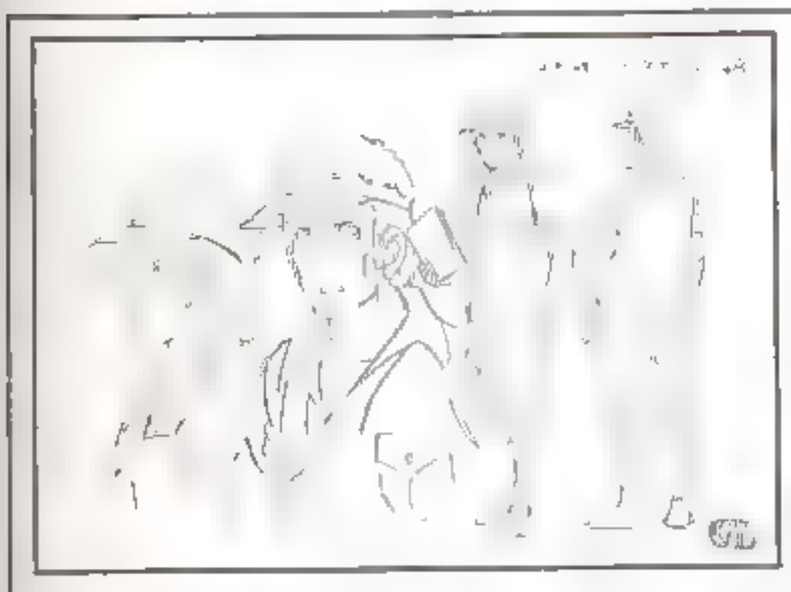
アンディ鉱山の本拠で組織作りを進めるサマリンは、強力なスタッフ、特に行政のプロによる参謀の必要性を痛感していた。一方、カーディナルではザルツェフがランベルト伯爵作戦での命令不服従を軍法会議で処断され、一ヶ月の禁足に処せられていた。参謀をスカウトする任に当たっていたJ・ロックは、ザルツェフに「L」を付けずに、作戦を進めていたのだが、そこにかねてからの上層部批判と再三の強引な作戦指揮の責任が問われ、事務職へ左遷されるという噂をキャッチする。もし噂が本当なら、早き込み工作に絶好なチャンスが生まれる。J・ロックは部下にさらなる情報の収集を命じる。

鉱山のゲリラたちの間に、封鎖されて身動きができないための精神的ストレスが蔓延しつつあった。これを解消するには現状の打破が必要だが、それには参謀の存在が欠かせない。サマリンはロックとキャナリーを使者に立て、カーディナルのJ・ロックの下へ出向を行う。なにしろザルツェフは身を抜きの将校であり、新たに結成される人民解放軍へ迎えることができれば大きな力になることは間違いなく、連邦軍に対して少なくない動揺を与えるに違いない。サマリンとしては絶対に欲しい人材なのだ。

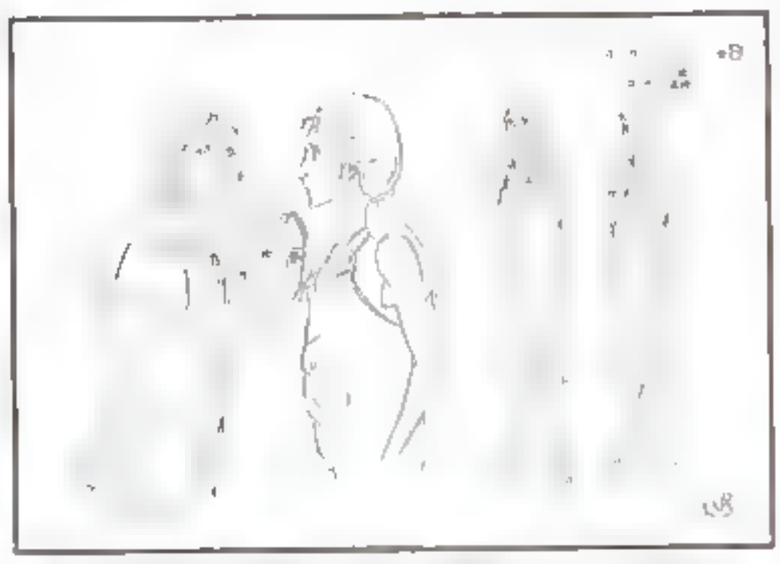
アンディ鉱山の状況を知ったJ・ロックは緩衝工作をさらに推し進めるため、ザルツェフが裏でゲリラと通じているという噂を流し、軍の彼への信用を失墜させていく。軍に仕打ちを受けても忠誠心を失わなかったザルツェフだが、そんな噂を知ったフォン・シュタインは彼の更迭を決意、軍用務所送りにしてしまう。そこをJ・ロック部隊が襲撃、ザルツェフを護送部隊から奪取する。J・ロックからサマリンが自分を求めていると知らされたザルツェフはアンディ盆地へ同行することに同意、飛行機に乗ってパルナに降り立つのだった。

【ワンポイント】

これまでにも幾度となく言われているが、ゲリラ戦の本分は正規戦の補助支援にある。テロイアが独立を獲得するためには正規戦・軍事的な果を挙げ、連邦と対等あるいは有利な政治的立場を作ることが必要不可欠なのだ。しかしそれを成し遂げるには組織自体を、正規戦闘を遂行できる本格的な軍事組織へ変換しなければならないのだが、そのためにはまず人材を集めねばならない。今ロックエプノートは独立闘争が本格的な軍事衝突へ進みはじめたことを意味するものだといえるだろう。



ロッキーの兄
カーディナルで自動車の修理や解体を生業としている。密かにカーディナルを訪れたロッキーは、陰から兄夫婦を見ることもあって任務へ戻った



ロッキーの義姉
ロッキーの義理の姉。真面目一徹な夫を助けて頑張っている

■ [illegible]

■ [illegible]

るきっかけにもな[illegible]

取り上げていた

★[illegible]兵（#44）
[illegible]ナル付近の森で[illegible]

★デスタン語録（#44）
酒場で[illegible]るリタ[illegible]
[illegible]リタもこれを快諾し
かそんな彼女の頬をデスタンは叩
いて言った
[illegible]

#44 疑惑の二重スパイ

【予告編】 若き戦士たちは叫んできた　信しあえる強さ
これが俺たちの誇りだ　だが人の心は弱い　表があれば
裏もある　ひとたび点せられた疑惑のトス黒い染みは
若者たちの心を蝕んで広がった　結束が揺らぐ

ゲリラが銀行を襲ったという報道に、ロッキーたちはゲリラ仲間の面汚したと憤った。

アンディ市内に潜り込んだデスタンは、フコックの意を受けて情報収集や陰謀工作を進めていく。

【ストーリー】

いまやフコックの手先となったデスタンが、連邦軍とゲリラが膠着状態で睨み合いを続けるアンディ鉱山にやってきた。彼はフコックの命に従い、集めた荒くれ者たちに銀行を襲撃させたうえにゲリラの仕業と見せかけていく。すべてはレクを失脚させるための布石だった。

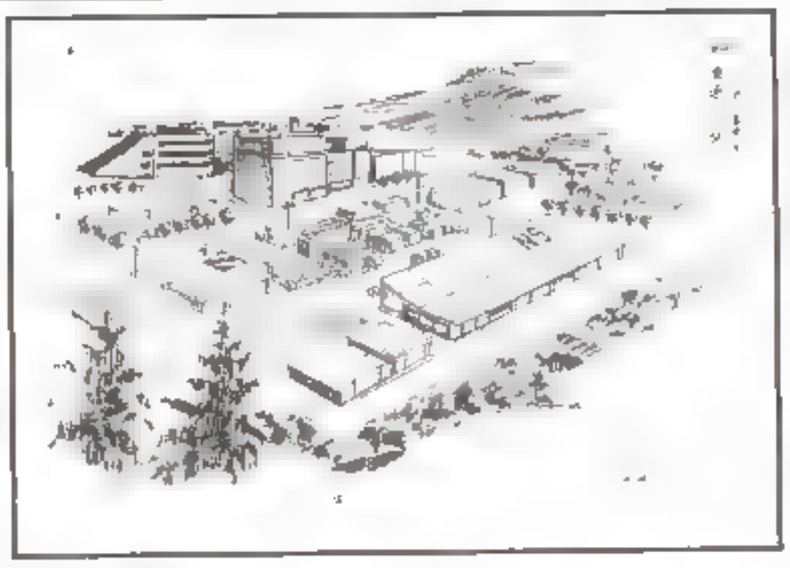
新聞報道で事件を知ったロッキーたちは、不心得な仲間に怒るがリタかなにかおかしいと異を唱えたクリンも、もしかしたら市民の支持を失わせるために連邦軍がゲリラを偽装しているのではないか、と推測する。もしそれが正しいならまだまだ事件は続くだろう。ロッキーの「薬莢」、デスタンたちは再び銀行を襲撃した。いやいや、口にロッキーたちは噴るが、組上するJ投は今の彼らにはなかった……。

そんなとき街へ買い出しに出かけたリタはデスタンと出会う。かつて彼女は酒場で踊り子をしていて酔客に絡まれていたところを、「合わせた」デスタンに助けられたことがあったのだ。リタかいまはゲリラでしかも「太陽の牙」と行動を共にしていることを知ったデスタンは、彼が裏切ったことを知らない彼女に偽情報を与える。ふたりが、諸にいたところをショルシュが目撃するが、彼はデスタンを知らなかったために、「太陽の牙」はそれが裏切り者の流した偽情報だと気づかず信じてしまう。

偽装ゲリラを捕まえるため「太陽の牙」は夜半にダグラムを伴い出撃するが、待ち伏せていた連邦軍に包囲され危機に陥る。ダグラムの活躍によってなんとか窮地を脱出したものの、問題は残った。リタに偽情報を与えた男の正体である。皆に男の正体を教えるように迫られたリタは、自分にとって天使にも等しい「彼」を裏切り者にあるはずがない、きっぱりと断り、去っていく。そのころデスタンは酒場で「俺も連ちたもんだ」と、自嘲しながら酒を飲んでいた。

【ワンポイント】

かつては革命の理想に燃えながらもいまは挫折し、よりによって敵の手先になってしまったデスタン。リタは彼のことをエンジェルと呼んだが、「天使」と考えればそれもしっくりする。仲間を裏切り敵の手先になった自分かいに醜いのか自覚しているのだろう、酒を飲みながら自嘲する姿がもいいそれ別きに、それは泉になるだろうに、それもできないのがデスタンの悲劇か。逆説的だが、頑固な意志力を持つ登場人物が多い中で、彼ほど人間味溢れる者はいないのは、はなしかろうから。



アンディ盆地（内）
流通センター
コホード州の所有する物流施設。デスタンは偽装ゲリラがCBアーマーで襲うとロックに吹き込んだ。

アンディ盆地　小さな町
銀行（内）
本編ではウルナ銀行と呼ばれている。ゲリラを装ったデスタンたちに襲撃された銀行。守衛が殺害された。

#45 夢散らす銃声

【予告編】 時には嘘とわかっていても信じたいのか女
とリタは言った　だがそれが　どんなに冷厳な事実としても
受け入れられぬことがある　動乱の時代の波に彷徨う
根無し草が　花もつけずに凶弾に沈んだ

ラコックに食事に誘われたロイルは、甘言に乗せられデロイアへの武器売買こそを決めてしまう。

#45 夢散らす銃声　#46 術策と機略

【ストーリー】

夜のカーディナル　ラコックは目的を偽り、ロイルからゲリラを所有する銃器を売買する武器を交わしていた。続いて夜のアンディ鉱山入口のふたつスタンはリタがドアの外で聞き耳を立てていることに気づかず、ラコックから新たな指令を受けていた。指令の内容はアンディ鉱山入口のふたつ前の駅、アガナに送られてくるロイルから買った武器の入った荷を受け取り、それをアンディ鉱山行きの列車に載せるというものだった。そうすれば鉱山入口駅で行われる連邦軍の臨検で発見され、非合法に武器が流れ込んでいるという、鉱山内へ立ち入る口実が出来る。

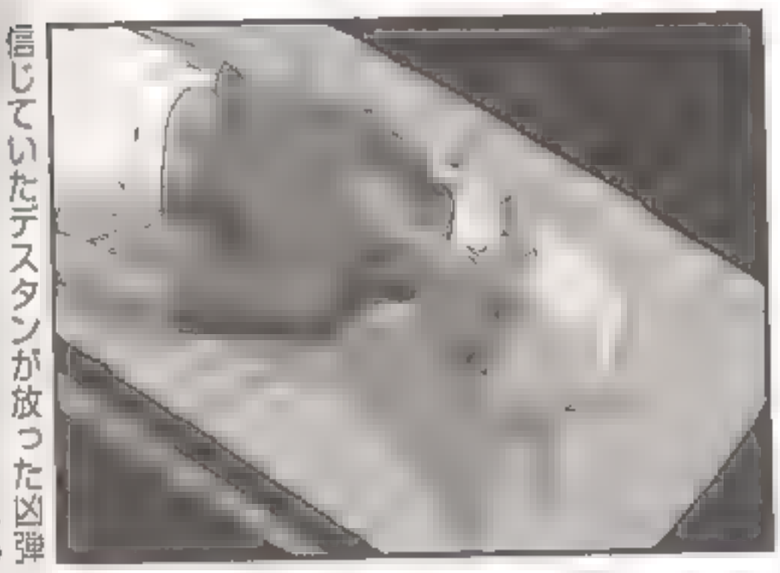
このやりとりの一部始終を聞き、信じていたデスタンが裏切り者だと知ったリタは、泣きながら夜の街へ消えた。

同じころ、リタがいなくなったことに大騒ぎし、面々、特にジョルジュが大きく動揺していた。偽情報もさることながら、好きだったんに自分の知らない世界があり、恋人らしき男がいたことがなによりもショックだったのだ。

一方リタは思い悩んだ末、デスタンと一緒にどこか遠くに行って、からやり直そう、今度は自分が彼を助ける番だと考えた。片やデスタンは落ちぶれた自分に嫌気がさし、これを最後の仕事にするつもりだった。

そしてアガナ駅　デスタンが指示通りに荷を貨車に積んでいるとリタが現れふたりで逃げようと説得する　デスタンの心がぐらつきかけたそのとき、列車に乗っていたノルターフが彼を見付け　リタが密告したと勘違いしたデスタンは彼女を射殺、そのままれ方を眩ませてしまう。

彼の計略を知ったラレタフはジャーナリズムの原則を破り「太陽の牙」へ通報、出撃したダグラムの活躍によってラコックの陰謀は阻止されたが　リタが捕まったときをあげる彼らは、勝利の陰にリタの死があったことを知らない……

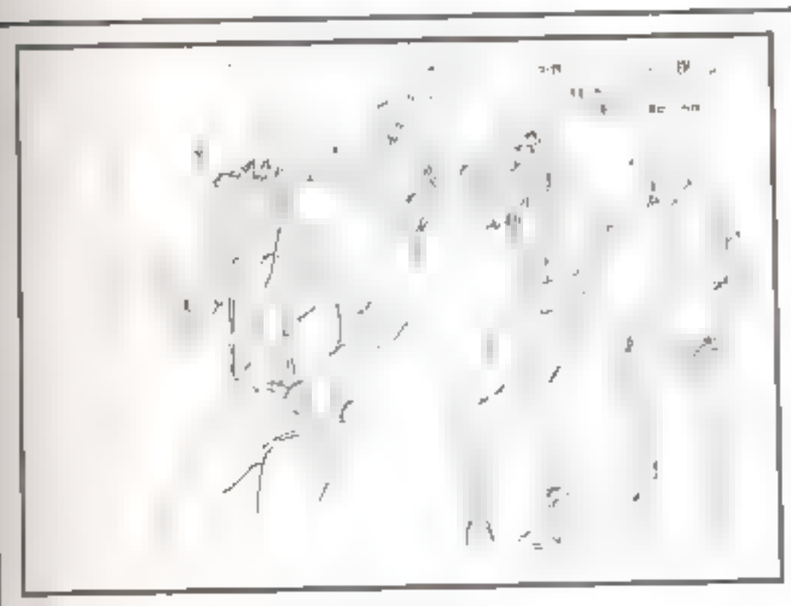


信じていたデスタンが放った凶弾に斃れたリタ。それはあまりにも悲しい最期だった。

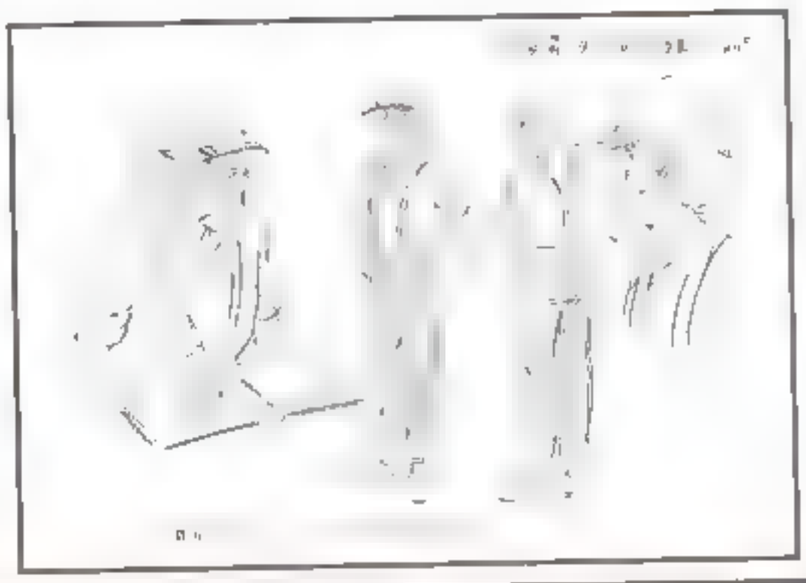
【ワンポイント】

殺伐とした戦いの中で、場所で華やかな空気を振りまいていたリタの死は、あまりにも唐突で、いもだった。勝利に沸くクリンたちの喜びの笑顔が、一瞬、リタの悲劇を際立たせる　これまでもフェスタやノキオなど同志の死は描かれてきたが、志半ばであっても喜びの裏で、あるいは敗北の中であっても敵と戦い死んでいったことを考えると、リタの死はあまりにも儚びしい。

尊敬、愛されたかもしれない感覚さえ抱いていたのかもしれない男に裏切られ殺されたリタ　本たしてその心中やいかばかりか



キュケータ・ダンカ・ベレット
リタの父。年端も行かない娘を働かせて、そのあかりで飲んだくれていた。リタの回想に登場。



アンディ市　タロン・ホテル支配人
デスタンがアンディ市内で宿にしていた安ホテルの支配人。

#46 術策と機略

【予告編】 一触即発の緊張をはらんで　不気味な膠着を続けるアンディに
ひとりの男がやってきた　フォン・シュタイン大佐をして　最も
頼りになる軍人と言わしめた　ジャッキー・ザルツェフ少佐である
背を向けくして
バルミナ連邦軍基地に　最も危険な男が降り立った

アンディ盆地へやって来たザルツェフはサマリンと面会、軍事参謀としてその幕下へと参加する。

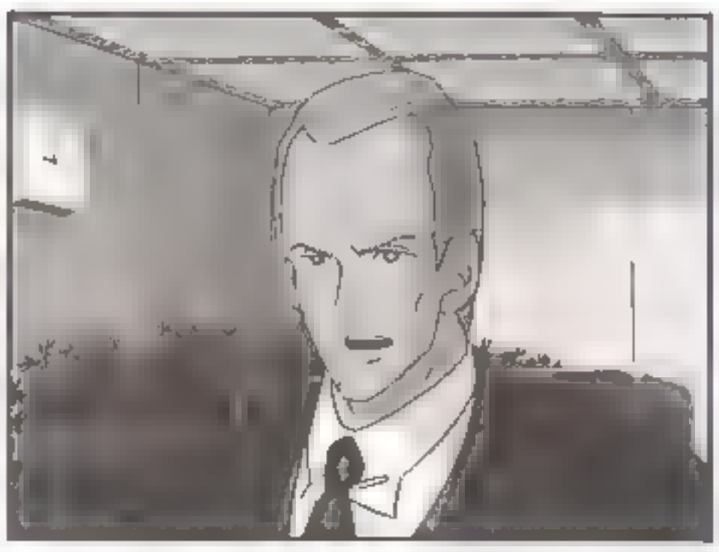
【ストーリー】

ドナンの身体は確実に死に近づいていたか、彼はその事実を押し隠しながらラコックに新たな命を下した。バルミナへ戻るレークに同行し、ゲリラと手を切り連邦軍に協力するように、アンディ鉱山の二州代表を説得せよというのだ。これまでの追い落とし工作が実り、ドナンがレークの政治手腕に疑問を抱いた結果だった。合意をとけたラコックは、忠誠誓いの事が進みはじめたことに薄く笑みを浮かべた。

偽装ゲリラや武器密輸など、敵しくなっていく連邦軍の陰謀に対抗するため、サマリンはシャークたちに各地に散るゲリラに連帯を呼びかけるよう指示をする。と、そのとき、アンディにやってきたザルツェフがサマリンとの面会を求め、多少の紆余曲折を経てザルツェフは解放軍参謀就任を受託する。

二州代表と会見を持ったラコックは、独立を阻止した後も鉱山における二州の利益を保証するという餌をぶら下げ、彼だけでも軍の導入を可能で欲しい彼らに迫りこれを認めさせた。ラコックの狙いは鉱山内でゲリラ容疑者を狩りたて、彼らに引き鉄を引かせることにあった。かかサマリンはその意図を察知、サトノフは鉱山の外で暴れさせる作戦を提案する。そうすれば軍に鉱山の外でゲリラがいると印象づけられると考えたのだ。作戦目的は敵への撹乱のみゆえ、「太陽の牙」だけで実行することになった。

その夜、さっそく作戦が開始された。ロッキーとビリーは東部入り口を、チコ、キャナリー、ナナンは鉱山入り口を、主力たるダグラムはロリー鉱山を攻撃した。ダグラム出現の報を受けた軍は近傍の第8基地から増援を派遣するが、ダグラムはすでに姿を隠していた。



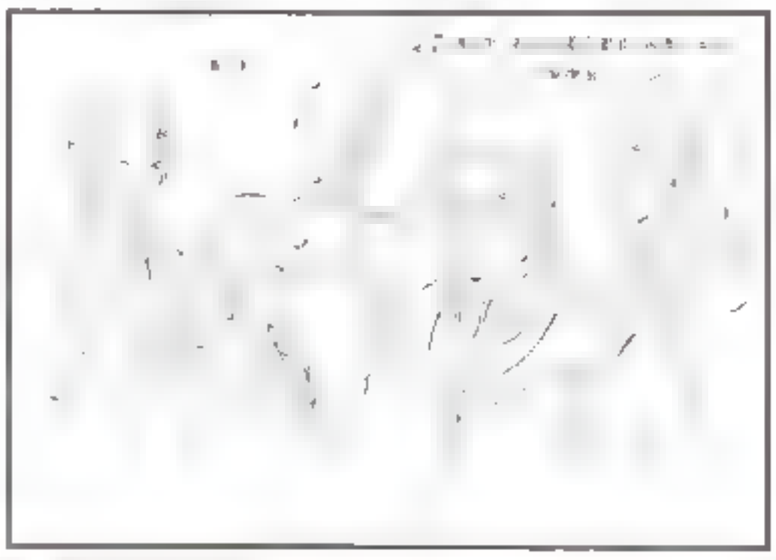
アンディ鉱山に派遣されたラコックは、水を得た魚のように精力的に陰謀を張り巡らせていく。

鉱山内ゲリラかいなければ軍は撤退するしかない。ザルツェフの解放軍参謀としての最初の策は見事に成功を収めたのだった。

【ワンポイント】

病魔に蝕まれていくドナンに対し、冴え渡るラコックの政治手腕が新たな時代が近づきつつあることを感じさせる。また、ゲリラ側もザルツェフが参謀として参加したことで、徐々に人民解放軍へと変貌する。このふたつを縦軸として、息不明になったリタの問題と戦意を喪失したンョルジュの苦悩が横軸として展開していくのだが、要素が多いゆえにひとつ間違えば中途半端になるところをハラハラ良く、縛めてはいるのは、さすがは神田武幸監督というところか。

アンディ鉱山　社員
ゲリラ・ドミッシュ
ドミッシュはゲリラの幹部。サマリンにバルミナ東部のゲリラに連帯を呼びかける役目を命ぜられる。



連邦軍　第8駐屯基地　副官、指揮官
ダグラムがアンディ鉱山の外に現れたことを知り、ゲリラは鉱山内ではなく周辺の山岳地帯にいると思い込んでしまう。

★第8駐屯基地部隊の兵力（#46）
[illegible]
鉱山には80が投入されたが、それにより第8駐屯基地に残された兵力は650だとザルツェフは計算した。

#47 悲しみの爆走

リタの死をラルターフから知らされたジョルジュは号泣、ミサイル装備のバイクに乗って特攻する。

【予告編】 もたらされた悲しい知らせに　若者の心が激しく歪み
絶望の狂気が走る　もう決して還らぬものを追って
決死の爆走が地獄を目指す　やがて　すべてが終わり
戦場を静寂が支配し　戦士の心が冷えていく

#47 悲しみの爆走　#48 その名は解放軍遊撃隊

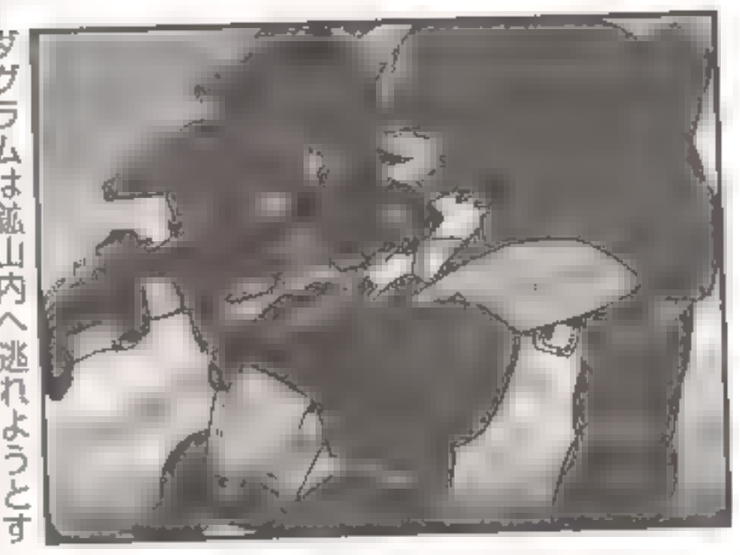
【ストーリー】

ドナンは庫内の手伝いを受けて、もはやアンディ鉱山を解決するには　ブレトン　接交渉するしかないと判断、彼をラコノクレレークに任せて地球へ帰還した。うんざりしたかなくなった笑うラコノクは、事を荒げてはいかんとドナンの命令を無視、レークに取引をプ視し、レークは取引を拒絶した約ロイア人の権利を無視した約期のものに戻すように要請する。この事にレークは驚き反問するが、ラコノクはトナンの意思だと偽って方針変更を強い、手始めに野戦病院解体を許可させるのだった。

病院解体の報せはゲリラたちにもすぐに伝わった。レークは一日間は追撃を行わない、その間に脱出せよとの通告を発表するが、誰もが軍が約定を破ると見ていた。となれば速やかに負傷者たちを救う方法を考えなければならない。そこでザルツェフは、負傷者たちを二方に分けて脱出させる計画を立てた。鉱山入口附近に潜む「太陽の牙」には、鉱山内へ逃れる隊を必死に引き入れるために敵を撹乱する任務が与えられた。

リタが裏切ったと信じ落ち込んでいたショルジュは、サマリンを救出したラルターフからリタの死を告げられると逆上し、ミサイルポッドを取りつけたバイクに乗って飛び出していく。

負傷者を乗せた車輛が鉱山に接近したことを確認したダグラムは、太陽の牙」は、打ち合わせ通りソルティックを擁する検問を襲撃するが隠れていたブロックヘッドと歩兵によって撃退されてしまう。さらに車は負傷者たちが銃口を突きつけ、鉱山内へ入るルートを教えるように脅しをかけてくる。進退極まったそのとき、ショルジュがバイクでブロックヘッドに特攻、チャンスとばかりに反撃した



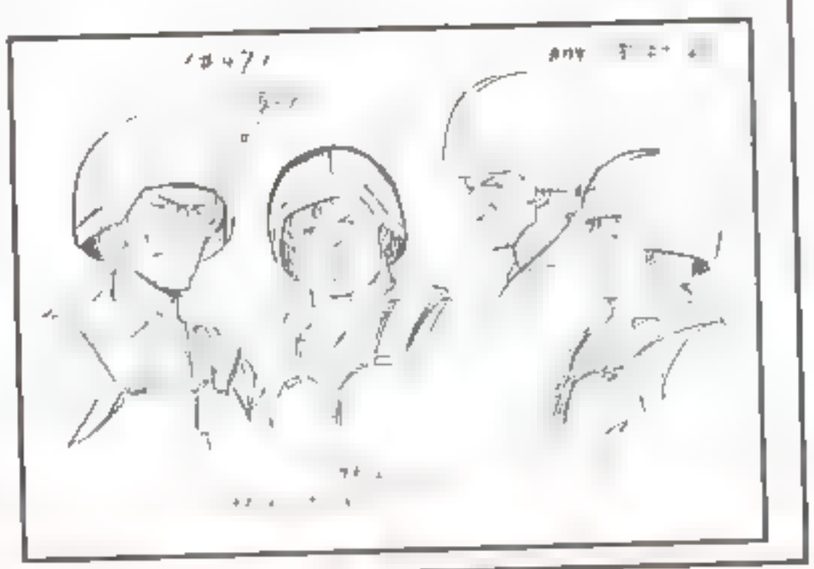
ダグラムは鉱山内へ逃れようとする負傷者たちと、彼らに付き添うディジーを助けようと戦う。

ダグラムによって敵は駆逐され、同志を守る任務は成功、終わった。

戦いの後クリンたちはあきじゃくるショルジュから、リタの死を知らされるのだった。

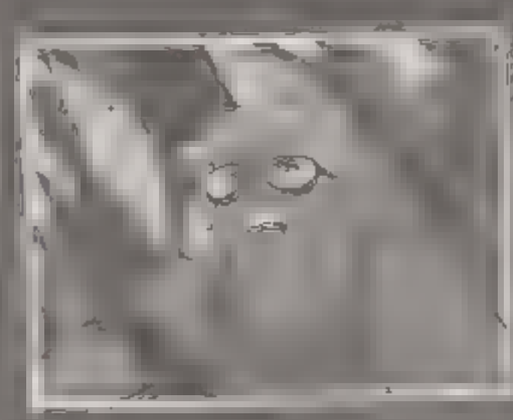
【ワンポイント】

ついに独立闘争の混乱は地球にまで波及しはじめた。連邦内の政治バランスが崩れ始め、デロイア独立が人類社会にとってどれほど影響をもたらすのかが明確に描かれる問題なのかが明確に描かれていく様は圧倒的にさえあるが、クリンたち「太陽の牙」の疾走は戦いの激化に伴い加速の一途をたどり、より過酷、老練老獪な政治の世界とのコントラストを生んでいく。このふたつのギャップは大きなうねりとなって、物語をさらにダイナミックな展開へ導いていった。



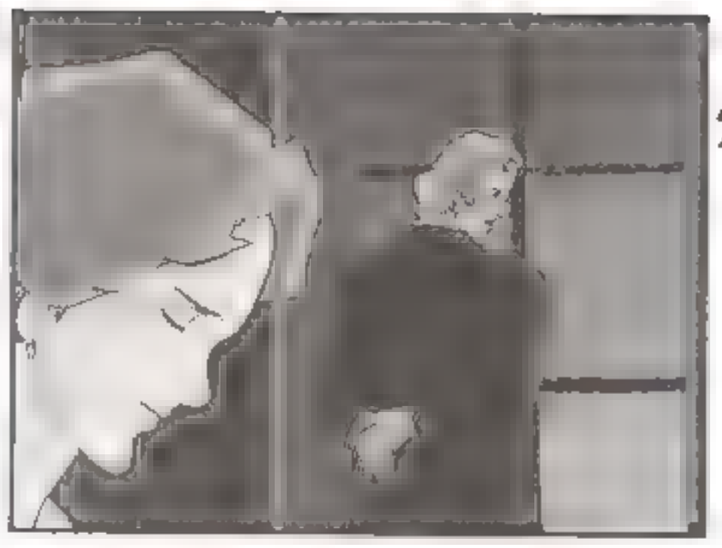
連邦軍　少尉、兵士
負傷者の野戦病院脱出に乗じて、ゲリラが使っているアンディ鉱山と外部をつなぐ秘密の進入ルートを探ろうとする。

ゲリラ連絡員
アンディ鉱山周辺の山岳地帯に潜む太陽の牙に、ザルツェフからの作戦命令を伝えた。



ゲリラ会議にも参加していた

#48 その名は解放軍遊撃隊



妻フィナにドナンは、クリンこそ最も自分の血を色濃く引いているのだと告げる。

【予告編】望むと望まぬとに拘わらず　戦いは独立へと向け
組織化されていく　肥大する戦争のメカニズムの中に
組みこまれていく若者のうめきが　歯車の軋みのごとく
戦場に流れる　情念を見失った戦いに　戦士の魂が感応

【ストーリー】

夜の日中　思いがけないリタの死に、太陽の牙　の面々はやり場のない怒りと切なさに包まれていた　ドナンは怒りに駆られて車のカ
た連邦軍の車輌にライフルを構えて突っ込もうとするが、ロッキーとチコに組み伏せられてしまう　「馬鹿なこと
とはするな！」と叱るロッキーに、ジョルジュは連邦軍なら容赦しにすればいいと吐き捨てるように言う。それに対し仲間たちが、もういままでのような行き当たりばったりの戦いは許されない司令部直属の遊撃部隊なんだと諭すと、組織の歯車になれというのか！　とジョルジュは声を

必死に立ち向かってくるクラブガンナーを、ダグラムは必殺のリニアカノンで吹き飛ばす。

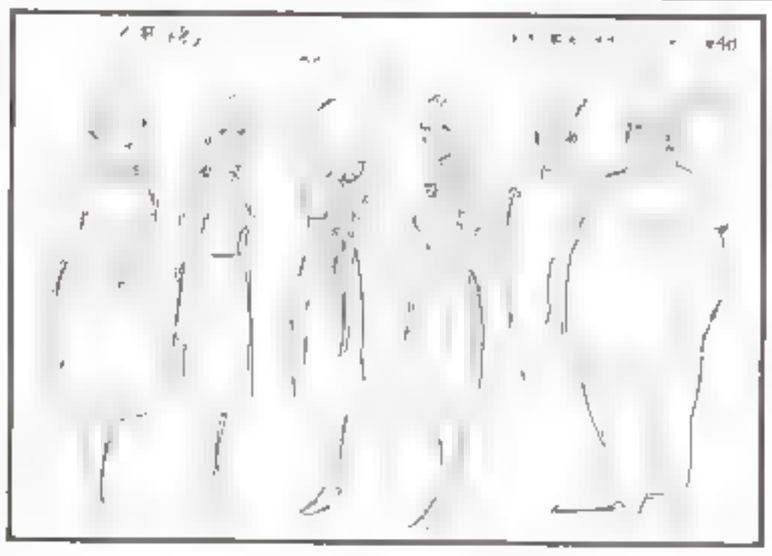
一方地球のカシム家では皆が久しぶりに家族で食卓を囲んでいた　だがその空気はひとく刺々しいものだった　ドロイアの政局がどう動くかで予算編成が変わってくるのだが、その予算会議にドナンは他局の人間に、弟のクリンがゲリラであることを指摘されたのである。彼はカシム家の名に泥をぬり自分の仕事の邪魔をしているクリンに怒り、その矛先をレークどころか親母のフィナにまで向ける　自分の血のせいだと思しむフィナに、ドナンはクリンこそ最も自分の気性を受け継いでいるのかもしれないと言う

そしてパレミナ　正式に解放軍遊撃隊の名をうけられた「太陽の牙」は、周辺に展開している連邦軍の通信システムの要であるアレエム電波中継塔破壊の命令が下った「太陽の牙」はロッキーの指揮でさっそく行動を開始する　守備兵力が不明なためにロッキーはダグラムを押し立てての強攻作戦を決行、施設を攻略する　落としてみると守備兵力はわずか20名、クラブガンナーを装備していたとはいえ、ダグラム相手では打ち

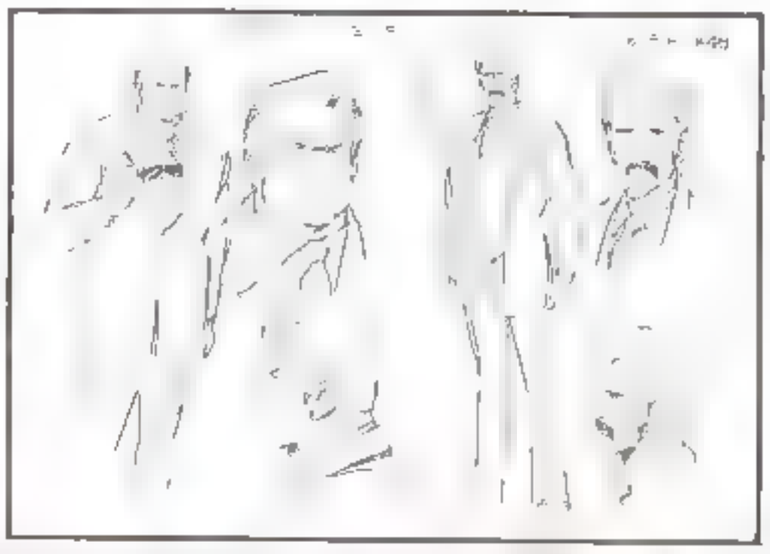
たえられないことは明白だった。なぜ降伏しなかったと問うロッキーに、虫の息の連邦軍兵士は命令に従い戦うのが軍人だ、と答えて息絶えた　若者たちの心を重く暗い影が覆った

【ワンポイント】

ついに結成されたドロイア人民解放軍、その遊撃隊のひとつになった「太陽の牙」の新たな戦いがはじまる　たがその背景には受性でもなく、また、華々しくもなかった　組織の歯車になりきり、敗北すると分かっていても降伏せずに死んでいった連邦軍兵士を目の当たりにした彼らは、なんともいようのない気持ちを抱く　戦うことは赤くない命を投げ出す覚悟も決めただが、巨大な戦争機械の歯車となって、捨て駒のように死ぬことを果たしてそれでいいのか　クリンたちは強く思い悩む



メイド、コック
カシム家に仕えるメイドとコック。晩餐の際に登場したメイドの名前はマリアン。



ドナンのSP
地球連邦評議会議長といえば、地球連邦における　、　を争う要職である。当然のことながら常に警護を担当するSPが付き添っている。

【ストーリー】

[illegible]

ドナン「いまや誰かが地球全体のこ[illegible]ール「君の考えはコホード州のトップだって理解しているさ。とは言っても、家族に病人を抱えていれば、[illegible]すことを考える。君は不満だろうがね」

[illegible]

ホードやローディアだけじゃない。いまや地球そのものが病に冒された病人なんだ。だからこそ病気を治す[illegible]

[illegible]

が、地球7州がひとつになって考えなければならんのだ」

#49 共同作戦の軋み

【予告編】 信念とはなんだ　戦いとはなんだ　力とはなんだ
それぞれの未来を見つめる父と子が
地球とデロイアへと別れ　それぞれの戦場に立つ

フォン・シュタインは評議会で、ドナンの影響から脱しようと画策するか、器の違いを思い知る

【ストーリー】

ドナンはデロイアの混乱を収拾すべく、連邦評議会を招集し、フォン・シュタインもデロイア代表として議会に臨む。挨拶に出向いた彼に、ドナンは反メトール州の中でも最も切り崩し易いと見たミンガス州代表のアール・シルバに会い、こちら側へ引き入れるようにと求めた。フォン・シュタインはさっそくシルバに面会するが、逆に反メトール派に与する揺さぶりを受ける。デロイア独立の暗示とも取れる傀儡でもない、自分の政治ができるのだと囁くシルバ。確かにこのままではラコックに寝首をかかれる可能性が高いフォン・シュタインは、ここは乗せられたふりをしてシルバを利用するのが得策だと断ずるのだが……。

独立の象徴であるダクラムは常に敵の攻撃の的になる。これを知ったデイビスはダクラムを降りる。

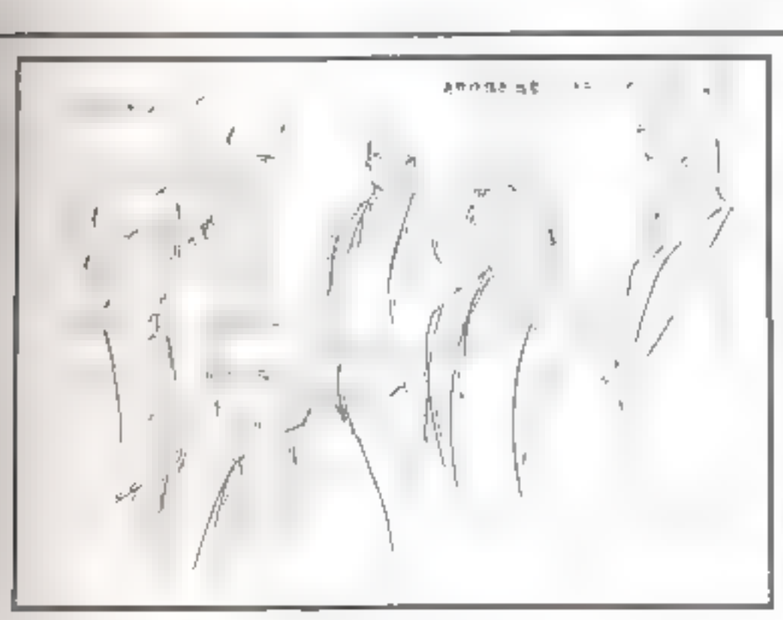
ダウンタウンヒルズに建設中の中部基地を破壊する任務を帯びた「太陽の牙」は、意気揚々と協同して作戦に当たるクローニー率いるデロイア解放隊と合流する。合流は和気藹々と行われたが、解放隊が地球人であるクリンがなぜ同じ地球人と戦うのかと質問を投げかけ、デロイアの象徴であるダグラムはデロイア人であるデイビスが操縦するべきだと一張する。なぜ戦うのか。クローニーたちから投げかけられた問いに、クリンは自問をしていく……。

同じころ、ドナンも評議会でなぜ戦うのかと議員たちに問われていた。議長がメドールを支持したため、シルバはきっかけを失い反メドール発言を引っ込めてしまい、フォン・シュタインの目論見も水泡と帰してしまった。フォン・シュタインはドナンの器の大きさを実感するのだった。

結局クリン自らがパイロットを辞退し、デイビスがダグラムを操縦することに決まった。だがゼロアワーと共に攻撃がはじまったがデイビスは恐れをなして逃走、作戦は失敗に終わる。ダグラムのコクピットにふたたび乗り込んだクリンは戦いながら、ここまで来て降りることは自分を裏切ることになると決意を新たにし、作戦を成功に導くのだった。

【ワンポイント】

なぜ戦うのか　改めて問われて言葉に詰まるクリン。ドナンの対デロイア政策に納得することできずにゲリラに身を投じたが、戦いに追われつづけていたためなのか、これまで可能を敵に回してまで戦う理由を深く考えたことはなかった。結論めいたものは出なかったものの、この道を選んだのは自分自身であり、いまはその決意を長らないことこそ大切なのだと気づいたクリンの表情は、いままでになく爽快感に溢れていた。じるところに向かって突っ走る様は、確かにドナンによく似ているような気がする。思



ホッチ・キンズ、アール・シルバ
アール・シルバはフォン・シュタインの旧友で、現在はミンガス州代表を務める。反メトール演説を目論むが、ドナンの迫力に圧倒され発言のチャンスを棒に振る。また、議事進行役のキンズは親メドール州派であるマルドー州の代表でドナンの議会演説を支持した。

ゲリラA、デイビス
元は連邦軍の兵士だったが、脱走してクローニーのデロイア解放隊に参加した。ダグラムに乗り込むものの、結局クリンにコクピットを明け渡す。

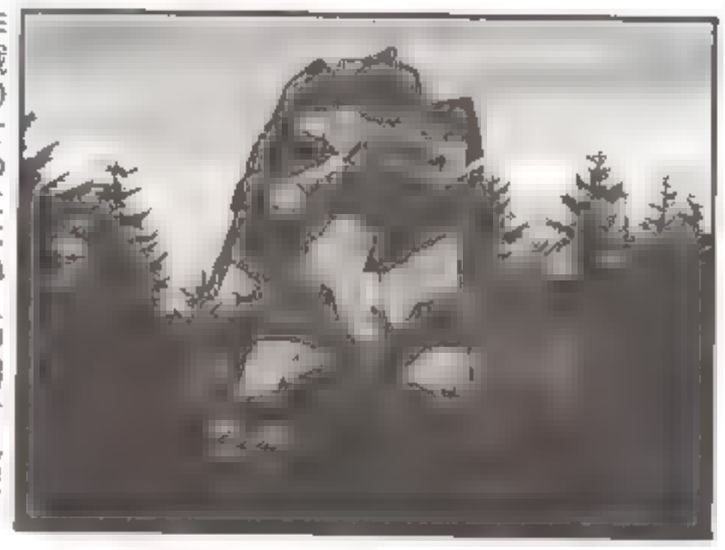
■デロイア解放隊（#49）
スバ市のゲリラ会議で要人暗殺を提案した〈クローニー〉率いるグループ。破壊工作のエキスパート。

★ドナン演説録（#49）
「なぜ戦うのか？　いま貴殿たちに問いたい。人類の歴史はじまって以来、国家と国家の欲望にまみれた数々の戦いがあった。数知れぬ悲劇が繰り返され、人類の歴史は血にまみれた[illegible]
[illegible]
「[illegible]
[illegible]邦を作り上げた。これは、偉大な先[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]はない。地球の食料も資源も[illegible]
「[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]してはならない。残念なこと[illegible]
部のデロイアのゲリラはそのことが分かっていない。ではなぜ戦うのか[illegible]
[illegible]
[illegible]れを取り除くことがいまの戦いなのである。権益のみを追求して[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]したい！」

#50 戦う者の掟

【予告編】 作戦遂行のためには　目の前の味方を見殺しにするのも
組織戦の鉄則　肥大化する戦争が　戦士の心を押しつぶす
戦争とはなんだ　硝煙の彼方に理想が霞む
俺たちの戦いが見えなくなってきた

ドナンは主治医でもある一ールから、余命半年と告げられてからいっそう公務に励む。



作戦のためとはいえ仲間を見殺しにできないクリンは、ロッキーの制止を無視してダグラムで戦う。

【ストーリー】

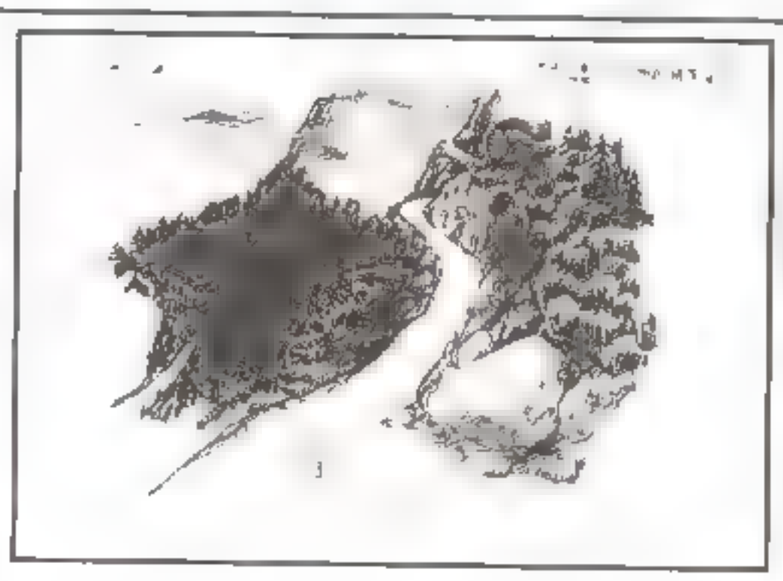
降り続く雨の中、「太陽の牙」は山の中で司令部からの新たな指示を待っていた。武器を磨くことのない現状に、ノヨルジュは苛つきを隠せないと、そこへ、待望の伝令がやってきた。命令の内容は現地点に待機し、そばの道路を通るであろう地球軍の輸送部隊を襲撃し、大量の武器を梱包したコンテナを破壊せよというものだった。「待機せよ」という言葉に口　キーは思わず「武装を強化するに違いない」と打ってられればいいと思ったが、もしダグラムが動いていることを敵に知られたら輸送ルートを変更されてしまう可能性がある。コンテナの輝き、中隊は確実に「太陽の牙」たちは、ふたたび雨の中でじっと待機するのであった。

その一方で地球のトナンは、自分の命が残り半年しかないと旧友で主治医を務めるニールから告知される。覚悟していたとはいえ、まさかわずか半年とは。しかしドナンは「良く知らせてくれた」と笑顔を浮かべた。

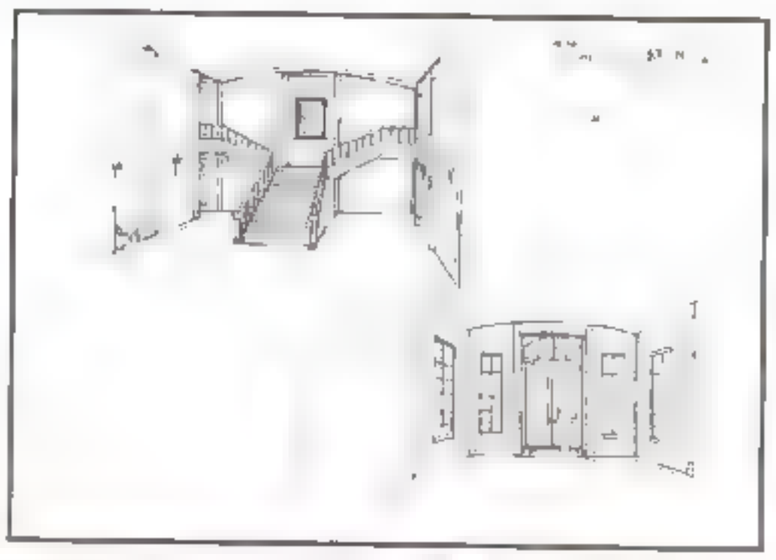
長い長い時間が過ぎていき、やっと雨が止んだある日。「太陽の牙」の襲撃ポイントに、別のゲリラグループが現れ、やって来た輸送部隊の斥候を攻撃してしまう。だが彼らの貧弱な武装では、斥候のブロックヘッドを倒せるわけもなく、機銃掃射に追い立てられていく。このまま放っておけばゲリラたちは皆殺しにされるに違いない。だがいま動けばすべてが無駄になり、それは連邦軍の武装強化ひいては仲間の死に繋がる。ロッキーは全員に動くなと命令するが、見かねたクリンがダグラムで出撃、ブロックヘッドを撃破する。ゲリラたちは助かったものの作戦は完全に失敗、ロッキーたちはサマリンから「目の前の一握りの仲間を救った見返りに、北部にいる数百数千の仲間が犠牲になるのだ」との叱責を受ける。クリンの脳裏にドナンの「多くの人々を救うためには、少数の犠牲はやむをえんのだ」という言葉が蘇る。だがクリンは「それは絶対に違う」と心の裡で反駁するのだった。

【ワンポイント】

余命半年と告知されながら、いや、だからこそ、今まで以上に己に課せられた政治使命を果たそうとするドナン。主義の是非はともあれ、これほど誠実な政治家がいるだろうか。その一方で愛する妻を気遣う、厳格なだけでは ない人間的な面も描かれている。その人間の大きさ、まさに子が越えるべき理想の父親像ともいえるだろう。また、人の死期が近いことを悟りながらも、その意思を尊重する妻フィナ。さらにクリンの母親たちはあ る。



パルミナ大陸
つづら折りの峠道
カーディナルのあるメインランドに比べ、パルミナには山岳地帯が多い。



メドール州　カシム邸（内）ホール
この時代の平均的地球人の生活レベルは不明だが、評議会議長を輩出する家柄である、カシム家は相当裕福だと見るべきだろっ。

クリンとテイビスの会話

逃げできるわけなんだ

★「風呂ったら煮シチュー」

りとニンニクを入れて煮込んで

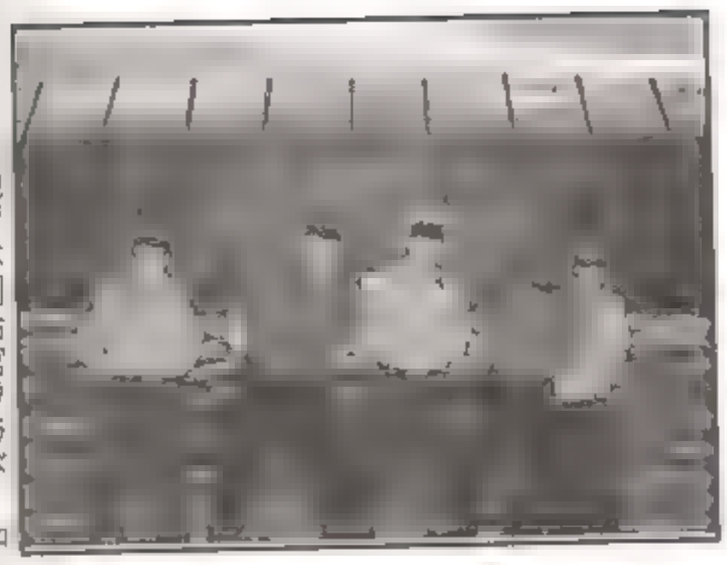
★ドナンの覚書（#50）

ドナンの病状がひどく悪化していること

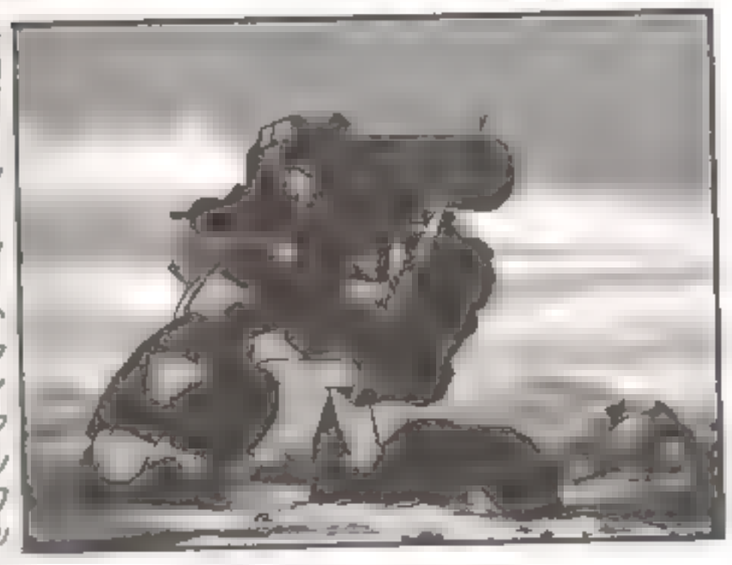
【完本】太陽の牙ダグラム

#51 見えはじめた亀裂

【予告編】 裁判なしでのデロイア人ゲリラの銃殺命令を拒否
パルミナの連邦軍内 -補給基地での この些細な出来事が
その後のデロイアの大局を大きく塗り替えていこうとは
この時点で予測したものは 誰ひとりいなかった



ウルナ基地では司令官ブラドー中佐の命令で、裁判無しの銃殺という違法が行われていた。



新型CBアーマー、アイアンフットは膂力、火力、運動性において ダグラムと互角以上の性能を持つ

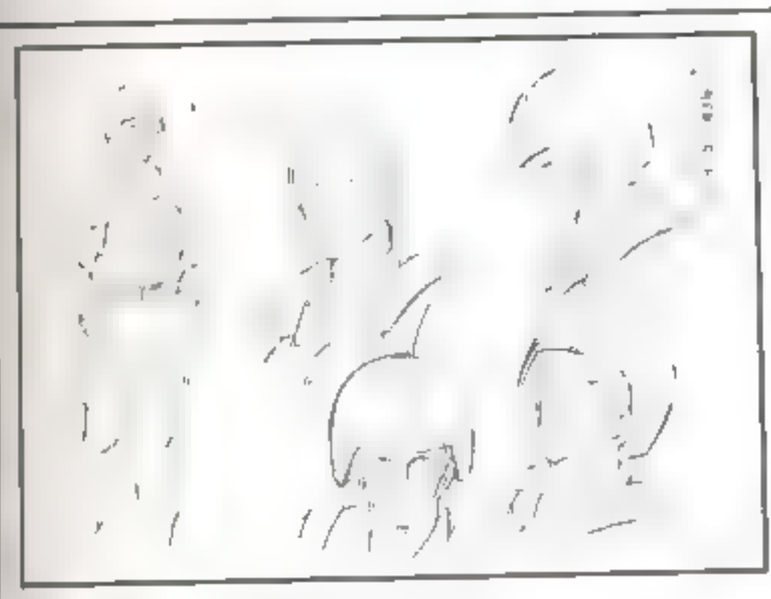
【ストーリー】

アンディ鉱山は、ウルナ基地では、逮捕されたゲリラの銃殺がブラドー司令の命令で行われようとしていた。ガボールが指揮を命ぜられたザナ中尉は、これが裁判を経ない重大違反であるとして命令を拒絶する。「中尉の分際で」と怒るブラドーにザナは「デロイア人の分際で、ばかきりまいたらどうですか」と言い放つ。銃殺隊の兵士たちもザナ同様に批判の目をブラドーに向けた。ザナも銃殺を命ぜられた兵士たちも、皆デロイア人だった。ブラドーはデロイア人にデロイア人を殺させようとしていたのだ。それが軍人としての職務ではなく、差別意識から生じたものであることは明白だった。結局ザナは身柄を拘束され、営倉に収監された。

そんな事件が起きていたころ、サマリンたち解放軍は一州代表から鉱山を巡っていって決戦いと婉曲な形で告げられていた。ドナンの計議会での工作の影響が表れはじめたのだ。サマリンは拠点を北3100キロにある国連地帯グランテに移すことを決定する。ただ移動ルート上には連邦軍基地がふたつ存在しており、安全の確保が至上命題とされた。敵基地の兵力規模の情報を収集するように命ぜられた「太陽の牙」は、移動中にウルナから脱走してきたザナの部下と遭遇、彼らを追ってきた連邦軍と交戦状態に陥ってしまう。強力な新型CBアーマー、アイアンフットに苦戦しながらも脱出に成功、脱走兵たちから事情を聞かされる。ゲリラ銃殺を実行できなかった彼らは、抗命したザナ同様に営倉送りとなるはずだったが、動くなって基地を脱走したのだという。クリンたちは彼らからデロイア人兵士の実態と、ゲリラ処刑の事実を聞かされる。好きで同胞を撃っているものか、仕事があれば連邦軍になぞ入らない、という人の血の叫びに「太陽の牙」の面々は言葉を失い、静かにうなだれるしかなかった。

【ワンポイント】

敵であるゲリラとはいえ、デロイア人兵士に同胞を銃殺させるというブラドーの行為には、怒りを通り越して吐き気すら催す。強い差別意識があるからこそ、このような非人間的なことが行えるのだろう。現実の歴史でも同じことが、数十万強の植民地に限ったとしても、ここ60年ほどまで平然と行われていた。人間は優れた理性と知性を持つ反面、救いようのない蛮行や悪行を顔色ひとつ変えずに遂行できる醜い貌も持っている。『ダグラム』の素晴らしさは、この普遍的な命題を真っ向から描いたことにある。



連邦軍中尉 ガボール・ザナ
デロイア人士官。軍内部の人種差別に怒り叛乱決起、後に解放軍へ参加しザルツェノの右腕となる。

ウルナ基地司令
連邦軍中佐 ブラドー
捕らえたゲリラを違法に処刑した上に、汚れ仕事をデロイア人の部下に押し付けていた。ザナを銃殺に処そうとするが、ブラドーのやり方に嫌気がさした兵士たちに射殺される。

■ウルナ基地（#51）
アンディ鉱山とグランテを結ぶ線上に位置する連邦軍基地。兵員数[illegible]で、残り200が地球人である。基地内では多数派のデロイア人に対する差別が[illegible]ており、兵士たちの間では不満が高[illegible]

■[illegible]
アンディ鉱山から北へ300キロ[illegible]あまり及んでいないため、新しい本拠に選ばれた。

■ジムル・バルディ
コ[illegible]レン（#51）
ザナの部下。脱走し「太陽の牙」に[illegible]

#52 アンディ鉱山攻撃命令

【予告編】 連邦内の不協和音を　力でねじ伏せたドナン・カシムは
アンディ鉱山総攻撃を決意　情勢の急変を察知した
サマリンは　総員のアンディ鉱山無血脱出を計画した
エキソダス　明日のデロイアの解放を目指して
世紀の大脱出がはじまる

アンディ鉱山への総攻撃に備え、連邦軍はありったけの兵力を投じて包囲網を形成していく。

ザルツェフとサマリンの計略は成功し、ゲリラは連邦軍の監視網を潜り抜け無事に鉱山を脱出した。

【ストーリー】

地球アトの全面的同意を取りつけたドナンは、カーディナレの議事堂に舞い戻るとすぐ、レークレフォン・ンェタインを呼び寄せ、アンディ鉱山への総攻撃を命じた　ながパルミナ人民の支持を失うことを憂慮したレークは、ドナンの唱える強硬に反対するものの最後には受け入れざるを得なかった　ドナンが自ら乗りこむことを察しはしたが、その理由がなんなのかレークが知ることはなかった

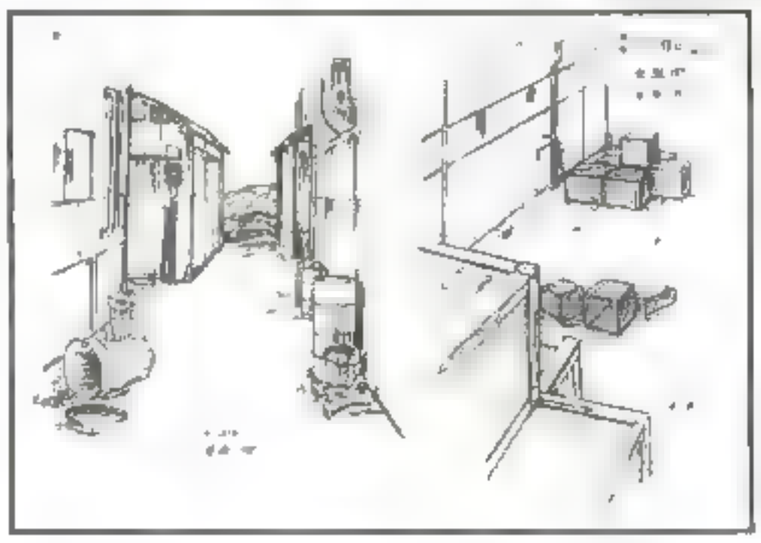
サマリンたちのもとにレークから最後通牒が届いた　内容は、「以内にトリねは総攻撃を行う」というものだった　彼らは脱出を成功させるための行動を開始した。最後通牒に慌てふためく三州代表が行政府に情報を流すと見抜いているサマリンたちは、彼らの前で和睦派と徹底抗戦派に分かれての議論を交わす　ヶ代表としては当然和睦をしてもらいたい　徹底抗戦を選べば鉱山が戦場になり、夥しい被害が生じるからだ　ヶ代表は議論の流れに一喜一憂し、彼らから情報をリークされている行政府は万が一に備えて鉱山を包囲していく。

そして戦を決する二日目　サマリンたちは徹底抗戦を選択、これを知った連邦軍が鉱山へ突入していく。一方、戦場となる鉱山から脱出しようと市民たちが検問所を破り避難を開始した。300人の同志たちは武器を捨て避難民に紛れ込んでの脱出を図るというのがサマリンたちの作戦なのだが、当然軍もそれを読んで各所陸路と鉄路で検問所を設けていた　だが緊張感が最高に達した避難民が暴走状態に陥ったため検問は無効化されてしまい、解放軍兵士たちはまんまと逃げおおせてしまう　議論はこれを成功させるための芝居だったのだ

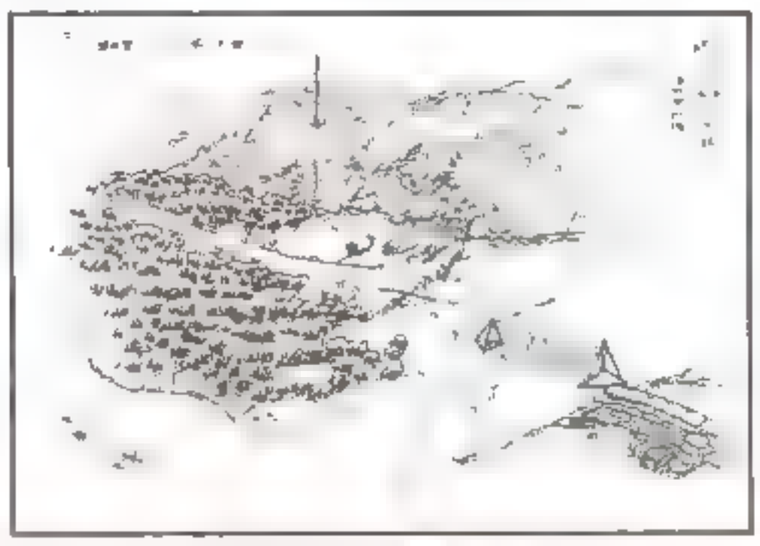
サマリンたちと「太陽の牙」が合流を果たしたころ、ウルナ基地ではザナを銃殺しようとしたことから、デロイア人兵士たちがフラドー司令を射殺、歴史を動かす大事件が勃発した

【ワンポイント】

なぜか『ダグラム』では脱出作戦が多いような印象を受ける。それはやはり主人公たちが、組織力を持つ非現実的なハードアップを持たない、ゲリラ部隊であるからだ　ほぼ、攻撃戦をモットーにするゲリラだからかろう　事実、さまざまな脱出作戦を見ることができる。小は歩兵による包囲網からの脱出、大はアンディ鉱山からの脱出まで、そのバリエーションは多く、スタッフは人いに悩んだに違いない。



アンディ鉱山　倉庫街
ゲリラたちはここで　般人に変装し、避難民の群れに紛れての脱出を試みた。



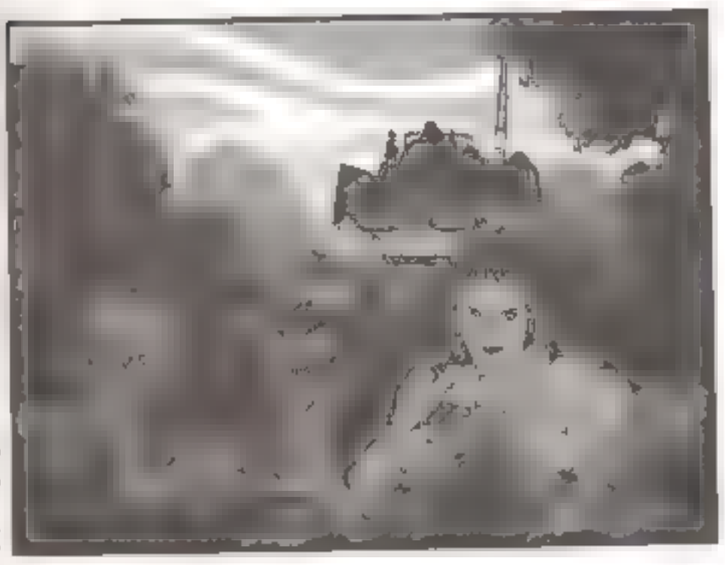
アンディ鉱山　連邦軍封鎖ゲート
ひとりたりともゲリラは逃さぬ姿勢を見せていたが、非武装の避難民を銃撃するわけにもいかず、封鎖は破られてしまう。

■ベイスティのこと　ウルナ基地
■デロイア人兵士（#51）
貴本力のないデロイア系企業は軒並み地球系資本に潰されており、職を失ったデロイア人は家族を養べき

#53 反撃の導火線

【予告編】 連邦軍内の軍規の乱れは　遂に　デロイア兵の地球人１官への反抗という形を取り　爆発した
武器を取り　基地内に立てこもるデロイア兵６００
ドナン　フォン・シュタイン　レ・ク　サマリン
サルツェフの胸の中を　稲妻が走った

ウルナ基地での叛乱か、デロイア人兵士によるものだと知ったレークは、緊迫した事態を探索する



「太陽の牙」はじめ、ゲリラ勢力は、基地を包囲する連邦軍に背後から襲いかかろうと目論む

【ストーリー】

鈴木は反乱を側力支援し味方につけるアイデアを思いつく

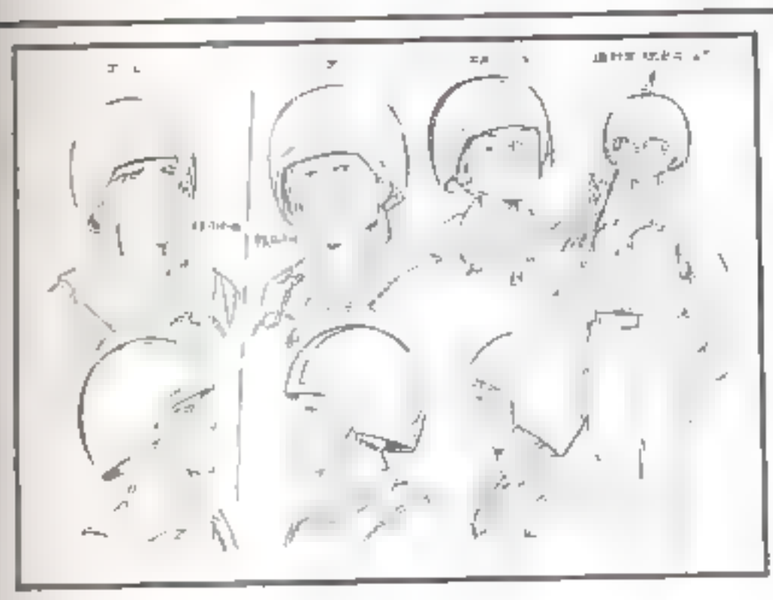
解放軍から事件のあらましを知らされたウルターフが緊張すっぱ抜くと、もはやカーディナルも手をこまねいていることができなくなった

ウルナ基地ではザナが地球人守兵を解放したいち立て籠もりを続行、彼らの心情が痛いほど理解できるレークやゲイダは投降を呼びかけるが、返ってきた答えは「我々は地球人ではなく、デロイア人なのです」だった　説得が失敗に終わると包囲部隊は、多数のブロノクヘッドを含む兵隊一体の人部隊でウルナ基地を一気に叩き潰そうと攻撃を開始する　単純な戦力比では連邦軍が勝っていたが、脱走兵バルディらをパイプに、意志を通していた解放軍が背後から襲いかかった　下門のアイアンフット、後門のダグラムと、ブロノクヘッド隊は次々と撃破されていく。主力のCBアーマーを撃破されては、包囲部隊指揮官も撤退を命じるしかなかった……。戦闘終了後、反乱部隊は解放軍へ合流を宣言、ウルナ基地は厳重に包まれた。

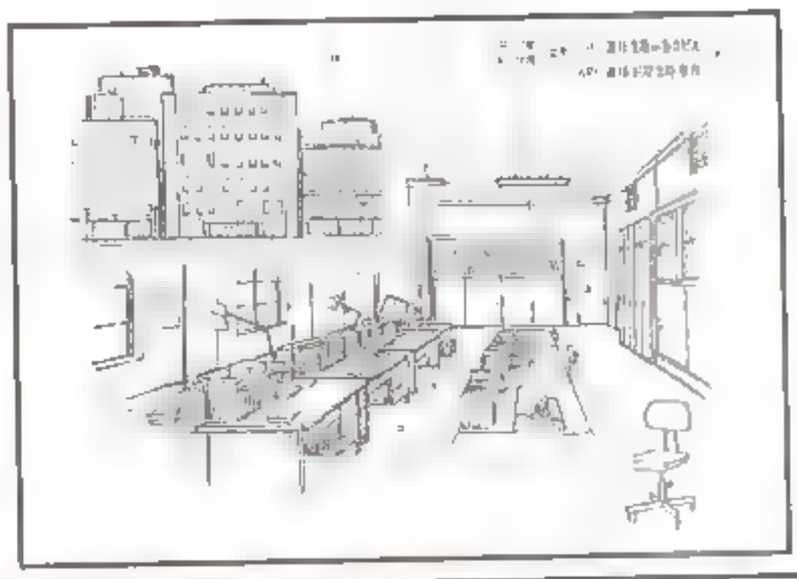
ゲイダ、カーディナルに出向いたレークはドナンに行政官辞任と軍籍離脱を申し出てこれを受理される　ウルナ基地反乱、移譲派レークの退場は、時代が力と力のぶつかり合いになったことを意味していた

【ワンポイント】

良い人間ほど早死にするというが、政治の舞台も同様で、誠実で真面目な人間ほど長く舞台に立っていられないとよくいわれる　レークの退場は、まるでそれを実証するような印象を与えた　以後、必ず的中する「政治の方程式」が武力対決に向かい、当然のことながら解放軍もまたかつてこれに対するようになっていく、力の時代の到来　これこそ所心系ブロノクの待っていたチャンスに満ち溢れた世界だった　特に人民政府樹立以後、ブロノクは野心を露骨に出にしていくのである



連邦軍脱走兵たち
ロノキ　たちに救われた後にゲリラへ参加。バレディはサマリンの密使となって救援の意思をザナに伝えた。



ドガ市
APU通信支局があるビル
支局室内
APU通信とは、ウルタ　ノが籍を置く配信会社である。ウルナ基地事件の第一報はここから発せられた。

#54 再びドガへ向けて

【予告編】 時代の奔流は　明らかなる河口を目指して流れはじめた
反乱をおこしたデロイア兵が　ゲリラと手を結ぶという
思わぬ事態にショックを受けた州政府は
パルミナに向けて　第8軍最精鋭部隊の派遣を決めた
組織と人と　鉄と火が　対決の時を迎える

【ストーリー】

反乱部隊が解放軍に合流するという事態に、州政府は大きな衝撃を受けていた。地球からの連邦軍派遣を考えなければならないとドナンはいうが、フォン・シュタインはそれは解放軍や反乱部隊に反感を持つ第8軍将兵に無能の烙印を押すことと同義であり、彼らを解放軍側へ近づける結果を招いてしまうと反対する。では何か策はあるのか？と問うドナンに、フォン・シュタインはフィリッツ・マノン中佐を新しいパルミナ行政官に据えることを提案、これを認めさせた。

一方ウルナ基地では、サマリンがドガに人民政府を樹立する方針を発表、彼らを討つべく集結しつつある連邦軍を迎え撃つため出撃を開始した。対する連邦軍はマノン新行政官指揮の下、解放軍を討つべく行動をはじめた。集められた兵力の中には、ターボザックを背負った若いソルティックを擁する24部隊の姿もあった。

敵の兵力はブロックヘッドを中心としたCBアーマーが21機に歩兵が約千名。対する解放軍はCBアーマーの数こそ少ないが質的には大きく勝っている上に、対CBアーマー砲を備えた車輌がある。ザルツェフは、敵の兵力がこれ以上増強されるまえに攻撃を開始、激しい野戦を展開する。

当初はダグラムをはじめとする解放軍CBアーマー隊が優勢だったが、24部隊の参戦と共に戦況は一変する。24ソルティックの息のあったコンビネーション攻撃によって、瞬く間にダグラムと小隊を組んでいたアイアンフットは破壊され、クリンも突撃するものの簡単にあしらわれてしまったのだ。

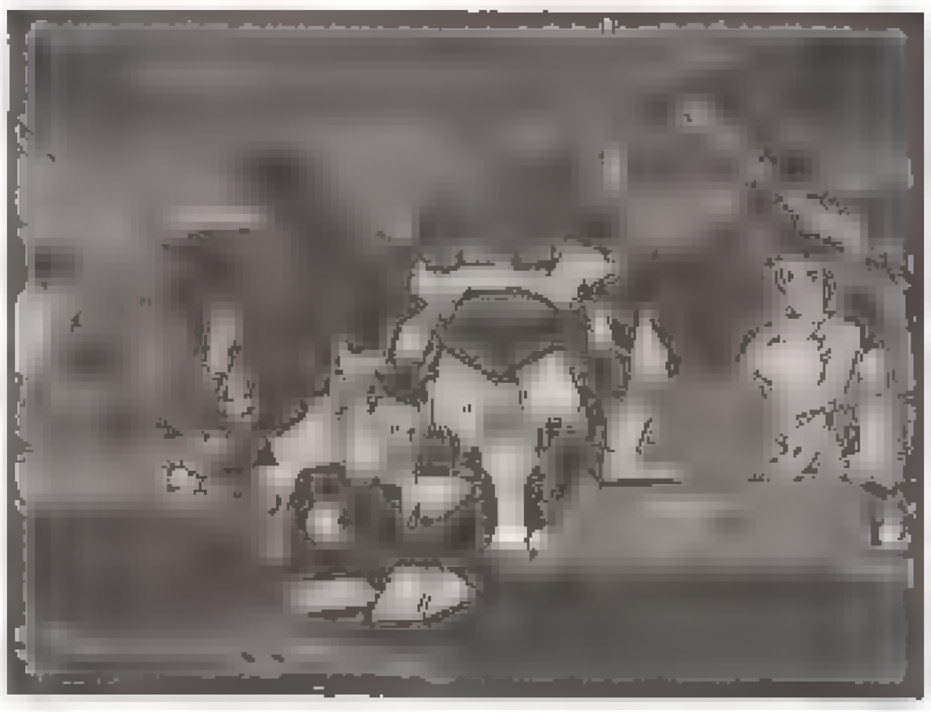
「新行政官の就任挨拶はこれでおしまいだ」

余裕綽々で退いていく24部隊の姿に、クリンは容易ならざる敵が出現したことを実感していた。

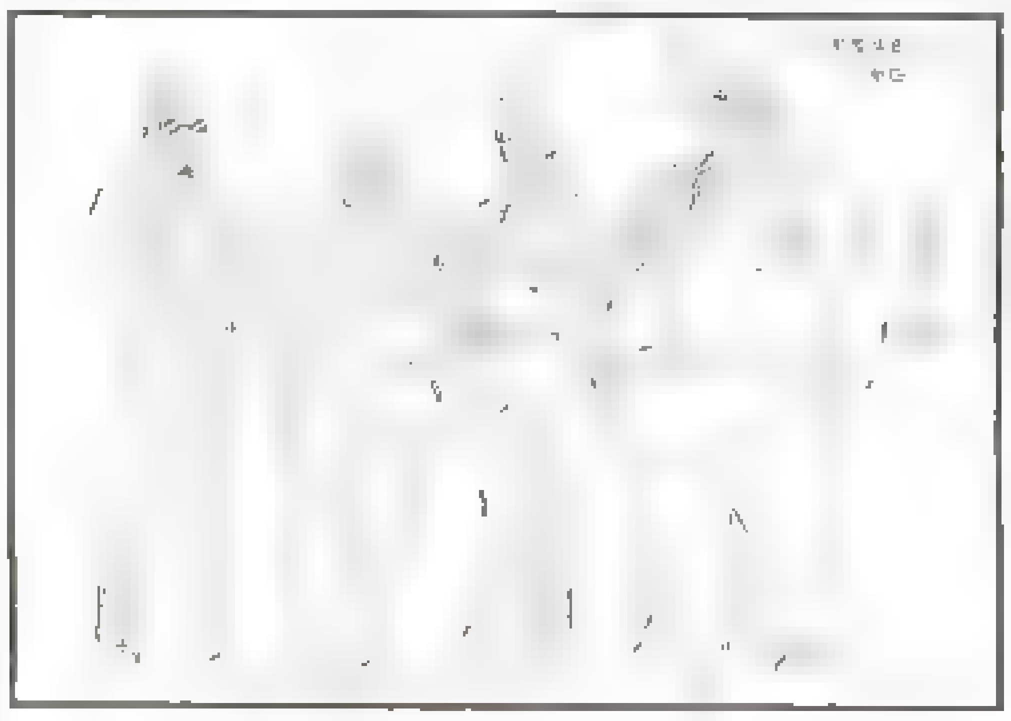
【ワンポイント】

24部隊はその放映当時、『ダグラム』らしからぬ若い機体塗装にもかかわらず、登場と同時に視聴者たちに大きな支持を受けた。本作が生まれる道を拓いた先行作品――『機動戦士ガンダム』にも同様のコンセプトの特別部隊（黒い三連星など）は登場していたが、あえて通り名を避けたところがその派手な部隊カラーに反して実に『ダグラム』らしい。単なるエリートゲストに終わっていない強敵出現を予感させつつ、本格的な武力衝突は持ち越されることになり、ダグラムと24部隊の活躍への期待を盛り上げていく。

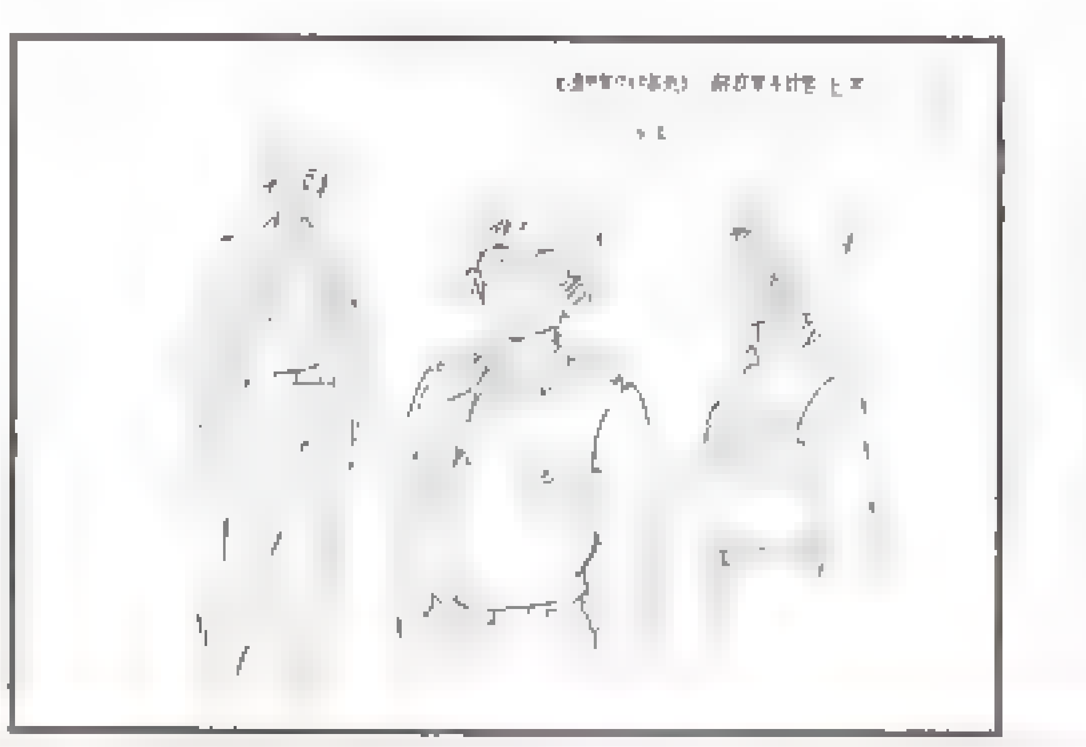
ウルナ基地の兵士と装備が加わったことで、人民解放軍の軍事力は飛躍的に増強された。



ドガ市に向かって進軍を開始する人民解放軍の姿は、これまでになく頼もしいものだった。



24部隊制服
レークに代わりパルミナ行政官に就任したマノン中佐は、カーディナルから精鋭24部隊を引き抜いてきた。



解放軍少尉　ビギン
元ウルナ基地の主計士官。解放軍参加後ザナとともに、兵站幕僚としてザルツェフを補佐する。

[illegible]
アイアンフット8機、輸送トラック15輌、インステッドを含む装甲車[illegible]
[illegible]サイルランチャー車20輌、大小多[illegible]

「我々と諸君たちは昨日まで敵であった。だがいまは違う。我々はデロイア人として誇りを捨てなかった兵士諸君と、力を合わせてひとつの解放軍となり、デロイアの自由と独[illegible]している。（拍手）あえて言おう。君たちの行動は正しかった。[illegible]部隊内で[illegible]す。志を同じくする者たちは手を取[illegible]とって、デロイア解放への一段階としてこのパルミナの地から敵勢力を追い出し、パルミナ行政の中心地ドガ市に人民解放政府を樹立することなのだ

■解放軍CBアーマー隊（#54）
[illegible]を加えて3機編成とする。ヘンリー[illegible]クラウデが第1小隊、バルディ[illegible]2[illegible]フォークは第2小隊、ビル、マッケ[illegible]

#55 戦略台地を奪取せよ

敵味方ともにウェーブ台地が戦略的な要地だと気づき、CBアーマーを投入しての争奪戦を展開。

【予告編】 猛将マノン頂く連邦軍　知将ザルツェフ率いる解放軍
両軍はパルミナの命運を賭けて
決戦地スタンレー高原へと　兵を進めた
スタンレー高原の南方5キロに　両将の目が止まる
ウェーブ台地　ここだ　ここがスタンレーの喉首だ

【ストーリー】

ドガ市を目指して、威風堂々と平野を進軍していく解放軍。各地のゲリラや反乱デロイア兵が次々と合流し、兵力はどんどん膨れ上がっていた。

対する連邦軍もドガ市を望むスタンレー高原に大兵力を展開、解放軍と雌雄を決しようとしていた。そんな中、マノンは敵の進撃路に隣接するウェーブ台地に目をつけ、ここに兵力を配置して解放軍を前後から挟撃しようと考える。同時にザルツェフもウェーブ台地の重要性に気づき、これを確保しようと「太陽の牙」とサナ指揮下のレインジャー部隊を差し向ける。

さしものダグラムも、24ソルティックのコンビネーションアタックに翻弄されてしまう。

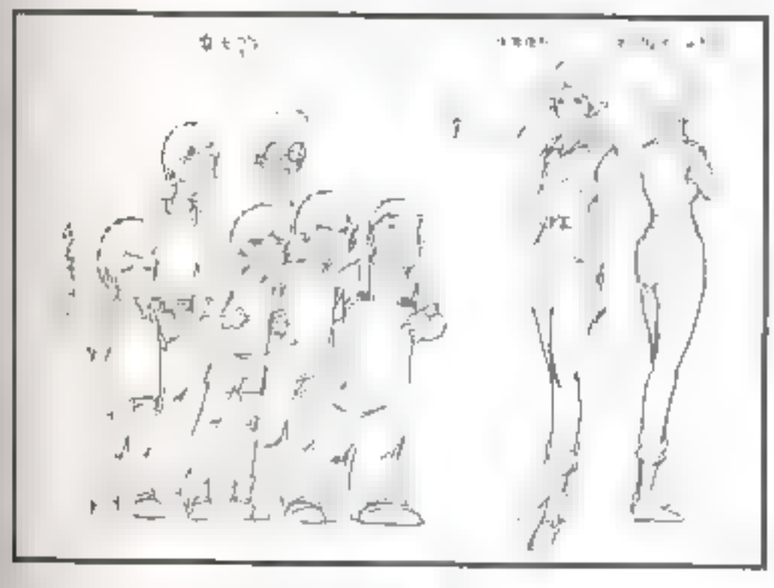
だがすでに台地に24部隊が護衛する連邦軍部隊が到着、ロケット砲の配置を終えようとしていた。そこでレインジャー部隊はザイルを使って崖から砲台に迫り、いざというときには「太陽の牙」が背後の斜面から攻撃し援護するという作戦を採る。作戦は順調に行くかと思われたが、崖を登り切る寸前で敵兵に発見されてしまう。犠牲を出しつつも砲台を破壊していくレインジャー部隊。そこへ北側からダグラムが支援攻撃を開始、護衛の24部隊と戦闘状態に突入した。その軽快な動きはダグラムを翻弄し、必殺のリニアカノンさえ避けてしまう。ダグラムが苦戦を強いられる一方、ロッキーたちもレインジャーを失い頂上を攻略できず斜面に釘付けにされていた。優位に立った連邦軍はミサイル砲で一気に片をつけようとする。ロッキーたちにミサイルを防ぐ術はない　だがナナシの活躍で逆転、ウェーブ台地の制圧に成功する。

右腕を破壊されリニアガンも24部隊のフォーメーション攻撃には通用しない。4門のリニアガンの砲口がダグラムに狙いをつける。あわや、と思ったそのとき、解放軍本隊が接近してきたため24部隊は大事をとって撤退、クリンは九死に一生を得たのであった。

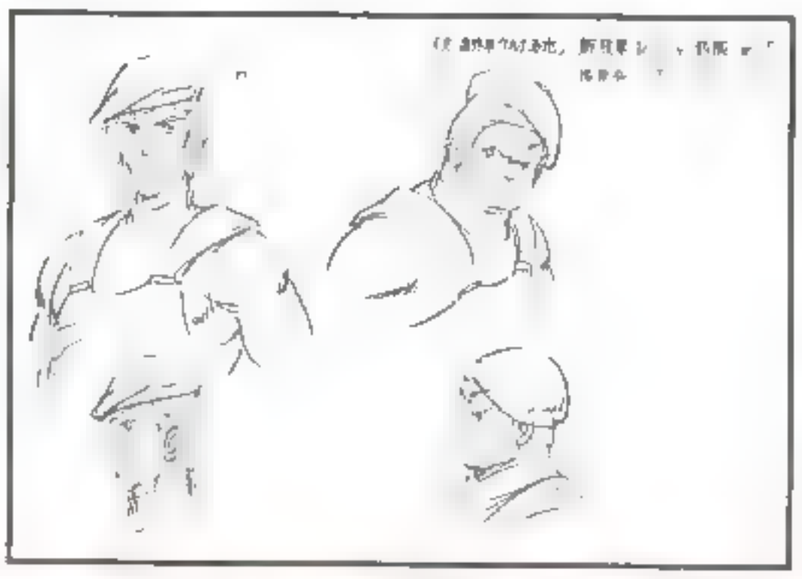
同じ頃デイジーは、ドガ市で孤児院を開いたダロウェイのもとを訪ねていた。

【ワンポイント】

ミサイル砲が設置された台地を奪うという、往年の海外戦争ドラマ的な展開を縦軸に、女性でありながら銃を取り前線で戦うキャナリーにスポットを当てた作　現在の2008年ここそ先進国軍隊では女性の戦闘員は珍しくないが、放映当時はまだ女性兵士といえば後方勤務専門という時代であり、女性というだけでプロの軍人から揶揄されるキャナリーの[illegible]なかった　そんなことを考えながら観ていると、『ダグラム』という作品のリアリズムがどこを源泉としているのか、理解できるのではないだろうか



孤児院の少年たち
ダロウェイ
野戦病院解散後ダロウェイは看護師を辞め、戦災で親を失った子供たちを引き取り、ドガ市で孤児院を開いていた。



解放軍レンジャー部隊
ウルナ基地兵士の中から、山岳戦を得意とする者を集めて編成された部隊。隊員<ハ>は女 ―キャナリーが戦いに加わっていることを揶揄するが、後にその力量を認め、そして死んでいく。

■マノン[illegible]
ドガ市郊外100キロの地点に位置しており、マノン指揮する連邦軍が解放軍を迎え撃とうと布陣を敷いた。

■連邦軍の兵力（#55）
兵員数3000、ブロックヘッド[illegible]
[illegible]ライフル隊が配備されている。

■ウェーブ台地（#55）
ドガ市へ繋がる幹線道路脇にそびえる台地。大昔に地殻変動[illegible]したと言われている。

■ロビンスンR25（#55）
4連装の地対地ミサイル砲。カーディナルを拠点とする24部隊員からすれば古臭い旧型だが、パルミナで[illegible]

■レインジャー部隊（#55）
山岳[illegible]部隊。ベレー帽がトレードマークで、服装も野戦服ではなくタンクトルネック[illegible]

#56 スタンレー高原の攻防

【予告編】 勢いに乗る解放軍　戦力に勝る連邦軍　パルミナの覇権を賭けて　スタンレー高原に両軍が激突する
よせる怒涛　よく岩を穿つか　巨岩また波頭を裂くか
パルミナの命運が決まる

連邦軍のCBアーマー戦力は解放軍のそれを大きく上回っており、一気に押し潰そうとする。

ダグラムの右腕を奪いながらも武運伴わず、24部隊は死闘の末にスタンレー高原に散った。

【ストーリー】

マノンはスタンレー高原の南側に兵力の布陣を完了していたが、解放軍の主力を捕捉次第撃滅しようと目論む。

一方サマリンたち解放軍首脳は、現在の状況に戸惑っていた。歩兵の兵力数は互角だが、戦力の核となるCBアーマーの連邦軍の数的優位は動かし難かった。ザナはJ・ロックの増援を待つか、撤退するかのふたつにひとつだと進言するが、ザルノェフはこれを却下する。もしここで撤退したら、敵に戦略上の劣勢を見抜かれ徹底的な壊滅作戦の実行を許してしまうからだ。そうなれば解放軍は二度と立ち上がる力を失うだろう。この八方塞がりを打破するには、当初の予定通りJ・ロックの増援を待つしかない。本来ならスタンレー高原へ辿り着く前に合流する予定だったのだが、本隊の進軍速度が思った以上に早すぎたためにこのような状況が生じてしまったのである。だがしっかりしている余裕もない。そこでザルツェフは人方の予想に反し、劣勢を知ったうえであえて積極的行動に出て敵を翻弄し、増援が到着するまでの時間を稼ごうという作戦を捻り出す。

クリンはダグラムではなく、アイアンフットで出撃、独立戦争の行方を左右する決戦の火蓋が切って落とされた。24部隊が指揮する連邦軍CBアーマー部隊は、解放軍の仕掛けた落とし穴にはまったところに十字砲火を受けて大損害を被る。そこへ後続部隊が突撃、森林を舞台にCBアーマー、歩兵、戦闘車輌が入り乱れての乱戦が繰り広げられていく。そこへJ・ロック率いる機甲部隊が到着、修理の終わったダグラムも加わっての総攻撃が敢行された。勢いに乗った解放軍の前に連邦軍は総崩れ、24部隊も全滅しマノンもまた砲火に散った。

スタンレー高原の決戦に勝利した解放軍は余勢を駆って、パルミナの中枢たるドガ市へ向けての進軍を開始するのであった。

【ワンポイント】

ダグラムが解放軍兵士たちの心の拠り所、独立闘争のシンボルであるというザルツェフの言葉は、幾度もそのダグラムと戦ってきた彼だけに説得力を持っている。また、血気にはやるクリンを諭す手腕も評価したい。的確かつ明確に問題を指摘するさまは、さすがはかつて第8軍随一の作戦家と呼ばれたたけのことはある。今回のエピソードでは、これまでに比べ、確かにザルノェフはJ・ロックやサマリンがなんとしてでも参謀に欲しただけの人材だということを見せつけられる。

連邦軍中佐
フリッツ・マノン
パルミナの新行政官。作戦面においては優れた手腕を見せたが一歩及ばず、スタンレー高原の敗北の中で戦死する。

連邦軍少佐　リマ
ドガ基地司令。市内に進撃してきた解放軍への抗戦を陣頭で指揮するが、あえなく戦死してしまう。

★解放軍のCBア[illegible]
56）
[illegible]
は14機）だが、ボナールから7機の増援部隊が発したという表現[illegible]
[illegible]

★ダリッパ・ブランジ（#56）
ダグラム腕部に使用されている機[illegible]

★連邦軍のCBアーマー兵力（#56）
機種が判明しているだけでも85[illegible]

★[illegible]
（前略）博士は先ほど素[illegible]
いものを計算に入れるのは、プロとして禁物です（後略）
（右腕の修理が終わっていないダグラムで出撃しようとするクリンに[illegible]
戦っていれば、かならず相手におかしいと気づかれる。そうなったらそ[illegible]
[illegible]
ラリと変える。我々が敵の作戦本部を狙うのは、そこが敵のシンボルだからだ」

#57 ひるがえる解放旗

【予告編】 スタンレー高原の決戦に勝利した解放軍は　その余勢を
駆ってドガ市を目指した　パルミナの心臓部に
解放旗が迫る　折りも折り
カーディナルのドナンの体内で
運命の時限装置が秒読みを開始した

ドガにいたデイジーは、クリンを探して人民政府樹立宣言に賑わう行政府前広場を訪れた。

人民政府樹立宣言の衝撃とこれまでの心労が重なり、ドナンは意識不明の重態に陥ってしまう。

【ストーリー】

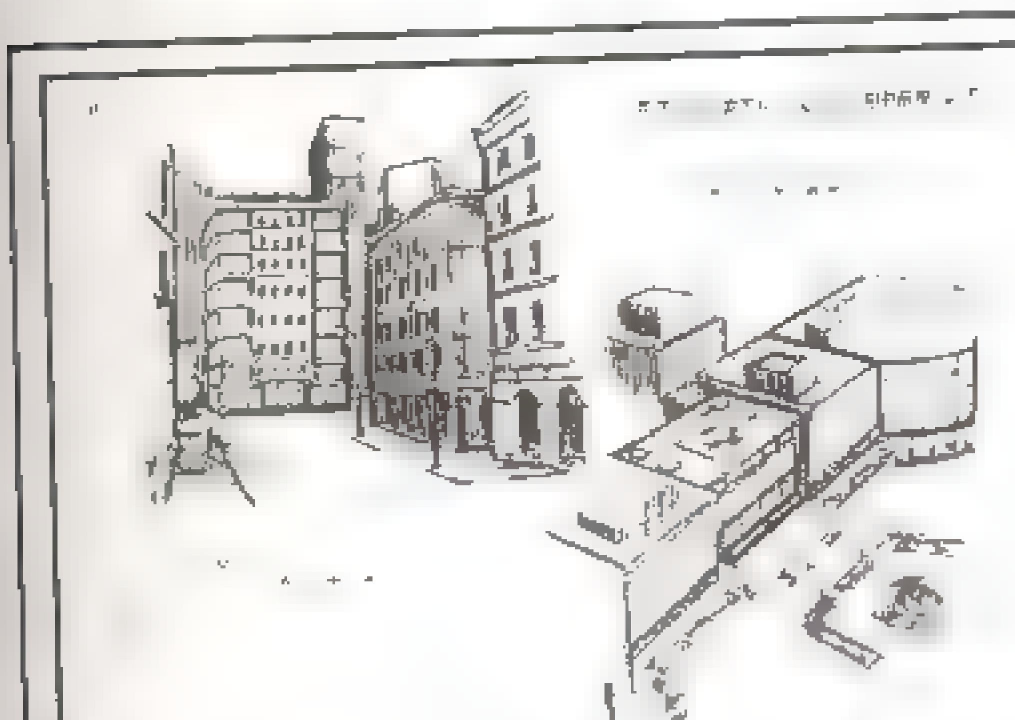
スタンレー高原の攻防に勝利した解放軍がドガ市に入る。残存した連邦軍は最後の抵抗を試みるが衆寡敵せず、暫時降伏していった。解放軍主力部隊が市中心へ到達すると同時に、郊外に位置するドガ基地もJ・ロノクの手により陥落した。それを知った軍はパルミナ政庁を放棄し脱出するが、行政官副官のドリノプは敬愛したレークの政策は間違っていなかったと信じたいと僚友のゲイダに告げて政庁に居残った。彼はやって来た解放軍に逮捕されることを申し出るがサマリンはこれを受け入れず、それどころか三日間の猶予を与え身の振り方は自分で決めるようにと告げるのだった。

政庁から連邦旗が降ろされ、替わってデロイア解放旗が掲げられた。即日サマリンは記者を集めて解放人民政府の樹立を宣言、続けてフォン・シュタイン政権を地球の傀儡と呼び、彼らと対決する姿勢を明らかにした。フォン・シュタインが連邦の後押しを受けて巻き返しを図るであろうことは誰の目にも明白であり、事実、サマリンの記者会見放送を見たドナンは北極ポートを守備する第6軍司令官のブレナーに電話を繋いだ。これに対しフォン・シュタインは確かにパルミナは失ったが第8軍が敗れたわけではない、総力を挙げて反攻作戦を行うので任せてほしいと願い出るが、ドナンは歴史の歯車は逆転しないのだよ、と退ける。第6軍の投入が命ぜられようとしたそのとき、ドナンの時限爆弾が破裂した……。

ドガ市でクリンとの再会を果たしたデイジーは、この戦いで家族を失った孤児たちを助けていくと語った。クリンも地球に帰らず、最後まで独立戦争の行く末を見届ける決意を彼女に告げ、ふたりはお互いに励ましあうのだった。

【ワンポイント】

冒頭で描かれた、解放軍から逃れるために連邦軍の家族と思われる人々が基地から輸送機に乗って逃れる有様は、ベトナム戦争でのサイゴン陥落の様子を想い起こさせる。当然スタッフの脳裏には、南ベトナム政府や米軍関係者の家族たちが、ヘリに乗ってサイゴンから脱出する有名な記録映像があったに違いない。また人民政府樹立に沸く人々の姿は、これまたサイゴン陥落時のそれと似ている。本作がやけに「らしい」雰囲気を纏っているのは、やはり時代ゆえなのかも知れない。


カーディナルのホテル、中央病院
持病の発作で倒れたドナンは、この中央病院へ搬送された。以後、長きに亘り意識不明の状態が続く。

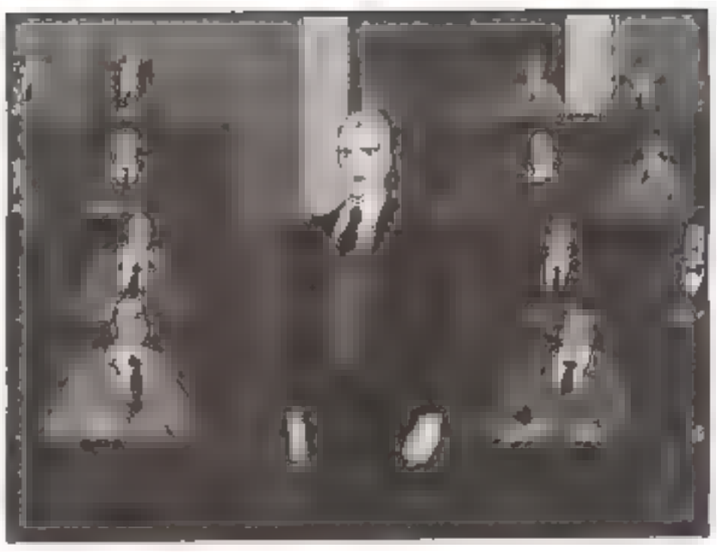
パルミナ行政府　裏
パルミナ行政府はこの日を境に、サマリンの樹立した人民政府の中枢となる。

の場から、ドナン、カシム連邦評議会議長に申し上げておきたい

★三つの戦略方針（#58）
人民政府の戦略会議では、以下の

#58 解き放たれた野心

【予告編】 ドナン倒る　この衝撃的事実は　眠っていた人間の野心を揺り起こした　俺が　俺が　俺が
植民の星　動乱の地に　生臭くパンドラの箱の蓋があく



ラコックは、ドナンの後ろ盾がない自分の弱さに気づき、一時地球へ帰還することを決意する。

上陸を開始した水陸両用CBアーマー、マッケレル。陣地に潜む「太陽の牙」と激しい夜戦を展開した。

【ストーリー】

ドナンが第6軍投入の命令を明確に発する前に病いに倒れ意識不明の重態に陥ったため、第8軍によるパルミナ反攻を唱えるフォン・シュタインと、それに反対するラコックの対立が一挙に顕在化の兆しを見せていた。昏睡状態のドナンを見舞ったラコックは、彼の野心のためにも死ぬか生きるか早くはっきりさせてほしいと心の中で呟いていたが、そこへフォン・シュタインが議会を召集し第8軍投入を議決せんとしていることを知る。色ぎ駆けつけたラコックは、いかに8軍のみの戦いが危険に満ちたものであり、万全を期すために地球の連邦軍を投入すべきかという意見を議員たちの前で披瀝した。そして反発する議員たちを納得させるためドナンの勧告であるとの「権威」を振りかざそうとするものの、フォン・シュタインはドナンが明確な遺言を残していないことを根拠にラコックの意見を退ける。さらにラコックに対し、連邦評議会議長の補佐官であっても、デロイア議会にとっては単なる地球人に過ぎないと言い切ってのけるのだった。

自分の力不足を思い知らされたラコックは、より高い地位と権力を手に入れてデロイアへ戻ることを誓い、地球への帰還の途へ着く。

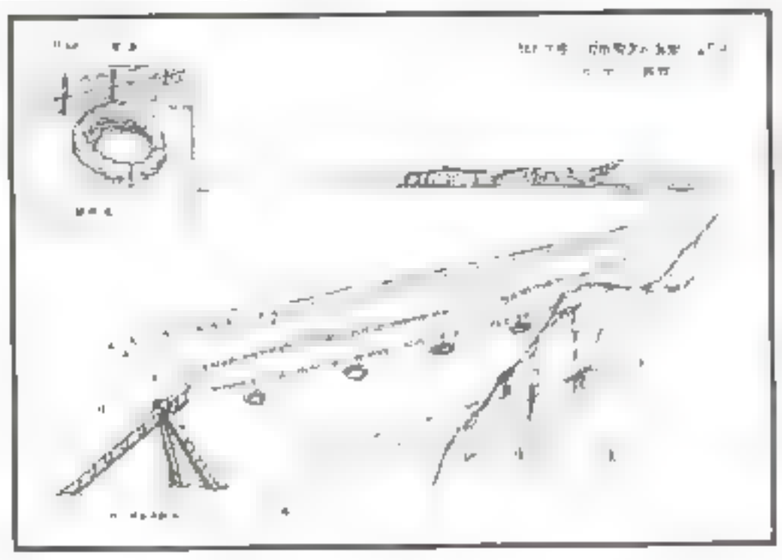
一方パルミナの人民政府内では今後の方針が練られていたが、なにはともあれまずは足場固めを最優先にし、ドガ市の防衛体制を築き上げることと決定する。「太陽の牙」はドガ湾沿岸部に陣地を構築するため駆り出され、そのまま敵の襲来に備えて待機を命ぜられる。

ラコックがカシム家を訪れ見切りをつけていた頃、水陸両用CBアーマー、マッケレルが襲来した。これを撃退したクリンたちの前に、揚陸艦

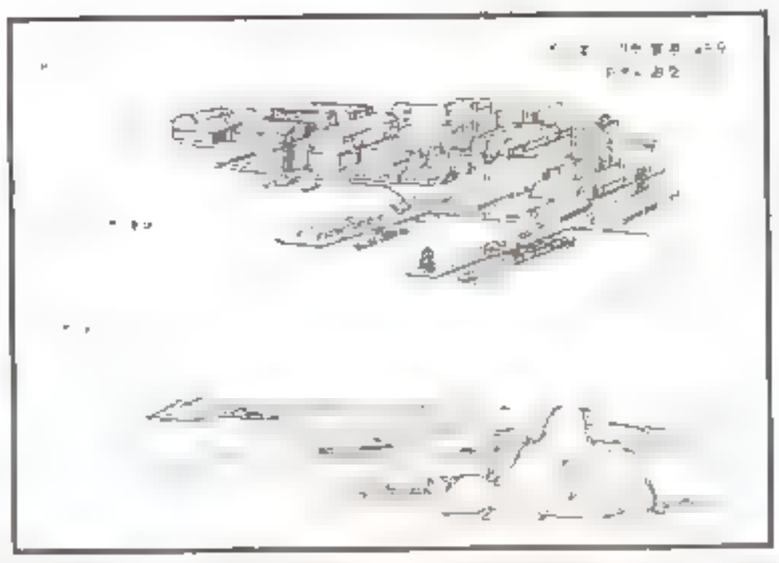
海から姿を現、その威容を見せた

【ワンポイント】

力量不足を思い知った主人公がこれを克服し成長するという展開はお約束だが、本作ではクリンではなくラコックがこの定番を演じるのが面白い。このエピソードから徹底的に、ラコックに対する周囲の本当の評価が執拗に描かれていくのだが、それによって彼は自分が所詮ドナンがいてこそだったと思い知り、その威光に拠らなくて済む力を求めはじめるのだ。デロイアに舞い戻るまでの彼のドラマは見応えあるもので、改めて主人公たちの健闘を讃えてくれるのである。



ドガ市付近の海岸
海連邦軍の上陸を阻止するため、海岸に陣地とバリケードが築かれた。連邦艦隊は夜にCBアーマーを上陸させ、次いで昼にはミサイル攻撃を行い防衛戦力の削ぎ落としを図った。

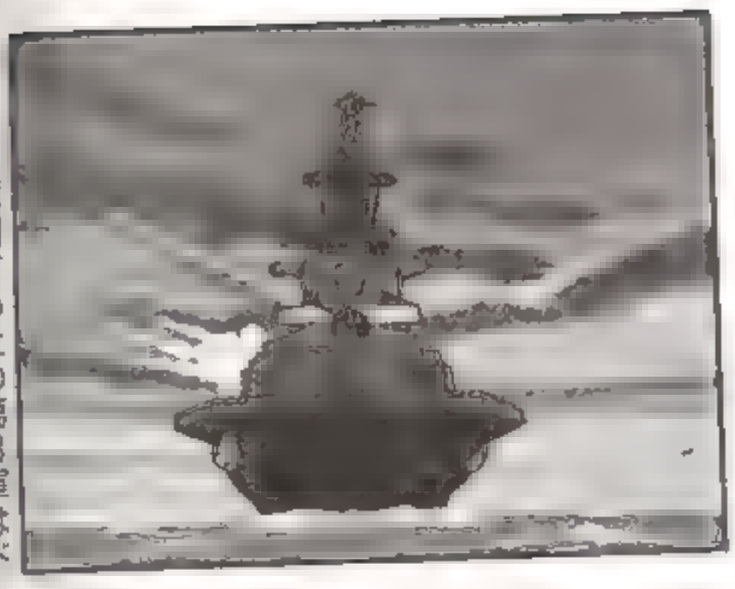


ドガ市軍港　同沖合いの海底
ドガ市はパルミナの中枢であるため、陸上基地だけでなく、水上兵力のための軍港も有していた。

[illegible]

#59 威信かける海戦

【予告編】 ドガ奪回に　フォン・シュタイン政権の命運を賭けて
怒濤のごとく攻め寄せる大艦船群　受けてザルツェフは
この一戦に生まれたばかりの人民政府の存続を占う
戦火を遠く離れた地球では　次代の権力を握らんとする
若き野心家が策謀をめぐらせていた



ドガ市を奪回するため第8軍はドガ湾中に揚陸艦隊を派遣、ミサイルによる砲撃が開始された

上陸部隊を迎え撃つ、解放軍のCBアーマー部隊。兵士を舞台に解放軍と連邦軍の死闘が始まった。

#59 威信かける海戦　#60 デロイアの光と影

【ストーリー】

ドガ市奪還を目論む州政府の命令を受けた連邦艦隊の、ドガ港湾施設に対する攻撃が開始された。洋上からの砲撃とミサイル攻撃によって、沿岸部の工業施設が次々と破壊されていく　だがザルツェフはこれを威力偵察に過ぎず、本命は強襲上陸であると看破し、反撃に備えて「太陽の牙」に沿岸警備を命じるのだった。

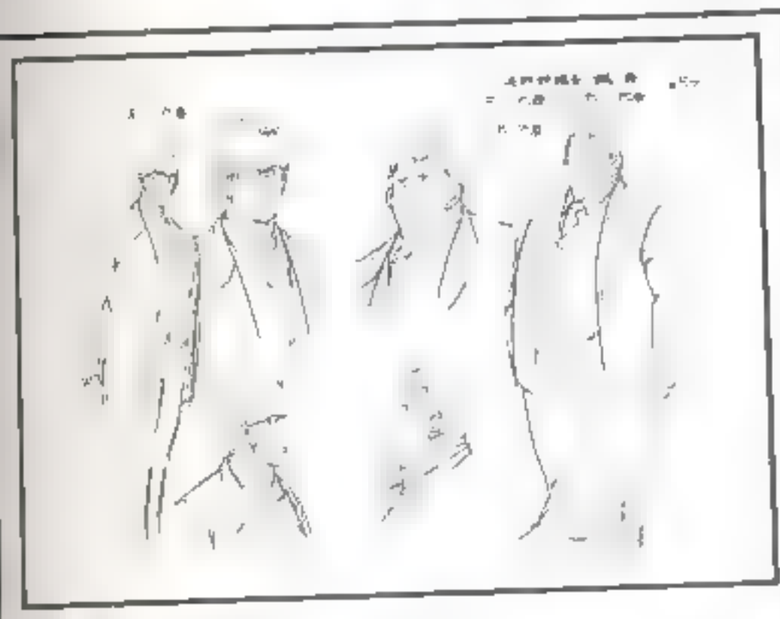
地球に帰還したラコックは連邦評議会を前に、有力者であるテシオ州代表に面会し、自分が最もデロイア問題に通じているのであり、だからこそ倒れたドナンの代行に推して欲しいと求めるが、所詮はドナンの補佐官：秘書の真似事をしていたに過ぎない者が何を言うのかと、相手にされなかった。そこで彼はメドール州と対立するコホード、ミンガス、ローディアの代表たちに接近、たとえドナンが回復しても議長の立場から失脚させ得るスキャンダルを餌に、議会に対し自分を代行に推薦してくれるようにとの取引を持ちかけた。デロイアに対する主導権を奪い取りたい三州の代表にとって、非常に魅力的な申し出だったがにわかに信じることはできず返事は保留となった。しかし確かな手応えを感じたラコックは、薄い笑みを浮かべた。

ドナンの危篤は連邦だけでなく、人民政府内にも影響を及ぼしていた　このチャンスに北極ポート攻略を進めようとするサマリンに対し、カルメルがフォン・シュタインとの講和を提唱しはじめたのだ。そしてザルツェフの読み通り連邦艦隊は上陸作戦を開始、解放軍は上陸部隊を内陸部に引き入れての包囲作戦で対する。一方、沿岸の「太陽の牙」はダグラムとグランドサーチで敵艦隊に強襲攻撃を敢行、リニアカノンで旗艦の撃沈・炎上する　解放軍がド

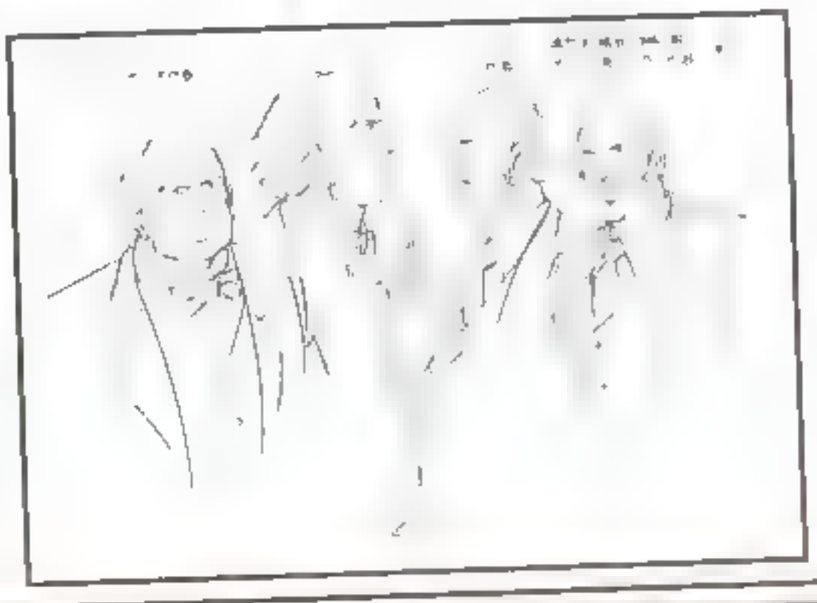
ガ防衛成功に沸き立っていた頃、地球の連邦評議会は三州の強い推しを受けて、ドナンの代行弁務官にラコックを起用する決定を下していた。

【ワンポイント】

今回のエピソードでは、ラコックという人間がいかに陰謀家資質なのかを垣間見ることができる。たとえばテシオ州代表に対してだが、このときは正面から支持を取りつけようとして失敗、その話も彼らしからぬ精彩を欠いたものだった。それがドナンのスキャンダルを使って対立関係にある三州代表に取り入ろうとすると、打って代わって生き生きとした筆致、物の見事に支持を得ることに成功するのだ。世の中には確かに悪行にこそ才能を発揮する人間は存在するが、ラコックもその類いなのだろう



連邦評議会議員
コホード州代表、
ローディア州代表
ドナンの代行弁務官の地位を欲するラコックの接触を受ける。



テシオ州代表、
マラン州代表
最初にラコックの接触を受けるが、ドナンが倒れたいま、補佐官という名の秘書に過ぎぬラコックに関わり合うつもりはなかった。

■テシオ州（#59）
連邦7州のひとつ。代表はドナン代行に推してほしいというラコックに対し、秘書の真似事をしていたに過ぎないと言い放った

#60 デロイアの光と影

【予告編】 光あるところ　必ず影がある　デロイアの動乱は
複雑にその光源を変え　人の世の盛衰に微妙なる
綾どりを演出する
移りゆく時の流れは　歴史をいずくへと運ぶのか

デイジーは、父の危篤やロイルの密輸疑惑に心中穏やかでないクリンを、優しく慰め励ます。

標的を吹き飛ばすリ二アカノン。ダグラムの整備も終わり、北極ポートへの進軍準備は整った。

【ストーリー】

ドガ奪回に失敗した第8軍本部ではフォン・シュタインの下で、解放軍がカーディナルへ侵攻するとも断。これに対する作戦を練っていたが、地球から帰還したラコックは、ドガに否定する。むろんフォン・シュタインはこれに反発するが、ラコックは代行弁務官の権限で彼の頭を押さえ込み、敵の狙いは北極ポートにあるとしてその対応策を練ることを命じた。

そして、政府と同じように、ドガ市の人民政府内でも水面下で意見の対立が起こっていた。第8軍は先の海戦で敗北したため確実に弱体化しており、いまこそ北極ポートを攻略するチャンスだとするサマリンやザルソェフら主戦派に対し、カルメル一派はどうしても和睦案を放棄することが出来なかったのだ。そんなことなど知る由もなく、ドナンの容体を気にしながらもダグラムのオーバーホールを進めるクリンのもとへ、デイジーが訪ねてきた。ふたりは束の間の逢瀬に安息を得るのだった。

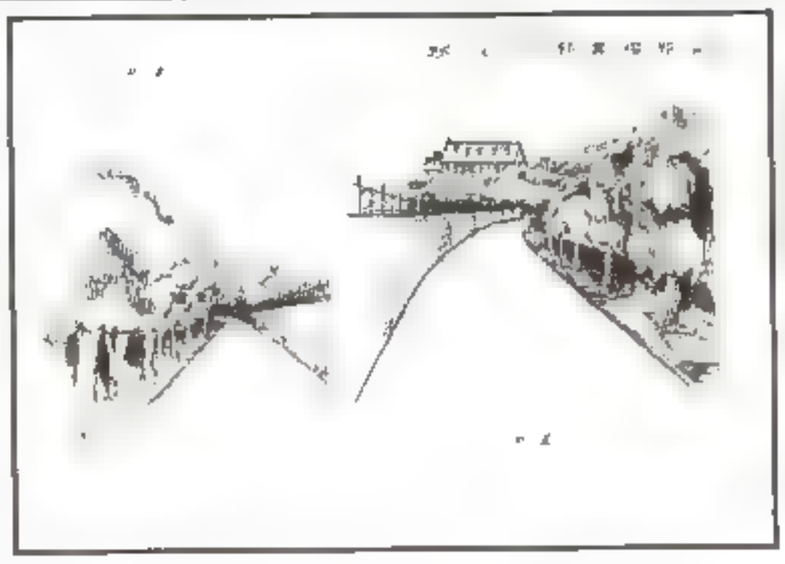
一方ドナンの見舞いに訪れ回復の兆しを見せていることを知ったラコックは、自分の地位を確固たるものにするためにスキャンダル―ロイルの武器密輸をメディアにリークするという挙に出た。このスクープは大きな問題を引き起こした。これはドナンがたとえ回復しても、以前の権勢を取り戻すことは難しくなったことを意味していた。

父は病気に倒れ、次兄には武器密輸の疑い。平静を装いながらも、クリンは塞ぎ込むことが多くなった。ロッキーたちも親友でありながらなにもできず、ただクリンを見つめるだけだったが、デイジーの「雪が溶ければ春になるのよ」という言葉に、クリンは沈んでいた心を立ち直らせていく。

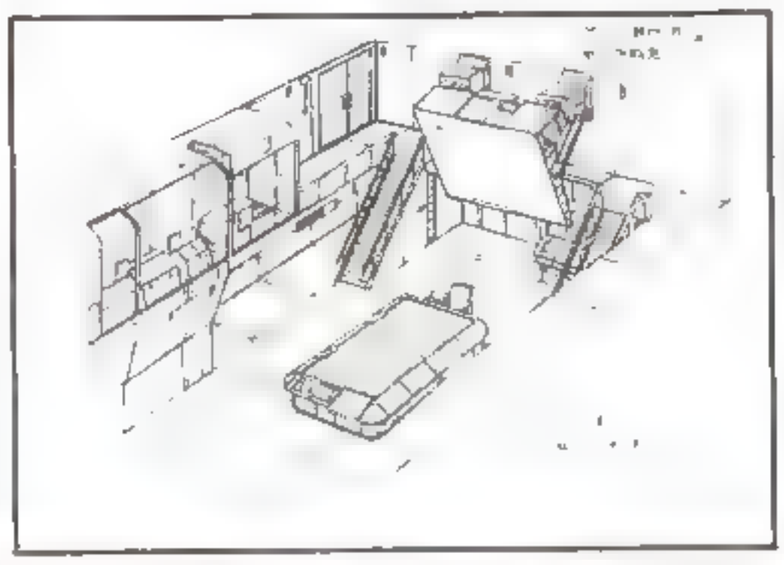
ダグラムの整備も終わり、解放軍は最終的勝利を求めてドガを進発するのだった。

【ワンポイント】

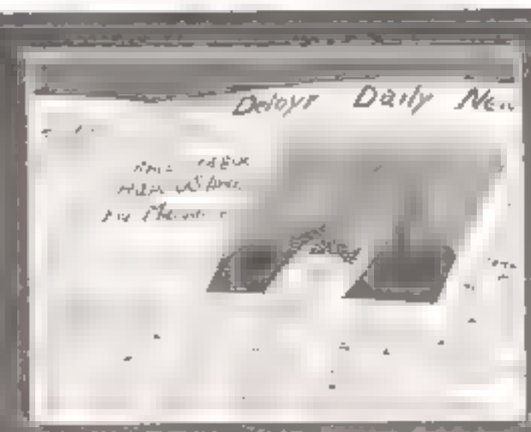
今回は幕間的なストーリーだが、それゆえラコックの帰還と密輸事件の発覚、カルメルの和睦提唱に沈み込むクリンなど、多くの要素が詰め込まれている。どれも気が重くなるような話だが、だからこそ後半のデイジーとクリンのやりとりが生きてくる。中は、出番が限られていたためにヒロインとは言い難いという批判に晒されたデイジーだが、現在の目で見るときちんとポイントを押えており、また、通俗的なヒロインとは一線を画した独自性を獲得していると言える。前えられば良いというワケではないのだ。　叔爽



カシム家（裏）
クリンが生まれ育った邸宅の堀と路。どのような思い出が刻まれているのだろうか。



カーディナル基地
地下作戦室
運用中の各部隊の情報や戦況は最終的にここに集積され、指揮をする際の判断材料とされる。フォン・シュタインはここから第8軍の指揮を執った。



【ルート（井60）
第8軍本部は解放軍がカーディナ
ス砂漠を越えてランドルも
カーランドの街へ侵入す
あるロイルが主謀して行った
に、財閥会長モレアが同じくドナン
の密輸ではないかと疑われた
切な関係から生じた

#61 北極ポートに向けて

人民政府内の派閥の存在を知ったラコックは、さっそく切り崩そうとカルメルに接触する。

【予告編】 雪が溶ければ何になる　雪が溶けたら春がくる
たわいないクイズに秘められた平和への祈り
戦いを経ずして勝ち取れる平和はないものか
若者たちは己の胸に問いつつも
寒風吹きすさぶ戦場へと向かう

【ストーリー】

人民解放政府の樹立後、各地で独自に活動していた独立勢力および「デロイア」兵たちからなる反乱部隊は続々とパルミナへ集結し解放軍へ合流、一気に膨れあがった兵力は、ドゲ上陸戦で多数の将兵や装備を失った第8軍を圧倒していた。これに対し北極ポートを守備する第6軍に支援を求めるべきでは？　という意見が第8軍幕僚の中からも上がっていたが、面子にこだわるフォン・シュタインはこれを却下する。そこでラドム少佐は少数精鋭部隊を編成し進軍中の解放軍に当てその戦力を漸減させ、しかるのち北極ポート南のカルナック山脈に配置した主力部隊で決戦を強要し壊滅させるという作戦を提案、フォン・シュタインもこれを最良策として許可した。

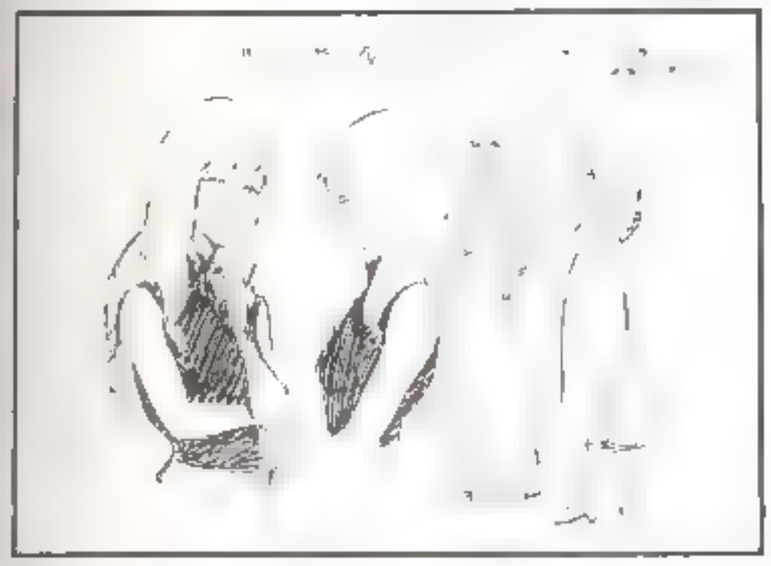
一方、人民政府内では戦略方針を巡っての激論が交わされていた。北極ポートを攻略するまでの間こ也求から援軍が到着し、現在の優位が崩壊することを恐れるカレメルがフォン・シュタインとの講和を執拗に主張したのだ。だが対するサマリンも、その援軍の到着を阻止するための北極ポート攻略だといって譲ろうとはしない。議論が袋小路に入っていた頃、北極ポートを目指す解放軍の前に大口径砲を有する連邦軍の山岳陣地が立ちはだかっていた。解放軍の接近に気づいた連邦軍は攻撃を開始、輸送トラックやアイアンフットを破壊する　だが密かに近づいていた」・ロック、ロッキー、チコが要塞砲の無力化に成功、潜んでいたソルティック隊の反撃を受けるものの、ダグラムのリニアガンがこれを退けるのだった。

軍事的な流れとは別に、新たな政治的な潮流が生まれようとしていた。デスタンからの情報で人民政府内に意見の対立が生じていることを知ったラコックが、さっそく内部から切り崩そうとカレメルに接触を図ったのである。

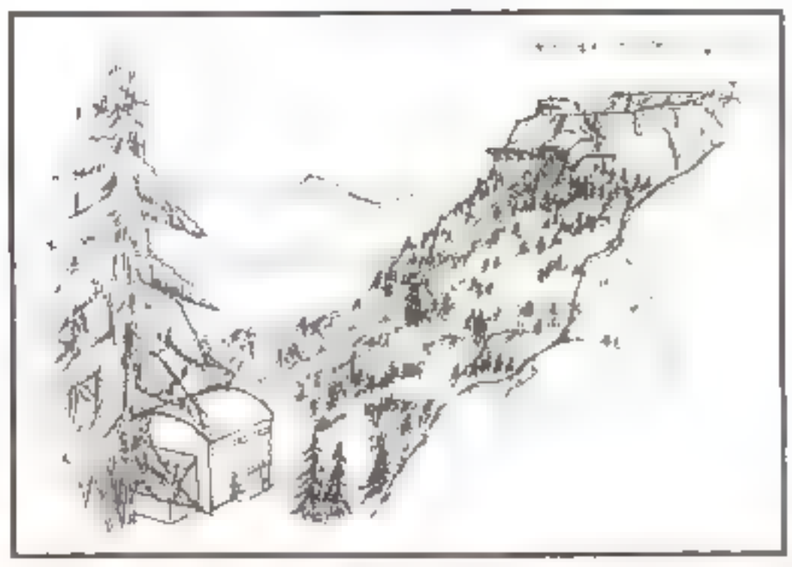
【ワンポイント】

ラコックは和睦を唱えるカレメルを意味者の　言こ切り捨てるが、彼の意見にも　理ある。それに、ある程度の成果を手にしたとき、それを守ろうとしてしまうのは人間として無理からぬ行動だと言えるだろう　人民政府にとって不幸だったのは、この事実をよりによってデスタンに知られたことに他ならない。彼にさえ知られなければ、人民政府内に情報源を持たないラコックが切り崩しにかかることはなかったのだから　ホナールやアンディ無上さの件といい、デスタンは人民政府にとってまさに疫病神だと言えよう

マベリックで山の上に降下したダグラムは、守備隊のソルティックを撃破、ロッキーたちを援護する。



ドライブ・イン・レストランの女主人
ドガ市の郊外で店を営んでいた。デスタンと知り合い、やがて深い仲になる。



トーチカのあるロープウェイ
元は民間だが、現在は連邦軍が接収しトーチカとの連絡や兵員移動に使用している。

#63 落された黒い滴

★北極ポートの戦略価値（#61）
[illegible]らの増援や干渉を完全に断ち切ること[illegible]邦軍にとっては増援が到着するまで[illegible]もって解放軍を壊滅することが可能になるのだ。

【#62予告編】
向かい風激しく　振り返れば光る道
[illegible]
[illegible]
たちの足跡　今一筋の道が語りかける　「筋の道が独立デロイアへの摩擦を示す

#63 落された黒い滴

【予告編】 理想を掲げて　一枚岩の結束を誇る解放軍であったが
度重なる勝利が心の緩みを生んだか
ふと見せた僅かな団結の隙間に　猛々しい野心が
ドス黒い息吹をふきかけた　解放軍に真の危機が訪れる

ラコックからの接触で、思いのほか自分の存在が売れてきたと考えたカルメルは思わずほくそえむ。

【ストーリー】

ラコックの接触を受けたカルメルは交渉を拒絶しながらも、自分の存在が高く評価されていると思い知らされた。人民政府対策見の対立が顕在化しつつあることなど知らない解放軍は、カルナック山脈へ続く道を進んでいた。この動きに対しフォン・シュタインはかねてからの方針通りに少数精鋭の特殊部隊を編成、ヒット・アンド・アウェイに徹したゲリラ戦法で長大な解放軍の隊列を攻撃しその戦力の漸減を図る作戦を開始する。何せ司令部の北柳ポートへの移動も行われるがラコックはこれに異論は挟まず、メドールと対立関係にあるのが習知ったる新型CBアーマーの採用と配備を勧めるのみだった。

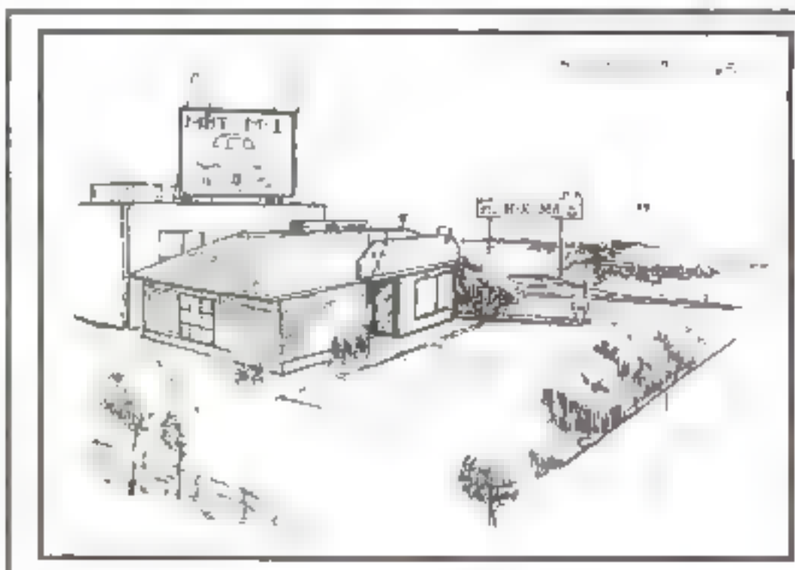
敵も味方も戦争の決着が近いことを肌で感じ取っていたが、そこに去来する想いはさまざまだった。クリンは北の空を眺めながらいつ雪が溶け春が来るのかと想い耽り、カシム家の執事であるワトキンスはドナンに替わりラコックの時代が来つつあることを、兵士たちの会話から思い知らされていた。また、フォン・シュタインは不退転の決意で決戦に臨もうとしていた。実際、漸減作戦は想像以上の戦果をあげていた。攻守が逆転したことにより敵の襲撃に備えるしかなくなった解放軍は、連邦軍の執拗なゲリラ攻撃に少なからず損害を被っていたのである。正面から戦う気のない敵か相手では、得意のCBアーマー戦に持ち込むこともできず、解放軍は一方的に打ちのめされるだけだった。

カルメルはデスタンに説得され、ラコックとの会見を承諾する。これが過ちの第一歩だった……。

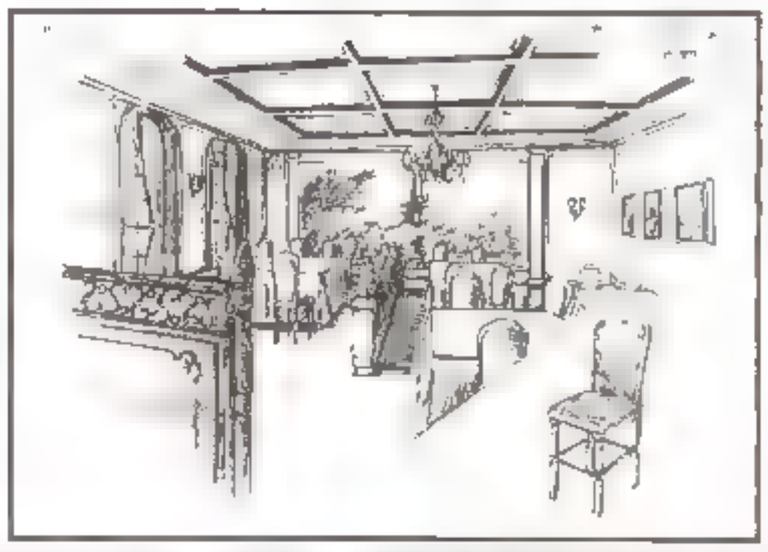
そんな動きの裏でラコックはデスタンを使ってカルメルに密かに会見を行うことを提案する。最初は二の足を踏んでいたものの、ラコックがいまやデロイアにおける地球連邦の代表者であることを、さらに第8軍の漸減作戦が予想以上の効果をあげたことを知って、とりあえず密かに会見することを了承するのだった。

【ワンポイント】

クリンたちの手が届かないところで、独り戦争を思いもよらない方向へ進ませていく謀略がスタートした。カルメルも決して万能ではないのか、脇が甘く、ラコックと対するには力不足の感は拭えない。ラコックもカルメルという格好の餌食を見つけたから、その謀略好きぶりを全開していくなど、本作の影の主役ぶりをいかんなく発揮しはじめている。自分とはえてして内部から崩壊あるいは変質が生じるものだが、やはり『ダグラム』においてもこの法則は存在するらしい。



ドライブ・イン・レストラン
革命崩壊のきっかけとなったレストラン。歴史とは時として、こんな何の変哲もない場所から生まれることがある。



レストラン内部
デスタンとカルメルの密会が行われたのもここ。意外とデスタンの店員姿も捨てたものではなかった。

ローディアの共同貿易代表と名乗る。新型CBアーマーを第8軍に売

シュタインではなく代行井整官のラコック

★新型CBアーマー（#63）

能に改良・補強を行った寒冷地用

★第8軍の現況（#63）
兵力は半年前の5分の2まで減少している。

※#62「きざまれた光る道」は総集編のため割愛いたしました。

【完本 太陽の牙 ダグラム】

#64 濁流の罠

【予告】 フォン大佐の放った連邦軍特殊部隊は
予測を上回る戦果を上げた
解放軍は進軍を阻む大河を前にして　目に見えぬ敵に怯えた
一方ドガでは　ラコックの落とした　黒い染みが
じわじわと人民政府内を侵食しはじめた

2週間ぶりにドナンが意識を取り戻した。予想外のことにラコックは強く動揺する。

上流からガソリンが流れてきたことで、ハックルとナナシは異常事態に気がついた。

【ストーリー】

ドナンが意識を取り戻した頃、ザルツェフ率いる解放軍は連邦軍の防衛戦を突破し、一路敵領の北極ポートへ向けて進軍していた。そんな彼らの目に、円周を湿地帯に囲まれた川が姿を現した。とう控えめに見ても全部隊が通過するには30分は掛かるだろう。となれば、間違いなく、敵の良い的になっているであろう敵の良い的になってしまうに違いない。事実解放軍の接近を察知していた連邦軍は、部隊が橋を渡っている最中にこのダムから放水することで戦力を分断し、そこを叩く作戦を立案していた。ザルツェフも敵の待ち伏せがあるはずだと考え、用心のためダムを確保するため体制を送り込むが、これを読んでいた連邦軍の策略に嵌ってしまい失敗、ロッキーたちが確認のためにダムへ向かうが時すでに遅く、放水が開始されてしまう。解放軍部隊が突如として襲い来る鉄砲水に次々と呑みこまれていくと、そこを狙って敵の本隊がミサイル弾での攻撃を開始した。連邦軍の奇襲は成功し、解放軍部隊を次々と撃破していった。

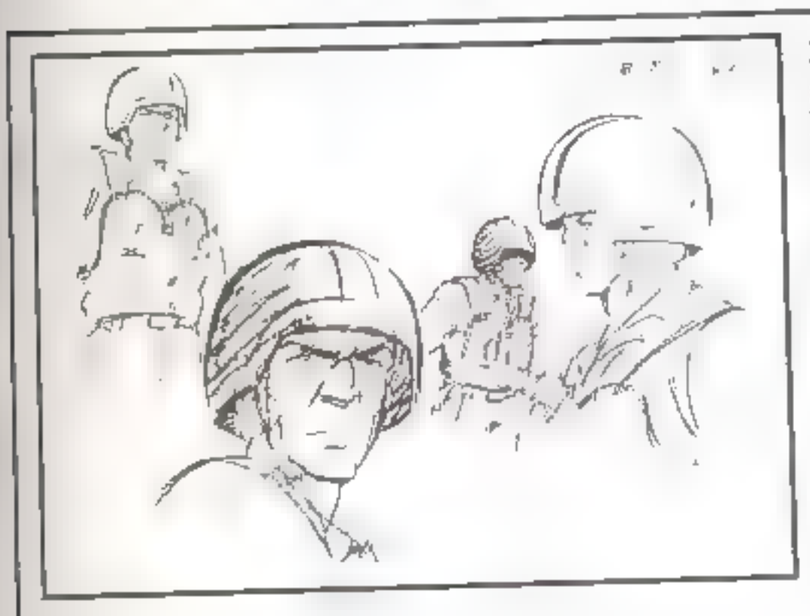
だがロッキーたちがダムを急襲し制御室を奪還、放水を中止して水の流れを止めると、解放軍は態勢を立て直すチャンスが訪れた。クリンのダグラムをはじめとする解放軍CBアーマー隊は反撃を開始、なんとか連邦軍部隊を敗退させるのだった。

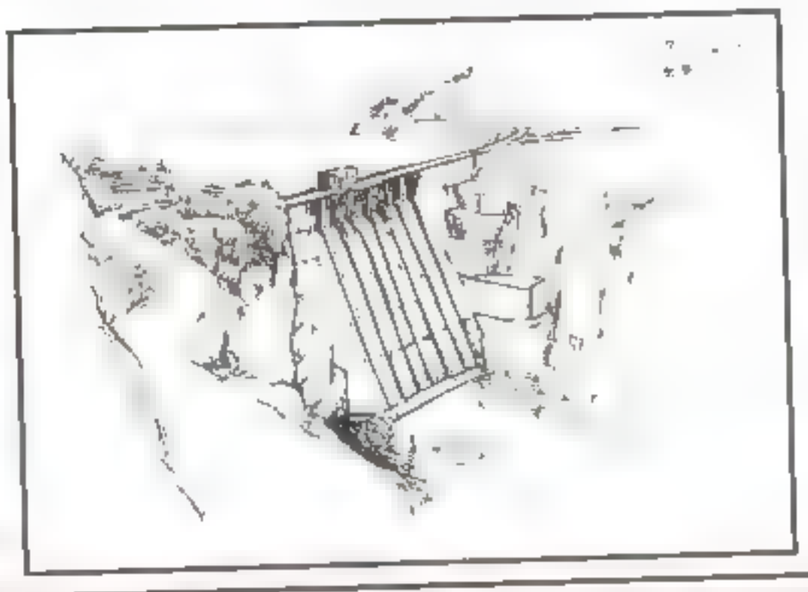
クリンたちが死闘を繰り広げていたころ、カーディナルの病院を訪れたラコックは、ドナンが意識を回復している事実に激しく動揺していた。デロイアの危機的情勢を知ったドナンは、なぜ地球からの増援を行わないのかとラコックを詰問し、再び体調を悪化させてしまう。対するラコックはドナンの意に従う素振りを見せながらも、離反行動を明確にしていく。

一方、カルナック山脈にはラドルフ少佐指揮の下、強力な阻止線が構築されつつあった。

【ワンポイント】

連邦軍のボリー大尉は一回こっきりのゲストキャラだが、なかなかどうして優れた手腕を見せてくれた。孫子の有名な言葉に「敵を知り己を知れば百戦危うからず」というものがあるが、ボリーはザルツェフを侮ることはせず、また、過大に評価し恐れることもせずに的確な作戦指導で解放軍に大きな損害を被らせた。以前登場したギャソン中尉などとは大違いな、非常に優秀な人材だ。地味な展開だが、そのふん玄人好みなエピソードだと言えるだろう。


ボリー大尉
第8軍に属する士官。敵味方が置かれた状況と地誌をよく把握し、ザルツェフの行動を読んで解放軍に大打撃を与えた。


ダム全景
渡河ポイントの上流に位置するダム。連邦軍は解放軍の斥候が安全を確保したとの信号弾を発射した後に攻撃、制御室を制圧した。

#65 攻略・白銀の要塞

【予告編】 この山を越えれば北極ポート　ここが人工山だ
だが雪が氷が風が　解放軍の行く手を阻む
8軍最後の防衛線　天然の要塞カルナック山脈が
立ち塞がる　熱い想いは極寒の山岳戦に勝利を呼べるか

火を噴くインステッドの主砲。第一次カルナック攻防戦の幕が切って落とされた。

高地性能を発揮する、寒冷地用CBアーマー、ビッグフット。連装式ハンドリ　ァガンを持つ。

【ストーリー】

ドガ島の戦いで歴史的大敗北を喫した第8軍は、北極ポートへ攻め　ろうとする解放軍を迎撃すべく自然の要害であるカルナック山脈に総力を結集、ここにワルツェフタイン政権の命運を賭けようとしていた。片や解放軍はカ　ク山脈を越えて作戦会議を開いていた　山脈を越えるにはヘリを使った空輸が最も効率的だが、敵の迎撃を受けやすいため使用による進軍が安全であると結論された　問題はそのルートだった。が、　つある選択肢のうち、いちばん険しくまた北極ポートへの最短ルートでもある中央のV字谷から進むことに決定した　他のふたつは部隊の移動が容易である反面、敵の守備も厳しいと予測されたのだ。それに地球からの増援が近づく可能性が高い現在、一刻も早く北極ポートを押えなければならないという、時間的制約の問題もあった。

ザルツェフは主力をV字谷、他の支隊を両ふたつのルートから進ませる分進合撃作戦を開始した　しかしフトルフは彼の思惑と解放軍の事情を読み切っており、主力をV字谷に配備する　結果、攻撃は少なくない損害を出して失敗に終わってしまう。

同じ頃ドガ市のディシーは、父モレアに孤児院に寄付して貰おうと考えていた　相談されたラルターフは、　方では武器で儲け、もう　方では孤児院に寄付する、富というものは魔物だなと嘆息しつつも、ありったけの蓄えを今寄付する。

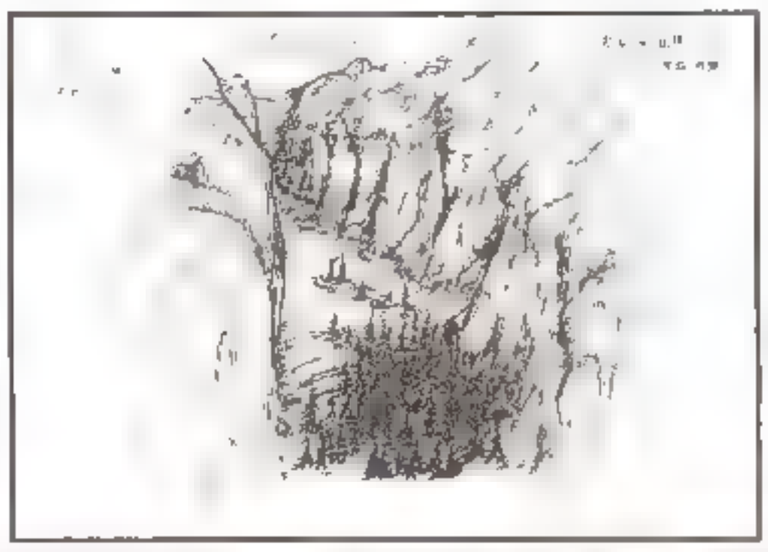
攻撃失敗の報は思わぬ事態を招き寄せていた。講和を唱えるカルメルをラコックに近づけさせてしまったのだ。ラコックの、北極ポート侵攻は全面戦争に発展するというプフを真に受けたカルメルはまんまと取り込まれてしまう。

第二次攻撃が開始された。ザルツェフはCBアーマー隊を敵の後方に強襲空輸、トーチカを背後から叩いて正面攻撃を助けさせたのだ　作戦は図に当たり敵は敗退、解放軍はついにカルナック山脈に足を踏み入れることに成功したのだった。

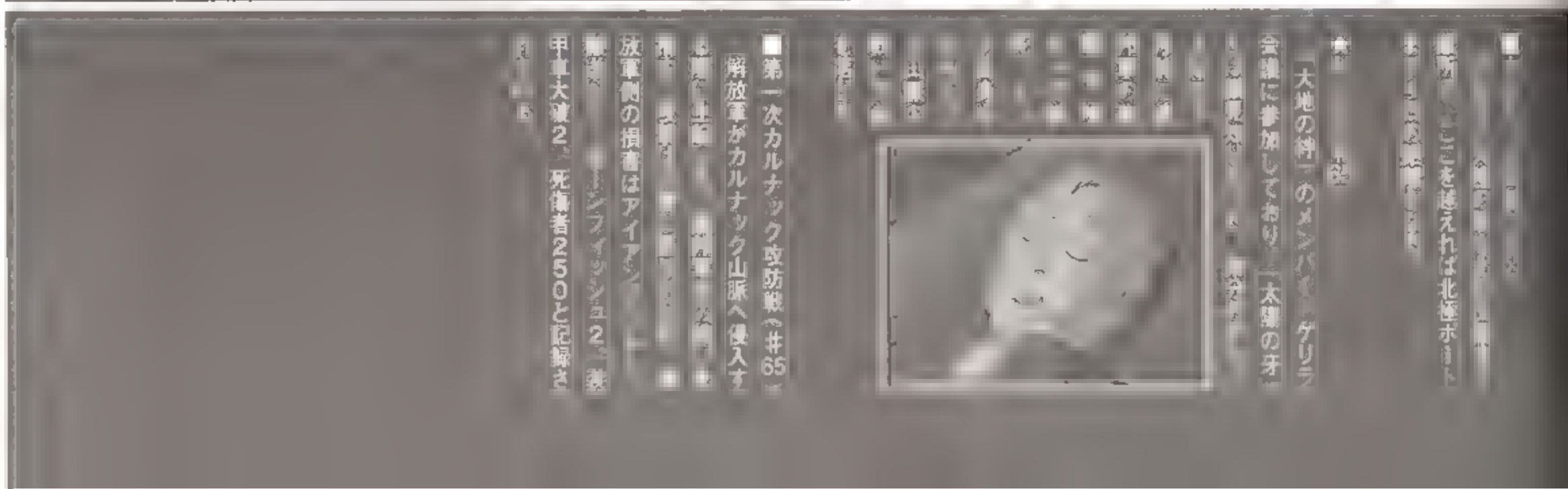
【ワンポイント】

長きに亘った独立戦争も、いよいよ佳境に近づいつつあった　地球の増援部隊が到着するまでに北極ポートを攻略すれば解放軍の勝利、守りきれば連邦軍の勝利となる。共に後がない状況であり、国事を覆う緊張感が画面からも伝わってくるようだ。その一方で政治ステージも、カルメルとラコックの急接近という事態が生じ、思わぬ展開を見せはじめる。決戦に向けて事態や伏線が集束していく構成は実に巧みで、次回作「最甲騎兵ホトムズ」の萌芽を出間見ることができる。

ラドルフ少佐
解放軍の北極ポート侵攻を阻止する作戦のデロイア人指揮官。堅実且つ冷静な性格の持ち主で、ザルツェフたち解放軍を窮地に追いやる。



カルナック山脈
V字谷　俯瞰
カルナック山脈へ入る3つのルートのうち、標高が低の2000メートルといっ、最も険しいポイント。ラドルフはここに連装砲を装備したトーチカを多数配備することで要塞とし、解放軍を迎え撃った。



■第一次カルナック攻防戦（#65）
解放軍がカルナック山脈へ侵入す
放軍側の損害はアイアン
甲重大破2、死傷者250と記録さ

【完本】太陽の牙ダグラム

#66 激戦・カルナック越え

【予告編】 白い城壁が　解放軍の北上を拒みつづける
だがどんなに困難でも　どんなに犠牲を払おうとも
ここを越えねば　新しい時代は呼べない
デロイア150年の歴史の分水嶺カルナック
北か南か　時代はどちらに流れるか

カルナック野戦司令部で指揮を執るラドルフは、素早い解放軍の進撃に驚きを隠せなかった。

解放軍はついにカルナック山脈越えに成功した。後は北極ポートまで突き進むだけだ。

#66 激戦・カルナック越え

【ストーリー】

勢いに乗った解放軍は連邦軍の阻止線を次々と突破、ついにカルナックの頂上付近まで辿り着いたが、そこにもトーチカが入念に配備されていた。正面からぶつかれば少なくない損害を被ることは分かっていたが、解放軍は迂回する時間的余裕はない。サルツェフは犠牲を覚悟の上で攻撃開始を命令した。

解放軍は敵の正面にCBアーマー隊を中心とする装甲隊を配し、敵の注意を引きつけ、その隙に側面の崖を歩兵がよじ登って横合いから攻撃を仕掛けようとする。これを知った連邦軍は崖に仕掛けておいた爆薬を起爆させるが、爆破を逃れたロッキーたちから攻撃を受けて陣は総崩れしてしまうのだった。

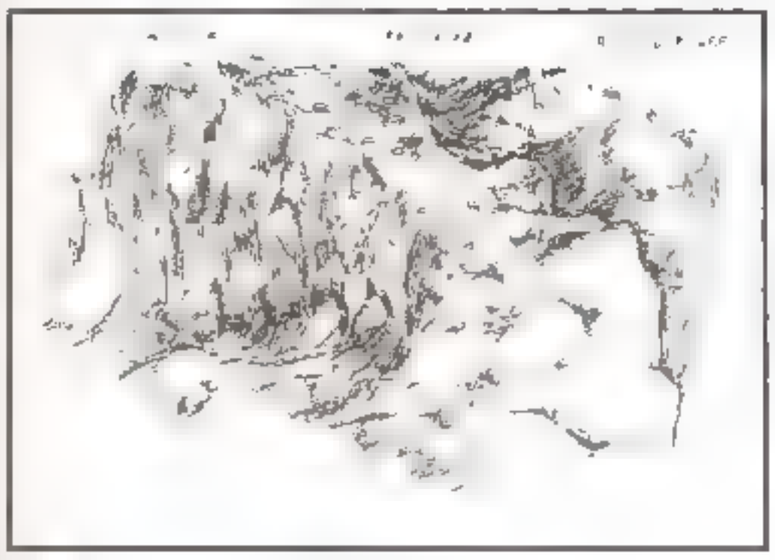
カルナック山脈で両軍が死闘を演じている一方で、カーディナルの治安が悪化するのと軌を同じくしてドナンの病状も予断を許さない状況にあった。第6軍が投入されていないことを知ったドナンは、ラコックを呼びつけると、目の前で第6軍に参戦を要請せろと怒鳴った。最初は言い訳を並べ立てていたラコックだったが、ここが岐路だと考えたのだろう、従順な補佐官の仮面を捨てて隠していた野心を剥き出しにした。彼はデロイア独立は歴史の必然であり、ならば建前の独立を許した上でこの惑星を牛耳れば良いのですと語り、もはやドナンやサマリンの時代は終わったのだとうそぶいた。ラコック造反のショックがよほど強かったのか、ドナンは再び重篤状態に陥ってしまう。

陣地を突破した解放軍は、ラドルフが幕を構える本部を攻撃しこれを制圧する。解放軍が頂上に達した報にサマリンたちは喜ぶが、カルメルはひとり連邦軍の反撃と全面戦争の可能性を恐れていた。そしてフォン・シュタインもレークからラコックが吐いた言葉を聞いた直後に、カルナック山脈の阻止線が崩壊したとの報に接するのだった。

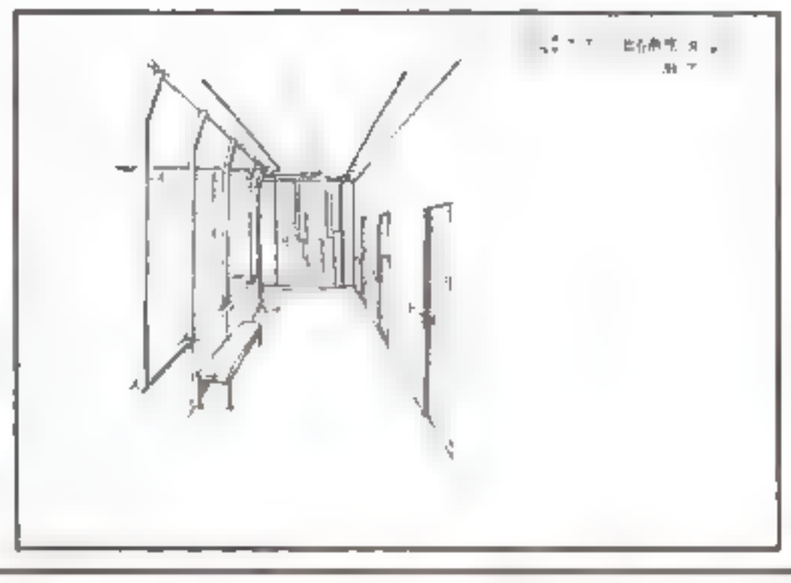
#67 北極に散った決断

【ワンポイント】

ついにラコックがその本性を露にした。ドナンに比べつけられ、おどおどしながら言い訳した直後、いきなり不遜な表情をほかべて煙草をくわえながら抱く野心を語りはじめる有様は『ダグラム』で最も野心を抱く男らしい豹変ぶりだった。ラコックを嫌っていたレークも、まさかここまで非道い男だとは思いも寄らなかっただろう。視聴者の中には、ラコックがレークに殴りつけられスッと気分が晴れた人もいたのではないだろうか？　この後ラコックの野心家ぶりには益々加速がかかっていく。



カルナック山脈
北極ポートは連邦にとって、軍事・民生両面における最重要拠点であり、その防衛はなによりも優先される。そのためなのか、カルナック山脈には近代的な道路は整備されておらず、開拓時代と変わらない天然の要害の姿をそのまま残している。



カーディナル総合病院
ドナンは議事堂の執務室で意識不明に陥った後、ここに収容された。第8軍の弱体化に伴い、市内ではゲリラ活動が活発化、ノークはドナンを北極基地内の軍病院に転院させることを決める。

■[illegible]
[illegible]ット中尉が指揮官を務める。
■[illegible]
解放軍が接近次第[illegible]を爆破する予定だった。しかしサミットの判断ミスにより爆破は完全には行われず、敗退のきっかけを作ってしまう。

■フォン・シュタインの独白（#67）
フォン・シュタインは眼鏡マスク[illegible]
[illegible]
[illegible]
と言われてきましたが、しかし私たちは、まがりなりにもデロイアの州立[illegible]
[illegible]
ひ[illegible]以前の動きに戻されようとして[illegible]
私はこの地を、地球人の好き勝手[illegible]
[illegible]イア人の手で治めます。
[illegible]
の手で守ってみせます。
も、地球連邦軍の手を借りようとは思いません。私はいま、兵卒として[illegible]
[illegible]
れ、そして育ったデロイア人です。
途中から意識を取り戻したドナン[illegible]
[illegible]
■ラコックの策謀（#67）
ブレナー「いつまで待てばいいのですか？　解放軍はもはや、カルナック[illegible]
ラコック「ブレナー司令、あなた方[illegible]

#67 北極に散った決断

【予告編】 遠く聞こえる砲声に破られた夢　ほんの一時見た権力の夢
戦火に照らされていま　浮き上がるデロイアへの想い
代表として　軍人として　人間として　デロイア人として
今こそ真実の決断が迫られる

【ストーリー】

人工太陽計画の影響はデロイア全土へと波及し、第8軍の弱体化と反比例するようにゲリラ活動は活発化していった。いまやカーディナルでもゲリラによる破壊活動が頻発、レークは[illegible]のノールと相談してドナンを地球に送り返すことを決定した。前線に出向こうとしていたフォン・シュタインも同行して、まずは北極ポートへの移送が開始された。航空機の中でフォン・シュタインは、ドナンとふたり築き上げたものを守るために、兵卒として前線へ赴き勝利し、自分のやり方でデロイアを治めてみせると誇っ

だがそんな決意を嘲笑うかのように、ラコックはデロイアを手中に収めるための策謀を着々と進めていた。彼は、地球からの増援が届きつつある現在、いったいいつまで待機すればよいのかと言う北極ポート守備隊のプレナーに、デロイアをコントロール下に置くためには解放軍と第8軍、つまりデロイア人同士を噛み合わせることが得策なのだと説明する。両者が弱体化すれば必然的に地球のプレゼンスは拡大し、独立後のデロイアに対して大きな発言力と影響力を得ることになるからだ。

その流される血の重みを一切考えない非道ぶりに驚いたプレナーから全てを聞いたフォン・シュタインは、己が権勢欲を満たすことしか考えていないラコックに激しい怒りを覚え、その野望を阻むためサマリンとの交渉の場を設けると言い出す。そうなったらラコックのこれまでの策謀のすべてが水泡に帰してしまう。驚いた彼はそれまでの冷静な態度をかなぐり捨て、フォン・シュタインに翻意を促す。だが全く受け入れられるわけもなく、追い詰められたラコックは、彼が敵に投降すると兵士たちの前で叫び、搭乗するヘリを撃墜させてしまう。

クリンたちの手の届かないところで、歴史は思わぬ展開を見せようとしていた…

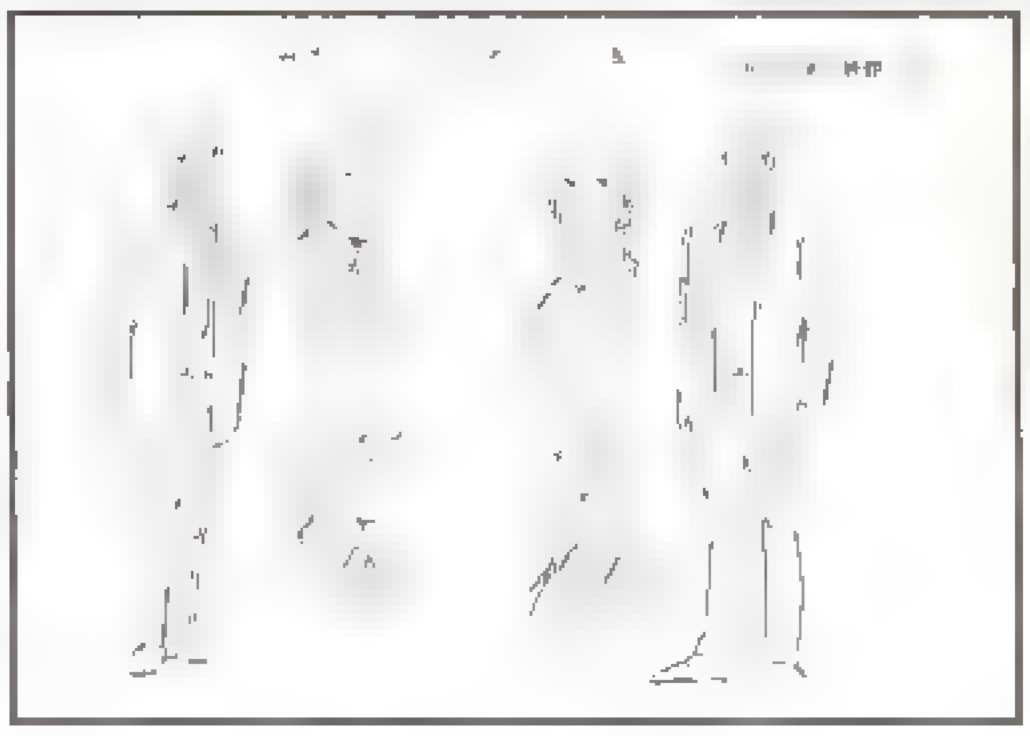
【ワンポイント】

前回のレークに続き、今度はフォン・シュタインの拳がラコックを叩きのめす。共に鍛え上げられた軍人（正しくはレークは元、だが）の拳である。そのわりには二人共大したことはなかったであろうに、平静を装うラコックも大したものだ。野心成就に近づき余裕が出てきたのかもしれない。

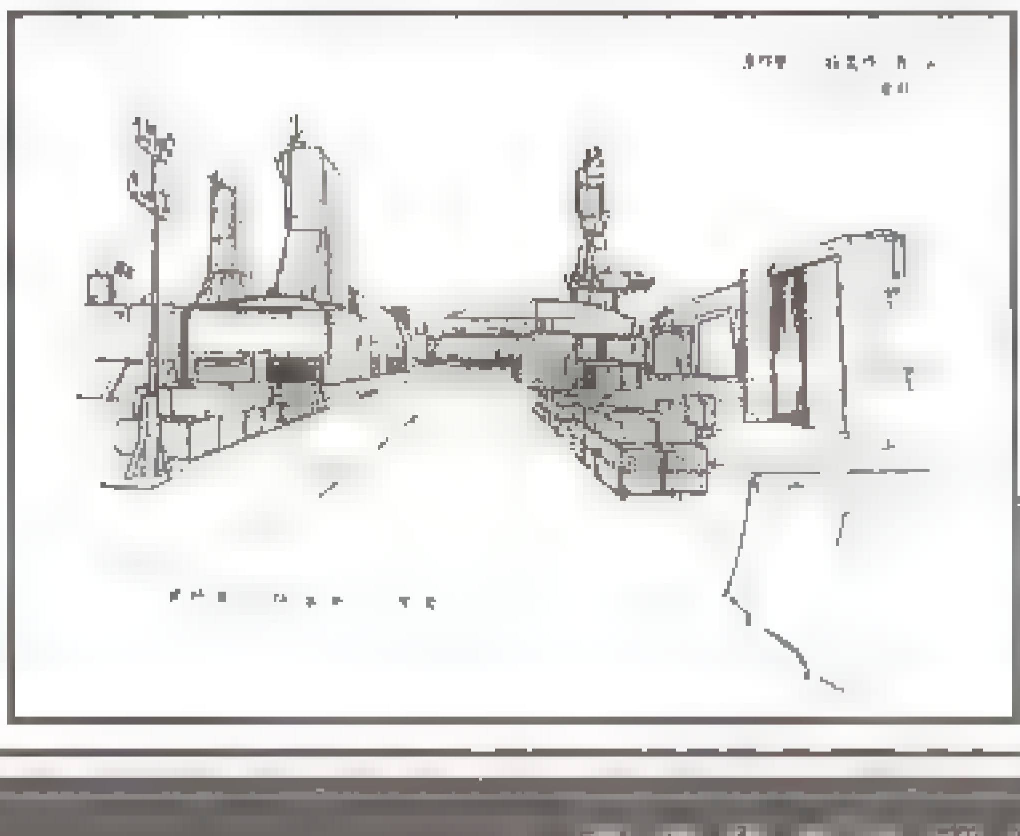
さて、人生の価値は死に際で決まるというが、横死という言葉がふさわしいフォン・シュタインの最期を、いったい歴史はどのように評価するのだろうか？　少しは肯定的な評価が増えるのか、それとも…？

森林地帯で解放軍を待ちかまえるブリザードガンナー。寒冷地用CBアーマーで高い敏捷性を誇る。

ドナンに続きフォン・シュタインが死んだことで、もはやラコックの野望を阻む者はいなくなった。

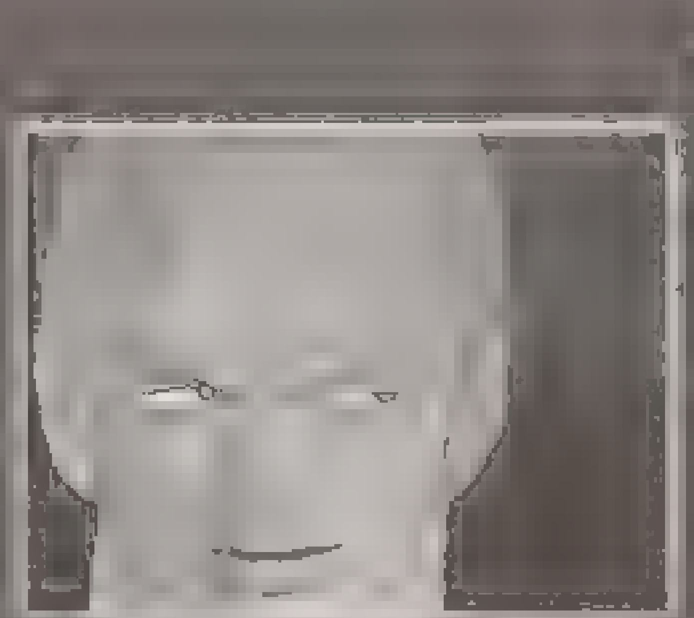


カルメル派の幹部
常にカルメルと行動を共にしている。クーデターに際し慣れない拳銃を持ち出したため、ジョークを衝動的に射殺してしまう。



連邦軍　北極基地（内）主要部
北極基地はデロイア州第8軍ではなく、メドール州第6軍の管理下に置かれている。この事実からも、地球がデロイアをどう見ているのかが理解できるだろう。

[illegible]が解放軍を[illegible]これ以上勢いづかせる[illegible]
いま[illegible]解放軍の主導権を握っている
と[illegible]コンタクトを取っていますが[illegible]そ
れはヘシ・カルメルという男ですが。
[illegible]ひます[illegible]もはやこのデロイアは[illegible]サ
[illegible]ではないのです[illegible]我々若い者が古い
[illegible]です。（後略）



#68 テーブルについた者達

【予告編】 デロイアを動かしていたひとりの男の死が　呼び水になった
動乱の軍の混迷はさらに広がりさらに深まる
裏切りか　信念か　私欲か大義か　直線の稲妻　より激しく
歴史の舞台裏に火蓋が飛び交う　撃たれるのは誰か

ラコックはフォン・シュタインの死を事故によるものだと偽り、和平交渉の正当化の道具に使う。

サマリンら主戦派は、カルメル派の手によってドガの本部で軟禁状態に置かれてしまう。

#68 テーブルについた者達

【ストーリー】

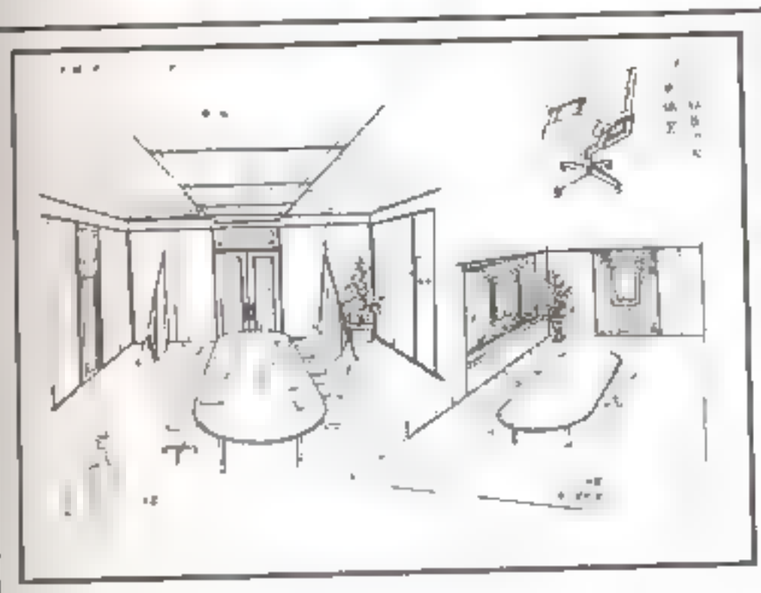
フォン・シュタインの死は事故死として報告されたが、第8軍の前線キャンプに極度の混乱を引き起こした。その為なのか前線部隊の士気は低下し各所で反乱を続け、ついに解放軍の気勢は日々昂揚になり進撃の歩みを止めていた。しかし、ラコックが、フォン・シュタインは解放軍との和平交渉へ赴こうとして事故死したのだと発表したことで、事態は急展開を見せる。彼はカルメルに、自分は明日にでもサマリンと和平交渉を開始するつもりだが、交渉が長引くようなら戦争は必ず不可能となるだろう。そうなる前になんとしてでも、人民政府の主導権をサマリン派から奪取しなさい、と「決断」を促すのだった。

ほどなくラコック側から、交渉に関する条件が提示された。しかしその内容は対等のテーブルについたものではなく、停戦に応じるものだった。ラコックの思惑通りサマリンはこれを即刻蹴ったが、つまりは自軍は解放軍勝利に傾いている証拠だと喝破し、拳絶の色を示した。と、次の瞬間、会議室に銃声が響いた。内戦を恐れるカルメル派がクーデターを起こしたのだ。政府の主導権を握ったカルメルは解放軍に進撃中止と、調印の停戦を命令し、ラコックの交渉に臨むことが予備折衝は終始地球側のペースで進み、カルメルたちはいいようにラコックに丸め込まれていく。独立の条件はデロイアに不利な内容が多かったが、人民政府代表という権力と名誉に目が眩んだカルメルは仮調印に同意、解放軍に武装解除を命令してしまう。突然の武装解除命令は、最終目標である北極ポートを前に怒り心頭させられ無視していた解放軍将兵たちの間に、一層の混乱を引き起こした。いったいドガの本部は何を考えているのか。

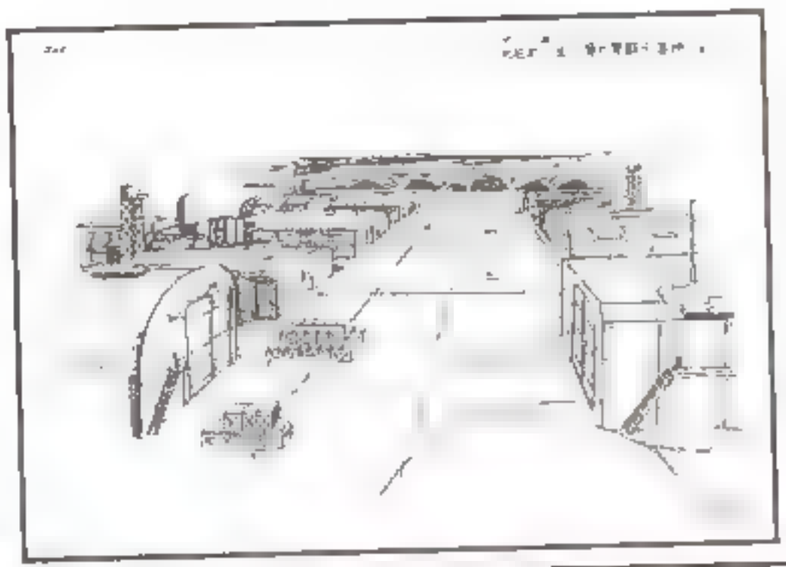
万病床のドナンは朦朧とする意識の中で、決別したはずの息子、クリンの名を呼んでいた。

【ワンポイント】

ついに人民政府内で政変が生じ、このクーデターが孔発したのはサマリンが優れた指導者であることは間違いないが、世論を味方した同志の行動に疑問を持たなかったのは、組織の長としては甘かったと言わざるを得ない。そもそもカルメルが和平を唱えたときから、彼を潜在的敵と見なして密かに監視すべきだったのだ。もっとも、そうした行動を採らないところがサマリンの「指導者」としての資質はありながら、魅力の源泉だとも感じさせる。つまりサマリンは遠かれ早かれ政治の世界からスポイルされる命であったのだ。



北極基地（内）会議室
カルメルを交渉役とする人民政府と代行弁務官ラコックを代表とする地球連邦の、デロイア独立に関する予備折衝と仮調印は北極基地の会議室で進められた。



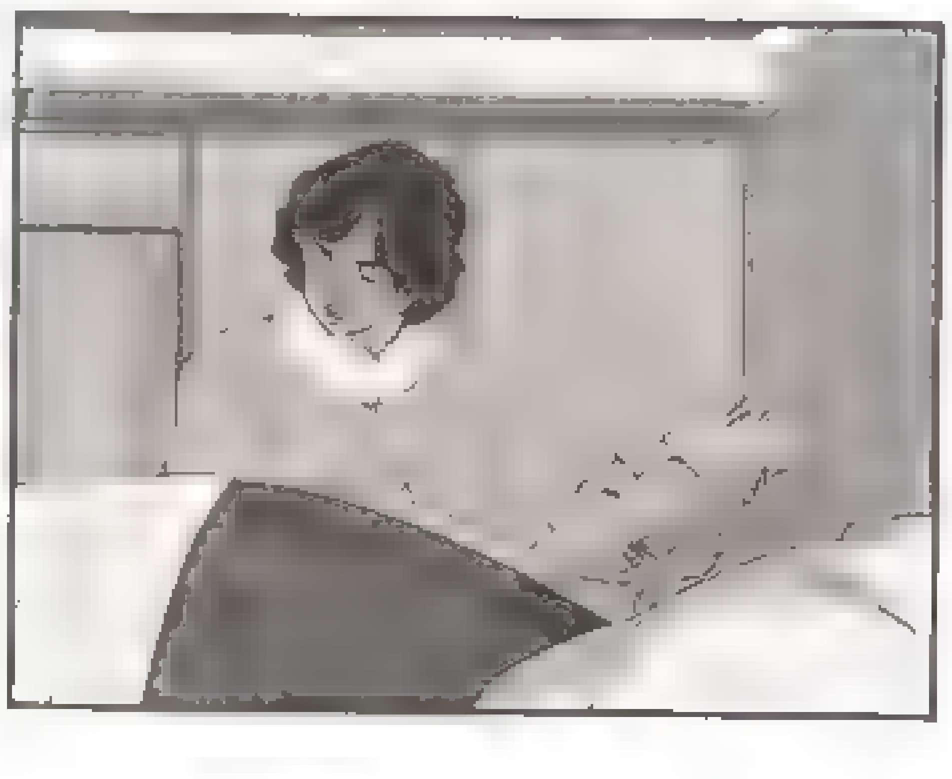
北極ポート近く
第8軍駐屯地
第8軍は北極ポート附近にありったけの兵力を展開、迫り来る解放軍を迎え撃とうと、大量の物資を集積していた。

★ラコックの打算（#68）
レックはラコックに、死に際のドナンの命令に少なからず混乱した。
[illegible]
と悪罵する。最初は人情主義と馬鹿にしていたラコックだが、連邦がたとえ敵であっても人道を重んじていると気づき、再会の労をとると返事する。

#69 ドナン・カシム死す

交渉のテーブルについてみたものの、ラコックはカルメルが相手にするには、あまりにも狡猾過ぎた。

【予告編】 まさに□星が□ 人類の危機を熟知 地球とデロイアに君臨したドナン・カンムが 動乱のさなか その生涯を終えようとしている 愛し 背き 恐れ 離れて いまやはり愛する父よ クリンの心は叫ぶ 会いたい


ドナンは最期までクリンの考えを認めなかったが、しかし理解はしていた。

【ストーリー】

北極基地ではラコックとカルメルによる、人民政府承認の署名会見が開かれていた。会見は終始和やかな雰囲気で行われたが、人民政府側の代表であるサマリンが姿を見せないことに強い疑念を抱いたラルターフは、一切をラコックの首位たち見抜き北極に残って取材を続けていく。

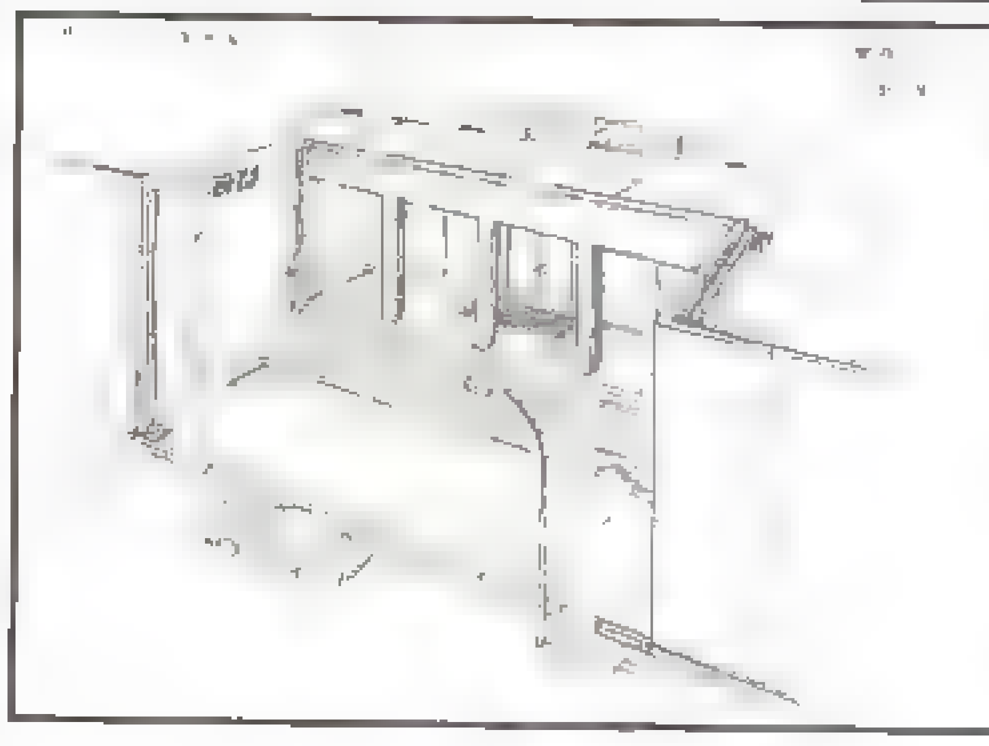
そこにフィナとセンビンが、デロイアにやって来たかと同時に、クリンも危篤のドナンに会うために連邦軍が寄越したヘリに乗って北極基地に到着する。敵同士にあるはずの父と息子の再会は、しかし予想外に穏やかなものだった。ドナンはクリンに己の信じる道を行けと告げ、愛するフィナに看取られながらその生涯を閉じた。クリンの最大の理解者は他でもない、最大の敵であった父ドナンだったのかもしれない。

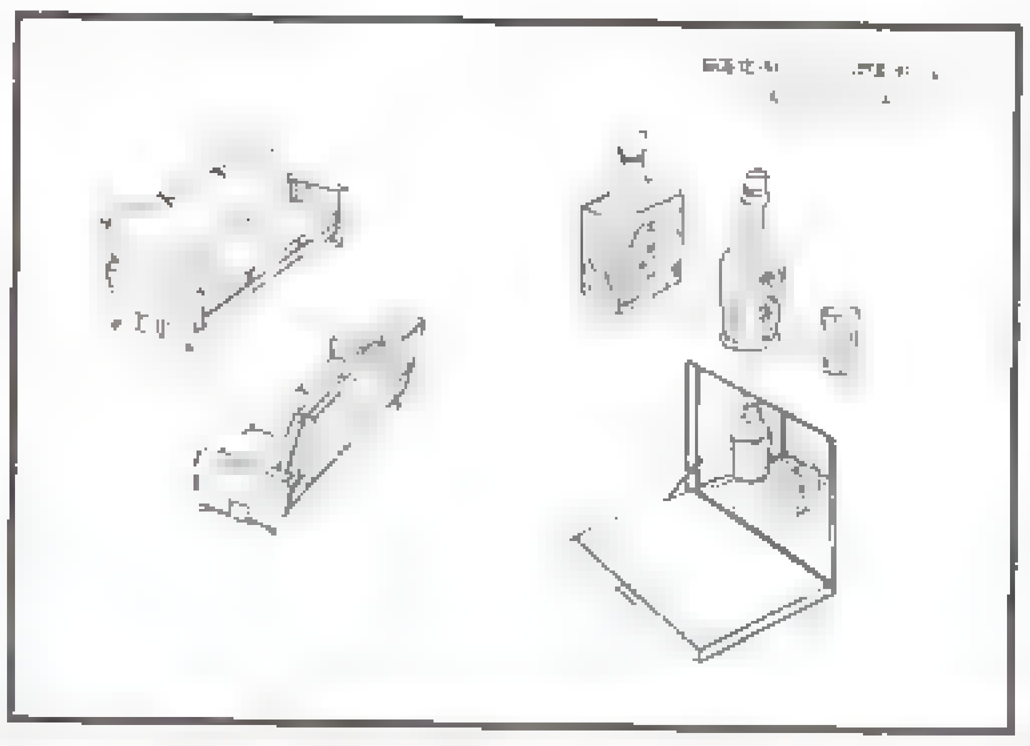
ドナン死すの報にラコックは笑みをうかべ、人民政府との講和を確かなものにするため、障害となるサマリンたち民派を政治的に封じ込め、来るべき新政権から排除すべきだとカルメルをそそのかしていく。問題はどうやって前線の兵士たちに講和を納得させるか、だった。解放軍兵士のほとんどは当然のことながらサマリンを支持しており、カルメルの計策には容易に従わないことは目に見えている。北極基地に用意された控え室の中で、カルメルは頭を悩ませるのだった。

そんな政治の暗闘など知る由もないクリンは、革命に進む北極の中に反発し敵対しつつも愛していた偉大な父が去っていく姿を見、滂沱のごとき涙を流した。

【ワンポイント】

世間体ばかりに気を回し、クリンを「親不孝者」と罵るラビンを登場させることによって、互いに敵でありながら認め合えたクリンとドナンの関係を見事に浮き彫りにしたスタッフの力は賞賛に値する。またドナンが死の寸前にクリンに語った言葉も、地球連邦評議会議長という要職にある者らしい、重みあるものだった。そしてドナンを尊敬ある政治家として描けば描くほど、ラコックとカルメルの矮小ぶりが際立っていく。こうした有機的連鎖反応を起こしていく作劇こそ、本作の真骨頂ともいえるだろう。


軍病院　正面玄関
北極基地の敷地内には、設備が整った病院が置かれている。ドナンはここで息を引き取った。


ラコックの部屋とウイスキーボトル
ラコックはカルメルに難題を勧められるが、これを断りウイスキーの水割りを飲んだ。

[illegible]わし自身がその代表的な人間であったかもしれん。やがてわしは心に決めた。地球80億の命を守る父親になろうと（中略）わしのやってき[illegible]えもサマリンも道を誤っている。人間の本質は変わっていない」
お父さんの考えは厳しすぎる、もっと人間を信じるべきだというクリンに、ドナンは厳しく[illegible]

#70 武装解除

【予告編】 歴史とは時の流れの必然　それとも神の気まぐれか
意外や人が仕組むのか　植民の星に妖怪が笑う
笛吹けば人は踊ると　妖怪が己の書いた筋書きに酔う

フィナはクリンを地球へ連れて帰ろうとするが、彼は「まだやり残すことがある」と拒否した

突然の独立達成と一方的な武装解除。納得できない若者たちは北極の空へ飛翔する

【ストーリー】

ドナンの影は地球連邦の旗に包まれて、フィナたち家族とともに故郷である地球への帰還の途に着いた。久しゅう会えなかった家族を見ぬりながら、クリンはドナンに告白なかったことをやり遂げてみせると、ひそかに心に誓ったのだった。

そしてドカ中の人民政府本部ではカルメルの側近か、サルノフたちに武装解除するように説得してほしいとサマリンに迫っていた。カルメル派は人民政府内で主導権争いが起きていることを内外に秘しておきたく、となればサマリンの軟禁を解き彼に解放軍を説得させるしかないと考えたのだ。その身勝手な物言いに、サマリンは自分は道化か、と驚くばかりしかなかった。

そしてサマリンは北極基地に連れてこられ、5日ぶりにカルメルとの対面を果たす。北極基地に駐屯する連邦軍の人員力を背景に、カルメルはサマリンに現実を見るべきだと詰め寄るが、サマリンは頑固に心しようとはしなかった。そこでラコックは計を案じ、フレナーに解放軍に対して挑発行動を行うように要請する。解放軍に停戦破りを行わせることでサマリンの決断を促し、また、交渉において有利な立場を得ようと企んだのだ。狙い通り戦闘へ、の挑発に耐えられなくなった解放軍兵士が発砲、口実を得た連邦軍はCBアーマーの大部隊を引いての全面攻撃を開始する。戦闘開始を知ったサマリンは即緑部隊を救うためにラコックに停戦を届けるのだった。

解放軍兵士たちはサマリンから独立がなったことを知らされ、武装解除を命ぜられる勝利の実感もなく、いまひとつ納得がいかなかったが結局、武装解除は粛々と進められた。と、同時にザルツェフは「戦破」の責任を問われて連邦軍に逮捕されてしまう。

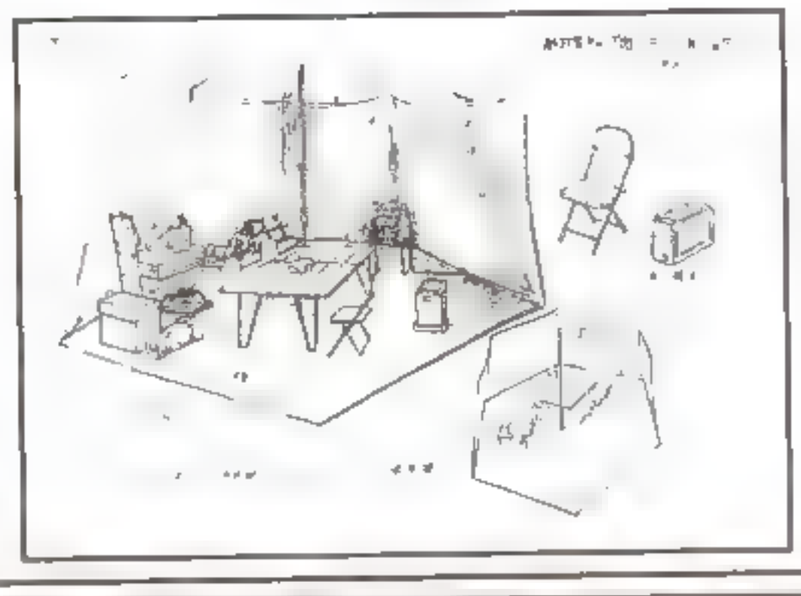
#71 粉飾の凱旋パレード

S.C.153、11月18日17時16分、和平のための仮調印が交わされると同時に、旧政府は撤廃、ここにデロイア独立は達成された。

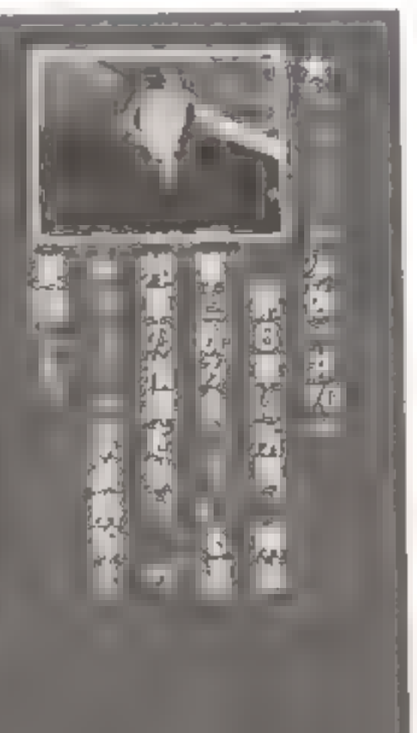
【ワンポイント】

フォン・シュタインが死に、ドナンが死に、確実に時代はラコックとカルメルという新しい輪に移ろうとしていた。しかし、盲人なダイナミズムを感じさせたドナンの政治姿勢に対し、ふたりのそれはひとく陰湿で卑小なものにしか見えない。その理由は是非はともかくドナンが私欲のためでなく、国民役に地球人優のために政治を行っていたのに対し、ラコックは権勢欲、カルメルは名誉欲でしかなかったためだろう。奇しくもこの図式は、現実世界における我が国の政治家たちの資質の変遷を想起させる。

解放軍キャンプ地
ドカの本部から停戦命令を受けた解放軍は、戦略上棒を目的にしながら全軍を停止させ、北極の地でキャンプを展開した。



解放軍キャンプ地　テント（内）その1
このテントの中に、解放軍の前線司令部が置かれた。



#71 粉飾の凱旋パレード

【予告編】 理想と現実　筋の流れが交錯し　より合わさる
歴史の事実が象られる　いまファンファーレが鳴り
デロイアの新時代の幕が開けられる
だが記された歴史の表に真実はあるのか

街には独立の功労者としてサマリン、カルメル、ラコックの肖像画が飾られ、市民は歓呼していた。

かつてカルメルと同格だったデスタンは、自分も日の当たる場所に出られる日が来たと言うが……。

【ストーリー】

北極ポートを目にしての突然の和平と、それに伴う武装解除は、初多くの解放軍兵士を戸惑わせたが、その混乱もすぐに収まり、兵士たちは故郷への帰還の途へ着く。でしてカーディナルでは、凱旋式典のパレードに乱入しようとした華やかさの裏で、ラコックとカルメルの陰謀はそうした華やかさの裏で、ラコックとカルメルの陰謀は着々と進められていた。密かにザルソーフは軍事務所に収監され、連邦軍は完全武装して空港に到着した解放軍兵士をまるで威嚇するかのように出現した。市民やメディアは歓声の声を上げていたが、街の中で武器を持って立ちしているのは連邦兵ばかり。なぜ中途半端に和平を結んだのか、納得できない一部の兵士たちはパレードに乱入しサマリンに疑問をぶつける。得意満面なカルメルとは対照的に、無表情な表情を浮かべていたサマリンはひもとかれ、具体的な和平交渉はこれからだ、と市民たちに語りかけた。

バノクスと再会した「太陽の牙」のメンバーは、その隠れ家でコックの死と独立闘争の実質的敗北を知らされ、巣を失う。さらに新政権は、ダグラムを革命の象徴として利用することで、ザルソーフをスケープゴートにした恥辱的な処遇を人々の目から逸らそうと画策しているのだと知らされ怒りに震える。

武器と燃料をハックスから得た「太陽の牙」は、義勇市民広場に展示されていたダグラムを、勝利にほくそ笑むラコックの目の前で強奪することに成功する。サマリンが世の中から忘れられた存在となり、世論に影響を及ぼせなくなるまでは、なにかあっても騒ぎは避けねばならない。ラコックは警備隊に撤収を命じた。

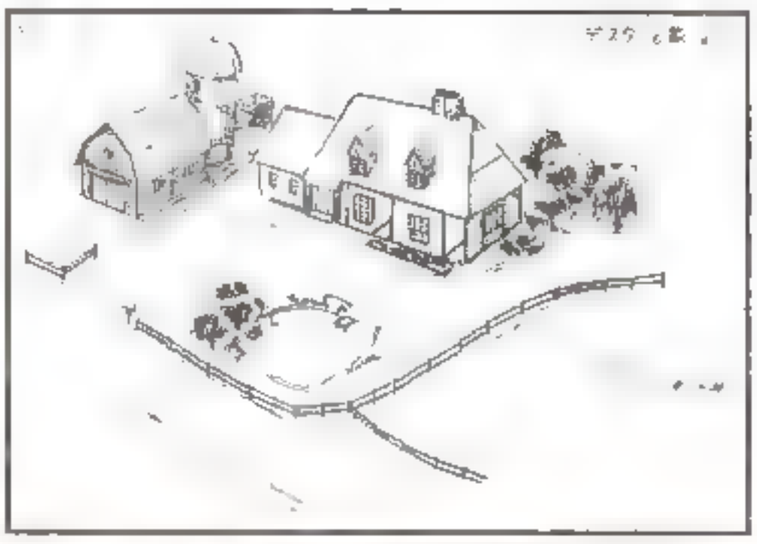
ほどなく郊外の森で迎えてきたブロック隊と交戦場面。アカンの乗るダグラムは危機的状況に陥るが、そこにJ・ロック隊が現れ九死に一生を得る。クリンたちはJ・ロックからカルメルの罪を知り、サマリンを助け出すことを誓う。

【ワンポイント】

ついに最後の導火線に火が点いた。ブロックはその野心に手をかけ、カルメルは新政府の事実上の代表となり、「太陽の牙」はブロックのもとドガ政変の真相を知って決起することを決意した。いくつもの導火線が火花散らし、一気に突き進む。

歴史は独り戦争の終わりとともに決算をはじめる。ソケを払うことになるのは誰か？戦争を描きながらも終戦に物語の帰結を次[illegible]ろに、本作の独自性、そして作劇の優秀さがあるのだと言えるだろう。

カーディナル市議事堂前広場
燃料と弾薬を抜かれたダグラムは凱旋パレードの終了後、トレーラーに載せられたままこの広場の中央に展示された。



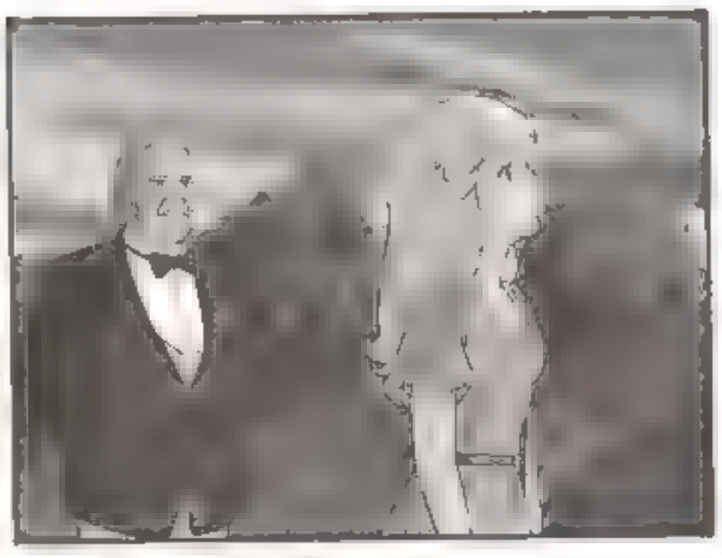
デスタンの[illegible]
カルメル[illegible]ナキを[illegible]た報酬で購入[illegible]と思わ[illegible]。ドライブイ[illegible]レストラ[illegible]の女主人たった[illegible]と[illegible]でいた。

★サマリンの演説（ギャ[illegible]）
もはや自由に発言することが出来なくなってしまったサマリンは、市民に語りかけるという形をとりつつ、言葉の端々に真意を滲ませながら[illegible]士たちにその真意――独立戦争の実質的敗北、そして新政権を厳しく監視せよというとの意志を伝えようとし[illegible]
[illegible]
[illegible]

#72 英雄奪回

【予告編】 時代に光を当てた英雄が　その光の作り出した影に
塗り込められようとしている　若者たちは願った
光にふさわしき人に輝きを　若者たちはまた走りはじめた
自分が走り行く先がどこかもわからず
だからこそ　自分たちの未来を指し示す人を求めて

ラコックは圧倒的な武力を背景に交渉を有利に進め、デロイアの独立を骨抜きにしようと企む。



独立記念パーティーでデイジーと再会した父モレアは彼女の生き方を認め、孤児院へ寄付を申し出る。

#72 英雄奪回　#73 沈黙する指導者

【ストーリー】

カルメルは旧解放軍のうち、北極戦に参加しなかったために武装解除されなかった第8軍の将兵からなる部隊を入口に投入し、ダグラムを人質にとった。太陽のオ　たちの行方をもったが完全にその行方を見てしまう……。

パックスは隠れ家にやってきたサナンとハックルから政変の真相を知らされると、ダグラムの燃料および武器弾薬の調達、そしてサマリンが軟禁されている場所の情報を入手するための行動を開始した。

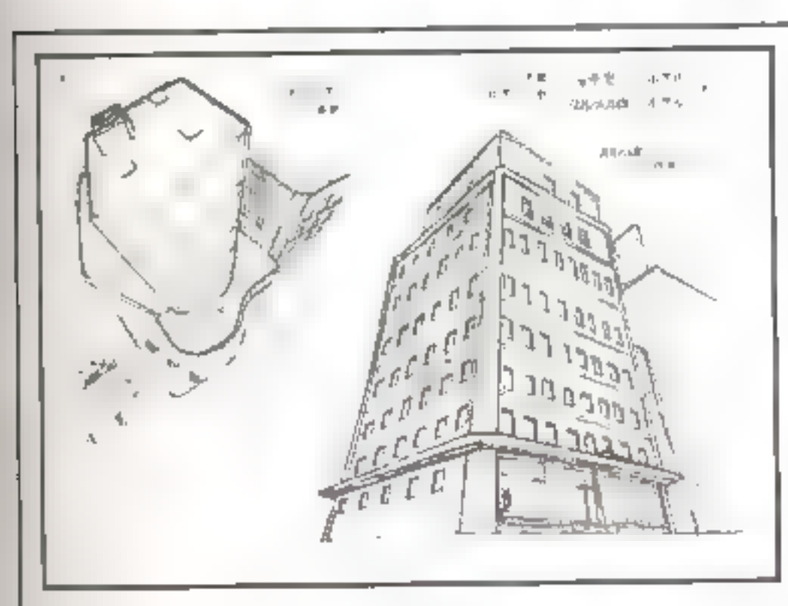
カクリンたち見張り組の処理を連邦軍の手を借りることなく、親政府のみで行うと決めたカルメルは、軍司令部にパックスの隠れ家を急襲させるか時すでに遅く、引き払われた後だった。

そしていよいよ本交渉がはじまるが、日[illegible]の[illegible]反というアキレス腱を持つデロイアは立場的に弱く、また武力を背景に好かないため強気に出ることも出来ず、ラコックに翻弄されるまま終始した。中行　て友好を強調するため、後には地球レデロイアの政財界の手[illegible]たちを招いての記念パ　ティ　が開催される。サマリンも功労者として出席するか、余計なことを言わせないためにすぐに岬の別荘に連れ去られてしまうだが陰から彼らを尾行する者たちがいたことはうまさもない、いまや政府の敵となったロキ　たち反抗組だ。

サマリンの軟禁場所を突きとめた彼らはすぐに行動を開始、ダグラムをハングライダーを用いて空から目標に接近する。目論見は図　あたり守備隊は混乱、その隙を突いてロ　キャーたちはサマリンの奪回に成功する。作戦の成功にクリンたちは久　ぶりに笑顔を見せるが、サマリンの心は[illegible]いまだ後ろ[illegible]れていた。

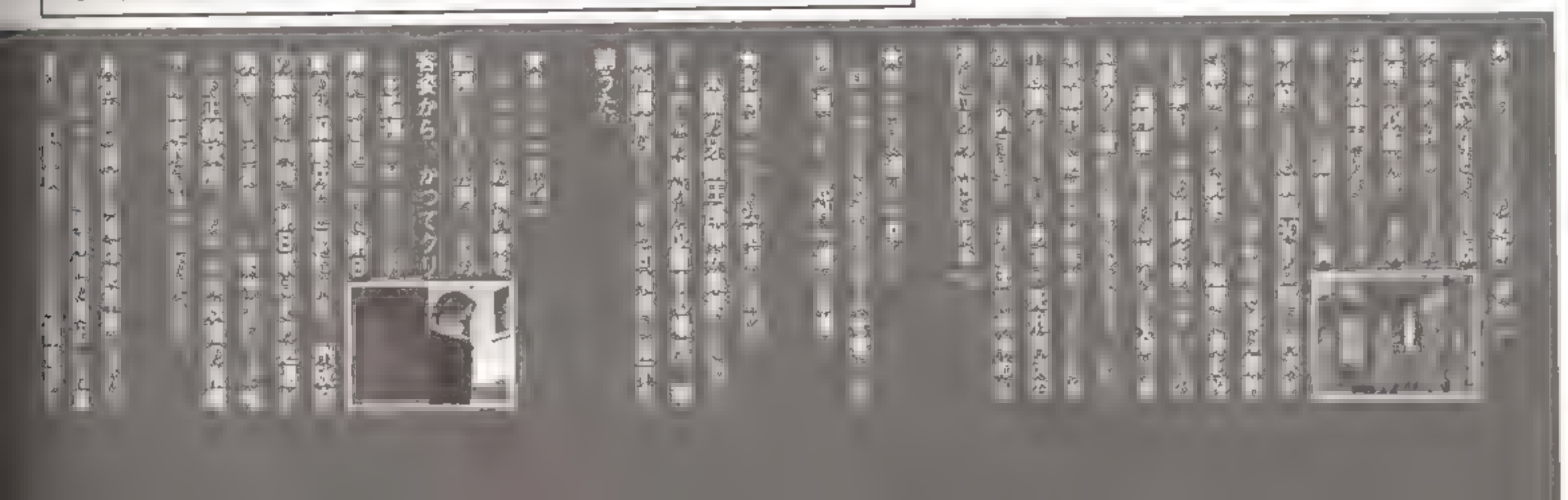
【ワンポイント】

独立運動最大の難関は実は宗主国を交渉のテーブルに着かせることではなく、その後に待っている交渉それ自体にあるといっても過言ではない。例えば第一次大戦後インドは宗主国イギリスを交渉のテーブルに着かせることに成功するが、それ以降　こそ苦難が多かった。ストレ　トな力の行使が主体となる武力闘争よりも、高度な政治的ゼンスや判断力を要する交渉技術こそ真の力量が問われるのである。安易な妥協を繰り返したカルメルに、果たして分なりはあるのか？



カーディナル市
リッチモンドホテル
デロイアの独立記念パ　ティーが開かれた。パ　ティーにはモレアも出席しており、ここでデイジーと久方ぶりの再会を果たす。

別荘
サマ　ンが軟禁されていた。造反事件が勃発したためか、守備隊　まCBガーマ　も配備されていた　守る　易く攻める　難し　難所である。



#73 沈黙する指導者

【予告編】 大樹のような人だった　熱く未来（あす）を語る人だった
だがその人の瞳は暗く　その時は黙然として
閉ざされたままだ　若者たちは戸惑う
何がどうなったのだ？
若者たちの声が砂漠に吸いこまれる

ラルターフは人民政府内部で主導権争いが生じ、サマリンはそれに敗れたのだろうと推測する。

デロイア治安軍はCBアーマーの大部隊を繰り出してまで、クリンたち造反組を追い詰めていく。

【ストーリー】

サマリンが造反組に身を取られたことを知ったカルメルは、政権の中枢は、相に動いた。このままでは女神聖堂がデロイア政府の言いなりになるとして、中央軍の同盟、撤退を求めた。そしてなぜ北極の戦場に姿を現したときに、政変が起きたことを教えてくれなかったのかとの問いに、あの時すでに北極基地は連邦軍の増援が到着しており、万に一つも勝ち目のない大敗だった。真実を喋って若者たちを死に追いやるよりも、嘘をついてでも生き延びてほしかったのだとサマリンは訴え、だが絶望な若者たちは、その言葉は欺瞞めいたものにしか聞こえなかった。

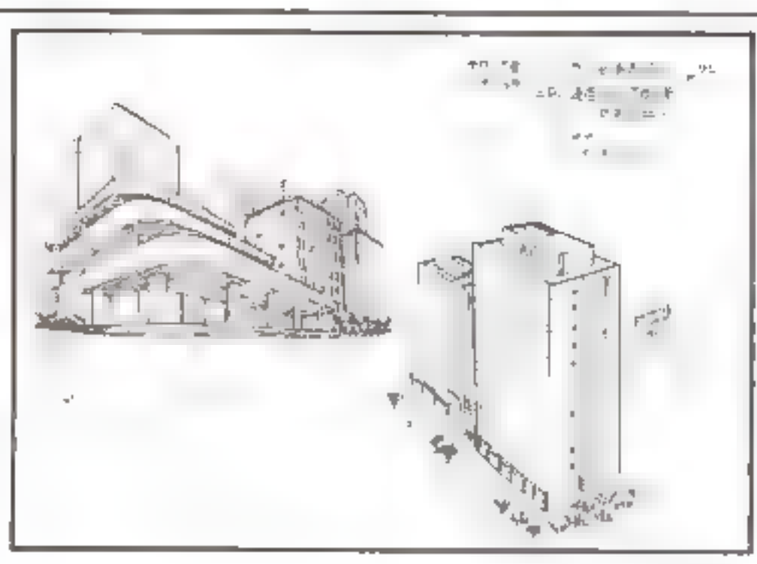
ここでカルメルを認めたら、独りを認めたら、これまでたんこぶの仲間たちに申し訳がないと、チコは怒りに身を振るわせながら言う。

カカーディナルで進んでいる交渉は、完全にラコノクにその主導権を握られており、このままでは独立が形骸化させられてしまうことは明白だった。

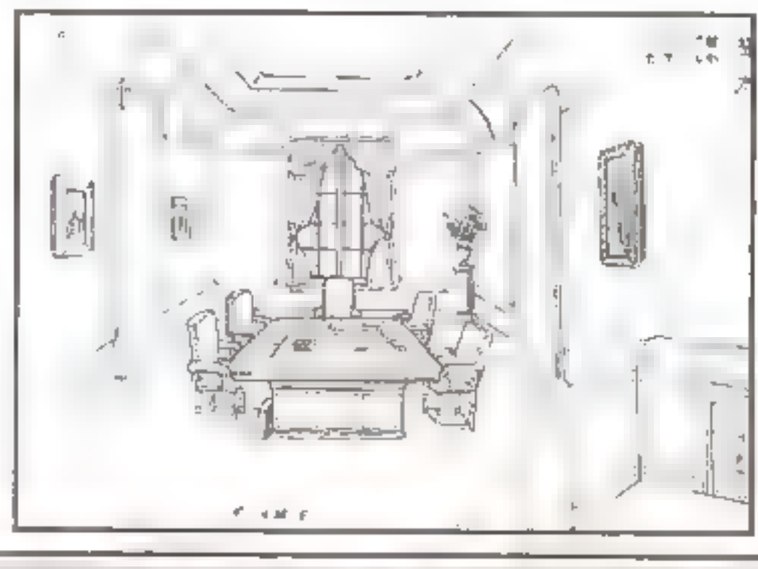
再び迫害の戦いが再開された。クリンたちは最切り者カルメルを討つまで戦おうと決意していたが、衆目敵はすべて不利な状況にまい込まれていく。

【ワンポイント】

頑なな真実を求めるクリンたちの姿には、眩おしささえ感じられる。彼らは休戦のゲリラだが、年齢的にはまだハイティーン、現代の日本で考えれば高校生に過ぎないのだ。老け顔のチコでさえ成人前である。そう考えれば彼らの思いは理解できるし、若者なのだ、こうあるべきの情熱は持っていて然るべきだろう。サマリンにしても彼らのそうした自己さやあ、自分たち人人が失った輝きを感じていたのだろう。だからこそサマリンは、命をかけての助命を行ったのだ。



APU通信デロイア総局
レストランのあるビル
デイジーはこのレストランで、太陽の牙の造反を知る。APU通信デロイア総局はご存知ラルターフの職場。彼はここを拠点に人民政府の方針転換の謎を追っていた。



カーディナル市　議事堂
第2会議室
毎日毎日のフロックを相手に、政治の渦中に巻き込まれていくこと、弱腰だったカルメルまでもが本当の「政治家」へと変貌していく。

第一項には「デロイア国民が自国の政府を得られるよう、連邦評議会によって保証された選挙」を通じ、デロイアを搾取していた企業を保護しているといったことが

球側に大きな反発を招きかねない

り組くには一本道を通るしかなく

★ダグラムの飛行（#72）
バックスがかつてソルディックに使用したCBアーマーの

入手。これをダグラムに装着し空から別荘に侵入した。

★第8軍のその後（#73）
8軍は解体されるがそのほとんど

設立された際にはそのまま編入させるとなっている

は暫定的存在で

軍に属っている

★ラルターフ情報（#73）
真ってのは聞こえはいいが、実く言

#74 大いなる説得

【予告編】 現実というものが　こんなにも味気ないものか
時には絶望という情念の落差が　方向性を持たぬ
疾走を生む　暴走　止めなければならぬ
命をかけても　それが残された我が使命

【ストーリー】

ロッキーたちの反組への攻撃は、彼らの行動が和平交渉を危うくするものだとして苛烈を極めた。ダグラム、「太陽の牙」J・ロック隊は必死に抵抗するが衆寡敵せず、徐々に押されていく。その様子を沈痛な面持ちで見ていたサマリンは、最年少のビリーが負傷するに至り、若者たちの助命をカルメルに請うことを決意、J・ロックとともに戦場を離脱する。しかし何も知らないロッキーたちはふたりが命惜しさに逃げ出したと思い、大人という存在への不信感を抱くのだった。

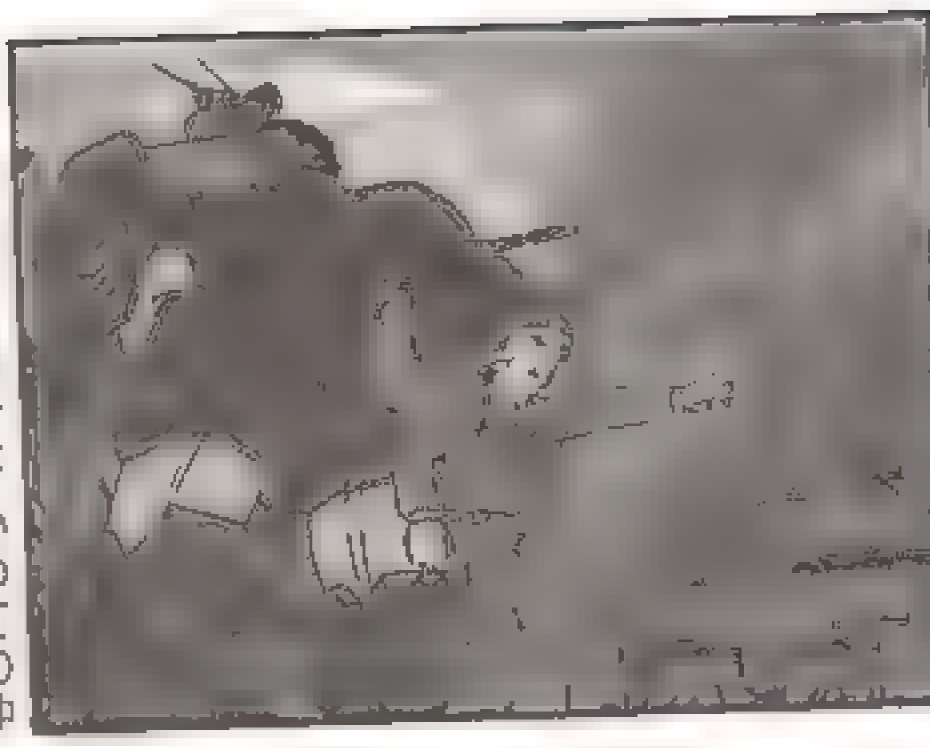
議事堂へ辿り着いたサマリンは脱出時に負った傷の手当さえ拒い、カルメルへ攻撃を中止してほしいと懇願する。最初は言下に却下したものの、自分の気持ちを押さえてのサマリンの願いにカルメルは攻撃中止を命令した。そして全滅を免れたロッキーたちは、バックスの「[illegible]てくるまで待て」との言葉を振り切り、「太陽の牙」だけで戦場から離脱してしまう。

その頃カーディナルでは、サマリンからの要請で攻撃を中止させたことを知ったラコックが、いったい政府の代表は誰なのかとカルメルを詰問していた。ラコックは彼の計画を破壊しかねない「太陽の牙」を一刻も早く始末したかったのだ。カルメルは、事はデロイア内部の問題であり、国家の主権を侵す内政干渉は謹んでほしいとはね退ける。だがラコックは、まだ我々は管理能力を持ってから言って欲しいと嫌味をぶつけ、連邦軍に出撃命令を下した。

一方、砂漠の岩場に逃げこんだロッキーたちを追いかけて、サマリンたちがやって来た。頑なな態度を崩さなかった彼らも、サマリンが危険を押してカルメルと話をつけたからこそ敵の攻撃が止んだと知るが、すでにサマリンの体力は限界に達していた。最後の気力を振り絞り、サマリンは死に急ぐクリンたちを諭し、そして未来を担うことの大切さを説き、静かにその目を閉じた。サマリンの死に涙するクリンたちの前に、連邦軍の別働部隊が迫りつつあった。

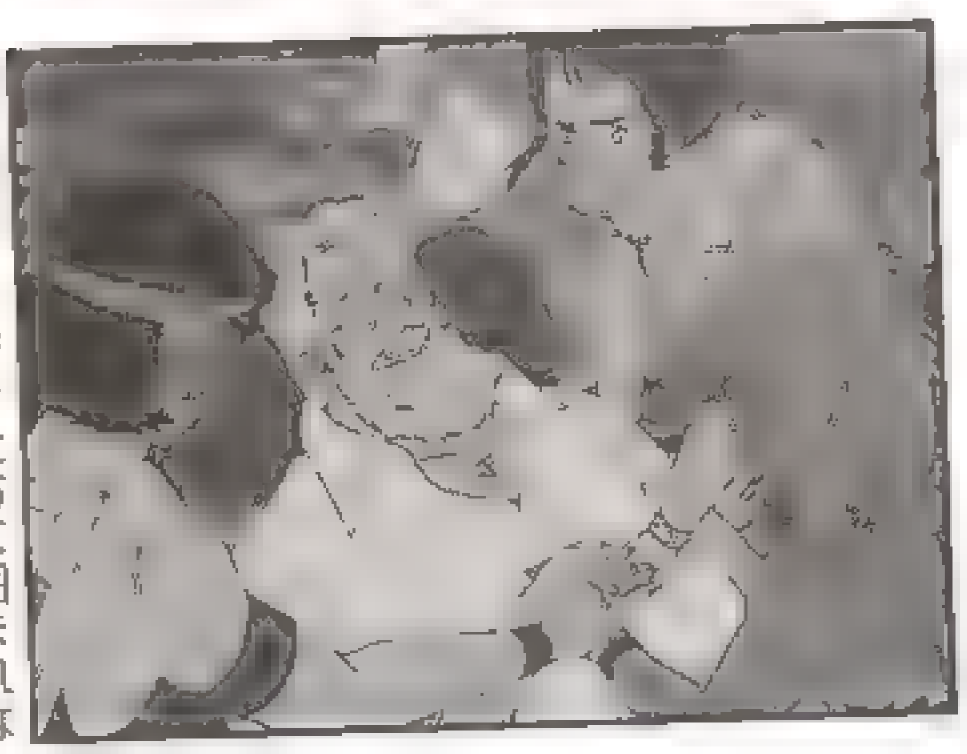
【ワンポイント】

サマリン死す。クリンたちに出会った最期の言葉は、ドナンの最期に勝るとも劣らない力強さと説得力に満ちている。彼は自らが認めたように、ドナン同様大人間の本質は変わっていないことを認めたが、しかしクリンたち若い世代の持つ素直さ、潔癖さ、希望を見出し、静かにその人生の幕を閉じた。求める未来を信じて死を迎えたものの、その死は満足の行くものだっただろう。それこそ軟禁状態に置かれて世間から忘れ去られ、死人のように生き長らえるよりは、はるかに良かったのではないだろうか。



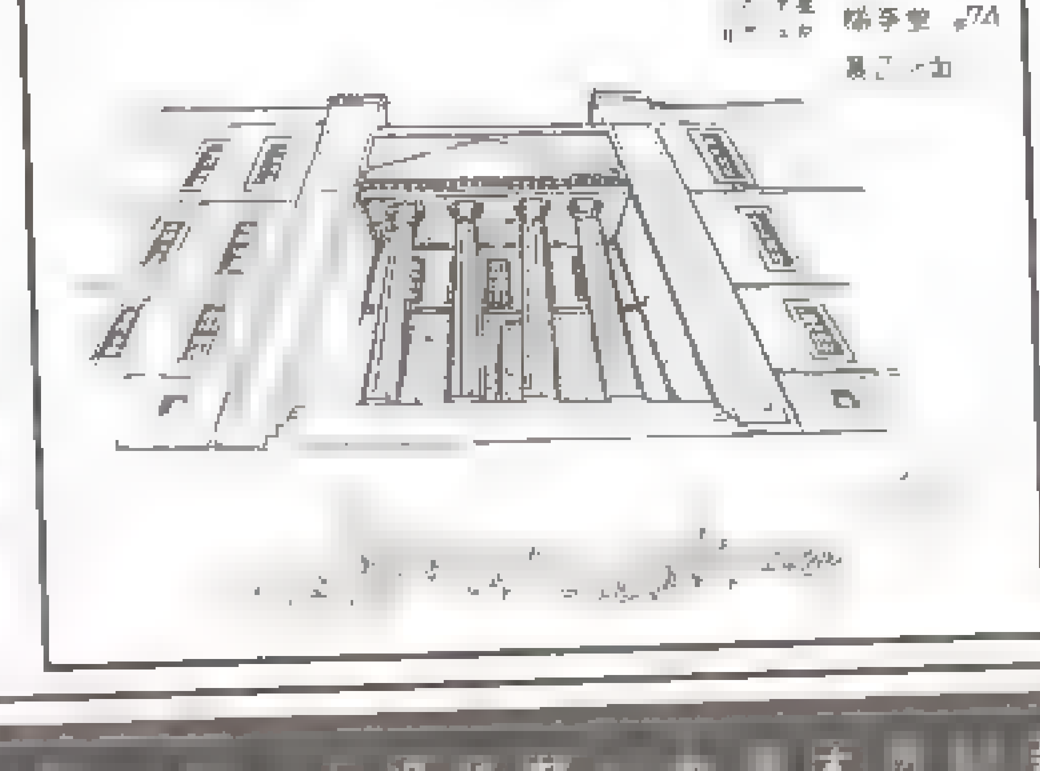
クリンたちの造反は、かつての仲間同士が銃火を交えるという最悪の事態に発展していってしまう。

サマリンは命を賭してカルメルに談判し、なんとか「太陽の牙」への攻撃中止の約束を取り付ける。



彼を敬い慕う若者たちに囲まれながら、デロイアの巨人サマリンは静かにその生涯を閉じた

カーディナル市
議事堂裏口正面
独立正規軍の偽装クーデター、州政府の誕生、そして和平交渉など、様々なドラマが繰り広げられた議事堂はなにを思うのか。物言わぬ彼は、この先も静かに佇んでいくのだろう。



[illegible] 人間が人間である限り、全くの不 [illegible] ら一方に偏ることであり、それは [illegible]

現在開発可能な惑星は三つ。うちひとつ [illegible]

地球企業は同星の開発の見通しがつき次第、縮小の方向へ持っていくと [illegible] するつもりか、との反発が生じたが [illegible] 邦軍を北極基地に駐留させる代わりにすぐに地球企業の4分の1を撤退させ、残りはデロイアに譲り渡すと申し出る。

★バックス語録（#74）
[illegible] たと思い [illegible] 大人への不信感を露わにし [illegible] 博士たち大人が [illegible]

#75 燃えつきたあとに

【予告編】 大いなる滅のような人は笑顔を残して　海のような豊かな人は志を託して　炎のように熱き人々は叫びを残して　昨日までの時代を動かした人たちは去っていった
いま立ち止まり　静かに　そして熱く振り返る時

圧倒的な敵を前に、それでも膝を屈しないダグラム。だがやがて武器弾薬も底をついてしまう。

【ストーリー】

圧倒的な火力をもって、独立を認めようとしないクリンたち反動分子を抹殺せんとする第6軍に対し、「太陽の牙」たちはサマリンの死を無駄に終わらせないため、絶対に生き延びることを決意する。先ほどまでの自暴自棄な戦いとは違う、生き抜くための戦いがはじまった。

同じようにカーディナルでも、生まれたての新政府が生き残るための戦いが幕を開けていた。ラコックがデロイアに断りもなく軍を動かしたことに対し、カルメルはこちらもそれ相応の対抗処置、つまり実力による連邦軍の排除を行わざるを得ないと告げる。

日陰者だったテスタンは表舞台に出たいと、ラコックの前に姿を現し独立の分け前を要求した。

「お好きなように」と感慨無量に応答した。

実力排除を実行した場合、一歩間違えば地球との全面戦争になりかねない。だがもはや事態は「太陽の牙」がどうこうというものではなく、デロイアの主権を掲げた政治闘争と化していたここに至り、カルメルの脳裏に、サマリンの「自分の信じる道を、まっしぐらに生きろ」という言葉を思い出したのだ。

増援が加わった連邦軍の攻撃は、より一層に苛烈さを増していった。もはや撤収も底を尽き逃げ場もなく、クリンたちに破滅の時が近づいて来ようとしていた。だがそこに治安軍が出現、連邦軍に撤退を要求する。だが連邦軍も撤退であるラコックの命令で出張ってきた以上、おいそれと退くわけにはいかない。

両軍はクリンたちの潜む岩場を挟み、一触即発の睨み合いになる。しかしこの状態も長くは続かなかった。カルメルとラコックが死に直面したテスタンが、義侠心の一面を見せてテスタンに射殺されたのだ。

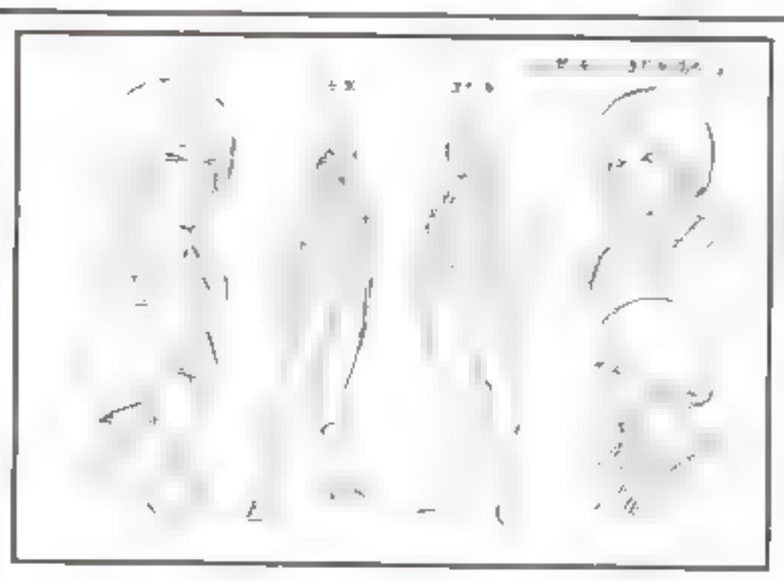
情勢の変化を受けた連邦軍は撤退し、J・ロックもバックスとともに何処かへと去った。そして「太陽の牙」はこれまで一緒に戦ってきたダグラムやEガンを野火にふすことで自らの牙の落とし前とし、その戦いを終えた。

ディナーは孤児院のために、ブルターフは新政府の行方を見守るためにデロイアに残った。クリンは「年経ったら戻って来る」という「帰郷」と共に、地球のフィナの元へ一時帰郷した。

「もう、どこへも行かないでおくれ」と言う母に抱かれながら、クリンは亡き父の「自分の信じる道を、まっしぐらに生きろ」という言葉を思い返していた。

――砂漠で眠る朽ち果てた鉄の巨人。

鉄の肌は焦げ、鉄の胸は力を失い、地もれた砲は二度と火を噴くことはない。狼も死だ。



治安軍隊長　連邦軍隊長
双方とも「太陽の牙」最後の戦いで登場。治安軍隊長はダグラムの自爆を見て敬礼を捧げた。

カシム邸裏庭
フィナ・カシムのロッキングチェア
エピローグ前のシーンに登場。ラビンもロイルも家を出たため、フィナはひとり寂しく物思いに耽っていた。

■サマリンの最期（#74）
カルメルを許せないという言葉を理解できる。しかしこのままでは待っているのは破滅だ。
「わざわざ死を選ぶ理由は、[illegible]」
[illegible]がこれからどう生[illegible]暗君「新しい生き方を見[illegible]」
[illegible]のもひとつの生き方（中略）新たに開拓される星へ行き、そこ[illegible]
[illegible]大人たちを乗り越えて、新しい人間社会を創るのだ。
[illegible]対抗するには地球のやり方で応じて[illegible]

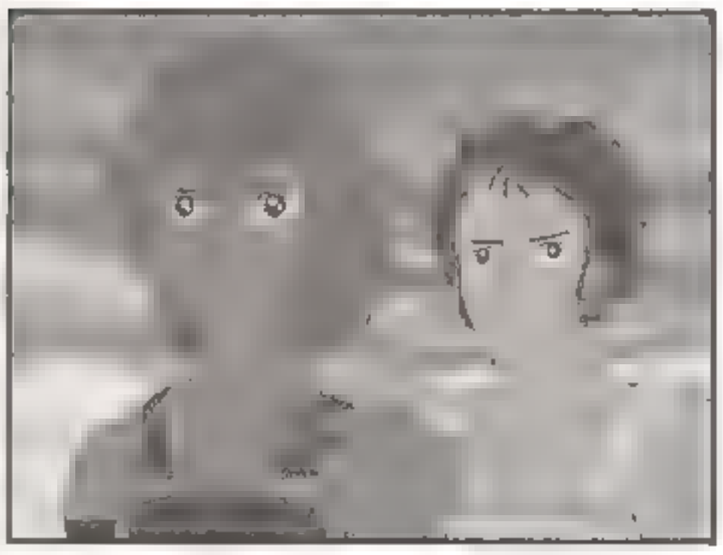
#75 燃えつきたあとに

んた、獅子も死んだ。だが砂漠の太陽に晒されながら、日人は確信していた。若者は今日も生き、若者は今日もまた、いると。二人は、若者のような闘いた。吹き渡る砂漠の風の中に、確かに、聞いた。

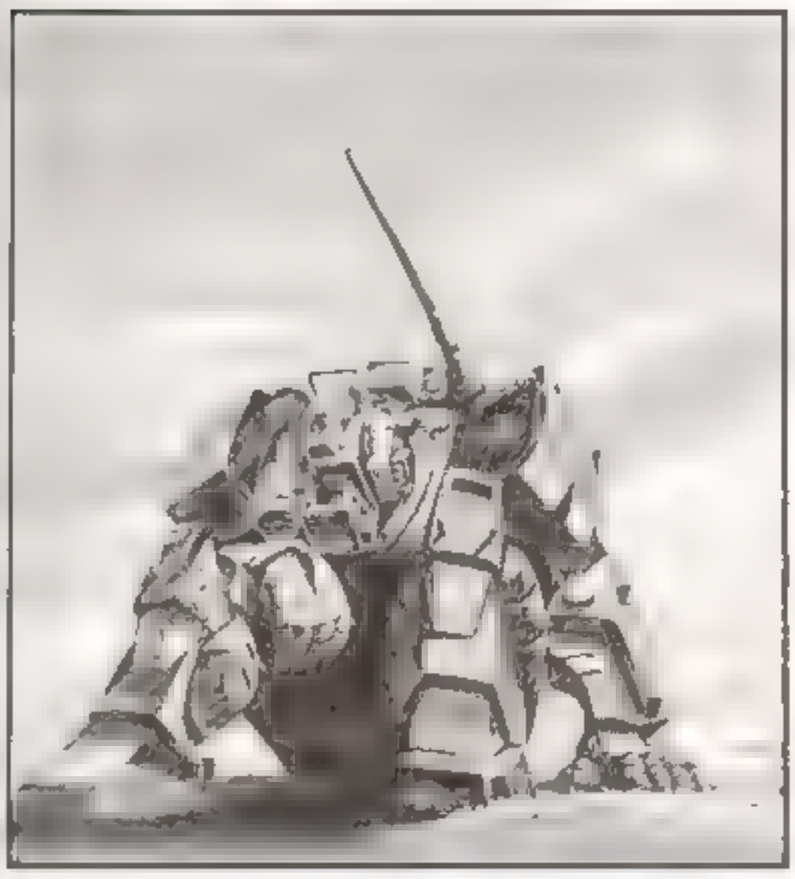
【ワンポイント】

ラコックの「殺人」という予想外の事態によって、会議、とも6軍の武力衝突は回避され、クリンたち、大陽のオ一もl年半近くに及んだ戦いを終えた。長舞台に立ちたがったデスタンは、ラコックの殺犯としてファロイアの歴史に永遠、その名を残すに違いない。敗国の英雄、あるいは一度の裏切りを働いた二ダとして、叔

権力の絶頂を極めんとしたその時、予期しない死がラコックを襲った。



武器を手にして戦う時は終わった。人生という、新たな戦いがロッキーたちを待っている。



砂漠に佇む、朽ち果てたダクラム。若者たちの戦いも、歴史の1コマになっていくのだろう

力場でいったいどこまで事実が明らかにされるのか、興味はつきない。もしかしたらカルメル政権は、いずれ政権になるかもしれない。

そして武器をおいたロキーたちはどこへいくのだろう。カーディナルの家族のもとへ帰ったのか、それともいまこの瞬間、ダクラムは統一軍に対抗する行動に出たという一旨の一報を発しているが、できれば、あの若者たちがその後のような人生を歩んでいったのか、いつの日か聞いて欲しいものである。

■ラコックの最期（#75）

余裕綽々と議事堂の正面階段を上る

解放への苦闘と若者たちの挫折

〜デロイア独立戦争史〜

1世紀半の長きにわたり、地球の植民地として苦渋の歴史を歩んできた惑星デロイア。本稿では多くの若者が自由と真実を求めて戦った540日を追う。

カーディナル事変

デロイア独立戦争のはじまりは、一般的にはデロイア第8軍司令部付き参謀のフォン・シュタイン大佐による司令官ダンロック中将暗殺に伴う決起が発生したS．C．152年10月1日とされている。彼は独立派将兵を率いて独立正規軍を名乗り、デロイア星の首府カーディナルの議事堂を占拠、連邦評議会に参加していた評議員たちを軟禁状態に置き、評議会議長ドナン・カシムに対しデロイアの独立を迫ったことで知られている。

しかし連邦政府の対応は早く、数日を経ずして地球のメトール州第6軍のレーク・ボイド大尉を指揮官とする救出部隊をデロイア星に送りこんだ。彼は議事堂からの脱出に成功し連邦軍に保護されていた、当時カシム議長の補佐官を務めていたヘルムート・J・ラコックからの情報を基に救出作戦を策定、自らCBアーマー隊を含めた別働隊を指揮し反乱軍鎮圧に向かった。周知の通り救出作戦は見事に成功、独立正規軍は速やかに制圧され人質も解放された。このときフォン・シュタイン大佐は、自治権を持たない植民地だったデロイアを、評議会に議席を有する第8番目の州として認めさせることこそ真意であり、連邦からの離脱は望んでいない、独立を画策する議員たちにそそのかされたのだと弁明した。

カシム議長は彼の弁明を全面的に受け入れ、今回の事件の原因は独立派議員にあると、作戦に同行した記者に語った。しかし首謀者とされた独立派議員たちを反逆罪に問うことはせず、それによって地球側にデロイアへの報復攻撃を思い止まらせるとし、同時にデロイア側の責任者であるフォン・シュタイン大佐も免罪され（独立正規軍は即日解体）すべては旧に復した。時にS．C．152年10月6日、カシム議長は議長権限でデロイアの州立化を約束（数日後に再開された連邦評議会で承認）、代表にはフォン・シュタイン大佐を選んだ。

以上がカーディナル事変と呼ばれるデロイア州政府誕生の顛末であり、前述した通り、これこそ独立戦争の発端だと言われている。

確かにそれは正しい物の見方だ。S．C．153年2月23日に独立運動を非合法とした自治州法が発布されて以降、独立派勢力に対する締め付けが強くなっていく一方で、後に「太陽の牙」と呼ばれる武装グループがCBアーマー「ダグラム」を擁して連邦軍にゲリラ戦を挑んでくるなど、それまでの規模をはるかに越える武力衝突が頻発したことは間違いのない事実である。

しかしそれらは統制された軍事行動ではなく、所詮小規模のゲリラ勢力が行き当たりばったりに起こした事件に過ぎず、独立戦争の「前史」とする方がより本質に近いのではないかと思われる。

そこで本稿では、独立派ゲリラと州政府というふたつの勢力が本格的に衝突した第一次ドガ市攻防戦を独立戦争のはじまりと考え、ここから独立達成までの歴史を語っていこうと思う。ただこれは、あくまでひとつの物の見方を提示したに過ぎないことを断っておく。

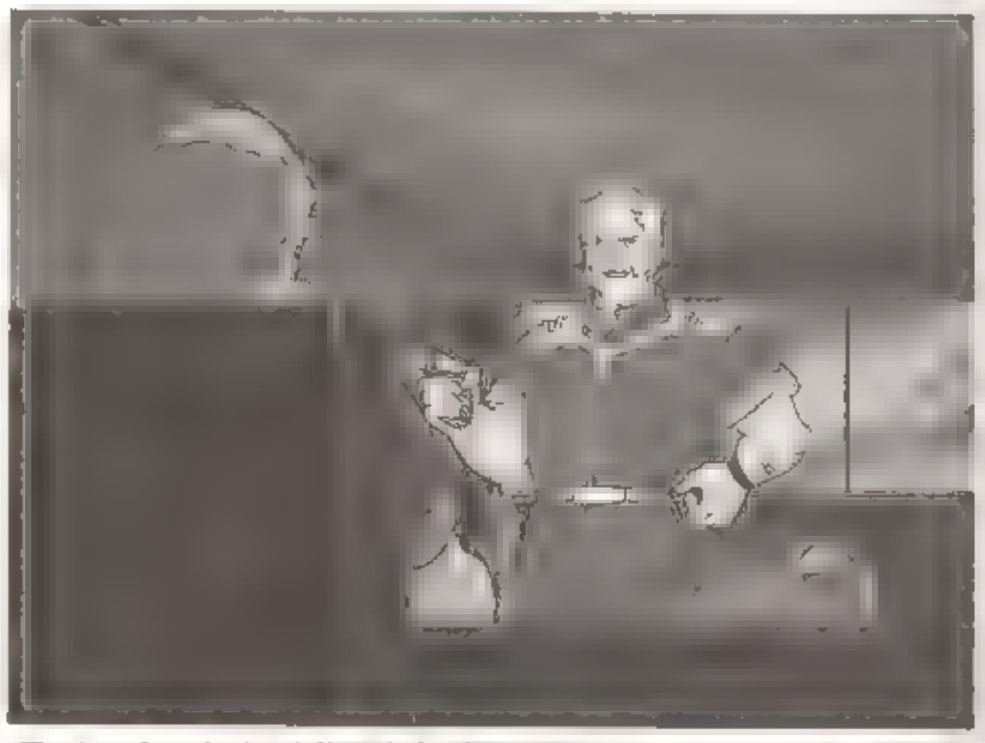
敗北からの出発

地球の穀倉地帯と呼ばれるパルミナ大陸は、農業と鉱物資源の採掘を主産業としており、カーディナルのあるメインランドに比べて工業化が遅れていた。パルミナの全人口3億のうち約8割が農業で生計を立てているが、その9割が地球系企業の土地を借り受け耕作に従事、収穫した作物を安く買い叩かれているのが現状だった。驚くべきことに、自作農は1割にも満たなかったのである。工場労働者も似たようなもので、安い賃金で長時間の労働を強いられ、不平不満をもらせばすぐに解雇されたという。職を失うと再就職はひどく困難で、もはや連邦軍へ入隊するしか道はない、という有様だった。

このような状況下では、不満が蓄積されない方がどうかしている。事実、パルミナのゲリラ勢力の多くは経済的弱者の代表格の農民であり、長年にわたって地球系企業に搾取され続けてきたゆえに、地球＝州政府に対する反発や不信は、他の階層とは比べるべくもないほど根強かった。

徹底したゲリラ狩りによって組織の再編を余儀なくされた、独立運動の指導者的立場にあったデビッド・サマリン博士がパルミナを再起の場所に選んだのも、こうした背景が存在していたからだと推測される。

サマリン博士は農民ゲリラの大物フェドール・ノキオの招きに応じて、「太陽の牙」と共



フォン・シュタイン大佐は決起の要請を容れないダンロック中将を射殺、ここにデロイア動乱の幕が上がった。

デロイア独立戦争史 ～解放への苦闘と挫折～

アの星」「太陽の牙」を残して事実上の壊滅状態にあったのだが、指導者を失ったノキオ派ゲリラを取り込んだことで、瞬く間に組織の再建を現実のものとし得たのである。さらにこの敗北は教育効果をゲリラたちにもたらした。

一の実戦は百の演習に勝るとは良く言ったもので、生き残ったゲリラたちはたとえ小規模であっても軍事行動には計画性と秩序だった指揮系統、そして十分な火力が欠かせないことを自らの体験から学び取ったのだ。彼らはそれを以後の教訓に活かすことで、ドガの敗北を単なる失敗に終わらせず、後日の勝利へと繋げていったのである。

人民解放軍の誕生

サマリン博士は山村に隠れながら、周辺のゲリラグループに連帯を呼びかけていった。バラバラだったゲリラグループを糾合したことで、独立派ゲリラ組織の立て直しの見通しがつくと、次に州政府の後ろ盾になっているメドール州と対立関係にあるコホード、ミンガス、ローディア三州が共同経営する鉱山があるアンディ盆地への入山を果たし、この地を拠点に人民解放政府樹立の準備を進めていった。

三州は大量の資本をパルミナへ投下しているのだが、その分当地の経済には不可欠な存在になっており、たとえデロイアが独立しても不利益を被る可能性は低かった。いや、それどころか、彼らはデロイアにおける経済的主導権を、メドールから奪うことになるとの考えを巡らせていた。三州からすれば、サマリン博士の独立闘争はむしろ歓迎すべきものだったのである。利害が一致した両者は水面下で手を結び、鉱山経営陣は連邦軍の入山を拒否することでゲリラを匿い、サマリン博士は独立の際には三州に最大限の便宜を図ることを彼らに約した。

こうしてゲリラの解放区となったアンディ盆地には各地から続々とゲリラが集結しはじめたが、特筆すべきは第8軍でダグラム追討の任に当たっていたジャッキー・ザルツェフ少佐の解放軍への参入だろう。

ザルツェフ少佐は第8軍屈指の戦術家と呼ばれるほど優れた手腕を誇る軍人で、これまでにも幾度となくゲリラたちと激闘を繰り広げてきた（特に「デロイアの星」J・ロックとの戦いは良く知られている）。しかし人間関係に頓着せず、とにかく任務達成を第一と考えるために常に周囲との摩擦が絶えず、司令部の中にも彼に反感を抱く者は少なくなかった。

彼はフォン・シュタイン大佐からダグラム追討を命ぜられていたがこれに失敗、査問会から少尉への降格処分を申しつけられた挙句にゲリラとの内通を疑われ、軍刑務所へ収監されることになったのである。

これを知ったサマリン博士は解放軍の参謀部門を強化するチャンスと見て、J・ロックを使って彼をヘッドハントしたのである。誇りある軍人から、日に日に御身大事な政治家へ変わっていくフォン・シュタイン大佐に愛想を尽かせた少佐は、過去の経緯を捨て去って解放軍への参加を承諾した。

少佐の軍事参謀就任は、CBアーマーを得る以上の戦力強化をゲリラにもたらした。一匹の狼に率いられた羊の群は、一匹の羊に率いられた狼の群を凌駕するという古い諺が地球にあるが、まさにその実例といえた。火力で劣る解放軍はザルツェフ少佐指導の下に、その特性を活かしたゲリラ戦に徹して連邦軍を翻弄、少なくない戦果を上げ続けたのである。

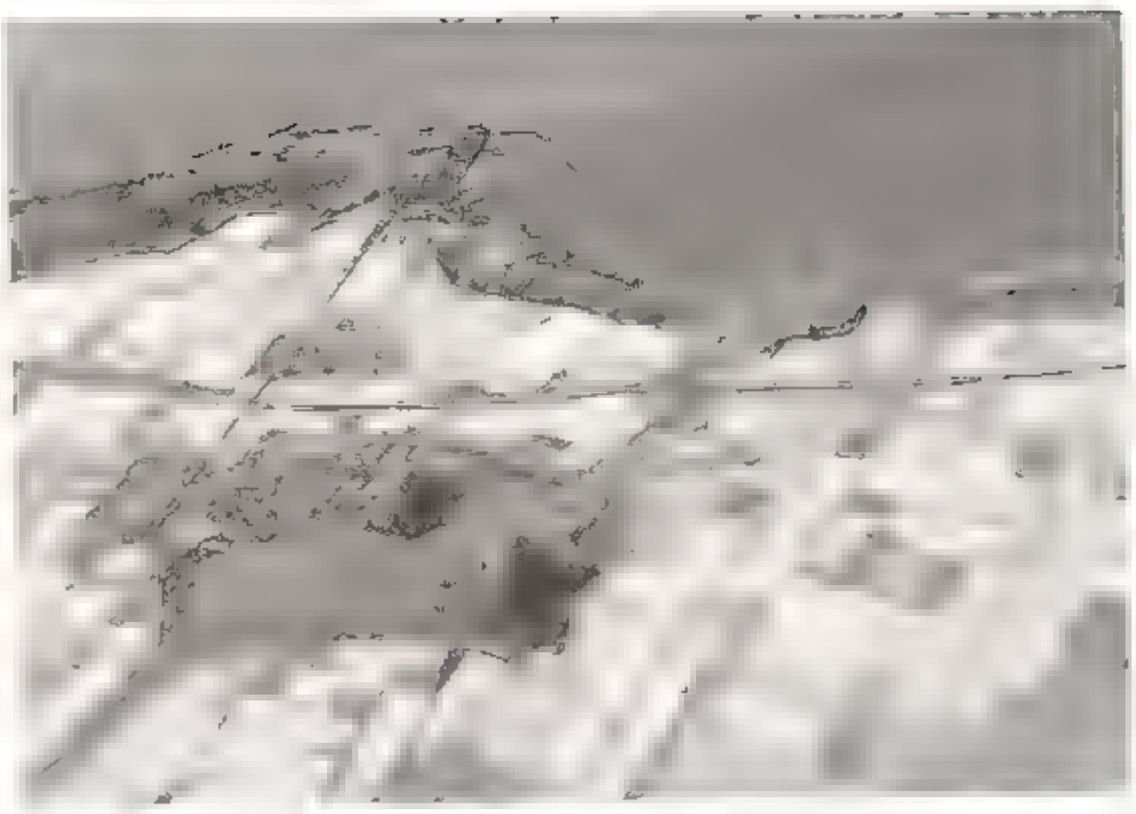
やがて解放軍の組織編成も終わり、事は十手にノキオをリーダーとするゲリラ部隊に合流した。ノキオ派ゲリラは近くドガ市攻略を狙った一斉蜂起を計画していたのだが、伝え聞くところによるとサマリン博士は時期尚早であるとし反対票を投じていたという。しかし農民ゲリラたちの士気は限界点を越えてしまっており、引き返すことなどもはや無理な話だった。結局サマリン博士が押される形で計画は実行に移されたのだが、その結果、ゲリラ勢力は独立戦争史上、稀にみる規模の大敗北を喫することになる。

市内への突入にこそ成功したものの、連邦軍が繰り出してきた重CBアーマー、ブロックヘッド隊の攻撃を受けゲリラはほぼ全滅、リーダーのノキオも銃撃を受けて戦死した。たとえ勢いに乗っているといっても、所詮は正規の軍事教育を受けていない農民、戦闘のプロに率いられた連邦軍と正面から戦って勝てるわけがなかったのだ。しかも防衛の指揮は、カーディナル事変で優れた指揮能力を見せたレーク・ボイドが執っていたのだ（カーディナル事変での戦功によって少佐に昇進）、万にひとつも勝てる道理はなかった（彼はその手腕を見込んだカシム議長の肝いりで、サマリン博士たちがパルミナへ渡ると軌を一にするかのごとく、パルミナ行政官に就任していたのである）。

敗北を悟ったサマリン博士は「太陽の牙」や残ったゲリラたちに撤退を指示、とりあえず山村に身を潜め再起を画した。

この第一次ドガ市攻防戦は独立派ゲリラ組織が戦った最初の大規模武力蜂起だったが、サマリン博士の予測通り無惨な結果に終わってしまった。独立派の戦いの歴史は、敗北から始まったのである。

だがこの敗北が、やがてタフで粘り強い人民解放軍を生むきっかけになったことは、歴史の皮肉性を思わせる。当時サマリン派は、デロイ



ドガ市は大陸中央部に位置、湖に面した平地に建設された。

◀設定補足▶
❶砂浜 ❷荒地 ❸軍港 ❹港町 ❺ドガ空港.軍事基地 ❻行政本部 ❼パルミナ高速道(未完成) ❽田園地帯 ❾湖 ❿パルミナ横断鉄道

く進むかのように思われたが、重見もたたずをこまねいていたわけではなかった。カシム議長の意向を受けてアンディ盆地へ赴いたラコック補佐官が、州代表と会見を持ち、独立阻止後の権益保持の約束を餌に連邦軍の入山を認めさせたのだ。このため解放軍は盆地からの脱出か、それとも徹底抗戦かを選ぶかの瀬戸際に立たされてしまう。

人民解放軍といっても、所有している火器はそのほとんどが自動小銃を中心とした軽火器ばかりで、連邦軍と正面切って戦う力はいまだになかった。盆地に立て籠もって反撃するなどさまざまな対応策が検討されたが、結局、アンディ盆地から北方300キロの地点に位置する山岳地帯グランテへ拠点を移動させることを決定する。

連邦軍の追撃が強まる中、解放軍兵士たちは包囲網を潜り抜けることに成功、追撃部隊に追われながらも一路グランテに向けて進軍していく。しかし解放軍が目的地に着くことはなかった。時を同じくして、鉱山近くに位置するウルナ基地でデロイア人兵士による叛乱、通称"ウルナ基地事件"が勃発したのである。

叛乱

そもそもの原因は基地司令ブラドー中佐の、デロイア人に対する差別意識から生じた違法な処刑命令にあった。彼は逮捕したゲリラを裁判にかけることなく銃殺刑にしてきたのだが、デロイア人士官ガボール・ザナ中尉がこれに反発、刑の指揮を執れとの命令を拒否したため抗命罪を根拠として、ザナ中尉を銃殺せよとの決定を下した。だがこの無法ともいえる行為に、日頃からなにかと差別されてきたデロイア人兵士たちの怒りが爆発、ブラドー中佐を殺害し連邦に対し反旗を翻したのである。

解放軍を追撃していた連邦軍は急ぎ転進し、ウルナ基地を包囲する。ボイド行政官は事件を可能な限り穏やかに解決するため、叛乱の原因となった事情を考慮し首謀者ザナ中尉のみを処分、他の下士官兵卒は一切罪に問わないという方針を打ち出した。しかしボイド行政官の温情策も、地球人への不信感に固まった叛乱部隊を説得するには至らず、武力による鎮圧行動の開始が決定された。

叛乱を知ったサマリン博士はザナ中尉へ使者を派遣、基地側と歩調を合わせて鎮圧部隊を背後から攻撃することを提案、ザナ中尉はこの申し出を受け入れた。鎮圧部隊が基地へ攻撃を開始して間もなく、その後方からダグラムと新型CBアーマー、ヘイスティを中核とする解放軍部隊が襲いかかった。前後から挟撃された鎮圧部隊は多数のCBアーマーを喪失、撤退を余儀なくされた。戦闘終了後ザナ中尉は解放軍への投降を申し出るが、サマリン博士はこれを拒否、彼ら500人のデロイア人兵士を同志として受け入れることを表明する。ちなみにこの戦いは、独立戦争史上初めての大規模CBアーマー戦として、戦史にその名を残している。

千丈の堤も蟻穴より崩る、という諺がある通り、この事件は一地方部隊の叛乱では終わらず、ふたつの効果を生じさせた。

ひとつは多数のCBアーマーや戦闘装甲車輌を持つウルナ基地が参加したため、貧弱だった解放軍の火力や機械力の問題が一気に解決された上に、豊富な武器弾薬及び食料その他諸々の物資が手に入ったことが挙げられる。また、正規兵の中には優れた指導力を持つ下士官が少なからず存在しており、彼らがゲリラ兵に教練を施すことで戦力の質的向上が図られたという事実も忘れてはならない。

ふたつめの効果はウルナ基地での事件が呼び水となり、パルミナ各地の基地で叛乱や無許可離隊が続発、中にはCBアーマーを擁する部隊が指揮官ごと解放軍に合流するという前代未聞の事態が発生するに至ったことである。このことからも、どれだけデロイア人兵士たちの間に、地球に対する不満が鬱積していたかが理解できるだろう。無許可離隊――脱走が相次ぐにつれ解放軍は日増しに強大になっていき、当然のことながら相対的に連邦軍の戦力は低下の一途を辿っていった。それは士気の低下に繋がり、ついには連邦軍と解放軍の戦力バランスを拮抗させるに至るのだった。

人民解放政府樹立

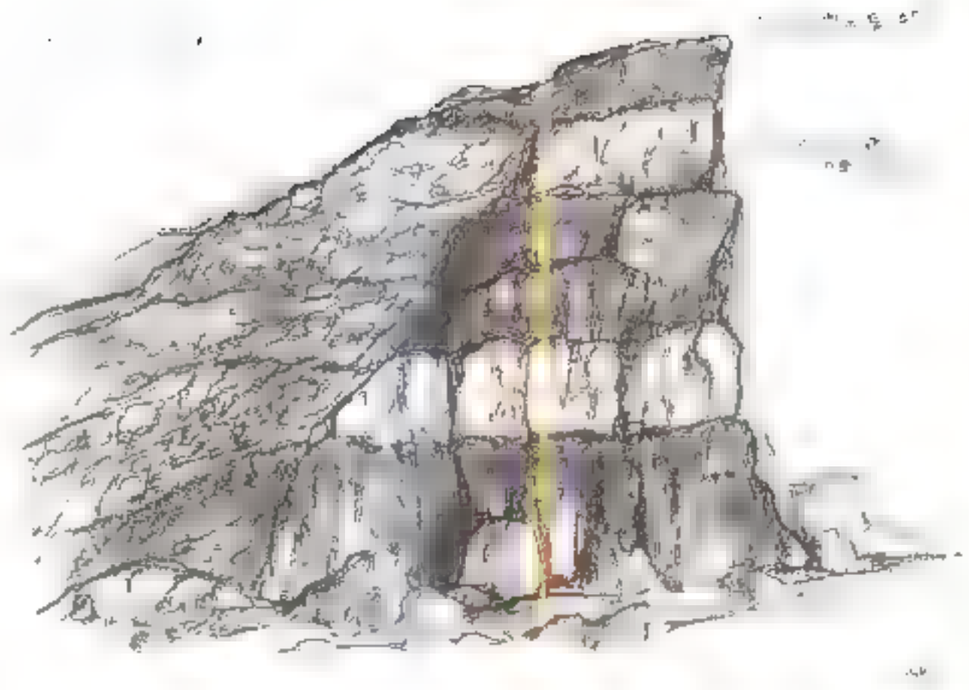
勢いに乗った解放軍は、パルミナの政治経済の中心地であるドガ市を今度こそ攻略せんものと、全軍挙げての進撃を開始した。ドガ市を陥落させた際の政治的効果は測り知れず、また、初期からのメンバーにとっては惨敗に終わった第一次攻略戦の汚名を返上する絶好の機会でもあった。

対する州政府は闘将フリッツ・マノン中佐を行政官に任じ、全力を以て解放軍の迎撃に当たった。独立戦争はついに全面武力衝突という、新たなステージへ進んだのである。

前哨戦と呼ばれるウェーブ台地の戦いに勝利した解放軍だったが、戦力の核となるCBアーマーの数は連邦軍に劣っていた。明けてS.C.153年11月6日、解放軍の副官格であるザナ中尉は、別働隊のJ・ロックが調達する予定になっている増援部隊の到着を待ってから戦端を開くべきとの意見を、いまや事実上の解放軍司令となったザルツェフ少佐に具申するが、少佐は戦機を逃すべきではないとして全軍に進撃を命じた。まず彼はドガ市郊外100キロの地点

◀設定補足▶
❶アンディ鉱山　❷別荘地
❸ロリー鉱山

サマリン博士たちは、ロリー鉱山から鉱山鉄道を利用してアンディ盆地へ入り、別荘地にある屋敷を本拠に定めた。



ウェーブ台地はスタンレー高原決戦の前哨戦の舞台となった。結果は解放軍の勝利に終わり、彼らは背後を心配することなく決戦に挑んだ。

に広がるスタンレー高原へ兵力を移動させ、森林地帯で部隊の布陣を行うとキルゾーンを構築、連邦軍のCBアーマー隊を引きずり込んで大打撃を与えた。

当初はゲリラ戦術に徹した解放軍の優勢が続いたが、兵力の多寡による体力差はいかんともし難く、ほどなく劣勢に追いやられていった。

だがそこへCBアーマー部隊を伴ったJ・ロック隊が参戦、連邦軍を横合いから打撃して混乱を生じさせることに成功する。予想外の増援部隊の出現に連邦軍は士気を阻喪、命令もなく後退をはじめる部隊が続出するという混乱状態に陥ってしまう。さらにマノン中佐が解放軍の砲撃によって戦死したことが決定打になった。

スタンレー高原で連邦軍を打ち破った解放軍は二手に分かれて南下を開始、ザルツェフ少佐率いる本隊はドガ市へ、J・ロック率いる別働隊はドガ市に隣接するドガ基地へ進撃した。連邦軍敗戦の報は明け方には市民の間に知れ渡っており、ドガ基地には大量の軍人の家族や関係者たちが押し寄せ、次々とヘリで脱出していった。

11月7日の夜前には解放軍本隊はドガ市入りを果たし、市内に残った残存兵力との戦いに突入した。だが実効戦力はほとんど残っておらず、それは一方的な掃討戦の様相を呈した。各所の連邦軍将兵は卑怯にも戦力差の前に戦意を喪失、政庁に残っていたドリップ行政副官は部隊を率いてやって来たサマリン博士に降伏と恭順の意を示す。政庁から連邦旗が降ろされ、代わってデロイア星と二重太陽をシンボライズした解放旗が掲げられた。時を置かずサマリン博士は記者会見を開き、デロイア全土に向けて人民解放政府樹立を宣言した。これによってデロイアには州政府と人民政府という、相容れざるふたつの政府が存在することになった。サマリン博士は州政府の正当性を否定、さらなる戦いの継続を居並ぶ記者たちに語った。

遠すぎた北極

樹立したばかりの人民政府を潰すには、スタンレー高原の決戦での消耗が回復する前に解放軍を叩くことが最良の策だと考えたカシム議長は、メドール州の直接支配下にある北極基地の第6軍を投入することを決意する。この決定に対し、第8軍司令のフォン・シュタイン大佐はむろん否定的だったが、彼の権勢の後ろ盾であるカシム議長の意向に逆らえるわけもなかった。しかし以前から死病に蝕まれていたカシム議長が、突然昏睡状態になったことから事態は思わぬ展開を見せていく。第6軍への出動命令が正式に発せられていなかったことから、フォン・シュタイン大佐は一切の軍事行動は指揮下にある第8軍のみで行うと州議会で宣言したのだ。政治的判断としてはともかく、純軍事的観点からすればこの判断は大失敗だった。フォン・シュタイン大佐はすぐに揚陸部隊を編成しドガ奪回作戦を開始したが、守備側に対し攻撃側にはおよそ10倍の戦力が必要とされるなかで、敵地における揚陸作戦は至難の業だと言われているのだ。戦力の消耗と士気の低下が著しい上に、揚陸作戦の経験のない第8軍では成功が容易ならざることは明らかだった。

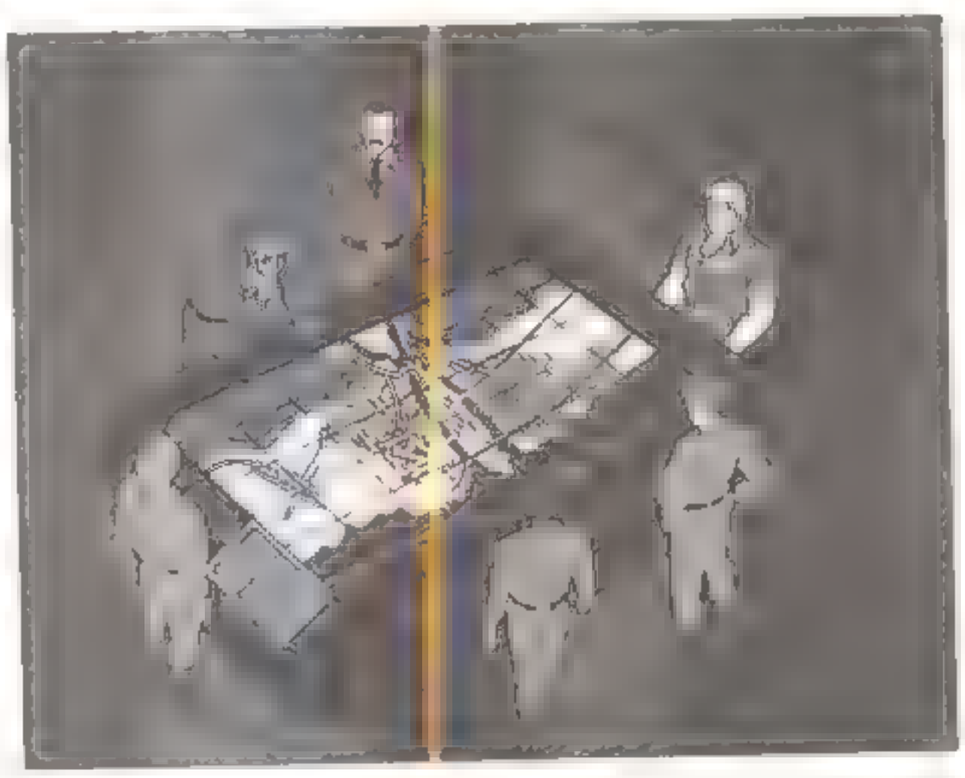
事実作戦は失敗し、第8軍は主要戦力の大半を失ってしまう。思わぬ敗北に驚いた第8軍司令部は、解放軍の逆襲を恐れて方針をカーディナル防衛に変更するが、これもまたとてつもない判断ミスだった。スタンレー高原の決戦、ドガ湾防衛戦と立て続いた戦闘に解放軍はひどく消耗しており、逆上陸を敢行する力などありはしなかったのである。しかも第8軍の方針変更は、彼らに戦力の涵養を図る時間的余裕を与えることになった。

第8軍揚陸艦隊はドガ市を奪回しようと、CBアーマーによる上陸作戦を展開した。

連邦評議会から代行弁務官の任を与えられてデロイアに再赴任した、カシム議長の補佐官であったラコックはこれを知るや否や、早々に方針を北極ポート防衛に変更するように命じたが時すでに遅く、十分に休養をとった解放軍はかねてからの戦略目標である北極ポートを目指しての進軍を開始した。

地球からの増援が届くことになれば北極基地の戦力は増強され、攻略することが難しくなる。作戦の成功はどれだけ早く北極基地を陥落させるか、それだけに掛かっていた。

解放軍がパルミナと北極の間に横たわる天然の要害カルナック山脈へ向かう最中、第8軍のゲリラ戦部隊による夜襲によってタイムスケジュールに狂いが生じはしたものの、山脈に張り巡らせられた最終防衛戦を突破することに成功する。これにより第8軍は事実上壊滅、司令官フォン・シュタイン大佐も北極基地から前線



ドガ奪回に失敗した第8軍司令部は方針を転換、カーディナルの防衛を強化しようとした。

に向かう際にヘリに乗って墜死した　当時大佐の死はラコック弁務官によって事故死であると発表されたが真相は全く異なり、度重なる敗北に後がなくなった大佐が解放軍へ投降しようとするのを阻止した結果だったという。だがこれについても、果たしてフォン・シュタイン大佐が投降などするだろうか？　と疑問を唱える者が多く、謀殺説も根強く存在する。

残る敵の戦力は北極基地の第6軍デロイア派遣軍のみ、地球の増援がやってくる前に北極基地を指呼の距離に収めることに成功した解放軍の誰もがその勝利を確信したが、驚くべき事態が生起した。ドガの人民政府から全軍停止命令が発せられたのだ。

出撃前、将兵たちは指導者サマリン博士から北極ポートの攻略こそが独立達成の絶対条件だと聞かされてきたため、それを覆すこの命令は大きな動揺と人民政府への不信を生んだ。前線指揮官を務めるザルツェフ少佐は、ドガの政府へ真意を問い合わせるが、何の返答も返ってこなかった。

実は北極侵攻作戦開始以前から渉外を担当していたヘシ・カルメルは、これまでの実績を材料に地球との和平を唱えていたのだが、これを察知したラコック弁務官から極秘に接触、彼から重大な提案を受けた。

ラコック弁務官はこれ以上の戦火の拡大、特に北極ポートへの侵攻は、独立承認に傾きつつある地球の世論を決定的に悪化させ、デロイアとの全面戦争を決意させてしまう最悪の結果をもたらすとカルメルに揺さぶりをかけた上、主流派を脇においやって講和を進めようとカルメルに提案したのだ。地球と全面戦争になることで、これまで積み上げてきた成果がすべて水泡に帰すことを怖れるカルメルを中心とする和平派は、まんまとラコック弁務官の術中に陥ってしまう。そしてサマリン博士たち主流派を、武力を持って軟禁状態に置くと主導権を奪取して、自らが代表となり和平交渉を開始する。

突然の停戦と和平交渉の開始に、マスメディアも驚きを隠せなかった。

停戦と交渉は10日間におよび、その間に第6軍は地球からの増援を受け入れ、それまで劣勢にあった状況を完全に覆すことに成功、対する解放軍は完全に勝機を失してしまった。この戦略バランスの逆転は、進められていた予備交渉にも大きな影響を与えた。圧倒的な政治的軍事的な優位を武器とするラコック弁務官は、独立承認と引き換えに解放軍の武装解除とサマリン博士を新政府首班としないことを求めてきた。当初カルメルたちはこの一方的な条件（武装解除される解放軍に対し、連邦軍は北極ポート防衛を大義名分に戦力を維持する）に反発するが、和平の達成とそれに伴う名誉に目が眩み妥結の道を選んでしまう。

デロイア側は、連邦軍の撤退を文書に盛り込まなかったことで、とんでもない爆弾を背負い込んだのだが、ほとんどの者がその事実に気づかなかった。武力を一方的に放棄して和平交渉に臨むなど、迂闊を通り越して無知以外のなにものでもなく、地球側はカルメルを「所詮政治のなんたるかも知らず、目の前の餌に目が眩んだ田舎者」と酷評した。こうして予備交渉は、地球側の大勝利に終わった。

この条件による和平の仮調印と、北極基地の連邦軍が増強されたことを知らされたサマリン博士は、これ以上の抵抗は解放軍兵士たちを無駄に死なせることだと判断、不本意ながらもカルメルの要請に従って兵士たちに「独立は成ったのだ」と宣言、武装解除を納得させた。

だが、独立戦争は終わっていなかった。

黄昏の独立

協定に基づき人民解放軍は武装解除され、デロイア独立を求め戦ってきた彼らはここに消滅した。元第8軍兵士たちは軍法ー、叛乱・脱走罪を犯していたがこれらを問われることなく、無事に故郷への道へ着いた。ただ前線指揮官であるザルツェフ少佐だけは、停戦中に解放軍兵士が連邦軍ヘリに対し発砲し協定破りをした責任を問われ逮捕された。

表面ー地球側はこれを形式的なものに過ぎないとしていたが、実際には即座に少佐を軍刑務所に収監、脱走罪と叛乱罪を適応して最短でも禁固30年の刑に処すとの噂が流れた。これを知った旧解放軍兵士たちは、ルはといえば連邦軍の挑発行動が原因であり、ザルツェフ少佐のみに責任を負わせるのは公平ではないと騒ぎ立てた。だが武器を棄てた彼らの発言には何の影響力もなく、地球側は余裕綽々と決断力に欠けるカルメル政権を骨抜きにせんとする策謀を張り巡らせていった。

ほどなくカーディナルを舞台に本交渉がはじまったが、ここに至りカルメルたちはラコック弁務官をはじめとする地球側の真の狙いを知る。彼らはデロイアの独立を認めつつも、頑強にワームホールポートを含む北極ポートの管理権の保持と軍の駐留を主張したのである。デロイア側にしたらそれは首根っこを掴まれているようなもので、そのような条件は独立を危うくする以外の何者でもなく、到底認めることなどできない。だが地球側は在デロイアの地球系企業の4割を新政府に譲渡することを提案、巨額の資本を放棄してでもこの条件をカルメル政権に呑むように迫った。

いったいなぜ地球はそこまでワームホールポートにこだわるのか。実はスタフェラス二重太陽系にはデロイア星の他に資源有望な惑星が三つ存在し、特にミラネード星は5年後には開

和平の仮調印を行うサマリン博士、人民政府内の主導権争いに敗れた彼は、この時点ですでに実権を失っていた。

デロイア独立戦争史 ～解放への苦闘と挫折～

カルメル派に不満を持つ「デロイアの星」と「太陽の牙」は、ダグラムを奪って武装決起を敢行した。

拓を開始することが可能とされていたのである。この情報はカシム議長の存命中は最重要機密として扱われ、連邦内でも一部の高官しか知らなかったほどだったが、これこそドナン議長がデロイアの独立を許さなかった真の理由だった。

この惑星を地球から直接開拓することは不可能で、どうしてもデロイアを足場とする――より正確に言えばワームホールポートが必要なのだが、もしデロイアが独立し独自に開発を進めていけば彼らは豊富な資源を背景にデロイア圏ともいうべき勢力圏を形成することが可能になり、ひいてはデロイアからの物資輸入に頼らざるを得ない地球とのパワーバランスの逆転現象を生じさせることになりかねない。ドナン議長はこうした事態を恐れたのである。だがラコック弁務官は、要はワームホールポートさえ押さえておけば後はどうにでもなると考えたのだろう。再び駐留軍の武力を背景に、これら地球側に有利な条件を認めさせようと新政府に迫った。

驚いたのは新政府の調査である。いきなり豊かな資源を持つ惑星が三つも存在していると知らされたのだ、びっくりしない方がどうかしている。彼らは駐留軍を認めない方針で固まるが、交渉自体を破壊しかねない事件が勃発した。

ドガでの主導権争いの顛末を知った旧解放軍遊撃隊――「デロイアの星」と「太陽の牙」が、カーディナルの議事堂前広場に展示されていたダグラムを軍事禁状態にあったサマリン博士を奪い、カルメル政権に反旗を翻したのだ。ラコック弁務官はこれを口実に、第6軍によるデロイアへの武力介入を開始する。新政府のもとで旧第8軍の将兵からなるデロイア治安軍が設立されていたが、彼らに治安維持能力がないとなれば連邦軍が駐留する大義名分が立つと判断したのだ。独立の英雄転じていまや反動分子となった遊撃隊を討つため、第6軍の大部隊が出動し交戦を開始した。新政府代表となったカルメルは、第6軍の投入を主権の侵害だと抗議するがラコック弁務官はこれを無視する。

事ここに至り、新政府は主権を守るために連邦との全面衝突を覚悟、治安軍を出動させた。

誰も予期できなかったラコック弁務官暗殺という事態によって、デロイア治安軍と地球連邦軍第6軍の激突は回避された。

砂漠の岩場に立て籠もる遊撃隊を挟み、第6軍と治安軍の睨み合いがはじまった。デロイア全土が一触即発の緊張感に包まれる中、ラコック弁務官はカルメル代表と善後策を話し合うためにカーディナル基地から議事堂を訪れる。居並ぶ記者陣に彼は「これからかん坊をあやしにいくのです」と語り、議事堂の階段を上りはじめた。と、そのとき、記者を装い近づいた男が、なにを思ったのかラコック弁務官を射殺してしまう。

男の名はコール・デスタン。かつてサマリン博士の下でゲリラ活動をしていた前歴の持ち主だった。彼に政治的背景はなく、発作的な行動によるものだと言われている。

ラコック弁務官の突然の死により事態は急転、第6軍には撤収命令が下り武力衝突は回避された。ダグラムも、「太陽の牙」自身の手で爆破され、決起事件は反動分子の解散によって終結を見た。これを最後にデロイアにおける軍事行動は一切の終息を見せた。

その後、新たな弁務官が地球より派遣され交渉は再開、新政府との間で地球・デロイア相互不可侵条約が締結された。

その内容はデロイアにとって依然満足のゆくものではなかったが、新政府はこれを「最初の一歩」と定義し、条約改正を地球に求め続けていくとの代表による談話の発表と共に、独立戦争が終結したことを正式に宣言した。

獅子と狼が駆ける動乱の刻は終わりを告げ、世界は新たな建設の時代を迎えたのである。

デロイア独立闘争の象徴と呼ばれたCBアーマー、ダグラムは、その終結と共に眠りについた。ひとつの時代が終わったのだ。

探査編

PROSPECT

劇場公開作品『ドキュメント太陽の牙ダグラム』

【解説】

1983年に公開された『ドキュメント太陽の牙ダグラム』はテレビシリーズ『太陽の牙ダグラム』の劇場版映画である。配給は松竹、同時上映は『ザブングル グラフィティ』と『チョロQダグラム』だった。

この作品はテレビ放送版に若干の新作カットを加えて劇場公開用に再編集した作品だが、決して単なるTVシリーズの総集編では終わっていないことが最大の特徴として挙げられる。

本作は原典であるテレビシリーズ本編を歴史的事実として捉え、そこで描かれたデロイア独立戦争のドキュメンタリーとして再編集を行うという、名場面集的再編集をスタンダードとしてきたアニメ映画とは全く異なる手法を導入しているのだ。

その結果、TVシリーズのフィルムを用いながらも、趣を異にする独特な作品に仕上がっているのである。

映画はまず基本的な視点が違っている。

TVシリーズは主人公クリンの戦いと成長を主軸に置きながら、多数の人間の動きを追うことで、同時に群像劇あるいは史劇としての側面を描いていった。デロイア独立戦争を描くという大目的を掲げつつも、制作者の視点はあくまでも悩み行動する人物あるいは状況に翻弄される人物に焦点を当てられていた。

主人公＞独立戦争なのであって、決して主人公＜独立戦争ではないのだ（一見そう見える場合もあるが、よく観察すれば状況を描くことを優先して人物描写をおざなりにすることはなかったことに気づくはずである）。

それに対し『ドキュメント太陽の牙ダグラム』は、歴史的な視点からデロイア独立を描いている。

物語の序盤はクリン・カシムを中心に進むが、これはたまたまクリンが重要な歴史の局面に立ち会ったからに過ぎない。物語の中心はあくまで惑星デロイア独立の要となる歴史的出来事の再現だ。

フォン・シュタインによる第8軍指揮権の強奪から始まり、クリンも参加した評議会代表の救出作戦、デロイアの自治州としての承認、そしてサマリン博士の薫陶を受けてダグラムを奪回したクリンがゲリラに身を投じるまでが息をつく間もないテンポで語られる。

しかし、そこにはTVシリーズにあったクリンの個人的なエピソードはない。

中盤以降になるとこの傾向はより顕著になり、ダグラムとクリンは独立派ゲリラの一部としてしか描かれない。それどころか、デロイア7が延々と続けたゲリラ戦までが至極簡単に扱われている。

そして物語は一気にウルナ基地の叛乱からスタンレー高原での人民解放軍の歴史的勝利、そしてドガ市における人民解放政府の成立に雪崩れこんでゆくのだ。

つまり『ドキュメント太陽の牙ダグラム』のクライマックスはデロイアがひとつの国家として独立する前後の部分にある。そのため、第8軍が総力をあげたカルナック山脈の戦い以降の話の描写はかなり丁寧になっている。連邦側のフォン・シュタインやラコック、独立派のカルメルといった個人の行動や予期せざる出来事がデロイア独立の歴史に大きな影響を及ぼしているからだ。ここでは落ちぶれた革命家のデスタンが、重要な役割を果たしていたという皮肉な事実もきっちりと描かれている。

デロイアの独立が形式的に達成された後に、再びクリンとダグラムにスポットライトが当たるが、それは歴史の主人公としてではなく、実感のない独立に不満をもち、闘争を再開しようとするゲリラを代表する存在としてに過ぎない。クリンたち「太陽の牙」は、闘争を続けるゲリラがデロイアの独立に及ぼす影響を語るための装置でしかないのである。ゆえにクリン・カシムは最後までひとりのゲリラとして扱われている。

ドナン・カシムやサマリン博士、時にはクリンが自分の想いを語るシーンはある。しかし、それはそれぞれの立場を代表する見解の表明なのだ。先にも述べたが、個人視点の排除は他のアニメ映画とは一線を画した、この作品の最大の特徴といってよい。

映画のパンフレットの中で高橋監督は編集で多くのキャラクターたちを切り捨てなければならなかった苦悩を語っている。良い映画を完成させるための非情の決断だったろう。

（このキャラクターやCBアーマーへの熱い想いが同時上映の『チョロQダグラム』に結実したと言えるかもしれない）

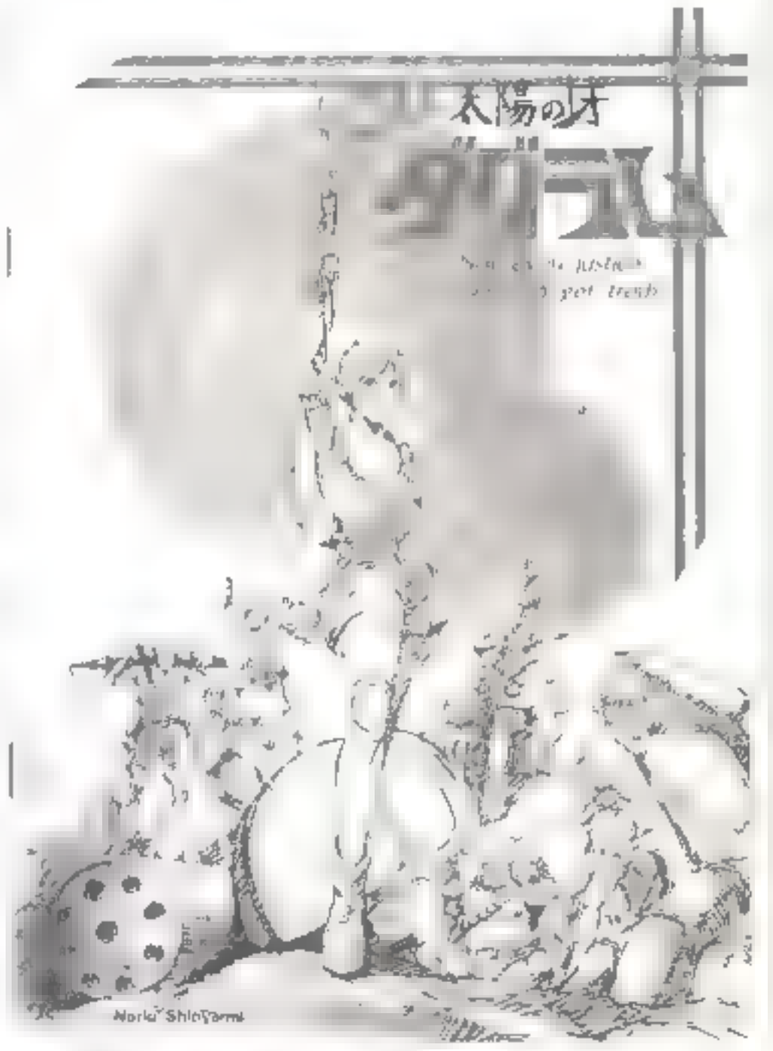
しかし、このようなストーリー構成をとることにより『ドキュメント太陽の牙ダグラム』はわずか80分の映画の中で、デロイア独立闘争の最も重要な部分を再現することに見事成功したのだ。

映像表現でも過去の歴史を語るドキュメント作品らしさを強調するユニークな演出上の工夫が施されている。

ストーリーのポイントになる歴史的な出来事のシーンでは映像がカラーから白黒に変更されている。これらのシーンは色が変えられただけでなく、意図的にフィルムの傷や汚れのような加工まで施され、古い記録フィルムであるかのような演出になっているのだ。

これによって映画は、カラーで製作された再現ドラマの要所要所に本物の記録映像が挿入されたかのように見えるようになっている。『太陽の牙ダグラム』は映画の画面の中に「歴史」として再現されているのである。

この重要なシーンで画質を落とす演出は、かえって映画に適度なメリハリをつける効果をもたらしている、ある意味、逆転の発想の勝利ともいえる。『ドキュメント太陽の牙ダグラム』はTVシリーズの再編集版という言葉に収まらない、オリジナリティのある映画であると言い切ってしまって良いだろう。



【データ】

■製作
伊藤吕典

■企画
山浦栄二

■原案
高橋良輔、星山博之

■キャラクターデザイン
吉川惣司、塩山紀生

■メカニカルデザイン
大河原邦男

■作画
塩山紀生

■美術
中村光毅

■音響
浦上靖夫

■音楽
冬木　透

■編集
鶴渕友彰、片石文栄

■効果
松田昭彦（フィズサウンド）

■整音
中戸川次男

■脚本
星山博之、富田祐弘、渡辺由自、鈴木良武

■声の出演
クリン……井上和彦
ロッキー……田中亮一
チコ……銀河万丈
ナナシ……緒方賢一
ハックル……小宮山清
キャナリー……山田栄子
ビリー……梨羽雪子
ジョルジュ……千葉　繁
ラコック……仁内達之
レーク……池田　勝
フォン・シュタイン……蟹江栄司
サマリン……宮内幸平
ラルターフ……兼本新吾
カルメル……加藤　治
ザルツェフ……屋良有作
J・ロノク……曽我部和行
ザナ……鈴置洋孝
デスタン……広瀬正志
バックス……細井重之
ジョーク……大林隆介
ビギン……島田　敏
ニール……村松康雄
デオル……木原正二郎
ナイト……塚田正昭
ノキオ……亀井三郎
デイジー……高島雅羅
リタ……川浪葉子
ダロウェイ……尾崎桂子
ゲイダ……市東明秀
ドリップ……郷里大輔
ダーク……佐藤正治
代表A……沢木郁也
代表B……笘見　純
代表C……緑川　稔
コホード代表……松岡文雄
グラッシン……徳丸　完
技師……山田俊司
兵士……藤城裕士
兵士……政宗一成
兵士……岡　和男
兵士……塩屋浩
女……高木ゆう子
ナレーター、ドナン……山内雅人

■録音スタジオ
APUスタジオ、東宝録音センター

■録音製作
オーディオ・プランニング・ユー

■主題歌
『さらばやさしき日々よ』

■企画・製作
日本サンライズ

■配給
松竹株式会社

■公開
1983年7月9日

■上映時間
80分

MEDIA DATA

■『ドキュメント太陽の牙ダグラム』（廃盤）
メディア　ビデオテープ
商品番号　VTS-A119V
発売日　1985年9月21日
レーベル　東芝

※以下の3製品に関しては、212-213ページの『チョロQダグラム』と収録製品が重なりますので、そちらをご覧ください。
□『LD-BOX　PART-1、2、3』（廃盤）
□『太陽の牙ダグラム THE MOVIE COLLECTION』
□『太陽の牙ダグラム　DVD-BOX

【映像処理】

本文にもあるように本作では、公開当時の観客がテレビのドキュメンタリー番組などで見慣れていた20世紀前半の記録映像のように、露光不十分で、かつ劣化しているように加工されたテレビアニメのシーンが挿入されている。

しかしこれは、ただ単にカラー画像をモノクロ化したものではない。撮影状態の悪いフィルムの色跳びや、繰り返し上映されて出来たフィルムきず、経年劣化のシミによる色むら等が加えられている。サンプル・シーンでは、フォン・シュタインと兵士の間の壁や、フォン・シュタインの腕の上に、縦に引いたような白いフィルムきずがいくつか確認出来る。

▶テレビ版

▶劇場版

【完本 太陽の牙ダグラム】

劇場公開作品『チョロQダグラム』

【あらすじ】

惑星デロイアをめぐる戦いに疲れはてたゲリラと連邦軍の両陣営はデロイアの運命をそれぞれ1台のCBアーマーに託した。ゲリラ代表はクリンのダグラムくん、連邦はハンクとアーロンの乗るブロックヘットくんだ。

ダグラムはスタートで出遅れたものの、その後は昼夜を分かたぬ抜きつ抜かれつのデッドヒート（？）が繰り広げられる。ところが途中で連邦軍のCBアーマーがダグラムを襲ってきた。クリンは受けて立つが、敵のCBアーマーはすさまじく多い！

とうとうダグラムはガルシア隊の攻撃でピンチに。しかし、危ういところをJ・ロック隊に助けられて、なんとかレースに復帰する。

ところが今度はラコックにダグラムの動力を絶たれてしまった。クリンはダグラムをチョロQに変身させて猛スピードで反撃、見事逆転勝利する。

【解説】

『チョロQダグラム』は1983年に松竹系で公開された劇場公開用作品、同時上映は『ドキュメント太陽の牙ダグラム』と『ザブングルグラフィティ』、というよりも『ドキュメント太陽の牙ダグラム』のオマケとして創られた小作品だ。

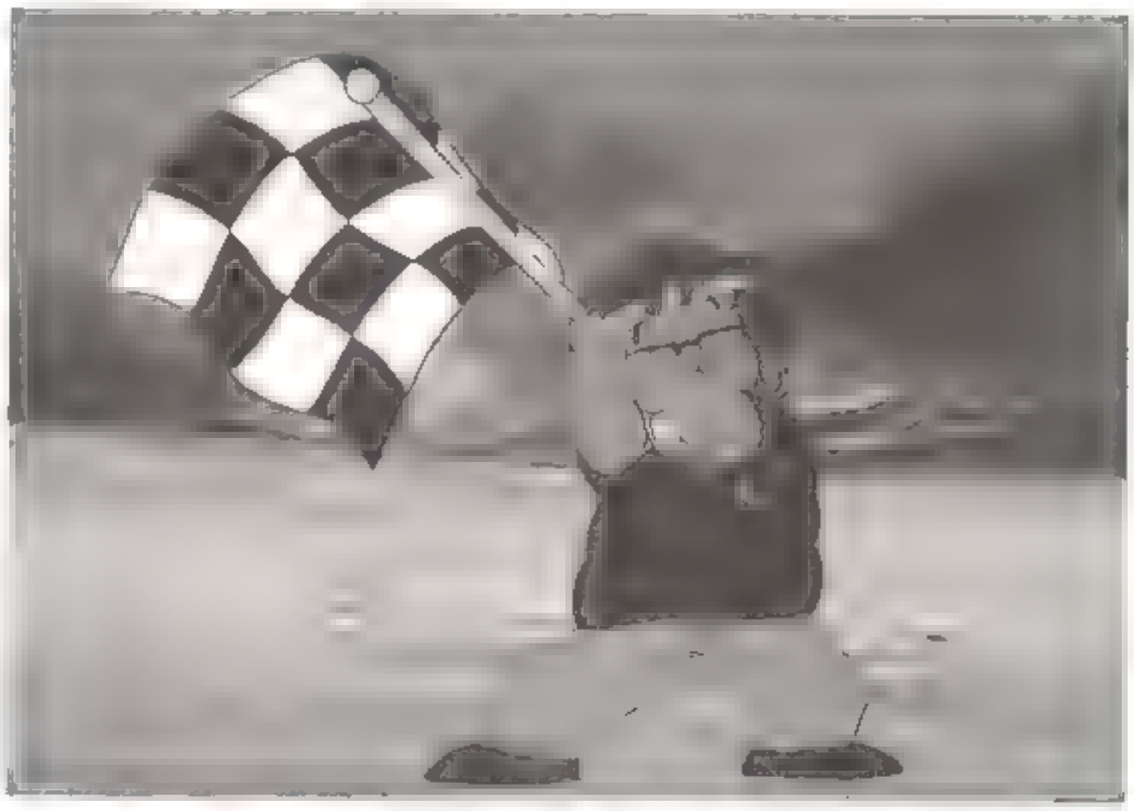
内容は二頭身キャラになった『太陽の牙ダグラム』の登場人物やCBアーマーが暴れまわる、いわゆるパロディアニメ。上映時間はわずか8分で、30分のギャグアニメの後半ドラマ部分だけを抜き出して上映したような内容の映画だった。『ドキュメント太陽の牙ダグラム』の高橋監督が絵コンテを作っている。

ストーリーはダグラムとブロックヘッドがゲリラと連邦を代表して競争するというもので、競争というテーマから予想される通りのお約束的なストーリーが展開される。

この作品は設定面のこだわりが凄い。

CBアーマーや登場人物はチョロQ世界にふさわしい二頭身にアレンジされた設定が新たに制作されていて、この点に関しては『ドキュメント太陽の牙ダグラム』よりも贅沢に作られた作品とさえ言える。制作側の気合の入りようが感じられようというものだ。

映画にはTVシリーズのCBアーマーがすべて出てくるうえ、主だった登場人物は設定にないキャラクターまでモブに入っている。さらに他の作品の登場人物やロボットも参加していて、短編ながら何度見返しても新しい発見のあるアニメだ。



ところで『チョロQダグラム』にはそのもとなる同名の玩具が存在した。

言うまでもないが、『チョロQ』は『太陽の牙ダグラム』のプラモデルを販売していた玩具メーカー、タカラ（現・タカラトミー）の人気商品である。走るディフォルメされたミニカーが基本形だが、タカラは過去何度かその枠を超えた商品展開を行っている。映画が公開された1983年もその時期のひとつに当たり、水陸両用の『Qボート』や怪獣が走る『チョロ獣』などが発売されている。

『チョロQダグラム』も同時期の変り種チョロQのひとつで、デフォルメされたダグラムがチョロQに変身して疾走するというユニークな玩具だった。走らせる時は上半身を後方に折り曲げ、胴体と脚に隠されていた車輪を露出させて走行する仕組みになっている。ロボットの姿で立っている時は車輪がまったく見えない秀逸な設計である。

玩具の『チョロQダグラム』は人気を呼び、商品展開を他のロボットアニメにまで広げた『チョロQロボ』としてシリーズ化された。

方、アニメの方も1984年に『超力ロボガラット』、1988年には『魔神英雄伝ワタル』といった〝二頭身のロボット（あるいはロボットのようなもの）〟が活躍する作品が製作されるようになっている。

『チョロQダグラム』は玩具とアニメ両方の歴史において、二頭身ロボットの先駆けとして銘記されるべきアニメ作品といえるだろう。

商品番号	THD-90811
収録内容	TVシリーズ全75話 『ドキュメント太陽の牙ダグラム』 『チョロQダグラム』
購入特典	1.特典ディスク（スタッフ座談会、キャスト座談会） 2.3Dクリスタル・アート 3.ボイスクロック
レーベル	タキコーポレーション

【データ】

■原案・絵コンテ
高橋良輔

■原画
只野和子
松下浩美
小林早苗
宮嶋　堅

■動画
スタジオ・ライブ

■背景
宮本清司

■音楽
冬木　透

■音響
APUスタジオ

■撮影
旭プロダクション

■演出
一浦将則

■キャラクターアレンジ、メカアレンジ
スタジオライブ

■美術
アートのあ、宮本清司

■編集
鶴渕友彰、片石文栄

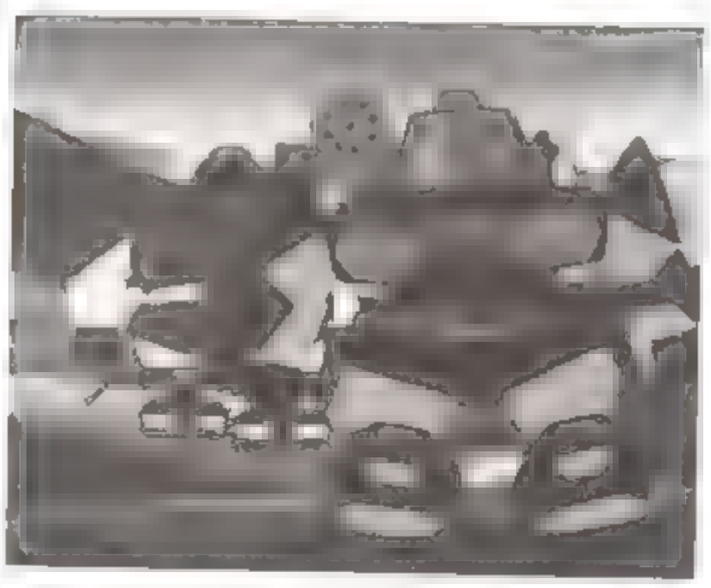
■プロデューサー
岩崎正美、山田哲久

■声の出演
クリン　……井上和彦
サマリン　……宮内幸平
ジョルジュ、オッペ　……千葉　繁
ラルターフ　……兼本新吾
ロッキー　……田中亮一
J・ロック　……曽我部和行
キャナリー　……山田栄子
ガルシア　……玄田哲章
リタ　……川浪栄子
ハンク　……政宗一成
デイジー　……高島雅羅
アーロン　……一又一成
ラコノク　……仁内達之
ナレーター、ドナン　……山内雅人
〔緒方賢一（ナナシ、ワトキンス、マノン）、小宮山清（ハックル）らも出演していたようだが、エンディングの配役に載っていない〕

■企画・製作
日本サンライズ、
松竹株式会社

■公開
1983年7月9日

■上映時間
8分



ダグラムには『チョロQダグラム』以外に、もう一本短編が存在する。『太陽の牙ダグラム THE MOVIE COLLECTION』などに特典映像として入っている『DOUGRAM VS ROUNDFACER』という作品だ。

最初、このアニメは日本ビクターがVHDの普及のために販売していたビデオマガジン「アニメビジョン」に収録された。当初は『火星の戦士ダグラム』というタイトルだったが、後の特典映像では『DOUGRAM VS ROUNDFACER』に変更されている。

内容はダグラムとラウンドフェイサーがひたすら戦うというもので、特にドラマはない。ラウンドフェイサーを倒した後は謎の巨大宇宙船が出てくる。

『太陽の牙ダグラム』とは異なる世界観によるアニメで、純粋にアクションを観て楽しむべき作品だろう。ダグラムとラウンドフェイサーは空を飛び、この作品のみのオリジナル武器が使われたりしているからだ。

VHD（Video High density Disc）というのは日本ビクターが開発した接触型センサーを使用する溝なし静電容量方式のビデオディスクである。VHDは制御方式の問題から長時間収録されたLDでは困難だったフレームサーチや静止画再生などの特殊操作が可能だった。製造には従来のレコード生産設備の流用が可能で、日本ビクターはたいへん力を入れていた。

「アニメビジョン」はVHDの操作性を活かして作られた絵の出るアニメ雑誌で、Vol.7（1987年1月21日）に収録された『火星の戦士ダグラム』はVHDの売りの一つである3D立体映像の実験的な作品だった。残念ながらVHD版以外では立体映像は楽しめない。

MEDIA DATA

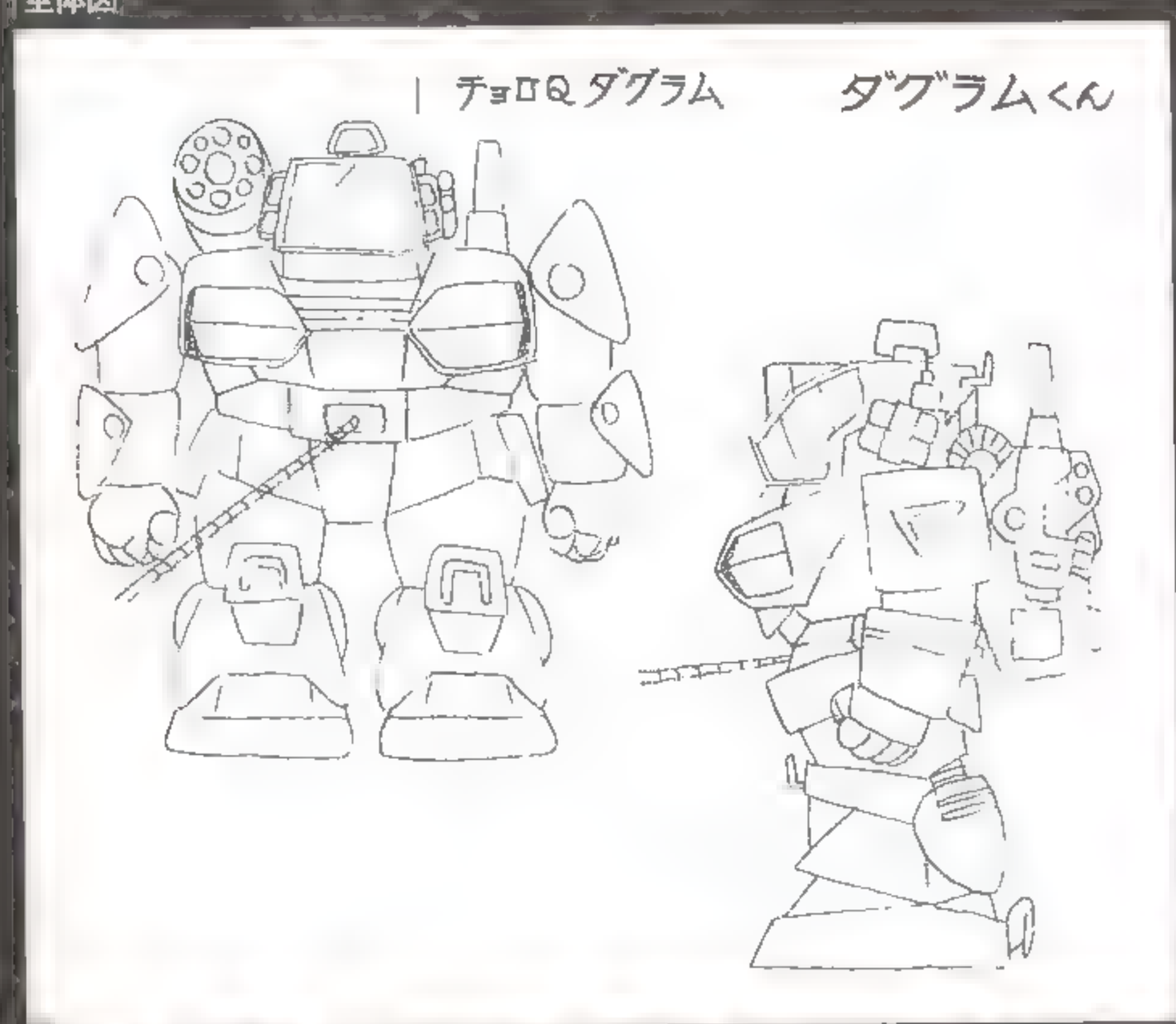
■『LD-BOX　PART-1、2、3』（廃盤）
メディア　LD
商品番号　TCLA-90411(PART-1)
TCLA-90421(PART-2)
TCLA-90431(PART-3)
発売日　1998年6年5日　(PART-1)
1998年9年25日　(PART-2)
1998年12年25日　(PART-3)
収録内容
TVシリーズ全75話、
劇場版映画、他
（『ドキュメント太陽の牙ダグラム』は『PART-3』に収録）
レーベル　タキコーポレーション

■『太陽の牙ダグラム
THE MOVIE COLLECTION』
メディア　DVD
商品番号　THD-12041
(THD-16081（再版）)
発売日　2003年8月22日
(2007年8月24日再版)
収録内容　『ドキュメント太陽の牙ダグラム』
『チョロQダグラム』
特典映像　劇場予告編、TV予告編（一部）
『DOUGRAM
vs ROUND-FACER』
レーベル　タキコーポレーション

■『太陽の牙ダグラム　DVD-BOX
The 25th anniversary memory』
<3000セット限定生産>
メディア　DVD(17枚組)
発売日　2006年11月24日

「チョロQダグラム」 メカ編

全体図



ボディ部分に関してはオリジナルのダグラムを縦方向に、ほぼそのまま押しつぶしたような[illegible]サインになっている。各パーツの比率は縦、横ともに原型のダグラムと同じくらいだ。

ダグラムくん

デロイア代表選手

母なるデロイアの大地の力（重力）で動くゲリラ側のCBアーマー。ヘソから出ているロープの先にデロイア7のメンバーが縛り付けられていて、ガケから飛び降りた彼らの重みで引っ張って動く仕組みになっている。途中から砂漠地帯になりガケがなくなったためか、後半は人力で直接引っ張っていた。ダグラム・カーくんに変形すると、デロイア7が力ずくで後退させることでエネルギーがチャージされ、ものすごいスピードで前進できるチョロQシステムになっている。

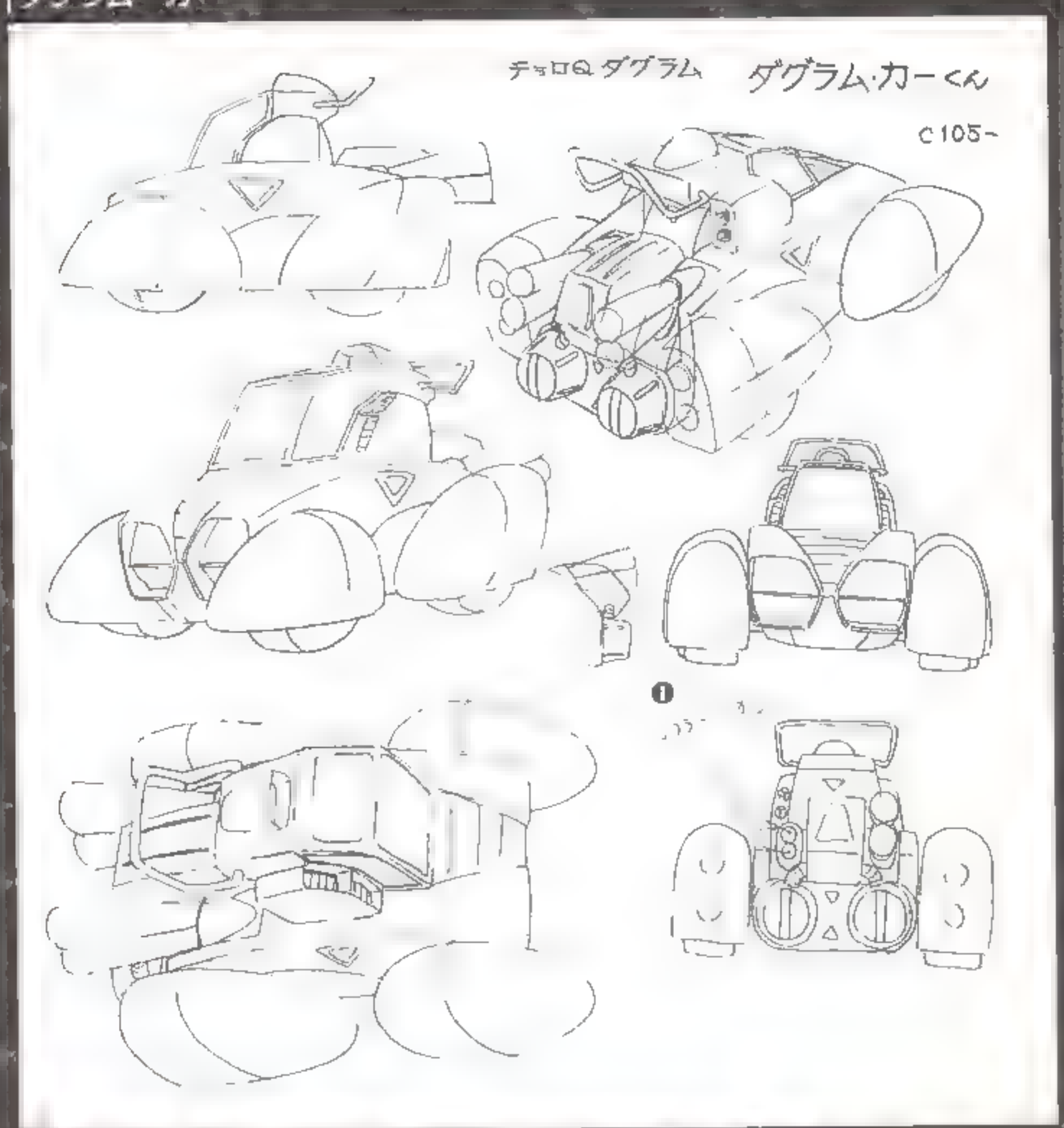
なまえ	ダグラムくん
パイロット	7人
たかさ	あんがい高いぞ！
おもさ	みんなで引っ張れるくらいだ！
エンジン	デロイア7と デロイアの重力だ！

正面図の左手をよく見るとチェーンガンまでちゃんとついている。右腕のアームリニアガンがないが、映画ではこれもついているぞ。ちなみにタカラから発売された「チョロQダグラム」にはこれもあるが、ロケット噴射モードはない。

変形は各パーツが光とともに自動車型の部品に変わるというもので、もっともらしいトランスフォームはしない。玩具の「チョロQダグラム」の走行モードとはデザインが異なっている。

デロイアの砂漠を疾駆するダグラム・カーくんの勇姿。

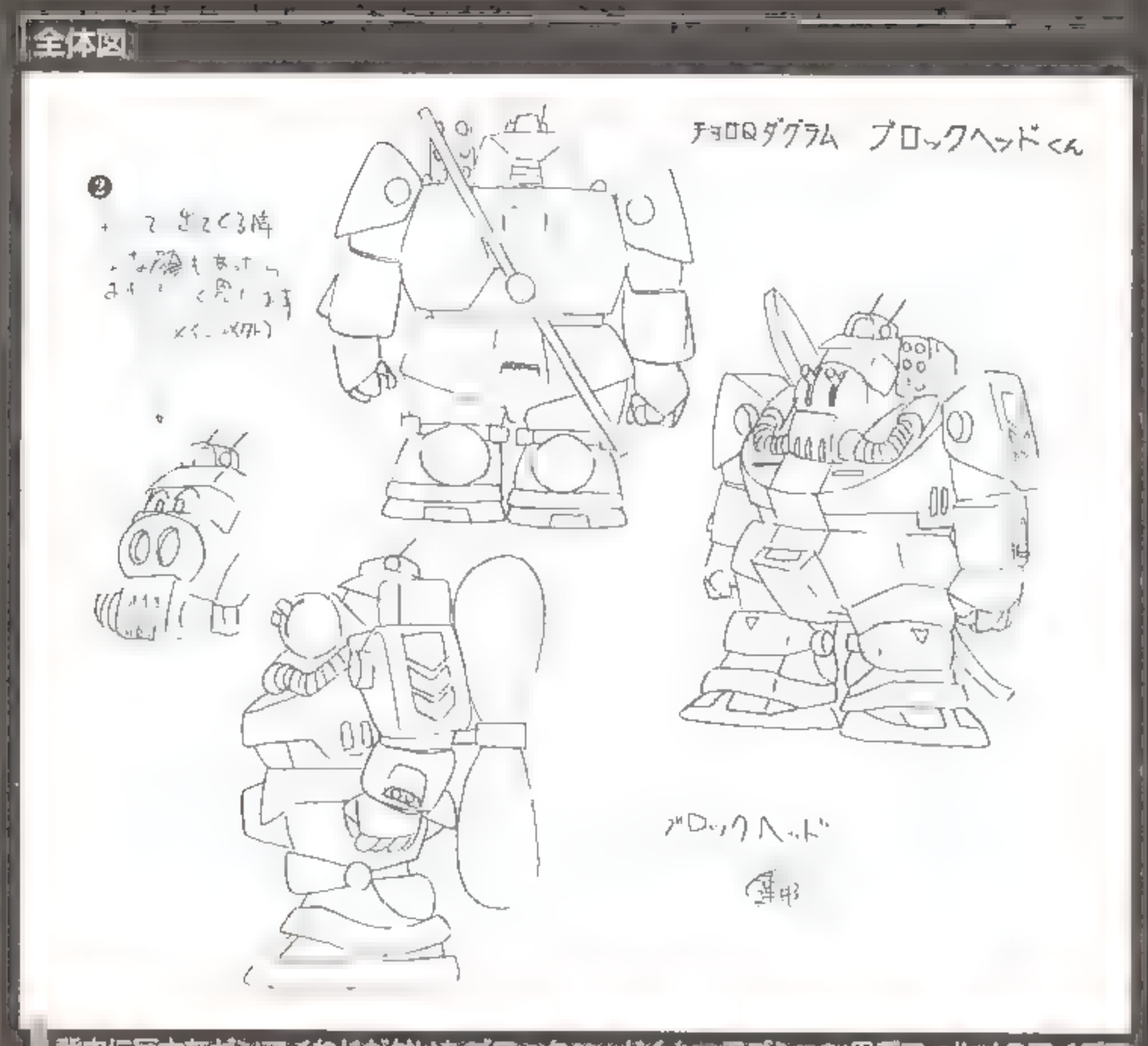
ダグラム・カー



◀設定補足▶
❶マフラーここから。❷モブで出てくる時こんな車もあったらおもしろいと思います（メインは[illegible]）

クリンくんの「チョロQダグラム[illegible]」の掛け声で変形した姿。「チョロQ変身[illegible]」の掛け声で元に戻る。

全体図



背中に巨大なゼンマイねじが付いたブロックヘッドくん。モブシーン用デフォルメのアイデアとして、重装砲塔をブタ鼻に見立てるアイデアが、制作陣のノリの良さを反映している。

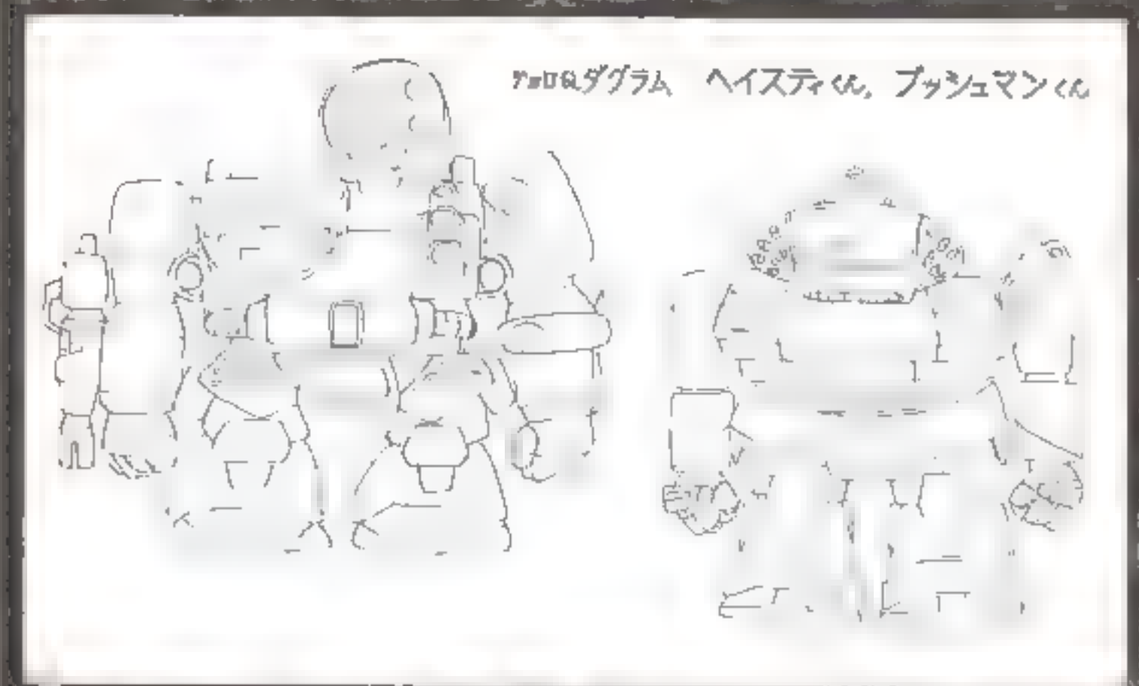
ブロックヘッドくん

地球連邦代表選手

パンクさんとアーロンさんが乗っている連邦軍代表のブロックヘッドくんは赤い塗装の初期型。なお、TVシリーズのふたりはXネブラ対応の後期型に乗っていた。

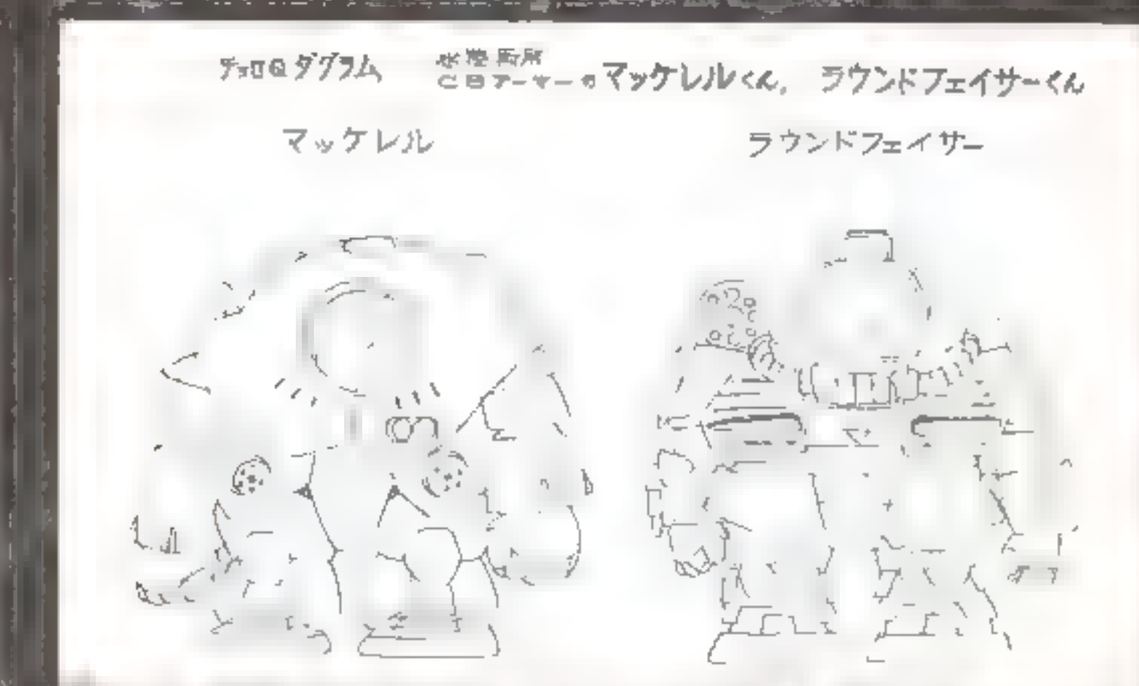
なまえ	ブロックヘッドくん
パイロット	??
たかさ	ダグラムくんと同じくらいだ
おもさ	よくわからない
ランジン	ゼンマイ。偉い人たちが力をあわせて巻くぞ！

ヘイスティくん、ブッシュマンくん



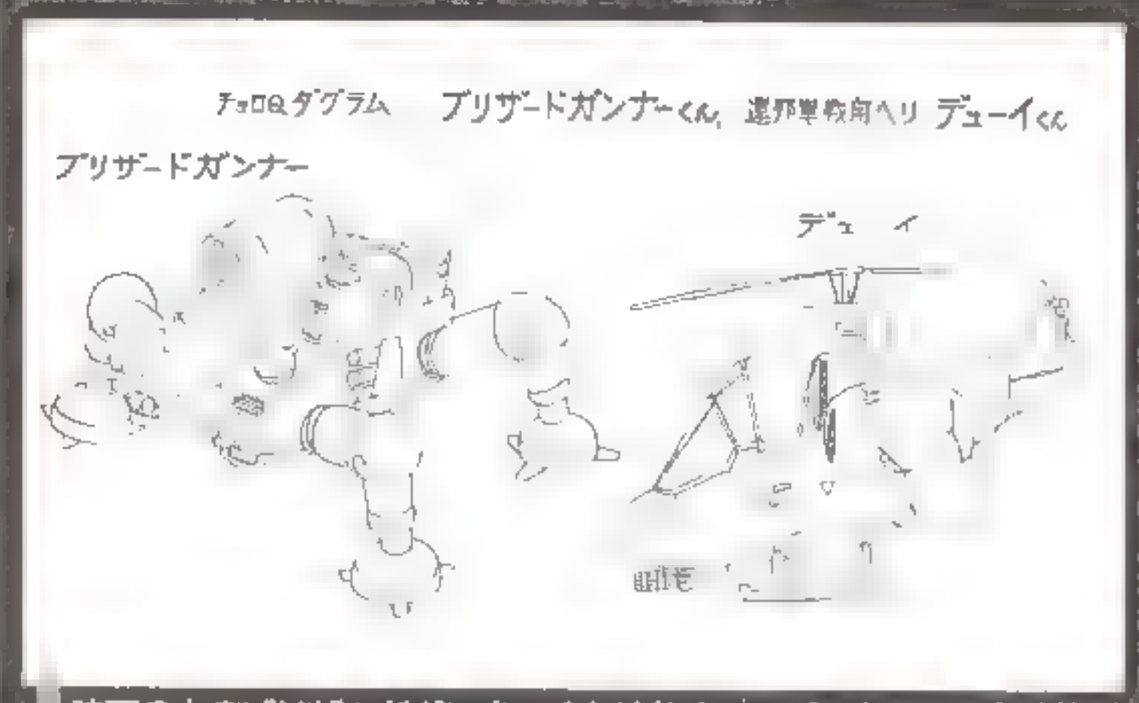
重武装型と軽装型のコンビ。もともとずんぐりしたデザインのヘイスティはデフォルメの結果、とうとう全高より横幅の方が大きくなってしまっている。映画ではロケットランチャーの代わりに盾を担いだヘイスティくんや槍を持ったブッシュマンくんが出ていた。

マッケレルくん、ラウンドフェンサーくん



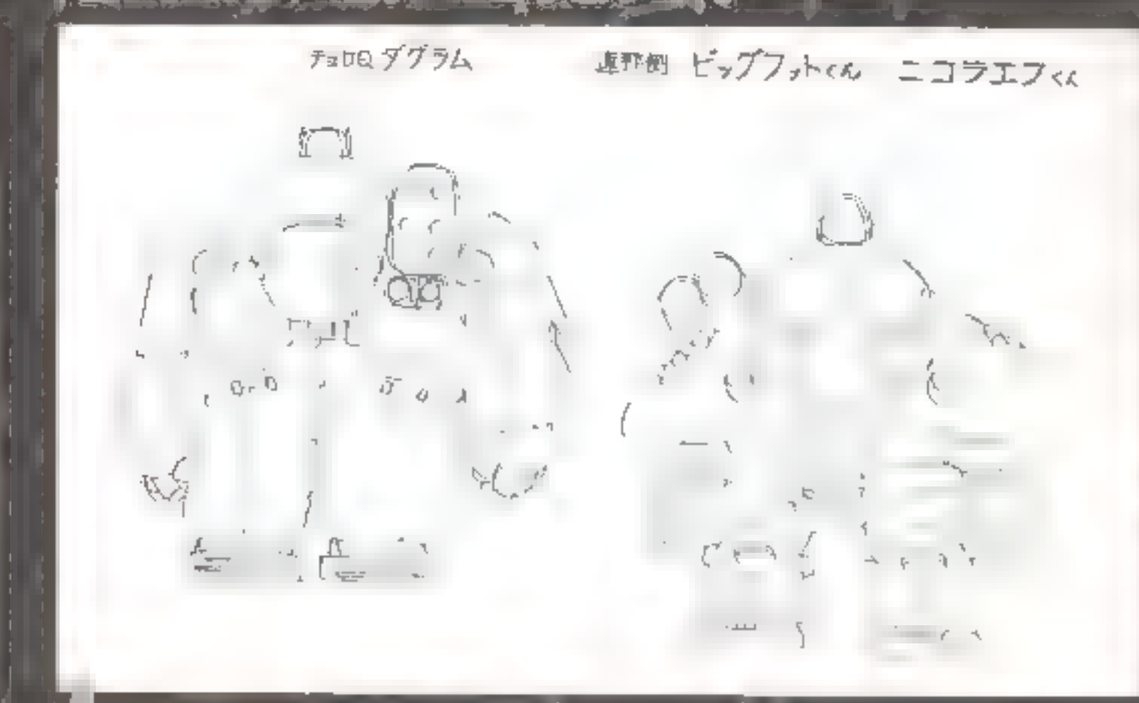
ソルティック社のマッケレル機と量産機のセット。マッケレルは水陸両用CBアーマーで、この映画のマッケレルくんは砂漠の砂の中から登場している。ラウンドフェンサーくんはTVシリーズ同様に空からの攻撃にも活躍した。

ブリザードガンナーくん、デューイくん



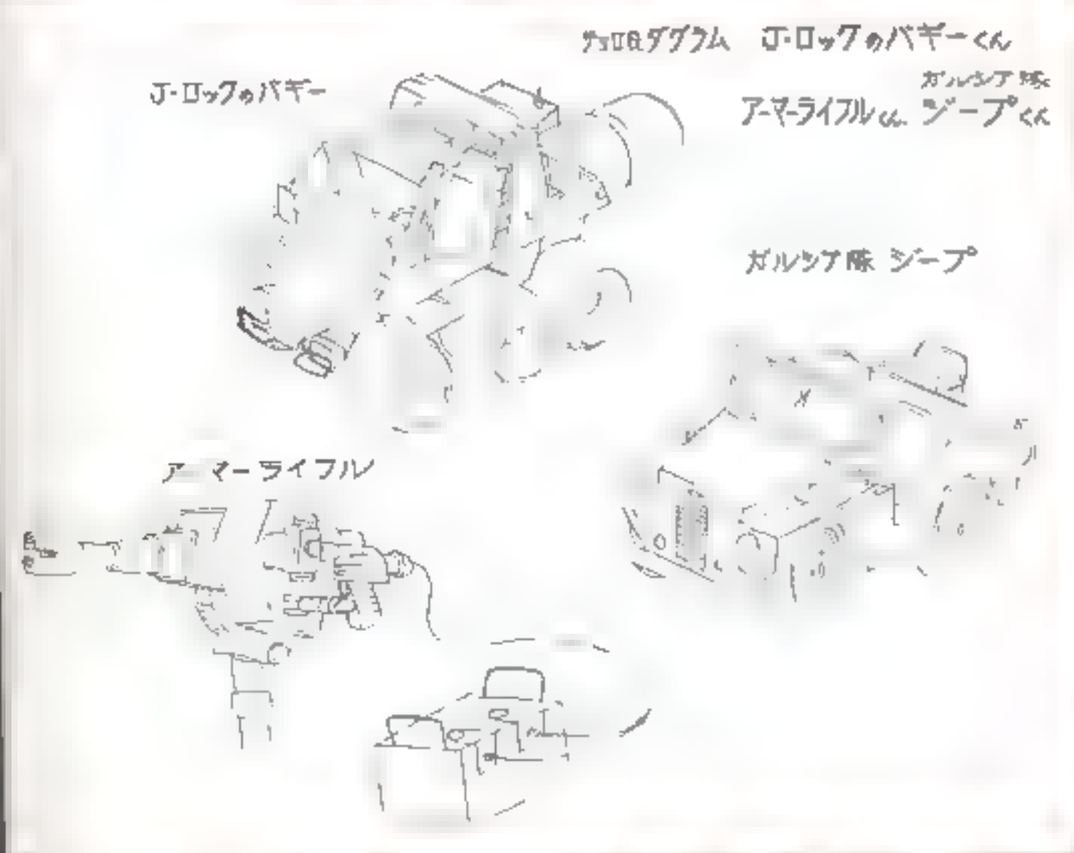
映画の中のブリザードガンナーくんは他のコンバットアーマーに比べて遊びが少ない。デューイくんは割に出番が多く目立っていた。なお、ベリコラター中隊では設定はないが、マベックくんも多数出ている。

ビッグフットくん、ニコラエフくん



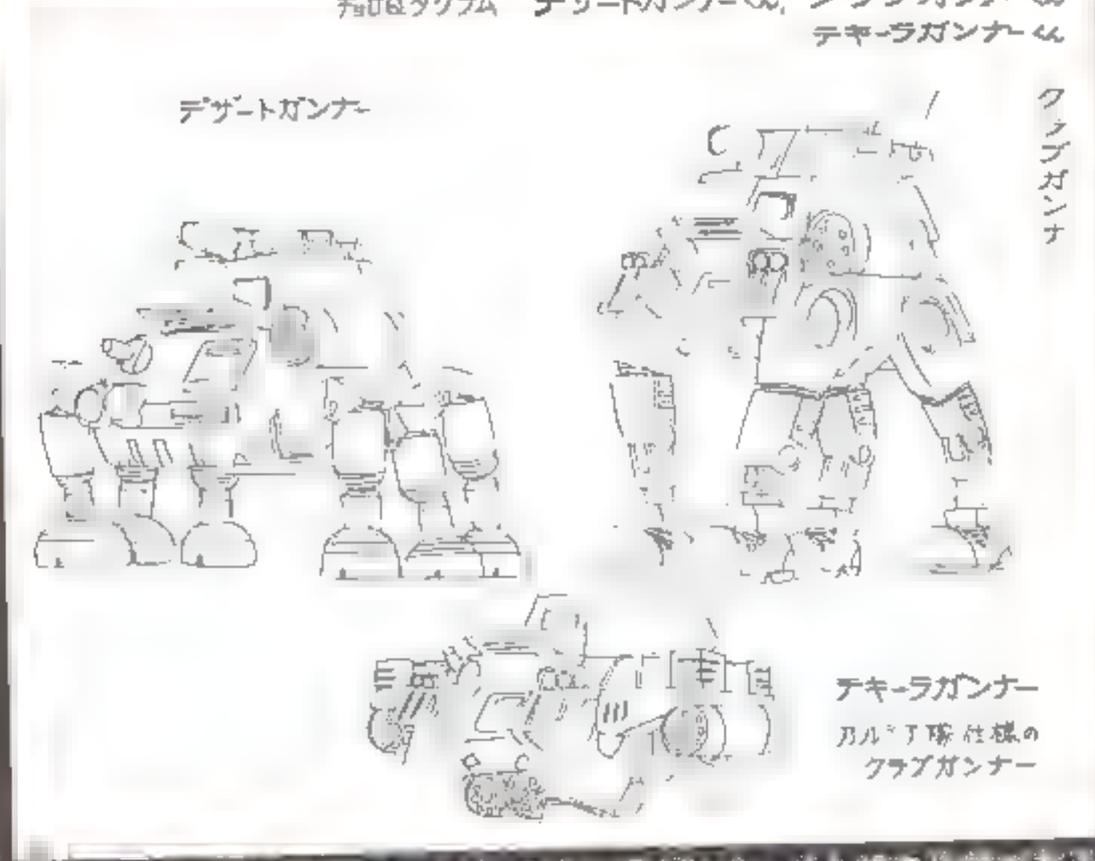
両方とももともと軍テストなだけに、ひと癖わ癖身が強い。モブシーンではスキーをつけたビッグフットくんやニコラエフくんなどいろいろなバリエーションが見られる。またビッグフットくんが出てくると、砂漠の中なのに雪が降っていたりした。

J・ロックのバギーくん、アーマーライフルくん、ジープくん



ジープくんは今回ガルシア隊ではなくブロック・ハッドくんのセコンド巻きチームが使用していた。大幅に定員過剰の8人を乗せて走っている。アーマーライフルは、ロック隊のバギーに積んであったもののようだが、この設定と違ってガルシアバッドルはない。

デザートガンナーくん、クラブガンナーくん、テキーラガンナーくん



その他には分かりづらいが、テキーラガンナーくんにも顔が描かれている。TVシリーズと同じ、ガルシアがテキーラガンナーくんにアフロヘアーを、ジャンボくんに眼鏡をかけるか、テキーラガンナーくんは妙に大きな、ダグラムくんを踏み潰しそうだった。モブにはカニの八サミがついたスポーツカンバーなどいろいろなバリエーションが見られる。

『チョロQダグラム』 人物編

クリンくん

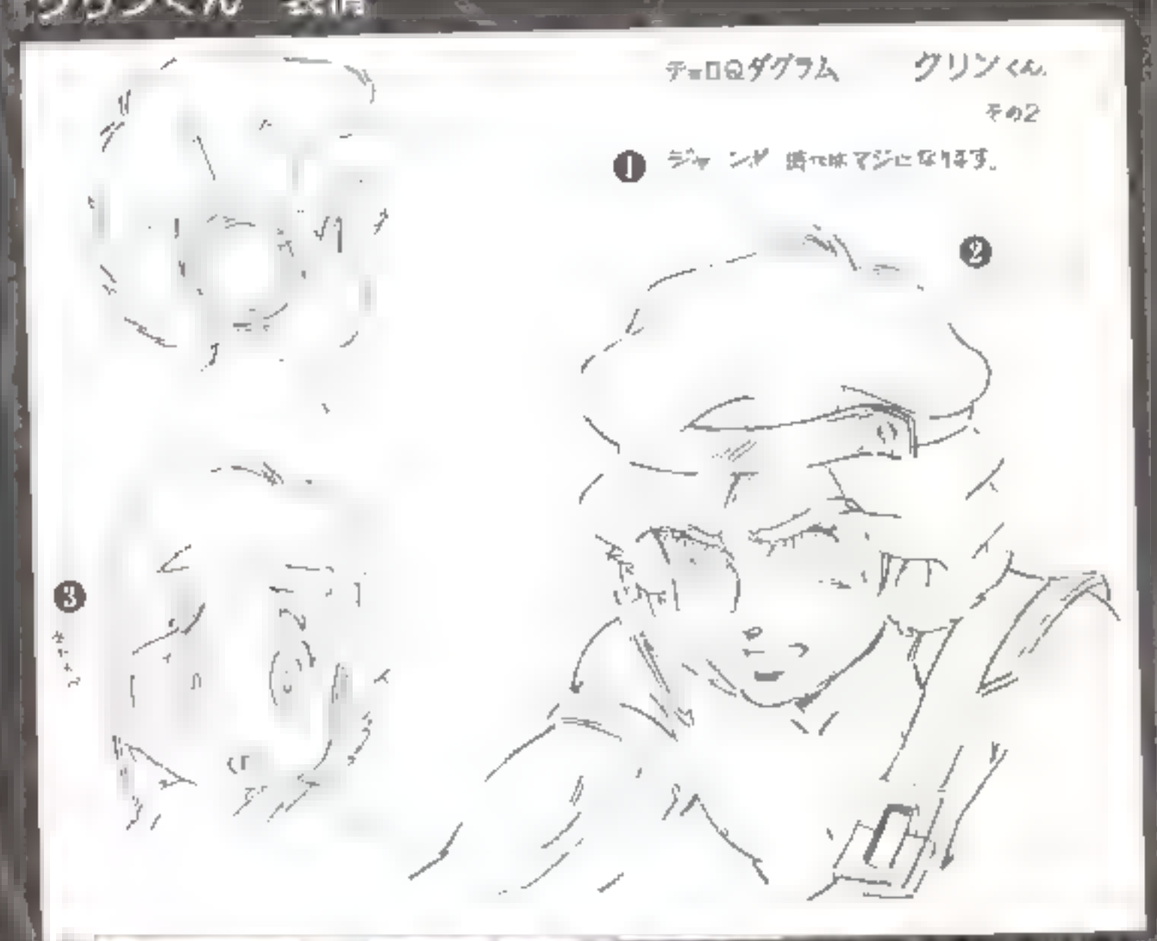
デロイア代表選手

二重身キャラクターとしてのクリンくんは、カラム、ヨシカ、ヨシヒコとは違ってその性格もかなり変化している。性格も幼児化しているし、オッチャンくさいところもなくなっている。ないどころか子供っぽい表情をすることが多かった。

クリンくん

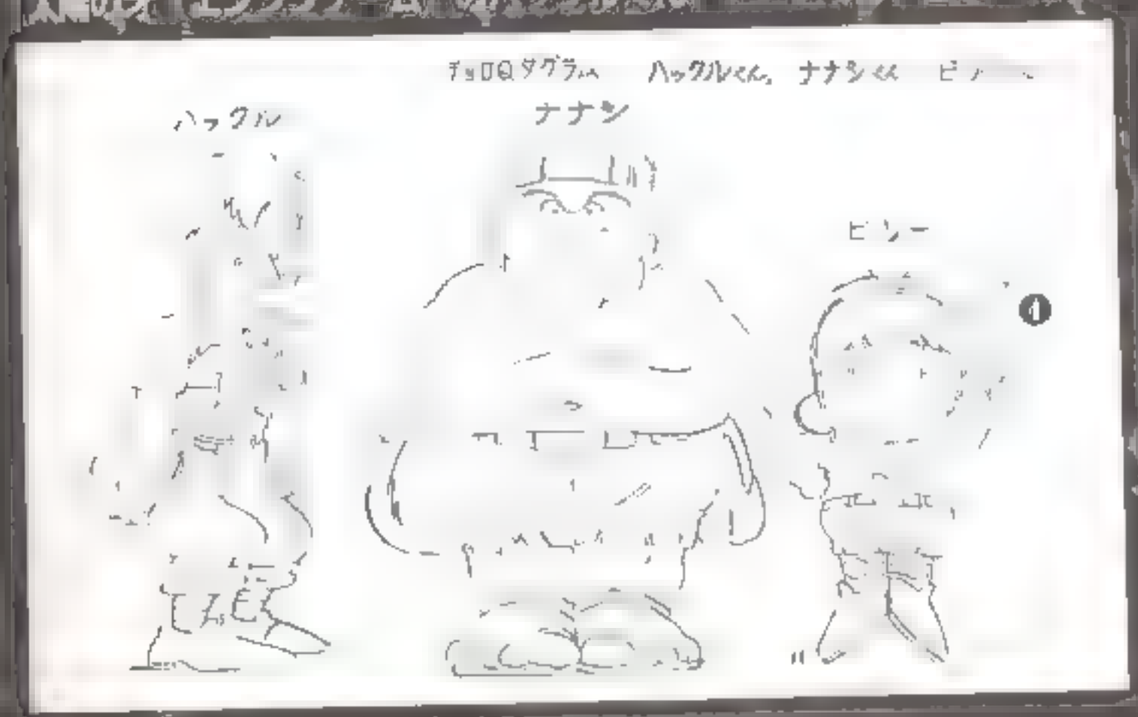
クリンくんの全身設定。身長は二重身よりもほんのちょっと高い。顔の表デザインはほとんどTVシリーズと同じだ。二重身キャラ、さりげないショックからか、微妙な表情を浮かべているぞ。

クリンくん 表情



❶は通常に攻撃を受けたとき用の真面目顔クリン。この顔の時はダグラムも真面目サイズに戻る。左下にアオリ顔の見本があるが、実際の映像の中ではもっと激しくあれ狂かった。

大鵬の子「モンゾンチーム」のハックルくん、ナナシくん、ビリーくん



大鵬の子「モンゾンチーム」。ダグラムの敵のモンゾン役のデロイアのメンバー。ハックルくんはなぜか真面目な顔。ナナシくんはヨロイ合体はしていない。モブ以外なのに変わらないキャラとなっている。もともと二重のビリーくんは完全に幼児化している。

サマリンさん、ドナンさん

いわすと知れた独立派と地球連邦の代表者。顔身が小さくなるということは相対的に横幅が大きめになるということなので、もとの顔身より恰幅の良さが目立つようだ。

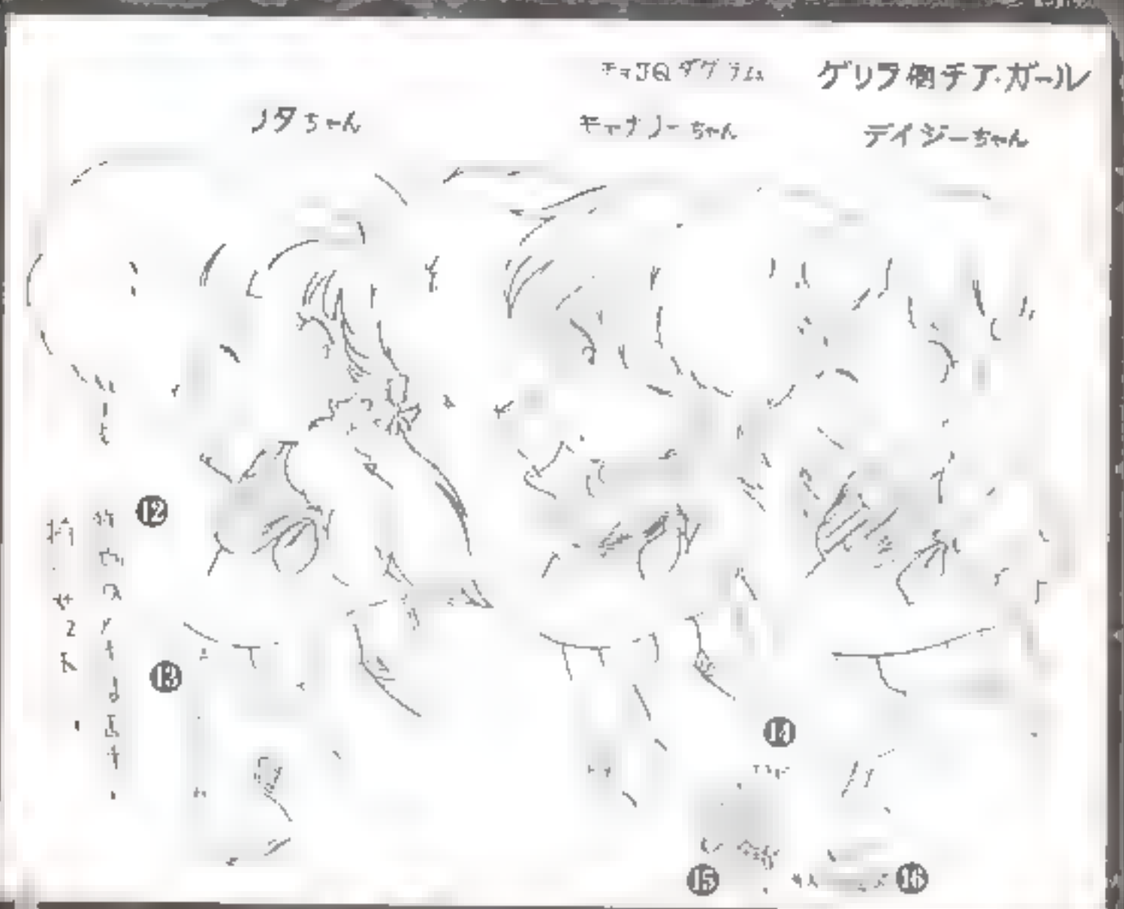
太陽の牙（エンジンチーム）のチコくん、フェスタくん、ロッキーくん

太陽の牙（エンジンチーム）のダグラムくんのエンジン役のデロイアのメンバー。ロッキーは本当は途中に自信があったのか、二頭身キャラになったことがあるのは、チコ、フェスタと皿つのフェスタは目つきで区別されている。

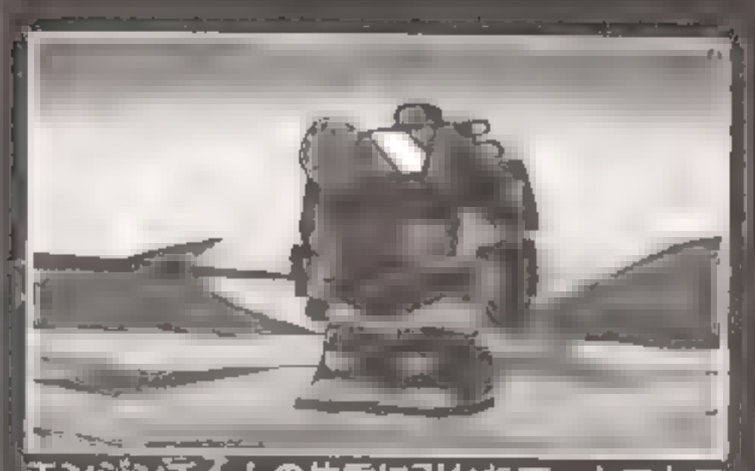
J・ロックさん

過剰にカッコいいJ・ロックさん。顔身も他のキャラよりきめになっている。映画の中では服の中に星が入って金星に変身するという秘密を披露するぞ。

ゲリラ傘チアガール、ノダちゃん、キャナリーちゃん、デイジーちゃん



映画の中ではキャナリーちゃんとデイジーちゃんの位置が逆だった。ジョルジュくんの言う通り、太陽の牙ダグラムにとってみうる最高の美少女チームだろう。しかも二頭身化しているにもかかわらず、オリジナルより色気があるぞ。



エンジンチームの体重に引かれてトコトコと砂漠を二頭歩行するダグラムくん。

【大鑑】太陽の牙ダグラム

《設定補足》
①ジャーン!! 時にマジになります。②カゲよろしく ③あかんべ ④ほ〜い ⑤ハイライト ⑥ガーン ⑦ずるい ⑧ギョロ目（あがり目） ⑨どーせ ⑩はみだしお肉 ⑪美形？ ⑫作画のときは両手に持たせて下さい ⑬フレアースカート ⑭Tシャツ ⑮ベスト ⑯サイド結び

ハンクさん、アーロンさん
地球連邦代表選手

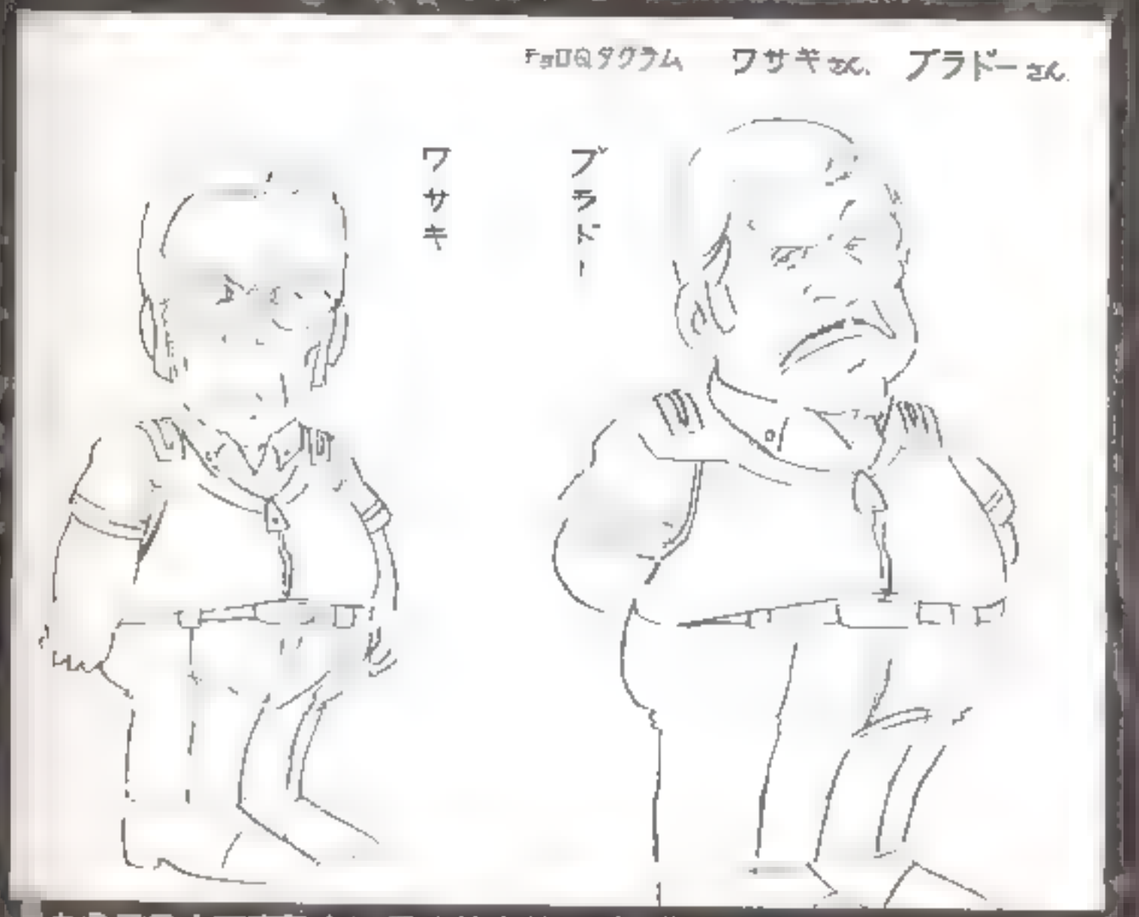
ハンクさん、アーロンさん

連邦代表のブロックヘッドくんのパイロットたち。もう一息のところで負けてしまう。意外ファン。このふたの身長はまったくイッチキをやっていない。尻が長い。

ゼンマイ巻きチームのレークさん、マノンさん

ふたりともデロイア州パルミナの行政官。レーク・ボイドはウリナ基地の反乱がきっかけで辞任。マノンはその後任だった。

ゼンマイ巻きチームのワサキさん、ブラドーさん

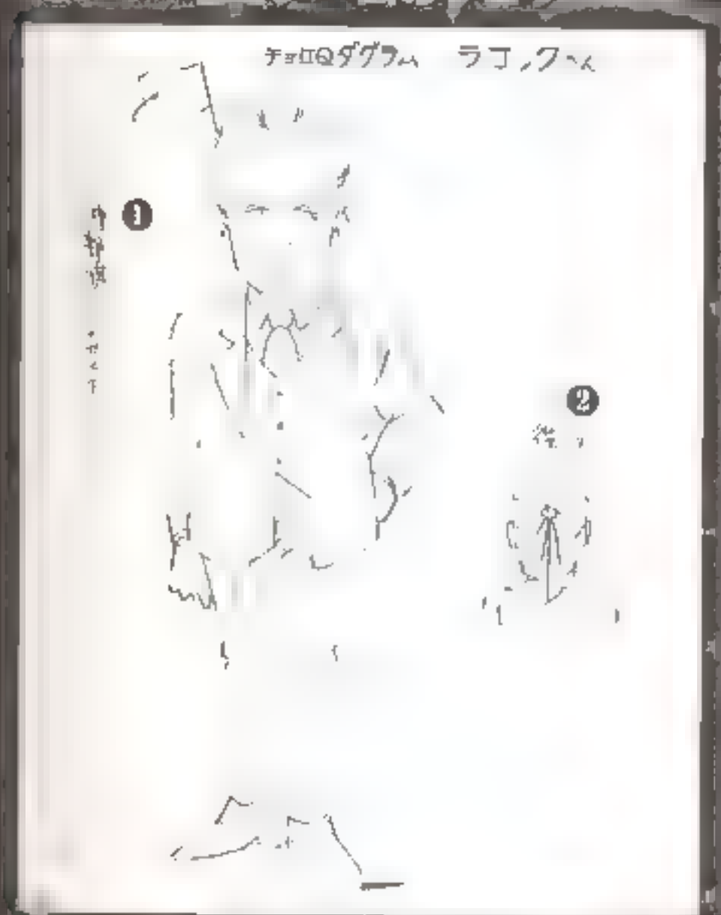


もるぼてまで来ると、その他大勢に近い指揮官さんたち。ワサキさんは、戦闘したガルシア隊の救援に来た部隊の指揮官。ブラドーさんは逮捕したゲリラを勝手に銃殺しようとして部下に反乱を起こされちゃったルバ基地の司令だぞ。

ゼンマイ巻きチームのフォン・シュタインさん、ブレナーさん

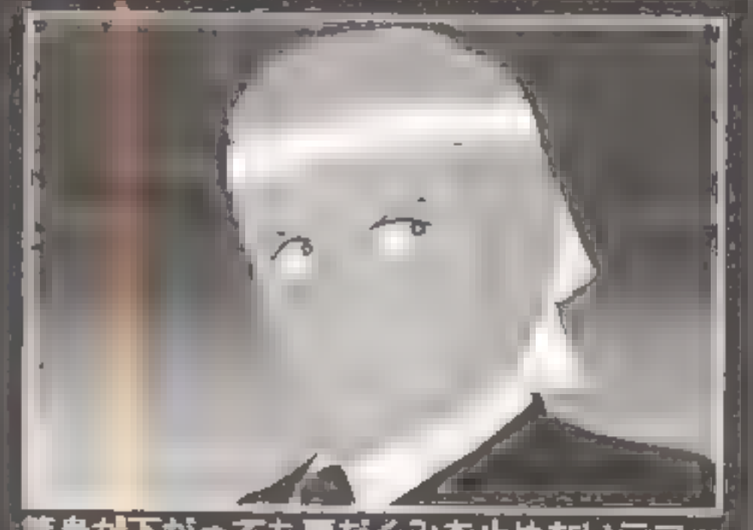
デロイアにいる連邦軍トップのふたり。デロイア州代表で第8軍司令官のフォン・シュタインさんと、北極ポート守備隊司令官ブレナーさん。このベーシのパイロットとラコックの合わせて8人でブロックヘッドくんのゼンマイを巻く。

ゼンマイ巻きチームのラコックさん



『チョロQダグラム』でも陰謀を一手に引き受けている悪役。格好をつけているだけに、頭の連邦旗がちょっと痛い。でもギャグ映画なので、すぐに表情が崩れるぞ。

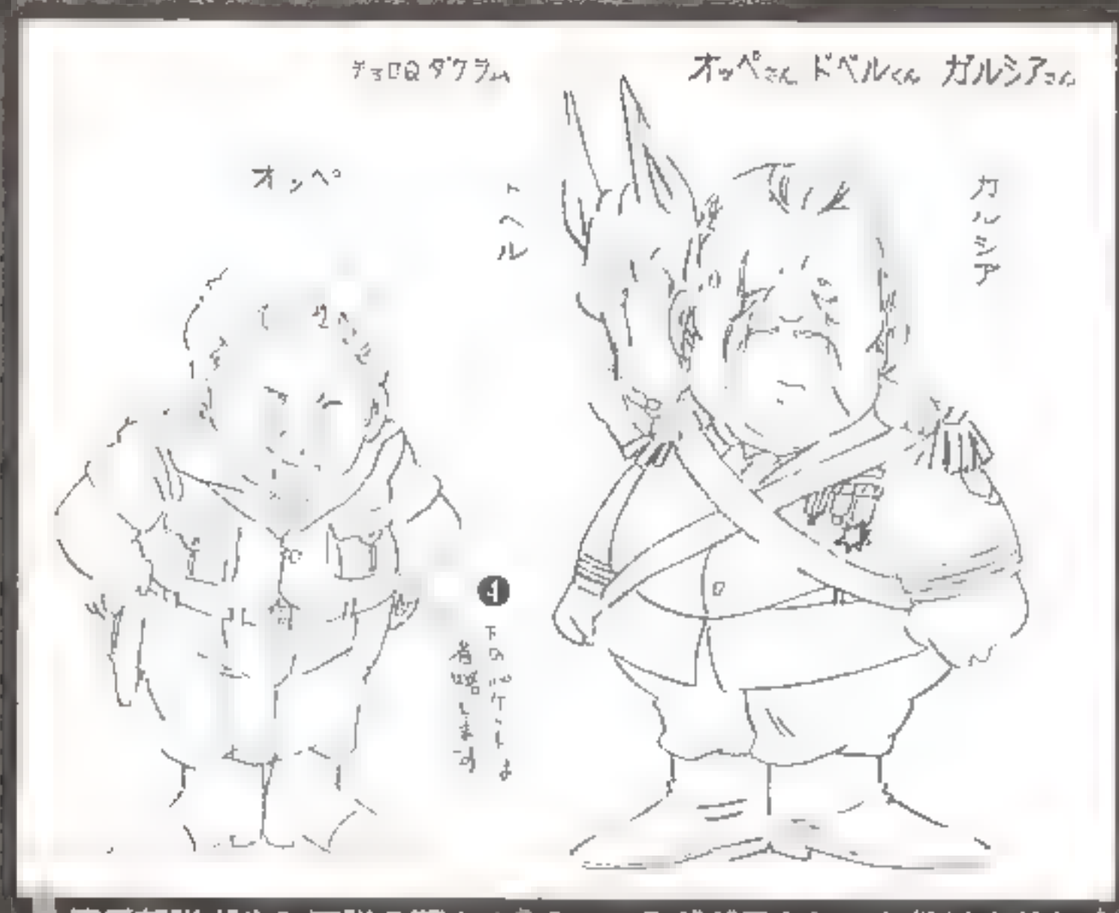
ゼンマイ巻きチームのダークさん



身長が下がっても悪だくみを止めないラコックさん。

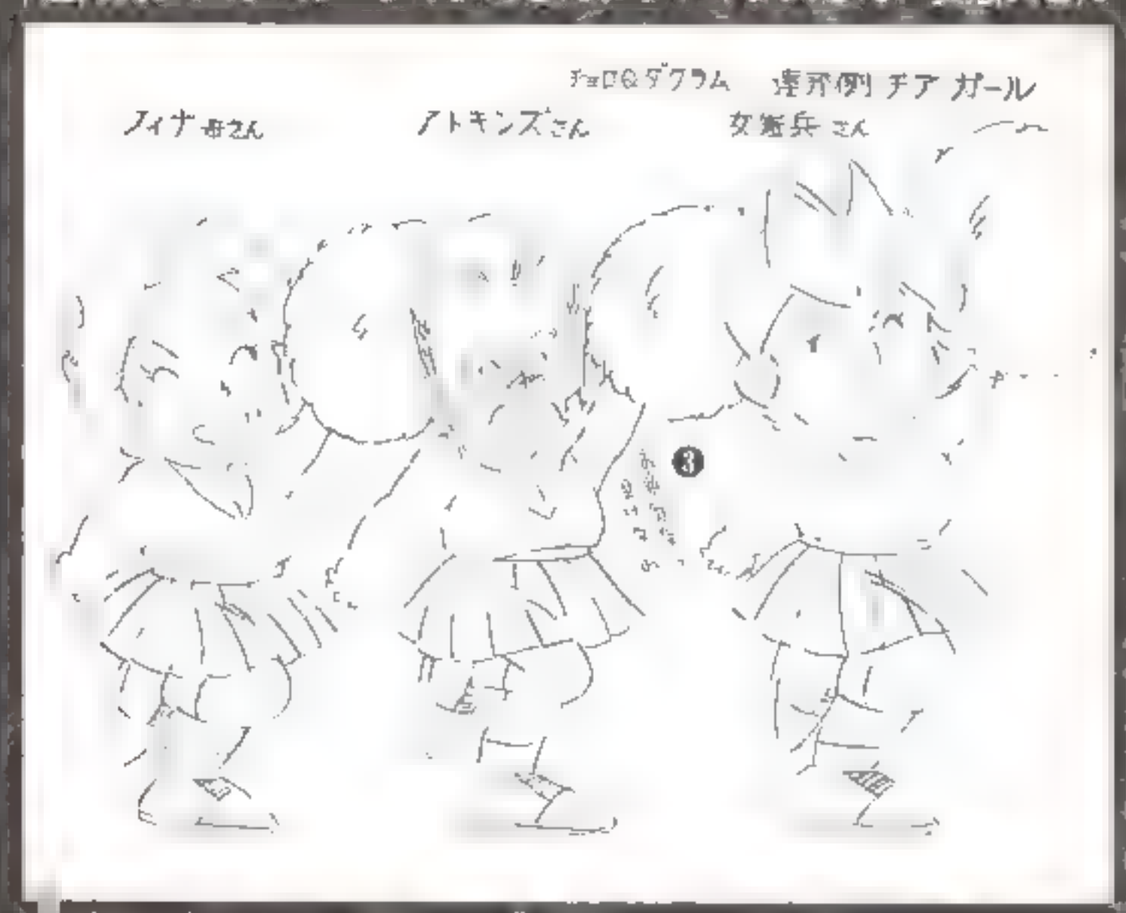
調査員の[illegible]に[illegible]を乗ったか、今回はサポート役に徹している。設定はないが、24番隊のパイロットたちもモブとして登場しているぞ。

オッペさん、ドベルくん、ガルシアさん



傭兵部隊ガルシア隊の面々。「チョロQダグラム」でも情け容赦なくクリノとダグラムを襲ってくる。ドベルは映画の中でも設定と同じくガルシアにおぶさっていた。

連邦側チアガール、フィナ母さん、ワトキンスさん、女衛兵さん



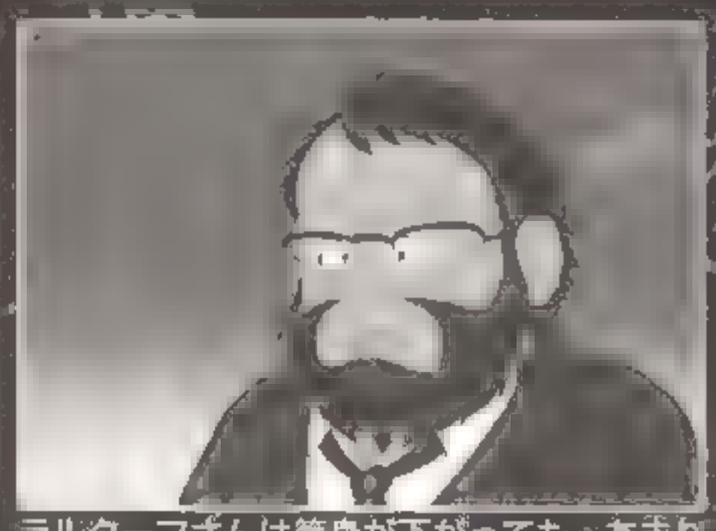
映画の中ではフィナ母さんとワトキンスさんの位置が逆。しかしそれはひどい。ホワイトさんの妻でジョルジュくんの姉のサラさんやテスタンさんの妻のオレナさんなどワトキンスさんよりはましな人材は連邦側にもいくらでもいたのに……。

アナウンサーのジョルジュくん

車の回転の良さを買われてレースの実況中継を担当したジョルジュ。TVシリーズでは強い訛りがあったが、なぜか直っている。実況内容にも土臭い訛りはなかった。

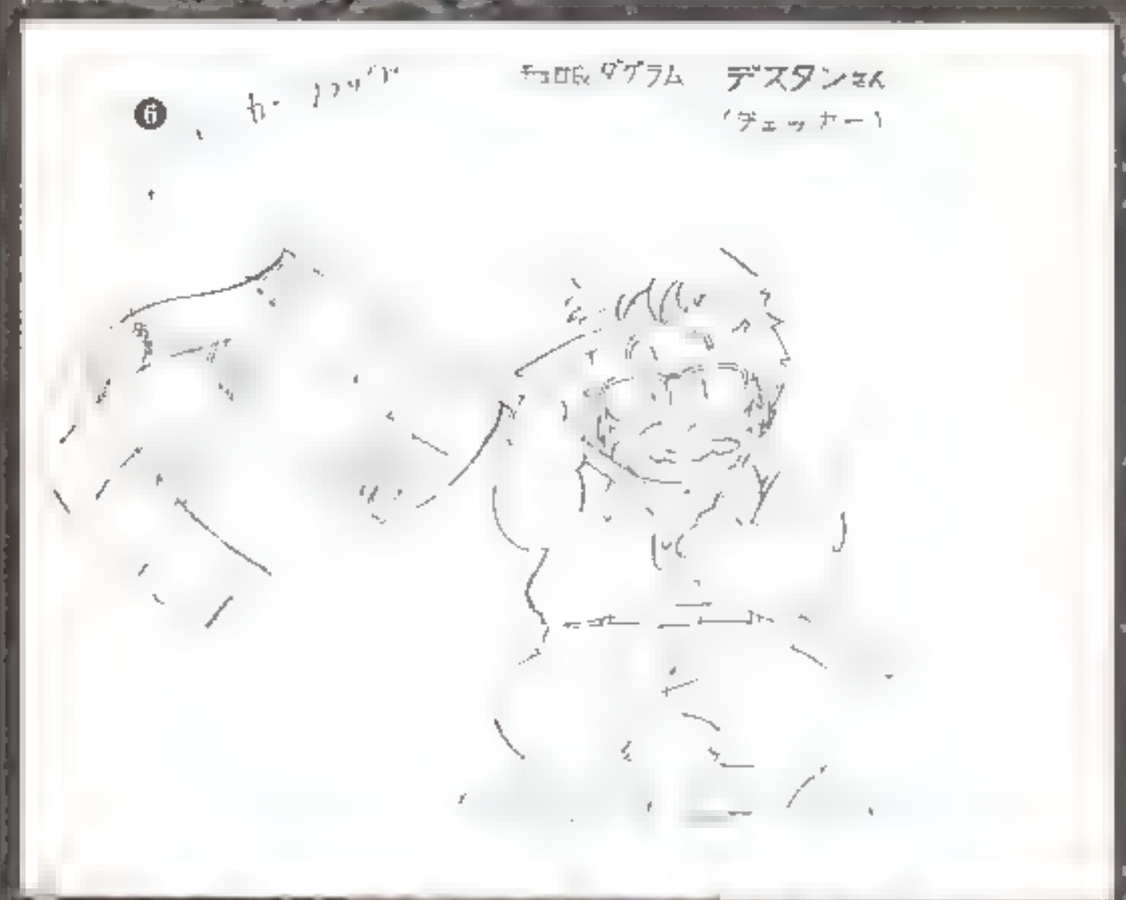
スターターのラルターフさん

レースのスターターのラルターフ。たしかに登場人物中では比較的中立の立場の人物といえるだろう。映画では緊張のあまりすっこけてしまう。



ラルターフさんは等身が下がっても、あまり変わった感じがしない。

チェッカーのデスタンさん



どうひいき目にもいえない悪人面はそう見えなくもないが、ひたすら惨めな役割だったデスタンだが、実に楽しげなキャラになっている。「チョロQダグラム」で救われた人といえるかもしれない。

◀設定補足▶
❶連邦側合わせて下さい。❷乗ろ。❸お色気なら負けないわ。❹下のポケットは省略します。❺少し目。❻チェッカーフラッグ

ダグラムの時代

高橋良輔 VS 井上幸一

TV放映から26年後の2008年5月某日、『太陽の牙 ダグラム』の生みの親である高橋良輔監督と、当時設定製作を担当した井上幸一・プロデューサーにお話をうかがった。監督は今日も『ペールゼン・ファイルズ』を作り、井上氏は関係各所を駆け巡っている。獅子も狼も、今、現在もなお走り続けているのだ。はたして『ダグラム』25年の真実は見えるか!?

取材・文／仁　肇

――まず『ダグラム』のオファーはどのように受けられたのでしょうか？『009』(※1)からしばらく間があいたとして、その頃ですと並行して『まんが日本昔ばなし』(※2)の演出もされてましたよね？

高橋　そうですね。『昔ばなし』はたらたらと長いんです。

――『ガリアン』(※3)の頃までは〝あかばんてん〟(※4)と〝サンライズ〟作品の並行作業が続いていた？

高橋　ええ。仕事としては、ずーっとその間を埋めてます。

――そんな時期に『ダグラム』のオファーをどういう形で受けられたか、という話をお伺いしたいのですが。

高橋　サンライズさんとは縁が深いんですよ。ほとんどが虫プロ出身者でしたからね。中でも岩崎（正美）(※5)さんは、僕が虫プロを辞める頃には制作を背負って立つような活躍をされてましたし、山浦（栄二）(※6)さんは撮影監督をやりつつ、新しい技術の開発にとても熱心で、僕も演出の立場から、一緒にちょっと遊んでみようよ。なんて、そういう付き合い方をしてました。

撮出しの時に実験的な手法を試してみるとか？

高橋　現実の仕事とは全く関係なしで、撮影素材からレンズの使い方までセオリーをひっくり返すようなことを考えてました。複数の撮影台をそれぞれ別の角度で斜めにしたり、背景をローラーでぐるぐる回そうとしたり。ビルとか樹木とかいろんなものをくっつけてね。それをカメラ目線で撮って、飛行機が着陸する様子を再現するとか、そんな事をやってたんですね。

――ユニークですね。

高橋　そんなこんなの付き合いも含め、山浦さんとは呑み友達でもあったんですが、虫プロの事情で企画をやるようになった山浦さんの変化と、僕自身が虫プロを辞めてからの変化って結構ダブるところがあったんです。そんな関係が『ゼロテスター』(※7)の頃もずっと続いていて、あくまで、サンライズのお手伝いをする、というような事情が多かったんですね。『009』の時もそんな感じでした。ところが『ダグラム』の時は違っていました。初めて、「こういう理由がある。だから一緒にやろうよ」と言われたんです。他にも沼本（晴海）(※8)さんと、こう重要な方にも声をかけて頂いたんですけどね。

――どのように違っていたのでしょうか？

高橋　それは〝ガンダム〟(※9)のヒットによって、〝オリジナル作品を作れる〟ようになった。何かとよそ様の〝原作〟が必要だった今までとは違う、そういう時代が来たんだよ。…という誘いだったんですね。どういうことかというと、それまで僕は、言を左右にしてサンライズの仕事を避けてたんです。「ロボット物は自分は事情あってやらない」って言って。『009』の時は「これはサイボーグだからいいだろう？」と押し切られましたが、でも本当はそんなの関係なくて、自分自身がアニメーションの演出にちょっと自信が持てない時期だったんです。だからといって、アニメーションから離れるという積極的な意志があるわけでもなかったんですけどね。

高橋良輔　演出家。『太陽の牙ダグラム』では原作と監督を担当した（第31話まで神田武幸氏と連名、第32話から原作のみクレジット）。『装甲騎兵ボトムズ』『ガサラキ』など、硬質感溢れるアクションドラマを得意とする。また演出のみならず、プロデューサー、小説家としても活躍している。近作には『FLAG』『幕末機関説いろはにほへと』『装甲騎兵ボトムズ ペールゼン・ファイルズ』などがある。

——ルーチンで続けるのがなんとなく嫌だったということですか？

高橋　いや、周囲が思っている〝アニメーションの演出〟という、僕に対する期待と、それに応える自分との間に差があったんですね。当時のアニメーション業界は、右肩上がりでどんどん作品数が増えてましたから、僕程度の演出能力でも仕事は来るんですよ　だけど自分がそれに応えられてる気がしなかったんです。「自分の力では応えられない」って感じでした。だから、アニメーションの仕事からちょっと距離をおこうと考えていた時期だったんです。『009』をやってる時も心情的には変わってなくて、自分の中に〝アニメの演出をしていく〟ということに疑義があって断り続けてたんです。そこに『ガンダム』が当たったことで、「自分たちの価値観で作品が作れるようになったんだ」という意識があったんでしょうね。山浦さんにとってもそれはすごく大きいことだったと思うんですよ。それで「変化の時だから一緒に仕事をしよう」と誘われたのが〝ダグラム〟なんですね　ダグラム〟に関して言えば、今までと違って、〝原作〟の立場でやれたのも大きかったですね。

井上幸一　太陽の牙ダグラム　では設定制作を担当、現在は企画開発室で室長を務める。その後は『ガンダム』・『ボトムズ』・『勇者シリーズ』など、サンライズを代表する数々の作品に携わった。90年代後半からプロデューサーとして活躍、近作に3DCG作品『機動戦士ガンダム　MS-IGLOO　黙示録0079』『や、バンダイとの模型企画『U.C.HARD　GRAPH』などがある。

——『ガンダム』のヒットを受けて、というのは事実その通りだと思うんですが、先ほどお名前が出た沼本さんは虫プロ出身で、当時タカラの企画担当をされてましたよね。で、〝メカを出す〟というのが企画の条件だったと思うのですが、そのメカに関して、参加された時点でどの程度進行していたのでしょうか？

高橋　僕の記憶では「仕事しようよ」って言われた時にはメインのダグラムは出来てましたね。デザインは多分、ほぼ、というか完成していたと思います。

井上　えっとねぇ、初期デザインが人体三月くらいまでで、まだこのデザイン（※10）なんですよ　これが二月・四月で、そのあと首がちょっと〝カクッ〟となった分離型が出てきて。

高橋　僕はね、これはね、見てないよ。

〝ダグラム〟そのものは八割方僕だと思うんですよ。でも、他にも色々考えたんですよ。

——見てない（笑）

高橋　記憶にない。あとになって見たかもしれないけど。この『スペースバッファロー』（※11）っていう言葉自体はちょっと覚えてるんだけど、テンから僕の中にはないからさ。

井上　『ジャスティクス』と『ザクティクス』は？

高橋　それはありますよ。言葉としては最初に『ザクティクス』とか『ジャスティス』とか、その辺は検討してたから。

——だとするとそのあたりは井上さんにお伺いすることになるのでしょうか。

井上　今分かる時系列でいくと、僕は『ダグラム』の初期に参加してないんですよ。企画が始まったのが放送の前年で、具体的なデザイン作業や設定が始まったのが十一月くらいと聞いてます。

高橋　昭和五十五年です。

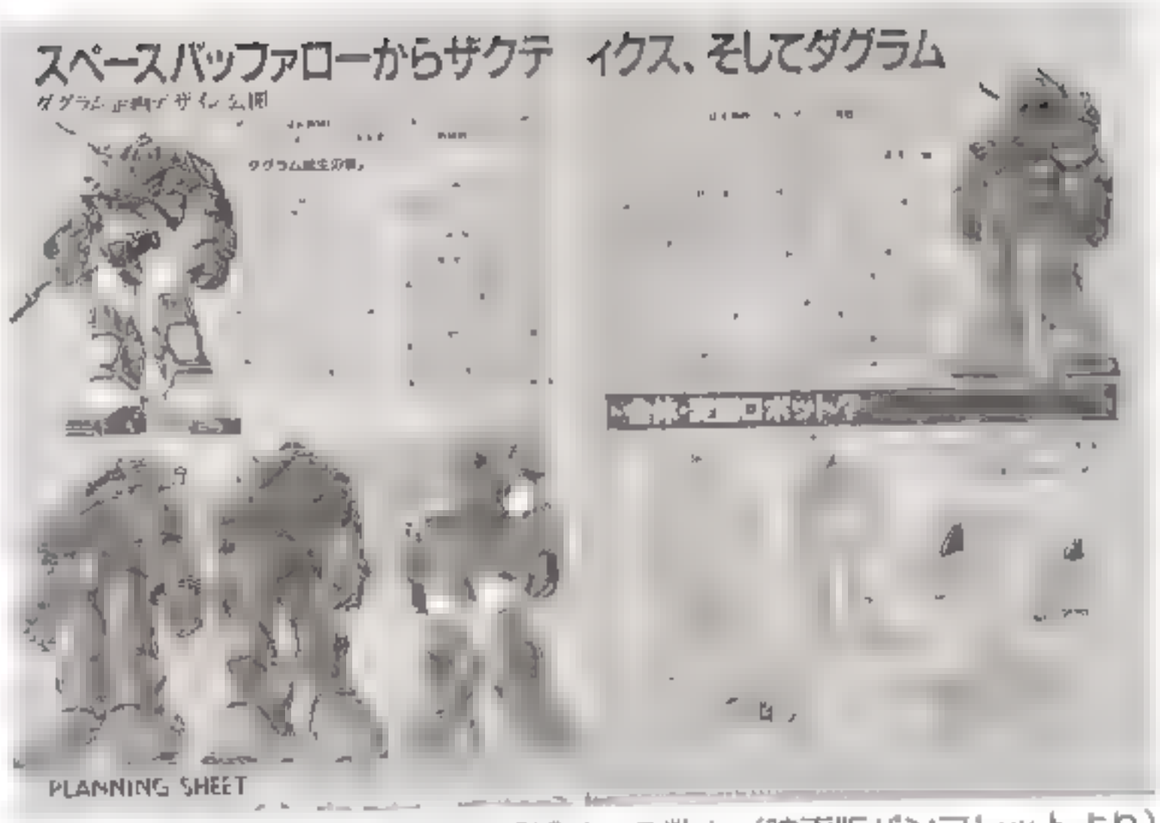
井上　その翌年三月、四月頃の企画書が『スペースバッファロー』と書かれた星山（博之）（※12）さんの手書きの冊子だったと思います。

——そもそも『ダグラム』はどなたの命名なのでしょうか。できれば「太陽の牙」も。

高橋　僕はね、これはね、見てないよ。

ダグラムの時代

高橋良輔 VS 井上幸一



ダグラムの初期デザインの数々（映画版パンフレットより）

じゃないか」ってね。なんせ未だに〝ゼロ・ロボット〟に固執してるもんですから。

井上　ゼロ・ロボット！　懐かしい。『ゼロテスター』の4脚ロボットじゃないですか。

――4脚ロボのお話が出たところで、二脚と多脚との住み分けは、監督が参加される前から設定されていたんでしょうか。

高橋　それは多分なかったですよね。お話を作りながら思いついたものです。

――では、基本的にはダグラム対ソルティックという図式が根幹にあったとして、敵メカとしての多脚型、より戦車に近いメカ群はいつぐらいから導入されたのでしょうか。

「新しい企画を作るなら（ガンダムと）同じじゃない方がいいよね」ということですね。

井上　「戦車に直接脚生やしちゃえばいいじゃん」って言ってたのは、あれ神田（武幸）（※14）さんでしたっけ？

高橋　『ダグラム』の時には既に『スター・ウォーズ』（※15）がありましたからね。

――やっぱりあれですか？　スノーウォーカー。

高橋　そう、AT・AT。だってメインメカに〝ダグラム〟って名前がつく前は、こいつが〝ソルティックD7〟って呼ばれてたんだから。『スペースバッファロー』はロボットの名前じゃなかったんです。

井上　〝世界観〟でしたよね。

高橋　そう、立体出世モノの世界観を表すタイトルだったんですよ。

――そうすると、当初想定されていたものは、例えば『ガンダム』のようにメインメカとライバルメカがあって、当時の流行からして、いわゆる〝ロボット物〟が想定されていた。しかしながら、監督が参加されて以降、まあ「地べたモノ」と言ってはナンですが、地に足がついたお話になったということでしょうか？

高橋　〝宇宙物〟というよりは、「太閤記」をロボット物でやるようなノリだったんですよ。要するに主役ロボを持った若者が出世して、ロボットと共に天下を取っていくという。

――確か〝スペースハッノファロー〟はそういう企画でしたね。

井上　サンライズ的にはトラディッショナルな設定ですよね。

高橋　『スペースバッノファロー』の企画書は他三回見てるんだ。「どう変えても構わない」って言われたからね。でないと、あれをここまで変えられないよね（笑）。

井上　山浦さん後でブツブツ言ってましたよ。

――必殺武器的なリニアガンのギミックはスポンサーからの要望だったのでしょうか？

井上　いやいや、その頃サンライズには、真尾くんという稀代の設定マンがいまして、SF考証やらメカ考証などのシステムは全部できていて、リニアガンを使うことも決まってたんです。ソルティックは手持ち式だけど、ダグラムは変えたい。で、誰が言い出したのか「腕に直接装着しよう」と。

高橋　〝腕に直接〟は僕かもしれない。要するにまだ〝銃を持つ〟っていうのに抵抗があったんですね。「機械なんだから手に付いていていい」って（笑）。だから星山さんは、企画書は『スペースバッファロー』で書いてますけど、監督や神田さんが参加してから、中身を調整してどんどんこのスタイルの物語になっていったんですよ。それは間違いない。

――そういった物語の骨子やキャラクターが固まって行く途上において、『ガンダム』はどれぐらい意識されましたか。

高橋　『ガンダム』は「009」の途中で放送が始まったので、第二話から生で観てるんです。僕は他の方の作品しっくり観る方じゃないんですけど、その後も何度か観ました。ただ、意識したとすれば「新しい企画を作るなら（ガンダムと）同じじゃない方がいいよね」ということですね。

――『ダグラム』は、ポジション的には紛れもなく〝ポストガンダム〟に分類せざるを得ないと思うのですが。

高橋　それは人によって違うと思うんですけど、解り易く言うと「『ガンダム』というのはロボット物を戦争物に変えた」という評価があるでしょ。それまでの敵というのは、宇宙人や世界征服を企む悪の秘密結社であって、国家対国家、○○連邦対××機構とか、そういう公の主権国家同士が戦う訳じゃないですよね。ガンダムではロボットが兵器としての位置付けを与えられて、そのアクションも軍事行動の中のひとつになったということです。

――確かに。

高橋　キャラクターの個人的な行動も、大局的には戦争行為に含まれるという位置付けですよね。表現が優れているとか、デザインが秀逸だとか、物語が良かったとか、色んな側面があるにせよ、もっとも画期的だったのは「ロボットの位置付けを決定的に変えたこと」だと僕は捉えたわけで、それがすごく新鮮だった。そこは踏襲した上で違うもの、といっても『ガンダム』には、ロボットのほかに宇宙戦艦も出ていて、メカもキャラもそれぞれ、空軍的格好良さや海軍的スマートさをあわせ持っている。同じものを追ったのでは出来の悪い二番煎じになりかねない。

――〝戦争モノ〟ではオリジナルな要素を出し難い？

高橋　僕の中では、別個の意味で「オリジナルを作る」というエネルギーには、何らかの感応があったんですけれど、じゃあ自分の演出力とか、その頃はまだ塩山（紀生）（※16）さん始めスタッフの力量も分からない。だったら、空軍海軍のスマートさは捨てよう。だとしたら、陸軍の中の陸軍だろうと。要するに、地べたを這いまわる感じでいいだろうと、自分の中での位置付けというか住み分けを考えたんです。

――陸軍はスマートじゃない？

高橋　僕らが観てた『コンバット』（※17）とか、昭和30年代には第二次大戦モノがずいぶん封切られたんですけど、どれもスッキリしないんですよね。でも、岡本喜八監督の『独立愚連隊』（※18）と『独立愚連隊西へ』の2本は面白かった。出てくるのは、みんな汗臭くて汚い奴ばっかり。これなら〝ガンダム〟とは違うフィールドでモノが作れる。

――これでヒットはもらった（笑）

高橋　ただ、『ダグラム』を作り始めた頃、『ガンダム』はまだ〝大ヒット〟ってわけじゃなかった。その兆しというか、発展していくだろうという予感はあったけど、ここまで続くとは誰も思ってなかった。だから富野（由悠季）（※19）さんだって新しいものを次々と手掛けたでしょう。その中で、富野さんはロボットの扱い自体毎回変えていたけれど、僕は〝軍事行動の中の兵器〟としての位置付けは捨てられないと思ったから『ダグラム』の次に『ボトムズ』（※20）だ『ガリアン』だって『ガンダム』と同じ様なフィールドでありながら、なおかつ違うものを作り続けたんです

――「朽ち果てたダグラム」という冒頭のイメージは、いつぐらいにできたのでしょうか。

高橋　相当後ですよ。シナリオも5～6話まで進んでて、実際には2話になってしまった1話が作画に入ってた時期ですから。一応は順調だったんですが、どうも景気の至りというか、自分で物足りなさを感じたんですよ。一番は何かと言えば、7話～8話までダグラムが出てこないですよね。セオリーとしては主役メカがいきなり派手に行くべきかもしれないけど、地味でもいいからひとつずつ積み重ねていくと決めて、みんなに説明して作業していた訳です。ところが、どこかで「これでいいのかなぁ」という不安がむくむくと沸き上がってきまして

――〝足りないところ〟に監督は気づいたわけですね（笑）。

高橋　それともうひとつ。私情というか私心ですけど、自分の中で非常に欲しかったものを、何とかロボット物に入れられないかと考えたんです。

――アニメ誌などに露出していた〝赤錆びダグラム〟のメインビジュアルも非常にショッキングでしたし、第1話のファーストシーンも非常にノスタルジックなものでした。

高橋　制作が始まって、スタッフはすでに回り出してる状況の中、監督である僕が「何かが欠

けてる」なんて言い出したもんだから、皆さんには相当心配かけましたよ。「1話の前にもう一本作りたい」なんて言っても何にもないんですから。それでプロデューサーの岩崎さんに、実は今までにも根本的な悩みがあったんだ」と相談に行ったんです。すると岩崎さんが「スケジュールとしてここまでにできるなら今回的にバックアップするから、やっていいよ」と言ってくれたんですよ。あの人は度胸がある人なんですね。「それで出来なかったら駄目。これはあなたの作品だけれど、ひとりで作ってるわけじゃない。現場もあるし、出来ることと出来ないことがある」と、はっきりと枠を提示してくれたんです

井上　確か4話くらいまでのシナリオが決定稿になっていて、絵コンテも始まってた。10月番組の6月。それで「大変だァ」てんで、僕が1スタに行く事になった。

高橋　実際、作画の打ち合わせの時にも何もできてなかったんですよ。それで必死に考えて浮かんだ方向性が、松本零士さんの「戦場まんが」(※21)シリーズ。「これだな」と。

――非常に抒情的な作品ですよね。

高橋　音楽や台詞や絵のイメージを組み立てつつ、抒情性を盛り込んでおいてからアクションに入ろう。そこまでは決まったんだけど、さぁ今日の打ち合わせ用の絵コンテのひとつも出来てない。ワンカットも。でも頭の中にはあるしょうがないから、原画マンが集まってるところで黄色のレイアウト用紙に「こういうやつが」と、描いて説明を始めるんだけど、みんなは説明が終わったらコンテがサッと出てくると思ってるけど…ない　そのうちに神田さんが「あ、これは何にも出来てないな」と気が付いた。今でも覚えてますけど、とても優秀な青鉢（芳信）(※22)さんという「トラックの運転手あがりで気が荒い」という触れ込みの、小柄だけど腕っ節の強そうな方の様子がみるみる変わってくんですよ。「参ったな、どこで謝り入れようかな…」と思ってたら神田さんが「…というわけで今日はここまで」って止めてくれたんで事なきを得たんですけど。

井上　いや、極めてリアルです（笑）

高橋　で、1話のイメージが固まっていったその頃になって、ようやく自分の中で『ダグラム』の全体像が見えてきたんです。

――監督と神田さんが互いに監督というポジションで組むことになった経緯を伺っておきたいのですが。

高橋　正直言うと、最初に監督を頼まれたのは僕だったんですけど、先ほど言ったような理由で、監督や演出という仕事に関して疑義があった。それから、現場をちょっと離れていた不安もあったので、僕が「一緒にやってくれないか」って頼んだんですよ。神田さんはサンライズと付かず離れずだったので現場の空気も分かってる。それで共同監督で、ということになりました。僕のわがままに神田さんが付き合ってくれたんです。「しょうがないなぁ、ちゃんとやるんだよ」ってね　そんな甘えが許されたのも、実は僕の方がちょっとだけ虫プロ入社が早かったからなんですよ。その頃の虫プロは、一週間違ってても「先輩」って空気があったんですね。で、同い年だけど彼は遅生まれで学年がひとつ下という微妙な関係でもありまして、日頃そんな意識は全然ないんですけど、神田さんは何かとフォローしてくれたんです。

井上　部活動でもないのになぁ。なんででしょうねぇ。

高橋　神田さんが西所沢に引っ越してからは、お酒呑んでて電車がなくなると、僕が自転車の後ろに乗せて彼の家まで送るんです。その頃の僕は体力があって、あまり酔い潰れないんですよ。翌朝になると「もうね、良ちゃんの背中が汗臭いの」なんて誰かに愚痴こぼしてやがったらしいんですけど、別のところでは「ちょっと兄貴みたいに思っちゃうんだよねぇ」なんて感じのこと言ってたそうなんですよね。ほんのちょっとの微妙な違いなんですけどね。

――逆に神田さんが居たことで、監督のわがままというか、やりたいことができたと。

高橋　そうですね。だから僕が「こんなことをやりたい」と言うと神田さんが「面白い、じゃあ具体的にこうしよう」とか「こういうシチュエーションにしよう」と言ってくれる。やっぱりロボット動かすのは〝不思議パワー〟じゃなくて具体的に燃料が必要で、戦場で燃料補給の話とかどう？　と言う感じで、僕と星山さんが物語を作りつつ、神田さんがちゃんと演出をしてくれるというコンビネーション。だから30話の頃にはクレジットも変えてもらって、僕自身は楽になって物語作りの方に力を割けるようになった。神田さんは神田さんで遠慮深いから、自分が起こしたコンテを「これでどうですかね。良ちゃん」って持ってきてくれる。

――単なる分業ではなかったわけですね。

高橋　そういう意味では、亡くなったから何でも押しつけちゃうわけじゃないけど、世話になりましたよ。僕、神田さんとやってなかったら多分、70本なんて長丁場はできなかったろうし、今ある『ダグラム』じゃあなくなってたかもしれませんね。

――兵器を物語の真中に置いたとして、主人公を反体制側のゲリラ組織におくという発想は画期的というか、主人公としては有り得べからざるポジションだったと思うのですが。

高橋　『独立愚連隊』で行きたいって言ってたんですけど、後で神田さんから「ちっとも独立愚連隊じゃなかったね」って怒られたんですよ。それは、少しばかり政治的なテーマに流れ過ぎ

たきらいはありますけど、でも〝デロイア7〟に関してはそういうイメージがあったんです。最初っから政治的に偏るようなつもりはなかったんですが、これはやっぱり星山さんと僕が組んだための化学変化みたいなもんですよね。星山さんは反権力っぽいところがありましたし。

内々の打ち合わせでも、60～70年代の空気が…という話は出てきました。デロイア7側のモチベーションはそういうところに根ざしているんだろうなぁ、と。

高橋　そうですね。まず星山さんは世代的に真っ直中だし、僕もその尻っぺたにいたけど、僕自身はノンポリというか、何の行動も起こしてなかった。外れたところから見てたんですね。たまたま安彦（良和）（※23）さんもその世代で、だからたまに『ダグラム』の話をすると「僕はラルターフが気にくわない」とか言われるわけですよ。恐らくああいう傍観者的な奴が大嫌いだったんでしょうね。僕はラルターフが傍観者だったとは思ってないんだけど、ああいうポジションは嫌い、と。安彦さんは何をやるんでも自分が飛び込んでいって無理して体を壊しちゃう。富野さんは先頭切って旗を振る方かもしれない。大体僕は真ん中に行かないタイプですから、そういった違いはあるかもしれない。だから作中にも、思いつく限りの色んなタイプの登場人物を出しました。ラコックだとかデスタンとか、自分が外から見ていた〝政治の季節〟の弱い奴、強い奴、立ち回りがうまい奴、普通の奴と、自分なりに全部入れていったんです。

――監督ご自身の過去のしがらみや人間関係を投影されてる部分があって、「虫プロにデスタンはいっぱいいたけど誰々はラコックだった」みたいなお話を伺ったことがあります。

高橋　僕らの世代はなんというか、若者だった頃から圧倒的に反体制なんですよ。その立場でものを言う傾向がある。その中にも色々あって、過激になるほどちょっとだけ違う考え方の人は評判が悪い。同じ反体制なのに。僕は本当にグズで煮え切らない。何でかと言うと、母親が二千人も女性従業員さんがいるところの組織労働者でしたから。当然その頃は組合があって、何かと動員されるペーペーだったわけです。で、その組織にも絶対的な支配構造があるわけ、

僕らの世代はなんというか、若者だった頃から圧倒的に反体制なんですよ。

ですよ。別に小学校の低学年だから具体的な事は何も分からないんですけど、それに関する母親と同僚の愚痴から何かを感じ取ってたんでしょうね。

――そうでしょうね。

高橋　その下敷きがありつつ、大学あたりでは「人間の集団が持つ権力構造には右も左もないんだ」ってのが染みついちゃってる。卑怯だろうけど、どっちの側にも入れない。それが自分のモヤモヤですね。「どこにも属さない」ってのは結構淋しいところもあるんです。そういう複雑な忸怩たる思いが入ってるんですよね。どっちかに入って旗振ってるか、その後ろの方で怪我しない程度にゲバ棒持ってる方が昂揚しますから。一緒に仕事してた吉川（惣司）さん（※24）なんて、その頃は散々物を投げてたんだから。でも、身も蓋もない言い方をすれば、そのことによって社会から排除された人なんて、僕が知ってる限り誰もいないわけですよ。糾弾されるような過激な人は、極端な話、妙義山で死んだりしてるわけですからね。

井上　クリンのうち位置が、今の監督のおっしゃってた事にもの凄くシンクロしますね。

高橋　悩み多き青春ですよね。

井上　地球側の体制から飛び出してゲリラに身を投じ、物語が進んでいくほど、ダグラムで活躍すればするほど、彼はものすごく控え目、強くなってきたんです。どういうことかというと、神田さんは物語よりキャラクターに感情移入するし、そのキャラクターを作り上げていった現場、声優さんも含め、〝神田組〟が出来上がっていたんです。その中で僕と星山さんは、神田さんの思い描くラスト」を取り入れざるを得ないだろうし、それに則した収め方にしようよ、という風になってましたね。

――あのラストシーンこそ、物語が求めた〝絵〟と思うのですが、微妙に違っているのですか？　そもそも開始時の予定は何クールだったのでしょうか。また、2クール増えて70本を超えた理由は？

高橋　当初は普通に1年52本の予定だったんですが…なんででしょうね？

――最終回でクリンは自らダグラムを葬って里帰りしましたが、母親と抱き合った時の表情を見ると、決して挫折したわけではない。やはりこの物語はクリンの目線で語られたもので、ごく単純にまとめると『ダグラム』はクリンの成長物語であったと総括できると思うのですが。

高橋　〝朽ちたダグラム〟やフォン・シュタイン大佐、ラコックとかその親兄弟、それからデロイア7に関しては、物語の進行上後回しにしたけれど、余裕があれば作りたい物語やシーンがあったんですよ。で、最後をどうするか、という頃合になった時に、神田さんの意向が段々

【完本 太陽の牙 ダグラム】

インタビュー

ダグラムの時代　高橋良輔 VS 井上幸一

ひょっとすると、プラモデル用のアニメ企画って、これが最初じゃないですか？

井上　「ごめんなさい終わらない」って言ってたじゃないですか。

高橋　「終わらない」って言っても終わらさへれちゃう時があるわけでさ。

――結局は『ガンダム』も兵器兵器と言いながら、商品にはそれほど反映されていませんでした。当初から確信犯的に兵器的なテイストを持った商品を出したのは、やはり『ダグラム』が最初であって、それはプラモ・アニメファンだった我々には非常に画期的なことだったわけです。それが4クールから更に延長されるに及び、やはり商品の売れ行きが好調なんだろうということは素人考えでも理解はしたんですが、実際に「じゃあ延長しましょう」と言う判断はいかにして下されたのでしょうか。

高橋　僕は延びたことに関してあんまり当事者意識がないんですよね。

井上　それじゃあ僕の方から話しましょうか。…ひょっとすると、プラモデル用のアニメ企画って、これが最初じゃないですか？

――そう思います。

井上　その前は玩具なんですよ。同じ時期の「ザブングル」(※25)にしてもベースは玩具であって、バンダイさんが参入してきたから「プラモデルにもしますよ」という話になった。

――主役メカは完全に玩具的発想であって、周辺のメカを無理矢理プラモ寄りにしたという印象があります。

井上　とはいえ、バンダイさんが「プラモデルで出す」のが前提であれば主役メカもプラモで出るということですよね。『ダグラム』にも玩具寄りの"デュアルモデル"があったけど、どちらかと言えば「プラモデルと並行して作りましょう」という発想で始まってる。そういう意味では純粋にプラモ用として企画された作品だった。デュアルモデル以外にもいろんなラインナップで玩具類が出たんですけど、それらも結構売れ行きが良かったんですよね。

高橋　プラモの売れ行きもそうですが、12チャンネルの視聴率がよかったんですよ。悪かったのはアニメ雑誌の評判（笑）。

井上　それでも当初「ダグラムのプラモは"質感"ではなく"質量感"がちょっと弱いぞ」という指摘というか感想があって、それを途中で"ヤクトタイプ"として、金型を新たに起こし直してるんですよね

――あれはたまげました。

井上　それぐらいタカラさんはやる気があって、全部作り直してしまったから「こりゃ取り返さにゃ」ということでジープからトラックまで全部出したし、売上げもそんなに落ちてない。「大丈夫、まだしばらく稼げる」って言い方じゃないですけど「ビジネスになるんだから」と延長を後押ししてくれてたんですよ。物語としてもパルミナに渡ったあたりから「ちょっとここまで時間かけ過ぎたね」という話があって、監督の作品にしては珍しく、この後とにかく北極オートまでいくんだという構成も出来上がっていて（笑）。地図は最初から全部出来ていたので、その前にカルナック山脈を越えなきゃいけない。ここまで二十何話かかったのに、この先十何話で終わるはずがない　その辺から延長論が出てきたと思うんですよね　凡々10月新番と言う変則的なスタートだったんで「じゃあ本当は春番組切り替えの方がいいよね」なんて大人の事情もあって「春まで走りましょうか」ということに落ち着いたと思うんですよ。放映話数は75本ですけど、総集編が3本入ってるんで、72本がオリジナルの話として作られた。いやー、延びて良かったですよね。そういう意味では。

高橋　そういう事情が（笑）。

井上　その辺は沼本さんがバックアップしてくれてますよ。

――そんなに暗躍してるんですか？

高橋　暗躍って言うより代表ですね。

井上　タカラというスポンサーサイドの人間として、我々の代表者として動いてくれてたわけです。そこで「次の番組を迂闊にちょこちょこ作るくらいなら、売れてることでもあるし、このまま行きましょう」って後押ししてくれたんですよ。別に一年で切らなきゃいけない法律がある訳じゃない。おもちゃ屋的なビジネス論理の商品とは違うんだ。その時たしかガンダム』はMSVも含めて3年以上ビジネスになってるんだ。好調な番組を一年で終わらせる意味はない、みたいなことを言ってましたよ。非常にありがたい御言葉でした。視聴率もいいし。

――今では「積極的に切り上げる必要がないものは、テコ入れかシリーズ化して続けるべきだろう」みたいな風潮がありますね。

井上　延長に当たって「このルート行きましょう」とか地図まで作ったその背景には、やっぱりMSVがすごい影響を与えてましたね。寒冷地帯とか熱帯雨林とか砂漠気候とかいっぱい出るしゃないですか。色んなシチュエーションに引かせなきゃいけない　でもダグラムはまだ砂漠しか回ってなかった（笑）。そういうものもちゃんと見せなきゃいけないし、大河原（邦男）(※26)さんも色んなパターンのスケッチを描いてくれたし。最終的には山越えて北極ポート行って、その後帰還して砂漠で朽ち果てる。だ

から本当、クリンたちって随分旅してるんですよね。あの足を踏破してるんですから。

――ロードムービー的な趣きも無きにしも非ずでしたしね。

井上　あれたけ環境が変化すれば、周辺にも色んなメカが出てくるし。

――『ガンダム』でもMSの空輸ユニットは出てきましたけど、ローターの位置などが変則的でした。『ダグラム』の世界にはワープ航法まであるというのに、あからさまな〝ヘリコプター〟が出てきた。CBアーマーまでヘリコプターで移動する。それがとてもリアルだった印象があります。

井上　監督がヘリボーンに対してこだわった理由ってあるんですか？

高橋　それはやっぱりベトナム戦争のニュース映像が僕の頭の中に入ってたんじゃないかな。

井上　あの頃だと、ミリタリー系の本ではベトナム戦争の再検証みたいなのが始まってたんで、ヘリボーンの本とか結構出てて、参考にした資料も結構ありましたね。

高橋　僕は兵器の雑誌とかは見てないんですよ。ニュース映像で印象に残ってたのがヘリコプターだった。そういった資料は周りのスタッフが集めてくれるし、そういうのが好きな人もいたし。僕の頭のどこかに何か残っていたものがきっかけになってビジュアルが固まっていったんですね。最初から僕がミリタリーマニアでヘリボーンやりたいというわけじゃなかった。

井上　飛行機よりヘリコプターを選んだ理由は何かあるんですか？

高橋　全体にスピード感がないでしょ。スピード感のないもので画面を覆いたかったの。初期に出てきたハンググライダーですが、ハワイに行った時に実写ドキュメンタリーの演出をやったことがあるんですよ。その時に「これは使えるなぁ」と思って。

――対ゲリラ兵器と考えるとヘリコプターくらいの速度が世界観的にも相応しかったんですね。逆に『ダグラム』のイメージはヘリ以外に考えられません。

高橋　まぁ、ヘリコプターそのものが映画の主役になるやつは少ないよね。『ブルーサンダー』(※27)くらいしか覚えてない。

――『ブルーサンダー』は分かりやすい映画でしたよね。徹底的にヘリの特性を追ってたし。『エアウルフ』(※28)はヘリと言いつつマッハ出しますからね。

井上　ヘリは背景として出てくるのかちょうどいいんですよね。スピードが速くないからCBアーマーと同じフレームに収まりやすい。その一地味だから絵的にも邪魔しない　ベトナム戦争って、実はガスタービンエンジンのヘリコプターが初めて実装化されて配備された戦争なんですよ。『ダグラム』はおそらく、アニメ史上で初めて、空降の〝コンバインアームズ〟をシステマチックに描いてる。ゲリラという地味なものを追い掛けつつも、そういうものを描いたという、隠れたエポックメイキングな作品なんじゃないかな。

高橋　僕の作品の特徴かも知れないですけど、いつの間にか僕の知らない物がいっぱい入ってるんですよ。みんなで「どうせ監督知らねぇからこれやろう」って　ある日、知らない兵器とかロボットとかが増えているので、　なんかこういうものが入ってるんだけど」ってスタッフの誰かに聞くと「それは〝何々〟っていいます」と言われちゃう。僕じゃない。「しょうがないな、補足しなきゃ」となる。スタッフ的にそういうふうになっちゃってますね。僕が得意なのはおそらく、物語の大雑把な構造とかであって、世界観の説明とか、そういう「理屈をつけるのは好きな人が好きなことやればいいんじゃない？」くらいなもんなんですよ。

井上　監督だったか神田さんだったか、記憶は定かじゃないんですけど、Eガンにマガジンかありましたよね。

高橋　あれは、弾丸はフラッシュ弾とかだったでしょ。昔の……。

井上　カメラ用のマグネシウムが入ってる奴。

高橋　マグネシウムの光が武器になるなら、それがひとつずつ弾丸になってもいいんじゃないか？　っていう風に考えたんだよね。

井上　物理的な弾を発射するんじゃなくて、それに排莢するのも大変だし

高橋　〝レーザーの出力〟というと、普通の小銃的な形だとちょっと物足りない。それで、レーザー用に個別の弾がある」というのは面白いんじゃないか？　という考え方でね。そういうのって、ちゃんとした知識がある人は思い浮かばないんですよ。「そんなのあるわけないじゃないか」で終わっちゃう。

井上　それ『009』やってた人が言うこっちゃないですよね。だって周りではいくらでも光線銃とか麻痺ガンとか撃ってるのに、いちいち弾をいれたりとかね　「弾切れだ」とかやりたくって「エネルギーって分からないじゃん」ただ単に「あと何発」って言いたいだけだろう、みたいな。

――当時、下は小学生くらいからハンドガンのちょっとしたフームがあったんですが、『ダグラム』はロボットアニメでSFなのにビームじゃない、しかも「南部式が出てるぞ!!」というあの感覚も、ものすごく新鮮でしたね。

井上　あれは神田さん。

――そうなんですか？

高橋　神田さんそういうの大好きだもん。

井上　南部銃のこれ使っていいですかね？　最初はEガンの形違いだったんだけど、「これじゃなきゃ嫌だ」って言うから「用心鉄どうしましょう？　膨らんだ方がいいですか？　縮んでる方がいいですか」って聞きながら設定を作りました。

「設定画」がアニメ誌に載った時、「後期型描いてるよ」とか。「じゃあデロイア星では8ミリ弾が作られてるのかもしれない」なんて（笑）。

井上　あれは多分に趣味だよね

高橋　ああ言うの全部神田さんでしょ。「第08小隊」（※29）でお風呂入っちゃうのとか。

――ビーム・サーベルで（笑）。

井上　あれは、「このふたり風呂に入れたい」っていうから、じゃあどうやって風呂沸かそうかって、神田さんと桶谷（顕）（※30）くんと三人で話し合って決めました。「じゃあサーベルでいくか」「いいじゃん熱いんでしょ」「応」「沸くよね。思いっきりビーム絞ってさ」って。

――そこら一帯吹き飛ぶって説もあります。

井上　神田さんと言えば、やはり下方からの股間狙いですね。「第08小隊」もそうだし、「ダグラム」のチコもそう。やたら股下から急所を狙い撃つのが好きなんですよね。ロボットが出ると必ず下に潜り込みますから。

――「ダグラム」は親子関係が物語そのものの主軸になっていますが、そこに焦点を当てるというのは、クリンが主人公だから、ということのほかに、何か別の動機はありましたか？

高橋　あれは動機というよりは、父子関係ってあらゆる叙事詩的な物語の基本形にあるでしょう。最初はそういう普遍的なものを作るんだ、という〝つもり〟が頭の中にあったんです。だけどそのうちに、そうじゃなくて、僕自身の中にあるんだ、ということが分かったんです　それは、僕の中に〝父親との関係がない〟からなんですよ

――どういうことでしょうか？

高橋　父親が戦争に行っちゃって、実際にはひとり子ひとりみたいな家庭だったもんで、どこかに、自分が頭の中で作り上げた父親像みたいなものを物語の中で再現してみたいっていう欲求があるんでしょうね。必ず出てくるんですよ。〝ボトムズ〟になると〝父親のような関係〟になるんですけどね　それは例えばワイズマンであったり、ペールゼンであったりするんですよ。目の前にいる、ある種の考えを持った強い壁のような存在。『ガリアン』だとマーダルかな。そういう構図に近い形で出てきちゃうんですよね。

――未来の物語をやっているのに、特にドナンなどは、ある種理想的な〝昭和のお父さん〟ですからね。家父長制がきちんと維持されてきたような、厳しくて威厳がありつつも、心の中では家族をとても大事に思っている、という。

チコの十八番。ゴールデンボール狙い（第56話より）

井上　でも本当はそんなもんですよね。〝独立〟戦争ですから。〝独立〟とか自由を勝ち取るって言う時に〝親を見ない〟人、多いじゃないですか。無視して漫然と出て行くんだったら、それは本当に独立したのかあやふやだと思うんですよ。でも、クリンの親父はちゃんと認めるでしょうその上でクリンは出て行くから、本当の意味での独立。ちゃんと主人公が独立戦争の中でやってるし、最終回では、そのフィールド（デロイア星）ではできなかったかもしれないことを、また次のフィールドでやりに行く、みたいな。いやぁ格好良い！

高橋　確かこの家族構成で、一番最初に出てきた〝絵〟が「家族の記念写真」だったんですよね　それを見た時に「これは後妻で、この母親の子供はクリンだけで、あとは前妻の子供なんだな」と言うのが分かってですね、「だからこそ皆はこういう感じでいて、だけどそれを感じさせない肝っ玉母ちゃんにして」という感じで色々考えましたよ。

――でも、このお母さんが一番可哀そうですよ。息子が帰ってこないというのは。まあ、主人公周辺の親戚関係とかもかなり不幸な目に遭ってましたけど。

井上　一番心配してくれてたレーク義兄さんをクリン自身が良っ先に失脚させちゃうんだから。

――レークは実の兄より兄らしかったですよね。

高橋　クリンの兄貴たちは人体失脚してるでしょ

井上　銀行屋なんかね　頭だけで商売してるから、こういうことで勝手にだめになっていくんですよ。

高橋　ラコックなんて、最初の吉川（惣司）さんのスケッチがひどかったな。「ラコックは頭がいいんですよ　言ってみれば頭脳の化けもの」っていったら、頭こんなにでかいんですよ。これはないでしょって。

――すごかったですよね。福禄寿というか。

高橋　設定画でちゃんと縮んだと思ったら、今度は谷（谷口守泰）（※31）さんが本編の原画でぐんぐん伸ばしちゃうんだもん。

――ラコックなんか脇役でただの嫌な奴だと思っていたら、どんどん作中で比重が大きくなっていきました。監督や神田さんの興味もラコックに集中していったのでしょうか。

高橋　ラコックには、どこまで直接的な暴力を振るわせないで酷い事をやらせるか。言ってみれば、頭が凶暴な奴〟にするにはどうすればいいのかと悩んでいました。でも、全部が全部それだけだとインパクトが無いだろうということで、それなら、ということでフォン・シュタインを殺させたりとかしましたけどね。実はあのシーンにはインチキがあるんですよね。ガーノって撃った後に、髪の毛を両手でこう撫で付けてやって、そのあとまた銃を持ってるんだけど、お前、銃はどこに行ってたの？　という。あの時はダビング終わるまで誰も気がつかなかったからね（笑）。

井上　いやー、『ダグラム』には他にも結構ダウトがありますよ。

カシム家の記念写真。この絵が監督のイメージを広げた。（OPより）

——ああいう〝頭で勝負する〟というキャラ

言ってみれば、〝頭が凶暴な奴〟にするには どうすればいいのかと悩んでいました。

はものすごく新鮮でした

高橋　あのキャラクターに限って言えば、最初から声優さん決めてましたからね。仁内（達之）（※32）さんに。『ゼロテスター』に出てたんですけど、これがまた嫌な声なんですよ。

井上　いい意味でね。「悪い奴だなぁ、こいつとは心が繋がらないだろうなぁ」っていう。

高橋　「僕でいいの良ちゃん？　僕でいいの？　ずいぶん若いよこの人（ラコック）」って。仁内さんはもう大ベテランでしたからね。

井上　でも「ダグラム以来こういう仕事増えました」って言われたそうじゃないですか。「洋画でもそういう役だと僕のところにくるんですよ」って。良輔さん言ってましたよね。

高橋　昔は結構二枚目もよくやってたんですよ。仁内さんは。

井上　でもラコック二枚目でしょ。

——仁内さんの声を聞くと、やっぱりラコックというイメージがありますね。

高橋　『ペールゼン・ファイルズ』（※33）のルスケ。あれはロッチナなんだけれども、ロッチナの演技がラコックっぽいでしょ。やっぱりあの位置なんですよね。でも頭だけじゃ天下は取れないという。まぁ取らせたくないというのもありましたけど。

——『赫奕たる異端』（※34）でヨボヨボのロッチナが「でもやっぱりキリコから目が離せないんだ俺」というポジションはいいですね。ラコックにも、もう一歩後ろに退く知恵があれば、ロッチナみたいになってたかなと思いますけどね。

高橋　やっぱり業の人たちですからね。

井上　そういう意味では、頭が足りなかったばかりに利用されたフェスタなんか非常によろしいですよね。キャラとして非常に好きですよ。そういう人たちが多いんですよ。

——なべて良くも悪くも感情移入できる人間ばかりという。

高橋　欠点のないスーパーマンには思い入れられないでしょ。

井上　デスタンも登場当初こそ、建前潔癖論が好きなんだと思ったら、それ故にポキンと折れちゃった。で、やっぱり良心を捨て切れないんだけど、人を殺してしまったことによって、なにかを捨てちゃった。だけどやっぱりグダグダになって行って、最後には破滅しちゃうという。ものすごくわかるよね。人間って弱いよね、って思ったもんです。

高橋　文学でももの凄く多いですよね。女を捨てちゃった後に、ずーっとそれに責め苛まれるみたいな。全然違うけど、フェリーニの『道』（※35）なんかもそうですよね。

——ちょうどその頃『道』を観たんですよ。おかげで『ダグラム』のペースについていけるようなりました。

井上　あの映画もまったりしてるからね。

高橋　アカデミー何とか賞を取った映画だというので見に行ったんですよ。生意気な時分だったからね。正直、何が面白いんだろうって思った。中学生には分からないよね。

井上　『ダグラム』を熱心に観てた人、今、何歳ぐらいなんですかね

高橋　とあるファンの方が、「改めて『ダグラム』観終わりました。自分が小学生の頃にはこんな物語とは思いませんでした」って感想をくれたことがあります。

——少年の頃、普通にロボットが好きで観てた人が、今もう一回見直したら面白いでしょうね。

井上　以前と違ってCS放送やネット配信とかされてるんで、いま見返して「こんなに面白かったなんてっ!!」という評判も聞きますよね。

ただじーっと待つだけの話とかね。そういえば、デイジーというのはどういうタイプのヒロインとして想定されていたのでしょうか？

高橋　デイジーねぇ。

【完本 太陽の牙 ダグラム】

井上　アイキャッチ通りですよ。

高橋　「病弱そうだ」なんて言われてた。

――確かに設定画からして幸薄そうでした。これはきっと〝報われないヒロイン〟だな、と。

井上　途中からずっとサナトリウムにでも入りっぱなしかな？　と思ってたら、結構行動的でハイタリティがあって、意外にしぶといなぁって。いや、しぶといって言うのは変な話ですけど、デイジーのデザインは、記号として非常に脆弱な感じがするのに、実際にはかなり芯が強かった。

――逆境に行けばいくほど、ものすごい芯の強さを発揮する。・高橋監督の女性観がにじみ出てるようにも感じます。

高橋　同じではないけど、少しずつダブってくるでしょ　〝ボトムズ〟のゲーラ（リタ）ってくかも強そうじゃないですか。ソフィーはちょっと逆うけど、それからモニカ、ヒルムカとか、ちょっと強めの女っていうのが嫌いではない。

――ヒルムカも、逆境に追い込まれてどんどん強くなっていきましたね。

高橋　意外にそういう女性って多いですよね。

井上　そういえば『ダグラム』って女性何人いたっけ？

――名前があるのは5人いなかったんじゃないですか。デイジーとお袋さんとキャナリーとリタ。一番美人がたぶん北極基地に出てきた名前のない女性士官。

高橋　それはきっと（アニメ）アールの人が勝手に美人にしちゃったんですよ。

――勝手に（笑）。

高橋　大体、僕は上がってきたものに対してあんまりうるさくいわないタイプでしょ　そうすると、意味もなく物語の邪魔になるような美人が出てくるんですよ。それって現場が描きたいってだけだよね　「別に通信員の女の人が美女でもいいじゃないですか」って話なんですよ。

井上　全部美人にしちゃうんだ

高橋　さりげなくやってくれればいいのに、さりげなくないでしょみんな。

――目立ちすぎて画面を壊すという。

高橋　文句なんか言えないもん　出ちゃったら「ああしょうがないな」って思うだけだから。

――以前も伺ったことがあるんですが、お父様が出征されて、実質的な母子家庭で育ったせいで、女性に対して、ある種、従順に従ってしまうところとかある、と。同時期のスニーカー文庫版『ボトムズ』でも、担当さんが女性なので「今回は締め切りを守らなくちゃ」とおっしゃってましたよね。こうして見ると、確かに幸薄いかも知れないけど、女性の皆さんかなり強い。こういった女性キャラを抑える男性キャラって、監督の作品に出てきてないですよね。男性キャラが多いから男性原理の世界と思われてますけど『ダグラム』にしろ『ボトムズ』にしろ、実は母系の世界観なんじゃないかって気がするんですよ。

高橋　かもしれないですね。キャナリーだって強そうだもんね。

井上　カシム家ってそういうところあるよね。お袋さんがしっかりしてるんで、男どもは馬鹿が出来るっていう。

――女性陣も「こいつら馬鹿だから私たちがしっかりしなきゃ」って思ってるかもしれない。

高橋　でも世の中って人体そうなんじゃないですか。僕が好きな作家の開高健（※36）さん　あのオヤジだって散々悪いことしてたんですよ。だけどカミさんの牧羊子（※37）さんは、自身も詩人だったし、ダンナを作家として許してたところがある。椎名誠（※38）さんのところのカミさんも元保育士だったっていうから強そうでしょ。強くないと男が馬鹿やるの許してくれないですよ。

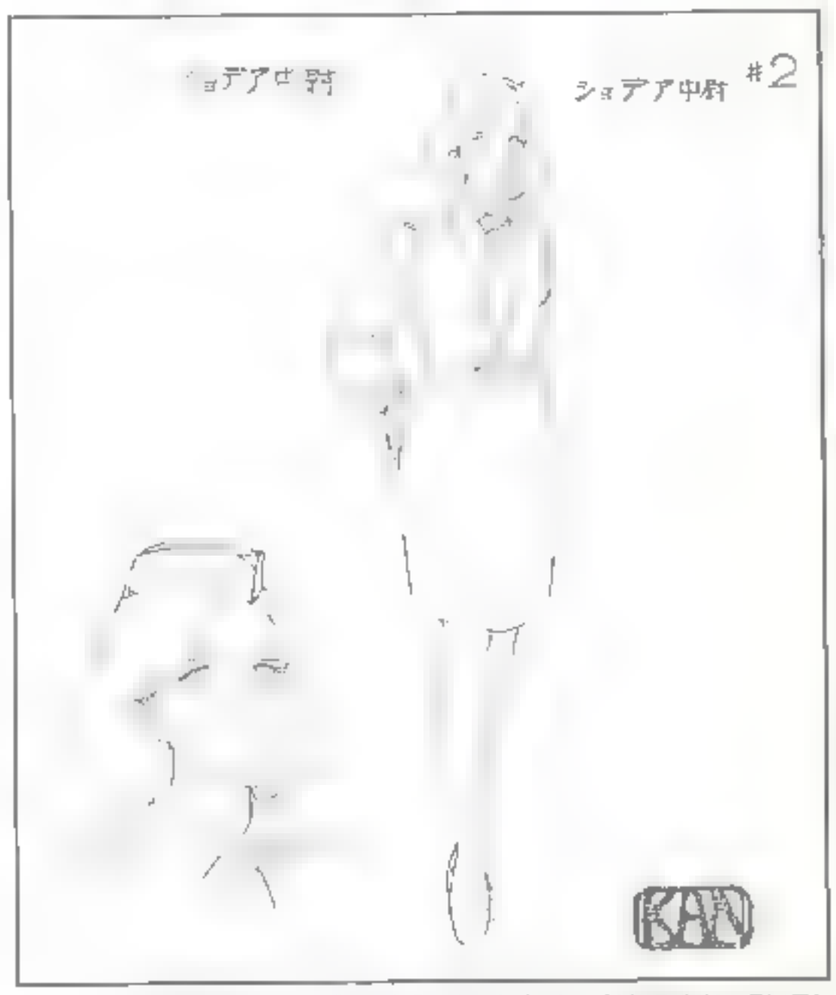
――まぁ確かに開高健とか椎名誠とか言われると確かに。そんな感じだなぁって。

井上　おばさん系の力が多いですよね。

――肝っ玉な感じ。

井上　（キャラを指差して）この人どこにいたかわかります？

高橋　覚えてないねぇ（笑）。



北極基地の“美人”女性士官（第2話に登場）

井上　可愛い娘はヒロインを含め3人しかいなかった。これ以上描きようがなかった。「チョロQダグラム」でスタジオライブがよってたかってやっても3人しかいない。

――『ドキュメントダグラム』は監督がご自身でまとめられたんですよね？　やっぱり裏主人公はラコックだった、ということでいいんでしょうか？

井上　あれを見る限りそうとしか思えない。

高橋　あれは自分でまとめたんですが…主人公というつもりはないんですけど、重要人物と。

――逆に、全体を俯瞰していたのはラコックだけだったというのはありますよね。

高橋　というより、己の為だけに生きていたのはラコックだけなんですよね。他はみんな、自分の事以外の何かに衝き動かされていた。ラコックは他人がどうなろうと国がどうなろう

と、自分が出世すればいいだけですから。そういう意味では非常に牛々しい

井上　自分に正直だったんですね。

――あれは魅力的なキャラクターでした。

高橋　逆に言えば、僕が作るキャラクターに、典型的なアニメのキャラクターって比較的少ないんですよね　アニメのキャラクターってものすごく単純じゃないですか　すごい悪なら悪で、〝卑怯〟とか〝強い〟とかね。それでいうと、ラコックはアニメのキャラクターじゃないような言動をしつつ、非常にアニメ的な一面性しかない。〝それしかない〟っていうのは強烈ですよね。あの状況の中にいるから、ラコックはちょっと魅力的に見えるけど、いかにもアニメアニメした物語だったら、多分大したことはない。他が結構、「なよっ」としたり「ぐじっ」としたりしてるから目立つんですよ。

井上　あんなに単一な側面しか持たない奴なんて、本当はあんまりいませんからね。

――〝陰謀を巡らす〟という意味での裏はあるにせよ、キャラ的には裏表がない。

井上　一生自分の人生を歩いて行く。

高橋　そういう、いい悪辣さが出てるよね

キャストやキャラクターの造形事情を聞いていると、この時期に、いわゆる〝高橋良輔一座〟というものが確立されたように思うのですが。

高橋　そうですね。ここでイメージが付いた人とは、二度三度の長いお付き合いって多いですよ　当時のムックやパンフをみると、広瀬（正志）（※39）さんなんて同じ人に見えないよね。

井上　本当に同じ人には見えないですね。

高橋　屋良（有作）（※40）さんなんて、最近やたら格好良いおじさんになってるんですよ。

――四半世紀前ですからね。以前、別件でうかがったんですが、監督は遠い目をしながら「ダグラムは青春だった」とおっしゃいましたよね。

井上　青春ですよね。

高橋　〝青春〟とは言っても、当時すでに30代後半だったから正確には青春じゃないけど、千葉（繁）（※41）さんは最近、出演はしてるんですかね。

〝青春〟とは言っても、当時すでに30代後半だったから正確には青春じゃないけど。

――最近はあちこちで音響監督もされてますけど、声の仕事もやってらっしゃいますよ。

高橋　緒方（賢一）（※42）さんなんて、こんなに若かったのに、僕と同じお爺さんに

井上　ナナシは妙な貫禄がありましたよね。

高橋　ナナシかぁ　その後も困ると緒方さんに頼むことがあったね。『ボトムズ』のセルジュ・ボローとかそうだもんね。一枚目に困ったときの井上（和彦）（※43）さんとかね。

ストーリー的な流れでいうと、クリン・カシムはひとつの壁というか挫折を乗り越えて、自覚的にこういう道を邁進するのだ…、みたいな印象がストーリーのラストにはありますけど、例えば具体的に展望としてはどんな話とかが有り得るでしょうか。

高橋　そのへん、実を言うと、風貌からしてドナン・カシムにはやっぱり『ゴッドファーザー』（※44）が入ってるんですよ。そうすると、物語を作るとすれば、クリンも気がつけばもう40代に入ってると。自分は全く意図してなかったのに、親父と同じ立場にいて苦悩している、という、アル・パチーノ（※45）のイメージがあるよね。やっぱり親父と同じ道を行ってしまうと思う。

――奇しくもドナンが言ったように、一番ドナンの血を色濃く受け継いでるのはクリンなのではないかという風に？

井上　親になると、分かるんでしょうね。

――そういうことで言うと、やはりクリンはデイジーとねんごろになるんですか？

高橋　デイジーでしょうねぇ。で、やっぱりデイジー悩むでしょう。カシム家なんてまるっきりコルレオーネ家じゃないですか。やっぱりどこか影響されてますよね。黒澤明もシェイクスピアに影響されてるように、その影響下で作られた別の作品からまた影響受けますね。だからマクベスなんかも違うスタイルでやってみたいと思ってます。

――ガンプラブームから30年経って、プラモ

【完本 太陽の牙ダグラム】

ダグラムの時代

高橋良輔 VS 井上幸一

の解説などにも政治的な動向などが平気で絡むようになりました。『ダグラム』は他作品に先んじてメカの名称にメーカー名が採用されてたりしていますが、政情不安もCBアーマーのような不便な兵器体系も、実は地球の体制を維持するためにわざとやってるんじゃないか？　今の読者にアピールするとしたら、そういったコンセプトでメカの換骨奪胎をやれるんじゃないかと思ったりしてます（笑）。

高橋　当時、僕は〝朽ち果てたダグラム〟を思いついた時点で息が切れちゃってて、SFなのにどういう美術世界を展開したらいいのか殊に思い浮かばなかったんですよ　だけど美術さんには「理論武装をしないと号令がかけられない」って言われるし、さっきの話に似てきますけど、人間が一番人間らしく暮らせる様式や制度としては、十九世紀的な文化に回帰するんじゃないか、と思ったんですよ　地球でそれをやるのは難しいですけど、改めて植民地惑星でゼロから始めるなら、一番いいとこ取りが出来る。「…そういうことで行きませんか？」みたいな。

――作品にも反映されていますよね。

高橋　結果的には、番組が終わったとき沼本さんに「美術かいまひとつだったな」みたいなことを言われたんですよ。要するにSF的な弾みがなかったと。僕の無理矢理な理論が間違ってたっていうようなこともありましてね。それは『ボトムズ』で解消しましたけど、でも僕はまだそういう風に思ってるところがありますよ。

――翻って見ると、初期の資本主義の形態は人民をコントロールする際の抑圧装置と統治システムとしては非常に安定してるんですよね。行政側があれぐらいオーバースペックの暴力装置を持っているというところが。ワープ航法が可能な科学技術を持ちながら、それを十九世紀的なディティールで統治するっていうのは、逆に今ならありかなと思います。

高橋　実をいうと、僕はそういうものをそこまできちんと構築する必要はないと思ってるんです。そうするとがんじがらめになってしまって、見る側にとって面白くないものが出来上がってしまうことが多い。作る側がどれぐらい緻密に作るかっていう欲望みたいなものと、見る側の欲求とはちょっとすれ違うところがあるんですよね。だから、失敗するかもしれないけど、全部きっちり作るよりも、色々なところから出てくる直感的なものの方がうまくいく場合があって、物語としてはそっちの方が弾みますね。特にテレビシリーズサイズのアニメーションに関してはそういう感じがします。

――沼本さんのお好みとしては、もう少しSF色の強い、いかにも「宇宙モノでございい」というところが欲しかったのかもしれませんね（笑）。

高橋　それは結果論ですし、途中でそういう注文はなかったんですよ。だから終わってみて「さあ次に行こう」っていう時に「俺はこう思うよ」って言ってくれたんです。「次はここを補強した方がいいんじゃないか」という前向きな意見。僕にはすごくよかったですね。

――カシム一家のような大家族の話をする場合、確かに19世紀から20世紀初頭あたりのファッションやディティールなどは、かなり確信犯的にやってていたと思うのですが？

高橋　それが成功するためには要所要所に「確信犯的にやってるんだよ」という明確なインフォメーションが必要なんです。例えば今やってる『ルルーシュ』（※46）がそうだと思うんです。ああいう美術設定にする必然性というのはちょっと考えちゃうんですよ。ところが「この世界はこういうことが武器になるんだ」という作り手側のサインが色んなところに入ってるんで、それは魅力になるんです。そうじゃなく漫然と入れてると、なんとなくずるずるいっちゃう。そうじゃないと思うんだよね。作り手にはちゃんとした意志があって、それが見る側にとっての魅力になるんだという確信があって、そこを肯定するサインを出してる。ところが『ダグラム』の時の僕は、そう考えつつ、それを今言ったように、十九世紀十九世紀したものがいいんだ」という、もしくは、こういう風に文化が、あるいは文明が宇宙の中に伝播していく時に「それを統治システムの中に組み込んでるんだ」っていうところまで描いてないから魅力にならなかったんですよね。

――'80年代の作品にそこまで求めるのは酷だろうという気もしますが（笑）。

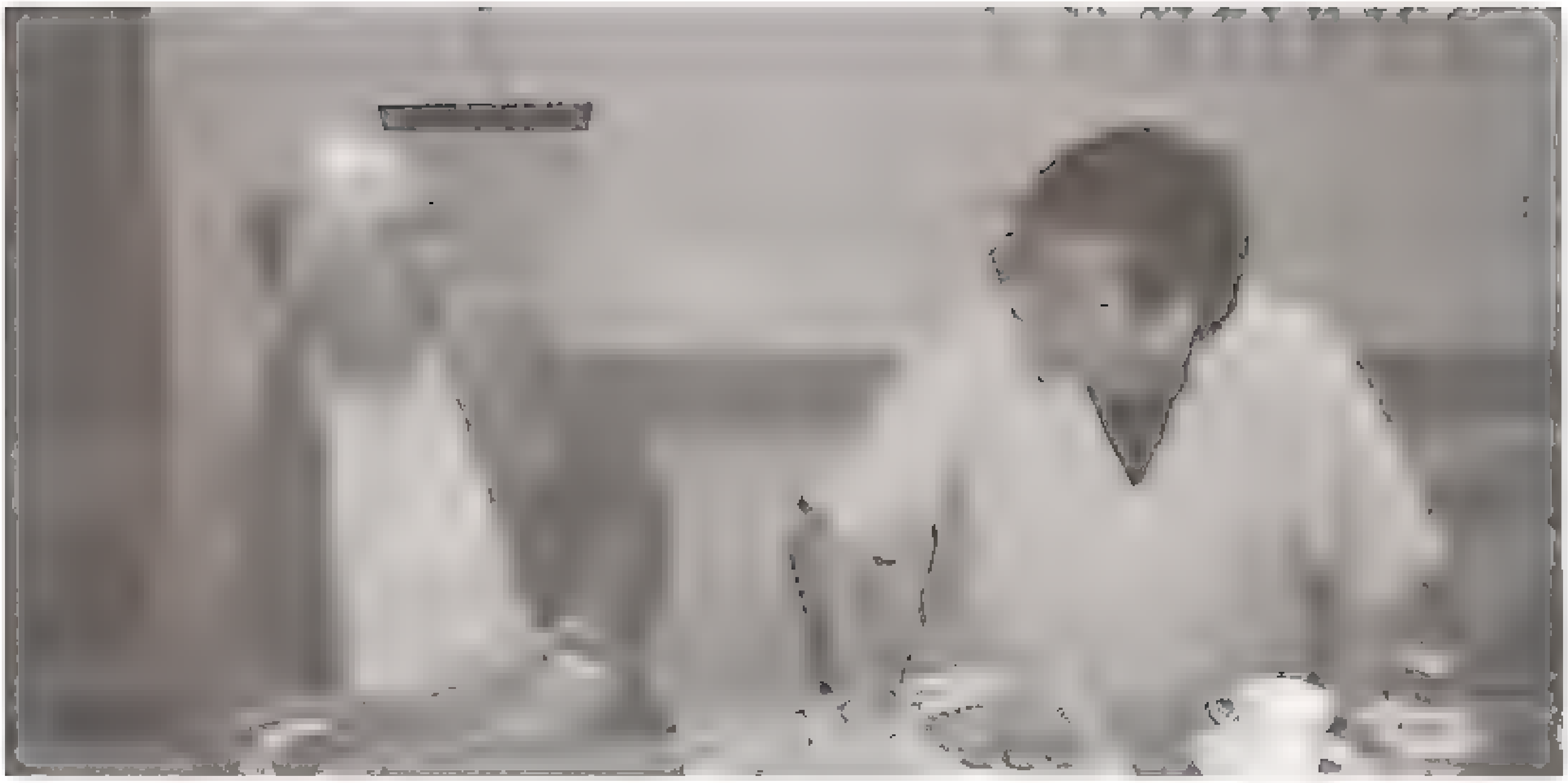
出発点であると同時に、その時に考えていたことを未だに引き摺っているんです。

高橋　そんなに凄いエネルギーを割かなくても、そこに思い至っていればそういう事をしたと思うんですよね。今でこそ、僕が観る数少ないアニメーション作品で、ああ、これはこうなんだな、とか自分がやる時はこうしようとか、そういう風に分析できるだけで、当時はそんなこと思わなかったですよ。「やっときゃよかった」というのは一杯あるんだけどね。そこは決定的に欠けてたなぁ。でもまあ、それは誰もが思うんでしょうし、僕の場合は、思いはしても〝めげない〟ですからね。しようがないよ、すぐに次だ次だって感じだった。

――当時と現在のご自身の状況の違いといいますか、感慨のようなものをお伺いできれば。

高橋　まだ確定ではないんですが、今年もドイツのボンで開催されるアニメのイベントに行く予定なんですよ。『FLAG』（※47）で招待されていて、一応『いろはにほへと』（※48）も新作としてね。『ベールゼン・ファイルズ』はまだ終わってないですから呼ばれていませんが。実を言うと、そこまでのものは全部『ダグラム』に入ってるんですね。そこから一歩も出ていない　だから出発点であると同時に、その時に考えていたことを未だに引き摺っているんです。だから『ドキュメントダグラム』で、しょせんは雰囲気ですが、〝ドキュメンタリーのような雰囲気を出したい〟と思った時、当時は出来上がったフィルムを荒らすだけだったけれども FLAG　ではずいぶん違う手法を持ってきてますよね。そういう事をしぶとくやってるんです。自分の中でまだやりおおせていないことが随分とある。ですから、〝ダグラム〟を見ていただいて、「おっ!?」と思ったものが、また次の作品にも形を変えて出てくると思いますよ。

――〝監督〟名義の仕事としては『ゼロテスター』があって『009』があって、各話演出



ならあかばんてんの作品も多数に上ります。ただ、いわゆる「処女作には全てが内包されている」という謂いに倣えば、実質的にはこの『ダグラム』こそが"高橋良輔"としての処女作であるという捉え方でよろしいでしょうか？

高橋　そうですね。「自分はこれからこういう仕事をしていくんだ」というのは『ダグラム』で決めましたから。それまでは、あっちこっちやったりアニメ以外の事をやったり、自分を全く決めつけないで生きてましたから。

――『ダグラム』以前にあった「アニメーションという仕事への疑義」は、これで全て、とは言いませんが、解消できたのでしょうか？

高橋　それまでは、何にせよ積み重ねよう、という気がなかった。今日は一体、何と出会うんだろうという毎日だったわけですよ。あのままだったら、ひょっとすると役者になっていたかもしれない。

井上　今は映画に出てる監督もいますから。

高橋　そんな出会いがあればですよ。何も二枚目の主人公をやろうってんじゃないし、それは分からない。ただ、『ダグラム』をやったことで、「ここでやっていけばいいんだ」と思えたってことですよね。

――『ダグラム』は、クリエイターとしての高橋監督の出発点だということですね。

高橋　そうですね。やっぱり出発点ですね

井上　『ダグラム』は間違いなく監督の原点ですから

高橋　いやー、いつもは分からないことだらけで、全部井上くんに振っちゃうんだけど、今日は珍しく、よく喋りました（笑）。

――本日はどうも有り難うございました。

（収録／上井草にて）

脚注

p220
※1「サイボーグ009」（79年）…石ノ森章太郎原作 第2作目のTVシリーズを高橋良輔が監督した
※2「まんが日本昔ばなし」（75年）…グループ・タック制作のTVシリーズ。あかばんてん（後述）のメンバーが多数参加。
※3「機甲界ガリアン」（84年）…高橋良輔監督のTVシリーズ。異世界を舞台としたロボットアニメ。
※4あかばんてん 高橋良輔主催の制作集団。メンバーにやすみ哲夫、岩崎治彦、堀口忠彦、西田稔など
※5岩崎正美 プロデューサー。代表作「太陽の牙ダグラム」「機動戦士ガンダム（劇場版）」など。
※6山浦栄二…サンライズ元企画部長。企画担当として「機動戦士ガンダム」などを手がけた
※7「ゼロテスター」（73年）…高橋良輔監督によるSF冒険アニメ。
※8沼本晴海…p221参照。元アニメーター。「佐武と市捕物控」などにも参加。
※9「機動戦士ガンダム」（79年）…富野喜幸（現：由悠季）監督によるSFロボットアニメ。80年代アニメブームの導火線となった。
p221
※10このデザイン…p222のパンフレットを参照
※11「スペースバッファロー！」ダグラムの元となった作品の企画時名称。「ジャスティス」「ザクティクス」も同様。
※12星山博之 脚本家。代表作「機動戦士ガンダム」「銀河漂流バイファム」など。'07年没。
p222
※13真尾舜…p222参照。「装甲騎兵ボトムズ」などにも参加。
※14神田武幸…代表作「銀河漂流バイファム」など。「ダグラム」では高橋良輔とともに監督を務めた。'96年に他界
※15「スター・ウォーズ」（77年）…ジョージ・ルーカス監督。日本公開は翌年。「AT-AT」（スノーウォーカー）は2作目である「帝国の逆襲」（'80年）より登場した四脚歩行メカ。
p223
※16塩山紀生…「ダグラム」では作画監督チーフ及びサブキャラクターデザインを担当。代表作「装甲騎兵ボトムズ」など。
※17「コンバット！」（62年）…米ABCの戦争TVドラマ。同年より日本でも放映された。
※18「独立愚連隊」（'59年）…ならず者集団「独立愚連隊」の姿を描く日本映画。同 西へは翌年公開されたシリーズ作品。
※19富野由悠季 作家、アニメ演出家。代表作「機動戦士ガンダム」など
※20「装甲騎兵ボトムズ」（'83年）…「ダグラム」の後番組として製作された高橋良輔監督によるロボット・アクション第3弾。2008年7月現在もまだ続編リリース中。
p224
※21「戦場まんがシリーズ」…主な作品として「鉄の墓標」など。「週刊少年サンデー」に不定期連載されていた
※22青鉢芳信・アニメーター。「機動戦士ガンダム」「鋼鉄ジーグ」などに作画監督として参加。
p225
※23安彦良和…アニメーター、キャラクターデザイナー、漫画家。代表作「機動戦士ガンダム」「アリオン」など。
※24吉川惣司…「ダグラム」ではキャラクターデザインを担当。代表作「ルパン三世 ルパンVS複製人間」（監督・脚本・演出）など。
p226
※25「戦闘メカ ザブングル」（'82年）…富野由悠季総監督によるTVシリーズ
p227
※26大河原邦男 メカニックデザイナー。サンライズ作品を中心に多くのロボットアニメを手がける。
※27「ブルーサンダー」（'83年）…アメリカ映画。ジョン・バダム監督。
※28「超音速攻撃ヘリ エアーウルフ」（'84年）…アメリカ制作のTVシリーズ。日本では86年よりTV放映された。
p228
※29「機動戦士ガンダム 第08MS小隊」（'96年）…OVAシリーズ。全11話で、前半にあたる第6話までを神田武幸が監督した。
p228
※30桶谷顕…脚本家。代表作として「エスパー魔美」「チンプイ」など '07年没
※31谷口守泰・アニメアール代表。代表作「蒼き流星SPTレイズナー」（キャラクターデザイン）など。
p229
※32仁内建之 ナレーション役。代表的な出演作「鬼平犯科帳」（ナレーション）など。'00年没
※33「装甲騎兵ボトムズ ペールゼン・ファイルズ」（'07年）…「装甲騎兵ボトムズ」のプレストーリーを描くOVA。高橋良輔監督。
※34装甲騎兵ボトムズ 赫奕たる異端（'94年）…「装甲騎兵ボトムズ」の続編として制作されたOVA 今西隆志監督
p230
※35「道」（'54年）…フェデリコ・フェリーニ監督 大道芸人たちの人間模様を描くイタリア映画
p230
※36開高健 作家 代表作「輝ける闇」など ルポライターとして戦下のベトナムを取材する。'89年没。
※37牧羊子…詩人、エッセイスト。代表作「コルシカの薔薇」など。'00年没
※38椎名誠…作家、エッセイスト、写真家。「本の雑誌」編集長。代表作「アド・バード」など。
p231
※39広瀬正志…デスタン役。代表的な出演作「機動戦士ガンダム」（ランバ・ラル）など。
※40屋良有作…ザルツェフ役。代表的な出演作に「ちびまる子ちゃん」（ひろし）など
※41千葉繁 ノォルシュ役ほか多数。主な出演作に「北斗の拳」（ナレーションほか）など
※42緒方賢一 ナナシ役。主な出演作に「宇宙戦艦ヤマト」（アナライザー）など。
※43井上和彦…クリン役。主な出演作に「サイボーグ009（第2作）」（島村ジョー）など。
※44「ゴッドファーザー」（'72年）…マリオ・プーゾの小説が原作。マフィア一家の悲哀を描くアメリカ映画。フランシス・F・コッポラ監督。
※45アル・パチーノ…映画俳優。「ゴッドファーザー」ではコルレオーネ家の四男マイケルを演じる
p232
※46「コードギアス 反逆のルルーシュ」（'06年）…谷口悟朗監督のTVシリーズ。劇中には大時代的な支配階級が登場する
※47「FLAG」（'06年）…高橋良輔監督。カメラマン白州冴子を通して小国の内戦を描く。
※48「幕末機関説いろはにほへと」（'06年）…高橋良輔監督。幕末の動乱を舞台にした時代劇アクション。

データ キャスト&スタッフ

STAFF & STAFF

■キャスト
クリン　井上和彦
ロッキー　田中亮
チー　田中宗
キャナリ、ビリー　山田栄子
ナナシ　梨羽雪子
フェスタ　緒方賢一
ジョルジュ　鈴木清信
ハックル　千葉繁
サマリン　小宮山清
ラコック　宮内幸平
フォン・シュタイン　仁内達之
ザルツェフ　蟹江栄司
デイジー　屋良有作
デスタン　高島雅羅
リタ　広瀬正志
J・ロック　川浪葉子
ラルターフ　曽我部和行
サナ　兼本新吾
バックス　鈴置洋孝
ジョーク　細井重之
カルメル　大林隆介
レーク　加藤治
フィナ　池田勝
ヴィヒン　山口奈々
ロイル　政宗一成
ヒドナン、ナレーター　塩沢兼人
　山内雅人

■メインスタッフ
企画　日本サンライズ
原案　矢立肇
原作　高橋良輔、星山博之
キャラクターデザイン　吉川惣司
メカ　カルデザイン　大河原邦男
美術監督　中村光毅
美術設定　佐藤正浩（メカマン）
　（第43～75話）
作画監督チーフ　塩山紀生
編集　鶴淵映画
音響監督　浦上靖夫
音楽　冬木透
設定担当　井上幸一
文芸　並木敏
制作デスク　山本之文
タイトルアニメ　マジックバス

タイトル　安食光弘
監督　神田武幸
　高橋良輔（第1～31話）
プロデューサー　岩崎正美
　（日本サンライズ）

■各話リスト■

■第1話　光りの戦士
脚本&ストーリーボード　高橋良輔
演出　横山裕一朗
作画監督　泉口薫
原画　青鉢芳信
　アニメ　アール
　スタジオジャイアンツ
　前島和子
　戸川俊信

▲GUEST▼
ミゲロ大尉　木原正一郎
駅員　沢りつお
兵士　二橋洋一、島田敏、山本敏之

■第2話　始まりの銃声
脚本　星山博之
ストーリーボード　高橋良輔
演出　関田修
作画監督　福田皖
原画　ヤマトプロ
　山岸弘
　笹木寿子
　藤成裕士
　千葉繁
　佐藤正治
　尾崎桂子
　田中康郎

▲GUEST▼
モノア　ダーク
バスク　教官
兵士　事務員
ラナ　兵士
総理

■第3話　デロイアの動乱
脚本　星山博之
ストーリーボード　横山裕一朗
演出　二浦将則
作画監督　岩本正之
原画　ささきとしこ
　スタジオ青鉛筆
　ヤマト・プロダクション

▲GUEST▼
ブレナー　石森達幸
　戸谷公次
　塚田正昭
　松岡洋子
　島田敏

■第4話　実戦のコクピット
脚本　渡辺由自
ストーリーボード&演出　棚橋一徳
作画監督　谷口守泰
原画　上井やすよし
　毛利和昭
　河村佳江
　貴志夫美子

▲GUEST▼
乗客　戸谷公次
ロイルの上司　広瀬正志

■第5話　戦時特例法205号
脚本　鈴木良武
ストーリーボード　滝沢敏文
演出　谷田部勝義
作画監督&原画　加藤茂

▲GUEST▼
ダーク　佐藤正治
ノートン　市東昭秀
ブルーム　山田俊司
ベリオン　桜本晶弘
士官　島田敏
女兵　松原雅子
通信兵　野村信次
作業員　千葉繁

■第6話　暁の救出作戦
脚本　星山博之
ストーリーボード　宇木静美
演出　二浦将則
作画監督　塩山紀生
原画　吉橋節
　吉橋さちこ

▲GUEST▼
グッシン　徳丸完
ブルーム　山田俊司
ベリオン　桜本晶弘
代表　千葉繁、菩観純、緑川稔
隊員　沢木郁也、島田敏

■第7話　ゲリラ狩り
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　康村正一
演出　石崎すすむ
作画監督　福田皖
原画　福田皖
　伊藤鋭一
　ふくちのぶゆき

▲GUEST▼
ロミナ　服部のりこ
記者　島田敏
兵士　広瀬正志
密告者　千葉繁

■第8話　裏切りのデロイア
脚本　鈴木良武
ストーリーボード　福島一二
演出　横山裕一朗
作画監督　塩山紀生
原画　青鉢芳信
　スタジオ青鉛筆
　山岸弘

▲GUEST▼
マルック　山田俊司
オリザ　中谷ゆみ
ディオル　木原正二郎
将校　広瀬正志
兵士　幹本英之、中村秀利

■第9話　ダグラム奪回
脚本　星山博之
ストーリーボード　野寺一郎
演出　谷田部勝義
作画監督　谷口守泰
原画　上井やすよし
　毛利和昭
　河村佳江
　貴志夫美子
　佐藤正治
　島田敏
　山田俊司
　千葉繁

▲GUEST▼
ダーク　佐藤正治
エディ　島田敏
ブルーム　山田俊司
兵士　千葉繁

■第10話　ガルシア隊参戦
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　高橋良輔
演出　一浦将則
作画監督　西城明
原画　伊藤昌宏
　二浦嘉友
　岡田和浩

▲GUEST▼
ガルシア　玄田哲章
オッペ　千葉繁
エディ　島田敏
兵士　藤成裕士
　服部のり子

■第11話　遠すぎた父
脚本　鈴木良武
ストーリーボード　滝沢敏文
演出　安農尚志
作画監督　上村栄司
原画　ささきとしこ
　山岸弘
　ネオメディア
　玄田哲章
　千葉繁
　島田敏

▲GUEST▼
ガルンア　玄田哲章
オッペ　千葉繁
ジョルジュ　島田敏
モノア　藤成裕士
ロミナ　服部のり子

■第12話　ためらいの照準
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　康村正一
演出　谷田部勝義
作画監督　新田敏夫
原画　谷沢豊
　林グループ
　新田敏夫
　谷沢豊

▲GUEST▼
ガルシア　佐藤正治
オッペ　島田敏
バイロット　山田俊司
　玄田哲章
　千葉繁
　野村信次

■第13話　敵補給隊から奪え
脚本　星山博之
ストーリーボード　松野達也
演出　石崎すすむ
作画監督　西城明
原画　伊藤昌宏
　二浦嘉友
　岡田和浩

▲GUEST▼
ガルシア　玄田哲章
オッペ　千葉繁
エディ　島田敏
兵士　長堀芳夫、鈴木誠一

■第14話　やっかいな捕虜
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　横山裕一朗
演出　二浦将則
作画監督　塩山紀生
原画　加藤茂
　スタジオ青鉛筆

▲GUEST▼
ガルシア　玄田哲章
オッペ　千葉繁
衛生兵　島田敏
偵察兵　広瀬正志
ガゼール　三橋洋一

■第15話　ダグラム砂に沈む
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　滝沢敏文
演出　はしもとなおと
作画監督　福田皖
原画　福田皖
　ふくちのぶゆき
　松岡秀明
　ささきとしこ

▲GUEST▼
ガゼール　一橋洋一
ガルンア　玄田哲章
オッペ　千葉繁
バイロット　島田敏

■第16話　砂漠に熱く燃えて
脚本　星山博之
ストーリーボード　京春香
演出　石崎すすむ
作画監督　谷口守泰
原画　上井やすよし
　毛利和昭

▲GUEST▼
ガゼール　河村佳江
ガルンア　貴志夫美子
オッペ　二橋洋一
パイロット　玄田哲章
千葉繁
長堀芳夫

■第17話　死に神の執念
脚本&ストーリーボード　高橋良輔
演出　谷田部勝義
作画監督　神宮慧
原画　多賀かずひろ
松岡秀明
神宮慧

▲GUEST▼
ガルンア　玄田哲章
M・ワサキ隊長　筈覇純
通信兵　島田敏
兵士　長堀芳夫

■第18話　蜃気楼の街
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　菊地一仁
谷沢豊
演出　三浦将則
作画監督　新田敏夫
原画　林グループ
新田敏夫
谷沢豊

▲GUEST▼
エディ　島田敏
アナウンサー　一又成
市長　井伊篤史
グランフェルト　鈴木泰明
隊長　大山高雄

■第19話　包囲網を破れ
脚本　星山博之
ストーリーボード　康村正一
演出　はしもとなおと
作画監督　西城明
原画　伊藤昌宏
二浦嘉友
山崎理

▲GUEST▼
グランフェルド　鈴木泰明
作業員　一又成
市長　井伊篤史
指揮官　大山高雄
委員　戸谷公次、長堀芳夫、屋良有作

■第20話　偽りのグランプリ
脚本　星山博之
ストーリーボード&演出　兜史郎
作画監督　塩山紀生
原画　スタジオ青鉛筆
田村英樹
的場敦

▲GUEST▼
アナウンサー　島田敏
兵士　二又一成、長堀芳夫、佐藤正治、島田敏

■第21話　計算された奇襲
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　滝沢敏文
谷田部勝義
演出　神宮慧
作画監督　大原和男
原画　村上勉
神宮慧
ヴォルテール
川浪葉子

▲GUEST▼
ミリンダ　二又一成、長堀芳夫、佐藤正治、島田敏、安宅誠

■第22話　襲撃作戦一石一鳥
脚本　渡辺由自
ストーリーボード&演出　石崎すすむ
谷口守泰
作画監督　上井やすよし
原画　毛利和昭
河村佳江
貴志夫美子

▲GUEST▼
スミス　一又一成
青年　島田敏
新聞売り　長堀芳夫

■第23話　狙われたゲリラ会議
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　三浦将則
福田皖
作画監督　青鉢芳信
原画　吉永尚之
福地信之

▲GUEST▼
クローニ　笹岡繁蔵
ドック　長堀芳夫
デビット　市東昭秀
ベイカー　飯塚昭二
J・ロックの部下　島田敏
兵士　二又一成

■第24話　サマリン救出作戦
脚本　星山博之
ストーリーボード　横山裕一朗
はしもとなおと
演出　塩山紀生
作画監督　松岡秀明
原画　多賀かずひろ
北條昌子

▲GUEST▼
シェリーマン　二又一成
ウィリー　桜庭祐
所長　北川米彦
男　石森達幸、島田敏
看守長　玄田哲章
兵士　長堀芳夫

■第25話　潜入バラノ軍刑務所
脚本　星山博之
ストーリーボード　横山裕一朗
演出　谷田部勝義
作画監督　新田敏夫
原画　谷沢豊
林グループ
新田敏夫
谷沢豊

▲GUEST▼
所長　北川米彦
男A　石森達幸
看守長　玄田哲章
兵士　一又一成、長堀芳夫、佐藤正治、島田敏

■第26話　振りむけば遠く（総脚本）
ストーリーボード&演出　星山博之
作画監督　渡辺由自
原画　鈴木良武
ストーリーボード&演出　高橋良輔
作画監督　塩山紀生
原画　青鉢芳信
加藤茂
吉橋節
オールプロダクション

▲GUEST▼
サラ　桑羽雪子
ディオル　木原正二郎
ダーク　佐藤正治
ブルーム　山田俊司
ベリオン　桜本晶弘
代表　筈覇純、緑川稔
将校　広瀬正志
コホード　松岡文雄
グッシン　徳丸完
兵士　長堀芳夫、島田敏

■第27話　戦場に来たディジー
脚本　富田祐弘
ストーリーボード&演出　兜史郎
作画監督　西城明
原画　中村プロ
西城明
伊藤昌宏

▲GUEST▼
兵士　島田敏、二又一成

■第28話　戦火の陰の打算
脚本　渡辺由自
ストーリーボード&演出　石崎すすむ
作画監督　神宮慧
原画　大原和男
村上勉
スタジオ青鉛筆

▲GUEST▼
モレア　藤城裕士
ネルオーダー　長堀芳夫
ハレル　山田俊司
スミス　二又一成
兵士　島田敏

■第29話　ラコックの策謀
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　松野達也
演出　三浦将則
作画監督　塩山紀生
原画　ヴォルテール
緒方泰彦
村上勉
ネオメディア

▲GUEST▼
モレア　藤城裕士
ハレル　山田俊司
船長　長堀芳夫
軍人　二又一成
兵士　島田敏

■第30話　パルミナへ渡る日
脚本　星山博之
ストーリーボード　旗兵
演出　桐野克己
作画監督　谷口守泰
原画　上井やすよし
毛利和昭
河村佳江
貴志夫美子

▲GUEST▼
ギルソン　滝雅也
船長　玄田哲章
兵士

■第31話　パルミナの熱い風
脚本　富田祐弘
ストーリーボード&演出　やすむらまさかず
作画監督　西城明
原画　中村プロ
西城明
伊藤昌宏

▲GUEST▼
ノキオ　亀井三郎
ドリップ　長堀芳夫
兵士　二又一成、島田敏

■第32話　血気はやる進軍
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　高橋良輔
演出　谷田部勝義
作画監督　福田皖
原画　ヴォルテール
松岡秀明
村上勉

▲GUEST▼
ノキオ　亀井二郎
ナイト　塚田正昭
ドリップ　長堀芳夫
ゲイダ　市東昭秀
テレス　佐藤正治
ゲリラ　島田敏

■第33話　戦火は村々に
脚本　星山博之
ストーリーボード&演出　兜史郎
作画監督　神宮慧
原画　福地信之
大原和男
山田治
スタジオ青鉛筆

▲GUEST▼
エル・ゴード　野本礼三
ゲイダ　市東昭秀
ゲリラ　一又一成
少年　島田敏
首相　田中康郎
将校　長堀芳夫

■第34話　武器は誰がために
脚本　星山博之
ストーリーボード　石崎すすむ
演出　一浦将則
作画監督　新田敏夫
谷沢豊
原画　林グループ
新田敏夫
谷沢豊

▲GUEST▼
ゲイダ　市東昭秀
首相　田中康夫
兵士　二又　成、長堀芳夫、島田敏

■第35話　再会の野戦病院
脚本　富田祐弘
ストイリーボード　京春香
演出　寺田憲史

データ キャスト&スタッフ

STAGE STAFF

作画監督　塩山紀生
原画　青鉢芳信
ネオメディア

▲GUEST▼
兵士　二又一成、長堀芳夫、佐藤正治、島田敏
ダロウェイ　尾崎桂子

■第36話　塞がれた行くも
脚本　渡辺由自
ストーリーボード&演出　桐野克己
作画監督　谷口守泰
原画　上井やすよし
毛利和昭
河村佳江
貫志夫美子

▲GUEST▼
カイ　一又一成
ブディ　島田敏
隊長　長堀芳夫

■第37話　選択の渡河作戦
脚本　星山博之
ストーリーボード&演出　谷田部勝義
作画監督　西城明
原画　中村プロ
西城明
伊藤昌宏

▲GUEST▼
ゲイダ　市東昭秀
ドリップ　長堀芳夫
隊長　二又一成
兵士　島田敏

■第38話　アンディ鉱山封鎖
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　高橋資祐
演出　二浦将則
作画監督　福田皖
原画　ヴォルテール
松岡秀明
村上勉

▲GUEST▼
ゲイダ　市東昭秀
ドリップ　長堀芳夫
ビラフ　塚田正昭
ライズ　二又一成

ブリアン　笹岡繁蔵
ゲリラ　島田敏

■第39話　封鎖山脈を越えろ
脚本　星山博之
ストーリーボード　高橋良輔
やすむらまさかず
桐野克己
新田敏夫
谷沢豊
林グループ
新田敏夫
谷沢豊

演出　市東昭秀
作画監督　長堀芳夫
原画　笹岡繁蔵

▲GUEST▼
ゲイダ　一又一成、島田敏
ドリップ
ブリアン
兵士

■第40話　戦士の休息（前編）
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　高橋良輔
演出　高橋良輔
作画監督　兜史郎
原画　塩山紀生
福地信之
大原和男
山田治
戸川俊信

▲GUEST▼
ゲイダ　市東昭秀
ドリップ　長堀芳夫
ビラフ　塚田正昭
ライズ　二又一成
ハンク　政宗一成
ゲリラ　島田敏

■第41話　戦士の休息（後編）
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　高橋良輔
演出　高橋良輔
桐野克己
知吹愛弓
谷口守泰
上井やすよし
河村佳江
貫志夫美子

作画監督　市東昭秀
原画　長堀芳夫
塚田正昭
二又一成

▲GUEST▼
アーロン　二又一成
ハンク　政宗一成
兵士　島田敏

■第42話　動乱の航跡（総）
脚本　星山博之
渡辺由自
鈴木良武
ストーリーボード&演出　高橋良輔
塩山紀生
作画監督　青鉢芳信
原画　加藤茂
吉橋節
オールプロダクション
アメ・アール
千葉繁
佐藤正治
松岡文雄

▲GUEST▼
バスク　田中亮一、緒方賢一
ダーク　田中康郎、塩沢兼人、
コホード　鈴木清信
記者　笘観純、緑川稔
兵士　山田俊司、広瀬正志、
幹本雄之、島田敏

■第43話　仕組まれた背信
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　横山裕一朗
演出　谷田部勝義
作画監督　神宮慧
原画　林グループ
田島実

▲GUEST▼
ゲイダ　市東昭秀
ドリップ　長堀芳夫
ロッキ　の兄　山田俊司

■第44話　疑惑の二重スパイ
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　高橋資祐
演出　一浦将則
作画監督　西城明
原画　中村プロ
西城明

▲GUEST▼
ゲイダ　伊藤昌宏
男　市東昭秀
行員A　長堀芳夫、二又一成
島田敏

■第45話　蔓散らす銃声
脚本　星山博之
ストーリーボード　高橋良輔
演出　桐野克己
作画監督　福田皖
原画　青鉢芳信
戸川俊信
村上勉

▲GUEST▼
リタの父　松岡文雄
ライズ　二又一成
運転手　鈴木清信

■第46話　術策と機略
脚本　渡辺由自
ストーリーボード&演出　兜史郎
作画監督　塩山紀生
原画　大原和男
福地信之
山田治
渡辺日呂子

▲GUEST▼
ゲイダ　市東昭秀
ドリップ　長堀芳夫
ビラフ　塚田正昭
ライズ　二又一成
社員　島田敏

■第47話　悲しみの爆走
脚本　富田祐弘
ストーリーボード&演出　谷田部勝義
作画監督　西城明
原画　西城明
伊藤昌宏

▲GUEST▼
ダロウェイ　尾崎桂子
赤い星のリーダー　岡和男
少尉A　一又一成
ゲリラA　島田敏

■第48話　その名は解放軍遊撃隊
脚本　星山博之
今川泰宏
一浦将則
谷口守泰
上井やすよし
毛利和昭
河村佳江
貫志夫美子

ストーリーボード　松野達也
演出　谷田部勝義
作画監督　西城明
原画　西城明
伊藤昌宏

▲GUEST▼
ゲイダ　二又一成
バルディー　長堀芳夫
オーレン　岡和男
ジムル　島田敏

■第52話　アンディ鉱山攻撃命令
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　石崎すすむ
演出　三浦将則
作画監督　塩山紀生
原画　戸川俊信
村上勉
ネオプロ

▲GUEST▼
ゲイダ　市東昭秀
ドリップ　長堀芳夫
ビラフ　塚田正昭
ライズ　二又一成

■第49話　共同作戦の軌み
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　横山裕一朗
演出　山口秀熙
作画監督　神宮慧
原画　山田治
平田一清
ネオプロ

▲GUEST▼
ゲリラ　鵜飼るみ子
軍曹　又一成
隊長　長堀芳夫
マリアン　村松康雄
塚田正昭
河村佳江
貫志夫美子

▲GUEST▼
ニール　星山博之
ゲリラ　今川泰宏
軍曹　一浦将則
隊長　谷口守泰
マリアン　上井やすよし
毛利和昭
河村佳江
貫志夫美子

作画監督　村松康雄
原画　塚田正昭
長堀芳夫
又一成
鵜飼るみ子

オールプロダクション

▲GUEST▼
クロー　田辺宏章
デイビス　野村信次
アール・ンルバ　亀井一郎
ホッチキンズ　丸山詠二
ゲリラ　一又一成、島田敏

■第50話　戦う者の掟
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　石崎すすむ
演出　兜史郎
作画監督　新田敏夫
原画　谷沢豊
林グループ
新田敏夫
谷沢豊
シムル

▲GUEST▼
ニール　村松康雄
伝令　二又一成
ゲリラA　島田敏

■第51話　見えはじめた亀裂
脚本　星山博之
ストーリーボード　松野達也
演出　谷田部勝義
作画監督　西城明
原画　西城明
伊藤昌宏

▲GUEST▼
ライズ　二又一成
バルディー　長堀芳夫
オーレン　岡和男
ジムル　島田敏

■第52話　アンディ鉱山攻撃命令
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　石崎すすむ
演出　三浦将則
作画監督　塩山紀生
原画　戸川俊信
村上勉
ネオプロ

▲GUEST▼
ゲイダ　市東昭秀
ドリップ　長堀芳夫
ビラフ　塚田正昭
ライズ　二又一成

■第53話　反撃の導火線
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　今川泰宏
演出　知吹愛弓
作画監督　谷口守泰
原画　上井康宜
河村佳江
貫志夫美子

▲GUEST▼
ゲイダ　市東和秀
ドリップ　長堀芳夫
ゴードレン　岡和男
シムル　島田敏

■第54話　再びドガへ向けて
脚本　星山博之
ストーリーボード　横山裕一朗
演出　兜史郎
作画監督　福田皖
原画　八幡正
平田一清
大原和男

ラビッド　金子紀男
ライジング　長崎芳夫
ダイナミック　市東昭秀
ゲイリング　塩屋浩三
スペース　島田敏
ニュー　又一成

■第55話　戦略台地を奪取せよ
脚本　富田祐弘
ストーリーボード&演出　谷田部勝義
作画監督　神宮慧
原画　青錆芳信
村上勉
オールプロダクション

◀GUESTダイ▶
ブリッジ　塩屋浩三
ブリッジ　尾崎桂子
隊員　長崎芳夫
パイロット　目黒裕一
パイロット　桜庭祐一

■第56話　スタンド高原の攻防
脚本　星山博之
ストーリーボード&演出　三浦将則
作画監督　加藤茂
原画　加藤茂
多賀かずひろ

◀GUESTパイ▶
ビッグ　塩屋浩三
テニスン　目黒裕一
ビッグ　島田敏
パイロット　小林通孝

■第57話　ひるがえる解放旗
脚本　星山博之
ストーリーボード　菊池一仁
演出　知吹愛弓
作画監督　新田敏夫
原画　谷沢豊
林グループ
新田敏夫
谷沢豊

◀GUESTゲイ▶
ドリッジ　尾崎桂子
ゲイリング　長崎芳夫
ダイナミック　市東昭秀

■第58話　解き放された野心
脚本&ストーリーボード　高橋良輔
演出　兜史郎
作画監督　西城明
原画　西城明
伊藤昌宏

◀GUESTなし▶

■第59話　威信かける海戦
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　横山裕一朗
演出　谷田部勝義
作画監督　塩口紀生
原画　八幡正
山田治
戸川俊信

◀GUESTダイ▶
ロウエイ　尾崎桂子

■第60話　プロイアの光と影
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　やすむらまさかず
演出　三浦将則
作画監督　谷口守泰
原画　上井原官
河村佳江
賀志芙美子

◀GUESTなし▶

■第61話　北極ポートへ向けて
脚本　星山博之
ストーリーボード　木村圭一郎
演出　知吹愛弓
作画監督　福田皖
原画　笹木寿子
平田一清
村上勉
金子紀男
スタジオドーム

◀GUESTフ▶
ルー　塩屋浩三
女　高木ゆう子

■第62話　さぎまれた光る道（総）
脚本　星山博之
富田祐弘

スストーリーボード&演出　高橋良輔
作画監督　塩山紀生
原画　中村プロダクション
アニメアール
平田一清
松岡秀明
村上勉

◀GUESTナ▶
テレイト　塚田正昭
ドゲイダ　佐藤正治
リッジ　市東昭秀
ノキオ　長崎芳夫
ジムル　亀井三郎
島田敏

■第63話　落された黒い滴
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　滝沢敏文
演出　鬼史郎
作画監督　西城明
原画　西城明
伊藤昌宏
西沢晋

◀GUESTダ▶
ロウエイ　尾崎桂子

■第64話　濁流の罠
脚本　富田祐弘
ストーリーボード&演出　谷田部勝義
作画監督　神宮慧
原画　青錆芳信
八幡正

◀GUESTニ▶
ルー　村松康雄
ボリー　塚田正昭

■第65話　攻略・白銀の要塞
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　高橋良輔
演出　三浦将則
作画監督　新田敏夫
原画　谷沢豊
林グループ
新田敏夫

スストーリーボード&演出　渡辺由自
作画監督　塩山紀生
原画　中村プロダクション
アニメアール
平田一清
松岡秀明
村上勉

◀GUESTナ▶
テレイト　塚田正昭
ドゲイダ　佐藤正治
リッジ　市東昭秀
ノキオ　長崎芳夫
ジムル　亀井三郎
島田敏

■第66話　激戦・カルナック越え
脚本　星山博之
ストーリーボード　やすむらまさかず
演出　知吹愛弓
作画監督　上村栄司
原画　山田治
金子紀男
平田一清
渡辺由自子

◀GUESTニ▶
ルー　村松康雄
ドルフ　塩屋浩三
ビッギン　島田敏

■第67話　北極に散った決断
脚本　富田祐弘
ストーリーボード　横山裕一朗
演出　川瀬敏司
作画監督　谷口守泰
原画　上村殿官
河村佳江
賀志芙美子

◀GUESTサラ▶
モニ　梨羽雪子
レア　藤城裕士
ワトキンス　村松康雄
兵士　緒方賢一
島田敏

■第68話　テーブルについた客達
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　八起繁
演出　谷田部勝義
作画監督　西城明
原画　西城明
伊藤昌宏
西沢晋

◀GUESTボー▶
ルー　村松康雄
ワトキンス　緒方賢一
ビッギン　島田敏

■第69話　ドナン・カシム死す

ドルフ　谷沢豊
塩屋浩三

■第70話　武装解除
脚本　星山博之
ストーリーボード　滝沢敏文
演出　知吹愛弓
作画監督　新田敏夫
原画　谷沢豊
林グループ
新田敏夫
谷沢豊
A・C・I
島田敏

◀GUESTビッギン▶

■第71話　粉飾の凱旋パレード
脚本　富田祐弘
ストーリーボード・演出　鬼史郎
作画監督　神宮慧
原画　八幡正
平田一清
金子紀男

◀GUESTなし▶

■第72話　英雄帰回
脚本　渡辺由自
ストーリーボード　八起繁
演出　川瀬敏司
作画監督　上村栄司
原画　青錆芳信
渡辺由自子
山田治

◀GUESTモレア▶　藤城裕士

■第73話　沈黙する指導者
脚本　星山博之
ストーリーボード　加瀬充子
演出　谷田部勝義
脚本　星山博之
ストーリーボード　高橋良輔
演出　三浦将則
作画監督　福田皖
原画　笹木寿子
戸川俊信
村上勉
ヤローKO
村松康雄

■第74話　大いなる説得
脚本　星山博之
ストーリーボード　横山裕一朗
演出　三浦将則
作画監督　福田皖
原画　笹木寿子
戸川俊信
村上勉
ヤローKO
兵士　塩屋浩三　島田敏

■第75話　燃えつきたあとに
脚本　星山博之
ストーリーボード　高橋良輔
演出　知吹愛弓
作画監督　神宮慧
原画　八幡正
新田敏夫
沢豊

◀GUESTダイ▶
ロウエイ　尾崎桂子
部下　塩屋浩三　島田敏

作画監督　西城明
原画　西城明
伊藤昌宏
西沢晋

◀GUESTなし▶

■第74話　大いなる説得
脚本　星山博之
ストーリーボード　横山裕一朗
演出　三浦将則
作画監督　福田皖
原画　笹木寿子
戸川俊信
村上勉
ヤローKO
兵士　塩屋浩三　島田敏

■第75話　燃えつきたあとに
脚本　星山博之
ストーリーボード　高橋良輔
演出　知吹愛弓
作画監督　神宮慧
原画　八幡正
新田敏夫
沢豊

◀GUESTダイ▶
ロウエイ　尾崎桂子
部下　塩屋浩三　島田敏

Opening Theme Song

さらばやさしき日々よ

作詩：高橋良輔
作曲：冬木透
編曲：武市昌久
歌：麻田マモル

<1>
いつの日かと　おそれていた
いつの日かと　夢みていた
心めざめ　つばさひろげて
旅立つ日　ダグラム
おのれつなぐ　鎖断ち切り
心しばる　闇を切り裂く
光の戦士　ダグラム
めざせ　はるかな地平
さらば　やさしき日々よ
もう　もどれない
もう　かえれない
太陽の牙　ダグラム

<2>
いつの日にか　祈りとどき
いつの日にか　望みかない
ふたりむすぶ　きずなふたたび
夢見る日　ダグラム
あふるるなみだ　さだめだからと
ふるいおこす　あらぶるたましい
光の戦士　ダグラム
めざせ　はるかな地平
＊さらば　やさしき日々よ
　もう　もどれない
　もう　かえれない
　太陽の牙　ダグラム

＊くりかえし

Eyecatch

Bパート START

Aパート END

Ending Theme Song

風の行方

作詩：高橋良輔
作曲：冬木透
編曲：武市昌久
歌：麻田マモル

<1>
ルルル～　ルルル～

星が流れて　願いをかけて
ふたつ数えて　夢くだけ
恋しさかけらの
　フラッシュバック
心細さに　後ふりむけば
幼い夏の日　スローモーション

<2>
うわさたずねて　片道キップ
地図にない町　日暮時
恋しさかけらの
　フラッシュバック
心細さに　後ふりむけば
幼い夏の日　スローモーション

<3>
ルルル～　ルルル～

つのるおもいが　グルグル回る
あわれ心の　らしんばん
恋しさかけらの
　フラッシュバック
心細さに　後ふりむけば
幼い夏の日　スローモーション

JASRAC 出0810174-801

父よ

作詩：高橋良輔
作曲：冬木透
編曲：武市昌久
歌：麻田マモル

<1>
おさなき日　森の朝
はれがましさ　はずみ
足は地をけり　心は空をとぶ
白い世界　まぶしく
狩笛は遠く　犬達はおどる
でもめざすは　あなたの笑顔
あなたしか　みえなかった
父よ

<2>
おさなき日　広き海
気負うこころ　ふるえ
もやい綱とき　心は風はらむ
青い世界　はるかに
たくましきクルーの　かけ声も高く
でもめざすは　あなたの笑顔
あなたしか　みえなかった
父よ

<3>
おさなき日　おもい出す
ほこらしさに　のせて
ひたすらにただ　心をあつくした
あなただけを　みつめて
かがやいて遠い　身近なライバル
でもめざすは　あなたの笑顔
あなたしか　みえなかった
父よ

最終話、クリンがカシム家に帰ってきたシーンで使用された楽曲。少年にとって、いかに父という存在が大きなものであったかを改めて感じさせてくれる。

EXODUS

作詩：高橋良輔
作曲：冬木透
編曲：武市昌久
歌：麻田マモル

<1>
霧に　とざされて
見えない　星
霧に　とざされて
見えない　地平
何も　見えない
うっ　うっ　うっ
うっ　うっ　うっ
うっとおしいぜ
吹けよ　つむじ風
風穴あけろ
EXODUS　EXODUS
地の果てまで　走れ

<2>
闇に　とざされて
見えない　星
闇に　とざされて
見えない　空
なにも　見えない
うっ　うっ　うっ
うっ　うっ　うっ
うっとおしいぜ
おちろ　雷（いかずち）
暗闇照らせ
EXODUS　EXODUS
地の果てまで　突っ走れ

<3>
明日が　隠されて
見えない　星
明日が　隠されて
見えない　希望
何も　見えない
うっ　うっ　うっ
うっ　うっ　うっ
うっとおしいぜ
のぼれ　太陽
明日を照らせ
EXODUS　EXODUS
地の果てまで　突っ走れ

第72話、監禁されたサマリン博士をクリンたちが救出するシーンに使用された。若者特有の疾風怒濤をストレートに表現するかのような楽曲である。

おいら誰の子　人の子　猫の子　地球の子
帰ってきたんだ　ママ
抱いておくれよ　パパ
ちったぁ優しい笑顔を見せて
わすれたのかい　ママ
憶えてないのか　パパ

第2話、港でクリンと出会ったロッキーたちが歌っていたもの。デロイア人の彼らが歌っていたことを思うと、この歌詞が帯びている深い意味に気付く。この歌は、「彼らにとって地球とは何なのか」を物語るものなのだ。

西だ　東だ　南だ　北だ
東南西北（とんなんしゃーべー）　右　左
犬が西向きゃ　尾は東
まわり全部が敵ばかり

第1話に始まり、「太陽の牙」のメンバーたちが旅の最中よく歌っていた歌。開き直ったような気分がよく出ている。とくに第14話でハックルがクリンたちと一緒にこの歌を口ずさむシーンは印象深い。

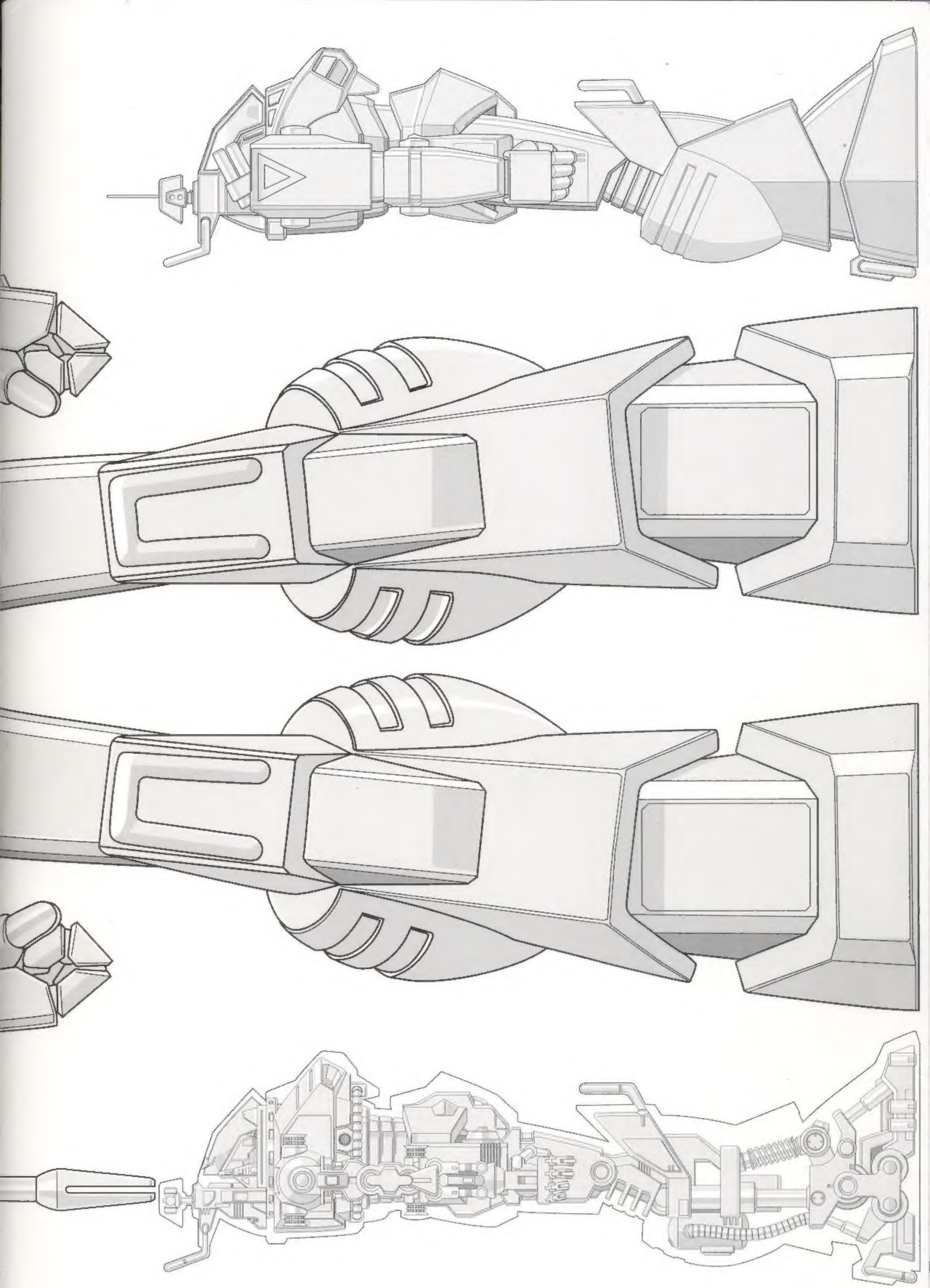
完本　太陽の牙ダグラム

2008年9月30日　初版発行

■編集　笠井修（そうゆう舎）
■構成・取材・執筆　高嶋規之
南波健一郎（十五屋）
渡辺利浩（伸童舎）
神北恵太（神北工房）
東部戦線
古市　誠
長谷沼雄飛
■本文デザイン　福田功（Imagejack）
神北恵太
■DTPレイアウト　神北恵太
鶴巻文子（ファウンデーション）
■DTP　アートプロ
■カバーデザイン　小山力也（乾坤グラフィック）
■担当編集　谷中晶彦

■協力　井上幸一（株式会社サンライズ）
吉田佳弘（株式会社サンライズ）
東雲明日香
カバーイラスト　やまだたかひろ

［発行人］原田修
［編集人］木村晃
［発行所］株式会社 一迅社
〒160-0022　東京都新宿区新宿２－５－10　成信ビル８F
電話：03-5312-6150（営業部）
03-5312-6132（ポストメディア編集部）
［印刷・製本］図書印刷株式会社

● 本の一部または全部を転載・複製・複製することを禁じます。
● 落丁・乱丁は当社にてお取替えいたします。
● 定価はカバーに表示してあります。
● 本書の内容に関するお問い合わせは、一切受け付けておりません。
Printed in Japan
ISBN978-4-7580-1114-3

©サンライズ
©株式会社 一迅社